早稻田大學出版部



明治四十三年七月廿五日印刷
明治四十三年七月廿八日發行

早稻田大學編輯部編纂

發行者 荒川信賢
東京市小石川區音羽町四丁目十一番地

印刷者 渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

發行所 早稻田大學出版部
東京牛込區早稻田
振替東京一一二三番

日清印刷株式會社印刷

漢籍國字解全書一覽

第一卷　孝經　熊澤蕃山
　　　　大學、中庸、論語　中村惕齋
第二卷　孟子　中村惕齋
（附錄）帝範、臣軌　市川鶴鳴
　　　　朱子家訓　講者未詳
第三卷　易經上　眞勢中州　松井羅州
（附錄）易學啓蒙　榊原篁洲
　　　　易學階梯附言　谷川順祐
第四卷　易經下　眞勢中州　松井羅州
（附錄）周易本筮指南　谷川順祐
第五卷　詩經　中村惕齋
（附錄）詩疏圖解　淵景山
第六卷　書經　太田錦城
第七卷　小學　中村惕齋
（附錄）童子通　山本蕉逸

第八卷　近思錄　中村惕齋
（附錄）訓蒙用字格　伊藤東涯
第九卷　老子　山本洞雲
　　　　莊子　毛利貞齋
　　　　列子　太田玄九
第十卷　孫子　荻生徂徠
　　　　唐詩選　服部南郭
第十一卷　古文眞寶前集　榊原篁洲
第十二卷　古文眞寶後集　林羅山　鵜飼石齋
第十三卷　春秋左氏傳上　加藤正庵
第十四卷　春秋左氏傳中　加藤正庵
第十五卷　春秋左氏傳下　加藤正庵
第十六卷　傳習錄　三輪執齋
第十七卷　楚辭　淺見絅齋
（大尾）

早稻田大學出版部

繁簡、磨礱瑕纇者凡若干、於是余又反覆研覈舛錯尙饒、益自校讐乃始卒業、因名曰諺解大成、至於金根之差蹲鴟之謬、則竢博雅君子耳、時天和癸亥孟夏之日

篁洲　榊原玄輔識

跋

此書之編、余初不知成于何人之手、近閲大明萬曆中刻本、其卷首有神宗皇帝親序、嘉其書可廣播而爲翰苑之模範也、雲中青藜齋跋其卷尾云、永陽黃堅氏之所集載七國而下諸名家之作、蓋精選也、於是乃知此編非閭閻胥吏之所集、而實出于文人枕中之秘也、前載短長古風之詩、後纂辭賦諸體之文、而於後集則儒家箋註禪林鈔解、時出間刊、比々相次、然精粗醇疵迭有之矣、至於石齋鵜氏諺解大成出、則諸說之冗踈典據之罅漏、拆衷彌縫、既無餘蘊矣、以世但讀前集者少也、其考事實拆理義、亦未備存矣、此藝圃之一恨也、余譾劣不自揣、竊效鵜氏大成爲之註解、辨其體格、明其意旨、乃如紀事典故、則旁摭史子小說、會萃衍繹、以爲童蒙之羽翼、唯恐一斑之識無有博聞廣覽之知、而註釋不闡、攷證多迕、殺青既成、就求質正於省欽野先生、先生不以余無似弃斥之、而爲指點

銀箭金壺漏水多、起看秋月墜江波、東方漸高奈樂何、謂吳王受越女之遺、耽宴飲歡樂、自朝至夕、自夜達旦、無有已時、

【銀箭金壺】漏刻の具也、金壺に水を盈て銀箭に分數を刻て立て、水の漏下するに隨て箭の刻見れ出るを見て、晝夜十二時の時刻を知也、鮑照觀漏賦、起玫階而升隩、訪金壺之盈闕、觀騰波之呑寫、視驚箭之登殺、以尋到源頭云、觀漏水之器黄帝所作、此漏刻之始也、以官命則挈壺氏其職也、銀の箭を立て金壺に水を貯へたる漏刻の器を窺へば、漏下したる水多くして夜甚だ深し、因て起て夜色を閲へば秋の夜の永きもはや曉がたになりて、月の江波に墜て沒するを看る、然れども宴樂猶未央、觴しば〳〵行る間に、夜既に明て東方の日漸く高く升れり、飮宴の樂を奈何んかせんや、殘り多きことは夜飮の筵を姑く罷んことをと云意也、○士贇曰、此詩雖只樂府、然深得國風刺詩之體、盛言其美而不美者自見、觀者其毋忽諸、

古文眞寶前集諺解大成 終

貂鼠屬、北方寒以貂皮煖額、【昭君―】戎王既に醉て樂めども、昭君は猶漢の恩を思ひ、又は單于の羌悍を見て心に不悦、獨琵琶を抱て竊かに泣くと也、

○烏棲曲

李太白

本集三載之、題注樂錄烏棲曲者烏獸二十一曲之一也、此篇は吳王の宴樂に耽て厭ことなきを云、

姑蘇臺上烏棲時、吳王宮裏醉西施、（吳王夫差伐越、越與范蠡謀滅吳、進美人西施於吳王、吳王與西施宴於姑蘇臺上、爲越所滅、）吳歌楚舞歡未畢、青山猶啣半邊日、

【姑蘇臺】本注齊賢曰、越絕書曰、吳王起姑蘇臺五年乃成、高見三百里、漢濟南王傳注、姑蘇臺一名姑胥臺、故胥門外有九曲路、乃闔閭遊姑蘇臺以望湖中、今隸平江府、外紀曰、初闔閭起臺於姑蘇山、山去國三十五里、春夏游焉、夫差高而飾之三年乃成、周旋詰屈橫亘五里、宮妓千人別立春宵宮爲長夜飮、造千石酒鍾、作天池、池中作青龍舟、舟中盛陳妓樂、日與西施爲水嬉、宮中作海靈館館娃閣、銅溝玉檻、姑蘇臺の上漸く暮に及て、林梢の烏飛て枝上に宿し棲む時になりて也、【吳王】夫差也、闔閭の子也、宴樂に耽て伍子胥が諫を不用、遂に越王勾踐に滅さる、【西施】本注齊賢曰、寰宇記曰西施施其姓也、有東施家西施家、越絕書曰、勾踐得採薪二女西施鄭旦以獻吳王、士贇曰、史記吳破越越進西施請退軍、吳王許之、王得西施多遊姑蘇、伍子胥諫曰、臣恐姑蘇不久爲麋鹿所遊、王不听、漸く暮に向て吳王の宮裡には飮宴始りて、西施を醉しめ歡を盡す也、注【越與范蠡謀】具に吳越春秋陰謀篇に見えたり、事文共に長し、故に不錄、【吳歌】吳の音を操てうたふ歌也、齊賢曰、上林賦吳歈蔡謳奏大呂、注吳蔡國名、歈謳皆歌也、士贇曰、樂錄淸商曲有子夜吳歌、【楚舞】楚國の舞也、齊賢曰、舞賦激楚結風陽阿之舞、漢書高祖謂戚夫人曰、爲我楚舞、吾爲若楚歌、或は吳歌をうたひ或は楚舞を爲して歡樂未畢、青山には猶落日の輝殘りて半邊の倒景を銜む也、【猶啣】本集作欲啣、

篇、略云、先公平生未嘗矜大所爲文、一日被酒語棐曰、吾詩廬山高今人莫能爲、惟李太白能之、明妃曲後篇太白不能爲惟杜子美能之、至於前篇則子美不能爲惟吾能之也、因欲別錄此三篇藏之以誌公意、余在汝陰見棐問之亦然、今閲公詩者蓋未嘗獨異此三篇也、錢晉齋云、歐陽公明妃後曲、其間言近而宮廷聞見且有所不及、況遠而萬里之夷狄乎、此語切中膏肓也、

○塞上曲　黄魯直

十月北風燕草黄、燕人馬肥弓力强、虎皮裁鞍雕羽箭、射殺山陰雙白狼、

【十月―】十月の時節北風烈しく吹荒て燕國の草木始て黄也、朔地肅冽の氣既に盛也、此時燕人の馬肥て健にして騁ること疾し、弓力は膠の折る時節及て甚だ强くなりたる也、夏は膠濕て弓力弱し、九十月の時膠を折るに、堅して能く折るとき弓力始て强き也、【虎皮―】虎の皮を裁縫して馬の鞍を覆ひ飾る也、鵰は鷲鳥くまたかと云鳥也、此鳥の羽を以てはきたる箭を帶る也、【山陰】地の名に非ず、深山陰黒の處に於て、雙の白狼を逐て弦下に射殺すと也、白狼は匈奴及び西域の地に有之、漢の武帝大宛を伐て、四の白狼を獲て歸れること武帝紀に見えたり、

青氈帳高雪不濕、擊鼓傳觴令行急、戎王半醉擁貂裘、昭君猶抱琵琶泣、王昭君嫁單于、單于出獵、既歸坐於氈帳、傳觴宴樂、單于雖醉擁貂皮之裘、昭君心思漢恩、猶抱琵琶而泣也、

【青氈帳】青色の氈を張て圍帳とす、大明一統志、安定韃靼別部、居無城郭以氈帳爲廬舍、青氈の帳を張ること高して、雪降れども濕ひ侵すことなし、此れ射獵して歸り居る處也、【擊鼓】射獵して獲あり、故に喜歸て氈帳の裏に坐して、鼓を擊て胡國の樂を奏し、觴を傳へ流して酒を行るの令急か也、【戎王】單于也、半醉して貂皮の裘を擁し被て頽然として娯む也、貂說文

【推手—】劉熙釋名の說也、釋名云琵琶本於胡中馬上所鼓也、推手前曰琵、引手却曰琶、因以爲名、琵琶は本弦を彈ずる狀を名け云ふ、撥を以て琵琶して彈ずるを以て、二字を取て器の名とする也、昭君思歸の曲を作て、或は琵し或は琶して自ら彈ず、胡國の人共に其聲を聽て、亦各〻咨嗟して哀を生ずると也、【玉顏】神女賦より出づ、上の節に見たり、玉顏の美人は流落して匈奴に入て、天の一涯にある遠き國にて、遂に死して身を亡せり、【琵琶—】其人已に逝て今は亡し、然ども其平生彈じたりし曲は却て傳て漢に來れる也、漢家は漢朝と同意也、史記太史公自敍傳云、是歲天子始建漢家之封、【漢宮—】漢宮の人琵琶の曲の傳ることを聞て、爭て新聲の樂譜を按檢して肄ひ傳る也、按は檢也、點檢して審に考へ看るを云、【新聲】は琵琶の曲新に傳へ來りたる樂を云也、譜は樂の曲調を記せる書也、【遺恨—】絃曲に托したる遺恨已に深して、後人譜に依て曲を奏すれば、其聲更に苦て遺恨の情あらはると也、

纖々女手生洞房、古詩娥々紅紛粧、纖々出素手、**學得琵琶不下堂、不識黃雲出塞路、**古詩茫々黃沙出、塞寒雲斷續、**豈知此聲能斷腸、**

【纖々】好手貌、纖はほそしと讀む、手のほそくじんじやうなる貌を云、【洞房】婦人の居處を洞房と云、文選舞賦、燿華屋而熺洞房、【不下堂】後漢書列傳十六宋弘曰、貧賤之交不可忘、糟糠之妻不下堂、言ろは明妃纖々たる美麗の質、洞房の中に生長し、琵琶を學得て深閨にあり、曾て堂より下て戶外の事を知ることはなかりし也、【不識—】況や萬里の外黃雲多く起て橫はれる邊塞を出る路を識ることあらんや、其初めに琵琶を學ぶ時、豈に此琵琶の聲後來能く腸を斷て、征路を悲むの聲とならんことを知んや、不思に琵琶の聲、遂に塞上哀怨の情を寄する悲曲の聲となりたると也、江淹詩、黃雲蔽千里、遊子何時還、○詩林廣記卷之一、載歐公明妃曲二首、此篇前に居けり、漢宮有佳人の篇を後に載す、詩尾云、石林話云、前輩詩文各有平日得意不過數篇、然他人未必能知也、毘陵正素處士張子厚善書、余嘗於其家見歐陽公子棐、以烏絲欄絹一軸求子厚書文忠公明妃曲兩篇廬山高一

歐陽永叔

胡人以鞍馬爲家、射獵爲俗、泉甘艸美無常處、鳥驚獸駭爭馳逐、

【胡人以―】前漢書匈奴傳云、匈奴其先夏后氏之苗裔、居于北邊、隨艸畜牧而轉移、逐水艸遷徙、無城郭常居畊田之業、然亦有分地、無文書以言語爲約束、兒能騎羊引弓射鳥鼠、少長則射狐兎肉食、士力能彎弓盡爲甲騎、其俗寛則隨畜、田獵禽獸爲生業、急則人習戰攻以侵伐、其天性也、詩意言は胡國の人は鞍馬の上を以て家として、弓を射獸を獵するを以て國の俗とすると也、【泉甘―】其地泉水味甘して艸肥て美也、艸の美なるを逐て遷て馬を畜ひ、常に處る住宅なき也、【鳥驚―】常に馬を聘せ、鳥の驚て飛び、獸の駭て走を爭て馳逐し、射殺すを以て業とする也、

誰將漢女嫁胡兒、風沙無情面如玉、身行不遇中國人、馬上自作思歸曲、

【誰將―】王嬙を遣る者は元帝也、誰かと云は恨むるとの深也、匈奴の俗頑嚚獷悍如此なる地也、誰か其れ漢の美女を將てなさけなくも此胡兒には嫁し與へたるぞやと也、【風沙―】匈奴沙漠の地風暴して沙を揚ぐ、風沙は情なくして昭君が面色玉の如くなるをあらく撲ち掠めて艱苦せしむると也、詩野有死麕篇、有女如玉、文選神女賦、苞溫潤之玉顏、【身行―】一身行々て幾許の長路を歷れども曾て中國の人に遇ふことなく益々越路の邈なるを覺也【馬上―】行程の艱難を嘗て漢宮を思ふの情轉た切なり、因て馬上に於て自ら思歸曲を作て哀怨の情を寫せる也、

推手爲琵却手琶、（琵琶本胡中馬上所鼓也、推手前曰琵、引手却曰琶、因以爲名、）胡人共聽亦咨嗟、玉顏流落死天涯、琵琶却傳來漢家、漢宮爭按新聲譜、遺恨已深聲更苦、

【絕色―】明妃が殊に絕れたる容色、天下に又有ることなき所也、杜子美詩、閬風玄圃與蓬壺、中有高堂天下無、【一失―】如此美人一たび失て再び收め得ることなり難きと也、【雖能―】美人を失て後能く畫工を殺すと云とも、豈明妃を贖ふに足んや、事に於て竟に何の益かあるや、

耳目所及尙如此、萬里安能制夷狄、漢計誠已拙、女色難自誇、

【耳目―】後宮の內面たり耳に聽き目に視ることの及ぶ所遠きに非ず、然るに尙絕世の佳人あるを不識、漫匈奴に棄遣ることをなし、後に自ら悔ること如此、人主の聰明後宮の近きにだも不達、況や萬里の外安能く敎令を施して、夷狄を制御することを得んや、【漢計―】漢其初に審に察して絕世の佳人を擢て用ることなく、空く宮裏に幽閉して、他に與るに及て驚駭して歎惜す、事既に晩し、又惡を畫工に積んで濫りに弃市の法に當つ、漢の計誠に已に拙し、【女色―】女色の絕れたるも亦自ら誇りがたし、昭君己れが絕色に誇り、自負て畫工に下らず、遂に身を夷狄に葬ることを取る、此れ亦餘憾あり、色を以自ら誇るの失に因ればなり、

明妃去時淚、洒向枝上花、狂風日暮起、飄泊落誰家、紅顏勝人多薄命、莫怨春風當自嗟、歎息也

【明妃―】明妃胡に赴き去るとき悲傷する淚は、路傍枝上の花に向て灑き墜つる也、【狂風―】狂風日暮に起て行人を吹て遠く送る、これに任せて漂泊し、行き行て到頭不知誰か家にか落在せんや、行路の悲み淚を灑ざらんや、【紅顏―】前漢書外戚傳、武帝悼李夫人賦、既激感而心逐兮、包紅顏而弗明、【薄命―】又許皇后上疏云、奈何妾薄命、端遇竟寧前、言ろは紅艶の顏色人に勝れて美なる者は、古より多くは薄命にして意を失ひ易し、獨り昭君のみに非ず、春風の暴く吹起て飄轉するを怨ることなかるべし、只自ら天命の幸薄して此に至ることを嗟嘆すべしと也、

○明妃曲和王介甫

歐陽文集卷八載之、

ことを不レ知、明翰林侍讀耐軒王達筆疇卷上云、客有
自二東勝一來者一言二王昭君之墓之異一黃土一堆其勢延袤、
或朝升而暮降、或朝降而暮升、隱々隆々如二浮玉一然、
與二造化一相爲二消息一兼之茂草瓊芝青苔綠葉雖二寒烈之
際北霜之久一而不レ見二其衰零一也、予聞而爲レ之嘆曰、天
下焉有二此理一焉有二此事一哉、昭君遠嫁二匈奴一而不レ死二於
中路一及レ至レ見二腥膻一而後亡不二亦晩一乎、生既不レ烈、死安
有レ靈、其墓與二造化一相爲二消息一決無二此理一越二數日一有二一
儒者自二東勝一來、予詢レ之果誣也、其條下に陸之箕か說
を附て曰、昭君其居二穹廬一爲二閼氏一蓋久矣、死而無レ靈
固不レ足レ辨、但青塚之說其來甚遠、意者天故異レ之以
貽二漢家之辱一邪、○羅景倫曰、李太白去婦詞、憶昔初
嫁レ君、小姑纔倚レ牀、今日妾辭レ君、小姑如二妾長一回レ頭
語二小姑一莫レ嫁レ如二兄夫一古今以爲二絕唱一然特忿恨決絕
之詞耳、若二谷風去婦之詞一曰、毋レ逝二我梁一毋レ發二我笱一雖
レ遭二放棄一而猶反二顧其家一戀々不レ忍、乃知國風優柔忠厚
信非二後世詩人所一レ能彷彿一也、古今賦二昭君一詞多矣、惟
樂天云、漢使却廻憑寄レ語、黃金何日贖二娥眉一君王若
問二妾顏色一莫レ道不レ如二宮裡時一前輩以爲高出二衆作之上一
亦謂其有二不レ忘レ君之意一歐陽公明妃詞自以爲レ勝二太白一
而實不レ及二樂天一至二於荊公云二漢恩自淺胡自深、人生樂
在二相知心一則悖レ理傷レ道甚矣、

○明妃曲　　歐陽永叔

歐陽文集八題作二再和明妃曲一

漢宮有二佳人一天子初未レ識、一朝
隨二漢使一遠嫁二單于國一絕色天下
無、一失難二再得一雖三能殺二畫工一（畫工乃毛延壽）
於レ事竟何益、

【漢宮—】前漢書外戚傳李延年歌、北方有二佳人一絕レ世
而獨立、宋玉好色賦、天下之佳人莫レ若二楚國一漢宮の中
に佳麗の美人あり、只深宮にのみ在て顯れず、天子初
め其絕世の色なることを識玉はざりしと也、【一朝】
あるときふとゝ云意也、任彥昇詩、一朝草化盡、猶我故
人情、【隨漢使】漢より明妃を單于に贈るの使に隨て
胡地に赴き、遠く匈奴の天子單于が國に嫁して行也、

人畫明妃出塞圖作馬上愁容自彈而賦詩者又述其自鼓琵琶之意矣、魯直竹枝詞注引傳玄序以謂、馬上奏琵琶乃烏孫公主事、以爲明妃用、蓋承前人誤、蓋黃注是不考石崇明君詞故耳、

黃金捍撥春風手、彈看飛鴻勸胡酒、漢宮侍女暗垂淚、沙上行人却回首、

【捍撥】は揮て絃を彈するの具琵琶のばち也、黃金を以て作れるばちを把て、春風の物に觸れて溫和なるが如き柔軟の手を動かし、琵琶を彈じながら飛鴻の南に歸を望み、鄉里を思ふ恨を含て强て胡國の酒を勸むる也、【漢宮—】漢宮より昭君に從て胡地に來れる侍女、昭君が琵琶の絃哀怨の聲多きを以て、聞て暗に淚を垂れ、各〻鄉思を牽て悲を生ずと也【沙上—】胡地の沙上を行く人も、昭君が琵琶の哀音を聞ては、心に感じ傷て過去に不忍、却て首を回して躊躇する也、【捍撥】唐樂志高麗琵琶以蛇皮爲槽、楸木爲面、象牙爲捍撥、

漢恩自淺胡自深、人生樂在相知心、可憐青冢已蕪沒、尙有哀絃留至今、

單于死子達立、昭君謂達曰、將爲漢將爲胡、曰爲胡、昭君服毒而死、擧國葬之、胡中多白艸、而此冢艸獨青、故曰青冢、

哀絃謂琵琶也、

【漢恩—】以下の四句は荊公の意を以て、昭君が竟に漢を忘れざることを難ずる也、昭君の美麗を以て一たび帝に見ることを不得、深宮の中に空く歲を送れり、是漢の恩は自ら淺くして顧盻を蒙るに非ず、胡に嫁してよりは閼氏の位に昇て單于の鍾愛を得、恩寵自深し、人間の生涯歡樂なるは惟心を相知て能契ふにあり、恩愛深く相契ひなば胡國と云とも歡樂同じかるべし、何ぞ戀々として漢を思ふとをせんやと也、【可憐—】然るに憐むべし、昭君は遂に漢を忘ることなく、死して尙胡の鬼とならず、冢上に青艸を生じて漢たることを示す、其青冢今已に蕪沒すれども、尙琵琶の哀絃存すること有、傳て今に至るまで怨恨の聲を留むと也、注前後漢書共に此事を不載、後漢書を考るに昭君が子に達と云者なし、此注其何の據ある

斯言可謂忠之心、

○明妃曲　漢元帝以王昭君配匈奴、號寧胡閼氏、後入胡中思慕漢恩、遂彈琵琶以寄其恨、名之曰昭君怨、爾後詩人賦詠以哀之、

【題注】昭君の事前詩に見たり、又此題下に注するは詩中琵琶を彈ずるのことあるを以也、【寧胡閼氏】漢書注師古曰、言胡得之國以安寧也、閼氏は匈奴の天子妻也、漢の皇后也、昭君自ら琵琶を彈ずると云說と、侍從の者の彈ずるなりと云二說あり、詩の下に注す、【詩人賦詠哀之】六朝以來唐宋までの詩人最多く題詠せり、文選石季倫が王明君辭あり、其序云、王明君本是王昭君、以觸文帝諱改之、匈奴盛請婚於漢、元帝以後宮良家子昭君配焉、昔公主嫁烏孫、令琵琶馬上作樂以慰其道路之思、其送明君亦必爾也、其造新之曲多哀怨之聲、故敘之於紙云爾、

王介甫

明妃出嫁與胡兒、氈車百兩皆胡姬、含情欲語獨無處、傳與琵琶心自知、

【胡兒】匈奴也、【氈車】毛氈を以て裝たる車也、【百兩】召南鵲巢篇、之子于歸、百兩御之、朱注兩一車也、一車兩輪故謂之兩、明妃漢宮を出て胡兒に嫁與するとき、單于氈車百兩を以て明妃を迎ふ、百兩に乘する者悉く胡國の姬にして、漢音を解する者一人もなき也、【含情】鬱情を內に含み蓄る也、梁沈約詩、含情寄盃酒、【獨無處】詩林廣記作獨何處、言ろは昭君風沙の難を侵して遠く匈奴に嫁す、腸內幾許の鬱情を含て、人に向て語んとすれども左右の車皆胡姬、獨何の處に向てか能く語ることをせんやと也、【傳與—】含情語るべきなし、只琵琶絃上の聲に傳與して多少の情を寫し、自ら彈して自ら心にのみ知ると也、齊王融詠琵琶詩、絲中傳意緒、花裏寄春情、○野客叢書五云、傳玄琵琶賦序曰、故老言漢送烏孫公主嫁昆彌、念其行道思慕、使知音者于馬上奏之、石崇明君詞亦曰、匈奴請婚于漢元帝、以後宮良家子配焉、昔公主嫁烏孫、令琵琶馬上作樂以慰其道路之思、其送明君亦必爾也、則知彈琵琶者乃從行之人、非行者自彈也、今

指す、單于の國は塞北に在を以て也、言は何れの人に憑てなりとも聲音を寄せ傳へて、塞南今何事かあるやと問訊せんと欲すれども、只年々に鴻雁の南に向て飛ぶのみあつて、人の往こともまれなると云の意也、

佳-人萬-里傳ニ消-息ヲ、好-在ナリ氈-城ニ莫レ相憶フコト、君不レ見ヤ咫-尺長-門閉ツ阿嬌ヲ、

李詩漢帝重ニ阿嬌ヲ、閉ニ之黄金屋ニ、咳唾落ニ九天ニ、隨レ風生ニ珠玉ヲ、寵極愛還歇、妬深情却疎、長門一歩地、不ニ肯暫回レ車ヲ、

人-生失レ意ヲ無ニ南北ニ、

謂ニ宮人失ニ愛於君ニ、在レ漢則幽ニ閉長門ニ、猶ニ昭君漂ニ淪於北ニ也、

【佳人】昭君を指て云、佳人は美人の稱也、宋玉好色賦、天下佳人莫レ若ニ楚國ニ、【傳消息】消息は音信也、二字本出ニ易剝卦及豐卦ニ、【好在】恙もなく安寧に在と云意、【氈城】胡地多く毛氈を用て幃帳とす、氈城は氈を以て圍める城と云義か、未レ考、【莫相憶】漢宮に係て云、言ろは彼佳人昭君萬里の外の胡地より消息を傳て道ふ、吾れ安康にして好く氈城に在り、遠く相憶ふことを勞せざれと也、【君不見】詩人の昭君に諭する也、【咫尺】咫は八寸也、一咫一尺の間甚だ邇を云、左傳僖公九年、天威不レ違ニ顏咫尺ニ、【長門】三輔黄圖三、長門宮離宮在ニ長安城ニ、孝武陳皇后居ニ長門宮ニ、前漢書九十七外戚傳、孝武陳皇后擅レ寵驕貴、十餘年而無レ子、聞ニ衞子夫得ニ幸幾死 者數焉、上賜ニ皇后ニ曰云云、其上ニ璽綬ヲ罷退居ニ長門宮ニ、【閉阿嬌】阿嬌の事前に數〻見たり、阿嬌は陳皇后の小字也、詩人の意謂らく、君彼阿嬌を不レ見や、長門の宮天顏を去ること僅に咫尺の間の近きが如し、然れども幽閉せられて天子に見ることを不レ得、長門一歩の地も猶千里の遠きが如し、人の斯世に生るゝこと意を得て相契ふときは、遠きも還て近きが如し、意を失て相得ることなければ、たとひ漢宮の中に在りと云へども千萬里の外に在と異なることなし、君に得られざれば長門に阿嬌の幽居せるも、昭君が匈奴に嫁するも共に同して、南北の異ことなきと也、匈奴の遠を以て深く怨ることなかれと云の意あり、注李詩は李白全集卷三妾薄命の詩の畧也、重阿嬌、本集作レ寵ニ阿嬌ヲ、隨レ風生ニ珠玉ヲとは、權威を擅にして事の可否を與り聞て、予奪命のまゝなるを云、〇詩林廣記後集卷一、黃山谷云、往歲嘗與ニ王深夫ニ語ニ此詩ヲ、以爲ニ詞意深盡ヲ、深夫曰不レ然、孔子云夷狄之有ニ君不レ如ニ諸夏之亡ニ也、人生失レ意無ニ南北ニ、此語非レ是、深夫

脚垂、低回顧影無顏色、尙得君王不自持、歸來却怪丹青手、入眼平生未曾有、意態由來畫不成、當時枉殺毛延壽、

【明妃―】明妃將に匈奴に赴んとして漢宮の舊居を出し時、遠別の恨を含て涕涙春風に向て墮ち、紛粧濕て鬢脚も鬆れ垂る也、【低回】しほたれたちもとをりて去り敢へざる貌也、史記孔子世家太史公賛曰、適魯觀仲尼廟堂車服禮器、諸生以時習禮其家、余低回留之不能去也、【顧影】我が身の影を顧て自憐みて悲む也、晉書何晏傳、何晏粉白不去手、行歩自顧影、後漢書には顧景裴回に作也、顧影二字傳の中より採用、【無顏色】顏貌黯然として光彩なき也、匈奴歌、失我燕支山、使我婦女無顏色、【尙得―】涙顏愁貌平生の艷麗なる姿あることなけれども、それさへ尙君王一たび見て悦て得んことを思ひ、制持したへざるに至らしむることを得たり、況や其平生の美容いかんがあらんや、【歸來―】君王朝堂より歸り來て、寢殿に入て竊に怪む、丹青の畫手を以て寫せる宮女の貌、平生眼に入て檢閲する者、明妃が容貌の如きは未曾て有らざりしは何の故ぞやと疑へる也、【意態―】絕世の美人には、意象態度自粉黛顏色の外なるものあり、天生の風致にて由來筆の及ぶ所に非ず、畫史の意に惡んてあしく寫たるに非ず、實に畫けども不成もの也、これを不思して延壽が賄を不得に因て、如此畫きなしたりとて、當時枉て畫史の毛延壽を刑罪して殺したると也、

一去心知更不歸、可憐著盡漢宮衣、寄聲欲問塞南事、只有年々鴻雁飛、

【一去―】昭君將に出んとするとき、心に自ら知る、一たび去て單于に嫁しなば、復た漢に歸るの日はあるべからずと、最も憐む胡の服に變ずるに不忍、漢宮の衣服を著盡して終に身を不離ことをと也、【寄聲】ことづてをするを云、前漢書列傳四十六、趙廣漢曰、界上亭長寄聲謝我、何以不爲致問、【塞南】は漢の都を

【橋陵】大明一統志、西安府蒲城縣の豐山に在り、【金粟山】在蒲縣東北三十里、山有碎石若金粟然、【千秋萬歲後】至尊には死を言ふことを諱む、故に崩後と云へきを千秋萬歲の後と謂ふ也、升遐天子の崩を謂て升遐と云、二字本莊子太宗師に出、在玄宗泰陵南、金粟岡は泰陵の南に在と云意也、○唐汝詢曰、蓋世無名馬則韋諷之圖豈足珍、主乏射蛟則肅代之懦弱咸可見、觀一圖而慨及國運、子美之詩豈雕蟲之技云爾哉、

曲類

韻會云曲詞曲也、樂書云樂有歌、歌有曲、曲有詞、梁元帝纂要云、古艷曲有北里靡々濟風陽阿之曲、元稹樂府古題序云、音聲以度詞、審調以節唱、句度短長之數、聲韻平上之差、備曲度者總得謂之歌曲詞調、斯皆由樂以定詞、非選詞以配樂也、白石詩說云、委曲盡情曰曲、

○明妃曲

元帝後宮人既多不得常見、乃使畫工毛延壽圖其形、按圖召幸、宮人皆賂畫工、多者十萬金、少者不減五萬、王嬙字昭君自恃其貌、獨不與、及匈奴入朝選宮人配之、昭君以圖當行入辭、光彩動人竦動左右、天子重信外國、悔恨不及、窮究其事、毛延壽竟弃市、籍其資財、

【明妃】は王昭君也、昭字晉文帝の諱に觸る、故に石季倫改て明君と云、其後遂に稱爲明妃、昭君が事は詳に第一卷李白王昭君詩に見えたり、故に不復錄、【題注】【按圖】按は撿也、圖上の衆女を點撿して意に稱ふ者を召す也、【以圖當行】圖を撿して帝の心に不悅者を以て匈奴に與んと欲す、王嬙畫工に不賄に因て圖上の貌醜し、圖を以て按ずるに、明妃の貌容宜く匈奴にやるべきに當たる也、【入辭】只今匈奴に赴くのよしを告して、內に入て帝に見えていとまごひするを云、【重信外國】中國不信なれば夷狄疑て不服、故に外國に示すに信を堅することを大事となさるゝと也、【弃市】市中にはりつけにかくる也、【籍其資財】毛延壽が家に所有諸の資財を簿籍に記錄して、一箇も不遺悉く沒收するを謂つて籍すと云、罪重きに因て也、

王介甫

明妃初出漢宮時、淚濕春風鬢

天寶六載更溫泉曰華淸宮、【翠華】上林賦、建翠華之旗、注張揖曰翠華以翠羽爲葆也、【拂天來】東都賦、旄旗拂天、玄宗の驪山に巡幸ありし時、翠華の旗高く建て天を拂ふが如くにして東に向ひ來りし也、【騰驤】西京賦、乃奮翅而騰驤、注騰超也、驤馳也、はねをどつてはするを云也、【磊落】唐詩解注、磊落衆多貌、【三萬疋】蕭子顯詩、漢馬三萬疋、舊唐書云、王毛仲知監牧使、扈從東封、以諸牧馬數萬疋從、每色爲一隊、望如雲錦、驪山に幸ありしとき、騰驤たる駿馬磊落として從ふこと三萬疋の多に至る、其馬の筋骨の相今所見の圖上の馬に同じかりしと也、列子伯樂曰、良馬可形容筋骨相也、

自從獻寶朝河宗、無復射蛟江水中、元封五年漢武自潯陽浮江親射蛟江中獲之、君不見金粟堆前松柏裏、龍媒去盡鳥呼風、

玄宗至睿宗橋陵、見金粟岡、有龍盤鳳翥之勢、謂侍臣曰、吾千秋萬歲後宜葬此、暨升遐、羣臣遵先旨葬焉、在玄宗泰陵南、〇漢武歌曰、天馬徠龍之媒、

【自從——】此二句故事を用て、玄宗西幸の後やがて崩し玉ひて、復た遊幸の事なかりしを云也、穆天子傳卷一云、戊寅天子西征、鶩行至于陽紆之山、河伯無夷之所都居、是惟河宗氏、河宗伯夭逆天子燕然之山、勞用東帛加璧先白、□天子使鄒父受之、玄宗の西蜀に幸ありしこと實は出奔なり、然れども至尊の爲に諱て不言、穆王の西征せられて河宗を朝せしめ、璧を獻ずるを受けられたるに比して、玄宗も西征ありしと云也、【無復——】前漢書武帝紀、元封五年帝自潯陽浮江、親射蛟江中獲之、これ亦天子巡幸の事を借用て、無復と云は玄宗西幸より後長安に還り玉ひて、幾ばくもあらす崩じ玉ひて、復巡幸の事なかりしと云意也、【金粟堆——】注長安志の文也、金粟岡は玄宗の陵の所在也、【龍媒】は天馬也、前漢書禮樂志郊祀歌十九章之第九云、天馬徠龍之媒、應劭曰言天馬乃龍神之類、今天馬已徠此龍必至之效也、【呼風】楚辭遵懋莽以呼風、言ろは玄宗崩じ玉ひて金粟堆の中に隱れさせ玉ふの後は、泰陵の上只松栢のみ多して、昔時龍媒の駿馬悉く去盡て存する者なし、只今惟鳥の鳴て風に呼ぶ聲のみある也、注【睿宗】唐第五主玄宗の父也、

て無前の態度の如くなると云意也、

其餘七疋亦殊絶、逈若寒空動烟雪、霜蹄蹴踏長楸間、馬官厮養森成列、可憐九馬爭神駿、漢武帝有九逸、支遁曰、憐其神駿耳、顧視清高氣深穩、借問苦心愛者誰、後有韋諷前支遁、

【其餘七匹】前の二疋の外尚七疋ある也、これ亦殊に絶れて駿馬也、【逈若—】其健氣飄颻たること、寒空に烟雪の飛動するが如くなると也、【霜蹄】莊子馬蹄可以踐霜雪、馬蹄の堅强なるを云也、【長楸間】曹植詩、走馬長楸間、長楸の間に在て蹴踏する也、【馬官】馬を掌る者、廋人圉師の屬也、【厮養】馬を牧ふ僕卒也、史記陳餘傳有厮養卒謝其舍中曰、吾爲公說燕、注如淳曰厮賤者也、公羊傳曰、厮役扈養、韋昭曰折薪爲厮炊烹爲養、【森成列】森は衆木貌、森樹の如く衆く立て列伍を成す也、【可憐—】九馬は前の二疋と其餘の七疋と都て九馬也、固に憐み玩ぶべきは、九馬各〻驍騰して其神駿を爭ふの狀ある也、【顧視】馬の左右に顧視する眼睛清高にして凛々たり、氣調深穩にして狂暴なることなき也、漢武の九逸は羣書拾唾卷十、漢文帝有良馬九、浮雲、赤電、絶羣、逸驃、紫燕、綠璃、龍子、驎駒、絶塵也、曹霸の寫せる圖中に自九馬あり、漢の九逸を引は謬れり、【支遁】高逸沙門傳、支遁字道林、河南林慮人、世說支道林常養數匹馬、或言道人畜馬不韵、支曰貧道重其神駿、【借問苦—】韋諷を以て支遁に比する也、心を苦めて馬を愛する者は誰かあるや、前代に支遁と云者あり、今に於ては即韋諷錄事酷馬を好むの癖あつて、霸が畫を藏て玩るゝと也、

憶昔巡幸新豐宮、新豐宮驪山也、翠華拂天來向東、騰驤磊落三萬匹、皆與此圖筋骨同、明皇幸驪山下、毛仲以廐馬數萬從、毎色作一隊、相間若錦綉、

【憶昔】曹霸が畫を看に由て、追て玄宗在位の日全盛なりしことを憶ふ也、【巡幸新豐宮】驪山の華清宮に幸ありしを云、新唐書地理志、京兆府昭應縣本新豐、有宮在驪山下、貞觀十八年置、咸亨二年始名溫泉宮、

視上卿比列侯、師古曰婕言接幸於上也、妤美稱也、
【才人】事物紀原一才人南史曰、晉武帝采漢魏之制三
夫人外有才人、則疑漢置、内府の中より殷紅色の瑪瑙
の盤を捧て出づ、婕妤の官婦天子の詔を承て覇に賞
賜を下さるゝ旨を傳へ、才人の女其賜物を有司より
索取て將軍に授る也、

盤賜將軍拜舞歸、輕紈細綺相
追飛、貴戚權門得筆跡、始覺屏
障生光輝、

【盤賜―】將軍盤を以て賜はる、恩賞を受て拜首踏舞
して喜び歸へる也、復た輕紈細綺其後へに追隨して
飛し贈て、恩寵良に渥也、又一説本注夢弼曰、輕紈細
綺言從者也、【貴戚權門】高貴の戚屬權勢の人の家
也、前漢書息夫躬傳、躬交遊貴戚趨權門爲名、【得
筆跡】將軍の寫せる畫圖を索め得ては也、【始覺―】屏
障觀ものを改て光輝忽に生ずることを覺る也、古樂
府萬物生光輝、

昔日太宗拳毛騧、太宗所乘名拳毛騧、乃平劉黑闥時所乘者、騧音瓜、

近時郭家師子花、郭子儀收復京師、代宗以花虬賜之、名師子驄、
今之新圖有二馬、復令識者久
歎嗟、此皆騎戰一敵萬、縞素漠
々開風沙、

【拳毛騧】本注鄭曰、太宗有六駿、皆平盜時所乘、拳毛
騧乃平劉黑闥時乘也、【郭家】郭子儀が家を指す、【師
子花】本注洙曰、郭子儀收復京師、代宗以九花虬賜
之、一名獅子驄、杜陽雜編云、代宗命九花虬並紫玉鞭
轡以賜郭子儀、卽范陽節度使李德山所貢、額高九寸、
毛拳如鱗、眞虬龍也、以身被九花文號九花虬、昔日の
駿馬には太宗の拳毛騧、又近時の郭家の獅子花最も
絶世の名馬なり、今將軍の新に寫せる圖に二馬の像
あり、又能馬の骨相を識れる者をして看て歎嗟せし
むる也、【此皆―】此馬皆用て騎戰するとき、一騎能く
萬騎の敵に當て摧き敗に足れる也、李陵答李陵書
云、疲兵再戰一以當千、【縞素】は用て畫く絹也、馬を
寫したる絹の縞素漠々たるを沙漠に比して言ふ、縞
素の漠々たるに駿馬を圖し出たるは、沙漠を開拓し

圖引

本集十一載之、題注鶴曰、韋諷居在成都、時爲閬州錄事、曹將軍は前の詩に云へる曹霸也、明皇雜錄陳人馮紹正曹霸鄭虔皆善繪畫、時稱神妙、

杜子美

國初已來畫鞍馬、神妙獨數江都王、（名畫記、江都王緒霍王元軌之子、）將軍得名三十載、人間又見眞乘黃、

【國初已來】唐の世初りてより已來也、唐初てより已來鞍馬の圖を畫て神妙に入る人は、獨り江都王を第一に數る也、注名畫記、江都王緒霍王元軌之子、多材藝、畫鞍馬擅名、【將軍—】曹霸將軍も亦鞍馬を畫くを以て名を得ること於今三十年也、【人間—】乘黃詩衞風叔于田篇、叔于田乘乘黃、竹書紀年、帝舜元年出乘黃之馬、乘黃の馬は徒に聞傳へて古へにありしことを知れり、今曹將軍の畫ける馬を觀れば、人間又眞の乘黃と云者を見ることを得たると也、

曾貌先帝照夜白、（明皇所乘馬名照夜白、貌莫角反、）龍池十日飛霹靂、（以霸所畫照夜白乃眞龍耳、蓋眞龍在圖感動龍池中龍如此、）內府殷紅馮腦盤、婕妤傳詔才人索、（婕妤嬪官名、婕音接、妤音予、）

【曾貌—】貌音莫描、畫人物類其狀曰貌、先帝は玄宗也、【照夜白】楊妃別傳、上乘照夜白、大眞妃以步輦從、本注夢弼曰、明皇有馬名照夜白、嘗命曹將軍畫以爲圖、曹將軍の畫妙絶なるを以て、曾て玄宗の名馬照夜白を圖せしめ玉ひし也、【龍池—】霸が畫の妙神に入て遂に眞龍を感し、龍池の上十日霹靂の震雷を飛したると也、本注蒼舒曰、按唐會要、明皇在藩邸居興慶里、宅有龍池湧出、日以浸廣、至開元中爲興慶宮、【內府】禁中の府庫也、呂氏春秋荀息曰、若虞受璧馬而假我道、是猶取之內府而藏之外府也、【殷紅】殷烏間切赤黑色、殷紅は瑪瑙の色也、玄中記瑪瑙出月氏國、非玉非石自是一類、【婕妤】前漢書外戚傳序、漢興因秦之稱號、帝母稱皇太后、適稱皇后、妾皆稱夫人、至武帝制婕妤娙娥傛華充依各有爵、婕妤

意何長、【路幽―】水路幽溟なれば恐は鬼神の爲めに此杖を奪はるゝことあるべき也、或は劔を杖て蛟龍と此杖を爭て禦き拒むこともあらんと也、甚だ杖の靈異なるを云也、靈異物は多く水神の爲に奪はるゝことあるに由て也、

重爲告曰杖兮杖兮、爾之生也甚正直、愼勿見水踴躍學變化爲龍、神仙傳壼公遣費長房歸、以一竹杖與之騎、長房騎杖忽然到家、以竹杖投葛陂、顧之乃青龍也、

【重告曰―】以下は桃竹杖に諭し言ふの辭也、再び呼て曰、爾が天然の生質甚だ正直也、我最も心に愛之、必ず愼て水を見るとも踴躍して水中に入り、變化して龍となることなかるべし、壼公の杖既に龍と化し去りたり、汝も亦甚だ靈異の物なれば、我れは其一旦化し去んことを恐ると也、注壼公は費長房が師也、長房道骨に不稱壼公を辭して歸る、壼公杖を長房に與て騎らしむ、忽に家に到て所騎杖を葛の生たる陂に投じたるに、忽青色の龍となり空に飛び去りたると也、

使我不得爾之扶持、滅跡於君山湖上之青峯、噫風塵澒洞兮豺虎咬人、喩當時之盜賊也、澒胡孔反、咬古肴反、忽失雙杖兮吾將曷從、

【使我―】雙杖若し變化し去らば、我をして爾が扶持の助けを得ざらしむべし、只我とともに君山湖上の青峯に隱れ跡を滅すべきぞと也、【君山】一統志岳州府君山在府城西南一十五里洞庭湖中、一名洞庭山、狀如十二螺髻、山海經云、洞庭之山帝之二女居之、蓋堯女湘君嘗居此故名、道書以爲第十一福地、唐劉禹錫詩、湖光秋水兩相和、潭面無風鏡乍磨、遙望洞庭山擁翠、白銀盤裏一青螺、【噫風塵―】噫如今いかんぞや兵革已むことなく、風塵澒洞として鬪くことなく、豺虎の猛獸人を咬むに似て盜賊人を害ふこと甚し、吾れ若し忽然として此所恃の双杖を失ひなば吾將に曷に從てか扶かる所あらんやと也、【澒洞】字彙澒胡孔切流轉貌、氣澒洞末分之象也、

○韋諷錄事宅觀曹將軍畫馬

刺史章彝兼侍御史留後東川、

杜子美

江心蟠石生桃竹、爾雅謂桃皮、山海經謂桃枝竹也、蒼波噴浸尺度足、斬根削皮如紫玉、江妃水仙惜不得、江賦水夷倚浪以傲睨、江妃含嚬而矊眇、注水夷水仙也、

【江心蟠—】江の中心の蟠石の上桃竹を生ず、蒼波常に四方より噴き揚て竹を浸す、其中に長じて修短巨細の尺度柱杖と爲すに足て用に稱ふ也、【斬根—】其桃竹を採て、根を斬り皮を削れば、紫色にして光澤あつて紫玉の如くなると也、【江妃水仙】水神也、此桃竹を斬り取れども、江妃水仙の水神も惜むことを不得して、人の採るに任すると也、注【江賦】文選郭景純が江賦也、水夷文選作冰夷、

梓潼使君開一束、時章彝爲梓州刺史、滿堂賓客皆歎息、憐我老病贈兩莖、出入爪甲鏗有聲、

【梓潼使君】本注夢弼曰、使君指章彝、彝時爲梓州刺史、鶴曰梓州爲梓潼郡、以東倚梓林西枕潼水得名【開一束】桃竹一束を斬取たる也、【滿堂—】章彝の堂上に聚る賓客、此桃竹を見て悉く皆其異物なることを歎息する也、【憐我—】章君杜甫の老て且つ病めることを憐て、桃竹兩莖を寄せ贈れり、これを杖て出入すれば、爪甲に觸るゝ聲鏗然と響て雅音ある也、【鏗】音坑金玉聲也、

老夫復欲東南征、欲征東南方往吳楚、乘濤鼓柂白帝城、公孫述自立號成都爲白帝城、路幽必爲鬼神奪、杖劒或與蛟龍爭、

【老夫】杜公自ら謂ふ也、吾復た東南に征んとするの心あり、さあらば洪濤に乘じ柂を鼓て白帝城の下を過るにてあるべしと也、楚辭漁父、漁父莞爾而笑鼓柂而去、【白帝城】大明一統志、夔州府白帝城在府治東、公孫述據蜀自稱白帝、更號魚復曰白帝城、唐杜甫詩城峻隨天壁、樓高更女墻、結云公孫初恃險、躍馬

眼白、（阮籍見人能青白眼、）世上未有如公貧、但看古來盛名下、（房琯贊盛名之下爲難居矣、）終日坎壈纒其身、（終日坎壈不得志、惟有百憂纒縛其身、壈音朗、）

【將軍畫善】本集作盡善、唐詩訓解作善畫、將軍の寫せる畫は蓋し神靈の在ることあると也、【必逢—】必ず佳士に逢ては其士の眞を寫すことを好めると也、眞を寫すは容貌を繪に寫すを云也、梁簡文帝詠美人看畫詩、可憐俱是畫、誰能辨寫眞、【即今—】只今籍を削られて干戈の際に漂泊し、佳士を撰ぶに不及、心ならず尋常の行路頭、よしもなき凡人をも寫せると也、貌音莫、描畫人物類其狀曰貌、【行路人】蘇武詩四海皆兄弟、誰爲行路人、【途窮】不得志して窮困する也、顏延之咏阮步兵詩、物故不可論、途窮能無慟、【遭俗眼白】阮籍が白眼を借て翻案して用ゆ、阮籍は俗子を白眼にして看、此には言ふ途窮して志行伸ることなく、却て俗子の爲めに白眼にして睥睨せらるゝ辱しめに遭へる也、【世上—】世上多くの人の中、公の如くに貧困なるは復た有ることなきと也、【但看—】結句には古を引て曹霸を慰解する也、【盛名下】後漢書黃瓊傳、盛名之下其實難副、下字は上下の下に非ず、位の意と作して看るべし、俗に場と云義に近し、盛に顯れたる地位と云義也、【坎壈】楚辭坎壈兮貧士、失職而志不平、注坎壈不平也、言ろは途の窮すること只將軍のみに非ず、但看よ古より以來盛名の下には居がたし、故に多く其位に卒ることを不得して、終日志を失て坎壈し、其身を纒縛して懷抱を伸ることなき者最多し、將軍深く憂ることなかれと云の意也、

○桃竹杖引

（工部遇亂久留梓州、懷故鄉之思、使君章彝以雙桃竹杖贈之、桃竹出巴渝間、其爲物靈異、公作此引以謝之、）

本集十載之、題注東坡跋桃竹杖引後、桃竹葉如櫻身如竹、密節而實中、犀理瘦骨蓋天成柱杖也、嶺外人多稙此而不知其爲桃竹、流轉四方、蓋自東坡出也、【留梓州】肅宗寶應元年嚴武召れて還る、杜公武を送て綿州に到る、蜀に徐知道が亂あり、故に杜公梓州に入る、代宗廣德二年梓より閬州に往けり、此間の詩也、【使君章彝】杜詩冬狩行自注、梓州

笑酒爐前、【催賜金】恩賞に賜ふ金を催して出さしむる也、【圉人】周禮夏官、圉人掌養馬芻牧之事、以役圉師、凡賓客喪紀牽馬而入陳、【太僕】前漢書百官表、太僕秦官掌輿馬、【惆悵】失志望恨貌、曹將軍の賜金を拜するを見て、圉人太僕皆羨て惆悵すると也、容齋續筆云、老杜丹青引、至尊含笑催賜金、圉人太僕皆惆悵、或以爲畫馬奪眞、圉人太僕所不樂、不然圉人蓋牧養官曹及馭者、而黃金之賜乃畫史得之、是以惆悵、杜公之意深矣、

弟子韓幹早入室、亦能畫馬窮殊相、幹惟畫肉不畫骨、（韓幹善畫馬、王維推奬之、初師曹霸、但以畫馬肥大而所以有畫肉之誚、）忍使驊騮氣凋喪、

【韓幹】本注夢弼曰、韓幹大梁人、善寫貌人物、尤工鞍馬、初師曹霸、王右丞維見其畫推奬之、官至寺丞、太平廣記卷二百一十一云、唐韓幹京兆人也、唐玄宗天寶中召入供奉、上令師陳閎畫馬、怪其不同、詔因詰之、奏云臣自有師、陛下內廄馬皆臣之師也、上甚異之、其後果能狀飛龍之質、盡噴玉之奇、九方之識既精伯樂之相乃備、且古之畫馬有周穆王八駿圖、國朝閻立本畫馬似模展鄭多見筋骨、皆擅一時之名、未有希代之妙、開元後四海淸平外域名馬重譯累至、自此內廄有飛黃照夜浮雲五方之乘、是以陳閎貌之於前、韓幹繼之於後、寫渥洼之狀不在水中、移騕褭之形出於天上、韓故居神品、【入室】畫法の精妙を傳へ得るなり、論語顏淵篇由也升堂矣、未入於室也、【殊相】群にすぐれて殊なる形相也、將軍の弟子韓幹も早く師の法を學得て奥妙を傳へ、馬を畫くこと能く名馬の殊相を窮る也、然れども幹が畫は肉つきの體勢を能寫して、骨骼の剛健をば未だ寫不得、名馬は骨骼の剛勁を宗とするに、肉を寫し得て骨が少く乏き故に、馬の健氣稍〻衰ふ、名馬を圖するに骨力の弱きは惜しきことなるに忍で如此寫すことを爲て、驊騮をして健氣を凋喪せしむると也、驊騮は名馬の名、前に詳に見えたり、

將軍畫善蓋有神、（將軍所畫之善蓋有神助、）必逢佳士亦寫眞、即今漂泊干戈際、屢貌尋常行路人、途窮返遭俗

墀も丹墀と同じ、天子の階庭を云也、漢書元后傳云、曲陽侯根驕奢僭上赤墀青瑣、【閶闔】天門也、淮南子排閶闔、許愼曰閶闔始升天之門也、【長風】是の日玉花驄を牽て赤墀の下に來る、天馬適に閶闔に立て健氣驍騰の勢長風を生ずる也、長風は馬の勢を云、風入四蹄輕と云句意と同じき也、【詔謂―】天子牽來る馬を指て詔して謂く、將軍絹素を一掃して此天馬の像を寫すべしと也、【意匠】意に工夫を作して筆の下しやうを計り匠むなり、文選文賦意相契而爲匠、【慘澹】心を潛め靜に澄して工夫をなす也、【經營】はかりいとなむ也、大雅文王篇經之營之、注歷代畫品に、畫に六の法あり、其第五を經營位置と云、此絹の中には馬をいかほどにかき、形像は如此如此に寫すべしと、恰好を目算するを經營と云なり、意を留て工夫を作し、匠を用て慘澹と心をすまして思ひ計るとは、經營をなす中に於て力を用る也、【斯須―】斯須はしばらくの間也、禮記樂記、禮樂不可斯須去身、【九重】天に九重の天あり、故に天子の居處を天に比して九重と云也、楚辭君之門以九重、注天子有九門、所謂關門、遠郊門、近郊門、城門、皐門、雉門、應門、庫門、路門也、門の數に拘らず、只禁中を九重と云と看べし、【眞龍】眞の龍馬也、周禮廋人馬八尺以上爲龍と云へり、龍も亦馬也、言は意匠經營既に定て、筆を把て斯須の間に一掃して寫し成す、九重の中より忽に眞の龍馬を爲し出したると也、眞字前に貌不同と云に應ず、曹覇が所寫即ち眞の天馬にて、活底の天馬の貌と一毫も不同の處なき也、【一洗―】將軍一たび圖を寫して天馬の健俊を畫くより、萬古以來凡馬の形をなしたる者、一掃に掃ひ盡して空からしめたると也、只將軍の寫せる者のみ、群にすぐれて獨歩するの意也、

玉花却在御榻上、榻上庭前屹相向、至尊含笑催賜金、圉人太僕皆惆悵、

【玉花―】將軍畫成て天子に上る、玉花却て御榻の上に在り、丹墀の下に牽來る馬と、只今圖して上りし馬と、榻上庭前屹として相向ひ、健氣相均也、【至尊】天子也、司馬相如難蜀父老文、奉至尊之休德、【含笑】能く寫し得たるを喜で、笑を含て見玉ふ也、劉琨詩、含

先軫之元、而面如生也、

良相頭上進賢冠、猛將腰間大羽箭、褒公鄂公毛髮動、鄂公尉遲敬德褒公段志玄、英姿颯爽來酣戰、

【良相】魏徵房玄齡が輩也、【進賢冠】後漢書三十輿服志下、進賢冠古緇布冠也、文儒者之服也、前高七寸後高三寸長八寸、公侯三梁閣上の圖像、丞相の文官になりたる人には、頭上に進賢冠を著たるを云、史記の魏世家國亂則思良相、【猛將】史記留侯世家、黥布天下猛將也、【大羽箭】本集洙曰、太宗嘗自製長弓大羽箭、皆倍常製以旌武功、敬德李靖が輩の猛將には腰間に大羽箭を帶させたる也、【褒公】段志玄齊州臨淄人、封褒國公、傳見于新唐書列傳十四、【鄂公】尉遲敬德名恭以字行、突厥入寇頗有功、後改封鄂國公、傳見于新唐書列傳十四、【毛髮動】神色を寫すこと極て妙にして、毛髮生動するが如くなると也、【英姿】英雄の姿容なり、後漢書馬武傳論云、光武不以功臣任職、至使英姿茂績委而不用、【颯爽】英雄の姿ゆゝしくさはやかなるを云、【來酣戰】酣洽也、合戰最中なるを酣戰と云、戰の中よりかけぬけて、只今來たると云形狀に見ゆる也、淮南子覽冥訓云、魯陽公與韓戰戰酣日暮、援戈而撝之、韓非子楚師酣戰之時、

先帝天馬玉花驄、明皇別錄、上乘照夜白玉花驄、畫工如山貌不同、是日牽來赤墀下、迥立閶闔生長風、閶闔天門也、詔謂將軍拂絹素、意匠慘澹經營中、畫品謂畫有六品、五曰經營位置、斯須九重眞龍出、一洗萬古凡馬空、

【先帝】杜公此詩作れるときは肅宗の時なり、故に玄宗を稱して先帝と云、【天馬】大宛の馬也、詳に前に見たり、【玉花驄】玄宗の馬の名也、【畫工―】玄宗の玉花驄を圖せしめらるゝに、寫之畫工は山の如く多けれども、皆眞の天馬の貌と圖する所の像と不同、終に能く寫し得ることなき也、【是日】ある日と云意也、【赤墀】墀字彙音池階上地也、天子以丹漆地故稱丹墀、赤

【初學—】書法を學ぶ其初晉の衞夫人を學で遂に其法を得たり、但王右軍羲之が書に過ぎ超ること不得を以て恨とせると也、【衞夫人】（校訂者曰、原本に此處註解なし、蓋し後日記入せんとして遺脫せるものか）【丹青—】丹靑を好ては老の將に至んとするをも不知、心に樂て厭ふことなき也、其富貴を見て曾て心に關からざること、浮雲の空を度て天にあづかることなきが如し、毫釐も心に經ることなきなり、論語述而篇云、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾、又云飯疏食飮水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣、不義而富且貴、於我如浮雲、○呂氏童蒙訓云、謝無逸語汪信民云、老杜有自然不做底語到極至處者、有雕琢到極至處者、如丹靑不知老將至、富貴於我如浮雲、此自然不做底語、到極至處者也、如金鐘大鏞在東序、氷壺玉衡懸淸秋、此雕琢語到極至處者也、○劉須溪云、突兀四語能事志意畢竟、往復浩蕩只在裏許、自是筆意至此非思致所及、

開元之中常引見、承恩數上南薰殿、（數色角反、）**凌烟功臣少顏色、**（唐正觀中畫李靖等二十四人於凌烟閣、）**將軍下筆開生面、**（凌烟畫像顏色已暗、而曹將軍重爲之畫、故曰開生面、）

【開元】玄宗の年號、開元年中に玄宗常に曹覇を引て殿上に召し見玉ひし也、【承恩—】玄宗の聖恩を承て、數〻南薰殿に上りしと也、【凌烟功臣】唐貞觀十七年癸卯春、上命圖畫功臣趙公長孫無忌、趙郡王李孝恭、萊公杜如晦、鄭公魏徵、梁公房玄齡、申公高士廉、鄂公尉遲敬德、衞公李靖、宋公蕭瑀、褒公段志玄、夔公劉弘基、蔣公屈突通、鄖公殷開山、譙公柴紹、邳公長孫順德、鄭公張亮、陳公侯君集、郯公張公謹、虞公程知節、永興公虞世南、渝公劉政會、莒公唐儉、英公李世勣、胡公秦叔寶等於凌烟閣、【少顏色】凌烟閣の畫像、玄宗の時に及て釆飾滅して顏貌の物色不分明になりたると也、注【正觀】即貞觀也、宋朝の人仁宗の諱を避て貞觀を正觀となす其後傳へ寫して不改也、【將軍—】舊畫の彩色滅したるを、曹將軍再び筆を下して改め畫き、精神の眞を寫し得て、生ける日の面色を壁上に畫き開かれたると也、本注趙曰、凌烟畫像顏色已暗、而曹將軍重爲之畫、故云開生面、用字所出則左傳狄人歸

今英雄之聲勢已無矣、**文彩風流今尙存、**

【將軍】此詩を贈れる時は、曹霸已に庶人となれども、前に將軍たるに因て尙稱して將軍と云、【魏武】魏志太祖武皇帝姓曹名操、會董卓廢立、太祖散家財合義兵將以誅卓、袁術袁紹等同時起兵、王允呂布共殺卓、天子拜太祖爲司空、建安九年攻鄴破之、鄴定大封功臣二十餘人皆爲列侯、天子策命公曰、董卓初興國難、君則首啓戎行、呂布就戮袁紹大殲、烏丸三鍾一朝而滅、此君之功、今以冀州十郡封君爲魏公、始建魏社稷、二十一年天子進公爵爲魏王、太祖崩文帝嗣、漢帝以衆望在魏、乃召羣公卿士奉璽綬禪位、【於今爲庶】唐詩解注云、左傳三后之姓於今爲庶、主所知也、【淸門】淸高の名門と云意、家世貴盛の苗緒也、言は曹霸將軍は魏の武帝の子孫也、秖今官籍を削られて庶人となると云へども、本是淸高の門地名家の裔也と云意也、劉須溪批云、起語激昂慷慨少有及此【英雄】人物志中卷云、艸之精秀者爲英、獸之特羣者爲雄、故人之文武茂異取名於此、【割據】班固叙傳云、割據河山保此懷民、漢の末魏吳蜀各天下を爭て天子たらんことを欲し、鼎足の如く天下を三分にして各〻一隅に據す、此時を三分の割據と云、杜公武侯祠の詩に三分割據紆籌策と云も是也、曹操は天子の位に不即、魏王にして薨ぜり、此れ猶據中原十三州を有て吳蜀と爭ひ戰ふ時也、文帝に至て始て漢の禪を受く、將軍は魏武の孫と云、故に英雄の割據と云也、當時魏武の時の英雄割據の武勇聲勢、今は即既に已て見ることなけれども也、【文彩】爲人の資容居止凡ならず、文章風彩の見つべきあるを云、【風流】魏家の遺風を云、風雅洒落の意に非ず、前漢書趙充國傳贊云、其風聲自古而然、今之歌謠慷慨風流猶存耳、文選沈休文謝靈運傳論云、周室既衰風流彌著、嵇康琴賦、體製風流莫不相襲、言は曹霸さすがに名家の裔なる故に、其文彩の遺風今も尙は存して、凡人の比に非ると也、

學書初學衞夫人、晋李夫人衞善書、**但恨無過王右軍、丹靑不知老將至、富貴於我如浮雲、**語不知老之將至、又曰不義而富且貴於我如浮雲、

【問是―】三墳の纍々たるを怪んで傍人に問、是誰か家の塚にしてか如此相似たるぞと、傍人云ふ、此れは即ち勇士田彊古治氏等が塚也、【力能―】三士の爲人を聞けり、其勇壯の力南山をも能く排くほどの勢氣あり、文章を作ては地理の體勢を絶取て聯るが如くなりしと也、地理は山川河海自然の文章あり、故に文章の體勢雄壯なるを地理を絶と云へる也、【一朝】ふとしてと云意、論語に一朝之怒忘其身、一朝忽に讒言を被て二箇の桃實の爲に三士殺されたり、勇士を辜なきに陷れて殺すこと誠に寃也、誰か此奇巧の謀をなして能三士を殺したるや、即是齊の相國晏嬰が爲に因て也、顯に晏子なりと云は甚だ惡で也、【晏子】史記列傳二、晏平仲嬰者萊之夷維人也、事齊靈公莊公景公、以節儉力行重於齊、既相齊食不重肉、妾不衣帛、其在朝君語及之即危言、國有道即順命、無道即衡命、以此三世顯名於諸侯、

引類

詩人玉屑卷一白石詩説云、守法度曰詩、載始末曰引、○文體明辨云、按唐以前文章未有名引者、漢班固雖作典引、然實爲符命之文、如雜著命題各用己意耳、非以引爲文之一體也、唐以後始有此體、大略如序而稍爲短簡、蓋序之濫觴也、若其名引之義難妄臆説、俟博聞、

○丹青引

曹覇曹操之後事唐玄宗爲大將軍、因罪削籍、公作引以贈之

本集十一載之、作丹青引贈曹將軍覇、丹青は繪を云、丹青の彩を布て物色を寫すを以て繪を丹青と云、晉書顧愷之傳尤善丹青、圖寫特妙、文選吳都賦、丹青圖其象、注削籍官爵を奪て、籍に記したる姓名官爵を削り去也、古今注問答釋義曰、牛亨問籍者何也、答曰籍者一尺二寸竹牒、記人之年名字物色懸之宮門、案省相應乃得入也、曹覇は唐玄宗の末年罪を得て官籍を削られ庶人となる、

杜子美

將軍魏武之子孫、於今爲庶爲清門、英雄割據雖已矣、昔漢祚衰微曹操括據河北之地

耕隴畝、好爲梁父吟、身長八尺每自比管仲樂毅、時人莫之許也、惟潁川徐庶與崔州平謂爲信然、先主在荊州訪士於襄陽司馬徽、徽曰識時務者在乎俊傑、此間自有伏龍鳳雛、先生問爲誰曰、諸葛孔明龐士元也、徐庶亦謂先主曰、諸葛孔明臥龍也、將軍豈願見之乎、先主曰君與俱來、庶曰此人可就見不可屈致也、將軍宜枉駕顧之、先主由是詣亮、凡三往乃見、既見因屏人語曰、漢室傾頽奸人竊命、孤不度德量力欲信大義於天下、君謂計將安出、亮答曰云云、先主於是與亮情好日密、關羽張飛不悅、先主解之曰、孤之有孔明猶魚之有水也、願諸君勿復言、羽飛乃止、建安十六年亮與先主共圍成都、成都平亮爲軍師將軍、署左將軍府事、先主外出亮常鎭守足兵食、建安二十六年先主卽帝位、以亮爲丞相、章武三年春先主在永安宮病篤、召亮屬以後事、曰君才十倍曹丕、必能定大事、若嗣子可輔輔之、如其不才君可自取、亮涕泣曰、臣敢不竭股肱之力效忠貞之節、繼之以死、先主勅後主曰、汝與丞相從事事之如父、後主建興元年封亮武鄉侯、開府治事、頃之又領益州牧、二年春亮率衆討雍闓等、秋七月亮至南中、所在戰捷、由越巂入斬雍闓高定、南中平、十一年春亮悉大衆由斜谷出、以流馬運、據武功五丈原與司馬懿對於渭南、尅日交戰、懿使人視亮、獨乘素輿葛巾毛扇指揮三軍隨其進止、懿歎曰、諸葛君可謂名士矣、亮每患糧不繼使己志不伸、是以分兵屯田爲久住之基、耕者雜於渭濱居民之間、而百姓安堵、相持百數日、其年八月亮病卒於軍、年五十四、

步出齊城門、遙望蕩陰里、里中有三墳、纍々正相似、（纍）力追反、

【步出—】步行して齊の城門を出て、遙に蕩陰里を望み見れば、其里中に三つの墳あり、其三墳の形纍々として正に相似たり、【纍々】は聯絡貌、禮記樂記篇纍々乎端如貫珠、

問是誰家塚、田疆古冶氏、云是田疆古冶氏之墓也

力能排南山、文能絕地理、一朝被讒言、二桃殺三士、因二桃實三士自刎、

誰能爲此謀、相國齊晏子、（相）去聲○因下是相國齊晏子嬰也、

○大明一統志、靑州府臨淄縣三士墓在臨淄縣治南、齊公孫捷、田開疆、古冶子事齊景公、勇而無禮、晏子言於公、饋之二桃、令計功而食、公孫捷田開疆各言其功不及古冶子、而食桃乃自刎死、古冶子亦刎死、諸葛亮梁甫吟、歩出齊東門、遙望蕩陰里、里中有三墳、纍々正相似、借問誰家墳、田疆古冶子、力能排南山、文能絶地紀、一朝被讒言、二桃殺三士、誰能爲此謀、相國齊晏子、此集に所載と、樂府解題及び一統志に所引皆有異同、孔明の全集を見ざれは就て正すべきなし、又梁甫吟と號する名義未詳、姚寛西溪叢語卷上曰、樂府解題有梁父吟、蜀志諸葛亮傳云、亮躬耕隴畝、好爲梁父吟、藝文類聚吟門云、蜀志諸葛亮梁父吟云、歩出齊城門、遙望蕩陰里、里中有三墳、纍々正相似、問是誰家冢、田疆古冶子、力能排南山、文能絶地紀、一朝被讒言、二桃殺三士、誰能爲此謀、相國齊晏子、又靑州圖經臨淄縣冢墓門云、三士冢在縣南一里、三墳周圍一里、高二丈六尺、張朏齊記云、是烈士公孫捷、田開强、古冶子三士冢、所謂二桃殺三士者、唐褚亮梁父吟曰、歩出齊城門、遙望蕩陰里、里内有三墳、纍々皆相似、借問誰家冢、田强古冶子、李白有梁父吟一篇云、力排南山三壯士、齊相殺之費二桃、杜甫李邕登歴下亭云、不阻蓬蓽興、得兼梁父吟、又登樓詩云、可憐後主還祠廟、日暮聊爲梁父吟、陸士衡擬今日良燕會云、徐偉梁父吟、李善注云、蔡邕琴頌曰、梁父悲吟不知名爲梁父吟何義、張衡四愁詩云、欲往從之梁父難、注云泰山東岳也、君有德則封此山、願輔佐君王致於有德、而爲小人讒邪之所阻、梁父泰山下小山名、諸葛好爲梁父吟、恐取此意、【題注】齊景公有勇士】晏氏春秋曰、公孫捷田開疆古冶子勇而無禮、晏言於公、饋之二桃曰、三子計功而可以食之、公孫捷曰、吾持楯而再搏乳虎、可以食桃、田開疆曰、吾杖兵而禦三軍者再、可以食桃、古冶子曰、吾嘗從君濟河、黿銜右驂以入底柱之流、治行水底、逆流百歩、順流九里、得黿而殺之、左牽馬尾、右挈黿頭、鶴躍而出、可以食桃矣、二子曰、吾勇不若子、功不逮子、取桃不讓是貪也、然不死無勇也、皆反其桃、契領而死、古冶子曰二子死之吾獨生不仁、亦契領而死、

諸葛孔明

蜀志卷五、諸葛亮字孔明瑯琊人、漢諸葛豐之後、亮躬

否、況衆人乎、下邽翟公有レ言、始翟公爲二廷尉一賓客闐レ門、及レ廢門外可レ設二雀羅一、翟公復爲二廷尉一賓客欲レ往、翟公乃大署二其門一曰、一死一生乃知二交情一、一貧一富乃知二交態一、一貴一賤交情乃見、汲鄭亦云悲矣、此句には門に署するの事を取に非ず、雀羅の事を用るまで也、言ろは翟廷尉の罷らるゝ時に、門前に雀を捕る羅を張とは史にも見えたり、百舌を羅すべしと云ことはなければ、廷尉の羅にも自ら關ることなし、【潘郎―】潘岳が射雉の賦にも、彈を挾て雉を射るとこそあれ、百舌をねらふて彈せんと云に情なし、故に網羅彈丸の憂なく花間に遊ぶことを得也、此亦讒佞の人君の傍に在れども、御史廷尉も罰を行ひ得ざるに比す、[注]文選九潘岳射雉賦也、彈は彈丸也、機を設け鳥をねらふて、丸を發て射取るの器也、

天生二羽族一爾何徵、舌端萬變乘二春輝一、南方朱鳥一朝見、夏至則反舌无聲、索寞無レ言蒿下飛、

【天生―】羽族は鳥の類を總て云ふ也、天の羽族を生ずる品類甚だ多き中に、爾ち百舌の爲レ生こと何ぞ鄙徵なるや、舌端を千萬に變じ、口舌を弄して人を娛ましめ、春陽の暖輝に乘じて鳴て已むことなし、【南方朱鳥】夏節の至を云、淮南子天文訓云、南方火也、其帝炎帝其佐朱明、其神爲二熒惑一、其獸朱鳥、注朱鳥朱雀也、氣候推し移りて春も過き夏に至り、朱雀の時を司る日に於ては、索寞として舌を弄することを不レ得、默して言を出すことなく、花間にも遊び不レ得して、蒿の下に羽をひそめて飛ぶと也、小人讒佞の輩暗昏の君を得ては諂諛して幸を得、權位に居れども、賢明の君一たび出れば逐ひ斥けられ、跼蹐して凡下に處するを比喩する也、

○梁甫吟

齊景公有二勇士陳開疆、顧冶子、公孫捷三人一、晏嬰曰大王摘二三桃一自食二其一一、各令下說二功高者一賜中一顆上、陳顧二人食レ之、公孫自刎、而陳顧懷レ慚亦從而刎焉、諸葛孔明步二齊城一而見二三墳一、作二是吟一以嘆レ之、

藝文類聚卷十九吟部載二之一、梁父吟は諸葛孔明齊の三士の功あつて辜なきに、讒せられて死することを歎て作れる也、嚴羽卿滄浪詩話考證篇云、諸葛孔明梁甫吟、步出二齊城門一、遙望二蕩陰里一、樂府解題作二遙望陰陽里一、今青州有二陰陽里一、田疆古冶子解題作二田強固野子一、

宛轉も皆鳥の聲の能く諧和して、鳴く音おもしろきを云也、色々の聲のあやをなして鳴は、只人を娯ましめ悦ばすることをなすに似たる也、【一心―】凡その生物皆一心也、百舌も心豈二つあらんや、何ぞ一心にして如此に百舌の囀づりをなして、紛々と多き音韻を兼得て鳴ことをするやと也、

酡顔俠-少停レ歌聽、墮珥妖-姬和レ睡聞、論二讒佞辨口一、易レ賛惑レ人、可レ憐光景何時盡、誰能低-回避二鷹隼一、

酡顔韻會酡飲而赭色著レ面、廣韻、飲レ酒朱顔貌、【俠少】游俠少年也、史記裴駰序、序二游俠一、索隱游俠謂レ輕レ死重レ氣、游從也、俠持也、挾也、言能相從遊行挾持之事、酒に醉て顔色紅なる游俠の、をのこだてをする少年、春に遊ぶ人は、歌を停て此鳥の囀を聽て娯とす、【墮珥】婦女酒に醉て容儀整らず、しどけなく裝飾亂れ、珥を墮して地に在れども不レ理を云也、墮珥妖姬は宴樂する美人と云義也、史記滑稽傳淳于髡曰、若乃州閭之會、男女雜坐行レ酒稽留、六博投壺相引爲レ曹、握レ手無レ罰、目胎不レ禁、前有二墮珥一、後有二遺簪一、髡竊樂レ此飲可二八斗一而醉二一參一、宴樂筵上の美人は春晝の睡に和して、百舌の鳴を悅聞也、【可憐―】憐み愛すべき春日の光景に誇ること、何の時かつくることあらんや、誰か能く爲めに低回して高く擧らざらしめて、常に花間に在て鷹隼鷙擊の慮なからしむるやと也、此れ又讒佞の人寵を竊て君の側に在て、御史廷尉の官も罪に抵すことを不レ得に比して云也、

廷尉張レ羅自不レ關、漢翟方進爲二廷尉一、賓客塡レ門、及レ廢門外可レ設二雀羅一、後復爲二廷尉一、客欲レ往、大書二其門一曰、一死一生乃知二交情一、一貧一富乃知二交態一、一貴一賤交情乃見、潘郎挾レ彈無レ情損、

【廷尉】官の名、翟方進廷尉の官となる、故に官を以て稱す、廷尉官は注第三卷鼠鬚筆の詩に見えたり、前漢書列傳五十四、翟方進字子威、汝南上蔡人也、注翟方進と云甚だ非也、此事は史記鄭當時が傳の賛語也、翟方進は前漢の末の人也、王莽が爲に殺さる、太史公が言ふ翟公に非ず、史記列傳六十、汲黯鄭當時傳賛云、太史公曰、夫以二汲鄭之賢一有レ勢則賓客十倍、無レ勢則

舌の能調て、ころ〳〵と展轉して囀るを云也、後漢書列傳六十荀彧傳論、荀君乃越河冀間關以從曹氏注間關猶展轉也、【花枝—】春の時節なれば、花枝相錯雜して紅白空に滿れば、何の枝に止るべきやと處所に迷て、こなたかなたへ飛度る也、【搖動—】樹間に飛鳴して、羽風を以て繁く開たる英を搖動して、紅の雨の如く散し墜す也、紅雨は落花を云也、花の散る貌雨の如くにして紅なる故に紅雨と云、

笙簧百囀音韻多、黃鸝呑聲燕無語、東方朝日遲々升、迎風弄影如自驚、

笙簧事物紀原ニ云、禮記明堂位曰、女媧之笙簧、簧笙中之簧也、世本曰女媧作笙簧、高氏小史亦云、曹植女媧贊曰、造簧作笙、字彙簧音黃、笙竽管中金葉也、蓋笙竽皆以竹管植於匏中而竅其管底之側以薄金葉障之、吹則鼓之而出聲、所謂簧也、故笙竽皆謂之簧笙十三簧、或十九簧、竽十六簧也、笙簧を吹て曲調をなす如く、百囀の音韻を變じて鳴聲多き也、【黃鸝—】百舌百囀して聲を弄するに因て、黃鸝も鳴き負けて聲を揚げ不得、聲を呑て憂悶し、好音を出すことなし、燕子の呢喃と鳴て檐に語るも、百舌の音韻多きに驚て、口を箝て語を出し不得也、【呑聲】江文通恨賦、莫不飮恨而呑聲、【東方朝日】詩齊風東方之日兮、豳風七月篇春日遲々、東方より朝日既に出て、ゆる〳〵と空に升り、春陽の氣和暢して園中暖なり、此に及て百舌風を迎て己れが影を弄して、忽自ら驚起するが如くなる狀ある也、

數聲不盡又飛去、何許相逢綠楊路、綿蠻宛轉似娛人、一心百舌何紛紜、

【數聲—】花間に在て鳴くこと數聲、猶鳴き不盡して、又飛て他に遷り去也、【何許—】既に去て何れの所に於てか又相逢ふや、彼綠楊の垂れ蔽ひたる路頭に於て、鳴に遇ふて又聞也、【綿蠻】詩小雅綿蠻黃鳥、朱注云綿蠻鳥聲、【宛轉】隋煬帝詩、淸歌宛轉繁絃促、王子淵洞簫賦、垂喙宛轉、注宛轉盤旋也、善曰蜿轉動貌、綿蠻も

の憂胡に不レ在して、禍蕭墻の內より起て、趙高が爲に殺されたり、子嬰立て位に卽けども、秦王と號して皇帝と稱せず、立て僅に四十六日にして漢に降るときは、秦は實に胡亥に滅びたり、渭水の北咸陽の都城、項羽に焚れて呂氏復た都する者なし、【注】【詠史詩】詩格十二胡曾が詩、此れ胡曾が詩を引て此句を解く、王翰が詩の所據を證するには非ず、

○百舌吟

此篇譏ニ辨口讒佞之人一、杜甫詩云、百舌來ニ何處一、重々祗報レ春、王直方詩話山谷云、余讀ニ周書月令一、反舌有レ聲、讒人在レ側、杜故云、過レ時如發レ口、君側有ニ讒人一、

唐文粹十七載之、【百舌】藝文類聚卷九十二、鳥部反舌、禮記曰、仲夏之月反舌無レ聲、易緯通卦曰、百舌者反舌鳥、能反ニ覆其口一隨ニ百鳥之音一、梁蕭子暉反舌賦曰、彼陶嘉之盛月、氣依ニ遲於池詔一、春ニ霏々之花落一、愛ニ翹々之令鳥一、無ニ榮辱之可一レ因、弄ニ樞機而自表一、爾其聲也嘹唳甯結鬱抑縈咽、繁音瑣碎衆響攢蹙、或急囀赴レ機、或緩引趨レ節、或洪纖共起、或長短俱折、意疑續而更斷、謂レ當レ擧而忽垂、聲憑ニ林而逾厲一、響因ニ風而益危一、此篇は【注】に辨口あつて是非を亂り、人主の聽を誤て讒佞をなす者を譏て作れる也、【杜甫詩】全集十百舌吟云、百舌來ニ何處一、重々祗報レ春、知レ音兼ニ衆音一、整ニ翮豈多身一、花密藏難レ見、枝高聽轉新、過レ時如發レ口、君側有ニ讒人一、杜公の詩も百舌を以て讒人に比せるなりと、此詩の比なることを證する也、【王直方詩話】杜詩百舌吟の後に附錄す、山谷曰、余讀ニ周書月令一云、反舌有レ聲佞人在レ側、乃解ニ老杜百舌吟過レ時如發レ口、君側有ニ讒人一之句一、鮑曰、周書月令乃周公時訓也、云芒種之日螳螂生、又五日鵙始鳴、又五日反舌無レ聲、是謂ニ陰息一、反舌有レ聲佞人在レ側、杜公の時を過てと云へるは、芒種の節後十日を過て以後也、

劉禹錫

曉星寥落春雲低、初聞百舌間關、花枝滿レ空迷ニ處所一、搖ニ動繁英一墜ニ紅雨一、

曉星寥落 曉がた天將にあけんとする時、星の光微々として點々僅に殘る貌を云、【春雲低】あけがたに微雲空に橫て低れ蔽ひ、天色猶くらき也、【初聞―】此時に始て百舌の鳴て、聲の間關たるを聞也、【間關】は鳥

郡を廣め、徭役を興して、匈奴を逐ひ斥けたること九千里に及ぶ也、史記秦紀始皇三十三年、西北斥逐匈奴、自楡中並河以東屬之陰山、以爲三十四縣、城河上爲塞、又使蒙恬渡河取高門陶山北假中、築亭障以逐戎人、徙謫實之初縣、

秦王築城何太愚、天實亡秦非北胡、（秦皇得讖書曰、亡秦者胡、秦乃使蒙恬北築長城以防胡不知亡秦者乃太子胡亥、）**一朝禍起蕭墻內、**（詠史詩不知禍起蕭墻內、虛築防胡萬里城、）**渭水咸陽不復都、**（秦都咸陽、項羽入秦燒咸陽宮室、三月火不滅、秦不復再都咸陽矣、）

【秦王―】秦王の長城を築かれしこと、何ぞ太だ愚蒙なるや、秦の暴虐無道天より實に亡滅す、豈に北方の胡奴にあらんや、膝下に育する嗣子胡亥こそ、秦を亡す者は胡也と云讖文に應じたり、然るに遠く求て北胡を伐て、內に顧ることを不知、何ぞ愚の太しきや、史記秦紀、始皇三十二年巡北邊從上郡入、燕人盧生使入海、還以鬼神事因奏錄圖書曰、亡秦者胡也、始皇乃使將軍蒙恬發兵三十萬人北擊胡、注鄭玄曰、胡胡亥秦二世名也、秦見圖書不知此爲人名、反備北胡、注【得讖書】燕人盧生が圖書を云也、【讖】は音參去聲符讖、說文驗也、凡讖緯皆言將來之驗也、俗に云ふ未來記也、【太子胡亥】秦始皇の太子は扶蘇也、嘗て始皇を諫るに因て、旨に忤て出て、蒙恬が軍を監す、始皇沙丘にて崩ずる時、璽書を爲て扶蘇に位を繼かしむ、既に崩ずるの後、趙高其璽書を扶蘇に上らず、詐て遺詔を爲て公子胡亥を位に卽しめ、扶蘇をば遺詔に矯て自殺せしむ、胡亥位に卽て二世皇帝と號す、益〻督責の政を行て、暴虐を極て遂に趙高に弑せられ、秦の天下を亡せり、此れ秦を亡す者は實に胡亥也、【一朝―】趙高俄に二世を殺することを云、【蕭墻】字彙蕭墻門屛也、又爾雅翼、周人炳蕭使臭氣達於牆屋、故曰蕭墻、釋名蕭墻在門內、蕭肅也、將入於此自肅敬之處也、此句論語季氏篇、吾恐季孫之憂不在顓臾、而在蕭墻之內也、と云に本づく、蕭墻の內とは俗に足下よりして起ると云義也、二世の三年に天下皆秦に畔て盜賊大に起り、沛公の兵已に武關を屠る、趙高心に二世の怒て誅己れが身に及んことを恐て、趙高が壻閻樂と謀て、二世を易へ置て公子嬰を立んとして、吏卒千餘人を將て、望夷宮に入て二世を弑す、此れ秦

の代の人ぞや、耆老は云ふ、是こそ秦王の長城を築かれたる時に役せられたる丁卒の此に死して骸骨を暴せる者なりと答る也、

黄昏塞北無人煙、鬼哭啾々聲沸天、無罪見誅功不賞、孤魂流落此城邊、

【黄昏】日落て後暮れかたを云、楚辭離騷曰黄昏以爲期兮、【塞北】字彙塞邊界也、日暝れ風悲き黄昏の時に至り、塞邊の北人迹絶て烟を揚ることなし、【鬼哭】幽鬼寃魂、昏冥の陰氣に乘じて聚て哭泣する也、淮南子蒼頡造書而天雨粟鬼夜哭、【啾々】九歌猿啾々兮又夜鳴、注啾々小聲也、楊雄羽獵賦善注、啾々衆聲也、鬼の哭する聲虚空に聞えて所處なし、何れの處ともなく啾々と聞えて多し、故に沸天と云、【無罪―】秦の虐政罪のなき者も誅せられ、功ある者も亦賞する事なし、唯如此なるが故に多く人民を謫し遣て、命を邊境に失しむ、士卒の死する者孤魂還ることを不得して、此長城の邊に流落し、今に至て寃哭する也、

當昔秦王按劍起、諸侯膝行不敢視、（史始皇紀既幷六國威震諸侯來朝者皆膝行不敢仰視）**富國強兵二十年、築怨興徭九千里、**

【當昔―】按は據也、撫也、とりしばると讀む、史記平原君傳、毛遂按劍而前謂楚王曰、王之所以叱遂者以楚國之衆也、今十歩之内王不得恃楚國之衆也、王之命縣於遂手、當昔秦王劍を按して威武を盛にし、秦中より起て天下を幷呑せし時に當て也、【諸侯膝行】天下の諸侯皆秦を懼て、強き國は伏せんと請ひ、弱國は入て朝す、秦王を畏て敢て仰き視る者なく、膝行して前て自ら臣と稱せり、【富國―】天下の諸侯を亡して、其國の財貨を斂め納れて自國を富し、天下の利器を收て兵を強し、四海を嚢括すること二十年に及べり、二十年は大略を云、年數に拘る べからず、始皇立て秦王となりてより、天下を併せ稱號を改るまで二十六年、皇帝と號してより沙丘に崩ずるまで十二年也、總て三十七年也【築怨興―】天下の諸侯を併せ有て、猶あきたらず、又天下人民の怨を築き積て邊

鳴し鼓を撃て、大地を震動させて推し來ると云、又傳に道ふを聞けば、單于も猶士卒を不休戰攻ると也、【單于】匈奴の天子也、史記匈奴傳云、匈奴單于曰頭曼、注漢書音義曰、單于者廣大之貌、言其象天單于然、索隱曰、案單于姓攣鞮氏其國稱之曰撑黎孤塗單于、而匈奴謂天爲撑黎、謂子爲孤塗、單于者廣大之貌也、言其象天、故曰撑黎孤塗單于、又玄晏春秋云、士安讀漢書不詳此言、有胡奴在側言之曰、此胡所謂天子也、與古書所說符會也、

此時顧恩寧顧身、爲君一行摧萬人、壯士揮戈回白日、(昔魯陽公與韓戰、日暮援戈而揮之、日爲反三舍、)單于濺血汙朱輪、

【此時―】鐘鼓地に震て敵の前に來る時は、唯君恩の渥きを顧て、一たび報之ことを思ふ、寧ろ身の存亡を顧るに暇あらんや、直に身を抽て君が爲に一たび行て萬人の敵を摧き敗也、【壯士】荊軻歌、壯士一去兮不復還、【揮戈】回白日、淮南子覽冥訓云、魯陽公與韓構難、戰酣日暮、援戈撝之、日爲之退三舍、注魯陽楚之縣公、撝揮也、揮日令反却行三舍、舍次宿也、增韻舍三十五里爲一舍、【白日】宋玉九辨、去白日之昭々兮襲長夜之悠々、壯士は酣戰して日の暮るを惜み、戈を援てさしまねき回すほど力を盡して攻め戰也、【單于】匈奴の單于は苦戰して兵刄血を濺ぎ、朱飾の車輪を汙して痛く爭ふ也、前漢書薛廣德傳云、廣德當乘輿車、免冠頓首曰云云、陛下不聽臣、臣自刎以血汙車輪、又劉向傳乘朱輪華轂者二十二人、

回來飮馬長城窟、長城道傍多白骨、(詩游客長城下、飮馬長城窟、馬嘶聞水腥、爲浸征人骨、)問之耆老何代人、云是秦王築城卒、

【回來―】文選樂府飮馬長城窟行、注善曰、酈善水經曰、余至長城、其下往々有泉窟可飮馬、古詩飮馬長城窟行信不虛也、銑曰長城秦所築以備胡者、其下有泉窟、可以飮馬、征人路出於此而傷悲矣、戰場より回り來て、長城の泉窟に馬を牽て水を飮ふ、長城の道の傍を見れば、白骨の暴露して不收者多し、これを耆老の人に問ふ、如此骨を沙礫に暴せる者は何れ

【長安―】長安豪俠の少年は、輕薄にして遠き慮りの圖あることとなし、一生の間惟任俠を重して、執金吾の職となり、棒を揮て人をおどし、姦猾を擒へ討つことをせばやと羨み望む也、前漢書百官表云、中尉秦官、掌徼循京師、武帝太初元年更名執金吾、注師古曰、金吾鳥名也、主辟不祥、天子出行職主先導以禦非常、故執此鳥之象、因以名官、後漢書二十七百官志、執金吾一人中二千石、本注曰、掌宮外戒司非常水火之事、月三繞行宮外、及主兵器、吾猶禦也、注胡廣曰、衞尉巡行宮中、則金吾徼於外、相爲表裏、以擒姦討猾、應劭曰、執金革以禦非常、○古今注卷上輿服第一云、輿輻棒也、漢朝執金吾、金吾亦棒也、以銅爲之、黃金塗兩末、謂爲金吾、御史大夫司隷校尉亦得執焉、御史校尉郡守都尉縣長之類皆以木爲吾焉、用以夾車、故謂之車輻、一曰形似輻故謂之車輻、○後漢書十皇后紀云、光烈陰皇后諱麗華、初光武適新野、聞后美心悅之、後至長安見執金吾車騎甚盛、因歎曰、仕官當作執金吾、娶妻當得陰麗華、【執金吾】執金吾は雜職也、導從の盛嚴なること光焰道路に滿つ、群僚の中最も雄壯なり、故に豪俠の少年此職とならんことを羨む也、【麒麟殿】三輔黃圖卷三云、麒麟殿未央宮有麒麟殿、漢書哀帝燕董賢父子於麒麟殿、言は長安の少年勇强を恃て、もとより執金吾とならんことを冀ふ者なれば、進て麒麟殿に詣て天子を拜し、詔旨を受て馬を走らして、君が爲に軍に從て、西の方に出て胡國を擊也、胡は匈奴也、

胡沙獵々吹人面、漢虜相逢不相見、遙聞鐘鼓動地來、傳道單于夜猶戰、

【胡沙】胡地廣漠にて皆沙也、胡を沙漠の地と云、李陵別蘇武歌、徑萬里兮度沙漠、爲君將兮奮匈奴、唐李華が弔古戰場文に、浩々乎平沙無垠、夐不見人と云も胡沙を云也、【獵々】韻會獵々風聲也、胡沙の地風獵々とはげしく沙を揚て、人の面を吹く也、【漢虜】漢は漢の士卒也、虜は胡賊也、字彙北狄曰虜、以其習尙虜掠也、朔風沙を吹き揚て昏蔽するほどに、漢の士卒胡の賊と行て相逢へども、面を相見認がたき也、【遙聞―】遙に胡に備ふるの軍勢に傳へ聞けば、鐘を

【長城】史記秦始皇本紀始皇三十四年、適治獄吏不直者築長城及南越地、又列傳二十八、蒙恬始皇二十六年爲秦將、秦已幷天下乃使蒙恬將三十萬衆北逐戎狄、收河南築長城、因地形用險制塞、起臨洮至遼東延袤萬餘里、於是渡河據陽山逶蛇而北、暴師於外十餘年、○大明一統志、臨洮府長城在府城北、史記秦始皇遣蒙恬發兵三十萬北築長城起自臨洮即此、此詩長城を詠じて、邊境を闢き士卒を外に苦しむることを譏、首めに漢を云て次に秦を云、漢の邊を伐つヿ亦良圖に非ず、然ども其端を啓き始を造す者は秦也、秦の怨を匈奴に種るヿ根深し、故に禍漢に逮て益ゝ大也、故に此詩專ら秦を譏て漢を譏らずと云へども、漢の失計も亦秦に異なるヿなし、唯長城は秦の所築なるが爲に、專ら秦を譏也、注【秦知匈—】左方詩の注に見えたり、【築怨長城】士卒を歐て城を築かせ、天下の民怨をなすときは、城の長大なるは實に怨の大さをかたどる表也、故に築怨長城と云、怨を築て長城とするの意也、【塹山湮谷】山を塹り谷を湮て路を通ずる也、始皇本紀三十五年、除道道九原抵雲陽、塹山湮谷直通之、【變起蕭墻】注詩の下に詳也、

【二世失鹿】二世帝位を失を云、鹿と祿と音同し、故に天祿を失に比喩す、史記韓信傳蒯通曰、秦失其鹿天下共逐之、於是高材疾足者先得焉、注張晏曰以鹿喩帝位也、【宜哉】尤さもあるべきことゝ云意、中秦之膏肓、詩に云ふ所能く秦の病所に中りたると也、膏肓は病の藏れ處也、罪を論じて能く適當し、遁れなきを膏肓に中ると云也、事は左傳成公十年に見えたり、

王翰

新唐書列傳一百二十七、王翰字子羽、幷州晉陽人、少豪健恃才、及進士第、張說至禮、方說輔政故召爲祕書正字、擢通事舍人駕部員外郎、後出爲汝州長史、日與才子豪俠飲樂、○大明一統志、長城の下に此詩を引て宋の王翰が作れる詩と云、宋にも王翰あるか、未考、或一統志誤りたるか、

長安少年無遠圖、一生惟羨執金吾、（金吾漢官名、吾杖也、以金飾其末）麒麟殿前拜天子、走馬爲君西擊胡、

黒犢以還、唯劉裕及毅在後、毅次擲得雉、大喜褰衣繞牀叫、謂同座曰、非不能盧、不事此耳、裕惡之、因援五木久之曰、老兄試爲卿答、既而四子俱黑、其一子轉躍未定、裕厲聲喝之、即成盧、毅意殊不快也、又慕容寶與韓黃李根等樗蒲、誓之曰、世云樗蒲有神、若富貴可期、願得三盧、於是三擲盡盧、祖跣大叫、言は劉裕劉毅は皆一世の英雄なれども、時あつて博塞の遊をなして歡娛したり、今夕各々邂逅して相聚るとき、博塞して歲を守ること豈に良き圖に非ずやとなり、邂逅は相遇也、出于詩經綢繆篇、

君莫笑劉毅從來布衣願、家無儋石輸百萬、南史劉毅家無儋石之儲、樗蒲一擲百萬、應劭曰、齊人名小甖爲儋石、容二斛、〇詩意謂、人不可無志、劉毅家無儋石、一擲百萬、其志已見於窮困時、及擧大事、故無不如志也、

【君莫―】從來はもとより也、布衣願は未官祿を不得庶人にて處る時の志願也、布衣は賤者の服也、史記列傳二十七李斯曰、今秦王欲吞天下、稱帝而治、此布衣馳騖之時而遊說者之秋也、【家無儋石】史記九十二、淮陰侯韓信傳、蒯通曰、守儋石之祿者、闕卿相之位、注晉灼曰、楊雄方言、海岱之間名甖爲儋、石斗石也、蘇林曰、齊人名小甖爲儋石、如今受鮐魚石甖、不過一二石耳、一說一儋與一斛之餘、索隱云、儋音都濫反、石斗也、蘇林解爲得、本注洙曰、南史桓玄聞劉毅起兵曰、毅家無儋石之儲、樗蒲一擲百萬、共擧大事、何謂無成、言は博塞は人の賤所なれども君笑ふこと無るべし、劉毅は從來布衣の士也、家に儋石の餘儲なけれども、博塞一擲に百萬錢を賭にす、其志の大なること可見、遂に大事を擧て聲名大に著る、人若し大志あつて凡人の情を抽ては、相逢の間博塞して娛むとも、何の賤み笑ふことかあらんやと也、

吟類

詩人玉屑一、白石詩說云、守法度曰詩、載始末曰引、放情曰歌、悲如蛩螿曰吟、〇文選會吟行注、銑曰、吟猶詠也、

○古長城吟

秦知匈奴之爲胡、而不知子胡亥爲胡、築怨長城、斬山湮谷、一旦變起蕭牆、二世失鹿宜哉、王翰作此、譏秦皇之愚、眞中秦之膏肓也、

【今夕何夕】詩唐風綢繆篇、今夕何夕、見此良人、此夕はいかなる夕ぞや、一歳の日月云に逝き徂て除夕に至る也、【更長—】漏水遲く滴て更點長く、數點燭を燒て光明なり、此の夜徒に孤負すべからず、時に及て遊べしと也、【咸陽】即長安也、注前に出、長安の客舍の裏一事も爲ことなく閒暇也、故に相與に博塞の戲をなして歡娛をなす也、【博塞】事文類聚前集四十三云、說文云行棊相塞謂之簺、鮑宏簺經曰、簺有四采、塞四乘五是也、至五即格不得行、故謂之格五、說文博局戲、六箸十二棊、尹文子曰、博盡關塞之宜、得周通之路、事物紀原九云、事始烏曹始置博陸之戲、聲譜曰博陸采名也、孔子曰不有博奕者乎、莊子博塞以遊、博塞は日本の雙六の類にて雙六に非ず、三才圖繪、萬寶全書玩賞編等に盤の圖棊子の使ひやう詳に見えたり考へ見べし、【爲歡娛】文選張景陽詠史詩、昔在西京時、朝野多歡娛、などさみをなす也、

馮陵大叫呼五白、五白即今之骰子、蓋古人用六隻骰、今人亦然、

袒跣不肯成梟盧、韓非子匡倩對齊宣王曰、博者貴梟、○慕容寶與韓黃李根等樗蒲、寶危坐誓之曰、世言樗蒲有神、若富貴可期頻得三盧、於是三擲盡盧、袒跣大叫也、○說文梟勝也、盧勝之名也、英雄有時亦如此、邂逅豈即非良圖、

【馮陵—】意氣を張て馮り陵くを云、左傳襄公二十五年、介恃楚衆以馮陵我敝邑、【呼五白】注五白即今之骰子、采を五白と云、大に叫で采の好目を呼擲也、本集注洙曰、宋玉招魂成梟而牟、呼五白、注云五白博齒也、梟勝也、牟倍勝也、謂倍勝呼骰子數也、注【骰子】樗蒲の采也、字彙骰音頭、骰子博陸采具、事文類聚前集、博陸采名也、陳思王製雙陸局、置骰子二、至唐末有葉子之戲、未知誰置、遂加骰子至六、骰合作投、投擲之義今作骰非、袒跣袒ははだぬく也、跣は履を不穿すあし也、【梟盧】共に采の目名也、采に十二の名あり、樗蒲經云、梟犢雉盧開塞進退獺黑黶鷄是也、袒跣して大に呼ても梟盧を成し得ざりし也、【英雄—】英雄は劉毅等を指す、上の句暗に劉毅慕容寶等が事を用ゆ、故に英雄と云て彼輩を指す也、本注洙曰、宋劉毅於東府聚樗蒲、大擲一判應至數百萬、餘人並

隔絶して不通、豈今の時は晉の世なることを料り知んやと也、漁人の山中に到し時は晉の大元年中也、秦の末よりは六百年の後也、注太康年中と云は非也、淵明桃花源記從べし、

聞道長安吹戰塵、東風回首亦沾巾、重華一去寧復得、書舜典重華協于帝、**天下紛々經幾秦、**謂後世不復見堯舜之治、天下紛々擾々經歷幾代如亡秦之亂世

【聞道―】聞ならくと讀む、人の道ふを聞くと云義也、【長安―】は漢の都の名也、文選西都賦、漢之西都在於雍州、寔曰長安、注漢稱長安、言可長安子孫也、言は秦を亡して天下を有つ者は漢なりと云ふ、又聞けば其漢も亂れて、長安の都には戰塵を吹き揚げて亂擾し、劉氏も尋で亡びたると也、【東風―】此說話を聞て感慨し、東風に首を回して遙に想ひやりて、亦涙を垂れて巾を沾すと也、亦の字は秦の亡て漢となりたるを聞て既に涙を墮す、其漢も亦亡たりと云を聞て、益〻感傷す、故に亦沾巾と云也、【重華】は帝舜の號也、書經舜典云、曰稽古帝舜、曰重華協于帝、古の聖人舜帝一たび崩し去てより後、至治の聖代寧ろ復た逢ふことを得んや、【天下―】天下亂を以て亂に繼ぎ紛々と多く擾々と亂るゝこと、幾ばく秦政をか經るや、彼是總て亂に終ふ、固に深く感慨するに堪たると也、紛々擾々とは西漢は王莽が爲に亡び、王莽亡て東漢復た興る、東漢又魏となり、魏亡て晉となり、西晉南に渡て東晉金陵に都す、太元は東晉の年號也、漢より此に至て所謂紛々擾々たる者也、

○今夕行　杜子美

全集一載之、起句の首の二字を取て篇に名く、交遊相過て、倶に與に博塞の戲をなして歡娯することを云、

今夕何夕歲云徂、詩今夕何夕、見此良人、○謂除夕也、**更長燭明不可孤、咸陽客舍一事無、相與博塞爲歡娛、**說文曰博塞行棊也、行棊子以相塞、即今格五棊也、

【辟世】論語微子篇桀溺曰、與ニ其從ニ辟レ人之士ニ也、豈若レ從ニ辟レ世之士ニ哉、【商山翁】四皓也、高士傳、四皓者河内軹人也、或在レ汲、一曰東園公、二曰角里先生、三曰綺里季、四曰夏黄公、皆修レ道潔レ己非レ義不レ動、秦始皇時見ニ秦政虐、乃退入ニ藍田山、作レ歌曰、莫々高山深谷逶迤、曄々紫芝可ニ以療ニ饑、唐虞世遠吾將何歸、駟馬高蓋其憂甚大、富貴而畏レ人不レ如ニ貧賤之肆ニ志、乃共入ニ商洛隱ニ地肺山ニ不レ仕レ秦、言は秦の政暴虐なるを見て、世を辟て迹を遁れたる者、獨り商山の四皓のみに非ず、亦桃源に隱て、桃を種ゑて居を占たる人もありたるぞと也、此句桃源の人神仙の種に非ず、實は秦人の隱たることを云へる也、

一來種レ桃不レ記レ春、采レ花食レ實枝爲レ薪、兒孫生長與レ世隔、知レ有ニ父子ニ無ニ君臣ニ、

【一來―】秦の虐政を辟て、此洞中に來て桃を種ゑて、其間に隱居してより以來は、暦日なければ幾許の春に遇ふやらん、曾て記し不得也、【采花―】春は其花を采り、實を結べばこれを食ひ、其枝を剪て薪とす、年々如此にして遂に居落を爲したり、【兒孫―】こゝに住してより以來、稍〻兒孫を生育し、洞中に生長して其外あることを不レ知、人世と永く隔り絶たる也、【知有―】爾來洞中の人皆父子あることは知れども、君と云ひ臣と云者あつて、上下の位異なることをば聞も及ぶことなき也、

漁郎放レ舟迷ニ遠近、花間忽見驚相問、世上空知古有レ秦、山中豈料今爲レ晉、　巳屬ニ晉太康年中ニ矣、

【漁郎―】武陵の人魚を捕て業とす、溪に緣て行たれば路の遠きを忘れ、所處に迷て還ることを不知、【花間―】獨強て進み入たれば、忽ち桃花の林岸を夾て茂きに逢たり、復た前み行て洞口に入て窺へば、洞中の人漁人を見て驚き怪て、其來由を問也、【世上―】漁人の時は秦を去ること遠し、故に世上の人皆聞傳て、古へ秦と云世の有りたると云ことを空く知たるばかり也、【山中―】山中の人昔日秦を辟て隱れしより、人間と

しと云に由て、誤て神仙とす、然れども記の中一字も神仙の事を不說、然則神仙には非ること明けし、韓退之既に神仙の說の妄なることを辨ず、荊公も亦妄說に不惑、淵明が記の本意を得たる者と謂べし、

王荊公

望夷宮中鹿爲馬、史記秦始皇紀、趙高欲爲亂、恐羣臣不聽、乃先設驗、持鹿獻於二世曰馬也、二世笑曰丞相誤耶、指鹿爲馬、問諸左右、或言或默、有言鹿者、高陰中之以法、秦人半死長城下、避世不獨商山翁、亦有桃源種桃者、

【望夷—】桃源の人の隱れしは秦の亂に由て也、秦の亡るは趙高專政、二世を欺て天下の怨を產めるを以て也、故に桃源の事を叙する首に、趙高が二世を欺くことを云は、其本を擧て事の由を言也、【望夷宮】秦本紀云、涇水爲祟、二世乃齋於望夷宮、注張安曰、望夷宮在長陵西北長平觀道東、故亭處是也、臨涇水作之以望北夷、正義曰括地志云、秦望夷宮在雍州咸陽縣東南八里、【鹿爲馬】注 史記二世本紀文也、秦二世三年趙高亂をなさんと謀て、李斯を案して竟に殺したり、それより專ら事を中ちに用ゆ、然れども竊に群臣の不聽して己に與することなからんかと恐て、先づ聽か不聽かの驗を設けて、試に鹿を持して二世に獻じて馬なりと云、二世笑て曰、丞相誤てるか、鹿をば馬なりと云は何ぞやと、趙高爭て曰これ馬也、左右の臣に問たまへと云、二世左右の人に問ふ、羣臣の中に默して是非を不言者あり、或は趙高に阿り順て馬なりと云もあり、或は實は鹿にてこそあれと正く言ふ者あり、其鹿なりと云し者は私に法律に中て殺せり、此れに因て羣臣高を畏て敢て言ふ者なし、趙高遂に吏卒千餘人を將て望夷宮の殿門に入て二世を殺せり、高二世の兄の子公子嬰を立て秦王とす、趙高又子嬰が爲に殺さる、子嬰立て四十六日にして漢に降て秦亡也、【秦人—】史記列傳二十八云、蒙恬者蒙武子、始皇二十六年蒙恬因家世得爲秦將、秦已幷天下、使蒙恬將三十萬衆、北逐戎狄、收河南、築長城、因地形用險制塞、起臨洮至遼東、延袤萬餘里、於是渡河據陽山、逶蛇而北、暴師於外十餘年、秦の人長城を築き邊を闢く役に苦て、死亡する者半に及ぶと也、

ずべしと也、【錙】說文六銖也、又八兩曰錙【銖】音殊按黃鍾一龠容千二百黍、重十二銖、錙と銖と共に權の微分也、故に相去ること幾ばくもなきを論錙銖と云也、

悲風颯々吹黃蘆、上有寒雀驚相呼、槎牙死樹鳴老烏、向之俛噣如哺雛、山墻野壁黃昏後、馮婦遙看亦下車、孟子晉人有馮婦者、善搏虎、有衆逐虎、望見馮婦、趨而迎之、馮婦攘臂下車、〔妥〕化果反、〔噣〕音晝、

【悲風—】虎の傍に艸木蕭索の景を點綴して寫したるを言ふ也、【悲風】十九首、遠望悲風至、對酒不能酬、【颯々】風の聲也、楚辭九歌、風颯々兮木蕭々、虎の據る所の地を見れば、悲風颯々とものすごく黃蘆を吹き荒す景色あり、其上に寒雀の風に驚て相呼て噪ぐあり、【槎牙】樹の葉落盡て枯幹のみ殘る貌を云、【死樹】枯樹也、怪枝剛幹のみ殘りて、槎牙たる枯樹の上に、老烏の鳴てとまれるすさまじき氣色あり、【向之俛噣】舊本作俛仰、詩人玉屑作俛噣、未得捨、本集、故に就て正す所なし、姑く玉屑に從作俛噣、噣字彙音晝鳥喙、史記楚世家射噣鳥於東海、噣を俛せて其雛に哺して食はしむる狀の如くなると也、【山墻】山中に居處を構へたる墻也、【野壁】野外の軍壘也、臨危謂之壁、山中の居落の墻の曲、野外軍壘の間にて、黃昏の時節に至て也、【馮婦】孟子盡心の下篇云、晉人有馮婦者善搏虎、卒爲善士、則之野、有衆逐虎、虎負嵎、莫之敢攖、望見馮婦趨而迎之、馮婦攘臂下車、衆皆悅之、馮婦遙に此虎圖を見たらば、眞の虎なりと思て搏にすべしと、臂を攘て亦車より下り來にてあらんぞと也、

○桃源行

古今詠桃源者多惑於神仙之說、荊公獨指爲避秦之人、

桃源の說、詳に第九卷韓退之桃源圖の詩の注見たり、注古今の人桃源を詠ずる者、多くは神仙の說に惑て長生不死の境とす、此荊公の行は、秦の亂を避て隱れたるの人として神仙の說なし、此れ事の正を得たる者也、○世の人多く神仙とすることは、淵明が桃源記に、太守人をして尋ねしむるに遂に迷て路を得ざり

也、劉伯倫酒德頌云、熟視不見泰山之形、【稍々】そろ〳〵と云の義也、前漢書韓信傳、胡騎稍々引去、熟ら〳〵目を留て能視れば、實は畫なる故に、心定て稍々近つき倚て、手を以て其鬚を摩して看と也、

固知畫者巧爲此、此物安肯來庭除、想當盤礴欲畫時、睥睨衆史如庸奴、莊子宋元君將畫圖、衆史皆至受揖而立、有一史後至受揖不立、因之舍、公使人視之、解衣盤礴羸、君曰可矣、是眞畫者也、神閑意定始一掃、功與造化論錙銖、

【固知—】此畫の眞に逼るを視て、固に畫者の巧に此形を寫し爲たることを知也、【此物】若し畫者の巧に依るに非んば、此物安ぞ庭除に來ることを得んやと也、庭除は庭際也、除階也、又門屛之間曰除、【想當盤礴】此虎を圖したる時、畫師のありさまを、今より思ひやりて言ふ也、【盤礴】莊子の故事を用、注莊子外篇田子方篇出たり、宋の元君畫圖せしむることありて畫史を召す、衆の畫史皆至て元君の揖禮を受て立つ、いかさま畫くべしと筆を舐り墨を和調して堂外に在る者も半なり、一人の畫史後に來る者あり、其形舒びゆるやかにして趨り進まず、元君の揖せるを受け命を聞て立ち侍らず、直に舍に之く、公人を遣はして其ありさまを視せしむれば、衣を解て盤礴して、羸になりて畫を寫すと云、元君の曰これ則可なり、心畫に專にて其他は思ふに暇あらず、己れが身を忘れたる者也、眞の畫者なりと稱せられたり、注盤礴箕踞之貌、兩足を展て箕の緣を見るに似たるを盤礴と云、羸は裸也、【睥睨】史記信陵君傳、侯生見其客朱亥睥睨、注索隱俾音沛計反、睨音五計反、正義曰不正視也、【庸奴】庸字彙雇也、唐有租庸調、用人之力、又與傭同、懷砂賦誹俊疑桀兮、固庸態也、王逸注、庸賤之人也、言ろは此圖を寫せる時、畫者のありさまを想像に、禮貌に拘束せず、心ゆたかに盤礴の體にて、既に畫んとする時、衆の畫史を睥睨して正くも不視、只庸奴の輩の傍に在るが如くに思ふて、意とせざらんと也、【神閑—】必畫に專にして他を不顧、神閑に意定て後始て筆を執て一掃して即此虎を畫き成したるなるべし、雄猛の形象山中の眞虎と僅に錙銖の間を以て論

ときは、心を輸し納れて懇切なる貌を爲也、【背面笑】背ろむきて相見ざるときは、即其背を指てそしり笑て、眞の情は曾てあらざる也、【寄謝】以辭相告曰謝、言は言を寄せて悠々たる世上の兒曹に告ぐ、我れ好惡を不爭、併せて舍之復た論ずべからず、肯て相疑ふこと勿れと也、

○虎圖行

虎の圖を畫きて、猙猛の勢を能く寫たるを稱する也、詩人玉屑十七引漫叟詩話云、荊公嘗在歐公坐上賦虎圖、衆客未落筆而荊公章已就、歐公亟取讀之、爲之擊節稱歎、坐客閣筆不敢作、召溪漁隱曰、西淸詩話中亦載此事云、此乃擬杜甫畫鶻行以舒急解紛耳、

王介甫

壯哉非熊亦非貙、目光夾鏡當坐隅、橫行妥尾不畏逐、顧盼欲去仍躊躇、卒然一見心爲動、熟視稍々摩其鬚、

【壯哉】壯彊也盛也、威盛强猛之名、【非熊】熊雄獸似豕、山居冬蟄、【非貙】音樞獸似貍而大、言は强猛の形雄壯なるかな、熊にも非ず又貙にてもなき者也、此史記齊世家、西伯將出獵卜之、曰所獲非龍非彲、非虎非羆、所獲覇王之輔と、云の文法を用たり、【目光―】眼目の光熒々たること、明鏡を夾めるが如くにして座の一隅に當て居然としておそろしき也、杜子美詩雲山湧座隅、【橫行―】杜胡馬詩、驍騰有如此、萬里可橫行、【妥尾】妥音唾安也、帖也、或作綏、按妥綏ともに垂の義に訓すること字書に不見、曲禮云、武車綏旌德車結旌、注尙威武故舒散若垂綏然、此綏字垂の義あり、妥尾と可讀、橫に行き尾を妥て人の逐ことを畏る狀なきと也、【顧盼】首を轉じて後へに視也、【躊躇】字彙躊躇猶豫也、又住足也、宋玉九辨、淹留而躊躇、莊子養生主篇、爲之四顧躊躇、文選謝希逸誄注、躊躇行止貌、首を回らし顧み盼て去らんと欲するが如くにて、仍躊躇して去らざる意象ある也、【卒然】ふと〻云義也、孟子梁惠王篇、襄王卒然問曰、天下惡乎定、卒然と一見しては眞虎の如し、故に心中惕然と動て畏怖の意あり、【熟視】目を留てつく〲と見

宗以風痺厭西內湫濕、龍朔三年始大興葺、曰蓬萊宮、
【聲輝】聲名顯著の光輝也、【赫】明也盛也、赫々高明顯
盛貌、追て憶ふに昔我三大禮賦を作て、表を以て蓬萊
宮に獻ぜしかば、天子これを奇なりとして集賢院に
待制たらしめ玉ふ時は、我ながら自怪む、一日忽に奇
才の聲名光輝赫々と顯明して、盛に世に發せしこと
をと也、

集賢學士如堵墻、（禮記孔子射於矍相之圃、蓋觀者如堵墻、）觀
我落筆中書堂、往時文彩動人
主、此日飢寒趨路傍、

【集賢學士】唐玄宗開元五年始置修書院於集仙殿、卽
置學士員、後改集賢、亦曰集賢學士、通典曰、開元五年
十一月於乾元殿東廊寫四部書、令馬懷素褚无量總
其事、於麗正殿安置爲修書使、十六年宴張說等於集
仙殿、改殿名集賢、改修書使爲集賢殿書院學士、【如
堵墻】禮記射義云、孔子射於矍相之圃、蓋觀者如堵墻、
注如堵墻言圍繞而觀者衆也、【觀我―】本集注洙曰、
天寶中公献三大禮賦、明皇奇之、使待制集賢院命
宰相試文章、今云中書堂卽宰相所坐之堂也、既賦を
獻じて天子杜甫を才ありとして、制を集賢殿に待た
しめ、宰相に命じて文章を試しむ、其時集賢の學士衆
く圍繞すること堵墻の如くにて、我が中書堂に於て
筆を落して文章を書を觀たり、如此はれがましき文
章をも作て試られしと也、【往時―】往時中書堂にて
試られて文章を作りしときは、文彩の妙天子をも感
動して奇とせられしに、今日の如きは如何ぞや、飢寒
の苦を不免して路傍に趨り、依る所もなき身となり
しと也、

晩將末契託年少、（陸機歎逝賦、託末契於後生、）當面
輸心背面笑、寄謝悠々世上兒、
不爭好惡莫相疑、

【晩將―】末契の末は末弟末友の末と同じ、契合の末
に厠て交友の數に與かるを末契と云、文選歎逝賦、
託末契於後生、余將老而爲客、【年少】郭英乂を指す、
我れ晩年に及で末契の交と云を以て、身を年少の郭
氏に託し寄てあると也、【當面輸心】面に當て相向ふ

十、父母問其故、女曰欲得賢如梁伯鸞者、鴻聞而聘之、女求作布衣麻縷織作筐緝績之具、及嫁始以裝飾入門、七日而鴻不答、妻跪請曰、竊聞夫子高義簡斥數婦、妾亦偃蹇數夫矣、今而見擇、敢不請罪、鴻曰吾欲裘褐之人可與俱隱深山者爾、今乃衣綺縞傅粉墨、豈鴻所願哉、妻曰以觀夫子之志耳、妾自有隱居之服、乃更爲椎髻、着布衣操作而前、鴻大喜曰、此眞梁鴻妻也、能奉我矣、字之曰德曜、名孟光、乃共入霸陵山中、後至吳依大家皐伯通、居廡下、爲人賃舂、每歸妻爲具食、不敢於鴻前仰視、擧案齊眉、伯通察而異之曰、彼傭能使其妻敬之如此、非凡人也、乃舍之於家、

○莫相疑行

郭英乂倅蜀、公與英乂不合、去成都時作、

本集十二載之、本注鶴曰、此詩與後篇赤霄行皆爲郭英乂作也、按是年四月嚴武薨、五月以郭英乂爲成都尹、公與英乂雖有舊、然志不相合、遂起去草堂之興、莫相疑は結句の三字を取て篇に名くる也、郭英乂蜀に來て嚴武の任を繼ぐ、杜子美又英乂に倚んとするに、英乂故人を待つの情薄うして杜子美と不合、故に草堂を去んと思ふの心有て、此詩を作れる也、

杜子美

男兒生無所成頭皓白、（李陵書男兒生無所成名）牙齒欲落眞可惜、憶獻三賦蓬萊宮、（明皇天寶中朝獻太淸宮享廟及郊、甫時獻三大禮賦、）自怪一日聲輝赫、

【男兒―】杜子美用らるゝこともなくて年の老るを嘆息せる也、男兒の此世に生るゝこと各所成あるべし、苟も所成なくして頭髮の色變じて皓白となり、牙齒漸く落んとすること、眞に惜むべしと也、注【李陵書】文選李陵答蘇武書云、男兒生以不成名、死則葬蠻夷中、【憶獻―】子美用らるゝことを不得、徒らに老に至る、故に昔日始て京に詣りし時、賦を獻じたるありさまのゆゝしかりしことを追憶する也、【三賦】天寶十三載玄宗朝獻太淸宮、饗廟及郊、甫獻朝獻太淸宮賦、朝享太廟賦、有事于南郊賦三篇、【蓬萊宮】唐書地理志、龍朔後皇帝常居大明宮、乃謂之西內、高

信人間有西子、

【杜陵飢客】杜子美を指て云、本注堯卿曰、杜子美自謂、衣不蓋體、常寄食於人、奔走不暇、常恐轉死溝壑、可謂飢客矣、又詩云、秋山眼冷魂未歸、杜陵に住せし飢客杜子美は、常に悽々として面溫色なく、眼中長へに寒くすさまじきと也、【蹇驢―】蹇跛驢說文似馬長耳也、驢うさぎむま也、野人の所用遲鈍の畜也、杜子美跛たる驢馬に乘り、破れたる帽を著て、金鞍に跨たる權貴の人の後に追隨せられし也、杜子美贈韋左丞長篇詩云、騎驢三十載、旅食京華春、朝扣富兒門、暮隨肥馬塵、東坡此句に本けるか、【隔花―】周昉が畫ける背面の美人、杜子美麗人行に云へる麗人の形と同じ、故に畫を以て子美の所見の者に擬する也、杜子美嘗て金鞍の後に隨て曲江の湊に行て、花を隔て水に臨て時に一たび美人を望み見る、其時も正く面を見せしめず、唯背後より腰肢の風態を見ることを許したるのみ也、故に其詩に背後の所見を賦して、顏色の美は說ざりしと云意也、杜子美麗人行詩、頭上何所有、翠爲匐葉垂鬢脣、背後何所見、珠壓腰衱穩稱身、【心醉―】晉郭奕字大業大原人、高爽有識量、少所推先、見阮咸、心醉不覺歎焉、此れ題に云戲に作也、杜甫背後より一たび見るすら、猶恍惚として心醉て、茆屋の底に歸り、方に今の世にも古所謂西子と云者美無きには非ずと自ら信じ思へり、況や首を回らして一笑せば、當に如何んがあるべきやと、前の節に應ずる也、孟子離婁篇云、西子蒙不潔、則人皆掩鼻而過之、注西子美婦人、

君不見孟光擧案與眉齊、

梁鴻至貧爲人賃春、每歸妻爲具食擧按齊眉、

何曾背面傷春啼、

結句には誡を寓す、梁鴻が妻孟光を不見や、婦道を行て夫を敬すること賓の如く、食を具るに案を擧ること眉と齊し、賢婦と云を以て今に稱せらる、何ぞ婦の道を修て內を守ることをせずして、艶情を肆にし、閨怨を懷て、背面して春色を傷み啼くことをするやと也、後漢書逸民傳、梁鴻字伯鸞扶風人、受業大學、既歸鄉里、勢家慕其高節、多欲女之、鴻並不娶、同縣孟氏有女、狀肥醜而黑、力擧石臼、擇對不嫁、至年二

腸、

【深宮—】深宮の中寂寥として人なく、のどかなる春の日遲々と長きに、沉香亭の此百花の開けて芬芳暗に轉し、香き時節に當て也、此篇美人睡起背面の態を云、故に起句を春容と起して、美人の氣倦み情慵して、睡味の濃なる時節を云也、沉香亭本注云、唐明皇以外國貢沉香材而作沉香亭、二の句は太白が淸平調の句を引用也、注【李白進淸平調】樂史が李集の序文に具に載す、前の李白の詩に見えたり、【名花—】第三章也、名花と美人と交〻歡を相爲し、君王笑を帶て看玉ふ、顧盼の寵を得て、貴妃が心春風無限恨を解釋して、沉香亭の北に向て、欄干に倚て花を賞すると也、【美人—】深宮日長亭北花の香き時に、美人新に睡起して、情慵く體弱、濃粧をなすに懶して、薄く梳り類洗するのみ也、【燕舞—】梁上には燕子舞ひ、階際には黃鶯啼て、深宮轉た日長し、閨怨結て不解、獨空く腸を斷つと也、斷腸は憂思甚だ切にして腸爲めに斷る也、說長恨歌の注に見たり、

畫工欲畫無窮意、背立春風初破睡、若教回首却嫣然、陽城下蔡俱風靡、宋玉賦東家之子嫣然一笑、惑陽城迷下蔡、

【畫工】西京雜記卷二云、元帝後宮既多不得常見、乃使畫工圖形、案圖召幸之、畫工美人の形を圖するに、閨怨無窮の意態を寫さんと欲するに、正面に畫ては必盡し得ざらんことを思て、特に意匠を用て美人春風に背き立て、初て睡の破たる狀を畫きたると也、背立して面を見せしめざる中に、自ら無窮の意を含む也、【若敎—】文選宋玉好色賦云、臣里之美者莫若臣東家之子、嫣然一笑惑陽城迷下蔡、注善曰、嫣笑貌、陽城下蔡二縣名、蓋楚之貴介公子所封、故取以喩焉、此背面の女をして、首を回して嫣然と一笑せしめたらば、陽城下蔡の貴介公子も悉く心を迷して、風の如くに靡くにてあらんと也、

杜陵飢客眼長寒、蹇驢破帽隨金鞍、隔花臨水時一見、只許腰肢背後看、心醉歸來茅屋裏、方

中書門下三品、遷紫微令、久之崇還宰政、因擧宋璟自代、乃以開府儀同三司罷政事、開元八年授太子少保、以疾不拜、明年卒年七十二、又列傳四十九、宋璟刑州人、擧進士中第、爲監察御史、遷鳳閣舍人、開元初進御史太夫、遷吏部兼侍中、及宋璟爲相復貞觀之政、制自今事非的須祕密者、皆令對仗奏聞、史官自依故事、二十年請致仕、許之、仍賜全祿退居洛、二十五年卒年七十五、言は朝廷の綱紀暫く否の時に當て、進て相となれり、其身を致して君に事ること、姚宋の唐室を丞けて中興せし所の道を以て行んこと、必ず惡かるましきぞと也、注【通鑑】此語通鑑開元四年十二月の下に見たり、姚宋相繼爲相、崇善應變成務、璟善守法持正、二人志操不同、然協心輔佐、使賦役寛平刑罰清省百姓富庶、唐世賢相前稱房杜、後稱姚宋、他人莫得比焉、二人每進見上輙爲之起、去則臨軒送之、【我聞—】斗米三錢は太宗貞觀の間の事也、姚宋相と爲る年斗米三錢なること於史不見、貞觀の事を借て治安を言ふ也、言は我聞けり姚宋二公の相となれる年間に、天下太平を致して、民間の穀米一斗の價僅に三四錢を以て買ふと也、これを以て天覺に望む、必ず如此ならしめよと也、通鑑、太宗貞觀四年大有年、米斗不過三四錢、終歳斷死刑纔二十九人、外戶不閉行旅不齎糧、注正觀即貞觀也、貞字宋の仁宗の嫌名を犯す、故に宋朝に貞の字を避て正觀と云也、

○續麗人行

李仲謀家有周昉畫背面欠伸內人、極精、戲作此詩

本集十一載之、杜子美の詩に麗人行あり、既前卷に見たり、其詩に續て作れるに因て續麗人行と云也、題注は即東坡の自注也、【周昉】張彥遠名畫記云、周昉字景玄、官至宣州長史、【背面】うしろむきて顔は不見也、【欠伸】のびしあくびする也、曲禮上、侍坐於君子、君子欠伸撰杖屨、視日蚤莫、侍坐者請出、【內人】官人也、【極精】舊本無此二字、今依本集補入、筆を用ること極て精を能く寫し得たる也、

蘇子瞻

深宮無人春日長、沈香亭北百花香、

李白進清平調云、名花傾國兩相歡、長得君王帶笑看、解釋春風無限恨、沈香亭北倚闌干、

美人睡起薄梳洗、燕舞鶯啼空斷

義云、天彗者一名掃星、本類星末類彗、小者數寸長、長或竟天、而體無光、假日之光、光芒所及爲災變、見則兵起、除舊布新、彗所指之處弱也、旄頭の如き彗星、昨夜までは光芒牖戸を照したるにと也、綱目大觀四年夏五月、彗出奎婁、帝避殿減膳詔侍從官直言指陳闕失、【是夕】天覺が相に拜せらるゝの夕夏六月也、鋒芒彗星の末の纖く散したる處也、光芒斂り滅て末の禿したる箒の如くなりたると也、【明朝】相に拜せし翌日也、【化作】即夕既に禿箒の如く、明日忽に變化して甘雨と作り、來て久旱の乾涸を霑す也、【甘雨】小雅甫田篇、以御田祖以祈甘雨、【官家】事物紀原卷一云、劉向說苑鮑白令之對秦始皇曰、天下官則讓賢、天下家則世繼、故曰五帝以天下爲官、三王以天下爲家、蔣濟萬機論曰、五帝官天下故傳之賢、三王家天下故傳之子、今指天子爲官家、則猶言帝王也、其義始諸此、僧文瑩湘山野錄曰、眞宗問李仲容、何故謂天子曰官家、遽對云、蔣濟言三皇官天下、五帝家天下、兼三五之德故曰官家、爲小異爾、按晉書五行志、安帝義熙初童謠曰、官家養蘆化作荻、則晉末之語已云然矣、【調元手】丞相の職を云、道德を以て天地の化育を贊け、陰陽の元氣を調和するは丞相の任也、前漢書に丙吉が牛の喘を問て謂、三公陰陽を調るを典る、時氣の節を失て所傷あらんことを恐ると云是也、宋末の胡安國春秋傳に又云、調元者宰相之事也、言ろは天子人を擇て良相の器ある賢者を擧け得ること喜はせらるゝと也、注【蔣濟】三國人也、字子通仕魏爲中郎將兼資文武、志節忼慨常有超越江湖呑吳會之志、封關內侯、

周公禮樂未制作、後漢書周公輔相成王制禮作樂、天下和平、

致身姚宋亦不惡、通鑑唐開元間姚宋相繼爲相、姚崇善應變成務、宋璟善守成持正、唐世賢相前稱房杜、後稱姚宋焉、

我聞一二公拜相年、民間斗米三四錢、唐正觀四年米斗二錢、列戶不閉、

【周公—】周公旦は周成王を相て禮を制し樂を作聖人也、此に未制作と云、前宰相其人に非ずして、蔡京政を亂り、聖人の禮樂綱紀なく未制作に似たり、即今朝政の好からざることを云、【致身】學而篇云、事君致其身、【姚宋】姚崇宋璟也、新唐書列傳四十九、姚崇字元之陝州人、武后時拜侍郎、玄宗即位拜兵部尙書同

唐子西

内前車馬撥不開、文徳殿下宣麻回、紫微舍人拜右相、中使押赴文昌臺、

【内前車馬―】大内の前には、天下より事を奏し或は詔を待つ者湊り聚て、車馬雜遝し、撥へども開けず、人を通し不得まで多くあると也、【文徳殿】殿の所在未詳、【宣麻】天子の口宣を麻紙に寫したるを云、瑯琊代醉編卷二十五云、敕舊用白紙、唐高宗上元間以施行之制既爲永式、白紙多蠹、遂改用黃、除拜將相制書用黃麻紙、其或學士制不自中書出、故獨用白麻紙、所以有黃麻白麻之異也、詔晉時多用青紙、見楚王倫太子遹等傳、李肇翰林志曰、凡賜予徵召宣索處分曰詔、用白藤紙、撫軍旅曰書、用黃麻紙、道觀薦告詞文用青藤紙、謂之青詞、凡諸陵薦告上表用白麻紙、石林燕語曰、唐中書制詔有四書紙、而施行者曰發曰敕、用黃麻紙、承旨而行者曰敕牒、用黃藤紙、赦書用絹黃紙、或云取其不蠹、○百川學海退朝錄下云、唐日曆正觀十年十月詔始用黃麻紙寫詔敕、或は文徳殿の下に詔を待て、宣麻を承て回るもある也、二句は先づ朝廷政事の萬機なることを云、【紫微舍人】は中書舍人也、即張天覺現任の官也、通鑑唐玄宗開元元年十二月、改尚書左右僕射爲左右丞相、中書省爲紫微省、門下省爲黃門省、侍中爲監、天覺の中書の官となれるは、通鑑を按するに徽宗大觀四年春正月也、余深張商英二人門下中書侍郎となれり、【拜右相】は大觀四年六月也、【中使】朝廷の使者也、杜子美諸將五首詩、正憶往時嚴僕射、共迎中使望鄉臺、【押赴】押音鴨簽書文字也、天子の中使押字の除目を擎て文昌臺に赴て、紫微舍人の張天覺を拜して右相と爲す也、

旄頭昨夜光照牖、是夕鋒芒如禿箒、（爾雅彗星爲欃搶、形如掃帚、）明朝化作甘雨來、官家喜得調元手、（蔣濟論、五帝官天下、三王家天下、兼五三之徳故曰官家、）

【旄頭】爾雅彗星を欃搶と云、搶頭に旄あり、故に彗星を旄頭と云か、史記天官書云、彗星長二丈類彗星、正

彊孰與項王、漢王默然良久曰不如也、【凄━】琵琶の聲凄々として哀怨なること益々甚し、向前に彈じたる聲に不似、更に感深き也、樂府凄々復凄々、【滿座━】船中に在りあひし人、此聲を聞て皆感に不耐して泣を掩て悲傷すると也、鮑照詩淹泣望荊流、【就中━】滿座泣を掩ふ人の中に就て泣の下ること誰か最も多きや、即是江州の司馬、白居易の自ら謂へる也、〔圈外注〕一轉語を以て、此結句の理に害あることを譏る也、惟江州司馬の泣を流すことは實に有べし、夜半に及て青衫を著るの理なけん、青衫濕ふと云へるは虛妄ならんと云意也、

○內前行

大觀四年張天覺拜相、是夕彗星沒、久旱而雨、

此詩は張天覺相となることを賀して作れる也、內前行と名るは、起句の二字を取て篇に名る也、內は大內也、大內の殿前にて大臣に職を命ぜらるゝの事を叙する也、注【大觀四年━】通鑑宋徽宗大觀四年六月、以張商英爲尙書右僕射、時蔡京久盜國柄、內外怨疾、見商英能立異同、更稱爲賢、帝因人望而相之、時久旱彗星中天、商英受命是夕彗不見、明日雨、帝喜因大書商霖二字以賜之、【張天覺】東都事略列傳八十五、張商英字天覺、蜀州新津人也、除中書侍郎、拜右僕射、久旱彗星出、天心、是夕雨彗不見、哲宗喜親書商霖字以賜之、卒年七十九、欽宗即位特贈太保、商英學浮圖法、自號無盡居士、尙友錄張商英字天覺、新津人、童時日記萬言、向子山見而異之妻以女、崇寧中拜相、時蔡京久盜國柄、中外怨疾、値久旱彗星當天、商英受命是夕彗不見、明日雨、帝因大書商霖二字以賜之、商英爲相大革京之弊政、勸帝節華侈息土木抑僥倖、帝頗憚之、何執中耻其勝己、諷臺臣論之遂出知河南府、張天覺の傳宋史に不載也、事略には哲宗の時の人とす、通鑑と尙友錄と共に徽宗の時とす、但通鑑は大觀中に相となると書し、尙友錄は崇寧中に相に拜せらると云、此集題注大觀四年と云は通鑑に從ふ也、此詩漁隱後集三十四、唐子西上張天覺內前行云、內前車馬撥不開、文德殿下宣麻回、紫微侍郎拜右相、中使押赴文昌臺、此語善於叙事、質而不俚、又云周公禮樂未要作、致身姚宋亦不惡、向來兩翁當國年、民間斗米纔四錢、此詩善於諷諭、當而有理皆可法也、

春至則鳴、聞其初聲則有離別之苦、人惡聞之、惟田家候其鳴則興農事、【春江―】此二句舊本脫失す、白氏文集及唐詩解、唐詩歸皆有、故補入也、唯唐詩品彙無此二句、陽春江上の烟浪暖なるとき、或花の開けし朝、又は秋の月朗かなる夜、景物に遇ては往々酒を取て酌めども、友もなければ還て自ら傾け盡すと也、【往々】文選甘泉賦注、李善曰、往々言非一也、往々は處々每々の意あり、小學正蒙注、往々猶常々、此句の往々は每々の意に看べし、【豈無―】獨斟むの時に當て、豈に山樵の歌と村童の笛聲と無らんや、有ことは則有り、但嘔啞嘲哳の聲耳に聽に堪ることなき也、【嘔啞】小兒學語也、【嘲哳】楚辭、鵾鷄嘲哳而悲鳴、注嘲哳聲繁細貌、

今夜聞君琵琶語、如聽仙樂耳暫明、莫辭更坐彈一曲、爲君翻作琵琶行、感我此言良久立、却坐促絃絃轉急、凄々不似向前聲、滿坐聞之皆掩泣、就中泣下誰最多、江州司馬青衫濕、此乃白樂天自謂、○前輩曾下一轉語云、惟有江州司馬泣、如何夜半着青衫、

【今夜―】今夜圖らざるに君が琵琶の曲を聞く、嘔啞嘲哳の鄙音の境に、未だ曾て聞かざる所の聲なれば、固に仙境に入て音樂を聞くが如くなる思ひあつて、耳暫く明になりて快き也、【莫辭―】一曲聽て猶不足、重て聽んことを欲す、辭却することなく、更に坐して又一曲を彈ぜられよと也、向に容を斂て起つ、故に又坐を命ずる也、【爲君―】君若し我が爲に更に一曲を彈ぜば、我も亦君が爲に琵琶行の詩を作て相贈んぞと也、【感我―】賈人の婦樂天の言を聞て、又爲めに遷謫の情あることを感じて、遽に辭し去るに不忍、良久く立て自ら思ふの色ありしが、却て又坐して爲めに一曲を彈ず、絃を攏撚することとせきつめて調ぶれば、絃の聲轉ゝ急緊なると也、【促絃】は左の手にて絃を操ることゝせきつめて、聲を急緊に彈ずるを云なるべし、【良久】史記韓信傳、信曰大王自料勇悍仁

此九江に來る、同く是天涯の遠境へ淪落して來りし者なれば、同情相憐むべし、相逢ては宜く哀矜すべし、何ぞ必しも曾て素より相識たるのみに限らんやと也、本是共に京師の者なれば、新舊を不論相逢てさへあらば、親み憐むへしと云の意也、漢黃憲外史云、漢室衰敝賢士淪落、

我從去年辭帝京、謫居臥病潯陽城、潯陽地僻無音樂、終歲不聞絲竹聲、住近湓江地低濕、黃蘆苦竹遶宅生、

【我從去年】樂天謫遷は元和の初也、元和元年作樂府及詩百餘篇、規諷時事、流聞禁中、上悅之召拜翰林學士、歷左拾遺、時盜殺宰相、京師洶々、居易首上疏請亟捕賊、權臣有嫌其出位、貶江州司馬、【帝京】京師也、文選秋風辭序、上行幸河東、祠后土、顧視帝京欣然、【謫居】謫責也、罰也、史記賈誼傳、賈生謫居長沙、罪に依て罰せられ遷り居るを云、【潯陽城】一統志、在府城西一十五里、本漢潯陽縣、其城晉孟懷玉所築、隋因水患移入城爲附郭、今名故州、曰彭蠡曰湓城即其地、【潯陽—】地僻とは偏辟鄙陋の地也、故に音樂の如き風雅なる事は曾てなきと也、【終歲—】一歲の月日一周し終れども、その間一度も絲竹を奏する聲などを聞ことはなきと也、【住近—】居住する宅地は、湓江に近して地勢低く、しかも濕氣多と也、【湓江】題下の序の注に見たり、【黃蘆—】地低く濕深ければ、黃蘆苦竹の類宅を遶て茂生し、雜穢して繁げきと也、

其間旦暮聞何物、杜鵑啼血猿哀鳴、（羅鄴詩、聲々啼血向花枝、○謝靈運、哀猿啼月、）春江花朝秋月夜、往々取酒還獨傾、豈無山歌與村笛、嘔啞嘲哳難爲聽、（嘔）音毆（啞）音瘂（嘲）音啁（哳）陟轄切、言其聲韻粗俗也、

【其間—】蘆竹穢雜の間、旦暮に所聞の物は何ぞと云へば、杜鵑は血を滴つるまで苦鳴し、猿は哀しく叫び鳴て腸を斷つ、唯此聲をのみ聞くと也、【杜鵑】華陽風俗錄云、杜鵑如鵲而羽烏、其聲哀而吻有血、土人云、

詩、鞍馬光照レ地、【老大―】年改り色衰て、昔日紅綃纏頭の客復不レ來、弟姨も亦死亡して所倚を失へり、故に老大に及て、嫁して此處の商人の婦となりたると也、古詩老大徒傷悲、

商人重レ利輕二別離一、前月浮梁買レ茶去、饒州浮梁縣、乃産レ茶之地、**去來江口守二空船一、遶レ船明月江水寒、夜深忽夢二少年事一、夢啼粧涙紅闌干、**長恨歌、玉容寂寞涙闌干、〇已上係二商人婦之所一レ訴也、

【商人―】商人の心常に利を重じて、遇合の情薄し、別離を輕じて數〻他に出で、偕に處ることなし、【前月―】前の月に浮梁の茶を買ふとて行き去て、猶未だ還り來らざると也、唐書地理志、饒州有二浮梁縣一、又食貨志、風俗貴レ茶名品益衆、劍南有二蒙頂石花一、常州有二義興紫筍一、而浮梁之商賈不レ與焉、【去來―】前月浮梁に行て未だ歸らぬ故に、今は歸るかと獨り俟て江の口に去來し、空船を守て望み見ると也、【遶船―】空船の傍明月の陰移て、江の水清冷にして寒き也、【夜深―】夜深けて後空船の中に假寐すれば、少年全盛の時の事を夢む、夢中に感じて泣啼すれば、血涙枕を漬して流る、夢覺て驚き悟れば、紅涙闌干として縱横に流れたる痕あると也、【闌干】韻會橫斜貌、唐詩解注、闌干涙流貌也、劉孝威詩、夢啼漬二花枕一、

我聞二琵琶一已歎息、已下乃司馬答二商婦一、**又聞二此語一重喞々、同是天涯淪落人、相逢何必曾相識、**

【我聞―】我れ向に琵琶の聲を聞て、其聲々思ひあつて平生志を不レ得ことを訴るに似たるを覺て、已に歎息をなしたりし也、歎息は感嘆して大息を吐く也、高唐賦、歎息垂レ涙、【又聞―】又商婦の口つから自家の舊事を話る語を聞て、重て感慨して喞々と苦吟する也、喞々は蟲の鳴聲也、文選促織詩、喞々復喞々、【同是天涯】十九首古詩、各在二天一涯一、遠方に在を云、遠き國を遙に眺ば、天の涯盡て目極るに因て天涯と云也、商婦も本は京師の人也、白子も亦貶謫せられて京師より

多く、紅綃を前に積むこと數も知れざりし也、開元遺事云、官妓永新善歌、帝曰此一曲直千金矣、【鈿頭銀篦】鈿は金華之飾也、頭をば金華の飾したる者也、銀篦銀にて作たる篦也、篦はくし也、字彙篦毘意切、竹爲之、去髮垢者也、【擊節】拍子を取てうちならす也、言は五陵年少の前にて一曲を唱へ、頭上を金華の飾したる銀の篦を以て、ほど拍子の節を擊つとて、不覺擊ち碎きたると也、【血色】紅の色也、【羅裙】うすものゝ裙也、江淹別賦、送愛子兮霑羅裙、血色の如くに紅なる裙を著てありしときに、盃酒を翻覆して汚したることもありたると也、

今年歡笑復明年、秋月春風等間度、弟走從軍阿姨死、暮去朝來顏色故、門前冷落鞍馬稀、老大嫁作商人婦、

【今年―】宴に侍り曲を弄して、今年も歡樂笑傲し、復た明年も同く娛をなして、每に遑あきあることとなかりし也、阮籍詩、歡笑不終宴、俛仰復欷歔、【秋月―】鍾嶸詩品序云、若乃春風、春鳥、秋蟬、夏雲、暑雨、冬月、祁寒、斯四候之感諸詩者也、秋と春の景を舉れば、四時の風景に愛たりしこと自らこもれる也、【等間】の二字唐詩に多く有之、經史の中に未見出處、按に等は齊也、類也、間はいたづらと訓す、間人間事の間字と同意也、いたづらにて用にたゝぬ義也、事を作すこと心を極め用ることなく、なりしだいにすると間なるにひとしと云意にて等間と云か、孟郊詩、宦情惟等間とも云へり、言は秋月春風の時景を、何の心もなく年々間に度り過て、歡笑の中に歲月を累ねたると也、【弟走―】文選古詩、十五從軍征、等間に歲月を度る間に、一人ありつる弟は、軍に從て戍役に出てより復た不還、阿姨は死して亡たると也、【阿姨】阿は阿母、阿保の如し、付け字也、此もとの婦女の稱呼に、おの字を付て呼と同じ、姨は母之姊妹、【暮去―】風月を歡笑し娛むほどに、いつとなく暮去ては朝來り、日夜更〻逝て、終に顏色衰へ故て、美麗稍〻消したり、【門前―】素より色を以て人に愛せられし身なれば、容貌衰てより後は又顧念する人もなく、門前いつしか冷落して、年少の鞍馬を繫くこと稀になりたり、鮑照

敎坊、武后改爲雲韶府、以中官爲使、開元後始不隷太常也、續事始曰、玄宗立敎坊、以新聲散樂之曲優倡蔓衍之戲、因其詼諧、以金帛章綬賞之、藝術絶妙の名は敎坊中の第一に屬して、並ぶ者なかりしと也、

曲罷常敎善才服、（高齋詩話、元和中曹保有子善才、善才有子綱、皆執琵琶、）粧成每被秋娘妬、五陵年少爭纏頭、（唐王元寶富而無學、嘗會賓、數日人問必多佳論、元寶曰、但費錦纏頭耳、注賜歌舞者利物也、）一曲紅綃不知數、鈿頭銀篦擊節碎、血色羅裙翻酒汚、

【曲罷—】一曲を奏し罷めば、善才其絶妙に心服して與じたると也、【善才】は樂天の序に、穆曹の二善才に學とあれば、善才は琵琶を敎る曲師の稱か、瑯琊代醉編卷三十七云、白樂天琵琶行云、曲罷曾令善才伏、善才不知出處、琵琶錄云、元和中王芬曹保、保有子善才、其孫曹綱、皆習此藝、次有裴興奴、與曹同時、綱善爲運撥若風雷、不長於提絃、興奴則長於攏撚、下撥稍軟、時人謂、綱有右手、興奴有左手、樂天又有聽曹綱琵琶示重蓮詩云、撥々絃々意不同、胡啼番語兩玲瓏、誰能截得曹綱手、插向重蓮紅袖中、此說に據れば、善才は一人の名にして、琵琶を善くする人也、【粧成—】藝の妙のみに非ず、容色も亦美麗なりしことを云、粧飾を施し成て出れば、容貌妖艷にて常に秋娘に妬まれたりしと也、【秋娘】は美人の名、借り用て世上の美人を云也、西漢叢語云、望江南去朱崖李太尉鎭關西日、爲亡姬謝秋娘所作、後進入敎坊、國史補云、李錡叛滅、有妾杜秋娘沒入宮、又放歸、杜牧感而作詩、【五陵】漢の天子を葬る處、高帝は長陵、惠帝安陵、景帝は陽陵、武帝は茂陵、昭帝は平陵、是を五陵と云、五陵の邊豪富の家多し、故に五陵の年少と云へば富豪の子弟のことゝなる也、前漢書九十二游俠傳、原涉顯名京師、郡國諸豪及長安五陵、諸爲氣節者皆歸慕之、【纏頭】ひきでものを與るの義也、書言故事七賜歌舞者利物曰錦纏頭、杜詩樽前應有錦纏頭、唐王元寶富而無學嘗會賓、明日人問必多佳論、元寶曰、但費錦纏頭、蓋元寶不學不知佳論、但知費賞賜與歌舞者、五陵の年少ども爭邀へて纏頭を多く與へたると也、【一曲—】琵琶を一曲彈ずれば、即ち賞賜する者

鎗皆鳴る勢の如くなると也、【曲終―】曲を彈じ終て、撥を抽て手に持さし、うつむきてものをも不言、撥を以て心を畫て手づさみをなす也、【四絃】彈し收るとき、四絃を齊くはらり〳〵と撥きならし彈じ罷むを云、四絃をはらりと撥たる一聲は、帛をさつと裂たる聲の如くなると也、【裂帛】江文通恨賦、裂帛繫書、通鑑綱目周紀、幽王見褒姒而嬖愛之、褒姒好聞裂帛聲、王發帛裂之以適其意、【東船西舫】舫音訪並兩舟曰舫、東の方にある船も、西の岸に繫ぎたる船も、此琵琶の曲を聽て哀怨の聲調に感慨を興し、人々皆悄て、曲終れども敢て言を出す者なし、西東しづまりかへつて更に聲なく、只江心に秋月の光潔白にさへたるが、水に印して明なるを見るのみなると也、音斷て景色更に寂寞となりたる也、

沉吟收撥插絃中、整頓衣裳起斂容、自言本是京城女、家在蝦蟇陵下住、十三學得琵琶成、名屬教坊第一部、

【沉吟】文選十九首古詩、馳情整巾帶、沉吟聊躑躅、琵琶を彈じ罷て自ら沉吟し、撥を收て絃の中に挿みて琵琶を收めおく也、撥はこれを揮て絃を撥ひ鳴すに因て、名けて撥と云也、明皇雜錄、楊貴妃琵琶以龍香板爲撥、【整頓】整へつくろふ意也、史記陳餘傳云、宜整頓其士以守戰、【斂容】前漢書霍光傳、光每朝見上虛己斂容、衣裳をひきつくろひて、起容儀を斂め、敬をなして始て己が身のことを說也、坐して琵琶を彈ず、故に起て容を斂る也、【自言本―】以下具に自家の終始を陳る也、【蝦蟇陵】雍錄、蝦蟇陵在萬年縣南六里、韋述西京記、蝦蟇陵本董仲舒墓、李肇國史補武帝幸宜春苑、每至此陵下馬、時謂之下馬陵、歲遠訛爲蝦蟇陵也、大明一統志、西安府董仲舒墓在府城南六里、仲舒漢淳儒、武帝幸芙蓉園、常至此下馬、俗因呼爲下馬陵、我れは本是れ京城にて生れたる女にて、家は長安の蝦蟇陵の下に在て住居したると也、【十三―】年十三になりたる時、既に琵琶を學び得て藝術成就したると也、【名屬教坊―】事物紀原六云、唐百官志曰、開元二年置教坊蓬萊宮側、東都置左右教坊、掌俳優雜劇、以中宮爲教坊使、此其始也、又曰武德後置內

時無聲勝有聲、

【間關】鳥の聲の和諧して、舌のころ〳〵と能くまはつて面白く鳴を間關と云、後漢書列傳六十、荀彧傳論、荀君乃越河冀間關以從曹氏、註間關猶展轉也、【鶯語】は鶯の鳴聲也、人の言語するに喩へて鶯の語と云也、文選孫綽詩、鶯語吟修竹、【滑】聲の和してつやのあるを云也、言は琵琶の聲の和暢なる所は、間關と聲和て、囀つる鶯語の花の底に滑に聞ゆるが如なると也、【幽咽】咽於歇切、哽咽悲塞也、咽はむせぶと讀む、孔德璋北山移文、石泉咽而下愴、順路に流れず、屈曲回結して聲あるを幽咽と云、【灘】增韻瀨也、辛氏三秦記俗歌曰、隴頭流水鳴聲幽咽、言は琵琶の聲凄切なる處は、幽咽して流る泉の、石に觸れ岩に碍られて屈洄する水聲の、灘を下て流れ行くが如くなると也、【水泉―】絃聲斷續の處は、水泉の淸冷澁り滯て、流聲の暫く聞えざる如く、或は絃少く凝絶て、聲音不續ところあり、【凝絶不―】絃聲或は又凝絶して餘韻不通、聲の暫く歇て寂々となる間もあり、【別有―】其聲の暫く歇て忽に寂々となり、續て聲の發するを待つ間に、音外別に幽愁暗恨の生ずる思ひあり、幽暗は無端自然に心中に興感し來るを云、【此時―】此時は即ち暫く凝絶して不通時也、暫く音の不繼間に、却て愁恨の情生ずれば、無聲も却てかきならして聲ある時よりも勝れる思ひある也、

銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀鎗鳴、曲終抽撥當心畫、四絃一聲如裂帛、東船西舫悄無言、唯見江心秋月白、

【銀瓶―】二句絃聲暫く歇て、又續て急に發するを云、銀瓶の乍に破碎して、中に盈たる水漿遽に迸出する如く、忽に絃を撥て復た鳴らす也、【鐵騎】甲冑を被て馬に騎たる武夫也、梁簡文帝詩、石門留鐵騎、晉書謝安傳苻堅曰、我以鐵騎數十萬向水逼而殺之、【突出】不意につき出るを云、犬の穴中より躍て出るを突と云、說文犬从穴中暫出也、徐曰、犬匿於穴中伺人々不意突然而出也、【刀鎗】鎗槍と音同じ通用す、槍矟也、言ろは鐵甲を被たる騎士の、卒然と突出して、刀

積する無限事どもを、絃によつて悉く說盡す也、凡そ心に思ふ所は皆聲に發して不可掩、此賈婦舊より志を失て漂淪し、心中に無限怨恨あり、故に琵琶の聲に發すること、自ら人を感せしむる也、

輕攏慢撚撥復挑、初爲霓裳後六幺、（樂譜琵琶曲有轉圜、六幺、獲束、梁州、皆其名也）大絃嘈々如急雨、小絃切々如私語、嘈々切切錯雜彈、大珠小珠落玉盤、

【輕攏慢撚】琵琶を彈ずる形狀を云、輕く攏へ慢るく撚るは、指を以て絃を操る狀也、【撥復挑】はらりと撥ては復た挑け、曲調を成す也、【初爲―】初めには霓裳の曲を彈じ、後には六幺の曲を彈じたると也、【霓裳】具に長恨歌に見たり、西清詩話、葉法善引明皇入月宮、聞樂聲歸、但記其半、會西京府楊敬達進婆羅門曲、聲調脗合、按之便韻乃合、二者製霓裳羽衣之曲、【六幺】樂府雜錄云、貞元中康崑崙善琵琶、時大旱詔雨師祈雨、令天門街市人廣鬭聲樂、遂請崑崙登街東綵樓彈一曲新翻羽調六幺、自謂街西無敵、【嘈々】王延壽魯靈光殿賦、耳嘈々以失聽、注埤蒼嘈々聲衆也、【如急雨】大絃の聲は急にして嘈々たること、急雨の驟に降るが如くなると也、後漢書陳寵傳、寵上疏曰、夫爲政猶張琴瑟、大絃急者小絃絕、【小絃切々】小絃の聲は細緊にして切々と急なり、切々は細にして急なるを云、馬季長笛賦、絞灼激以轉切、注切急也、【如私語】細〻急〻たる聲は、人の竊に私語するを聞く如くなると也、【私語】前漢書爰盎傳云、丞相曰、使君所言公事吾且奏、則私吾不受私語、【嘈々切々】大絃の急にして嘈々たると、小絃の細にして切々たると、互に錯へ雜へて彈ずる也、江文通雜體三十首序云、譬猶藍朱成彩、錯雜之變無窮、【大珠―】大絃小絃相錯雜してかきならす聲は、大珠小珠の相雜てはらく〳〵と玉盤の上に落て、聲の響き大小あるに似たると也、【玉盤】文選古詩、委身玉盤中、

間關鶯語花底滑、幽咽泉流水下灘、水泉冷澁絃凝絕、凝絕不通聲暫歇、別有幽愁暗恨生、此

やと問れて、音を知たる人の在ることを覺て、やがて彈ずることを停め、答として尙言を出しかねて、語り對ることと遲と也、

移船相近邀相見、添酒回燈重開宴、千呼萬喚始出來、猶抱琵琶半遮面、

【移船—】既に曲調を聞き、又言辭の閑雅なるを聞故に其人を見んことを欲す、因て船を移し相近いて邀へ請て相見ると也、【添酒—】此琵琶を肴として飲むべしとて、向に傾け盡たる注子に又酒を加へ添て、燈を回して重て宴を開たる也、【千呼—】賈婦を勸て、こなたの船に移れと請へども不肯出、千たび萬たび喚て頻に船に徙れと强て、後始て己れが船より出來也、【猶抱—】既に船に徙り來りたれども、猶も含羞して對し向はず、琵琶を斜に抱て半ば面を掩ひ遮て、おもはゆき貌にて坐したると也、

轉軸撥絃三兩聲、未成曲調先有情、（釋名琵琶本胡中馬上所鼓也、推手前曰琵、引手却曰琶、）**絃々掩抑聲々思、似訴平生不得志、低眉信手續々彈、說盡心中無限事、**

【轉軸】轉手をきり〳〵と轉じて、弦を急にする也、【撥絃】ばちを以て絃を撥ひ試て、絃の緩急を調べ、三兩聲鳴して調子を節する也、琵琶を調ぶる貌を云也、【未成曲調】調子を試て二三聲ひきならし、絃を調て未だ樂譜の曲調を彈じ成さざれども也、【先有情】調べをひく音韻、自ら先づ風情あると也、注【釋名—】題下の注也、誤て此に入たるならん、【絃々—】四絃各々掩抑して緩急の節を操る也、掩抑は撥を以て絃を掩ひ抑て、曲調をあやどる也、【聲々思】大絃小絃の聲々、皆各幽遠の雅志ある也、王融琵琶詩、掩抑有奇態、悽鏘多好聲、【似訴—】琵琶の聲幽怨の思あり、賈婦平生志を不得恨を、絃上の聲に寫して訴るに似たりと也、【低眉】面を少し傾け、眉を低れて手に信せ續々と彈じて、淸音たへまなき也、楊雄答劉歆書曰、今擧者懷赧而低眉、任者含聲而寃舌、【說盡心—】心中に鬱

以爲蕭瑟非也、本是實名其色碧、此句言楓葉赤荻花白秋色碧也、或者咸怪今說之異、余曰曷不以樂天他詩證之、其出府歸吾廬詩曰、嵩碧伊瑟々、重修香山寺排律云、兩面蒼々岸、中心瑟々流、薔薇云、猩猩凝血點瑟々、甃金匡間遊卽事云、寒食青々草、春風瑟々波、大湖石云、未秋已瑟々、欲雨先沉々、○張初楓菴漫錄云、白樂天琵琶行楓葉蘆花秋瑟々、楊愼謂、楓葉紅蘆花白映秋色碧也、瑟々珍寶名、其色碧、故以瑟々影指碧字、余謂瑟々當作風聲、上句云潯陽江頭夜送客、當夜其色難辨也、劉公幹詩云、瑟々谷中風、此豈言碧色耶、注【劉禹錫詩】三體詩に見たり、樂天禹錫同時の人也、其詩豈に引證するに足んや、【主人―】主人は客の爲に祖道を設て別をなす主人、即白樂天自ら謂ふ也、史記滑稽傳淳于髡曰、主人留髡而送客、たびだちを送て行主人も、馬を下りて席に上り將發、客尙船中に在也、【擧酒】宴を開也、史記卷七十七信陵君傳、魏將相宗室賓客滿堂、待公子擧酒、【無管絃】管は笛、笙の類、絃は琴瑟の類を云、王逸少蘭亭記、雖無絲竹管絃之盛、一觴一詠亦足以暢敍幽情、酒を擧け宴を開て飮んとするに、管絃の飮を助くる聲もなくて、席上無興なると也、【醉不―】別離の席に管絃の樂はあらず、只酒をのみ酌て醉ふことは則醉へども、主賓ともに歡樂を成すことなく、離恨心に關て慘と內にいたんで、將に手を分て別れんとする也、【別時―】將に別の時情を含て四もに顧れば、雲水茫々とひろくして涯もなく、江心に一輪の月を浸して、夜色凄涼たる也、古詩四顧何茫々、

忽聞水上琵琶聲、主人忘歸客不發、尋聲暗問彈者誰、琵琶聲停欲語遲、

【忽聞】既に酒を飮了て、客を送り別れんとするに臨て、忽に水上に琵琶を彈ずる聲の聞えたる也、【主人―】其琵琶の聲を聞ておもしろさに、主人は辭して家に歸ることを忘て聽き、客も船を不發して倶に同く聞居たり、【尋聲―】琵琶の聲の聞ゆる方を尋て、そろそろと船をこぎよせ、賈婦の船に近づきて、暗に誰か琵琶を彈するぞと問ふ也、【琵琶聲―】賈婦は何の意もなく自ら彈じて自ら樂みけるが、傍の船より誰ぞ

也、漂流沈淪して此處に來也、【憔悴】かしけて潤澤なき也、漁父辭、顏色憔悴形容枯槁、【轉徙】こゝかしこと流轉して、此に徙り來る也、【予出官】以下樂天自己の事を叙す、樂天長安を去て外に出て、官に居ること已に二年也、【恬然自安】恬は安也靜也、心に孤悶なく、恬然と靜にして官に居て自ら安ずる也、【是夕始―】樂天が眞情を叙て不諱妙也、賈婦の言を聞て、始て我も亦遷謫せられて此に漂流する身となれりと思て、同情相憐むの感を興したる也、【六百一十二言】二十二言に作るは非也、今本集に從ふ、按に二言は六言に作べし、本集の所載六百十六言也、此集に所收は哀猿鳴くの句の下に二句を脱す、通計六百單二言也、今二句十四字を補入て、總て六百一十六言也、脱句は春江花朝秋月夜、往々取酒還獨傾の二句也、【其抑揚―】以下は此集の注者の語也、舊本連接して寫す、故に白氏が序かと疑ふ、今圈子を以て別之、【抑揚】おさゆるとあぐると也、【頓挫】ゆるやかなるをにはかにとりひしぐを云、【流離】さら〳〵とかなづる貌、【沈鬱】心をこめて位を取て彈する貌、四の者は皆曲調の形容なれば、字義を以て解しがたし、若琵琶を善する人あらば心に自得すべし、【態】もやうふぜいなどゝ云意也、【雖千載―】千載の後に至ても、此の行を讀て形容の妙を想ひ見れば、さながら琵琶哀怨の聲を聽くが如と也、宛然はさながら或はげにもなどゝ云意也、

白居易

潯陽江頭夜送客、（潯陽江州郡名、）楓葉荻花秋瑟々、（劉禹錫詩、兩岸蕭々蘆荻秋、）主人下馬客在船、擧酒欲飲無管絃、醉不成歡慘將別、別時茫々江浸月、

【潯陽江】唐地理志江州有潯陽縣、一統志九江府潯陽江在府城北、源自珉山至此下流四十里合彭蠡湖水、東流入海、潯陽江の頭に出て、夜中に客の纜を解て出船するを送別する也、【楓葉―】一句別時の景色を紀する也、楓葉は色づき、荻花も開て、秋の景色瑟々とものさびしき時に遇て別を送也、【瑟々】楊升菴文集五十七云、白樂天琵琶行楓葉荻花秋瑟々、今詳者多

圖合靈太極三形也、材片合兩儀生也、分柱列位歲數成也、回窻華表日月星也、【序】【元和】唐憲宗年號也、【左遷】官を貶して下に遷すを左遷と云、史記卷九十三韓信傳、信說漢王曰、項王王諸將近地、而王獨遠居此、此左遷也、又九十六周昌傳、高祖召周昌謂曰、吾欲固煩公、公强爲我相趙王、周昌泣曰、臣初起從陛下、陛下獨奈何中道而棄之於諸侯乎、高祖曰、吾極知其左遷、然吾私憂趙王、念非公無可者、注索隱云、諸侯王表有左官之律、韋昭以爲左猶下也、然地道尊右、右貴左賤、故謂貶秩爲左遷也、【九江郡】明九江府也、一統志、九江府禹貢荊楊二州之境、秦爲九江郡、漢初屬豫章郡、晉置潯陽郡、隋改曰九江郡、唐爲江州、天寶初改潯陽郡、乾元初復爲江州、詩の中に潯陽江頭と云、又江州司馬と云共に九江也、【司馬】唐の時の司馬は官を貶され、出て外任に謫遷し、刺史となるの官也、事物紀原六、司馬曲禮天子之五官有司馬、周禮以爲政官之率、漢爲三公之任、周政官之屬又有大小軍與行都家等職、本任武之官、古者軍行則有之、左傳晉悼公以魏絳爲中軍司馬是也、魏晉以後刺史帶將軍開府者則置之、自此始爲州郡官、唐高宗即位改治中爲司馬節度、亦有行軍司馬、今與節度團練副使並以爲貶責之官、【湓浦口】九江府湓浦在府城西、源出瑞昌縣靑盆山、亦名盆水、相傳昔嘗有人此處洗銅盆、水忽暴漲、失盆投水取之、見一龍啣盆、奪之而出、故名盆水、【錚々然】字彙、錚、抽庚切、金聲、後漢書劉盆傳、卿所謂鐵中錚々庸中佼佼者、琵琶の音響淸亮金聲の如くなるを云也、【京都聲】唐の京は長安也、琵琶の調に京風聲あり、【問其人】其人は琵琶を彈ずる人を指す、鄙の境にてめづらしき京樣の曲調を操を怪て、如何なる人ぞと其人の由て來る所を問ふ也、【娼女】は歌妓也、日本の舞兒也、【善才】曲師之稱也、穆氏曹氏の二人を師として學たると也、【委身】身を人にうちまかせて託する也、少小の時は聲色を以て人に愛せらるれども、年長じ顏色衰て後に身をすて委て、商賈の人の婦となりたると也、【遂命酒】樂天婦の語を聞了て、遂に酒を命じて飮しむるなり、【曲罷憫然】商婦命にまかせて琵琶を數曲彈し、罷て心に感慨を興し、憫然と憂ひいたむ也、【自敘—】自ら我が少小にて娼女たりし時は、月花の宴に廁て歡樂を極めし事を言ひ敘る也、【今漂淪】今はおちぶれてと云義

午時に當て中天に懸り、炎光熾に發して凝て一所に停るが如し、西に傾き去らざるかと覺る也、【萬國―】此時に至て炎熱極て甚しく、萬國盡く焚くが如くになること、紅火を熾したる爐中に坐して在るに似たると也、

五嶽翠乾雲彩滅、陽侯海底愁波竭、（東岳泰山、南岳衡山、西岳華山、北岳恒山、中岳嵩山、陽侯海神、岳之翠乾、海之波竭、其熱可知、）何當一夕金風發、爲我掃除天下熱、（願金風之掃除其熱也、）

【五岳】五岳は衆山の宗、高而尊者也、唐虞有四岳、至周始有五嶽、爾雅泰華霍恒嵩、郭璞注霍山即天柱山爲衡山、衡山南岳也、東岳泰山在兗州、西岳華山在弘農、北岳恒山在定州、中岳嵩山在潁州、五岳の高も火氣に燒熬せられて、翠岱の色乾き、岫雲を蒸し昇す濕を含み不得して、雲色の彩も滅え絶たると也、【陽侯】淮南子覽冥訓、武王伐紂渡于孟津、陽侯之波逆流而擊、山海經波之神曰陽侯、陽侯は海底に在て酷暑の爲に海水を煎熬し竭されんことを愁ると也、山乾き海涸るときは炎熱の勢極れり、【何當―】炎蒸如此酷虐なれば、黎民或は孑遺なきに至んか、何つか當に秋氣律を回して、一夕金風の涼發して此炎光を逐ひ、我が爲に天下の熱を掃除し盡して、氣息爽快ならしめんやと也、金風は秋風也、秋は金に屬すれば也、

○琵琶行

（按白樂天自序云、元和十年予左遷九江郡司馬、明年秋送客湓浦口、聞舟船中夜彈琵琶者、聽其音錚々然有京都聲、問其人、本長安娼女嘗學琵琶於穆曹二善才、年長色衰委身爲賈人婦、遂命酒使快彈數曲、曲罷憫然自敍少小時歡樂事、今漂淪憔悴轉徙於江湖間、予出官二年恬然自安、感是人言是夕始覺有遷謫意、因爲長句歌以贈之、凡六百一十二言、命曰琵琶行、○其抑揚頓挫流離沈鬱之態、雖千載之下宛然琵琶哀怨之聲也、）

本集十二載之、琵琶行を琵琶引に作也、【琵琶】風俗通六、謹按此近世樂家所作不知誰也、以手批把因以爲名、長三尺五寸、法天地人與五行、四絃象四時、○釋名批把本出於胡中、馬上所鼓也、推手前曰批、引手却曰把、象鼓時以爲名也、○晉成公綏琵琶賦曰、八音之用諳于典藝、簫韶九奏物有容制、惟此琵琶興自末世、爾乃託巧班輸、如意橫施、因形造美、洪殺得宜、柄如翠虬之仰首、盤似靈龜之觜巂、（臨樂）則齊州之丹木、柱則梁山之象犀、撥以玳瑁、格以瑤枝、若夫盤

憐みを請ふことをせんやと云意也、

野人曠蕩無靦顏、江淹曰野人疎散曠蕩、無名利拘繫靦顏見公等上

豈可久在王公間、未試囊中飡李預傳預居長安、毎羨古人

玉法、明朝且入藍田山、

飡玉之法、乃採訪藍田、躬往攻掘得若環璧雜器形者、搗爲屑服食之、

【野人】公自謂也、【曠蕩】洞簫賦聯延曠蕩注善曰、曠蕩寛廣之貌、人品の放達にして小節に拘らざるを云也、【靦顏】靦は面慙也、小雅有靦面目、國語范蠡曰、雖靦然人面實禽獸也、言我れ野人性曠蕩として物に拘束せず、靦顏なしと云とも、豈に久く王侯の間に在て、冷飲殘炙の辱を忍て去ことなからんや、我れ堂上の燕に似ることをせまじきぞと云意也、【注】僞蘇注也、【未試—】隱れ去んとして辭をなす也、嘗て聞く道家に囊中に玉を儲へ、これを飡て生を願ふの法ありと我未だ試み徼とせず、明朝且つ藍田山に入て、玉を掘り索て、其法を試みて見んと也、【藍田山】一統志、西安府藍田縣東南在三十里、山出玉英、因名藍田、又名玉山、形如覆車、亦名覆車山、【注】【李預傳】見于魏書列傳

二十三、

○苦熱行

唐文粹卷十三載之、夏月の暑熱酷しきを苦て作る也、

王轂

新唐書列傳無傳、藝文志第五十、王轂詩集三卷、注王轂字虛中、乾寧進士第、郎官致仕、

祝融南來鞭火龍、祝融南方之神、火旗焰々燒天紅、日輪當午凝不去、萬國如在紅爐中、

【祝融】禮記月令、孟夏之月日在畢、其日丙丁其帝炎帝、其神祝融、注顓頊氏之子名黎、火官之臣、夏の神を祝融と云、又山海經卷八、海外南經曰、南方祝融獸身人面乘兩龍、郭璞注、火神也、夏は火に屬し南方を主る、故に南來と云、祝融は火神故に又火龍に乘て鞭を着て、暑氣の令を行ふこと酷た嚴也、【火旗—】祝融火の令を行ふに、火旗を建て巡行し、焔々たる光炎を燒て紅ならしむるとなり、【日輪—】爛々たる日輪、日中

圖一云、長安城北出西頭第一門曰横門、門外有橋曰横橋、注追風逐電、王子淵得賢臣頌、追奔電、逐遺風、【言肅宗―】此注甚非也、此詩天寶の初の作也、肅宗の朝に非ず、且つ肅宗の時中國靜安に歸して唐室中興すと云へども、邊郡の征役已むことなし、豈に横門を出て征伐するの役なからんや、又云厭亂願治之心於此可見、或は太平にして甲馬の用なしと云ひ、又厭亂願治と云、何そ言の相矛盾するや、

○去矣行

本集十一載之、題注鶴曰、公在嚴武幕中賦去矣行、明年正月果歸溪上、鮑注以爲、天寶間公在卒府、數上賦頌不蒙采錄、欲辭職而賦此、非也、

杜子美

君不見韝上鷹、一飽則飛掣、鮑明遠詩、昔如韝上鷹、今似檻中猿、呂布傳曹操曰、譬如養鷹、飢則爲用飽則颺去、韝臂捍也、縛左右手以便事、〔韝〕音溝、

焉能作堂上燕、啣泥附炎熱、古詩、思爲雙飛燕、啣泥巢君室、○賢人義士不附權勢、如鷹之飽而高、不學燕之戀而附、

【韝上鷹】韝はゆがけ也、韋を以て作て臂を韜て鷹をすゑる也、韝上の鷹はこぶしに居たる鷹と云義也、文選鮑明遠東武吟曰、昔如韝上鷹、今似檻中猿、【飛掣】掣曳也、韝上の鷹一飽すれば飛掣し去て高く揚り、人に依り倚て憐を不求也、後漢書列傳六十五、呂布因陳登求徐州牧不得、布怒曰、爲卿所賣耳、登徐對之曰、登見曹公言、養將軍譬如養虎、當飽其肉、不飽則將噬人、公曰不如卿言、譬如養鷹、飢即爲用飽則颺去、輔按杜公の意は只飛揚の義を取れるのみ、飢れば來り就て用られ、飽けば去て恩を不思、是小人利を見て義を不見者の爲也、豈杜公これに比して自居んや、只鷹の飛掣し去て高く擧り自ら奮て、而人に向て羽を垂れ食を索ることなき所を取て、高尚の操行に比せる也、飢飽の上に說き及すべからず、大雅大明篇卒章、維師尚父、時維鷹揚、此詩を以て參へ見べし、【焉能―】文選十九首古詩、思爲雙飛燕、啣泥巢君屋、注良曰、燕馴善之鳥、燕は泥を銜て堂に入り、堂宇の庇蔭に依て巢を托して居を安し、出入飛鳴して曾て離るゝことなし、言は焉ぞ能く堂上の燕の如く人に依て不離、甜言蜜語して威福の聲燄に阿り附き、

滿身萬里方看汗流血、顏延年賦、膺門沫赭汗溝走血、應劭注曰、大宛馬汗血霑濡也、

四句馬の形相を云、【腕促―】相馬經に腕は促まるを好とす、腕促まれば健也、蹄は高を佳とす、蹄高ければ能く險峻を渉る、此馬腕促り蹄高して足底堅剛、妥帖鐵を踏むが如し、馬の貴相を具へたる者也、踣踏也、【交河】前漢書西域傳、車師前國王治交河城、河水分流繞城下、故號交河、去長安八千一百五十里、【層氷】は層々に凝結して氷甚厚を云、楚辭增氷峨々、注言北方常寒、其氷重累峨々如山、此句馬の蹄健强なるを云、昔時胡に在し時、幾度か交河上の層氷を蹴踏て破裂したると也、【五花】詳に第十卷李白將進酒に見えたり、舊注には馬の毛色なりと云、楊升菴は鬣を剪て花樣とすと云て、多く證據を引けり、然も此句は毛色の五花の樣ある者と作て可看、五花の彩紋散じて彩雲の如くに身上に滿ると也、【萬里―】萬里の路を歷て來れば、方に其汗に血を流すを看ると也、漢書武帝紀、太初四年春貳師將軍廣利斬大宛王首、獲汗血馬來、注應劭曰、大宛舊有天馬種、蹋石汗血、汗從前肩髆出如血、號一日千里、注【顏延年賦】赭白馬賦也、膺門は胸也汗溝と云、尋常の馬は膺のむながいの當る處と、汗溝に白沫を汗にす、天馬は赭沫を出すと也、汗の色赤き故汗血と云也、

長安壯兒不敢騎、走過掣電傾城知、馬善行者追風逐電、蓋言疾也、不敢騎、畏其太疾、

青絲絡頭爲君老、何由却出橫門道、言肅宗中興安史之難已平、吐蕃不敢入寇、故此馬老於絡頭、無緣再出橫門之道路、子美厭亂願治之心於此可見、〔橫〕音光、

【長安壯―】長安の壯兒も敢此馬に騎ることを不得、其走るを觀るに、掣電烱爍の眼を經るより猶過て、疾きこと國人擧て知れば也、此れ尋常の壯兒の馭し得る所にてなき神駿なることを畏て也、文選孫楚詩、傾城遠追送、注善曰傾猶盡也、【青絲―】古樂府青絲繫馬尾、黃金絡馬頭、如是神駿は戎行に備へ戰場に馳せ、敵を衝破するに用ゆべし、今空く青絲を以て頭を絡て、槽櫪の間に老るのみ、何に由てか却て長安城の橫門を出て、戎狄に向ひ血戰することを期せんやと也、神材あつて用られず、固に嘆惜すべし、三輔黃

中國に來る、故に東に向て來る也、【久無敵】陣に臨て騎て戰へば、向ふ處を摧き敗て逐ひ走らしむ、相當て敵し抗ふ者なきこと既年久し、史記項羽本紀、項王謂亭長曰、吾騎此馬五歲所當無敵、【與人一心】騎る者の志向を悟て、馭するに信せて進退左右して、嘗て逆戾の性なし、【成大功】騎者と心を一にして進退機を不失、故に能敵を敗て大功業を成し得也、史記廉頗傳頗曰、我爲趙將有攻城野戰之大功、此二句は驄馬の胡國にありし時を云、未だ中國に來らざる以前也、

功成惠養隨所致、飄々遠自流沙至、天馬歌天馬徠從西極、涉流沙九夷服、雄姿未受伏櫪恩、梁元帝謝馬啓、翙伊伏櫪彌結懷恩、猛氣猶思戰場利、言雖居皂棧而非馬之本心、故思奮於戰場以爲利、

四句既に中國に來ることを云、【功成―】大功既に成して愛賞を承け、惠み養れて唯人の送り致に隨て行き向ふ也、【惠養】赭白馬賦、願終惠養蔭本枝兮、【飄々】健氣俊逸にして四蹄輕き貌を云也、【自流沙至】禹貢東漸于海西及于流沙、正義流沙當是西境最遠者也、楊雄甘泉賦、東燭滄海西燿流沙、注漢武本紀、太初四年春貳師將軍廣利斬大宛王首獲汗血馬來、作西極天馬之歌、【雄姿】赭白馬賦、弭雄姿以奉引、馬の姿質雄健なる也、【伏櫪】養ひ畜ふを云也、前漢書列傳四十五李尋曰、馬不伏歷不可以趨道、士不素養不可以重國、注師古曰、伏歷謂伏槽歷而秣之也、【猛氣】宋玉笛賦、悲猛氣兮飄疾、【戰場】戰國策張儀曰、魏之地勢固戰場、言ろは驄馬遠く流沙を涉て始て中國に至る、其雄逸の姿未だ櫪に伏して芻養を承るの恩を受けざれども、猛氣は猶戰場に向て敵を破て利を得んことを思ふと也、注杜詩の意と相違す、道理不通、故に不取、【皂棧】皂馬閑也、漢書音義食牛馬器、以木作如槽、棧文選赭白馬賦注、以板禦濕而承馬足也、

腕促蹄高如踣鐵、相馬經腕欲促、蹄欲高、文穜如踣鐵、皆馬之奇也、交河幾蹴層冰裂、唐安西去交河七百里、層冰是氷名、東方朔神異記曰、北方有層氷萬里厚百丈、公言西邊之地有層積之氷、馬幾度蹴踏之而破裂、五花散作雲

御の奴僕には白飯を與へ飡しむる也、【馬青芻】其乘馬には青芻を刈來て與へ食はしめ、奴馬に至まで心を及ぼして展待すると也芻は草也、注【殊禮】常禮に超て殊に厚く饗饕するを云也、

○高都護驄馬行

此文爲高適作、以良馬喩君子、取其致遠之才、

本集一載之、題注鶴曰、按新舊史高仙芝開元末爲安西副都護、舊注以爲高適非也、○高仙芝高麗人善騎射、開元末夫蒙靈詧表爲安西副都護、○唐汝詢曰、按高仙芝以天寶六載破小勃律始建邊功、是詩蓋作于天寶初、疑仙芝亦嘗留寓京師、而未得大用、故子美惜之如此、或曰此子美自況之辭、蓋言都護徒取己爲客不能薦之于朝、故有青絲絡頭之歎、其說亦通、然通篇俱言戰伐、仍是諭都護爲切、【都護】前漢書列傳四十、鄭吉發諸國兵攻破車師、遷衞司馬使護鄯善以西南道、神爵中匈奴乖亂、日逐王先賢撣隨吉降漢、吉既破車師降日逐威震西域、遂幷護車師以西北道、故號都護、都護之置自吉始焉、邊塞の諸國を鎮撫し、外蠻を拊循する職也、【驄】字彙音聰、馬青白色、注高適と云非也、唐書を按ずるに高適西域の副都たることなし、本注を以て正とすべし、

杜子美

安西都護胡青驄、唐貞觀二十四年平高昌、以其地置西州、於西州置安西都護府、聲價欻然來向東、此馬臨陣久無敵、與人一心成大功、臨陣成功指言高都護所御也、

【安西都護】本注洙曰、唐安西郡東至烏蓍鎭、去交河郡七百里、南隣吐蕃、西連疏勒、去葱嶺七百里、北拒突厥、貞觀中初置安西都護府於西州、顯慶中移龜茲城、新唐書地理志云、安西大都護府治西州、【胡青驄】胡國の青毛の驄馬、或は胡國青海の驄馬也、隨書西域傳、西域吐谷渾有青海、中有小山、其俗至冬氷合輙放牝馬於其上、言得龍種、嘗得波斯馬放入海、因生驄駒、日行千里、故時稱青海驄馬、【聲價】令名の世に聞ること貴く重き也、顏延年赭白馬賦、齒算延長聲價隆振、【欻然】赭白馬賦、欻聳擢以鴻驚、注善曰、欻忽也、欻有所吹起也、欻然忽然也、【來向東】西域より

宮を天の紫微に比す、百官を月卿雲客と云、故に朝廷を霄漢と云、言ろは竇氏禁中に入ては繡衣を以て春の日に殿庭に當て立て、百官の儀法を糾治せらるゝにてあらんと也、大朝會の時殿中の御史白筆を簪にして側階而立也、【綵服—】竇氏の親長安に在り故に云、老萊子が如く彩服を着て、日々庭闈に趨て親を樂ましめ、孝を盡さるゝにてあらんと也、高士傳老萊子老養二親、行年七十嬰兒自娛、著五色彩衣、

省郎京尹必俯拾、薛光戯友人曰、古人云青紫可俯拾、吾令尹亦可俯拾、

江花未落還成都、肯訪浣花老翁、無爲君酤酒滿眼酤、與奴白飯馬青芻、甫約竇再來成都、還肯來浣花溪相訪否、滿眼酤謂滿前士卒皆有勞、車從僕隷皆待以殊禮、所以尊於竇也、

【省郎】尚書中書平章事の類皆省官也、【京尹】事文類聚遺集十三云、漢武帝置京兆尹右扶風左馮翊爲三輔、唐永徽中改尹曰長史、開元元年改京兆府長史復爲尹、【必俯拾】前漢書列傳四十五、夏侯勝常謂諸生曰、士病不明經術、經術苟明其取青紫如俛拾地芥耳、注師古曰、俛而拾之言其易而必得也、言ろは此行の勳功に因て、省郎京尹等に上遷せんとは、地上にある物を俯して拾ひ擧るが如く、甚だ易して得らるるにてあらんと也、【江花】蜀の錦江の花也、只今京に詣て軍事の便宜を入奏して、又蜀に使として來られば必ず錦江の邊花尚不落時節には、成都に還らるゝにてあらんぞと也、【肯訪—】一統志成都府浣花溪在府城西南五里、一名百花潭、按吳中復冀國夫人任氏碑記、夫人微時見一僧墜汚渠、爲濯其衣、百花滿潭、因名其潭曰浣花、艸堂在府城西南五里浣花溪上、即杜甫宅也、甫詩萬里橋西宅、百花潭北莊謂此、杜子美の艸堂浣花溪にあり、故に自稱して浣花の老翁と云、言ろは再び成都に還り來られなば、浣花溪上の老翁を忘るゝことなく、肯て來り訪れんや無やと也、【爲君—】君を送るが爲に酒を勸ると也、【滿眼酤】本注夢弼曰、說者謂蜀人酤酒挈以竹筒、竹筒上有穿繩眼、其酤酒者曰滿眼酤、言滿迫筒眼也、竹の筒を以て酒を酤ふ筒の上に提繩を穿ちとをす穴あり、其筒に滿て繩際まで酒の及ぶを滿眼酤と云と也、【與奴白飯】侍

也、【吐蕃憑陵】憑は依也、滿也、陵犯侮也、侵也、己れが悍猾を憑て邊際を犯し侵す也、其氣勢頗麤暴也、【竇氏―】竇侍御出檢察として、邊軍の事を領して一時の所須に應給する也、【運糧】軍卒の糧を計て運送して乏絶せしめざる也、【繩橋】本注鶴曰、繩橋在成都即笮橋、蓋蜀人以竹索爲橋也、華陽國志蜀志云、萬里橋西上曰笮橋、大明一統志、成都府笮橋在府城西四里、晉桓溫伐蜀戰於此、又銖繩橋在威州東一十五里、辮竹爲繩其上施木板、長三十丈、通蕃漢路、【壯士喜】軍士飢乏の憂なし、故に喜ぶ也、【斬木―】華陽國志蜀志、臨卭縣火井江有火井、夜時光映上昭、民欲其火光以家火投之、頃許如雷聲火焰出通、耀數十里、以竹筒盛其光可拽行、終日不滅也、木は猿の棲宿する處也、木を斬て其居を拔く、故窮困せる猿哀呼する也、此れ火井に備て吐蕃の窟宅を討取て、賊徒の據ろを奪ふを云也、【八州】本注夢弼曰、按唐志劍南節度西抗吐蕃、南撫蠻獠、都督松維恭蓬雅黎姚悉八州、【刺史】太守也、一州の事を掌る、唐至德二載罷郡爲州、復以太守爲刺史、上州刺史一員從三品、中州一員正四品、下州一員正四品下、竇侍御は檢察として八州の刺史を都督に依て、八州の刺史皆竇氏に服して、各力を展て一戰せんことを思ふ也、【三城】本注夢弼曰、三城謂姚維松也、皆當吐蕃之要衝、三城の邊を守る備へ、竇氏の檢察に依て便宜を得て今より却て固くなり守禦の備へ圖り謀ることなるべきと也、

此行入奏計未小、密奉聖旨恩宜殊、繡衣春當霄漢立、綵服日向庭闈趨、

【此行―】此度出て使として諸州を檢察し、軍事の便宜を檢して入て天子に奏せらるゝこと、其計略固小箇的の事に非ず、【聖旨】天子の意向也、奏せる計天子納れ容られて、密に叡襟の趣を以て咨謀玉ふべし、竇氏其聖旨を承け奉て、策を獻し聖恩を承ること殊に渥かるべきぞと也、【繡衣】檢察の使を卒て朝に入て復命して後は、又本官の侍御史也、故に侍御の事を用ゆ、前漢書卷十九百官表、侍御史有繡衣直指、注服虔曰、指事而行無阿私也、師古曰、衣以繡者尊寵之也、本注漢暴勝之衣繡衣持斧出使、【當霄漢】天子の

ることは代に絶て所無の人なると也、【烱如—】心の清徹なるを云、一段は一條の意、侍御の心瑩徹して些の濁氣なきこと、たとへば一段の清水の萬壑より出來るを汲て、迎風寒露等の涼しき殿上の玉壺中に入て供へ置たるが如くなるとなり、本集注洙曰、漢有迎風寒露之館、古詩瑩若玉壺氷、言清徹也、此注に氷を作水非也、【蔗漿】蔗は甘蔗也、砂糖也、暑月に冷水に砂糖を和して飲むを蔗漿と云、宋玉招魂、臑鼈炮羔有蔗漿些と云是也、其胸中の蕭散として煩擾なきこと、新に造たる蔗漿厨中に歸し飲に具へ、金盌に盛て清冷凍れる如くなるを飲て、煩熱を洗滌して君が軀を涼うし寧んじたる時なるかと覺ると也、此一句少く解し得がたき所あり、君軀は竇侍御となして可説、師注曰、蔗漿可以除煩、天子方憂吐蕃、不無内熱、今竇生入奏忠言上沃帝心、如蔗漿然、此注は稍牽合して附會するに似たり、

政用疎通合典則、戚聯豪貴耽文儒、兵革未息人未蘇、天子亦念西南隅、吐蕃憑陵氣頗麤、（時吐蕃欲取成都為東府）竇氏檢察應時須、運糧繩橋壯士喜、（繩橋在成都、即笮橋、）斬木火井窮猿呼、（火井在蓬州、水涸時以火投井中、即焰出移時方滅、）八州刺史思一戰、三城守邊却可圖、（按唐志劍南節度使西抗吐蕃、南撫蠻獠、統團結營及松維蓬恭雅黎姚悉八州兵馬、三城是青海三城、）

【政用—】政は竇生が軍事を按察檢校するを云、疎通は大略の要領を得て、瑣碎なることは省せざるを云、【合典則】二字ともにのりと讀む、政おほあらめにして細行を事とせざれども、其事を處置すること道理あつて、皆典則に合ふと也、【戚聯豪貴】千家注太宗皇后竇氏、侍御正其族也、故云戚聯豪貴、【耽文儒】耽俗耽字過樂也、ふけると讀む、文學儒術を耽り嗜也、【兵革未息】兵刀鎗の類、革は甲冑の類、兵革を用て攻伐すること未息なり、【人未蘇】未蘇とは未安の意也、書經徯我后后來其蘇、吐蕃の役戍に苦て民未だ蘇息することを不得也、【天子亦—】西南隅は吐蕃を指す、天子常に西南の邊不安ことを憂ひ念ひ玉ふと

得無有怠心乎、苟戍役未已室家怨思、亦非垂拱燕安之秋也、須滌蕩餘寇洗甲兵而不用乃可耳、其後肅宗果怠於政卒罷汝陽將士無主而使思明復猖獗、子美可謂有深慮矣、

○入奏行 贈西川檢察使竇侍御

本集卷八載之、題作入奏行贈西山檢察使竇侍御、本集黄鶴曰、時吐蕃分三道入寇、欲取成都為東府、竇公以御史出檢校諸州軍儲器械、得以便宜入奏、公作是詩以贈之、【檢察使】唐の諸使司、檢察、按察、觀察、皆同職也、官吏の善績農桑刑獄等の事を點檢按察する也、【侍御史】漢置侍御史十五員、受公卿奏事舉劾按章、唐又置内供奉掌糾舉百僚、侍御史號臺端、本官は侍御史にて又檢察使と為て出で、諸州を檢校する也、

杜子美

竇侍御驥之子鳳之雛、北齊裴景鸞景鴻河東聞喜人、並有逸才、河東人呼景鸞為驥子、晋陸雲幼時吳尚書閔鴻見而奇之曰、此兒若非龍駒當是鳳雛、年未三十忠義俱、骨鯁絶代無、炯如一段清水出萬壑、置在迎風寒露之玉壺、漢有迎風寒露之館、古詩堂若玉壺水、言其清徹也、蔗漿歸厨金盌凍、洗滌煩熱足以寧君軀、

【竇侍御】名字未考、【驥之子——】竇公の英質甚だ凡ならず、固に驥の駒子か鳳の雛兒なるべし、いかさま徒ものには非ずと也、注北齊裴景鸞傳未考、【晋陸雲】陸機之弟也、晋書列傳二十四載此語也、【年未三——】竇氏が年紀未だ三十歳にも不足ども、忠義俱に盡せる君子也、【骨鯁】本集注趙曰、骨鯁者剛正之謂、若肉之有骨而魚之有鯁也、字彙鯁音梗魚骨、又骨不下咽也、世謂謇諤為骨鯁、謂直言難受如骨之哽咽也、韻會鯁字注說文食骨留咽中也、从骨更聲、徐曰古有骨鯁之臣、遇事敢刺鯁不從俗也、集韻或作骾、通作鯁、歐陽氏曰、骨鯁二字或作骨骾、說者多誤以骨刺喉為說、宋景文以骨強四支冠其上以骨書之、蓋欲正世人之失、堅强正直之義也、骨鯁猶言骨立之類、竇侍御の事に遇て正直を持して苟くも阿合せず、剛亮な

頌其序甚工、世祖以照爲中書舍人、本注趙曰、此紀實事也、至德三年七月黃河三十里淸如井水、四日而變、蓋收京之祥也、詞人は文辭を綴ることを善する人也、解は曉也、昔時河水淸て鮑照能く河淸頌を作、今又黃河淸流となる、一時の詞人も亦能頌作ることを解す、必ず河淸頌作る者あるべしと云意也、【田家望々】本注希曰、按史乾元二年春旱、故有田家望惜雨乾之句、田家の農夫望々と仰て旱を憂ひ、雨澤の乾き竭ることを嘆惜する也、【布穀―】偶々春の時に及て布穀處々に鳴て、春の稼種を催すころになりたると也、師曠禽經、鳲鳩戴勝布穀也、亦曰穫穀、春耕候也、注農事方起此鳥飛鳴于桑間、云五穀可布種、故曰布穀、

淇上健兒歸莫懶、衞相州軍屯於淇上者、罷戍而歸農、城南思婦愁多夢、安得壯士挽天河、淨洗甲兵長不用、蜀相劉文靜曰、方今鼎足宇宙、鑊君黎民、烏得五丁壯士、挽回天河、洗滌天下之甲兵、車書一同凶器長不用、皇天后土豈不知區區之誠也、

【淇上―】本注晁曰、時思明餘黨未殄、衞相等州尚留兵屯、故有淇上健兒之句、【健兒】軍士を云、古樂府健兒須快馬、【歸莫懶】家に歸るに懶して久く外に停ることなかれと云意、【城南】夢弼曰、城南謂長安之城南也、【思婦】征夫を思ふ婦也、王徽詩、思婦臨高臺、二句言は史思明が餘黨未除して、軍卒の備へ未解、兵を罷て屯田する淇上の健兒、早く敵を滅し悉すの謀をなして、功を卒て家に還べし、歸に懶して謀略に怠ることなかるべし、戍役未已に依て、城南に留て室を守り、征夫を思ふ婦は愁苦して神安からず、夜寐夢多きぞと也、【安得―】【壯士】史記刺客傳荊軻歌、壯士一去兮不復還、言は大亂既に治て海内靜なれども、餘寇尚未殄して戍役も亦未已、兵戈を嚢にすることなし、安ぞ壯士の能く天河を挽き傾る力ある者を得て、直下に注ぎ傾けて天下の餘寇を悉く蕩滌し、甲兵を淨く洗て復た用ることなきやうにすることを得んやと也、後漢李尤歌、安得壯士翻日車、梁沈約詩、安得壯士馳奔波、劉向說苑、武王伐紂風霽而乘以大雨、散宜生諫曰、非妖與、王曰非也、天洗兵也、[注]僞蘇注、也、○唐仲言曰、胡寇頓平煥乎周漢之中興也、今四方皆入貢矣、祥瑞爭來獻矣、風雨調而民安其業矣、戰士

詞人解撰河清頌、田家望々惜雨乾、（乾元二年春旱、）布穀處々催春種、（是歳收京七月黄河三十里渇如井水、）

【寸地尺天】は普天の下率土の濱と云と同じ、天地の間は尺寸も天子有にあらずと云ことなく、皆入朝して貢物を獻ずる也、【奇祥―】祥とは凡吉凶之兆皆曰祥、祥之爲言詳也、天欲降以禍福先以吉凶之兆詳審告悟之也、瑞以玉爲信曰瑞、又祥瑞天以人君有德、將錫之以歷年錫之以五福先出此以與之爲信也、天子の德宇宙に偏して諸奇異の祥瑞を生ず、故に萬國爭て我れ先にと來り送る也、【不知―】竹書紀年上卷、帝舜九年西王母來朝獻白環玉玦、帝王世紀云、西王母慕舜之德來獻白環、昔舜の時王母白環を獻ず、不知今日の天下何れの國よりか又白環を獻じ來らんや、致は納也、注世說今の本に無此事、【復道―】顧野王瑞應圖、王者宴不及醉、刑罰中人不爲非則銀甕出、復道ふを聞けば諸山に於て彼の明王の世に出ると云ふ、銀甕を得たると也、注禮記卷九禮運篇、山出器車、河出馬圖、蔡沈注舊說器爲銀甕丹甑、車爲山車垂鉤、謂不待揉治而自圓曲也、【隱士―】政法暴虐なるときは、隱士山に入て紫芝曲を歌て身を遁る、今中興の治に遇ふ、山林の隱士出て朝に仕ふべし、紫芝の曲を歌て時を憤ることを休べしと也、注【皇甫謐】晉史皇甫謐字士安、博綜典籍百家之言、時謂之書淫、自號玄晏先生、【坑黜】坑に陥れ殺して黜け不用也、【儒術】儒術を修るの士也、【四皓】四人皆大老鬚髮悉く皓白也、故に四皓と云也、東園公、綺里季、夏黃公、角里先生是也、【逶迤】王逸楚辭注曰、逶迤長貌也、深谷長く連亘するを云也、【曄々】ひかりてりたる貌也、【紫芝】紫色の芝也、芝に五色あり、【療飢】飢をたすけて身を養ふ也、【唐虞】唐堯虞舜也、【駟馬】一車に四馬を駕する也、【高蓋】車上にかざす蓋を高く張る也、駟馬の車に高蓋を施す、貴顯の高官所乘也、【其憂甚大】位貴ければ其任おもし、故に憂も亦大也、【富貴之―】富貴の士は人のそねみ多して畏れ多也、【地肺山】長安の終南山也、【詞人解選―】拾遺記、黃河千年一清至聖文君、以爲大瑞、沈約宋書、鮑照字明遠、文辭贍逸、元嘉中河濟俱淸、當時以爲美瑞、照爲河淸

容貌優偉なるを云、張公は一生耿介として俗に擢たる江海の客也、其身の長け九尺ありて鬚眉蒼然として美なると也、【徵起―】風雲會は天下擾亂、風の雲を逐ふ如くなる時會を云、張鎬天子の徵に應じて身を起し、偶ゝ天下擾亂の時會に遇ふたると也、文選呉季重答魏太子牋云、臣幸得下愚之才値風雲之會、時邁齒載、猶欲觸胷奪首展其割裂之用也、【扶顚】相となる人の任也、論語季氏篇、危而不持顚而不扶、則將焉用彼相矣、【籌策】前漢書卷四十九爰盎傳云、盎雖居家、景帝時々使人問籌策、張鎬進で國運の顚覆するを扶持するを見て、始て其籌策の良ことを知ると也、【青袍白馬】本注夢弼曰、青袍白馬更何有、言祿山之亂已平矣、南史侯景傳、大同中童謠曰、青絲白馬壽陽來、至渦陽之敗、景乘白馬青絲爲轡欲以應讖、庾信江南賦、青袍如艸、白馬如練、侯景が亂を以て祿山に比す、扶持の籌策固に良ときは、青袍白馬の賊力盡て順に歸す、更に復た何んか有んやとなり、【後漢―】本注夢弼曰、後漢今周喜再昌、謂肅宗如漢光武周宣王之中興也、後漢の光武は王奔が簒て有たる天下を恢復して漢家を中興す、肅宗の功これと均し、周宣王は厲王の亡し玉ひし世を再び興して周室を安ず、これは是當時の周の中興、肅宗の成功は是れ今の周と謂べし、古今均く是再び昌なることを喜と也、東坡志林老杜曰、張公一生江海客、身長九尺鬚眉蒼、謂張鎬也、蕭嵩薦之云、用之則爲帝王師、不用則窮谷一叟爾、夢弼曰、張鎬儀狀瓌瑋性簡重好王霸大略、始擢爲拾遺、房琯罷鎬遂爲相、蔡寬夫詩話老杜云、張公一生江海客、身長九尺鬚眉蒼、徵起適遇風雲會、扶顚始知籌策良、說者以爲張公鎬也、鎬雖史稱有王霸大略、然當爲相收復兩京時不聞別有奇功、但有地策史思明欲以范陽歸順爲僞、知許叔冀臨難必變二事耳、然當時亦不果用也、豈史氏或有遺耶、

寸地尺天皆入貢、奇祥異瑞爭來送、不知何國致白環、世說周時西王母獻白環幷佩

復道諸山得銀甕、禮運山出器車、注器車謂若銀甕丹甑

隱士休歌紫芝曲、皇甫謐高士傳、秦世道滅德消坑黜儒術、四皓於是退而作歌曰、莫々高山深谷逶迤、曄々紫芝可以療飢、唐虞世遠吾將何歸、駟馬高蓋其憂甚大、富貴之畏人兮不如貧賤之肆志、乃共入商洛隱地肺山

時來不得誇身強、

【攀龍―】楊子法言八淵騫篇云、攀龍鱗附鳳翼、巽以揚之、勃々乎其不可及乎、楊子の語を借て龍鳳を天子に比す、當時の群臣龍の鱗に攀ち、鳳の翼に附が如く天子に依附して、威武の勢當り近きがたしと云意也、【天下―】天下の武將盡く戰功に因て優賞を承け、化して侯王の爵に上りたると也、【汝等】諸軍士の戰功に因て厚賞を得たる者を指す【豈知―】安慶緒史思明が亂を平ぐること、武夫勇卒皆以爲く、おのれ〳〵が勳功に因ると、豈に知んや撥亂の籌策皆天子の聖明より出て、速に賊を除き功を成し、帝の力に依て首領を不失して中興の將となりたることを、是元より一己の功に非ず、一時の佳運に會て厚く賞を受ることを得たり、必ず身力の强健に誇り自負することを得ざらんと也、【帝力】擊壤歌云、日出而作日入而息、鑿井而飮耕地而食、帝何力於我哉、

關中既留蕭丞相、（蕭何餉餽不絕糧道）幕下復用張子房、（高祖曰運籌帷幄之中吾不如子房）張公一生

江海客、身長九尺鬚眉蒼、（謂張鎬也）徵起適遇風雲會、（陸機曰、蒙彼風雲會）扶顛始知籌策良、青袍白馬更何有、後漢今周喜再昌、

【關中】長安也、【蕭丞相】本注夢弼曰、京師既平以蕭華留守、故比之蕭何、長安の留守に蕭華が爲れるを、漢の高祖の臣蕭何關中を守り、法令約束を爲り戶口を計て、轉漕して軍に給することを事とし、高祖の軍の糧食を乏絕せしめざるに比する也、按に舊唐書新唐書並に蕭華留守となるの說なし、夢弼何に據て蕭華なりと云や、不審也、【幕下】軍旅には常の居處なし、帳幕を以て遮り障ふ、故に將軍の居處を幕下と云、將軍を幕府と云、漢書李廣傳の注に見えたり、【復用張子房】本集注夢弼曰、以張鎬爲幕府參謀、故比之子房也、漢書の高祖紀運籌帷幄之中、決勝千里之外吾不如子房と云を借て、張鎬が幕府の參謀と爲て、軍の謀策に參り預るを以て張良に比する也、二人の姓同、故に何と子房とに比する也、【張公―】張鎬が

冕に隨て入と云、【紫禁】禁中を云、本注夢弼曰、謝希逸宣貴妃誄、收華紫禁、李善注、王者之宮象紫微、故謂宮中為紫禁、【正耐——】西京向に胡賊の藪となる、宮庭の烟花荒壞して顏色なし、今朝廷一新整肅なるに因て、烟花再び宮廷を繞て榮生するに耐たる也、

鶴駕通宵鳳輦備、劉向列仙傳、王子喬周靈王太子晉也、好吹笙作鳳鳴、七月七日於緱氏山頭乘白鶴、擧手謝時人而去、故後世稱太子之駕曰鶴駕、**鷄鳴問寢龍樓曉、**記文王為世子、鷄初鳴問內豎之御者曰今日安否何如○文選曲水詩序、出龍樓而問豎、注龍樓漢太子門名也、

【鶴駕——】二句太子の事を云、按に玄宗は至德元年既に上皇天帝の尊號を奉る、二年の冬十二月上皇西京に還り玉ふとき、肅宗累りに位を避て東宮に還んと請玉ども、上皇許されず、遂に傳國の璽を授らる、然るときは肅宗は當宁の主也、太子を以て稱すべからず、此時肅宗の太子は未立、乾元元載五月に至て成王俶を立て皇太子とす、此句或は成王太子立れて後に肅宗に朝し玉ふを云か、或は肅宗の玄宗を位に還し自ら東宮に還んと請ひ玉ふ意を推て、太子の玄宗に朝し玉ふを以て云か、姑く疑を闕く、【鶴駕】注本集魯注也、周の靈王の太子晉白鶴に乘じて仙してより、太子の駕を鶴駕と云、宮を白鶴と云也、【鷄鳴問寢】禮記八文王世子篇云、文王之為世子朝於王季日三、鷄初鳴而衣服至於寢門、問內豎之御者曰、今日安否何如、內豎曰安、文王乃喜、注內豎內庭之小臣、御是直日者、鷄の始て鳴て夜の將に明んとするとき、王季の寢室の門に至て內庭の小臣其日の宿の番に直りたる者に、夜中安寧なりや否と云ことを問ひ玉ふ也、【龍樓】本注夢弼曰、漢成帝為太子元帝嘗急召、太子出龍樓門不敢絕馳道、張晏注門樓上有銅龍、若白鶴飛廉之為名也、陳后山曰、文選王元長曲水詩序、出龍樓而問豎、入虎闈而齒胄、注龍樓漢太子門名也、漢の時所居の門の名を借て唐の太子を言ふ、言ろは鶴駕は既に宵すがら辨じ裝ひ、鳳輦を備て太子の出させらるゝを待つ、鷄既に鳴くとき卽ち太子入朝して寢門の安否を問ふ、龍樓を出れば尙曉にて夜未明と也、

攀龍附鳳勢莫當、楊子攀龍鱗附鳳翼、**天下盡化為侯王、汝等豈知蒙帝力、**

成王功大心轉小、（乾元元年徙封俶爲成王、）郭相謀深古來少、司徒淸鑒懸明鏡、尙書氣與秋天杳、二三豪俊爲時出、整頓乾坤濟時了、

【成王】肅宗の長子也、名は俶と云、至德元載九月以廣平王俶爲天下兵馬元帥、二載九月廣平王俶郭子儀收復西京、軍民見俶拜者皆泣曰、廣平王眞華夷之主、俶留長安三日、引大軍東出、十月廣平王郭子儀等收復東京、安慶緒帥其黨走河北、十月肅宗入西京、十一月廣平王俶郭子儀來自東京、上勞之曰、吾之家國由卿再造、十二月立廣平王俶爲楚王、乾元元年徙楚王俶爲成王、成王の賊を討て兩京を收復せらるゝは功は極て大なれども、其心は轉ゞ小にして、功を以て自ら伐らるゝことなきと也、【小心】大雅大明篇、維此文王小心翼々、【郭相】郭子儀也、子儀が謀略の深きことは古よりあること少れなる人也、【司徒】李光弼也、光弼が智慧の淸鑒は明鏡を懸たるが如く也、李光弼柳城人、肅宗朝拜節度使、平安史之亂、與郭子儀齊名、世稱李郭、光弼用兵謀定而後戰、能以少擊衆、中興戰功推爲第一、【尙書】兵部尙書王思禮也、傳前に見えたり、思禮が氣宇爽亮、秋天の氣と均く杳かなると也、【二三―】子儀が輩二三人の豪俊の士、時を救んが爲めに世に出て、乾坤の擾亂を整へ、一時の否塞を濟て已に功了れると也、【整頓】史記卷八十九陳餘傳云、宜整頓其士以守戰、

東走無復憶鱸魚、（張翰見秋風起、乃思吳中蓴羹鱸魚、命駕東歸、）南飛各有安巢鳥、（古詩越鳥巢南枝、）青春復隨冠冕入、紫禁正耐烟花繞、

【東走―】此れ敵將の降り來て幕下に在る者を云、張翰が故事を借用て云ふ、降將皆容れ用ひられて內顧の恐なく、乾坤新に整頓す、故に鱸魚を憶て還り去んとする者なきと也、張翰傳前に見えたり、【南飛】將士の肅宗に從て功を立たる者、各ゞ差に因て賞を得て、安處するを云、【青春―】乾元元載、玄宗傳國の璽を肅宗に授け玉ひて、元を乾元と改む、朝廷既に淸靜にして百寮戎衣を褫で、冠冕を以て入朝す、故に青春は冠

賊を敗る、固に限もなき大功也、【京師】長安也、蔡邕獨斷、天子所都曰京師、京水也、地下之衆者莫過於水、地上之衆者莫過於人、京大、師衆也、故曰京師、【皆騎汗血馬】汗血馬前の醉歌行の注に見えたり、汗血の馬は大宛より天子に獻ずる馬也、長安皆汗血の馬に騎と云へば、肅宗京師を克復して還幸あることと可知、此れ肅宗の長安に入玉ふことを言也、回紇虜名、至德元年八月回紇より使を遣て、助て賊を討せんと請て兵五千を送、【餧肉】史記列傳二十九陳餘傳、餘曰、今必倶死、如以肉委餓虎何益、杜公は元より回紇の兵を借ることを憤て、大に中國の耻とす、故に回紇を以て猛獸に比し、宴を賜ふを肉を餧ふと云、甚だ賤むの辭也、回紇兵を送り帝を助けて賊を討ずるの功に因て、王の師京に還て後、蒲萄宮に就て宴を賜て慰勞せらるゝを云也、本注前漢匈奴傳、元帝元壽中單于來朝、舍之于上林蒲萄宮、長安志有東西蒲萄園、

已喜皇威清海岱、常思仙仗過崆峒、三年笛裏關山月、萬國兵前艸木風、

【皇威】文選潘岳閒居賦、以先啓行、曜我皇威、晉張華詩、戎車震朔野、群帥贊皇威、皇帝の武威なり 即肅宗を指す、【清海岱】禹貢海岱惟青州、注東北據海西南距岱、本注夢弼曰、海謂山東、岱謂河北、已に喜ぶ皇帝の武威を以て、海岱山東河北の亂を平げて清謐になりたることをと也、【常思仙仗】玄宗を云也、【崆峒】唐書地理志、原州平原縣有崆峒山、言ろは已に肅宗の海岱を清し玉ふことを喜び、又常に玄宗の仙仗賊を避て崆峒を過ぎ蜀に幸あつて、京を思ひ玉んことを思ふと也、【三年—】亂離の間の悲壯を云、上の句仙仗を思ふと云より承て、玄宗の蜀に在す間の悽愴無聊を云、天寶十四載祿山叛してより至德二載まで三年也、其間每に羌笛の聲の裏に關山の月を看て舊都を思ふの感を興し、萬國の士法駕に從て衞護をなす兵の前には、只草木を吹きあらす悲風のみ冷して、上皇の心を傷ましむるたねなるべし、此憂患を忍でこそ蜀には在すにてこそあらんと也、此二句一說に肅宗の上に係て說もあり、然れども玄宗に係て說て、意思自ら深長也、批云悲壯少及、

が賊兵を敗る諸將を指て云、玄宗亂を避て蜀に出奔し、長安洛陽の二京は祿山に陷らる、此時唐室亡るに幾し、然るに肅宗靈武に於て位に即て、旌を擧て賊を平くるの功を成し、再び唐室を興す、漢の光武の漢を中興すると同じ、故に中興の主と云、其時の將なる故に中興の諸將と云ふなり、【收山東】本注趙曰、山東乃河北也、祿山反先陷河北諸郡、至肅宗復兩京進收山東、以建中興之業、下圜曰唐都長安、自太行以東皆山東也、河北を收復するは至德二年の秋也、【捷書】師利あつて、敵に勝たるの狀を記して天子に報ずる書也、【夜―】夜と云へども報じ來る也、師連りに利あつて、夜分と云へども捷書行在所に聞す、淸晝には尙以て速に聞する也、【河廣】本注希曰、河廣指河北衞州、時子儀破賊十萬衞州、獲安慶緒弟慶和、【一葦過】詩衞風河廣篇、誰謂河廣、一葦杭之、注衞在河北、但以一葦加之則可以渡矣、衞風の詩の語を翻按して、河北の衞州を速に收め取たるを云、言は河北の衞州の地は賊に陷られしが、傳へ聞けば頃ろ河の廣をば王の師只一葦にして渡り過て、神速に賊を敗りたると云也、【胡兒命】祿山が軍を指て云也、【在破竹中】王の師に當ることなり、一戰に敗られて全軍速に敗るを云、晉書列傳四杜預傳、今兵威已振、譬如破竹、數節之後迎刄而解、無復著手處、竹を破るに數節を破かけて後は、刄よりは先だつて破れもて行て、手を著け力を用ざれども、勢にて自破る也、一軍已に破て全軍不戰して自ら破ること、竹を破るに比する也、

秖殘鄴城不日得、獨任朔方無限功、指言郭子儀爲朔方節度使、時方專任子儀也、京師皆騎汗血馬、回紇餧肉蒲萄宮、回紇虜名、送兵五千助唐討賊賜宴於蒲萄東園中、

【秖殘―】本注希曰、鄴城乃相州、時安慶緒據相州、王師圍之未下、河北は既に收めたりと聞けども、相州の鄴城を殘して未だ下し不得と道ふ、然れども想ふに是亦不日に克復するにてあらんと也、【不日】日を過さずやがてと云意也、大雅文王篇、庶民攻之、不日成之、注不日不終日也、【獨任―】本注夢弼曰、自陳濤斜之敗、帝唯倚朔方軍爲根本、時朔方節度使乃郭子儀也、郭子儀は獨朔方の節度に任し、大兵を領して

の中、民人皆其所を不得、父子兄弟偕に安じ處ることなきを感慨して、怨を懷て憤激することあり、故に是言を爲て自ら傷むと也、

君不見青海頭、時有事于吐蕃、乃青海之地哥舒翰所立功處也、古來白骨無人收、新鬼煩冤舊鬼哭、天陰雨濕聲啾々、左傳文二年、吾見新鬼大故鬼小、

【青海】隋西域傳、吐谷渾城在青海西四十里、唐書哥舒翰傳、翰築神威軍於青海上、吐蕃攻破之、更築於龍駒島、以人二千戍之、由是吐蕃不敢近青海、青海は唐の時王忠嗣哥舒翰等吐蕃を討たる戰場也、故に亡卒の骸骨多し、言は男子の悲しきことは、君不見や征戍しては還る者少れ也、故に青海の頭りには、古より以來の白骨暴露して收め葬る人もなきと也、【新鬼】は死して不久鬼也、左傳文公二年夏、父弗忌曰、吾見新鬼大故鬼小、【煩冤】煩悶也、冤屈也、枉也、新鬼は煩く枉て非理を以て亡することを怨み、舊鬼は常に哭泣する也、天色陰り雨氣濕ふときは、新鬼舊鬼の煩冤慟哭する聲の、啾々と衆く聞ゆると也、【啾々】文選羽獵賦注、啾々衆聲也、○唐仲言曰、吁黷武如此而不亡國者鮮矣、此安史之亂所由起也、

○洗兵馬行

收京後作、取其洗滌兵戎車馬不復用之意

本集卷五載之、公自注收京後作、題注、乾元二年春自東都回華州以後所作、注洗兵馬を以て篇に名るとは、賊を平げ京師を收て後、兵馬洗滌して復た用ふまじきと云意也、○西溪叢語卷上曰、杜甫洗兵馬左太冲魏都賦云、洗兵海島、刷馬江州、六韜武王問太公雨輜車至軫何也、云洗甲兵也、魏武兵要曰、大將將行雨濡衣冠、是謂洗兵也、

杜子美

中興諸將收山東、捷書夜報淸晝同、河廣傳聞一葦過、胡兒命在破竹中、

【中興】後漢書明帝紀云、先帝受命中興、班固東都賦、遷都改邑有殷宗中興之則焉、已に絕んとして復た興るを中興と云、諸將肅宗の命を受て、安祿山史思明

況や復た邊郡戍卒の苦戰する者、驅り出されて屠殺せらるゝこと、犬と雞との如く然り、幸なくして此に至る最も可レ哀の甚也、

長者雖レ有レ問、役夫敢伸レ恨、且如ニ今年冬、未レ休ニ關西卒一、（前言ニ山東一此言ニ關西一則知、無ニ處不一レ用レ兵也、）縣官急索レ租、（霍光傳縣官天子也、宣元六王傳不ニ敢顯斥ニ天子一故謂ニ之縣官一、）租稅從レ何出、

【長者】軍吏の年長ずる者也、軍中の長者爲めに慰問すと云へども、役夫敢て寃恨を伸べ解くことあらんや、【且如—】今年の冬尙ほ邊庭を開くこと不レ止して關西の戍卒を還し休せしむることなき也、注に前には山東と云ひ、此には關西と云ときは、東西の邊境處として兵革を不レ用日はなきことを知得也、【縣官】前漢書卷六十八霍光傳、霍禹曰、縣官非ニ我家將軍一不レ得レ至レ是、注如淳曰、縣官謂ニ天子一、又八十宣元六王傳東平思王傳云、今暑熱縣官年少、注張晏曰不ニ敢指ニ斥成帝一謂ニ之縣官一也、縣官とは下より天子を稱する也、【急索租】急々に官租を輸し納れよと促し索る也、租は年貢也、【租稅—】邊郡の戍卒に驅遣れて、村落には耕作する人なし、健婦犁鋤を把て耕せども、隴畝東西の界もなく荒れはてたれば、租稅の穀何れの處よりか出ることあらんや、

信知生レ男惡、反是生レ女好、生レ女猶得レ嫁ニ比鄰一、生レ男埋ニ沒隨ニ百艸一、（生レ男人之所レ喜、生レ女人之所レ賤、此常理也、今以レ生レ男爲レ惡、生レ女爲レ好、蓋男兒充ニ下斷之征戰一埋ニ沒草野一、曾不レ如下生レ女尙得中嫁ニ比鄰一或時相見上、皆有レ所ニ感而激一爲ニ是言一、）

【信知—】陳琳詩、生レ男愼莫レ擧、生レ女哺用レ脯、人の常の情男を生を以て喜とし、女を生むを賤とす、然れども、我は信に知る男を生むことは惡くして、女を生むは反是好しと云ことを、何にとなれば女を生ては猶比隣の人に嫁與して時々に相見ことを得べし、男を生ては辛苦して鞠育し、稍ゝ丁壯に及べば即ち邊戍に驅り遣られ、兵刃の下に死亡して、骸骨埋沒し百艸に隨て朽ちはて、我が家の田を耕し耨て父母を養ふことなければ也、注【有所感—】人の情男を貴び女を賤んずるは常の理なるに、今反て女を希ふは是兵亂

邊庭流血成海水、武皇開邊意未已、君不聞漢家山東二百州、（按十道四蕃志、關以東七道凡二百一十一州、）千村萬落生荊杞、（公以武皇喩玄宗、是時安祿山反叛、山東二百州皆陷于賊、無復唐有、玄宗殊不悔悟、豈不若武皇開邊不知止乎、）

【邊庭】前漢書列傳三十四嚴助傳、武帝征伐四夷、開置邊郡、九州の外夷狄の境を邊庭と云なり、【流血――】前漢書主父偃傳、古之人君一怒必伏尸流血、邊郡には兵革不息、死傷の者多して流血海水の如く漂ふ也、【武皇】漢武帝也、中國の士卒多く邊軍に死亡すれども、武帝尚悔ひ悟ることなく、邊郡を開き廣むるの意尚未已也、武皇を玄宗に比して、天寶の間邊郡を征伐して不已ことを譏也、【漢家】漢の世也、周室と云と同じ、前漢書谷永傳此天保右漢家使臣敢直言也、【山東】太行山より東の方也、注十道四蕃志云、函谷關よりして東七道凡二百十一州あると也、故に大數を擧て二百州と云、【千村萬落】所在の村落也、落は人の所聚居、【生荊杞】兵亂に因て地荒蕪し、處々の村落盡く荊棘枸杞を生ずる也、晉阮籍詩、堂上生荊杞、老子經三十章、師之所處荊棘生焉、注【是時安祿山反】此注非也、此詩の作祿山未反の前也、天寶十載のころ也、祿山已に反するときは、玄宗京師にだも安し居ることを不得、豈に邊を開くの意尚不已ことあらんや、

縱有健婦把鋤犂、（健婦耕、則夫被征役可知、）禾生隴畝無東西、（詩曰衡縱其畝、謂一縱一衡各有東西之界、恨傷今不然、）況復秦兵耐苦戰、被驅不異犬與鷄、

【縱有――】兵革不止民の死傷する者多して、山東の地無人、縱健婦あつて夫に代て鋤犂を把て耕作すと云へども、男子の如くにあらずして、禾は隴畝に生じて、東西の界もなく荒蕪する也、【隴畝】ともにうね也、詩齊風南山篇云、藝麻如之何、衡從其畝、これ耕作を能く勉る田の制界也、今西東の界なしと云へば、荒廢の狀自ら見ゆ、樂府隴西行健婦持門戶、王粲詩不能效沮溺、相隨把鋤犂、【況復――】秦兵秦を借て唐の征戍の士卒を云、婦女犁鋤を執て耕作す固に可憐、

【道旁―】所在哭泣の聲振ひ聞て、弓箭を持する者多く出づ、故に道旁を經過する者、これは何事ぞやと怪てたちよりて行人に問ふ也、【行人―】行人對て但云ふ、官家の點行甚た頻に促すに因て、如此征戍に赴くなりと告る也、【點行】本集注に、點行は漢書に更行と云と同じ、丁夫を簿籍に錄し、其丁籍を按しで上丁下丁の品を點檢し、照し明らめて番々を定め、役番休番を互に更へ換へて差役するを更行と云、點行と云も同義なると也、前漢書八十五谷永傳云、止諸繕治宮室闕更減賦盡休力役、注師古曰更謂更卒【或從十―】行人力役已むことなきを歎て、道旁の者に説て聞かしむる也、衆の行人皆盡く下に云ふ所の如くなるに非ず、故に或字を以て云ひ起して、自家の役使せられし事を叙る也、【北防河】黄河の堤を築て河水の泛決するを防く也、【便至四―】河を防て還てより、又出て西邊を戍り、邊地の田を營て四十に至るまで家に還らざりし也、本集注に營田は漢の趙充國匈奴を征する時、營田の策を獻じて屯田したると同じ、兵事なき時は田を耕し、軍事あれば即ち戰ふ、兵を農に寓して時に臨て用るの意也、趙充國前漢書列傳三十九有傳、充國邊軍の騎兵を罷て、留て屯田すべしと云、便宜十二事を奏す、文甚た長し、こゝに引證しがたし、其大概は邊軍の糧を中國より運漕すれば、多費にて邊軍に輸すこと少し、故に軍の騎馬を罷て悉く歩兵とし、匈奴を備る要害の處には堅く兵を備へ、其餘は人々皆地を受て田を耕し、稼穡を營み糧米を外より不求、若匈奴侵し來れば即兵卒として防くべしと云策なり、遂に其策を用られたり、これを屯田と云、此句に營田と云も虜を防ぎに征て邊を戍り、邊地にて田を營む役に差れたるを云ふと也、【去時里正―】深曰里正一里之長、高荷曰里正即今保正也、彦輔曰按里正掌追呼催督者、里正とは一里のさばきふれながしを掌どる者也、【裹頭】民の年二十なるを丁と云、丁に及て裹頭す、十五にして夫丁の員に充て往く、故に其往く時に里正これが爲に裹頭を加へ、童形を改て送り遣りたる也、裹頭は布にて頭を裹む也、【歸來―】十五より始て出て、四十に過るまで外邊に艱辛して故郷に歸り來りたれば、頭已に白髮となれり、偶ゝ歸りたれども亦休する暇もなくて、還た只今如此驅り促されて邊を戍りに往なりと語也、

り出す也、【行人―】戍に行く人を見れば、皆弓箭を裝ひ、各の腰に帶て在ると也、【耶孃】公の自注古樂府不聞耶孃哭子聲、但聞黃河之水流濺々、耶は爺と同、字彙俗謂父爲爺、孃女良切母稱曰孃、耶孃は父母也、行人の父母妻子走て軍に赴くを送る也、衆人奔走して街上塵埃坌起し、昏蒙して咸陽の橋蔽はれ不見と也、注咸陽橋は即ち長安城外の橋を指す、【牽衣】行人の衣を牽き留て別離を悲む也、古樂府兒女牽衣啼、【頓足】史記酷吏傳、王溫舒傳云、溫舒頓足歎曰云云、足をそばたてゝ地に踊る也、【哭聲―】衆人の父母妻子悉く道を攔て哭泣するほどに、哭聲直に上みに振ひ聞て雲霄まで干し徹する也、孔德璋北山移文干青雲而直上、注本集の注也、【天寶十載募兵】十載夏劍南節度使鮮于仲通、南詔蠻を討て敗績し、士卒死者六萬人、仲通一人身すがら免れ歸る、楊國忠其敗狀を掩ひ隱して、玄宗に捷たりと聞して尙〻兵を募て擊たしむ、其歲又高仙芝は大食國を擊て敗績し、士卒悉く死す、又安祿山三道の兵六萬を將て契丹を討つ、軍中に叛する者あつて祿山が軍悉く殺され、祿山僅二十騎になりて歸る、三所敗績の士卒を計るに、天寶十載一歲の中に死する者十四五萬人也、如此多く軍兵を募るに因て、民困弊して募に應ずる者なし、故に楊國忠潛に彈劾糾察を掌る御史の官を遣して、軍卒に充つべき者を捕へしめ、繫累して軍前に驅り送りたり、【舊制―】唐の國初よりの舊制に、百姓に勳功ある者は征役に差るゝことを免る、故に百姓の勳功ある家には軍卒として役すべき子弟多し、國忠これを知て、先づ高勳の百姓子弟多き家より捕へ取て役に遣したり、これに依て行く者枉て役せらるゝことを愁ひ怨たり、其父母妻子の征夫を送る者、所在に哭泣する聲野に振ひ聞えたり、此詩に攔道哭すと云句あるは、其事狀を言へると也、

道傍過者問行人、行人但云點行頻、（點行者漢史謂之更行、以丁籍點照上下更換差役、）或從十五北防河、（防河謂築堤備河水泛決、）便至四十西營田、（營田如漢趙充國獻營田之策、無事則耕、有事則戰、寓兵於農之意、）去時里正與裹頭、歸來頭白還戍邊、

無爲其側、逍遥乎寢臥其下、不夭斤斧物無害者、無所可用安所困苦哉、莊子の意大なる材は、大に用る所あり、人これを小にして用んとす、故に用に適ひがたくて用られざることを患ると也、杜子美の結句も此意を云へり、擁腫はふしこぶ結塊して屈曲繩墨にあたらざる也、注【張華曰】僞蘇注也、

○兵車行

余嘗觀春秋有兵車之會、語不以兵車管仲之力也、律詩拘於聲律、古詩拘於語句、以是詞不能達、夫謂之行者達其詞而已、如古文而有韻耳、是行之作蓋傷唐玄宗末年從事於邊功而窮兵不已故也、

本集卷一載之、此篇は玄宗吐蕃を征して天下の民を苦しめらるゝに因て、征夫自ら愬るの辭を爲て、邊功を貪り武を黷すことを刺る也、注【余嘗―】兵車字の出處を云に似たり、春秋に兵車の會あり、又論語憲問篇不以兵車管仲之力也と云語あり、【律詩―】行體の解也、律詩は二四不同二六對など云類の平仄の聲律に拘る、古詩は又美麗の語句に拘る、是に因て言んと欲する詞をありのまゝに道ひ達すること不能、行體の詩は名くるに行字を以てするときは、拘り滯る所なく、雲の行くが如くすら〳〵と作て、其言んとする詞を叙べ達するのみ也、其體古文の如くにて句脚に韻を押するばかりなると也、【是行―】此兵車行を作れる意は、玄宗の末年、邊塞の國を闢き廣むる功に從事して、天下の兵を窮め用て已むことなきを傷で作れると也、

杜子美

車轔々、詩有車轔々注衆車聲也、馬蕭々、詩蕭々馬鳴、注言不諠譁也、行人弓箭各在腰、耶孃妻子走相送、古樂府云、不見耶孃哭子聲、塵埃不見咸陽橋、咸陽橋即長安城外橋、牽衣頓足攔道哭、天寶十載募兵無應者、楊國忠遣御史分捕繫送軍前、舊制百姓有勳免征役、於是國忠先取高勳、行者愁怨父母妻子送之、所在哭聲震野、此所以有咸陽橋攔道哭之句、哭聲直上干雲霄、

【車轔々】首めに先づ車馬の行聲あるを云、詩秦風有車鄰々、有馬白顚、注鄰々衆車行聲、小雅車攻篇蕭々馬鳴、悠々旆旌、注蕭々間暇之貌、只今征に赴くとて、輜重の車の衆く行く聲鄰々ととゞろき、甲馬の行くこゑ蕭々として伍を整て諠嘩ならず、しづ〳〵と乘

亦僞蘇注也、【萬牛―】古栢をば大廈を起すとき、梁棟の材料の爲めに移し致すならば、萬牛に挽かしむとも猶挽き不得、首を回らして苦むこと、丘山の重を載てひかするに似るべしと也、【不露―】老栢只古怪にして文章の奇なることあるに非ず、文章を外に露すことなけれども、世の人已に材の巨大にて棟梁の用に任へたるに驚き嘆ずるにてあらんぞと也、【未辭剪―】老栢の意豈に永く廟前に立て、無用の物となりて朽んことを足れりとせんや、大廈の爲めに棟梁の材とならんことを欲して、曾て剪伐せらるゝを辭却することなし、されども誰か能く送り致して材に用しむることをせんやと也、詩召南甘棠篇、蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所茇、

苦心未免容螻蟻、香葉終經宿鸞鳳、謝靈運後漢書曰、方儲遭母憂、種松栢、鸞棲其上、志士幽人莫怨嗟、古來材大難爲用、莊子吾有大樹、人謂之樗、其大本擁腫而不中繩墨、立之塗、匠者不顧、今子之言大而無用衆所同去、○張華曰志士蓄怨、幽人含恨、

【苦心】木心を云、大樹は心多くは朽て空虚也、螻蟻其中に聚る、今此栢樹も數百年の物故に、苦心朽て中虚也、故に螻蟻を容ることを免れ不得也、【香葉―】香しき葉中には鸞鳳をも棲宿せしむることを經し樹なると也、[注]謝靈運が後漢書未嘗閲、故に考證することなし、班曄が後漢書には方儲が傳不載、太平御覽卷四百十一孝感部云、謝承後漢書曰、方儲字聖明、丹陽歙人、幼喪父事母、母終自負土成墳、種奇樹千株、鸞鳥栖其上、白兎遊其下、【志士】孟子滕文公篇、志士不忘在溝壑、勇士不忘喪其元、【幽人】易履九二履道坦々、幽人貞吉、傳云幽靜安恬之人、【莫怨嗟】志士幽人は才を負て用られず、常に怨嗟して不遇を嘆ずること多し、然ども必怨み嗟くことなかるべし、今此栢を見るにいかなる大廈の棟梁にも勝へたる材なれども、終に採り用られず、古より以來材の極て大なる者は、多くは用を爲し難きに因て然るぞと也、此亦暗に莊子の意に本つきて云へり、[注]莊子逍遙遊篇、惠子謂莊子曰、吾有大樹、人謂之樗、其大本擁腫而不中繩墨、其小枝卷曲而不中規矩、立之塗、匠者不顧、今子之言大而無用、衆所同去也、莊子曰、今子有大樹、患其無用、何不樹之於無何有之鄉、廣莫之野、彷徨乎

孫興公天台賦、嗟台岳之所奇挺、實神明之所扶持、**正直元因造化功、**

【落々】注杜篤賦、長松落々、杜篤字季雅、光武時人、傳見後漢書列傳七十文苑傳、文選左太仲詠史八首、落々窮巷士、抱影守空廬、注、銑曰、落々疎寂貌、又文選天台賦、藉萋々之纖草、蔭落々之長松、注落々松高貌、をほがらに細節なく高大なる貌を落々と云、【盤踞】諸葛孔明曰、鐘山龍盤石城虎踞、盤は蟠と同じわだかまると讀む、踞はしりうたげすと讀む、栢樹の土にねぐむ根柢、龍の蟠り虎の踞する如くに堅剛巨大なるを云、【冥々】翠黛高く聳て欝葱たるを云、【孤高】左右羅列の雜樹もなく、孤立して高大也、【多烈風】はげしき風也、言は古栢落々として廟前に生じ、根柢盤踞するは固に根を托すること其地の宜き處を得たりと云へども、左右に並び列る樹もなく、翠色冥々として孤立し高く聳たるに因て、常に高空の烈風を受ること多と也、【扶持】たすけたもつ也、論語季氏篇、危而不持、顚而不扶、則將焉用彼相矣、【神明】左傳襄公十四年、民奉其君、愛之若父母、仰之如日月、敬之如神明、蜀漢の時より唐に至るまで幾許の星霜を歷て、不傾不顚、落々として孤立す、寔に是鬼神の扶持によれるならんと也、注【孫興公】晉書、孫綽字興公大原人也、爲永嘉太守、轉廷尉卿卒、【天台山賦】文選卷十一載之、注挺拔也、言奇狀者秀異不群也、實如神明之所扶持也、【正直】栢身の屈曲せず正く直き也、【造化】天地の間に萬物を化生することを主宰する者を指て造化と云、即ち天帝也、此樹の生じて自然に正直にして曲らざるは元是造化生々の功力、

大厦如傾要梁棟、耿恭謂岑彭曰、方今漢基積圯、英雄寒饑如大厦之傾、求天下之義士、要爲梁棟、子何如此寒饑、不乘時取萬戸侯、復侯何時耶、**萬牛回首丘山重、不露文章世已驚、未辭剪伐誰能送、**詩甘棠勿剪勿伐、

【大厦】厦大屋也、淮南子大厦成而燕雀相賀、前漢王褒講德論云、大厦之材非一丘之木、言ろは或は大厦あつて如し傾き頽れ、別に棟梁の材料を要し求るならばと云意也、注【耿恭】後漢列傳九、耿弇が傳尾に附す、字不知、【岑彭】後漢列傳七有傳、字君然と云、二人ともに其人はあれども後漢書には此注の語は不載、此

來て梢に接る、翠黛の氣遠く巫峽の長と相接す、月出て栢頭を照すときは、高寒遙に雪山宿雪の白色と相通して凛然たると也、本集注范元實曰、詩有形似之語、若詩人之賦蕭々馬鳴、悠々旆旌是也、有激昂之語、若詩人之興周餘黎民、靡有孑遺是也、古人形似之語如鏡取形燈取影、激昂之語孟子所謂不以文害辭不以辭害志者也、余遊武侯廟、然後知古栢詩所謂柯如青銅根如石信然、決不可改、此形似語、霜皮溜雨四十圍、黛色參天二千尺、雲來氣接巫峽長、月出寒通雪山白、此激昂語不如此則不見古栢之高大也、文章固多端、然警策處往々在此兩體耳、

憶昨路繞錦亭東、先主武侯同閟宮、（詩閟宮有侐）崔嵬枝幹郊原古、窈窕丹青戶牖空、（盧獻卿詩、卜築郊原古）

【憶昨―】本集注夢弼曰、憶昨路繞錦亭東、此乃追言成都先主廟之栢、按成都先主廟西院即武侯祠、有武侯手植古栢、公有蜀相詩云、丞相祠堂何處尋、錦官城外栢森々是也、憶ひ得たり往時成都に在しとき、武侯の廟に詣るときは錦亭の東より繞て行きたりしと也、錦亭は錦官城也、一統志、成都府錦官城在萬里橋南、因其有錦官故名、錦官猶合浦之珠官也、【先主】蜀昭烈帝即劉備也、【武侯】諸葛孔明也、【閟宮】魯頌閟宮小序、閟宮頌僖公能復周公之宇也、閟宮有侐、毛注閟閉也、先妣姜嫄之廟在周、常閉而無事、侐清淨也、朱晦菴注閟深閉也、宮廟也、侐清靜也、言は成都の後主武侯の廟は常に深く閉て清淨なること、魯の閟宮に同かりしと也、【崔嵬】は山高貌、借用て栢樹の老大なるを云、廟前の栢は年を歴ること久く、枝幹崔嵬と高大にして、郊原の景象もの古て幽寂也、【窈窕】深長貌、曹子建詩、窈窕山道深、孫興公天台賦、幽邃窈窕、注翰曰窈窕深極貌、諸葛顯詩、窈窕神居遠、【丹青】廟を彩飾したる畫色を丹青と云、或は丹或は青を以て色を布に依て也、晉顧愷之字長康、尤善丹青、圖寫特妙、廟宇窈窕とをぐらく、丹青の彩飾深古にして、廟中更に人もなく戶牖空寂なると也、

落々盤踞雖得地、冥々孤高多烈風、（杜篤首陽山賦、長松落々）扶持自是神明力、

て古栢の園と高とを子細に求ることを不欲、惟其高大を言へるの句なりと看て妨なし、○漁隱前集八王直方詩話云、范蜀公云、武侯廟栢今十丈而杜工部云、黛色參天二千尺、古詩人好大其大率如此、而沈存中又曰、霜皮溜雨四十圍、乃是七尺而長二千尺、無乃太細長乎、余以爲論詩正不當爾、二公之言皆非也、○詩人玉屑卷十一云、杜詩云、霜皮溜雨四十圍、黛色參天二千尺、四十圍乃是徑十尺、無乃太細長乎、皆文章之病也、○遯齋閑覽云、沈內翰譏黛色參天二千尺之句、以謂四十圍配二千尺爲太細長、不知子美之意但言其色而已、猶言其翠黛蒼然仰視高遠有至於二千尺而幾於參天也、若如此求疵則二千尺固未足以參天、而詩人謂崚極于天者更爲妄語也、

君臣已與時際會、樹木猶爲人愛惜、（宣公九年思其人猶愛其樹、況用其道而不恤其人乎、）**雲來氣接巫峽長、月出寒通雪山白、**（巫峽在夔之下、巫峽之雲來而栢之氣與接、雪山在夔之西、雪山之月出而栢之寒與通、皆言其高大也、）

【君臣―】此一聯下の一聯と前後倒置す、雲來の一聯を二千尺の聯に接し、此一聯を雪山白の句の下に移して看べし、本集注昭曰、君臣已與時際會、樹木猶爲人愛惜、雲來氣接巫峽長、月出寒通雪山白、兩聯似乎倒置、氣脈不屬、嘗問須溪先生、先生曰然傳寫之訛耳、【君臣―】後漢の季天下鼎足の如く分れて魏呉蜀の三つとなる、蜀の先主劉備は劉氏の後なるに因て、再び漢室を興して劉の氏統を繼んとす、此時諸葛孔明は艸廬に隱居し、龍の如くに臥て不出、先主三たび其廬に詣て、召て相として天下を恢復する大計を謀て、腹心を委任し、君臣の遇合際會するを云也、【樹木―】君賢に臣良にして道相契合するときは、人仰ぎ尊ぶこと深し、故に其樹木に及て猶人これを愛惜すること厚き也、〔注〕左傳宣公九年無此語、【雲來―】〔注〕巫峽の雲來て栢の氣と與に接すると也、【巫峽】大明一統志、夔州巫峽在巫山縣東三十里、即巫山也、與西陵峽歸峽並稱三峽、連山七百里略無斷處、自非亭午夜分不見日月、【月出―】〔注〕雪山の月出て、老栢の寒氣相通ずると也、【雪山】一統志、成都府雪山在威州西南一百里、與乳川白狗嶺相連、山有九峯、上有積雪、春夏不消、二句古栢の高大を云、栢樹極て高し、故に雲

夔州先主廟、武侯廟各所、今詩專指曰孔明廟、蓋在夔州、詩中云憶昨路繞錦亭東、此又追言成都先主廟、成都夔州廟皆植栢、集有夔州十絶云、武侯祠堂不可忘、中有松栢參天長、此又可證、〇千家鶴注曰、此詩雖指成都孔明廟而言、而詩云憶昨路繞錦亭東、則不在成都作、豈非大暦元年至夔見先主武侯廟、遂追憶錦亭所見而成、舊編幷梁權道俱以爲上元元年、殆未詳詩中語也、惟趙注云此乃追言成都先主廟之栢、蓋公近自離成都而來夔、故止可言憶昨、【題注】成都記を引て蜀の先主の廟とす、趙鶴二氏の説に據るときは題注非也、杜子美此詩は古栢を見るに因て、興をおこして才あつて用らるゝことなきを傷て作れると也、

杜子美

孔明廟前有老栢、柯如青銅根如石、霜皮溜雨四十圍、黛色參天二千尺、（圍三徑、一圍滿三尺則徑一尺、）

【孔明廟】趙注に依て夔州となして看、大明一統志、夔州先主廟在府治東六里、祀蜀漢先主、唐杜甫詩、蜀主窺呉幸三峽、崩年亦在永安宮、翠華想像空山裏、玉殿虚無野寺中、古廟松杉巣水鶴、歳時伏臘走村翁、武侯祠屋長隣近、一體君臣祭祀同、武侯廟在府治八陣臺下、武侯蜀漢相諸葛亮、諸葛孔明の傳下の梁父吟に見えたり孔明の廟の前に年久しき老栢樹あり、其樹古怪にして枝柯は青銅の如く、根は石の如くになりたると也、【霜皮】霜雪を侵し凌く樹皮也、霜皮雨を溜て常に濕ふ、其大なること四十圍ほどあると也、圍は五寸を圍と云、又兩手の大指を合せてかこむをも一圍と云、又一抱をも圍と云、子美の古栢を算るは孰れの圍を以てかぞふるや知がたし、これに由て議論さまざまあり、詩意に關ることに非れども、古人既に此論あるに依て數説を左方に附錄す、【黛色】栢葉の翠色黛の色の如くなるを云、【參天】參は雜也、荀子功參天地、栢の梢甚だ高して望之雲に連て天に雜り接するが如くなるを云、栢樹の翠黛天色に參て、二千尺ばかりも高く見ゆると也、注【圍三一】此十二字詩の注に非ず、此句意に相關ることとなし、此れは古法の算數に圓者外の周三尺あれば其徑は一尺あると云法也、四十圍の句の爲に引たるなるべし、此二句算數を以

也、初め虢國家に處る時國忠と通ず、其後貴妃が蔭に依て長安に召され虢國夫人に封ぜらる、國忠も尋で長安に來る時虢國新に寡なり、國忠又私に通ず、國忠樗蒲を善するを以て玄宗に見ゆ、累りに上遷して半年ならざる間に十五餘使を領す、遂に李林甫に代て丞相となる、虢國は宣陽坊の左に居し、國忠は其南に在り、禁中より退て虢國が第に至り同居して相調笑す、醜聲外に聞ゆれども恥とせず、出るときは騎を並べて入朝す、子美其醜狀を見て因て麗人行を作れり、故に結句に其意を寓せり、言ろは當世の士大夫愼て虢國の側に近前することなかるべし、虢國實に寡婦に非ず、素より丞相の愛狎する所なれば、若誤て近前せば丞相の嗔に遇ふべきぞと云意也、虢國の側に近前したりとて、丞相の事に何の關ることあつて怒んや、然るに若誤て近かば丞相嗔るべきぞと云ときは、其微意自ら可見、注に此意を不見透して言ふ、士大夫必ず楊氏の黨を譏切して、丞相の爲に嗔られて禍害を取ることなかれと云意なりと、此れ杜子美の本意を知り不得者也、注元載字公輔、傳見于唐書列傳七十、本傳に卓李鄭薛の四人を用て事を任すること不載、通鑑綱目にも不見、不知何の據そや、【圏外注】銛は宗兄也鴻臚卿に除せらる、錡は銛が弟也、侍御史に除せらる、國忠初の名釗と云後國忠と改む、其黨は楊氏の一門を指て云、○明謝茂秦曰、楊用修駁宋人詩史之説而譏少陵云、詩刺淫亂則曰雝雝鴻雁、旭日始旦、不必曰愼莫近前丞相嗔也、憫流民則曰鴻雁于飛、哀鳴嗷々、不必曰千家今有百家存也、傷暴斂則曰維南有箕、載翕其舌、不必曰哀々寡婦誅求盡也、叙飢荒則曰牂羊羵首、三星在罶、不必曰但有牙齒存、所堪骨髓乾也、其言甚辨而覈、然不知嚮所稱皆興比耳、詩固有賦、以述情切事爲快不盡含蓄也、語荒而曰周餘黎民、靡有孑遺、勸樂而曰宛其死矣、他人入室、譏失儀而曰人而無禮、胡不遄死、怨讒而曰豺虎不受、投畀有昊、若使出少陵口、不知用修何如貶剝也、且愼莫近前丞相嗔、樂府雅語、用修烏足知之、

○古栢行

成都記云、諸葛公廟在先主廟、故宅城西、先主廟西院即武侯廟、廟前有雙大栢古峭可愛、子美作此行傷其有才而不得用也、

本集十四載之題注趙曰、按成都先主廟武侯祠堂附焉、

揖章、莫與京兆尹言者、章逡巡甚懼、文選三十七注逡巡猶退讓也、虢國の後へに從て來れる鞍置て裝へる馬に騎たる者は、何事にか逡巡としりずさりをして進み不得やと也、解下の句にあり、【當軒】軒は車廂也、卿車曰軒、夫人車以魚皮爲飾曰魚軒、當軒は軒に臨むの意也、又軒堂也、輔按に軒字軒堂の軒となして可看か、唐の時婦人皆馬に騎る、車を用るに非ず、唐の世曲江を遊覽の勝境とす、亭軒處々に多かるべし、夫人江邊に至て憩息の處の亭軒に當て、馬より下りて設け置たる錦の茵の中に入て坐するに因て、後へに從ひ來馬の逡巡として控へ停るにてあると、上の句を解する也注此二句は夫人の氣勢洋々自得したる貌、傍に人なきが若くふるまへるありさまを言ふと也、晉書射尙著衣幘而舞鴝鵒舞、王導令坐者撫掌擊節、尙俯仰其中旁若無人、【楊花―】一時所見の景色を云也、上巳の時節楊花既に發け雪の如く散り、飛て水上に落ち、白蘋を覆ふと也、【青鳥】は河邊に生ずる鳥か、或は家畜の鳥か未詳、注に鸚鵡の類にて豢養て馴れ熟するの鳥なりと云何の據か、爾雅禽經博物志等にも不載、本集注洙曰、山海經註

青鳥主爲西王母取食者、然れども王母が鳥尋常所有物に非ず、姑く疑を闕く、青鳥飛去て婦人頭上に飾れる紅巾を銜むと也、注【漢武故事七月―】漢武內傳に、王母降臨の事を載す甚詳也、而青鳥の事一言も不及、漢武故事に七月七日武帝承華殿に於て齋し玉ふとき、忽青鳥一つ西方より飛來る、武帝東方朔に問玉へば朔が曰、此れ西王母至んとするしるしなりと云、頃くあつて王母紫雲の輦に乘り、五色の斑龍に駕して至り、武帝に桃を獻したると也、青鳥の出處に引證するなり、【炙手―】虢國秦國威勢の熾盛なること炎焔の如し、手を炙りなば熱かりなんと思ふ也、其勢旁若無人にして比倫を絕したると也、【絕倫】舞賦姿絕倫之妙能、懷慤素之潔清、【愼莫―】此句深意あるべし、淺々に看過しては見得し難し、貴妃が本傳及國忠が傳を參へ見て自ら理會すべし、許彥周も亦曰老杜作麗人行云、賜名大國虢與秦、其卒曰、愼勿近前丞相嗔、虢國秦國何預國忠事而即嗔邪、東坡言老杜似司馬遷、蓋深知之、これ深く此結句の意を見得て其妙を嘆すれども、其所以いかんと云ことを不說、此引而未發、輔按ずるに戲謔を以て諷刺の意を寓する

中給事者也、黄門は閹人宦官也、【飛鞚】字彙鞚苦貢切馬勒也、【不動塵】須溪批云、形二容驕貴一至二黄門飛一レ鞚不レ動レ塵、自是氣象、黄門の閹人鞚を執て馬を御す、其疾きこと飛が如くにして、路上清肅塵を動し揚ることなし、此衆人は避け去つて近くことなく、供奉の人は隊列整て雜擾することなし、故に馬疾けれども塵埃起らず、其驕貴の氣象想ひ見べし、高力士が貴重を以さへ猶貴妃が爲に轡策を授て馬に乘らしむるときは二夫人の馬をば黄門の御することもあるべし、

【御厨】天子の膳所也、尙食職の所レ掌也、【絡繹】王子淵洞簫賦、絡驛變無レ窮、注絡驛不レ絶貌、【八珍】注周禮天官膳夫掌二王之食飲膳羞一、以養二王及后世子一、凡王之饋食用二六穀一、膳用二六牲一、飲用二六清一、羞用二百二十品一、珍用二八物一、注此集に所引と同じ、天子の御厨より中使絡繹と相接て不レ絶、八珍の食物を相送り來也、【簫鼓哀吟】水邊の行遊に簫鼓を鳴して樂を奏す、其聲清亮にして虛空に徹し、哀吟の響幽冥の鬼神をも感格せしむるばかり也、【賓從】衆賓の虢國夫人に從て遊ぶ者也、【雜遝】司馬相如子虛賦、旋二環後宮一雜遝累輯、曹子建洛神賦衆靈雜遝命レ儔嘯レ侶、注善曰雜遝衆貌、遝音徒合反、言は衆賓の同く從ひ遊ぶ者雜遝と衆多にして追隨す、是皆實に要津に當る顯貴の人々なりと云意也、

【實要津】十九首古詩、人生寄二一世一、奄忽若二飇塵一、何不下策二高足一、先據中要路津上、顯貴の官に居て權に當る者を要津に居ると云也、

後來鞍馬何逡巡、當レ軒下レ馬入二錦茵一、（言二其氣勢洋洋旁若無人一）楊花雪落覆二白蘋一、

青鳥飛去銜二紅巾一、（漢武故事、七月七日上於二承華殿一坐、忽青鳥從二西方一來集二殿前一、東方朔曰、此西王母欲レ來、有レ頃王母至、有二三青鳥一如レ烏夾侍二王母旁一、○青鳥如二鸚鵡一之類、豢養馴熟、飛銜二紅巾一、此止借下西王母以二青鳥一爲レ使名上レ之、紅巾蓋婦人之飾、）

炙レ手可レ熱勢絶倫、（炙音只）

愼莫三近前一丞相嗔、（元載爲レ相委二左右四人一用レ事、人爲レ之語曰、炙レ手可レ熱、卓李鄭薛、言勢焰爀灼可二以炙一レ手、○按新唐書楊貴妃專レ房、兄銛錡國忠最見二寵遇一、三姊皆美貌封二韓虢秦三國一、恩寵聲焰震二動天下一、子美有下愼莫レ見レ嗔二於丞相一之句上、所三以戒二當世之士大夫無レ爲レ譏二切其黨一以取中禍害上也、）

【後來—】鞍馬前漢書匈奴傳贊曰、文帝中年赫然發レ憤、遂躬二戎服一親御二鞍馬一、馳二射上林一講二習戰陳一、【逡巡】前漢書游俠傳、萬章從二京兆尹一至二殿中一、侍中諸侯貴人爭欲

厨膳の驕奢を云、【紫駝之峯】注紫駝は即橐駝也、駝の脊上に一肉の墳起して高き所あり、形山峯の如し、其峯肉の味最美也、前漢書西域傳云、大月氏國出一封橐駝、師古曰脊上有一封也、封言其隆高若封土也、今俗呼爲封牛、山海經云、號山陽光山其獸多橐駝、日行三百里負千斤、埤雅駝背有肉鞍如峯也、【出翠釜】紫駝の峯肉を宰して、翠色の釜中にて調和し、始て烹出したるを供る也、注【至珍】珍貴也重也、食物の貴重なる者を珍と云、周禮に有八珍之名、此一節には飲食の滋味至極珍物を盡すを云と也、【酉陽雜俎】唐段成式撰す、【衣冠家】は貴官の家と云意也、【王績】排韻王績字無功、隋大業中擧孝廉、還郷種黍蒔藥釀酒自供、以周易老子置床頭、遊北山東皐、著書號東皐子、【水精之盤】水晶を以て盤に作る也、三輔黃圖卷三清涼殿條下云、董偃以玉晶爲盤、貯氷於膝前、玉晶與氷相潔、【行素鱗】素鱗の魚を鱠として、水晶の盤に盛て供也、【犀筯】酉陽雜俎、安祿山恩寵莫比、其所賜有金平脫犀頭匙筯、【厭飫】いとひあく也、【久未下】さまぐ\の美味を供れども、矜泰の餘り悉く厭ひ飫て心に好む者なし、何をがな食んと犀筯を留て膳中を視まはせども、皆厭ひ飫て筯を下して食ふべきものなき也、鑾刀注文選十西征賦、華魴躍鱗、素鱮揚鬐、饔人縷切、鑾刀若飛、應刃落俎、東京賦云、執鑾刀以祖割、注鑾刀刀上鈴也、善曰毛詩執其鑾刀、魚を切る刀の柄の端に鈴を施し、魚を切とき節に應じて鳴者也、鑾刀を以て膾を作て縷の如くする也、【空紛綸】後漢書逸民傳、井丹字大春、通五經、語曰五經紛綸井大春、犀筯を下す處もなく、心に稱ふ品なければ、饔人の鑾刀を執て縷の如く切て作れる膾も曾て食ふことなく、空く紛綸として備へたるのみなると也、晉書何曾仕魏爲司徒、性奢豪務在華侈、帷帳車服窮極綺麗、廚膳滋味過於王者、食日萬錢猶曰無下箸處、

黃門飛鞚不動塵、御廚絡繹送八珍、（周禮膳夫珍用八物、注珍用淳熬、淳母、炮豚、炮牂、擣珍、漬、熬、肝膋是也）**簫鼓哀吟感鬼神、賓從雜遝實要津、**

【黃門】前漢書百官公卿表云、中書、謁者、黃門、鈎盾、尚方、御府、永巷、內者、宦者八官令丞、諸僕射署長中黃門皆屬焉、注師古曰、中黃門謂奄人居禁中在黃門之

就中雲幕椒房親、漢官儀曰、皇后稱椒房、取其蕃實之義也○楊國忠嘗謂客曰、吾本寒家一旦緣椒房至此、未知税駕之所、不若且極樂、賜名大國虢與秦、唐后妃傳楊貴妃有姨、三人皆有才貌、玄宗並封國夫人、大姨封虢國、小姨封秦國、並承恩出入宮掖、勢傾天下、歳給千貫爲脂粉之費、

【就中】は曲江の邊麗人の多き中に就て也、【雲幕】本集夢弼注、雲幕謂鋪設幕吹如雲霧之垂也、幕を設け張て風にまかせ、翩々と飄揚して雲の如くなるを雲幕と云、【椒房】楊貴妃を指て云、後宮を椒房と云ふこと注詳に長恨歌に見えたり、其【親】は即ち虢國夫人、秦國夫人也、注に楊國忠が語を引て、椒房の親を國忠なりとす非也、此詩麗人行也、何ぞ國忠を指て云んや、椒房は兩夫人を云也、言は水邊多くの麗人の中に就て、特に富麗なるは雲幕の中に坐する椒房の親二姨名を賜て、大國の虢と秦との國夫人に封せらるゝ人々なると云へり、貴妃に三姨あり、此に虢秦二姨を云は、韓國夫人は早く死せり、只二夫人のみ聲焰天下を傾くる也、注【楊國忠】貴妃が兄也、【寒家】貧賤の家なりしと云義也、【緣椒―】貴妃が蔭に緣て、此富貴の極に至る也【未知―】税駕は客子行き到て家に入、行李を解くを税駕と云、こゝに借て畢竟落着の所を云、一旦貴妃の蔭に緣て此富貴に至れども、落着の所此富貴を保て身を沒ることを得べきや否や知らず、只時を得たるときは樂みを極めたるが好と云、洛神賦税駕乎蘅皐、秣駟乎芝田、注税舍也、綱目天寶十二載冬十月帝如華清宮、三夫人從幸、會於楊國忠第、車馬僕從充滿數坊、錦繡珠玉鮮華奪目、國忠謂客曰、吾本寒家一旦緣椒房至此、未知税駕之所、然終不能致令名、不若且極樂耳、【唐后妃傳】題注に見えたり、【宮掖】禁中の掖門也、三輔黃圖卷六、掖門在兩傍如人臂掖、【爲脂粉之費】夫人裝飾の用度に充る也、俗に云粧料也、

紫駝之峯出翠釜、此言飲食之美至珍矣、駝謂橐駝、其脊上有一肉高如峯其味最美也、○酉陽雜俎、今衣冠家各食有將軍曲、良輸能爲駝峯炙、王績遊北山賦、褒翠釜而出金精、水精之盤行素鱗、犀筯厭飫久未下、鑾刀縷切空紛綸、潘安仁西征賦、饔人縷切鑾刀若飛、鑾刀刀有鑾者、言其刮中節也、

なりふりしとやかなるを云也、【意遠】意象のどやかにてせまらざるを云、宋玉神女賦、意似近而既遠兮、【淑且眞】淑は和也淸湛也、ものしづかにて眞貞なり、杜詩集注云、淑且眞眞淑婦人之美德、公蓋反言以刺之也、【肌理細膩】肌膚きめごまかにて、あぶらづき潤ふを云、理身のきめ也、【骨肉勻】骨たかにもなく、肉すぎもせず、骨肉相稱ひ勻ふて肥痩中を得るを云也、漢秘辛云、約略瑩體血足榮膚、膚足飾肉、肉足冐骨、長短合度と云類、是骨肉の勻ふ也、

繡羅衣裳照暮春、蹙金孔雀銀麒麟、頭上何所有、翠爲㔩葉垂鬢脣、㔩葉婦人髻飾花也、㔩爲合反、背後何所見、珠壓腰衱穩稱身、爾雅衱謂之裾、注衣後裾也、衱居業反、

麗人裝飾の美を云也、【繡羅―】繡はぬひもの羅はうす者也、繡羅を裁して衣裳とし、燦爛として暮春の光輝に相照映すると也、【蹙金孔雀】薄金を蹙め治て孔雀に作りて、衣上の紋に貼したる者なるべし、【銀麒麟】銀を治て麒麟となし、繡羅の上に印紋とするならんか、其製今考る所なし、集注云孔雀麒麟指首飾、輔按下の句に頭上何所有そと云へば、此句は首飾を云にはあるべからず、上の句に接して衣裳の飾を言ふなるべし、想ふに繡羅の上に印金の紋を施たるものならんか、【頭上何所有】頭上の飾には何物か有と問て、下の句にて答る也、此れ樂府の體也、晉書周顗字伯仁少有重名、王導深重之、嘗枕周顗膝、指其腹曰、此中何所有、【翠爲㔩葉】本集夢弼注曰、㔩葉婦人髮邊花、以翠羽鋪飾、其狀輕微也、翡翠の羽を以て花樣を裝ひ作て鬢を冐ふ飾也、頭上には㔩葉を裝ひて、翠花の飾髮唇に蔽ひ垂ると也、【背後―】麗人の背後の飾には何物かあるや、【珠壓―】本集夢弼注曰、腰衱卽今裙帶、綴珠其上壓而不垂也、腰衱は裾の上に繫る帶也、帶に珠を綴りつけて、丁をうつたる如くにして下り垂れしめず、故に束帶すれば珠腰を壓て連る也、【穩稱身】寛狹度に合ふて、闊からず窄からず、穩に身に稱ふ也、一拙老人捃雜編云、麗人行珠壓腰衱穩稱身之下有一逸句、足下何所著、紅渠羅襪穿鐙銀、此非惟樂府鼓吹、亦可作周昉美人畫譜也、

從監侍姆百餘騎、炬密如書、靚粧盈里不施幃幛、時人謂爲雄狐。

杜子美

三月三日天氣新、長安水邊多麗人、長安古雍州也、唐開元中都人遊賞於曲江、莫盛於中和上巳節、此三月三日所以水邊多麗人也、態濃意遠淑且眞、肌理細膩骨肉勻、

【三月三日】卽上巳也、五雜俎卷二云、三月三日爲上巳、此皆魏晉以後相沿、漢猶用巳不以三日也、事見宋書、周公謹癸辛雜志謂、上巳當作上己、謂古人用日例以十干、恐上旬無巳日、不知西京雜記正月以上辰、三月以上巳、其文甚明、非誤也、言は三月三日に當て、天氣和暢して晴光新なると也、【長安水邊】曲江を指て云、上巳に曲水流觴の宴をなす、故に麗人多く聚る也、續齊諧記云、晉武帝問摯虞三日曲水之義、虞曰、漢章帝時平原徐肇以三月初生三女、至三日俱亡、村人以爲怪、乃招攜之水濱洗祓、遂因水泛觴、其義起此、帝曰必如所談便非好事、束皙進曰、虞小生不足以知、臣請言之、昔周公成洛邑、因流水以泛酒、故逸詩曰、羽觴隨流波、又秦昭王以三日置酒河曲、見金人奉水心之劍曰、令君制有西夏、乃霸諸侯、因此立爲曲水、二漢相沿皆爲盛集、帝大悅、【多麗人】美人の多き也、曹子建洛神賦云、覩一麗人于岩之畔、爾廼援御者告之曰、爾有覿於彼者乎、彼何人、斯若此之艷也、[注]【長安古雍州也】長安は禹貢雍州之域、明朝には西安府に屬す、【曲江】大明一統志云、曲江池在府城東□一十里、漢武帝所鑿、其水曲折似嘉陵江、因名之、開元中疏鑿爲勝境、都人遊賞盛於中和節、江邊菰蒲葱翠柳陰四合、每錫燕臣僚會于山亭、池備綵舟、唯宰相三使北省官翰林學士登焉、【中和】二月朔日也、事文類聚前集卷七云、李泌正月奏曰以晦爲節非也、請以二月朔爲中和節、因賜民間以青囊盛百穀瓜李果種相遺問、號獻生子、令百官進農書以示務本、○五雜組卷二云、唐德宗以前世、上巳九日皆大宴集、而寒食多與上巳同時、欲以二月名節自我作古、李泌請廢正月晦以二月朔爲中和節、夫二月十五自有花朝節、何鄴侯不引此而別作節名、宜其行之不久也、【態濃意—】麗人の姿容を形容す、【態濃】

而幾不能言、久之曰貧賤中離別更苦、雖、心非木石豈無感、呑聲躑躅不敢言、〔躑〕直石反〔躅〕厨玉反、

呑聲躑躅涕淚零、　鮑昭行路

祖道の供具菲薄なることを云、酒を持こと不多、故に飲むこと未だ酣ならざるに酒は既に盡て、沙頭の雙玉瓶も傾倒して餘滴もなき也、衆賓は泛く世上の飲燕する遊人を指て云、杜勤を送る祖道の一筵に所在の賓を云に非ず、言は他の世上の衆賓は飲樂して皆醉へり、只吾輩酒を載ること不得多、雙瓶頓に盡て獨醉に不及と也、醒は始めより不醉也、楚辭漁父辭、衆人皆醉我獨醒、【乃知—】富人の人を送るは酒肴雜然として前に備る、これに由て少く離恨を慰すべし、吾輩此備なければ何を以てか悽愴を解せんや、乃知貧賤の別を爲すは、更に苦楚なることを也、注僞蘇注也、【呑聲】江文通恨賦云、自古皆有死、莫不飮恨而呑聲、甚だ悲て聲咽を云也、【躑躅】文選十九首沈吟聊躑躅、注善曰說文躑躅住足也、翰曰躑躅行不進貌、文通別賦知離夢之躑躅、意別魂之飛揚、【涕淚零】小雅小明篇、念彼共人、涕零如雨、杜勤に別んとして黯然として魂を消し、聲を呑て嗚咽し、躑躅して淚を零し泣くと也、注【鮑昭】字明遠、宋武帝時人、傳見宋書列傳十一、【行路難】古詩歸十二載之、題作擬行路難、此注に所引の句は其結句也、

○麗人行

天寶十三載、楊國忠與虢國夫人鄰居第、往來無期、或並轡入朝不見障幕、道路爲之掩目、子美因作麗人行、

本集二載之、謝疊山唐詩合選注曰、一篇道富麗事、形容驕貴氣象宛然在目、後東坡借用貼出得覺更明、而末以一句激之、蓋有畏威不敢刺之意、○許彥周詩話云、老杜作麗人行云、賜名大國虢與秦、其卒曰、愼勿近前丞相嗔、虢國秦國何預國忠事、而近前即嗔邪、東坡言、老杜似司馬遷、蓋深知之、注楊國忠虢國夫人と居第聯亘して相鄰る、往來心のまゝにして期なし、或は國忠と同く馬に騎り、轡を並て君門に入朝す、障幕を以て蔽ひ隱すことを不用、道路の人爲之醜しとして目を掩へり、子美これを看に因て麗人行を作て刺れる也、唐書楊貴妃傳云、太眞天寶初進冊貴妃、三姉皆美劭、帝呼爲姨、封韓虢秦三國爲夫人、出入宮掖恩寵聲焰震天下、賜諸姨錢歲百萬爲脂粉費、虢國素與國忠亂、頗爲人知不耻也、每入謁並驅道中、

玉、非祿々嚐比也、汝伯何由髮如漆、

【偶然―】杜勤が才を以て、一旦偶然として秀才に擢でられんこと、素より取り難き所にあらずと也、【會是―】會たまくと讀む、按に會と云は後來をあてゝするの意あり、天上人間會相見の會と同じ、向往必ず剛風を排擊して鷹揚するの日にあふこと有べし、汝もとより連雲の毛質を具ることあれば也、【汝身―】唾珠成、後漢列傳七十、文苑傳趙壹傳、魯生歌曰、家勢多所宜、咳唾自成珠、言は汝が身已に成ることあり、文章口より出れば已に珠玉となつて、燦々として觀つべき者あると也、【汝伯】杜子美自ら謂へり、言は恨は我年老頭白して餘喘幾くもなし、何に由てか髮再び黑して漆の如くなることを得て、汝が他日功名顯著するの時を見るに及んやと也、注江淹字文通、考城人、傳見南史、然れども此注は僞蘇注の妄說也、

春光淡淹秦東亭　秦東亭即京城門外東亭、送別處也、　渚蒲牙白水荇青、風吹客衣日杲々　古老反、樹攪離思花冥々、

四句別時の景を叙す、【春光】春日の艷光也、【淡淹】淹は流貌、淡淹は駘蕩の意也、【秦】は秦中即長安也、【東亭】注本集何說也、東亭は長安の京城の門外に在て別を送るの處なると也、【渚蒲牙白】蒲はがまと讀む、詩陳風、彼澤之陂、有蒲與荷、注蒲水艸可爲席者、春の時なれば、渚の蒲は始て芽を生じて白きとなり、【水荇青】周南、參差荇菜、注荇接余也、根生水底、莖如釵股、上青下白、葉紫赤圓徑寸餘、浮在水面、水上の荇菜新に生じて青也、【風吹―】春風は只今行に赴く客子の衣を吹き、日は杲々とあきらかなる也、衞風伯兮篇、杲々出日、【樹攪―】樹色は我が離別の愁思を攪き亂し、花も亦冥々と茂り蔽ふてくらく吾が心を傷しむる也、愁思內にあれば目に觸る景色皆悽愴を助く、故に攪離思と云、是亦感時花濺淚、恨別鳥驚心と云へると同意也、【冥々】詩小雅無將大車篇、維塵冥々、注冥々昏晦也、こゝにては花の茂り盛にして、重々に蔽ふてくらき貌を云、

酒盡沙頭雙玉瓶、衆賓皆醉我獨醒、乃知貧賤別更苦、衛宏失意送弟遷嶺外、氣塞朧

筆陣圖、紙者陣也、筆刀稍也、墨鍪甲也、硯將軍也、心意副將也、【掃千人軍】注謂其筆力之快利也、筆陣に臨ては、獨り能く千人の軍を伐て一掃して盡す、此れ書を學ては筆を執て一たび揮て、神速に百千の字を寫取すると云の意也、

只今年纔十六七、射策君門期第一、射策甲科謂策問疑難、從而射之、對有中否、取譬於射也、舊穿楊葉眞自知、楚有養由基者、善射、去楊葉百歩射之、百發百中、暫蹶霜蹄未爲失、

【只今―】杜勤が年只今纔に十六七に及と也、【射策】前漢書列傳四十八、蕭望之以射策甲科爲郎、注師古曰射策者謂爲難問疑義書之於策、量其大小署爲甲乙之科、列而置之不使彰顯、有欲射者隨其所取得而釋之、以知優劣、射之言投射也、射策は貢士を試る法也、疑義あることを難問するの文を策に書して、外を封して見せしめず、數通を並べ置て貢士の取にまかす、士進ていづれにても一通を取て、其難問する所に依て其事を釋して對ふ、其文の優劣を視て、事情に適中すれば擧て官を授け、事情に遠て理不明ば置て不擧、是を下第すと云、此句初め杜勤及第を望て京師に造る時の心を云ふ、君の門に入て策に對へるの文を抗げば、必第一の科に中るべしと心に期望せし也、【舊穿―】史記周本紀云、楚有養由基者善射者也、去柳葉百歩而射之、百發而百中之、此句は養由基が射の百發して百中し、外るゝことなきを借て、必ず及第すべきと思ひしことを云也、言は杜勤が學才愧る所なし、一たび君門に詣て策を射ば、即適中することを可得の才力、舊より我に具へたることは、眞に自ら知て疑ざりしと也、此れ養由基が柳葉を百歩の外に置ても、射れば即ち中て穿つぞと云ふことを、自知て信ずると同じ、故に比擬する也、【暫蹶―】霜蹄莊子馬蹄篇云、馬蹄可以踐霜雪、杜勤百發百中の具あれども、偶〻策を射て不中して下第すること、駿馬の霜蹄土塊に蹶たるが如し、偶〻の不幸也、辱とするに足らざることと也、身を失せりとするには非ずと也、

偶然擢秀非難取、會是排風有毛質、汝身已見唾成珠、江淹謂郭鞏曰、子之咳唾成珠

望烽走驛、以篆隷難不能救急、遂作赴急之書、今之草書也、【神速】字を寫すの勢神妙疾速にて、筆力勁健なるを云、僅に總角の年より草書を能く寫して、筆力神速なりしと也、【世上―】汝が才藝よりして世上の兒子を視れば、徒らに紛々と多きのみにて、一人も汝に似たる者なし、汝固に群兒の上に特出したると也、【紛々】多也、前に出たり、

驊騮作駒已汗血、鷙鳥舉翮連青雲、詞源倒流三峽水、巴陵有三峽、郎明月峽、巫山峽、廣澤峽、謂詞源壯健、可以衝激三峽之水使之倒流也、**筆陣獨掃千人軍、**謂其筆力之快利也、

【驊騮】穆天子傳卷一、天子之駿、赤驥、盜驪、白義、踰輪、山子、渠黃、華騮、綠耳、郭璞注華騮色如華而赤、今名馬標赤者為棗騮、【駒】字彙馬二歲曰駒、【汗血】前漢書九十六西域傳、大宛國去長安萬二千五百五十里、多善馬馬汗血、言其先天馬子也、注師古曰、言大宛國有高山、其上有馬不可得、因取五色母馬置其下、與集生駒皆汗血、因號曰天馬子、【鷙鳥】字彙鷙音至、猛擊鳥鷹鸇之類、廣雅鷙執也、取其能服執衆鳥、爪を以て衆鳥を擊て食ふ鷹隼の類を鷙鳥と云、【連青雲】司馬相如傳上干青雲、此二句は杜勤が幼少より奇器あることを云、驊騮と云名馬は、生れて僅に二歲已に血を汗にす、凡馬の駒と不同、衆鳥を擊て食ふ、鷙鳥の雛は翮を舉て飛ことを習て、纔に巢を離れば即ち高く揚て青雲に連て飛ぶ、彼桑楡に上んと飛べども、不及地に墮るの類に非す、これを以て杜勤に比す、天下の奇才となる者は、幼より必其質あることを云、【詞源―】文を綴ること雄壯なるを云、文を作ること流出るが如し、其勢傾倒奔流する三峽の水の如し、瞬息の間に賦し成て筆を不停と也、注【巴陵有三峽】三峽前に詳に注す、【可以衝激三峽之水使之倒流】三峽の水をば衝き激して、倒に川上へ流れしめるの勢力ありと云義也、此注非也、此句若し筆力の上に就て言は注のごとく說くべし、既に詞源と云ふときは逆流と說がたし、此倒字は傾倒の倒と作て看べし、詞源より文章の流れ出ること、三峽の水を傾け倒して直下に流すが如くなると云意也、【筆陣】書を學に筆硯の類を備るを、軍陣の具あるに喩て筆陣と云也、王羲之

也、公子糾敗召忽死之、吾幽囚受辱、鮑叔不以我爲無恥、知我不羞小節而恥功名不顯于天下也、生我者父母知我者鮑子也、鮑叔既進管仲以身下之、【貧時交】後漢書列傳十六宋弘曰、臣聞貧賤之交不可忘、言は世上の人不見や管仲鮑叔が貧かりし時の交道、終始心を二つにせず、遂に擧て薦たり、此道近時の人棄て尙びざること土の如くすると也、注【市道之交】己れが爲に利あれば歡び交り、利なきときは疎じ避く、市人の利を見ては就き、損を見ては避ると同じ故に市道之交と云、

○醉歌行　甫從姪杜勤下第歸鄕、甫於長安醉中作此以別、幷褒美之、有期望之意、

本集卷二載之注【從姪】從兄弟の子いとこをいふ也、【下第】及第に不中して擧られざる也、【有期望之意】後來必ず志を得て顯達すべきことを期し望むの意ある也、

杜子美

陸機二十作文賦、晉陸機字士衡、作文賦云云、汝更小年能綴文、總角艸書又神速、詩總角丱兮、注聚兩髦也、世上兒子徒紛々、

【陸機】晉書列傳二十四陸機字士衡吳郡人也、身長七尺其聲如鐘、父抗卒機領父兵爲牙門將、年二十而吳滅、機退居舊里、閉門勤學積十年、乃述其祖父功業、太康末機與弟雲入洛、造太常張華、華素重其名、曰伐吳之役利獲二俊、後仕成都王穎爲後將軍河北大都督、穎左右心害機寵、屢譖害之、言有異志、故穎發怒使人收機、遂遇害年四十三、機天才秀逸辭藻宏麗、張華嘗曰人之爲文常恨才少、而子更患其多、【作文賦】文選十七載文賦、其序云、每自屬文尤見其情、恆患意不稱物文不逮意、蓋非知之難能之難也、故作文賦以述先士之盛藻、言は晉の陸機は年二十にして文の賦を作れり、汝は更にそれより尙少年にして能く文を綴ることを得たると也、【綴文】前漢書劉歆傳、自孔子後綴文之士衆矣、【總角】童子の髮を兩の額上に束て、角の貌の如くなるを總角と云、未だ冠を服せざる時の形也、詩齊風甫田篇婉兮孌兮、總角丱兮、【艸書】書斷云、按草書者後漢徵士張伯英所造也、梁武帝草書狀曰、蔡邕云昔秦之時諸侯爭長羽檄相傳、

此作、所以梁權道從舊次編、在天寳十一歲爲是、又疑爲高適作、○杜詩集註云、此蓋泛言今人交不如古以警世俗、有謂指嚴武、有謂指高適、皆無所據、

此詩は交道の薄ことを嘆ずる也、此時に子美下第して京師に寓居せり、舊交に依んとするに皆棄捐して不顧、故に有此嘆、注【献賦】三大禮賦を獻ぜり、朝獻太清宮賦、朝享太廟賦、事于南郊賦、此三篇也【京華】長安也、

杜子美

翻手作雲覆手雨、紛々輕薄何須數、（陳喧曰、徐庾輩數輕薄兒、恃勢作威福、何必數耶、）

君不見管鮑貧時交、（史記管仲少時與鮑叔牙游、鮑叔終善遇之、管仲曰、生我者父母知我者鮑子也、鮑叔既進管仲以身下之、天下多管仲之賢、而多鮑叔之知人、）

此道今人棄如土、（今人但爲市道之交、無復管鮑之情、）

【翻手—】人情交りの常なきを云、手を翻す間には雲となり、雲かと見れば手を覆は則又雨と變ず、手を反覆する間に雲雨變易常の態なし、雨の如く密々と交り結ぶかと見れば、忽ち雲の如く散し去て迹なしと云意也、史記列傳三十七陸賈說尉他曰、漢使一偏將將十萬衆臨越、則越殺王降漢如反覆手耳、【紛々】列子湯問篇云、今昏々昧々紛々若々隨所爲、隨所不爲、注紛々多也【輕薄】富貴に驕りて久に不任の人、勢力を恃て麤豪なる者を云、後漢書列傳十四、馬援誡兄子書曰、効季良不得陷爲天下輕薄子、劉歆西京雜記云、平陵曹敞在吳章門下、往々好斥人過以爲輕薄、世間に紛々と多き輕薄兒、交態常なきの輩、何そ數へ擧て論ずることを用んや、齒牙に掛るに足らざる也、注【陳喧】萬姓統譜有傳陳人也、然れども此注僞蘇注也、【君不見】泛く世間の人にかけて云也、【管鮑】管仲鮑叔牙也、史記列傳二、管仲夷吾者潁上人也、少時常與鮑叔牙游、鮑叔知其賢、管仲貧困常欺鮑叔、鮑叔終善遇之不以爲言、已而鮑叔事齊公子小白、管仲事公子糾、及小白立爲桓公、公子糾死管仲囚焉、鮑叔遂進管仲、管仲曰吾始困時嘗與鮑叔賈、分財利多自與、鮑叔不以我爲貪、知我貧也、吾嘗三仕三見逐於君、鮑叔不以我爲不肖、知我不遭時也、吾嘗三戰三走、鮑叔不以我爲怯、知我有老母、

十八云、晉中興徵祥說曰、王者德澤純洽八方同一則木連理、連理者仁木也、或異枝還合、或兩樹共合、建元元年木連理者四、晉范甯爲豫章郡表曰、永修公國相萬主解列到縣巡行邑治、縣西北出二里有林、中兩桐樹下根相去一丈、枝相去丈八、連合爲一、○長恨傳使者還奏太上皇、皇心震悼日不豫、其年夏四月南宮晏駕、

【天長―】結の二句此れ樂天が辭也、老子經第七章天長地久、【綿々】詩大雅綿々瓜瓞、老子經谷神不死章、綿々若存、注綿々不已不絕之意、樂天以爲く玄宗楊妃が色を悅て迷惑し、漫りに天上地下の誓を作し、遂にこれに因て國を亂し天下を喪ふ、猶不悟して追念戀々不已、方士をして其神を尋ね索めしめて其欺誣を不省、只夢にだも再見んことを思へども不得を以て恨とし、竟にこれを以て世を終るときは、天の長き地の久きたとひ時あつて極り盡るとも、此恨は綿々と不絕して長く斷息の期なけんと也、○唐仲言曰、此譏明皇迷於色而不悟也、始則求其人而未得、既得而愛幸之、即淪惑而不復理朝政矣、不獨寵妃一身而又偏及其宗黨、不惟不復早朝、益且盡日耽於絲竹、以致祿山倡亂乘輿播遷、帝既誅妃以謝天下、則宜悔過、乃復展轉懷思不能自絕、至令方士偏索其神、得鈿合金釵而不辨其詐、是眞迷而不悟者矣、吁以五十年致治之主而一女子覆其成功、權去勢詘而以憂死悲夫、女寵之禍豈淺鮮哉、

行類

詩人玉屑卷一白石詩說云、守法度曰詩、載始末曰引、體如行書曰行、放情曰歌、兼之曰歌行、○嚴羽卿滄浪詩話詩體有歌行、古有鞠歌行、放歌行、長歌行、短歌行、又有單以歌名者、以行名者、○文選樂府飮馬長城窟行題注善曰行曲也、○文體明辨云、歌行有有聲有詞者、樂府所載諸歌是也、有有詞無聲者、後人所作諸歌是也、其名多與樂府同而曰詠曰謠、曰哀、曰別則樂府所未有、蓋即事命篇、既不沿襲古題而聲調亦復相遠、乃詩之三變也、

○貧交行

子美獻賦京華故人莫有念之者故賦是詩

本集卷一載之、題注鶴曰、師曰公作貧交詩爲嚴武爲非、意是公獻賦後寓京華故人莫有念之者故有

臨別殷勤重寄詞、詞中有誓兩心知、七月七日長生殿、（長生唐殿名、）夜半無人私語時、（天寶十載明皇憑楊妃肩、仰天感牛女之事、密相誓心、願世世結爲夫婦、）在天願作比翼鳥、（鳥各一羽相比而飛、爲比翼鳥、）在地願爲連理枝、（樹一枝相向連接脈理、而生爲連理枝、比明皇妃子私相盟誓、）天長地久有時盡、此恨綿々無絶期、（視天長地久此恨綿々之句、則其命名之意可知矣、）

【臨別】方士金釵鈿合を持て、將に辭し歸んとするに臨て也、長恨傳、方士將行復前跪致詞乞當時一事不聞於他人者驗於太上皇、不然恐鈿合金釵負新垣平之詐也、玉妃茫然退立、若有所思、徐而言曰云云、【殷勤】史記司馬相如傳、相如使人重賜文君侍者通殷懃、方士が歸る、別に臨て殷懃に重詞を傳へ寄することあり、【詞中―】其詞の中に謂ることあり、昔し嘗て誓へることありき、惟帝と我と兩心にのみ知て、外人敢て知る者はなき事也、【七月七日】即七夕二星會遇の時、

【長生殿】驪山華清宮の中にあり、【夜半―】七夕帝と倶に長生殿にあり、夜半傍ら無人、仰て二星に感じ、私語して誓し時を復た憶ひ玉ふやと也、【私語】前漢書爰盎傳云、丞相曰使君所言公事之、曹與長史掾議之、吾且奏、則私吾不受私語、○五雜組二云、長恨歌載、玄宗避暑驪山、以七月七日與貴妃凭肩誓心願、世世爲夫婦、天寶遺事又言、帝與貴妃毎至七月七日夜、在華清宮遊宴、宮女皆陳瓜菓乞巧、皆誤也、考之史、玄宗幸華清皆以十月、其返皆以二月或三月、未有過夏者、野史之不足信往々如此、【在天―】私語せし時心に願しこと今尚記す、後世若し天に在らば比翼の鳥と作て、身を終るまで比び飛て別離せじ、【比翼鳥】史記封禪書云、東海致比目之魚、西海致比翼之鳥、注韋昭曰、各有一翼不比不飛、其名曰鶼々、索隱曰山海經云、崇丘之山有鳥狀如鳧、一翼一目相得乃飛名云蠻、郭璞注爾雅亦作鶼々、【在地】願後來若し地に生を受けば、願は連理の枝と作て常に相接して離るゝことなからんと也、【連理枝】理は樹のすぢめ也、まさめいためなどゝ云木の脈理也、兩樹相接て脈理同く通して二枝一幹となるを連理枝と云也、藝文類聚九

く隔れる也、謝靈運詩、歡愛隔音容、【昭陽】三輔黃圖三、成帝趙皇后居昭陽殿、昭陽舍蘭房椒壁、其中庭彤朱、而庭上髹漆切皆銅、沓黃金塗白玉堦、壁帶往々爲黃金釭、函藍田璧、明珠翠羽飾之、自後宮未嘗有焉、昭陽は漢の殿也、借り用て唐の後宮を云、昭陽の宮中に恩愛歇て世を辭し去り、今は此蓬萊宮に還て、仙宮に住して日月殊に長と也、蓬萊宮は即玉眞が只今住する所の仙山を言ふ也、唐詩解には唐の蓬萊宮なりと云て、唐地理志、龍朔三年始大興葺曰蓬萊宮を引て證す恐は非也、蓬萊宮見十洲記、既に前に見たり、【下望―】寰說文寰王者封畿內縣也、言ろは時々舊恩を憶ひ、頭を回らして下も人間の寰宇を望み見れども、雲雨茫々と隔れば長安の所在を不見、只塵霧冥々たるをのみ見ると也、晉書明帝幼聰哲、長安使來、元帝問帝曰汝謂長安與日孰遠、帝曰日近、擧頭見日不見長安、元帝奇之、謝眺詩京洛多塵霧、【唯將―】舊物は久しく藏め來りし物也、晉王獻之夜臥齋中有盜入、獻之徐語曰、靑氈我家舊物可特置之、盜驚走、【表深情】表はあらはす也、舊く手なれし物を贈て深き情を表し示すと也、陶潛詩緬焉起深情、【鈿合】未詳、鈿飾の合子か、或人の曰首飾也、然れども首飾の具に鈿合と名くる物あるを不見、姑く闕疑、【金釵】古今注釵子蓋古笄之遺象也、至秦穆公以象牙爲之、敬王以玳瑁爲之、始皇以金銀作鳳頭、以玳瑁爲脚號曰鳳釵、潛確類書八十八、金釵蔽髻、晉令六品以下得服金釵以蔽髻、三品以上服爵釵、舊物なるを以鈿合金釵の二物を將て方士に托し、寄せて持し去て玄宗に獻せしむる也、

釵留一股合一扇、釵擘黃金合分鈿、但令心似金鈿堅、天上人間會相見、

【釵留―】是れ刻符を割の意也、一體の物を分ち與て、後來再び會して又相合せんことを期す、故に釵は一股を割て留め合は一扇を分て留む、釵は是黃金擘之半を寄せ、合は是鈿飾これを分て一扇を與ふ、其意の所寓但我が心をして、此金鈿の堅きが如くに永く變易せずして、恩愛の緣絕へざらしめ、天上或は人間會ゝ又相見ることを得べしと也、

下り來ると也、整は冠を正く理へて戴くを云、君子行李下不整冠と云是也、

風吹仙袂飄々舉、猶似霓裳羽衣舞、玉容寂寞涙闌干、梨花一枝春帶雨、

【風吹―】堂より下り來るときは、風貴妃が仙袂を吹き揚げて飄々とひるがへり舉る、これを見れば猶昔日帝の前にて霓裳羽衣を舞し時の形に似たると也、淵明歸去來辭、風飄々而吹衣、【玉容―】寂寞は憫て感を興し、辭もなく向ひ居る貌を云、楚辭蟬寂寞而無聲、文選別賦、寂寞而傷神、【闌干】韻會闌干橫斜貌、明唐汝詢唐詩解注、按闌干涙之流貌也、言は漢家の使を指して方士の來由を問ひ、且天寶十四歲以來天下の事を問ひ聞て、古を想ひ今を歎き憫然として心を傷ましめ、玉容寂寞として言もなく、色いたみて涙闌干と流ると也、吳越春秋、越王掩面涕泣闌干、【梨花―】玉眞が玉顏しほたれて眼に涙を浮る貌を見れば、梨花の一枝開けたるに、春の時雨を帶て花房重く垂れたるに相似たると也、

含情凝睇謝君王、一別音容兩渺茫、昭陽殿裏恩愛絕、蓬萊宮中日月長、回頭下望人寰處、不見長安見塵霧、唯將舊物表深情、鈿合金釵寄將去、

【含情】戀々の情を心にふくむ也、沈約詩、含情寄盃酒、王僧孺詩、含情一寄語、【凝睇】說文睇小視也、凝睇とはうらみ視て目を不轉こらし視るを云也、是含情の目に發る也、【謝君王】玄宗舊恩を不遺、戀々して魂魄を尋ね覓め、方士をしてこれまで來らしむるの厚情を謝する也、【一別―】以下方士に憑て辭を寄せ玄宗に言ふすの語也、一別は馬嵬坡に於て一たび別てより也、【音容】音は消息のおとづれ也、容は相逢て容貌を見る也、【渺茫】廣大貌、言は一たび別離してより以來、安否の音信を聞くこともなければ、まして相見て容貌に接することなし、音容兩から渺茫と遠

て仙山に到り、金闕に入て西廂の玉扃を叩いて言ふすことあるよしを云也、【轉】は轉達也、次第に轉じ傳る也、【小玉雙成】名を借て貴妃が侍兒を言也、漢武內傳云、帝閑居承華殿、忽見一女子著青衣美麗非常、帝愕然問之、女對曰我墉宮玉女王子登也、乃爲王母所使、又云七月七日王母至也、命侍女董雙成吹雲和之笙、方士こゝに來るの由を小玉に言ひわたし、小玉又轉じて雙成に言て、貴妃に告げ聞かしむる也、報は告る也、報平安の報と同じ、【聞道—】漢家は起句に漢皇重色と云に因て、こゝに又漢を借て言也、此時玉眞方に寢ねたり、侍兒が告げ來るに因て、漢家の使者至ることを聞て、九華帳の裏に夢魂驚き回て、睡忽覺たる也、【九華帳】九華の飾を爲たる帳也、裝飾に九華を用ること多し、瑯琊代醉卷八云、九華衾王侯所用者、鮑照行路難云、奉君金卮之美酒、玳瑁玉匣之瑤琴、七乘芙蓉之羽帳、九華蒲萄之錦衾、九華臺三國時魏武作、九華樓杜牧有九華樓詩、晤光艶々含淺沙、高低遠郭帶秋花是也、九華帳王維洛陽女兒行、寶扇迎歸九華帳、九華扇曹子建有賦序云、昔吾先君常侍得幸桓帝、賜扇、不方不員其中結成文、名曰九華是也、

攬衣推枕起徘徊、珠箔銀屛邐迤開、雲鬢半偏新睡覺、花冠不整下堂來、

【攬衣】十九首古詩、攬衣起徘徊、帳中に夢覺て身を興し、衣を攬て枕を推て起ちあがり、床上に徘徊する也、【徘徊】不進之貌、前漢書外戚傳武帝賦云、何靈魂之紛々兮、哀裴回以躊躇、文選思玄賦馬倚輈而徘徊、【珠箔】三輔黃圖云、桂宮中有光明殿、皆金玉珠璣爲簾箔、珠を織て箔とする也、箔簾也、【邐迤】蕭子顯詩、邐迤因臺榭、字彙邐迤行貌、又連接也、因循也、帳を出來る狀を云、玉眞九華の帳を出んとして、珠の箔銀の屛をひら〳〵と相因循して開く也、【雲鬢—】二句は寐ざめにしどけなき貌にて出來を寫す也、雲鬢前に見えたり、【半偏】睡中枕を支て髻の少くかたよりたる貌也、玉眞が出るを望み見れば、雲の鬢半は偏り鬆れて只今新に睡の覺たる容貌也、【花冠】花の冠も雲鬢と共に傾欹して整らす、しどけなく堂上より

渤海中、こゝに仙山と云は蓬萊を指て云、【山在―】虛
無人間の山川雲烟の表、冥々として邊際もなき所を
云、【縹緲】文選海賦、神仙縹緲餐玉淸涯、注向曰、縹緲
高遠貌、善曰縹緲遠視之貌、遠く視て目力極り、靄氣
の外尙幾萬里とも測がたき所を縹緲と云也、所謂仙
山は虛空無邊にして、涯際もなき縹緲たる靄氣の間
に在ると也、【樓殿玲瓏】楊雄甘泉賦、前殿崔巍兮和氏
玲瓏、注玲瓏明見貌、莊嚴のきら〳〵と麗しきを云、
其神仙山には上に樓殿あり、盛飾の美なること玲瓏
とかゝやいて、常に五雲起り升ると也、五雲は五色の
雲ならんか、未考困學紀聞云、杜出瞿塘峽詩、五雲高
太甲、六月曠搏扶、注不解五雲之義、嘗覩王勃益州夫
子廟碑云、帝車南指遁七曜於中階、華蓋西臨藏五雲
於太甲、酉陽雜俎謂、燕公讀碑自帝車至太甲四句悉
不解、愚謂老杜讀書破萬卷、自有所据、或入蜀見此
碑、而用其語也、以一行之邃於星曆、張燕公段柯古之
殫見洽聞、而猶未知、姑闕疑以俟博識、【其中】は海上
仙山の中也、【綽約】楚辭質銷鑠以汋約、注汋約柔弱貌、
莊子逍遙遊云、藐姑射之山有神人居焉、肌膚若氷雪、
淖約若處子、海上の仙山の中には、綽約たをやかなる
仙子多く聚り居ると也、【中有―】玉眞注乃貴妃也、仙
子多き中に一人字を玉眞と云仙ある也、鮑照詩中有
一人字金蘭、【雪膚】莊子肌膚若氷雪、文選好色賦、眉
如翠羽肌如白雪、【參差】不齊也、面貌骨相こゝかし
こ粗相似たるを參差是と云、玉眞が雪の膚にして花
の貌なる容姿を聞けば、貌偏く尋ね索る楊貴妃の質
と相似たり、大かたは是貴妃にて可有そと云意にて、
參差として是なりと云、此一節六句は方士が仙山の
ありさまを聞得たる狀を敍也、末には尋去て索るこ
とを云、

金闕西廂叩玉扃、轉敎小玉報雙成、聞道漢家天子使、九華帳裏夢魂驚、

【金闕】史記二十八封禪書云、蓬萊方丈瀛洲此三神山
者、其傳在渤海中、蓋嘗有至者、諸仙人及不死之藥皆
在焉、其物禽獸盡白、而黃金銀爲宮闕、【西廂】文選魯
靈光殿賦、西廂踟躕以閑宴、注西廂西序也、爾雅曰東
西廂謂之序、方士貴妃の蓬萊に在ることを聞て、尋去

上居他帳遙望見好女如李夫人貌還幄座而歩、上愈益悲感、【爲感―】【展轉】周南關雎篇、輾轉反側、注輾者轉之半、轉者輾之周、皆臥而不安席之意、蜀より來る道士、玄宗の貴妃を思念して寐ても席を不安、輾轉して悲み玉ふことを知て、其念を感ぜしめんとする也、【遂敎―】方士は方術の士也、道士の下に屬する術士也、史記封禪書云、天子始親祠竈、遣方士入海求蓬萊安期生之屬、【殷勤】字彙殷懃委曲貌、方士を遣して殷懃に貴妃の魂魄の在所を尋ね覓めしむ、其神の在所を知て招き致し、玄宗に見せしめん爲也、

排風御氣奔如電、升天入地求之徧、上窮碧落下黄泉、兩處茫茫皆不見、

【排風】排は推也斥也、剛風をおしひらきて高空に上る也、【御氣】御は乘の意也、列子御風の御と同じ、氣に乘て空中を行也、【奔如電】電の閃々として空に度るは極て疾し、故に奔ることの捷に比す、楚辭奔電弓光晃、魏書楊大眼勇敢蹻捷走如電、【升天―】方士術を竭して天に升り地に入て、貴妃の魂魄の所在を求ること、徧うして至らずと云處なし、【上窮碧落】碧落上天の名也、唐詩解注云、度人經道言昔於始青天中碧落空歌、注東方第一天有碧霞遍滿、是云碧落、上みは碧落のかぎりまで窮め升る也、【下黄泉】文選十九首古詩、潛寐黄泉下千載永不寤、注善曰、服虔左氏傳注曰、天玄地黄、泉在地中、故言黄泉、地下なる黄泉と云、左傳鄭莊公置姜氏於城潁而誓之曰、不及黄泉無相見也、下は黄泉の底までも極め覓る也、【兩處】碧落黄泉の兩處也、【茫々】廣大貌、【皆不見】天上地下まで尋れども共に茫々と邊際なきのみにて、貴妃の在所は見ることを不得也、

忽聞海上有仙山、山在虚無縹緲間、樓殿玲瓏五雲起、其中綽約多仙子、中有一人字玉眞、（玉眞乃貴妃也）雪膚花貌參差是、（〔參〕初今反〔差〕楚宜反）

【忽聞―】方士又忽に聞得たり、海上に仙山の在ことを、史記封禪書云、蓬萊方丈瀛洲此三神山者其傳在

觸れては最も貴妃を追念して、懷にたへかね玉ふと也、

鴛鴦瓦冷霜華重、翡翠衾寒誰與共、悠々生死別經年、魂魄不曾來入夢、

【鴛鴦瓦】事文類聚後集四十六鴛鴦條下云、魏文帝問周宣曰、吾夢殿屋兩瓦墜地化爲鴛鴦何也、此故事に依て瓦頭に鴛鴦の形を造るか、鄴中記云、鄴城銅雀臺皆鴛鴦瓦、梁昭明太子詩、日麗鴛鴦瓦、【霜華】霜の瓦上に置たるが華の舗たる如なるを云、霜結て花樣となることとあれども後世のこと也、【翡翠衾】翡翠の羽を以て飾たる衾なるべし、唐詩解作舊枕故衾、言は鴛鴦瓦上に霜華重く置て、嚴冷酷しき冬の時も夜に侍る人なし、翡翠の衾寒して誰と與にか擁せんやと也、【悠々】遥に遠き貌を云、悠々とははるかに隔れる生死一たび別て後、年を經れども貴妃が魂魄は曾て來て玄宗の夢に入て相見ることもなきと也、長恨傳三載一意其念不衰、求之夢魂杳々而不能得、

臨卭道士鴻都客、（道士姓楊名通幽）能以精神致魂魄、爲感君王展轉思、遂教方士殷勤覓、

【臨卭】前漢書地理志、蜀郡有臨卭縣、唐書地理志卭州臨卭郡有臨卭縣、【道士】釋名人行大道曰道士、仙道を學て方術をなす者也、事物紀原七云、黃帝內傳有道士行禮之文、此疑謂有道之士也、樓觀本記曰、周穆王因尹眞人草樓之觀召幽逸人居之、謂之道士、平王東遷置七人、漢明帝永平七年置三十七人、晉惠度四十九人、審此卽是自周而有之、司馬遷班固叙秦漢甚詳、洎春秋以來殊無一人以一言彷彿道茲事者、亦可疑矣、然范曄後漢書於光武紀論始有言、道士西門君惠李守等云、劉秀爲天子蓋前漢末事、則道士之初當此矣、【能以精—】道士の術を行て、精誠を以て幽鬼の魂魄を招き致すことを能する者なり、此れ漢の少翁が李夫人の神を致し、後世箕仙を招く術の類也、漢書外戚傳武帝思念李夫人不已、方士齊人少翁言能致其神、廼夜張燈燭設帷帳陳酒肉而令

容なし、白髮も新に生じたるやうに見ゆると也、【椒房】注漢宮儀に、皇后の所居を椒房と稱す、山椒を末して土に和て壁に塗る、性溫にして又能邪惡の氣を辟るに取也、又椒は實多き者也、詩の唐風に椒聊之實、蕃衍盈升と云義を取て、皇后多く皇子を誕生あらんことを祝して椒を塗ると也、皇后の所居のみを椒房と云に非ず、宮人の所居を總て椒房と稱す、三輔黃圖卷三云、椒房殿在未央宮、以椒和泥塗、取其溫而芬芳也、武帝時後宮八區有昭陽、飛翔、增成、合歡、蘭林、披香、鳳凰、鴛鴦等殿、後有增修、安處、掌寧、茝若、椒風、發越、蕙草等殿、爲十四位、成帝趙皇后居昭陽舍、班婕好居增成舍、哀帝董昭儀居椒風舍、【阿監】注阿監掌宮女者、後漢書皇后紀序、居有保阿之訓、動有環珮之響、監は領也、官女を領する妃嬪の老たる者也、杜牧宮詞、所謂監宮引出暫開門と、監宮卽阿監也、【青娥老】注青春少年之娥已老、玄宗在位の時に青春初陽の如き嫩き少年の阿監も、今已に老たると也、輔按に娥字疑は蛾字ならんか、蛾は蠶蛾也、其眉細而長曲、故に婦人眉の美なるを蛾眉と云、青蛾と云ときは黛青き美なる眉を指て云、此れ白髮に對すべし、當時の阿監黛青く粧たる蛾眉も、亂離を經て容飾遽に老たると云義ならんか、衆女を領する阿監、恐くは當時と云とも青春少年の娥にはあるべからず、

夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠、遲々鐘鼓初長夜、耿々星河欲曙天、

四句皆景中に情を寓して、追慕最切なる時を云、凉夕殿前に螢飛て寂寥たる時、獨坐して古を懷思ひ悄然としていたまし、字彙悄七小の切憂也靜也、【孤燈—】夜の深るに至るまで、孤燈に對して獨り思ひ、燈を挑け盡せども尙未だ眠ることもなき也、【遲々—】遲々は徐に移てゆる〳〵とふけゆくを云、豳風七月篇春日遲々、漏刻の移ること遲々として、鐘鼓の更を報ずること初て長くなりし夜のころ也、【耿々—】耿々光也小明也、邶風、耿々不寐、文選洛神賦、夜耿々而不寐、謝眺詩秋河曙耿々、【星河】天河也、夜靜にして耿々と光みゆる星河の漸く曙んとする時也、此れ皆景寂かに心閑にして感をなしやすき時也、玄宗此景に

じて、愁緒愈〻亂ると也、是亦李白が清平調に、雲想衣裳花想容と云句と同意也、西京雜記卷二、卓文君姣好眉色如望遠山、臉際常如芙蓉、【對此】此は芙蓉と柳とを指す、芙蓉の紅柳の綠を見て其顏色を追慕す、何如ぞ爲之淚垂れ玉はざらんやと也、【春風—】春風和氣を扇て暖に、內園の桃李花始て開く、此良夜に當て風物固に美なれども、宴上更に貴妃が侍るを不見、豈に當時春遊に從て、春宵の短を苦みし時の燕樂を憶はざらんや、【秋雨—】秋雨蕭條として冷氣人に著、檐上の梧桐葉始て落つ、此時殿上閴寂として倶に與に語るべきなし、誰か又歡を承け宴に侍らんや、此時此景又愁腸を攪て舊歡を想はざらんや、注對此景物使人傷悲と云此意也、

西宮南苑多秋艸、宮葉滿階紅不掃、梨園弟子白髮新、（唐禮樂志初隋在法曲其聲淸新而近雅、玄宗酷愛法曲、選坐部伎弟子三百人敎於梨園、謂之梨園弟子、）椒房阿監青娥老、（漢官儀皇后稱椒房、以椒塗壁取其溫辟惡氣、及取椒實蕃衍之義、○阿監掌宮女者、青春少年之娥已老、）

〔阿〕音提、【西宮南苑】西內南內也、唐地理志、關內道西京注云、皇城謂之西內、大明宮在禁苑東南、西接宮城之東北隅、曰東內、興慶宮在皇城之東南、開元初置、至十四年又增廣之、謂之南內、西宮南內久く賊徒の據ところとなりて階庭荒に就て當時の如く嚴肅ならず、故に秋の艸多く生ずる也、【宮葉—】宮庭の木葉散り落て、階に滿ち紅を鋪けども掃除することもなき也、【梨園弟子】雍錄云、梨園在光化門北、開元二年置敎坊于蓬萊、上自敎法典、謂之梨園弟子、新唐書禮樂志十一云、玄宗既知音律、又酷愛法曲、選坐部伎子弟三百敎於梨園、聲有誤者帝必覺而正之、號皇帝梨園弟子、宮女數百亦爲梨園弟子居宜春北院、梨園法部更置小部音聲三十餘人、【白髮新】玄宗西幸より歸京の時に至て僅に三年なれば、梨園の弟子遽に白髮となれる理なし、然れども此れ極て衰落の狀を言ふ也、言ろは玄宗在位の時梨園に敎坊を置て自ら法曲を敎へ玉し弟子ども、天子西幸の後は主を失て所倚なく、皆漂流して憂苦を嘗む、歸京の後召し見玉へば皆衰落して舊

也、神女賦六龍儼其齊首、載雲車之容裔、玄宗龍馭を回して京師に歸り玉ふは、肅宗の至德二年也、【到此】轡に貴妃を殺したる處也、【躊躇】字彙躊躇猶豫也、又住足也、宋玉九辨淹留而躊躇、文選五十七謝希逸誄注、躊躇行止貌、たちもとをると訓ず、ためらひて進まざるを云、貴妃が殺されたる時の狀を想ひ悲て、其處に躊躇して去りあへ玉はぬ也、【馬嵬坡】注前の小注に詳也、【玉顏】宋玉神女賦、貌豐盈以莊姝兮、苞溫潤之玉顏、馬嵬坡の下泥土の中にこそ在らめど、溫潤の玉顏は復た見ることとなし、只空く死せし所の處を此ぞと見るばかり也、

君臣相顧盡沾衣、東望都門信馬歸、歸來池苑皆依舊、太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉、對此如何不淚垂、春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時、見芙蓉則思貴妃之面、見楊柳則思貴妃之眉、春風花開艷陽之辰、秋雨葉落淒涼之際、對此景物使人傷悲、

【君臣—】馬嵬貴妃が遺跡を見て君臣とも哀傷して相顧み、皆淚を墮して衣を沾す也、【東望都門】馬嵬を過て漸く帝城近く東の方都門を望て行く、猶戀々として心馬嵬に殘り、速に京に入に意なし、故に馬の行くに信せて驅ることとなく、徐々と歸ると也、【都門】注前に見えたり、【歸來—】歸來て宮に入れば、池も苑も皆舊に依て昔に變ることとなし、【太液】三輔黃圖四、太液池在長安故城西建章宮北未央宮西南、太液者言其津潤所及廣也、漢書曰建章宮北治大池名曰太液、池中起三山以象瀛洲蓬萊方丈、刻金石爲魚龍奇禽異獸之屬、廟記太液池周廻十頃、有采蓮女鳴鶴之舟、【未央宮】三輔黃圖卷二云、漢書曰高祖七年蕭何造、周回二十八里、前殿東西五十丈、深十五丈、高三十五丈、營未央宮因龍首山以制前殿、此句池苑依舊の景を云、太液池には昔に易らず芙蓉の花あり、未央宮の前には柳條舊に依て綠を垂れたると也、【芙蓉如—】玄宗貴妃を追悼するの念每に懷に不絶、故に芙蓉の鮮娟なるを看ては、貴妃が面色の姣好如此なりしと思ひ慕ひ、又未央の柳を看ては貴妃が眉色の翠黛に似たりと傷て看るに不忍、眼前の景物目に觸れ心に感

【蜀江―】蜀中所見の景、蜀江は水碧に蜀山は樹青し、水を望み山を見、景に觸れ內に感ず、皆是聖主朝朝暮暮に戀情を牽の緣ならずと云ことなき也、【聖主】玄宗を指す、家語顏淵曰、願得明王聖主輔相之、前漢書爰盎傳、聖主不乘危不徼幸、【朝々暮々】宋玉高唐賦、旦爲雲暮爲行雨、朝々暮々陽臺之下、【行宮】天子の在所を何れの處にても行宮と云、天子は四海を巡狩し玉ふて常の所なし、行て止り在す所を皆宮と云、蜀道次宿の所皆行宮と云べし、蔡邕獨斷、天子自謂曰行在所、猶言今雖在京師行所至耳、巡狩天下所奏事處皆爲宮、行宮に月を見玉へば、當時遊宴を照せし色に非ず、今は却て心を傷ましむる色と成て、轉た悽愴を益すと也、【夜雨聞鈴―】明皇別錄云、帝幸蜀南入狹斜谷、屬霖雨彌旬、於棧道中聞鈴聲、與山相應、帝既悼貴妃、因採其聲爲雨霖鈴曲、以寄恨、時獨梨園善觱篥樂工張徽從、帝以其曲授之、洎至德中復幸華淸宮、從官嬪御皆非舊人、帝於望景樓令張徽奏此曲、不覺悽愴流涕、其曲後入法部、鶴林玉露天集云、魏鶴山天寶遺事詩云、紅錦棚盛河北賊、紫金盞酌壽王妃、弄成晚歲郎當曲、正是三郎快活時、俗所謂快活三郎即明皇也、小說載、明皇自蜀還京、以駝馬載珍玩自隨、明皇聞駝馬所帶鈴聲謂黃幡綽曰、鈴聲頗似人言語、幡綽對曰似言三郎郎當三郎郎當也、明皇媿且笑、【腸斷】語林云、桓公入蜀、至三峽中、部伍中有得猨子者、其母緣岸哀號行百餘里不去、遂跳上船、至便即絕、破視其腹中腸皆寸々斷、公聞之怒命黜其人之官、夜雨の中に行馬の鈴音を聞玉へば、哀音山に響て轉た悲みを添て、腸を斷つ聲となると也、

天旋地轉回龍馭、到此躊躇不能去、馬嵬坡下泥土中、（嵬）五回反 不見玉顏空死處、

【天旋地轉】郭子儀李光弼が輩、大軍を擧て安祿山史思明が軍を敗り、肅宗靈武にて位に卽き、賊を討て兩京を復し、滅んとせし唐室を中興して天下を平げられしことを云、是天地旋轉して一變するなり、【回龍馭】易乾彖云、時乘六龍以御天、龍馭は玄宗の法駕を指て云、馬八尺なるを龍と云、六馬を駕したる車

ともならざりしと也、【回頭―】玄宗貴妃を路傍に棄置て蜀に幸あり、行々も貴妃を悼み懐て、首を回して過ごこし方を望み玉へば、悲みに不勝、血涙相和して流ると也、泣くこと甚極れば涙に血和して出ると也、韓非子巻四云、楚人和氏抱玉璞而哭楚山之下三日三夜、涙盡而繼之以血、

黄埃散漫風蕭索、雲棧縈紆登劍閣、峩眉山下少人行、（峨眉成都府山名、）旌旗無光日色薄、

【黄埃―】蜀道の景を云、塞邊の地常に黄雲黄塵を颺く、蜀に幸の道中黄埃散漫と起ち迷て、風は蕭索とものさびしく吹あるゝ也、【蕭索】幽寂貌、【雲棧】棧道遠く連て望めば、雲の空に度るが如し、故に雲棧と云、梁州圖經云、棧道連空極天下之至險、與利州至三泉縣、橋閣共一萬九千三百八十間、護險編欄共四萬七千一百三十四間、郡國志、褒城縣北口曰斜、南口曰褒、長四百七十里同爲一谷、兩谷高峻、褒水所流、昔張良送高皇帝至褒中、説燒棧道、即此地也、入斜谷路至鳳州界百五十里、有棧二千九百八十九間板閣二千八百九十二間、【縈紆】めぐりめぐる也、絶崖の側旁に棧閣を作り、山の盤廻するに隨て接き連る、故に棧道縈紆する也、【登劍閣】劔閣蜀第一の險難なる處也、酈道元水經注、小劔去大劍三千里、連山絶險飛閣相通、故謂之劔閣、左太冲蜀都賦云、一人守隘萬夫莫向、文選劍閣銘、劍閣壁立千仞、窮地之險、極路之峻、一人荷戟百夫趦趄、【峨眉山】唐書地理志、劔道嘉州有峨眉山、峨眉山の下を過ぎ玉ふに、人の往來も少れにてものさびしきと也、【旌旗―】周禮春官、司常掌九旗之物名、熊虎爲旗、折羽爲旌、熊虎の猛獸を畫くを旗と云、羽を折て飾るを旌と云、然れども凡の旗を總て旌旗と云也、玄宗尋常の幸にこそ儀仗もはなやかなれ、不意出奔の道中なれば、法駕の行色しほたれて旗旌の光もなく、山深き間なれば日の色も薄して、景物蕭々とものさびしき也、

蜀江水碧蜀山靑、聖主朝々暮暮情、行宮見月傷心色、夜雨聞鈴腸斷聲、

慶於君者皆呼萬歲、秦漢以來臣下對見於君、拜恩慶賀、率以爲常、後人以呼萬歲爲山呼者、其事蓋起於漢武時、按前漢武帝本紀曰、元封元年正月登嵩高、御史乘屬在廟傍、吏卒咸聞呼萬歲者三、迄今三呼以爲式而號山呼也、【始整部伍】陣の備へを整て列を定め、蜀に向ひ行くの計をなして法駕に供奉する也、

花鈿委地無人收、翠翹金雀玉搔頭、君王掩面救不得、回首血涙相和流、

【花鈿】潛確類書八十八云、花鈿唐韻鈿金花飾、古樂府大婦擘雲裘、中婦卷羅幬、少婦多妖艶、花鈿繁石榴、事物紀原三云、花鈿酉陽雜俎曰、今婦人面飾用花子、起自唐上官昭容所制以掩點迹也、按隋文宮貼五色花子則前此已有其制矣、似不起上官氏也、雜五行書曰、宋武帝女壽陽公主人日臥於含章殿簷下、梅花落額上成五出花、拂之不去、經三日洗之乃落、宮女奇其異競効之、花子作疑起於此、鈿は金花の飾也、酉陽雜俎卷八に云、近代の粧に靨を作は吳の孫和が鄧夫人より起り、花子は上官昭容より起ると云へば、靨鈿は粧の名、面上に花樣を粧ふを花鈿と云、貴妃縊り殺れて軍馬の前に死す、花鈿の粧ひ地に委ねて人の收め葬る者なく、屍を棄をきたる也、人或は以爲く、花鈿は釵の類、首上の飾なりと非也、花鈿翠鈿皆面粧なり、【翠翹―】三の者皆首の飾也、上の句委地無人收の五字を引來て下の句を說べし、貴妃が骸骨を收る者もなければ、首上の飾具も亦地に委て散棄し、人の收ることなきと云意也、【翠翹】楚辭、砥室翠翹挂曲瓊、注翠鳥名也、翹羽也、潛確類書八十八云、翠翹古今注紂作翠翹、七啓戴金搖之燿燿、揚翠羽之雙翹、翹羽以翠羽爲首飾　韋應物詩、麗閣情飄々、頭上鴛釵雙翠翹、【金雀】釵の首に金雀を施したる者也、釋名爵釵釵頭及上施爵也、魏陳思王美女篇、頭戴金雀釵、腰佩翠琅玕、【玉搔頭】玉簪也、西京雜記卷二、武帝過李夫人就取玉簪搔頭、自此後宮人皆用玉、玉價倍貴焉、後漢書列傳五十三李固傳、固獨胡粉飾貌、搔頭弄姿、【君王掩―】玄宗貴妃がありさまを視て、不忍して面を掩ひ歎き玉へども、勢不得已に因て、救ひ玉ふこ

て食へり、馬嵬に至ても猶糧の備なし、故に將士皆飢疲れて憤み怒る也、【以禍由―】楊國忠權を專にして天下の怨を積むこと久し、故に祿山詭つて楊國忠を誅すると云を以て兵を集めて范陽に反す、此れ禍ひは國忠に由て起る也、故に人皆怒て國忠を誅せんと欲す、【以槍揭―】軍士ども何をがな辭として國忠を誅せんと思ふに、會〻吐蕃の使者二十餘人國忠が馬を遮て無食ことを訴ふ、國忠對んとして留りて使者と言ふ、軍士ども是を見て呼て曰、國忠こそ胡虜と共に謀反すと、因て國忠を逐て殺レ之、槍を以て其首を貫きて驛門に揭げ、諸人に看せしめたり、【上聞―】玄宗陣中の軍士噪て喧を聞玉ひて、履を着け杖を支て自ら驛門に出て、軍士の是まで從ひ來ることを慰め勞らひ玉て、はやく軍旅の隊を整て幸をすゝめよとの玉へども、軍士ども憤怒猶未レ息して勅にも不レ應、隊を收ることもせざる也、【上遣高力―】上の自ら慰勞し玉へるをも不レ應は何の故ぞと、高力士をして問せられたり、將軍陳玄禮對て曰、亂の源を尋れば皆貴妃より始を造せり、是禍の本尙在り、願は陛下恩を割て貴妃を誅し、天下の法を正し玉へと云、【上曰貴妃―】玄宗の曰、貴妃は常に深宮の裏に居て外事に關らず安ぞ楊國忠が謀反のことを知んや、彼には罪なしと庇ひ玉ふ也、【力士―】力士が曰、貴妃は誠に罪あるに非れども、將士已に國忠を殺たり、然るに貴妃尙陛下の左右に在らば、將士の意各後禍を懼て敢て自ら安んずることなかるべし、將士の意危ふみ懼れなば陛下に忠を致すまじ、願くは玄宗審に思慮して事の時誼如何んと想見玉ふべし、貴妃を殺して諸將軍士の意を安んじ玉ば陛下を能衞護し奉るべし、然らば陛下も安かるべしと云、【上乃―】玄宗已むことを不レ得して、乃高力士に命じて、貴妃を路旁の佛堂に引き行きて縊て殺さしむ、【輿尸―】貴妃が尸を輿に載て驛庭に置、陳玄禮等を召て觀せしめられたり、【玄禮等―】帝の寵妃を請て殺さしむる故に、玄禮等冑を免て其罪を謝する也、【呼萬歲】貴妃に死を賜ふときは禍の本悉く除けり、故に一軍皆めでたしとて萬歲々々と呼ばりて悅たる也、萬歲は漢の武帝より始る、祝するの辭也、事物紀原云、考二古逮一周末一有二此禮一、戰國時秦王見二藺相如奉一レ璧、田單僞約レ降レ燕、馮諼焚二孟嘗君債劵一、左右及民皆呼二萬歲一、蓋七國時衆所レ喜

轉蛾眉馬前死、

玄宗幸蜀、軍次馬嵬驛、將士飢疲皆憤怒、以禍由楊國忠、欲誅之、以槍揭國忠之首於驛門、幷殺秦國韓國虢國三夫人、上聞喧譁、出門慰勞軍士、不應、上遣高力士問之、陳玄禮對曰、禍本尚在、願陛下割恩正法、上曰貴妃常居深宮、安知國忠反謀、力士曰貴妃誠無罪、然將士已殺國忠、而貴妃在陛下左右、豈敢自安、願陛下審思之、將士安則陛下安矣、上乃命力士引貴妃於念佛堂縊殺之、輿尸置驛庭、令玄禮等觀之、玄禮等乃免冑謝罪、呼萬歲、始整部伍爲行計、

【九重城闕】長安の帝城を指て云也、楚辭宋玉九辨云、豈不鬱陶而思君兮、君之門以九重、天に九天あり、故に天子の門を天に象て九門に作也、【烟塵生】安祿山が爲に陷いれられて焚掠せられ、烟塵を揚る也、【千乘萬騎】天子の鹵簿は千乘萬騎を用、蜀に幸の時千乘萬騎あるに非れども、法駕を稱する通例を以言ふ也、史記梁孝王世家、從千乘萬騎來西馳獵、注索隱曰、漢官儀曰、天子法駕三十六乘、大駕八十一乘、皆備千乘萬騎而出也、【西南行】蜀に幸あるを云、玄宗紀、哥舒翰兵敗潼關、哥舒翰麾下來告急、上不時召見、及暮平安火不至、上始懼召宰相謀之、楊國忠首唱幸蜀之策、上然之、乃命龍武大將軍陳玄禮整比六軍、黎明上獨與貴妃、姉妹、皇子、妃主、皇孫及親近宦官宮人出延秋門、【翠華】天子の車上に建る翠羽を以飾りたる旗也、古文相如上林賦建翠華之旗、注翠華以翠羽爲葆也、古文大全、翠華天子之具、【搖々】車の行に隨て車上の旗動く貌也、戰國策楚王曰、寡人心搖々然如懸旌、【行且止】行陣不勇して行ては又止り、或は行て速になき也、【西出都門】前漢書王莽傳、兵從宣平門入、民間所謂都門也、注長安城東出北頭第一門、【百餘里】馬嵬驛まで至り玉ふを云也、【六軍不發】注に詳也、【無奈何】玄宗出て慰勞し玉へども軍士不應、故に如何んともし玉ふべきやうなき也、史記扁鵲傳、疾在骨髓、雖司命無奈之何、【宛轉】隋煬帝詩、淸歌宛轉繁絃促、王子淵洞簫賦、垂喙宛轉、注宛轉盤旋也、善曰宛轉動貌、眉つきうつくしくとろ〲とすると云辭の意也、【蛾眉】蛾は蟲の名也、眉の美なる者也、故に婦人の眉美なるを蛾眉と云、詩碩人篇、螓首蛾眉、蛾眉は即ち貴妃を指て云也、【馬前死】貴妃玄禮等が請に因て縊り殺されたるを云也、注【軍次馬嵬】馬嵬在西安府興平縣西二十五里、【將士飢疲】蜀道の行蒼卒にして兵糧の備なし、玄宗咸陽に至り玉ふとき日中まで食し玉はず、胡餅を市て獻ずるに皇孫の輩皆手にて掬し

空擲之化爲大橋、其色如銀、請元宗同登、約行數十里至大城闕、公遠曰此月宮也、見仙女數百皆素練寬衣舞於廣庭、元宗問曰此何曲也、曰霓裳羽衣之曲也、元宗密記其聲調、旦召伶官依其聲作霓裳羽衣之曲、

注【西清詩話】は宋蔡絛字寬夫作也、【楊敬達】無傳、婆羅門は西域の國の名也、【葉法善】は術士也、【聲調】樂の清濁の聲、律呂の調子也、【脗合】口を合するを脗と云、上下の唇を合せて齟齬なきが如く、事の能相同しきを脗合と云、字彙脗音吻合口也、凡事相同者曰脗合、【便韻】韻に叶はせての意也、蔡絛西清詩話云、歐陽公歸田錄論王建霓裳詞云、弟子部中留一曲、聽風聽水作霓裳、以不曉聽風聽水爲恨、余嘗觀唐人西域記云、龜茲國王與臣庶知樂者、於泰山間聽風聽水之聲均節成音、後翻入中國、如伊州涼州甘州皆龜茲境也、此說近之、但不及霓裳耳、鄭虞津陽門詩注云、葉法善引明皇入月宮聞樂聲歸、但記其半、會西京府楊敬達進婆羅門曲、聲調脗合、按之便韻乃合二者製霓裳羽衣曲、則知霓裳亦來自西域也、以獻詔以曲名賜御院爲題、此曲世無譜、好事者惜之、【葉法善】太平廣記二十六神仙部云、葉法善字道元本出南陽葉邑、今居處州松陽縣、四代修道、皆以陰功密行及劾召之術救物濟人、母劉因晝寐夢流星入口吞之乃孕、十五月而生、年七歲溺於江中、三年不還、父母問其故、曰、青童引我飲以雲漿、故少留耳、亦言青童引朝太上、太上頷而留之、弱冠身長九尺、額有二午、性淳和潔白不茹葷辛、常獨處幽室、或遊林澤、或訪雲泉、自仙府歸還已有役使之術矣、嘗因八月望夜、師與玄宗遊月宮、聆月中天樂、問其名、曰紫雲曲、玄宗素曉音律、默記其聲、歸傳其音、名之曰霓裳羽衣、自月宮還過潞州城上、俯視城郭悄然而月光如晝、師因請玄宗以玉笛奏曲、時玉笛在寢殿中、師令人取之而至、奏曲既投金錢於城中而還、旬日潞州奏、八月望夜有天樂臨城、兼獲金錢以進、玄宗累與近臣試師道術不可殫□、而所驗顯然皆非幻妄、故特加禮敬也、出集異記及仙傳拾遺、

九重城闕烟塵生、千乘萬騎西南行、翠華搖々行復止、西出都門百餘里、六軍不發無奈何、宛

に往て戰死す、故に民悲て云、女を生ては猶比隣にも嫁與するが、男子はとても生みても戰に死すれば頼なし、女を生みたるがましなると云へる也、樂天の詩意と天地懸隔す、此に引證するは最附會の甚也、

驪宮高處入青雲、仙樂風飄處處聞、緩歌慢舞凝絲竹、盡日君王看不足、漁陽鼙鼓動地來、天寶十四 驚破霓裳羽衣曲、

載安祿山率蕃兵十餘萬起漁陽、南向指闕詭言奉詔誅楊國忠、鼙鼓之聲動地、(鼙)音皮

西清詩話葉法善引明皇入月宮、聞樂聲歸但記其半、會西京府楊敬述進婆羅門曲、聲調脗合、按之便韻乃合二者製霓裳羽衣之曲、

【驪宮】驪山の宮室也、新唐書地理志、驪山在關內道京兆府昭應縣、大明一統志、陝西西安府驪山在臨潼縣東南三里、驪山の宮殿は瑤光殿、飛霜殿、九龍殿、宜春亭、朝元閣、長生殿、羯鼓樓、重明閣、芳風閣凡そ十八の名あり、驪山の宮殿高き處は棟宇峨々として青雲の中に入て、天に接て見ゆる也、相如子虛賦上干青雲、【仙樂】神仙の奏する樂を寫し傳て奏する也、仙樂を奏する音風に飄て遠く傳へ、處々の閣上より聞ゆると也、【緩歌—】緩慢は皆優游艶態をなす貌を形容する也、貴妃傳太眞善歌舞、邃曉音律、【凝絲竹】絲竹を吹き鳴らす聲の亮徹するを凝らすと云也、絲は琴瑟の屬也、竹は簫笛の屬也、禮記絲竹樂之器也、王逸少蘭亭記、雖無絲竹管絃之盛、一唱一咏亦足以暢叙幽情、【盡日—】玄宗貴妃が緩歌慢舞を悅て、盡日看れども猶不足として慊ことなき也、【漁陽】唐地理志、薊州漁陽郡開元十八年置、【鼙鼓】陣を進むる時擊て徐疾の節を爲す具也、前漢書陳湯傳、谷永上疏曰、竊恐陛下忽於鼙鼓之聲、不察周書之意、【注】大寶十四載、安祿山我が領する所の藩兵十萬餘を率て、漁陽より起て長安に向ふ、詭て言ふ密に詔を奉て楊國忠を誅すと、諸將愕然として敢て言を出す者なし、乃兵を整て長安に向ふ、鼙鼓の聲地を動して震ひ起也、【驚破】驚駭して曲を終るに不及して破る也、顏眞卿間道より使を馳て祿山が反狀を聞す、玄宗時に華淸宮に在す、反書を見て驚て色を失ひ玉ふを云也、【霓裳羽衣曲】玄宗の製し玉ふ樂曲也、唐逸史云、開元中中秋夜羅公遠奏曰、陛下莫要至月中看否、乃取拄杖向

跪佳麗珍怪順於耳目、謝朓詩、江南佳麗地、佳麗字非始自謝、文選注失引之、【三千人】後漢書皇后紀云、自武元之後世增淫費、至乃掖庭三千增級十四、唐書太宗即位放宮女三千餘人、と云ときは、唐の時も後宮の女三千あり、【三千寵―】後宮の佳麗三千人あれども、貴妃が宮に入てより諸の宮女は帝の恩顧を承る者なし、三千の寵愛都て貴妃が一身に歸する也、【金屋】貴妃が所居の私室を指て云、漢武故事帝年五歳長公主抱問曰、兒欲得婦否、曰欲得、指女阿嬌曰阿嬌好否、帝曰若得阿嬌當作金屋貯之、梁江總詩、銀牀金屋挂流蘇、言ろは金屋の裏にして粧飾を施し成し、冶態嬌ひ妍うして夜遊に進み侍る也、【玉樓】玄宗酒宴を張り設る處を指て云、東方朔十洲記、崑崙山三角、其一角有玉樓十二所、【醉和春】醉後歡情好合の樂意、春日の煦々として和融する氣象の如なるを云、

姉妹弟兄皆列土、可憐光彩生門戶、遂令天下父母心、不重生男重生女、

杜詩生女尤可嫁比鄰、生男埋沒隨百草、

【姉妹弟兄】韓虢秦三夫人及楊錡楊國忠等を指して云、【列土】國に封せらるゝを云、白虎通卷一封公侯條下云、列士爲疆非爲諸侯、爲民也、【可憐―】可憐は羨慕する意也、姉妹弟兄國夫人となり通侯となつて、富み王室に埒しくして、光彩門戶に生じ、威勢赫々たるを云也、貴妃傳云、賜諸姨錢歲百萬、爲脂粉費、與錡國忠諸姨五家第舍聯亘、擬憲宮禁、率一堂費緡千萬、見它第有勝者輒壞復造、務以瓌侈相誇詡、【遂令―】貴妃微賤より起て宮に入て寵を承け、姉妹兄弟まで皆富貴を極む、故に天下の人羨慕して美女を生じて天子に奉り、如此の榮を取んことを願ふて、好男子を生んことを重んぜず、此時玄宗政を宰相に委ねて、親ら朝を視ることとなし、宰相其人に非ずして、賢人君子多く中て黜けらる、而外戚は日に顯貴なり、故に天下の人賢智の孫子に由て家を起んことを不思、美色の女を養て榮を取んことを希ふ也、注【杜詩】杜子美詩集卷一兵車行の句也、然れども杜詩の意は樂天が詩の意と不同、杜詩は天下兵亂不息して男子役

氏詠歩搖花詩、珠花縈翡翠、寶葉間金瓊、剪荷不似製、爲花殊似生、低枝拂繡領、微步動瑤瑛、但令雲髻插、蛾眉不易成、步搖は翡翠珠玉の類を兼用て飾を成し、髮に挿て首を覆ひ、步行すれば搖く物を云、貴妃雲鬢花顏の麗質に加るに、金步搖の飾を以てするとなり、【芙蓉帳】芙蓉の花樣を織成たる帳なるべし、庾信燈賦、掩芙蓉之行帳、梁簡文帝詩、綺幕芙蓉帳、言は貴妃芙蓉帳の中に召されて寢に侍る、帳中暖にして餘寒の冷を不覺、春宵を度て恩を承ると也、度はあかすと云意也、【春宵―】春宵苦た短して樂をなすこと猶不足、歡を貪て遲く醒む、故に常に日高く昇て後始て起き玉ふと也、【從是―】朝廷萬機の政事は、皆清晨に在て施し行ふに、玄宗貴妃を寵し玉ひてより、夙に興き夜に寢るの綱紀なし、是よりして早に出て朝を視玉ふこととなかりしと也、【早朝】は早晨より出て、朝廷の政事を聽くを云、史記四十一越世家、范蠡曰、且夫君王早朝晏罷非爲吳邪、

承歡侍宴無間暇、春從春遊夜專夜、後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身、金屋粧成嬌侍夜、玉樓宴罷醉和春、

【承歡―】人主の意の如く承け順ふて機嫌をとるを承歡と云、貴妃寵幸を得てより、歡を承て酒宴に侍り、帝の側を不離、嘗て閑暇あることなきと也、【春從春遊】春の時は春遊の行幸に從侍して、獨り宮に留ることとなし、【夜專夜】天子には皇后三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一御妻の女官あつて、進て寢に侍すること各〻分あり、御妻は一夕に九人づゝ入て九夕に當る、世婦も九人づゝ入て三夕に當る、九嬪九人一夕に當る、三婦人一夕に當、皇后一夕に當る、總て十五夕にして諸婦一周す、然るに貴妃寵を承てより諸の女官皆寵絕て帝顧眄の色なし、唯貴妃のみ進て寢に侍す故に專夜と云、一人每に夜に當るの意也、前漢外戚傳霍皇后傳云、及霍后立上寵之專、房燕【後宮】宮女の所居也、史記百十七司馬相如傳云、庖厨不徙後宮不移、正義曰後宮內人也、【佳麗】美人を云也、楊升菴集卷七十二云、韓子佳麗也者邪道之分也、戰國策宮中佳麗好玩、又曰趙天下善爲音佳麗人之所出也、嚴安

春寒賜浴華清池、溫泉水滑洗凝脂、三秦記始皇至驪山與神女遊、神女唾之生瘡始皇怖謝、神女爲出溫湯泉而洗除、○明皇雜錄、天寶六載更溫泉曰華清宮湯、治井爲池、嘗賜貴妃浴於溫湯、安祿山於范陽以玉魚龍鳬雁石梁石蓮花以獻、雕鐫尤妙、上大悅命陳於湯中、侍兒扶起嬌無力、始是新承恩澤時、

【春寒―】春の初餘寒猶さむき時は、華清の溫泉池に於て浴室を賜て其中に洗浴する也、【華清宮】大明一統志、陝西華清宮在驪山下、唐太宗建以溫湯所在、初名溫泉宮、玄宗改曰華清、治湯爲池、環山列宮室、每歲臨幸、內有飛霜九龍長生明珠等殿、久廢今湯存焉、唐崔魯詩、草遮回磴絕鳴鑾、雲樹深々碧殿寒、明月自來還自去、更無人倚玉闌干、【溫泉―】華清の溫泉水滑らかにして人の身を潤澤す、此中にて太眞が凝れる脂の如くなる肌膚を洗と也、【溫泉】は涌き湯也在驪山麓、秦始皇于此砌石起宇、漢武加修飾、唐時建溫泉宮、【凝脂】衞風碩人篇、手如柔荑、膚如凝脂、【侍兒】左右に侍從する婢子也、前漢書列傳十九爰盎傳、盎爲呉相時、從史盜私盎侍兒、注婢也、浴し畢れば侍兒左右に扶け起して浴室を出づ、體くたびれて柔弱に力なく、たよ〳〵と嬌態をなすと也、【始是―】太眞浴を賜て寵を承け、浴を出れば玄宗太眞が膚體の光發を視て甚だ悅て益〻恩渥し、故に新承恩澤時と云也、

雲鬢花顏金步搖、記明堂位注副首飾也、今之步搖是也、芙蓉帳暖度春宵、春宵苦短日高起、從此君王不早朝、

【雲鬢】雲の如く多くしてみごとなるを云、詩鄘風君子偕老篇、鬒髮如雲、注如雲言多而美也、梁沈約詩、雲鬢垂寶花、輕粧染微汗、【花顏】花の艶妖なる如く顏色妍しき也、鄭風有女同車篇、有女同車、顏如舜華、【金步搖】注禮記明堂位、夫人副褘立于房中、注副首飾也、今之步搖也、劉熙釋名云、步搖上有垂珠、步則搖也、潛確類書八十八云、輿服志太后步搖以黃金爲山題、貫以白珠、桂枝相糺、八爵九華熊虎赤羆天鹿辟邪、傅玄艶歌行、首戴金步搖、手繫明珠璫、梁范靖妻沈

て轡を執て自由にひきまはすを云、宇は宇縣宇宙の宇也、天下を指て云、天子位に在て天下の政を施し、立レ之斯に立ち、道レ之斯に行はるゝことと馬を御するが如自由なる故に、天下を治められし時と云意にて御宇と云、言ろは在位多年の間意に愜ふ美人をば求め得られざりしと也、【有女】一りの女ある也、玉環を指す、初て婚嫁の時に及ぶほどに長成たると也、詩野有死麕篇云、有レ女如レ玉、【養在―】父母に鞠養せられて深閨の裏に在り、人未だ其女あることを不レ識と也、玉環が宮中に入る時處女に非ず既に壽王に仕ふ、こゝに人未レ識と云は玄宗の壽王に仕る女を宮に入らるゝことを醜として諱み避る也、羅大經曰、武惠妃薨明皇悼念不レ已、後宮數千無レ當レ意者、或言壽王妃楊氏之美絕世無雙、帝見而悅レ之、乃令下妃自以二其意一乞上レ爲二女官一號二大眞一、更爲二壽王一娶二韋昭訓女一、潛納二太眞宮中一、寵遇如二惠妃一、冊爲二貴妃一、與二衞宣公納二伋之妻一無二以異一、白樂天長恨歌云、楊家有レ女初長成、養在二深閨一人未レ識、天生麗質難二自棄一、一朝選在二君王側一、爲二尊者一諱也、

天生麗質難二自棄一、一朝選在二君王側一、（開元十一年歸二于壽邸一爲二壽王妃一、後召爲二女官一號二太眞一、更爲二壽王一娶二韋昭訓女一、）回レ頭一笑百媚生、六宮粉黛無二顏色一、

【天生】天生自然に絕色の質を備ふ、裝飾の所レ致に非ず、文中子述史篇、天生レ之地長レ之、【麗質】うるはしきうまれつき也、梁簡文帝妾薄命篇、名都多二麗質一、【一朝】あるときと云義也、任彥昇詩一朝草化盡、猶我故人情、天生自然の麗質なれば、自ら棄るに棄難く、人必ずこれを擧て一朝選び納られて君王の側に在て仕る也、【回首一笑】冶容をなす貌を形容する也、少く首を回らし面を轉して內に向ひにつこと笑ば、柔顏靨瞼の間、百の媚態悉く生ずるとなり、【一笑】宋玉好色賦、嫣然一笑惑二陽城一迷二下蔡一、【百媚】古樂府、獨坐二空房中一思二我百媚郞一、梁江總詩、春心百媚勝二楊柳一、【六宮】後漢書后妃傳云、六宮稱號唯皇后貴人、注鄭玄注二周禮一曰、皇后正寢一、燕寢五、是爲二六宮一也、【粉黛】粉を傳け黛を畫く婦人を指て云、六宮中の美人と云義也、韓非子用二脂澤粉黛一則倍二其初一、【無顏色】宮中の佳人太眞が麗質におされて顏色なく、其下風に立と也、匈奴歌失二我燕支山一使二我婦女無二顏色一、

聲、方士屏息斂足拱手門下、久之而碧衣延入、且曰玉妃出、見一人冠金蓮被紫綃、珮紅玉曳鳳舃、左右侍者七八人、揖方士問皇帝安否、次問天寶十四載已還事、言訖憫然指碧衣女取金釵鈿合各折其半授使者曰、爲我謝太上皇謹獻是物、繼舊好也、方士受辭與信將行、色有不足、玉妃固徵其意、復前跪致詞、請當時一事不聞于他人者驗於太上皇、不然恐鈿合金釵負新垣平之詐也、玉妃茫然退立若有所思、徐而言曰、昔天寶十載侍輦避暑驪山宮、秋七月七日牽牛織女相見之夕、秦人風俗是夜張錦繡陳飮食、樹瓜華、焚香于庭、號爲乞巧、宮掖間尤尚之、時夜殆半、休侍衞於東西廂獨侍上、上憑肩而立、因仰天感牛女事密相誓心、願世々爲夫婦、言畢執手各嗚咽、此獨君王知之耳、因自悲曰由此一念又不得居此、復墮下界、且結後緣、或爲天或爲地、決再相見好合如舊、因言太上皇亦不久人間、幸惟自安無自苦耳、使者還奏太上皇、皇心震悼日不豫、其年夏四月南宮晏駕、元和元年冬十二月大原白樂天自校書郎尉于盩厔、鴻與瑯琊王質夫家于是邑、暇日相攜遊仙遊寺、語及此事、相與感歎、質夫擧酒于樂天前曰、夫希代之事非遇出世之才潤色之、則與時銷沒不聞于世、樂天深於詩多於情者也、試爲歌如何、樂天因爲長恨歌、意者不但感其事、亦欲懲尤物窒亂階垂於將來也、歌既成使鴻傳焉、世所不聞者予非開元遺民不得知、世所知者有玄宗本紀在、今但傳長恨歌云爾、

白樂天

漢皇重色思傾國、御宇多年求不得、楊家有女初長成、（楊玄琰女小字玉環）養在深閨人未識、

【漢皇】漢武帝を借て唐玄宗を指す、白居易は唐朝の臣也、故に唐帝と斥し云べからず、因て漢皇と云、【傾國】前漢書外戚傳上李夫人傳云、延年起舞歌曰、北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國、寧不知傾城與傾國、佳人難再得、傾國は美人の稱也、言ろは唐帝美色を重し好て、一顧すれば一國の人を傾け靡かする程の美人もあれかしと思ひ望まるゝと也、【御宇】賈誼過秦論始皇振長策而御宇內、御は馬に乘

悅目者、上意忽々不樂、時毎歲十月駕幸華淸宮、內外命婦熠燿景從、浴日餘波賜以湯沐、春風靈液澹蕩其間、上意油然況若有遇、顧左右前後粉色如土、詔高力士潛搜外宮、得弘農楊玄琰女于壽邸、既笄矣、鬢髮膩理纖穠中度、擧止閑冶、如漢武帝李夫人、別疏湯泉詔賜澡室、既出水體弱力微若不任羅綺、光彩煥發轉動照人、上甚悅、進見之日奏霓裳羽衣以導之、定情之夕授金釵鈿合以固之、又命戴步搖垂金璫、明年冊爲貴妃、半后服用、繇是冶其容敏其詞、婉孌萬態以中上意、上益嬖焉、時省風九州泥金五岳、驪山雪夜上陽春朝、與上行同輦止同室、宴專席寢專房、雖有三夫人九嬪二十七世婦八十一女御妻暨后宮才人樂府妓女、使天子無顧盼意、自是六宮無復進幸者、非徒殊艷尤態獨能致是、蓋才智明慧善巧便佞、先意希旨有不可形容者、叔父昆弟皆列土在淸貫、爵爲通侯、姉妹封國夫人、富均王室、車服邸第與大長公主侔而恩澤勢力則又過之、出入禁門不問名姓、京師長吏爲之側目、故當時謠詠有云、生女勿悲酸、生男勿喜歡、又曰男不封侯女作妃、君看女却爲門楣、其天下心羨慕如此、天寶末兄國忠盜丞相位、愚弄國柄、及安祿山引兵嚮闕、以討楊氏爲辭、潼關不守、翠華南幸、出咸陽道、次馬嵬亭、六軍徘徊持戟不進、從官郎吏伏上馬前、請誅錯以謝天下、國忠奉氂纓盤水死於道周、左右之意未快、上問之、當時敢言者請以貴妃塞天下之怒、上知不免而不忍見其死、反袂掩面使牽之而去、蒼黃展轉竟就於尺組之下、既而玄宗狩成都、肅宗受禪靈武、明年大兇歸元大駕還都、尊玄宗爲太上皇、就養南宮、自南宮遷于西宮、時移事去樂盡哀來、毎至春之日冬之夜、池蓮夏開宮槐秋落、梨園弟子玉琯發音、聞霓裳羽衣一聲則天顏不怡、左右歔欷、三載一意其念不衰、求之夢魂杳不能得、適有道士自蜀來、知皇心念貴妃如是、自言有李少君之術、玄宗大喜命致其神、方士乃竭其術以索之不至、又能遊神馭氣出天界入地府以求之不見、又旁求四虛上下、東極絕天海跨蓬壺見最高仙山、上多樓闕、西廂下有洞戶東嚮闔其門、署曰玉妃太眞院、方士抽簪叩扉、有雙鬟童女出應門、方士造次未及言而雙鬟復入、俄有碧衣侍女又至詰其所從來、方士因稱唐天子使者、且致其命、碧衣云玉妃方寢請少待之、于時雲海沈々洞天日晚、瓊戶重闔悄然無

還因以鈿合金釵奏、玄宗笑曰、此世所有豈得相怡、使者因以貴妃密契以聞、玄宗流涙慟絶、良久語使者曰方不謬矣、今世人猶言、玄宗與貴妃處世間爲夫妻至矣、此一篇は漢皇を借て玄宗の色に迷ひて美人を求め、既得て淪惑し、終に亂を招て天下を喪ふに至れども猶不悟、戀々として懷想し、其神を索て方士の爲めに欺るゝことを識る也、新唐書七十六后妃傳上、玄宗妃楊氏、隋梁郡通守汪四世孫、徙籍蒲州遂爲永樂人、幼養叔父家、始爲壽王妃、開元二十四年武惠妃薨、後庭無當帝意者、或言妃資質天挺宜充掖庭、遂召內禁中異之、即爲自出妃意者丐籍女官號太眞、更爲壽王聘韋昭訓女、而太眞得幸　善歌舞邃曉音律、且智算警穎迎意輒悟、帝大悅、遂專房宴、宮中號娘子、儀體與皇后等、天寶初進冊貴妃、追贈父玄琰大尉齊國公、擢叔玄珪光祿卿、宗兄銛鴻臚卿、錡侍御史、而釗亦寖顯、釗國忠也、三姊皆美劭、帝呼爲姨、封韓虢秦三國爲夫人、出入宮掖、恩寵聲焰震天下、妃每從游幸乘馬則力士授轡策、國忠既遙領劍南、每十月帝幸華淸宮、五宅車騎皆從、家別爲隊隊一色俄五家隊合、爛若萬花川谷成錦繡、國忠導以劍南旌節、錡

秦國早死、故韓虢與國忠貴最久、而虢國素與國忠亂、頗爲人知不恥也、每入謁並驅道中、從監侍姆百餘騎、炬密如晝、靚粧盈里、不施幃障、時人謂爲雄狐、初祿山有邊功帝寵之、詔與諸姨約爲兄弟、而祿山母事妃來朝必宴餞結歡、祿山反以誅國忠爲名、及西幸至馬嵬、陳玄禮等以天下計誅國忠、已死軍不解、帝遣力士問故、曰禍本尚在、帝不得已與妃訣引而去、縊路祠下、裹尸以紫茵瘞道側、年三十八、帝至自蜀道過其所使祭之、且詔改葬、禮部侍郎李揆曰、龍武將士以國忠負上速亂爲天下殺之、今葬妃恐反仄自疑、帝乃止、密遣中使者具棺槨他葬焉、啓瘞故香囊猶在、中人以獻、帝視之悽感流涕、命工貌妃於別殿、朝夕往必爲鯁欷、馬嵬之難虢國與國忠妻裴柔等奔陳倉、縣令率吏追之、意以爲賊棄馬走林、虢國先殺其二子、柔曰丐我死即并其女刺殺之乃自剄、吏載置于獄、問曰國家乎賊乎、吏曰互有之、乃瘞陳倉東郭外、○陳鴻長恨傳云、開元中泰階平四海無事、玄宗在位歲久、倦于旰食宵衣、政無大小始委於右丞相稍深居、遊宴以聲色自娛、先是元獻皇后武淑妃皆有寵、相次即世、宮中雖有良家女千萬數無可

經界【縱欲】曲禮敖不可長、欲不可縱、言ろは始皇人を水に沒て求むれども不得は、始皇暴虐にして欲を縱にし、人力を窮て無道をなすに因て、鼎は神物秦の垢に汚れまじき爲に隱て不出と也、【神物】淮南子覽冥訓、神物爲之下降、こゝには鼎を指て云也、【是時―】神鼎已に淪て自ら隱るれども、猶探り求て得んことを欲す、是時此石鼓は何れの處に避け隱れてか秦の宮に不入して、暴朝の垢に汚さるゝことなかりしや、無乃天工より鬼神を役して衞護せしめたるならんか、若然らずは燒き滅さるゝに非んば必ず徙し納らるべし、不毀不汚して獨立するは寔に奇異なると云意也、

興亡百變物自閑、富貴一朝名不朽、細思物理坐歎息、人生安得如汝壽、

【興亡―】周より宋に至るまで、興亡百變すれども此物は曾て關り涉らず依然として閑也、因て思ふ人生の富貴は一朝にして休す、惟名譽のみ長く傳て不朽、細に事物の道理を思見て坐に歎息をなす、人生の聲名安ぞ石鼓の壽して不朽が如くなることを得んやと也、本集注次公曰、上兩句蓋言興亡雖有百變、而物則自閑、富貴止乎一朝而名不能朽也、此詩人因物起興以結一篇之成也、自周宣即位歲在甲戌、至大宋英宗踐祚之初歲在癸卯、時已幾二千年矣、更秦漢魏晉隋唐之代、其物宛然而存、豈不謂之壽乎、

○長恨歌

明皇思得傾國美貌之婦、不敢斥言唐君、借漢爲喩、

白氏長慶集十二載之、幷序曰、長恨者楊貴妃也、既瘞於馬嵬矣、玄宗却復宮闕、思悼之至、令方士求致其魂魄、昇天入地求之不得、乃於蓬萊山仙宮忽見素貌、慘然流涙語使者曰、我本上界諸仙、先與玄宗有恩愛之故、謫居於下世、得爲夫妻、既死之後恩愛已絕、今汝來求我、恩愛又生、不久却於人世得爲配偶、以此爲長恨耳、使者曰、天子使我至此、既得相見、願得平生所翫之物以明不謬、乃授鈿合一扇金釵一股與之曰、將此爲驗、使者曰、此常用之物也不足爲信、曾與至尊平生有何密契、願得以聞、答曰、但七月七日長生殿夜半無人私語時、曾復記否、使者

國】四方の國也、曹風鳲鳩篇、其儀不忒正是四國、【烹滅―】此一句は之罘に登て石に刻む所の辭也、二十九年始皇登之罘刻石其辭曰、維二十九年時在中春、陽和方起、皇帝東遊、巡登之罘臨照于海、從臣嘉觀、原念休烈追誦本始、大聖作治、建定法度顯著綱紀、外敎諸侯、光施文惠明以義理、六國回辟貪戾無厭、虐殺不已、皇帝哀衆、遂發討師奮揚武德、義誅信行、威燀旁達莫不賓服、烹滅彊暴振救黔首、【黔首】は萬民也、始皇二十六年更名民曰黔首、注應劭曰黔亦黎黒也、

六經既已委灰塵、此鼓亦當隨擊掊、傳聞九鼎淪泗上、欲使萬夫沈水取、倉侑反暴君縱欲窮人力、神物義不汙秦垢、是時石鼓何處避、無乃天工令鬼守、

此一節石鼓秦の暴を歴て無恙、今に存することを異とする也、【六經】易書詩春秋禮樂也　六經の書皆焼き亡されて灰塵に委棄つ、此時に石鼓も亦共に擊掊せられて、毀壞すべきこと也、【傳聞―】梁虞荔鼎錄云、昔虞夏之盛　遠方皆至、使九牧貢九金鑄九鼎於荊山之下、于昆吾氏之墟白若甘撥之地、圖其山川奇怪百物而爲之備、使人知神姦不逢其害以定其祥、鼎成三足而方、不炊而自沸、不擧而自藏、不遷而自行、九鼎既成定之國都、桀有亂德鼎遷于殷、載祀六百、殷紂暴虐鼎遷于周、成王定鼎於郟鄏、卜世三十卜年七百天所命也、及顯王姬德大衰、鼎淪入泗水、秦始皇之初見於彭城、大發徒出之不能得焉、宋舒堅甫曰、威烈王時九鼎震々者淪之兆也、鼎神物也、既能震動則沒入水理也、宋太丘社亡亡者自亡也、社能自亡則鼎能自沒无疑、使鼎誠在則始皇必不使人沒水而求之也、秦所鑄金人靈爽少矣、猶能潛然淚下、况神禹之鼎乎、神劍猶能躍入平津之水、湛盧猶能飛去楚國、鼎不爲秦用明矣、明楊升菴曰、事有若誕而實者鼎入泗水也、【欲使―】始皇萬夫をして泗水に沈し、鼎を求めしむれども終に不得也、始皇二十六年過彭城齋戒禱祠欲出周鼎泗水、使千人沒水求之不得、【暴君】始皇を指て云也、孟子滕文公上、暴君汙吏必慢其

不師今而學古、以非當世惑亂黔首、丞相李斯昧死言、古者天下散亂莫之能一、是以諸侯並作、語皆道古以害今、如此弗禁則主勢降乎上、黨與成乎下、禁之便、臣請史官非秦記皆燒之、非博士官所職、天下敢有藏詩書百家語者、悉詣守尉雜燒之、所不去者醫藥卜筮種樹之書、若欲有學法令以吏爲師、制曰可、秦天下を有て詩書を燒去て悉く掃除し、只法律を誦して禁を避け令に從はしむとなり、【投棄俎豆】俎豆は禮器也、秦は先王の禮樂を投げ棄て用ることなき也、俎豆と云へば凡その綱紀典禮悉くこもる也、論語衞靈公篇、孔子曰俎豆之事則嘗聞之矣、軍旅之事未之學也、坡公蓋し此に本くならんか、【陳鞭杻】鞭はむち也、杻は手械也、鞭杻の具を陳て刑法を峻にすることを尙ぶ也、【當年何―】祖龍は始皇也、始皇三十六年秋使者從關東夜過華陰平舒道、有人持璧遮使者曰、爲我遺滈池君、因言曰今歲祖龍死、使者問其故、因忽不見、置其璧去、使者奉璧具以聞、始皇默然、注蘇林曰祖始也、龍人君象、謂始皇也、【上蔡―】即李斯也、李斯傳李斯者楚上蔡人也、二世二年具斯五刑論腰斬咸陽市、斯出獄與其中子俱執、顧謂其中子曰、吾欲與若復牽黃犬俱出上蔡東門逐狡兎豈可得乎、遂父子相哭而夷三族、言ろは當時何人か始皇を佐て如此政をなしたるや、即ち彼の上蔡の父子死に臨て、黃狗を牽て兎を逐んことを想ふと云て哭したる李斯が爲なりと云義也、李斯を謂ふに刑に臨む時の語を引は李斯を惡て也、

登山刻石頌功烈、（秦始皇上鄒嶧山刻石頌秦、）**後者無繼前無偶、皆云皇帝巡四國、烹滅彊暴救黔首、**

【登山刻石】史記始皇二十八年、東行郡縣、上鄒嶧山、立石頌秦德、又南登琅琊作琅琊臺、立石刻頌秦德、二十九年登之罘刻石、【頌功烈】石に刻むの文、皆秦の天下を幷せ有つの功烈を夸り頌する也、【後者―】功を頌し石に刻の意以爲く、秦の世永く無窮に傳て復た繼く者なかるべし、一統和平の治、前代の聖王も能く偶をなすことなきと也、【皆云】石に刻て功を頌すること數所、故に皆云と曰也、【皇帝】始皇始て皇帝と稱す、始皇二十六年采上古帝位號號曰皇帝、【四

忠厚、欲尋年歳無甲乙、豈有文字記誰某、

周の厲王無道にして國人不服、亂を作して厲王を逐ふ、厲王遂に出奔して外に崩す、宣王即位政を修め文武成康の遺風に法て、失理を更ため德教を布く、故に海內悉く治て天下の諸侯又周を宗ぶ、此れ中興の勳勞固に至て大なれども、其文を按ずるに甚だ矜り伐るの辭なし、此れ文武の世を去ること未遠して、風俗猶忠厚なるが故也、【欲尋―】此石鼓の文作りし年代を幾何と尋んと欲れども、甲乙の紀年を書せる迹もなければ、可究やうもなし、豈又文字の誰某と作者の名を書せることあらんや、年紀作手竟に考へ知りがたきと也、本集注次公云、宣王在位四十六年而史冊無載石鼓之事、宣王之詩其見於經所作者、有曰仍叔、有曰尹吉甫、今石鼓之上又無名氏、故云爾也、年歳ともに同じ然ども分て言へば少く別あり、年歳宣王即位より幾年と紀するの年也、歳は太歳某の幹支に次ると紀するの歳也、言ろは宣王の幾年甚の甲子の歳に造れる鼓ぞと尋んと欲れども、甲乙の紀せる文なければ考ることとなし、豈に又文作る者の名字誰れ某と記することあらんや、年紀をだに記せされば、作者の名字は猶以て知がたき也、年歳の歳近本に代字に作る非也、本集に據て歳に改む、

自從周衰更七國、竟使秦人有九有、掃除詩書誦法律、投棄俎豆陳鞭杻、當年何人佐祖龍、上蔡公子牽黃狗、

【周衰】周は幽王より漸く衰て、威烈王に至て甚だ衰微す、徒に虛器を擁して天下の共主と號するまでにて、號令行るゝことなし、【七國】秦楚韓趙魏燕齊也、これを戰國の七雄と云也、【竟使―】七國相爭て遂に强し、六國を幷合し、周赧王を滅して天下を有て秦と號す、九有は天下と云義也、詩商頌玄鳥篇、方命厥后奄有九有、注九有九州也、【掃除詩書】秦の始皇先王詩書を焚亡したるを云也、史記秦本紀始皇三十四年丞相李斯曰、異時諸侯竝爭厚招游學、今天下已定法令出一、百姓當家則力農工、士則學習法令辟禁、今諸生

は宣王の時の事に非ず、穆王の時に在り、此に借用て犬戎に克て功あることを云也、史記周本紀穆王將レ征ニ犬戎一、祭公謀諫、穆王弗レ聽遂征レ之、得ニ四白狼四白鹿一以歸、言ろは宣王犬戎を征し克てより犬戎朝貢し、象胥の職に憑て狼鹿を貢すること雜遝と多きと也、【方召】方叔召虎也、【聯翩】翩疾飛也、方召共に賞を得て、威儀揚々たるを云也、【賜圭卣】大雅江漢詩ニ云、王命ニ召虎一、用錫ニ爾祉一、釐ニ爾圭瓚、秬鬯一卣一、卣中尊也、獻象之屬、本集注云、方叔雖レ不レ見レ錫ニ圭卣一、明文、而可レ以ニ召虎一推レ之矣、

遂因ニ鼙鼓一思ニ將帥一、（記聽ニ鼓鼙之聲一則思ニ將帥之臣一）豈爲ニ考擊煩ニ矇瞍一、（詩子有ニ鐘鼓一、弗レ擊弗レ考、又曰矇瞍奏レ功、）何人作レ頌比ニ崧高一、萬古斯文齊ニ岣嶁一、（退之詩岣嶁山尖神禹碑、字靑石赤形摹奇、〔岣〕古后切〔嶁〕万后反）

【鼙鼓】字彙鼙音皮、騎上鼓也、【考擊】詩唐風山有樞篇注考擊也、【矇瞍】大雅靈臺篇、鼉鼓逢々、矇瞍奏レ公、注有ニ眸子一而無レ見曰レ矇、無ニ眸子一曰レ瞍、古者樂師皆以ニ瞽者一爲レ之、以ニ其善聽一而審ニ於音一也、此二句は宣王石鼓を作られし意を推し原て云、宣王亂を撥め戎を伐て四海平治す、既に治て後敢て亂を不レ忘、鼙鼓を見ては將帥の臣を思ふの義に因て石鼓を作る、これを見て將帥の臣を忘れずして與に天下を守らんことを欲して也、豈に考擊して樂をなし、矇瞍の樂師を煩して音を奏せしむるが爲めならんやと也、【何人―】然るに何人か此石鼓の文を作て、宣王を頌するの詞を刻て崧高の詩に比したるやと也、【頌】朱子曰、頌者宗廟之樂歌、大序所謂美ニ盛德之形容一、以ニ其成功一告ニ于神明一者也、【崧高】詩大雅篇名、宣王の時の詩也、朱子注云、宣王之舅申伯出封ニ于謝一、而尹吉甫作レ詩以送レ之、【斯文】石鼓の文を指て云也、【齊岣嶁】岣嶁山は神禹の碑を云、大明一統志、衡州府岣嶁峯在ニ府城北五十二里一、高一千五百丈、湘中記、岣嶁山有ニ王牒禹案一、上有ニ禹碑一、韓愈詩、岣嶁山尖神禹碑、字靑石赤形摹奇、科斗拳身薤葉披、鸞飄鳳泊拏ニ虎螭一、事嚴跡秘鬼莫レ窺、言ろは萬古以來斯石鼓の文を以て、岣嶁山上の禹碑に齊く崇て天下の寶とする也、

勳勞至大不レ矜伐、文武未レ遠猶

宮室、壞孔子舊宅以廣其宮、聞鐘磬琴瑟之聲、遂不敢復壞、於其壁中得古文經傳、【厭亂人—】亂は厲王の時の亂を云、凡そ亂極ては人必治を思ふ、此時宣王立て天子となり、亂を撥め民を拯て中興の周を定む、天帝爲之耆耇の老臣を生じて聖治を輔けしめられたると也、【中興】漁隱叢話云、藝苑云凡王室中否而復興、謂之中興、【耆耇】曲禮上六十曰耆指使、韻會耇人老面黎若垢也、廣韻耇老壽也、詩遐不黃耇、注黃髮耇、老人髮白後黃也、本集注生耆耇則指史籀及方叔、召穆公、申何、仲山甫、尹吉甫之屬、

東征徐虜闞虓虎、常武詩省此徐方、又進厥虎臣、闞如虓虎、(闞)虎賢反、(虓)虛交反、北伐犬戎隨指嗾、象胥雜遝貢狼鹿、周官象胥掌蠻夷閩貉戎狄之國、使掌傳王之言而諭說焉、穆王伐犬戎、得四白狼四白鹿以歸、方召聯翩賜圭卣、音酉、

【東征—】宣王徐方を征せらるゝを云、詩大雅常武篇、戒我師旅、率彼淮浦、省此徐土、又三章云、王舒保作、匪紹匪遊、徐方繹騷、震驚徐方、如雷如霆、又四章王奮厥武、如震如怒、進厥虎臣、闞如虓虎、鋪敍淮濆、仍執醜虜、注闞奮怒之貌虓之自怒也、言は夷厲の世より周室衰弱なりしに、宣王中興の主となつて自ら徐虜を征し、虓虎の闞たるが如き兵を進むれば、徐虜震驚て遂に來庭すると也、【北伐犬戎】詩小雅六月篇云、玁狁孔熾、我是以急、王于出征、以匡王國、朱子注曰、玁狁北狄也、成康既沒周室寖衰、八世而厲王胡暴虐、周人逐之、出居于彘、玁狁內侵逼近京邑、王崩子宣王靖即位、命尹吉甫帥師伐之、有功而歸、【隨指嗾】嗾使犬聲、左傳宣二年晉侯飮趙盾酒、伏甲將攻之、提彌明知之遂扶以下、公嗾夫獒焉、明搏而殺之、盾曰棄人用犬雖猛何爲、言ろは指使ふ聲に隨て役せらるる也、宣王犬戎を伐ちたまへば、犬戎來服して王命に從ふと也、嗾字は犬字より出來る、【象胥】周禮秋官象胥掌蠻夷閩貉戎狄之國使、掌傳王之言而諭說焉、以和親之、若以時入賓、則協其禮與其辭言傳之、象胥は通事也、遠方の諸蕃來朝するに、中國の言語を曉し不得、故に象胥の職を置て王言を傳て諭說し、中國の禮を敎て朝貢の禮をなさしむる也、【雜遝】文選西征賦、都中雜遝戶千人億、前漢書劉向傳雜遝衆賓、つどひあつまる也、【貢狼鹿】犬戎の來貢するを云、狼鹿

首有四目通於神明、仰觀奎星圜曲之勢、俯察龜文鳥跡之象、博采衆美合而爲字、是曰古文、【相唯諾】接遇して倶に相唯し相諾すると云意也、曲禮上必愼唯諾、注唯諾皆應辭、當愼於應對也、言は石鼓の文上は軒轅蒼頡に相並て、互に唯諾して遜れ譲ることなきと也、【下挹一】氷は唐の李陽氷也、國史補云、李陽冰善小篆、自言斯翁之後直至小生、曹喜蔡邕不足言、【斯】秦李斯也、書斷云、秦丞相李斯曰、自上古作大篆頗行於世、但爲古遠人多不詳、今删略繁者取其合體、參爲小篆、斯善書、自趙高已下咸見伏焉、刻諸名山碑璽銅人、並斯之筆書、【鷇鷇】字彙鷇音寇、鳥生須母食之者謂之鷇、燕雀之類是也、爾雅生哺鷇、鷇字彙無此字、韻會㲉乃后切乳子也、按に本集に作㲉、此集鷇字に作は非也、言は史籀が文よりして下も李陽冰李斯が書を視れば、氷斯の二子は未だ獨り喙をし得ざる鳥雛の如く微小なると也、

憶昔周宣歌鴻雁、當時籀史變蝌蚪、（宣王時史籀著大篆十五篇、魯共王壞孔子宅得古書、皆科斗文字、）厭亂人方思聖賢、中興天爲生耆耉、

【歌鴻雁】鴻雁は詩小雅の篇名也、鴻雁篇朱子注云、舊說周室中衰萬民離散、而宣王能勞來還定安集之、故流民喜之而作此詩、【籀史一】書斷云、按大篆者周宣王太史史籀所作也、或曰柱下史始變古文、或同或異、謂之篆、篆者傳也、傳其物理施之無窮、甄酆定六書、三曰篆書八體、書法一曰、大篆、又漢書藝文志、史籀十五篇並此也、以史官製之用以教授、謂之史書、凡九千字、【蝌蚪】尙書序云、魯共王好治宮室、壞孔子舊宅以廣其居、於壁中得先人所藏古文虞夏商周之書及傳論孝經、皆蝌蚪文字、注科斗蟲名蝦蟇子、書形似之、正義云、科斗書古文也、所謂蒼頡本體周所用之、以今所不識是古人所爲故名古文、形多頭麤尾細、腹團圓似水蟲之科斗、故曰科斗、言ろは我れ憶ふに昔周の宣王亂を治て民を安ず、故に民鴻雁の詩を歌て喜べり、此時に當て史籀蝌蚪を變じて大篆の體となしたると也、【魯共王】前漢書卷五十三景十三王傳云、魯共王餘以孝景前二年立爲睢陽王、吳楚反破後以孝景前三年徙王魯、爲人口吃難言、二十八年薨、共王初好治

讀難曉、字體不類隷與蝌、而先生今詩乃能通其六句、則先生爲精於字學矣、子由和先生詩乃云、形雖不具意可知、有云楊柳貫魴鱮、先生詩注其文云、維鱮鯉、而子由云魴鱮、豈各以所辨之字言之乎、

糢糊半已似瘢胝、詰曲猶能辨跟肘、娟々缺月隱雲霧、濯々嘉禾秀稂莠、（言字之難識者、）

【糢糊】韻會漫貌、杜詩駞背錦糢糊、又子璋髑髏血糢糊、めつたりと文理なき貌を云也、【瘢胝】字彙瘢音盤瘢痕、徐曰痍處已愈有痕曰瘢、胝音支皮厚也、又跰也、史記禹手足胼胝、言ろは文字漫滅して半は已に瘡痍の痕の如く、又手足の胝凍裂したるに似たると也、【詰曲】字體結構の怪しく勁きを云、【跟肘】はくびすひぢ也、皆人の形の支末也、言ろは文字漫滅して完全ならず、僅に殘りて詰曲たる所を認て偏傍の餘畫を視る、たとへば人の全體を不見して僅に一跟一肘を見るが如くなると云意也、【娟々ー】二句漫滅の餘り僅に見存する者を云、娟々は美好貌、殘畫の僅に見えたるは、娟々と光りうるはしき缺月の、半ば雲霧に隱れて少く見えたるを望むに似たる也、【濯々】肥澤貌、詩大雅麀鹿濯々【稂莠】字彙稂音郎、禾粟之穗生而不成者謂之董蓈、又曰害苗草也、莠音有禾粟下狗尾草也、爾雅翼莠似稷無實、詩小雅不稂不莠、言ろは殘缺の中僅に一二を見る、猶濯々たる嘉禾の稂莠の間より秀て抽たるが如くなると也、

漂流百戰偶然存、獨立千載誰與友、上追軒頡相唯諾、下挹冰斯同鷇𪇰、（〔鷇〕苦候反、〔𪇰〕乃后反、）

【漂流】周より唐に至るまで、幾許の戰を經て漂流すれども遂に毀壞せず、偶然として存在し、今に於て猶可觀、千載の久を經て獨立し不亡者天下に復た何んか有んや、能石鼓の壽きに均き者なし、其れ誰と與にか相友とせんや、【上追ー】軒は軒轅即黃帝也、黃帝の時始て文を以て結繩に代ふ、故に文字の祖とす、【頡】蒼頡也、鳥跡を觀て始て文字を製す、故に字を作る人の祖とす、張懷瓘書斷云、古文黃帝史蒼頡所造也、頡

及其暮齒加以酒逸、卒年八十九、【欲讀—】石鼓の文を試に讀んとすれども、箝の挿て口中に在るが如くにて言を出し不得と也、言は文字難曉して一句も讀み得られず、只口をつぐんでのみ在ると也、箝は竹を以て作て口に挿ませ言ふことを得ざらしむる具也、前漢書列傳十九爰盎傳、閉箝天下之口、而日益愚、又鼂錯傳云、天下之士拑口不敢復言矣、【韓公好—】韓退之も嘗て言へり、吾れ古を好めども生るゝこと已に遲くして、上古の文字に不通、僅に缺畫の餘を見て完好なるを見るに不及ことを歎ずと、況や又我れは韓文公よりは百年の後なるをやと也、缺畫益〻多く、文字愈〻曉し得がたきとの意也、【强尋—】偏は字の左方也、木へん手へんと云類也、旁は字の右方也、俗につくりと云力つくり欠つくりの類也、缺滅の餘を認て强て偏旁を尋ね思て、それの字かこれの字かと點畫を推し索る也、【時得—】時に或は一二を推し索め得て、某の字なることを知れども、十に八九は讀み不得して遺すと也、

我車既攻馬亦同、其魚維鱮貫之柳、公自注石鼓文之辭云、我車既攻、我馬亦同、又曰其魚維何、維鱮維鯉、何以貫之、維楊與柳、惟此六句可讀、餘不可通、古器縱橫猶識鼎、衆星錯落僅名斗、言衆字不可識、而獨識六句、若古器中之鼎衆星中之斗耳、

【我車—】此二句鼓文の中に於て讀得たると也、鼓文の四字の句を裁して二句とせる也、鼓文は東坡の自注に見えたり、鼓文の中惟六句のみ讀得て、其餘は文理不通して曉し得がたきと也、【古器—】石鼓の文數百言の中僅に六句を識得、此れ古器縱橫に棄散して多き中に於て、僅に鼎を識て不怪、天上衆星の錯落と雜り布て多き中に於て、只北斗の七星を識て指し名いふより外總て識不得と同じき也、【錯落】は間厠也、唐崔顥詩、錯落金鏁甲、蒙茸貂鼠衣、【衆星】爲政篇譬如北辰居其所而衆星共之、〔注〕本集次公注也、○本集次公注云、先生詩後段云、憶昔周宣歌鴻雁、當時籒史變蝌蚪、則石鼓之字蓋蝌蚪之變者也、韓愈有蝌蚪書後記一篇云、李陽氷之子服之授余以其家蝌蚪孝經漢衞宏官書兩部合一卷、且曰古書得其依據蓋可讀、如是則退之宜識蝌蚪書者、而石鼓歌乃云、辭嚴義密

蘇子瞻

冬十二月歲辛丑、我初從政見魯叟、舊聞石鼓今見之、文字鬱律蛟蛇走、

【歲辛丑】は宋仁宗嘉祐六年也、起句に歲の支干を用て起すこと、唐詩に間有之、杜甫北征詩、皇帝二載秋、閏八月初吉、盧仝月蝕詩、元和庚寅斗柄挿子、白樂天賀雨詩、皇帝嗣寶曆元和三年冬、又苦寒詩、八年十二月、五日雪紛々、【我初從政】東坡年譜云、嘉祐六年辛丑先生二十六歲、是年應制科、文忠公薦公秘閣試六論、舊不起草故文多不工、公始具草、文義燦然時以爲難、又答制策復入三等、授大理評事簽書上呂龍圖書云、兩登進士舉一中茂材科、冬赴鳳翔任、十二月作鳳翔八觀詩、論語雍也篇云、季康子問、仲由可使從政也歟、子曰由也果、於從政乎何有、【見魯叟】魯叟即孔子也、孔子は魯人也、叟は長老之稱、孔子を尊て魯叟と云、李白詩集九、贈裴十七仲堪詩云、魯叟悲匏瓜、【舊聞ー】東坡舊と蜀に在りし時より、此石鼓の事は聞及たるが今親に見之と也、【文字ー】文選西京賦隱轔鬱律注云、隱轔鬱律皆險曲貌、【蛟】注見于前卷、文字の體勢鬱律と險曲にして、蛟蛇の競ひ走るが如くなると也、

細觀初以指畫肚、(虞世南學書、常於被下以指畫肚、)欲讀嗟如箝在口、(歐詩有口欲說嗟如箝、)韓公好古生已遲、我今況又百年後、强尋偏傍推點畫、時得一二遺八九、

【細觀ー】文字鬱律たるに因て、一覽して讀得べきに非ず、子細に觀て心に議擬し、指を以て肚上に畫して、それかこれかと尋ね索て、今の字に譯して看る也、注【虞世南】畫肚の字の所據を引證す、唐張懷瓘書斷三云、虞世南字伯施會稽人、仕隋爲秘書郎、仕唐至秘書監、文皇曰世南一人遂兼五絕、一曰博學、二曰德行、三曰書翰、四曰詞藻、五曰忠直、有一于此足謂名臣、而世南兼之、行草之餘尤所偏工、本師於釋智永、

並て貴重せらるゝことなきは、理に於て如何ぞやと也、【則那】左傳宣二年、犀兕尚多棄甲則那、杜預注那猶何也、

方今太平日無事、柄用儒術崇丘軻、安能以此上論列、願借辨口如懸河、（王衍云、聽郭象語如懸河瀉水、）石鼓之歌止於此、嗚呼吾意其蹉跎、

【方今】唐の世韓公の時也、【太平】前漢書食貨志云、三登曰太平、○北史積儲九稔謂之太平、【日無事】天下清平にて、朝廷の機務冗事なき也、前漢書食貨志上云、武帝之初國家亡事、【柄用】柄權柄也、柄是斧柄執て以て木を剖きわる者也、人の上に在る人政を執て事を處すること斧柄を執るが如し、故に政を掌るを執柄と云、柄用は政令の行ひやうと云義也、【儒術】術は法也、【丘軻】孔子孟子也、言ろは只今唐の世に方て天下太平にして朝廷無事、常に靜謐なり、政令の行はるゝは皆儒法を用て孔子孟子の道を尊崇せらるゝ世也、【安能—】此清世に方つて、石鼓の如き寶豈棄措べきや、安ぞ能く此事狀をは至尊に告げ上りて時議を論列せんや願くは辨口懸流の河の如き人を借て天子に說して、此夙志を遂げたきと也、注【王衍】晉書列傳十三云、王衍字夷甫、神情明秀、風姿詳雅、【郭象】晉書列傳二十、郭象字子玄、少有才理、好老莊、能清言、太尉王衍毎云、聽象語如懸河瀉水注而不竭、【石鼓—】石鼓の歌此に至て止め結ぶ、嗚呼此遺憾かたなし、吾意蹉跎として不安と也、【蹉跎】韻會言不遂其意也、

○後石鼓歌

（東坡年二十六初入仕、作鳳翔八觀、此其一也、）

本集第二載之石鼓韓退之既作歌、故此歌をば曰後石鼓歌、本集止曰石鼓歌、東坡二十六歲嘉祐六年應制科、在鳳翔、是年作鳳翔八觀詩、此其一也、鳳翔八觀詩敍云、鳳翔八觀詩記可觀者八也、昔司馬子長登會稽探禹穴不遠千里、而李太白亦以七澤之觀至荊州、二子蓋悲世悼俗、自傷不見古人而欲一觀其遺跡、故勤如此、鳳翔當秦蜀之交、士大夫所朝夕往來、此八觀者又皆跬步可至、而好事者有不能徧觀焉、故作詩以告欲往觀而不知者、

ふ童子也、石角を敲て火を出し、牛は角を以て石に觸れ礪く、誰か復これを珍重して手を著て摩挲することをせんや、【日銷―】文字もいつとなく日に銷え月に鑠て、漸ふに埋沒に就く、固に嘆惜すべきこと也、故に六年の間毎に西に顧て石鼓の文の銷鑠せんことを想ひ歎きて、空く吟哦すると也、【西顧】大雅皇矣篇乃眷西顧、【哦】牛何切吟也、

義之俗書趁姿媚、數紙尚可博白鵝、（晉王義之性愛鵝、山陰有一道士養好鵝、義之往觀之意甚悅、因求得之、道士云爲寫道德經、當擧羣相贈耳、義之欣然寫畢籠鵝而歸、甚以爲樂、）繼周八代爭戰罷、（周至唐凡八代、）無人收拾理則那、

【義之俗書】本注云、俗書者周宣王時史籀始變大篆爲籀書、石鼓文籀書也、秦變古爲篆、爲隸、今又變爲楷、世俗書爾非古也、書學を謂ふ者義之を宗とせずと云ことなし、晉以來義之が右に出る者なし、然れども義之が所善は隸行章草飛白の書也、大篆籀書よりして視れば、義之が書は皆後世の俗書也、古の文に非ず、【趁姿媚】古文籀書の字は、字を作ること皆象る所ありて自然の形をなす、義之が書は只字體のみごとなるやうにと心を用て、古人文字を作るの源を究め明すに非ず、故に姿の媚を趁と云也、文選阮嗣宗詠懷詩、流盼發姿媚、【數紙―】此れ鄙しむの辭也、義之嘗て道德經を寫して白鵞に換たることあり、故に言ふ、義之が俗書の如きは、尚白鵞に換へつべし、豈史籀が文と並べ言ふに足んやと云意也、【博】字彙貿易也、注第二卷王右軍詩注に詳也、【繼周】周滅て後相繼て天下を有つ者也、論語其或繼周者、雖百世可知也、【八代】周より唐まで八代のみに非ず、周を亡して天下を有つ者は秦也、それよりして漢魏晉宋齊梁陳北魏北齊後周隋唐凡そ十三代也、然れども通鑑綱目の世次に據て、正統の世を數れば秦漢晉宋齊梁陳隋まで八代也、唐を合て九代也、此歌に八代と云は秦より隋までを云と看べし、下に方今太平と云ときは、唐を八代の數に不入こと自ら明けし、注周より唐に至と云は非也、【爭戰罷】世改るときは必ず爭戰あり、既に改て一統に歸すれば爭戰も亦罷む、治平の日なきにしもあらず、【無人―】然るに此石鼓は人の收拾することなくして、天下の至寶徒に野に棄られ、寶鼎と

り前に在り、韓公の經を洪都に觀ると云へる蓋し謬ならんか、後漢書靈帝紀、熹平四年春三月、詔諸儒正五經文字、刻石立于大學門外、其後四年を過て光和元年二月始置鴻都門學生、注鴻都門名也、於內置學、鴻と洪とは音同して通用する也、【塡咽】字彙咽於歇切、哽咽悲塞也、塡はみつると讀、咽はむせぶと讀む、共にふさがり不暢意也、慨嘆甚して氣塞る也、擧國一國を擧て悉くと云義也、【奔波】人の競ひ至こと海波の奔騰し潮するが如くならんと也、言ろは靈帝の時世に所多の五經を石に刻みしさへ、尙人集り觀て慨嘆塡咽す、況や此希代の至寶を大學に遷し置たらば、國人悉く競來て、觀者海水のしきなみをうつて至るが如なるを、坐から見にてあらんと也、【剜苔―】年久く野に棄り在て、苔蘚纏ひ生ずるを剜剔て一洗し、石鼓の節角を露し出してと也、【妥帖】字彙妥音唾安也、平也、妥帖定也、文選陸機文賦、或妥帖而易施、平かに帖しりとおちつきたるを妥帖と云、【頗】は不平也、安置すること妥帖にして傾頗ならざらしめんと也、【大厦―】石鼓を置處は高大の厦深邃の簷を搆て、石鼓を蓋ひ覆ふて風雨苔蘚に蝕剝せしめず、將來久遠まで經歷し傳んことを期するより外、別に他事なきと也、

中朝大官老於事、詎肯感激徒媕婀、（媕）音庵又音掩、牧童敲火牛礪角、誰復著手爲摩挲、日銷月鑠就埋沒、六年西顧空吟哦、

【中朝】は倒語也、朝廷の中也、【老於事】事を閱ること久して、能世情に慣れたるを云、【詎肯】本注孫曰、詎肯謂不肯、【感激】內に感動して激發する也、諸葛孔明出師表、臣不勝受恩感激、【媕婀】不決貌、言ろは朝廷の中にて柄を執る大官の人々、能く世事に慣て底事を聞ても更にものをどろきをせず、それをいかにと取り擧ることなし、故に石鼓のことを告れども、詎ぞげにもと聞き納れて、肯て感激を興さんや、徒に媕婀として決することなく、終に果し究ることをせざりしと也、本注云觀詩意、公蓋欲遷此鼓於大學、是時必有阻之者也、【牧童―】石鼓終に遷されず、野に在て童牛の爲に厄せらるゝことを云、牧童は牛を牧

只數たの駱駝に載せて能く移し得べければ也、【駱駝】前漢書西域傳云、大月氏國出一封橐駝、師古曰、脊上有一封也、封言其隆高若封土也、今俗呼爲封牛、山海經云、號山陽光之山其獸多橐駝、日行三百里負千斤、字彙云、馲駝埤雅駝背有肉鞍如峯、長頸高脚知泉脈所在、亦作橐佗、言能負囊橐而馱物故曰橐佗、又作駱駝、此石鼓を取て太廟に薦て、郜の鼎を廟に納れしに比せば、此鼓の光輝聲價豈に止今日に百倍し過るのみならんやと也、【郜鼎】杜預曰、郜國所作器也、故繫名於郜、濟陰城武縣東南有北郜城、注左傳桓公二年の文也、宋の督孔父を殺し其妻を取り、遂に其君殤公を弑したり、其後公子馮と云し人、出て鄭に居られしを召て立て宋公とす、是を宋の莊公と云、初め宋督殤公を弑し國亂れし時、桓公賂を受て齊侯陳侯鄭伯と會して宋の亂を平く、故に莊公立て後に倘賂をなして郜の大鼎を魯に送る、桓公受て宋より取よせて、四月戊申に周公の大廟に納られたり、是を郜の鼎と云也、

聖恩若許留大學、諸生講解得切磋、觀經洪都尚塡咽、（漢靈帝置洪都門學、正五經文字、）**坐見擧國來奔波、剜苔剔蘚露節角、安置妥帖平不頗、大廈深簷與蓋覆、經歷久遠期無他、**

至此まで退之告け請ふの辭也、【聖恩】天子官を授け任せらるゝの恩也、言は石鼓を遷し納れて後、我も亦幸に聖天子の恩を蒙て博士の官を領し、大學に留り居ることを許されなば、大學の諸生を集て石鼓の文を講解し、文義を切瑳し究ることを得べきと也、諸生は學者也、史記叔孫通傳云、臣願徵魯諸生與臣弟子共起朝儀、【切瑳】の瑳當作磋、磋磨也、道理を講論研覈するを切磋と云也、大學傳云如切如磋者道學也、【觀經洪都】注漢靈帝置洪都門學、正五經文字、本集孫注云、漢靈帝光和元年二月、始置鴻都門學、熹平四年三月詔諸儒正五經文字、命議郎蔡邕爲古文篆隷三躰、書之刻石平大學門外、使後生晚學咸取正焉、碑始立、其觀見及摹寫者車乘日千兩、塡塞街陌、鴻都與觀經蓋二事、今幷用之、石經を造は鴻都學を置よ

數駱駝、薦諸太廟比郜鼎、光價豈止百倍過、〔郜〕音告〔過〕音戈○左傳桓公二年、宋督弑殤公、召莊公於鄭而立之、以親鄭、以郜大鼎賂公、夏四月取郜大鼎于宋、戊申納于廟、

【憶昔―】以下は只今紙本を覽に因て、昔日此石鼓の爲に心を用たりしことを憶出して、其時の狀を言ふ也、【博士】は國子博士となりしを云、事文類聚新集卷三十一云、六國時有博士、掌通古今、漢多至數十人、唐國子博士二人、正五品上、掌教文武官三品以上及國公子孫、【元和】唐憲宗年號也、言ろは因て憶、我れ昔初て博士の官に補せられんとの徵を蒙むりし年は、年號を始て改められ元和と稱したる時なりしと也、【故人】退之の舊故の友人也、其誰何と云こと不可考、【右輔】右扶風也、京兆、左馮翊、右扶風謂之三輔、右輔は右扶風、即古の岐陽今の鳳翔也、【爲我―】韓愈の爲に石鼓を遷し安すべしとて、廣狹を量度て、安置すべき臼科を掘たる也、【臼科】科は坎也、孟子離婁盈科而後進、臼の如く科を掘たる也、【濯冠―】故人韓公の爲に臼科を掘り、石鼓を遷さんと云に因て、韓公濯冠沐浴して齋戒をなし、博士を領する祭酒の人まで告げて、石鼓を遷さんことを請れしなり、【濯冠】晏氏春秋云、平仲澣衣濯冠以朝、【沐浴】沐は髮を洗也、浴は身を洗也、論語憲問篇孔子沐浴而朝、告於哀公、【告祭酒】匯祭酒を直に退之なりと云て、國子祭酒となられしを引く甚謬れり、退之博士となり祭酒となること同時に非ず、祭酒となるは潮州貶謫の以後也、此に祭酒と云は國子博士を領する官の祭酒に、退之が往て告られたる也、祭酒は三品博士は五品也、退之此時博士にて祭酒に領せらる、故に往て告られし也、【祭酒】事文類聚三十一、國子祭酒、東漢置博士十四人、而聰明有威重者一人爲祭酒、謂之博士祭酒、唐祭酒爲大司成、領六學國子、大學、四門、律學、書學、算學、皆以儒學優重者爲之、○祭酒一人、從三品、掌儒學訓導之政、摠國子、大學、廣文、四門、律、書、算、凡七學、【如此―】是より以下退之祭酒に告て石鼓を遷さんと請ふの辭也、此石鼓の如き至寶、世に存する者豈多く有ことを得んや、これを野に棄ること固に可惜、氈に包み席に裹て遷しなば、何の苦勞もなく立ろに致し納るべし、是太甚重大なるに非ず、十の鼓は

曲切、褊小陿陋、迫音百、窘也陜也、【委蛇】召南羔羊篇、退食自公、委蛇委蛇、鄭注委曲自得貌、從容とおもむろにして局蹙ならざるを云、言は大雅小雅の篇は、詞章拘束して委曲自得の趣なきと也、注蛇字兩音あることを云、ゐとたとの二音あれども、此詞は歌字の韻に叶ふ字を韻脚に押したるほどに、唐何反を用て音たと可讀と也、【孔子―】秦の國は即ち岐陽今の鳳翔府也、孔子西の方は秦の地に入玉はざりし故に、鼓文を見玉はずして、詩の中にも編入られざりしと也、【掎摭―】字彙掎居里反、偏引也、摭音之石切拾也、【羲】羲和羲仲日を掌る故に、假用て日の稱とす、【娥】は嫦娥也、月中に身を藏す、故に月の稱を嫦娥と云、羲娥は即日月也、本集韓注詩意謂、石鼓文不編於詩、而二雅不載、孔子刪詩小者具述而此文獨遺、是猶掎摭星宿而遺日月也、言は此石鼓文の詩編に不入、孔子も詩を刪定る時此文を收め入れ玉はずして、其他の小々にして委蛇たることなき詩をば、却て收め編て不遺、是は星宿を摭て日月を遺たるに等しきと也、○容齋隨筆巻四云、文士爲文有矜夸過實、雖韓文公不能免、如石鼓歌極道宣王之事偉矣、至云孔子西行不到秦、掎摭星宿遺羲娥、陋儒編詩不收拾、二雅褊迫無委蛇、是謂三百篇皆如星宿、獨此詩如日月也、二雅褊迫之語尤非所宜言、今世所傳石鼓之詞尚在、豈能出吉日車攻之右、安知非經聖人所刪乎、【嗟余―】好古論語述而篇、述而不作信而好古、【生苦晩】斯世に出生すること苦だ晩くして、當時の盛事を見に不及也、【對此】張籍持し來りし石鼓文の紙本を指て云也、【滂沱】大雨貌、詩小雅、漸々之石篇、月離于畢、俾滂沱矣、言ろは余古を好めども生るゝこと甚晩して、先儒の世に並て不出、故に此文を詩編に收め入ることを不得、今此紙本に對して嘆惜に不任雙涙流れて雨の滂沱たるが如くなると也、

憶昔初蒙博士徵、其年始改稱元和、（愈元和元年徵爲國子博士、）故人從軍在右輔、爲我量度掘臼科、（謂安置石鼓處、）濯冠沐浴告祭酒、（愈召拜國子祭酒、）如此至寶存豈多、氈包席裹可立致、十鼓只載

翔鳳翥以爲先導也、輔按に鸞鳳仙三様の體勢となして看て可ならんか、【珊瑚―】字畫結構の精鮮なるを云、本集注班固西都賦、珊瑚碧樹周阿而生、廣雅曰珊瑚珠也、說文云生海中也、色赤、碧樹碧玉樹也、淮南子曰、崑崙山有玉樹、文字の結構粲然たること、珊瑚玉樹の枝柯を相交へたるが如きと也、【金繩―】字體の剛健なるを云、繩索共になはと讀む、【鏁紐】くさりむすぶ也、金の繩鐵の索をくさりむすんで連ねたる如く、雄壯なると也、【古鼎―】此句字體飛動の勢を云、【古鼎躍水】注に漢武汾陰の鼎を引て謌す謬れり、汾陰の鼎は土中より掘出せり、水に躍るに非ず、古鼎水に躍り入こと未詳、按に禹の鼎を云へるならんか、梁虞荔鼎錄云、昔虞夏之盛遠方皆至、使九牧貢九金鑄九鼎於荊山之下、鼎成三足而方、不炊而自沸、不擧而自藏、不遷而自行、九鼎既成定之國都、桀有亂德、鼎遷于殷、載祀六百殷紂暴虐鼎遷于周、成王定鼎於郟鄏、卜世三十卜年七百、天所命也、及顯王姬德大衰、鼎淪入泗水、【龍騰梭】注【陶侃】晉書列傳三十六、陶侃字士衡、少時漁於雷澤、嘗網得一織梭、以掛于壁、有頃雷雨、自化爲龍而去、字體の勢古鼎の躍て水に入る時の狀の如く、叉龍の梭より變化して飛騰したりし勢氣の如くなると也、注【漢得鼎於汾陰】前漢書郊祀志上云、汾陰巫錦爲民祠魏脽后土營旁、見地如鉤狀、掊視得鼎、鼎大異於衆鼎、文鏤無款識、怪之言吏、吏告河東大守勝、勝以聞、天子迺以禮祠迎鼎至甘泉、

陋儒編詩不收入、二雅褊迫無委蛇、蛇一作佗（委）於爲反（蛇）音移詩委蛇注、行可從迹也、毛詩叶韻音蛇唐何反今叶歌字宜作唐何反、孔子西行不到秦、掎摭星宿遺羲娥、孫曰羲和日御、嫦娥月御、嗟余好古生苦晚、對此涕淚雙滂沱、

六句此文の詩書に不載ことを歎惜す、【陋儒】見識鄙陋の儒にして、君子の儒たることを不得の輩也、荀子勸學篇云、末世窮年不免爲陋儒而已、此句に陋儒と云は、孔子刪定以前の詩經を編たる人を指て云也、上古に詩を編し人、陋儒にて此石鼓の詞を收め入ることなかりし也、二雅、大雅小雅也、【褊迫】字彙褊、補

也、【隷】書斷云、按隷書者秦下邽人程邈所作也、邈字元岑、始爲縣吏、得罪始皇、幽繫雲陽獄中、覃思十年、益小篆方圓而爲隷書三千字奏之、始皇善之用爲御史、以奏事煩多篆字難成、乃用隷字以爲隷人佐書、故曰隷書、【蝌】古文蝌斗の字也、尙書序云、魯共王好治宮室、壞孔子舊宅以廣其居、於壁中得先人所藏古文虞夏商周之書及傳論語孝經、皆科斗文字、注科斗蟲名蝦蟇子、書形似之、正義云科斗書古文也、所謂蒼頡本體周所用之、以今所不識是古人所爲故名古文、形多頭麤尾細、狀腹團圓似水蟲之科斗、故曰科斗、上古には筆墨なくして漆にて字を寫すに因て、筆起の處は太く、筆を歛る處漆かれて細し、故に字體水中の蝦蟇の子に似たり、これを科斗の字と云、即是蒼頡鳥の跡を觀て作り初る文字也、

年深豈免有缺畫、快劍斫斷生蛟鼉、鸞翔鳳翥衆仙下、珊瑚碧樹交枝柯、金繩鐵索鏁紐壯、古鼎躍水龍騰梭、漢得鼎於汾陰、陶侃漁於雷澤、網一梭、化龍而去、○自年深

缺畫以下至此言字之體勢也、

六句は文字體勢を形容す、【年深―】石鼓神物の守衛に依て、今日まで磨滅せざれども、年代深遠なれば、其間字畫の缺滅することを不免と也、【快劍―】此一句缺畫ある字體を形容する也、【快劍】刄の銛して能きるゝ劍也、【斫】音酌刀斬也、【蛟鼉】字彙蛟音交、龍屬無角似蛇、細頸頸上有白嬰四脚、郭璞云、蛟大者數十圍、卵生子如一斛能吞人、張揖云蛟形魚身而蛇尾、【鼉】音他水蟲類魚有足、陸機云似蜥蜴長丈餘甲如鎧、皮堅厚可冒鼓、續博物志鼉長一丈、其聲如鼓、此說近是、馬融廣成頌、左挈夔龍右提蛟鼉、缺畫の字體を視るに、或は偏或は傍滅すと云へども、其猶存するの畫體勢活動すること、譬へば快くきるゝ劍を以て、生ける蛟鼉を中より斷て兩段となせども、猶活動して分體各飛躍する勢の如くなると云意也、【鸞翔―】字の體勢或は鸞の翔るに似たるもあり、或は鳳の翥て擧る象もあり、又衆仙の羽衣褊襹として空中より下り來るが如き形象もあると也、鸞鳳詳に第一卷に見えたり、【翥】飛擧也、本集孫注云、仙人將下故鸞

の士を岐陽に騁せ集て狩をなさるゝ也、【皆遮羅】萬里の間に所在の禽獸皆毆り出されて、遮り留られ羅し獲らるゝ也、【鐫功—】宣王天下の亂を撥るの功を石に鐫り、周道再び興て太平を成すことを勒し頌して、萬世の後までに告げ知らする也、【鑿石作鼓】即石鼓也、石を鑿て鼓の形に作る也、【隳嵯峨】石鼓を鑿出して嵯峨の山を壞隳と也、嵯峨山高貌、隳音灰毀也、【從臣—】宣王の朝に仕る從臣は、悉く才藝に精熟せること咸第一の人也、此輩相與に此文を作り、簡び選て章を成し、石鼓に譔刻て岐山の阿に留めおかれしと也、【山阿】文選十九首古詩、冉々孤生竹、給根泰山阿、注阿曲也、注【寶雞縣】一統志、鳳翔府寶雞縣在府城西南九十里、本秦陳倉縣、唐至德初因秦文公獲石雞之異、改寶雞縣、【石鼓山】一統志、在寶雞縣南二十里、山麓舊有石如鼓者十、相傳周宣王時所鑿石鼓、今在國子監、【其文】石鼓に鐫れる文字也、【史籀】唐張懷瓘書斷卷一云、籀文周太史史籀所作也、與古文大篆小異、後人以名稱書謂之籀文、七略曰、史籀者周時史官教學童書也、與孔氏壁中古文體異、甄酆定六書二曰奇字是也、

雨淋日炙野火燒、鬼物守護煩撝呵、公從何處得紙本、毫髮盡備無差訛、

音禾反

辭嚴義密讀難曉、字體不類隸與蝌、

音科

【雨淋—】此二句石鼓數千歲を歷て磨滅せざることの神妙なるを云、石鼓已に鐫てより以來雨淋之日炙之、或は野火の爲に燒るゝことを歷ること數千載なれども、鬼物あつて此靈器を守護し、煩く叱咤して災害を撝呵し攘ひ、遂に毀壞せしめず、今日に及て猶歷々として存すると也、【撝呵】撝指也、呵斥也、邪妖を叱して指し斥けしむる也、【公】張籍を指す、【紙本】石鼓の文を石ずりにして寫したる帖子也、張籍何の處よりか此石鼓文を打したる紙本を得來られたるやと也、【毫髮—】打し成したる紙本を覽れば、毫髮の如く纖細なる字畫も盡く備て、差ひ訛ること無きと也、【辭嚴—】石鼓文辭嚴にして義密なり、試に讀めども曾て通曉しがたきと也、【字體—】其字體を視れば、秦の隸書の體にもあらず、又古文蝌斗の文にも不類と

天下亂るを云、古文大全云、周厲王蕩無綱紀、四海紛擾如鼎沸然、綱鑑周紀、厲王（名胡夷王之子）爲人暴虐無道、以榮夷公爲卿士用事、諸侯不享、三十有七年王心戻虐、萬民弗忍、乃相與畔襲王、王出奔于彘、【宣王】綱鑑周紀厲王出奔于彘、太子靖匿召公家、國人乃圍之、召公乃以其子代王太子、太子竟得脫、厲王崩于彘、周公召公奉太子靖即位、在位四十六年崩、【憤起】天下の亂逆を憤激し、撥亂の志を發起して周道を興すを云、【揮天戈】天戈は天兵と云の類也、宣王の天に代て干戈を揮ひ、奸兇を亡して天誅を行ふを云也、【明堂】禮記明堂位篇云、昔者周公朝諸侯于明堂之位、天子負斧依南鄉而立、三公中階之前北面東上、諸侯之位阼階之東西面北上、諸伯之國西階之西東面北上、諸子之國門東北面東上、諸男之國門西北面東上、九夷之國東門之外西面北上、八蠻之國南門之外北面東上、六戎之國西門之外東面南上、五狄之國北門之外南面東上、九采之國應門之外北面東上、四塞世告至、此周公明堂之位也、明堂也者明諸侯之尊卑也、正義曰名曰明堂者、以其記諸侯朝周公於明堂之時所陳列之位也、在國之陽、其制東西九筵南北七筵、堂崇一筵五室、凡室二筵、宣王大に明堂を開て政教を明し、布て天下の諸侯を朝せしめ、其賀禮を受させらるゝ也、【諸侯—】天下の諸侯盡く明堂に朝して朝儀を行ひ、腰に帶ひ垂る劍佩互に觸れて、響鳴て相磨するとなり、綱鑑宣王甲戌元年、召公周公輔王修政、法文武成康之遺風、任申伯仲山甫張仲、順天下更失理、喩德敎、擧遺士、海內翕然向風、諸侯復宗周、

蒐于岐陽騁雄俊、萬里禽獸皆遮羅、
鐫功勒成告萬世、鑿石作鼓隳嵯峨、
從臣才藝咸第一、簡選譔刻留山阿、

鳳翔府寶雞縣本陳倉縣、寰宇記云、石鼓山在縣南二十里許、石形如鼓、其數有十、蓋紀周宣王畋獵之事、其文即史籀之迹、

【蒐于岐陽】韓文注云、蒐狩也、今岐山縣、舊曰岐陽、孫曰、左氏成有岐陽之蒐、左氏言成王、公今言宣王、未詳、宣王の岐陽に蒐せらるゝこと、史記及綱目に不見、宣王八年巡狩東郊、朝會諸侯、因以畋獵講武、詩人作車攻吉日美王、或は此事か、【騁雄俊】雄壯俊傑

貢雍州域、周爲岐周地、春秋戰國爲秦地、始皇幷天下、以屬內史、漢武帝更曰右扶風、與京兆左馮翊爲三輔、西魏爲岐陽郡、隋初爲岐州、唐初復爲岐州、至德初改鳳翔郡、【鳳翔孔子廟】一統志、鳳翔府孔子廟不載、【鄭餘慶】萬姓統譜、鄭餘慶字居業、絪從子、少勤學善屬文、【皇祐】宋仁宗年號也、【向傳師】按宋史外戚傳向傳範父子ならんか、【磨滅】石刻すりきえて字畫不分明也、

韓退之

張生手持石鼓文、（孫曰張籍）勸我試作石鼓歌、少陵無人謫仙死、（唐李白傳賀知章見其文歎曰子謫仙人也、）才薄將奈石鼓何、

此四句先づ石鼓の歌を作る由を云、【張生】注張籍唐書列傳一百一、韓愈傳尾附、張籍字文昌、烏江人、第進士、愈薦爲國子、歷水部員外郞主客郞中、籍爲詩長於樂府、多警句、仕終國子司業、【持石鼓文】張籍手に石鼓の文を石づりにしたる紙本を持して、韓退之の所に來る也、【勸我—】退之に勸めて、石鼓を咏ずる歌作られよと請ふ也、【少陵—】此二句韓公謙遜の辭也、少陵は杜子美也、謫仙は李太白也、韓公嘗て有詩曰、李杜文章在、光燄萬丈長と、李杜は韓公の所服、故に推て曰、此石鼓を咏ずべき者は杜子美李太白が手にして而可能、今也少陵逝て其人なく、謫仙も死て世に不在、我が如きは才薄して李杜が如き文章なし、奈何んしてか石鼓の歌を能し得んやと也、石鼓は希代の重寶なるに因て、韓公と云へども謙遜如此也、

周綱陵遲四海沸、宣王憤起揮天戈、大開明堂受朝賀、諸侯劍珮鳴相磨、

【周綱】周道の綱紀也、禮樂刑政の類を云、【陵遲】韻會荀子注言、丘陵之勢漸慢也、丘陵のそろ〳〵と下に向て、いつともなく平地に至るを陵遲と云、朝廷の綱紀日〻に一日より怠慢して、遂に敗荒するを云也、淮南子泰族訓云、山以陵遲、後漢列傳四十二崔駰慰志賦云、六柄制于家門兮、王綱漼以陵遲、【四海沸】天下亂て鼎の沸きかへるが如く不靜也、此れ周の厲王の代

翅寶玉大弓矣、歐陽公獨言漢桓靈世碑刻未及千載、磨滅者十之八九、自宣王至今千有九百餘年、豈得獨存、又疑此文初不見稱於前代、又謂隋氏藏書最多、其志所錄自始皇刻石婆羅門外國書、皆具而獨無石鼓、遺大錄細、不宜如此、嗚呼歐陽公所見謬矣、隋藝文志所收固博矣、寧無絓萬而漏一乎、試引前代名士之言所及、歐陽公雖復生亦必心服焉、後周吏部侍郎蘇勗云、世咸言筆跡存者李斯最古、不知史籀之跡近在關中、此可證一也、唐章懷太子賢注漢書鄧隲傳遭元元之災、引岐陽石鼓文、凡重言者皆爲二字、此可證二也、高宗時李嗣眞書後品云、倉頡造書鬼哭凜々、史籀堙滅陳倉籍甚、此可證三也、開元中張懷瓘書斷云、籀文者周太史史籀之所作也、其跡有石鼓文存焉、今在陳倉縣、李斯小篆兼採其意、此可證四也、徐浩古跡記云、史籀石鼓文、李斯嶧山碑、崔子玉篆、蔡邕並爲曠絕、此可證五也、杜工部贈李潮八分小篆歌云、陳倉石鼓又已訛、此可證六也、韋應物石鼓歌云、周宣大巢兮岐之陽、刻石表功兮煒煌々、喘息逶迤相糺錯、乃是宣王之臣史籀作、此可證七也、至德中竇臮述書賦云、篆則周史籀、秦李斯、漢有蔡邕、後代師之、籀之狀也若生動而神憑、通自然而無涯、遠則虹伸結絡、邇則瓊樹離披、又云周秦漢之三賢今目驗之所云石雖貞而云泐、紙可壽而保傳、其弟蒙註云、史籀周宣王史官、岐州雍城南有周宣王獵碣十枚、上篆文今見打本、此可證八也、至昌黎之歌一出、則表章稱贊至矣、歐陽公尊信韓公而不從、此其意云何、合八公紀述及韓而九、九徵至而不肯得矣、歐公果不讀書邪、此公蓋師心獨見、至謂十翼非孔子所作、河圖洛書不足信、無所忌憚如此、何有於石鼓乎、東坡之歌繼韓而作、先後如出一口、豈阿私所好者邪、他若周越法書苑、樂史寰宇記、趙明誠金石錄、王深甫故跡遺文、張師正倦游錄、胡世將資古紹志錄所云云、不暇縷々可覆視也、司馬池待制知鳳翔府日、輦致府學之門廡、護以木櫺、鄭樵石鼓音云、鼓亡其一、皇祐四年鄭餘慶向傳師求于民間得之、十鼓於是乎足、梅聖兪贈雷逸老傚石鼓文見遺、因呈吳祭酒長詩畧云、我欲效韓非痴狂、至寶宜列孔子堂、其後徽宗大觀中始移置之辟雍、復取入保殿、元人移之大學、刻潘迪釋文以畢先師之志、遂詳述其說以印正于海內大方家云、【註】【韋應物】傳前に見えたり、【岐陽】大明一統志、鳳翔府禹

奇好の芳馨怪異の珍卉さま〴〵多して、妍を爭ひ媚を逞うして陽春一時の光華を競ひ取れども、朝に開かと見れば暮には即ち落つ、榮え易く又枯れやすし、豈是菖蒲の澗谷泉石の間に生じ、異根孤操あつて塵を出るの標態、世に高ぶるの姿容、常に改ることなく、其芳名萬古までに朽ることなきに如んやと云の意なると也、

○石鼓歌

歐陽文忠公云、石鼓在岐陽、韋應物以爲、文王之鼓至宣王刻詩爾、韓退之直以爲宣王之鼓、在今鳳翔孔子廟中、鼓有十、先時數棄于野、鄭餘慶置于廟而亡其一、宋皇祐四年向傳師求於民間得之、十鼓乃足、其文可見者四百六十五、磨滅難識者過半矣、

韓文五載之、注見歐文、歐陽文集一百三十四、集古錄云、岐陽石鼓初不見稱於前世、至唐人始盛稱之、而韋應物以爲、周文王之鼓至宣王刻詩爾、韓退之直以爲宣王之鼓、在今鳳翔孔子廟中、鼓有十、先時散棄于野、鄭餘慶置于廟而亡其一、皇祐四年向傳師求於民間得之、十鼓廼足、其文可見者四百六十五、磨滅不可識者過半、余所集錄文之古者莫先於此、然其可疑者三四、今世所有漢桓靈時碑往々尚在、其距今未及千歲、大書深刻而磨滅者十猶八九、此鼓按太史公年表、自宣王共和元年至今嘉祐八年實千有九百一十四年、鼓文細而刻淺、理豈得存、此其可疑者一也、其字古而有法、其言與雅頌同文、而詩書所傳之外、三代文章眞跡在者惟此而已、然自漢已來博古好奇之士皆略而不道、此其可疑者二也、隋氏藏書最多、其志所錄秦始皇刻石、婆羅門外國書皆有、而獨無石鼓遺近錄遠不宜如此、此其可疑者三也、前世傳記所載古遠奇怪之事、類多虛誕而難信、況傳記不載、不知韋韓二君何據而知爲文宣之鼓也、隋唐古今書籍粗備、豈當時猶有所見而今不見之邪、然退之好古不妄者、余姑取以爲信爾、至於字畫亦非史籀不能作也、廬陵歐陽某記、嘉祐八年六月十日書、○楊升菴石鼓文敘錄、愼得石鼓文拓本於先師李文正公、賓泉所謂石雖貞而云泐、紙可壽而保傳、胡世將所云岐下有摹即此是也、元至元丁未唐愚士翻刻于大學、作歌紀之今本存焉、據古文苑所載及王順伯鄭漁仲二公石鼓音、皆言、其文可見者四百七十有四、梅聖俞贈逸老以石鼓文見遺詩云、四百六十飛鳳凰、以茲本所載六百五十七字完好無訛、斯文所在眞有神物護持邪、得之不

中王莽簒政、福一朝棄妻子去九江、至今傳以爲仙、【玉笥山】在臨江府新淦縣、道書爲第十七洞天第八福地、相傳漢武帝時有玉笥降壇上因名、【綵鸞紫鳳】綵鸞は仙女の名に非ず、文綵ある鸞鳥也、紫鳳紫彩の鳳鳥也、【琪花苑】仙境也、仙女呉綵鸞が遊し處也、菖蒲の叢生したる葉樣を形容する也、綵鸞紫鳳の琪花苑に翺翔して遊ぶ貌に似たると也、【赤虬】虬音求龍無角者、赤虬玉麟は菖蒲の根形を象る也、【芙蓉城】仙人王子高仙女の周瑤英と與に遊し處也、菖蒲の根節盤屈の狀は、赤虬玉麟の芙蓉城に遊戲する貌に似たると也、注【呉綵鸞】【王子高】傳見列仙傳、

上界眞人好清淨、見此靈苗當大驚、我欲携之朝太清、【朝】音潮、瑤艸不敢專芳馨、玉皇一笑留香案、錫與有道者長生、

【上界眞人】天上の仙人を指す、【靈苗】即菖蒲を云、上界の仙人は世塵を厭て清淨を好めり、若し此菖蒲の靈苗を見ば、大に驚異して珍重すべしと也、【我欲携——】我れは思ふ此靈苗を携て、神仙の所居太清宮に朝謁して進献せんことを、若し然らば則太清宮の庭に栽ゑ置れたる瑤艸も此菖蒲には敵することを不得、芳馨を讓て遜退し、敢て自ら專にすることを得まじきと也、【瑤艸】山海經、梁地有香爐峯、神仙所居之迹、瑤艸珊瑚之類、仙家用以合丹藥服餌、又云姑瑤之山帝女死焉、名曰女尸、化爲瑤艸、【玉皇】諸の神仙を統治る天帝也、玉皇此靈苗を見玉ば、欣然として一笑し、香案の上に留め置て、有道の者に錫ひ與へて服餌せしめ、長生することを得せしめらるべきと也、

人間千花萬艸儘榮艶、未必敢與此艸爭高名、世間奇芳異卉爭妍逞媚以競春華、朝開暮落易榮易枯、豈如根孤操出塵之標高世之姿、芳名萬古不朽、

人間に所有草花千萬種なれば、其中儘榮艶にして目を悦ばしむべき者あれども、未必ず此菖蒲と抗衡して、高名を爭ふことになるまじきぞとなり、【榮艶】榮はさかへほこりたる者、艶は顏色媚てやさしき者也、【此艸】は菖蒲を指て云也、注結句の意は世間の花艸、

【堂前—】菖蒲は異根孤操の物、風雅瀟灑の所に宜し、婦女紅粉の艶情を以て所玩の艸に非ず、故に紅粉の意に不入、【席上—】菖蒲は移して明窻浄几の間に置、故に常に詩書を唱る聲を聽也、【怪石】注貢州貢怪石、禹貢海岱惟青州、岱畎絲枲鉛松怪石、注怪異好石似玉者、正義怪石奇怪之石、故云好石似玉也、岱山之谷有此五物故貢之、【篠簜】注楊州貢篠簜、禹貢淮海惟揚州、厥貢瑤琨篠簜、注篠竹箭、簜大竹、正義曰釋艸云、篠竹箭、郭璞云別二名也、又云簜竹、李巡曰竹節相去一丈曰簜、孫炎曰竹闊節者曰簜、郭璞云竹別名是篠爲小竹、簜爲大竹、也、【舜廊】は舜帝の朝廷也、禹は舜の命を受て水を治む、故に禹貢に書す、貢物は皆舜の朝廷に輸し納る所を載也、言は怪石篠簜の類までも皆貢物に充て納る、此菖蒲も亦貢物となして、舜帝の廊上へ怪石篠簜と倶に同く登るべき物也、然るに禹貢にこれを收めしるさゞるは不審なると云意也、【神農】史記三皇本紀、炎帝、神農氏、姜姓、人身牛首火德王、故曰炎帝始教耕故號神農氏、始嘗百艸始有醫藥、【知己】能己れが心に蘊む所、志の所在を知たる人を知己の友と云、史記刺客傳豫讓曰、士爲知己者死、女爲說己者容、神農は菖蒲の爲には知己也、能菖蒲の功能を知て本艸の中に收め入られたると也、【靈均】注即屈原也、離騷經皇覽揆余于初度兮、肇錫余以嘉名、名余曰正則兮、字余曰靈均、【蔽賢遺騷經】屈原離騷經を作て、多く艸木を借て比喩す、蕙蘭の類を以て君子賢人に比す、如何ぞや、菖蒲の孤操清勁の賢を蔽ひて不言、騷經に採用することを遺亡して漏したるぞや、屈原が傳前に見たり、

幽人耽翫發仙興、方士服餌延脩齡、梅子眞於玉笥山、採菖蒲服之昇仙、

綵鸞紫鳳琪花苑、吳綵鸞遊琪花苑、赤虬玉麟芙蓉城、王子高遊芙蓉城、

【幽人】幽閑風雅の人、【耽翫】耽過樂也ふけると讀む、翫狎也貪悦也もてあそぶと讀む、【方士】方術の士也、仙道を學ぶ者を方士と云、【服餌】くらふ也、【延脩齡】長き齡を延て長生久視の法を爲也、注【梅子眞】漢書列傳三十七、梅福字子眞、九江壽春人、爲郡文學補南昌尉、後去官歸壽春、居家以讀書養性爲事、元始

灌嬰敗横之軍於嬴下、田横亡走梁、漢王立爲皇帝、田横懼誅而與其徒屬五百餘人入海居島中、高帝聞之迺使使赦田横罪、而召之、田横迺與其客二人乘傳詣洛陽、未至三十里至尸鄕廐置、横謝使者曰、人臣見天子當洗沐、止留謂其客曰、横始與漢王俱南面稱孤、今漢王爲天子而横迺爲亡虜、而北面事之、其恥固已甚矣、遂自剄令客奉其頭從使者馳奏之高帝、高帝曰嗟乎有以也夫、爲之流涕、發卒二千人以王者禮葬田横、既葬二客穿其冢旁孔皆自剄下從之、高帝聞之迺大驚以、田横之客皆賢、吾聞其餘尚五百人在海中、使使召之、至則聞田横死亦皆自殺、於是迺知田横兄弟能得士也、菖蒲の莖剛勁なること齊の田横逃て海島の中に居るとき、五百人の義士田横に從ひ行て同く居、英勇の氣激烈して凜々とすさまじく、氣象上み靑冥を磨し凌て不可當が如くに勁硬なると也、

清如三千弟子立孔庭、回琴點瑟天機鳴、孔門三千弟子、惟顏回能鼓琴而歌樂聖人之道、曾點舍瑟而對契夫子之心、皆天機自動至理呈露者也、

【三千弟子】史記四十七孔子世家云、孔子以詩書禮樂敎弟子、蓋三千焉、身通六藝者七十有二人、【回琴】、莊子顏淵曰、鼓琴足以自娛、學夫子之道足以自娛、回不願仕、史記の弟子傳及び論語の中、顏回琴を鼓すること不見、【點瑟】先進篇云、子曰、點爾何如、鼓瑟希鏗爾舍瑟、而作對曰、暮春者春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂風乎舞雩詠而歸、【天機鳴】文選文賦、方天機之駿利、夫何紛而不理、注翰曰、天機自然之性也、善曰莊子蚿曰、今予動吾天機、司馬彪曰、天機自然也、菖蒲の淸き所を形容せば、三千人の弟子孔子の庭上に列立せる中に、顏回が琴を彈じ、曾點が瑟を鼓する韻音、皆性情の正より發し、天機自然の聲響き鳴るが如きと也、

堂前不入紅粉意、席上嘗聽詩書聲、怪石篠簜皆充貢、貢州貢怪石、楊州貢篠簜、此物舜廊當共登、神農知己入本艸、靈均蔽賢遺騷經、靈均即屈原也、離騷經中不言菖蒲、是遺亡也、

廼知二交情一、一貴一賤交情廼見、【夜深―】菖蒲は露を承て翠色愈〻清し、故に淸露の葉上におきて重きを嫌ふことなし、【晨光―】晨光は朝暉也、朝日の光照し臨むときは、菖根氣蒸て白雲の生じ出るかと疑也、

嫩如下秦時童女登二蓬瀛一、（秦始皇遊二東海一、方士徐福等上書、請得下與二童男女一入レ海求中三神山不死藥上）手携二綠玉杖一徐行上、

菖蒲の葉の夭々として嫩やかなることは、秦の始皇の時、徐福不死の藥を求るとて仙山に赴しとき從へ行たる童女、蓬萊瀛洲の仙山に登るとき、手に綠玉の杖を携てゆら〳〵と徐ろに行く貌の如くなると也、史記始皇本紀始皇二十六年、齊人徐市等上書言、海中有二三神山一、名曰二蓬萊方丈瀛洲一、仙人居レ之、請得下齋戒與二童男女一求上レ之、於是遣下徐市發二童男女數千人一入レ海求中仙人上、【注】正義曰、漢書郊祀志云、此三神山者其傳在二渤海中一、去レ人不レ遠、蓋曾有二至者一、諸仙人及不死之藥皆在焉、其物禽獸盡白、而黃金白銀爲二宮闕一、未レ至望レ之如レ雲、及レ至三神山反居二水下一、臨レ之患且至風輙引レ船而去、終莫二能至一云、

瘦如下天台山上賢聖僧、（天台山頂兩山相峙、中有二石橋橫一過、對レ山有二方廣寺一、世傳有レ人至レ此、乃五百羅漢成道之所、今橋斷不レ可レ渡、即其山下爲二方廣寺一焉、）休レ糧絕レ粒孤鶴形上、

【天台山】一統志、台州府天台山在二天台縣西一百一十里一、道書是山上應二台星一、超然秀出、有二八重一、視レ之如二一帆一、高一萬八千丈、周廻八百里、山去レ天不レ遠、路由二福溪一、水險而淸、前有二石橋一、廣不レ盈レ尺、長數十丈、下臨二絕澗一、惟忘二其身一然後能濟、濟者梯二岩壁一援二藤葛一始得二平路一、菖蒲の淸く瘦たる狀は、天台山上に住める賢聖證果の僧、糧を休て米粒を不レ食、常に木食し、形容枯瘦して孤鶴の立て昂々たるに似たる僧形の如くなると也、

勁如下五百義士從二田橫一、（田橫齊諸田疏屬、齊亡逃二海島上一、義士五百人從レ之、）英氣凜々磨中靑冥上、

史記列傳三十四云、田榮子立爲二齊王一、而相レ之專二國政一、漢王使三酈生往說二下齊一、橫以爲レ然、解二其歷下軍一、韓信襲二破齊歷下軍一、廣怒烹二酈生一、韓信虜二齊王廣一、橫自立爲二齊王一、

て冬夏常に靑也、【人言―】人の言を聞く、菖蒲は一種に非ず多品あり、其上品なる者は菖蒲の根一寸の間に九つの節あり、是を服すれば神仙の靈妙に通ずると云へり、注神仙傳卷三見へたり、【嵩岳】水經嵩高爲中岳、在潁州陽城縣西北、嵩山は五岳の中岳也、【九嶷山】一統志、衡州府九疑山在藍山縣西南五十里、嶷は當作疑山九峯あり、望之九峯相似て疑て難辨、故曰九疑山、【中岳】即嵩山也、【學道者】道家長生久視の術を學ぶ者也、【莫能持久】いつまでも服することを不得、中道にして棄る也、【王眞】神仙傳作王興、王眞は魏の武帝の時の人、神仙傳卷十有傳、神仙傳卷三王興傳云、王興者陽城人也居壺谷中、乃凡民也不知書無學道意、漢武上嵩山登大愚室石、起道宮使董仲舒東方朔等齋潔思神、至夜忽見有仙人耳出頭巓垂下至肩、武帝禮而問之仙曰吾九嶷之神也、聞中岳石上菖蒲一寸九節可以服之長生、故來採耳、忽然失神人所在、帝顧侍臣曰、彼非復學道服食者、必中岳之神以喩朕耳、爲之採菖蒲服之、經二年帝覺悶不快遂止、時從官多服莫能持久、唯王興聞仙人敎武帝服菖蒲、乃採服之不息、遂得長生、隣里老少皆云、世々見之、竟不知所之、

異根不帶塵埃氣、孤操愛結泉石盟、明窻淨几有宿契、花林草砌無交情、夜深不嫌淸露重、晨光疑有白雲生、

【異根】衆艸にすぐれて異なる根也、【塵埃氣】澗谷の間に生じて世間糞壤に不託、故に塵埃の氣を不帶也、【孤操】冬夏靑して色を不變孤特の節操なり、【泉石盟】菖蒲は必泉流の出る所に生じて根を石に託す、故に泉石の盟を結ぶことを愛すと云、【明窻淨几】明朗なる窻の間、潔淨なる几案の上也、此四字宋人の語に多く見へたり、宋の時の辭也、歐陽公試笔云、蘇子美嘗言、明窻淨几紙墨皆極精良、亦自是人生一樂、【有宿契】菖蒲は詩人隱士皆愛玩して書齋に移し置て、常に窻几の間に在ること、宿昔よりの契あるに似たることあり、【花林―】花ある林、草の芳しき砌邊富艶の所には此物雜り生ずることなし、曾て彼れに交るの情無きと見えたり、【交情】前漢書鄭當時傳云、一生一死

塗炭と云と同じ意也、顛崩せる絶崖より墮するが如く、生業艱難にして不得所辛苦を受るを云也、【便從―】たとひ蓬萊に上て神仙に向て蒼生を問ふとも神仙知まじければ、便ち諫議に從て借問す、今日世間蒼生の苦惱は、到頭竟に救て蘇息することとなるべきや否やと也、【到頭】は畢竟歸著の處と云義也、諫議は政道の善惡を考へ、下民の憂患を知て天子に諫諍する官也、故に盧仝諷して諫議の力めて極諫し、蒼生の苦を拔て蘇息を得せしむるやうにせられよかしと云意を言ふ也、是亦論語八佾、子謂冉有曰、女弗能救與と云の意也、注【不拘常調】尋常詩法の調律に拘り泥まず自ら變法を出して格外の詩を作る也、【末言】初めには茶を賜て忝の意を言、中ごろに茶を飲て妙あることを言て、さて末に其腋下の淸風に乘じて仙山に飛昇せんと、漫に虚大の語を言て、却て又着實に收斂し、畢竟諫議の天子を諫て下を惠み蒼生を蘇息せよと云に歸着す、詩法變化奇々怪々の妙あり、且つ諫議の職を盡さんことを責め望むの意深き也、

○菖蒲歌

菖蒲の形象功用を品題して稱贊する歌也、嵇含艸木狀云、菖蒲番禺東有澗、澗中生菖蒲、皆一寸九節、安期生採服仙去、但留玉舃焉、此菖蒲は俗に石菖と云者也、池中に生する白菖には非ず、

謝疊山

有石奇峭天琢成、有草夭々冬夏靑、人言菖蒲非一種、上品九節通仙靈、神仙傳漢武帝登嵩岳遇仙人長二丈、耳出頭巓下垂至肩、帝禮而問之、曰吾九嶷之人聞中岳石上菖蒲一寸九節服之可長生、故來採耳、言訖不見、帝顧侍臣曰彼非學道者、必岳神以喩朕耳、終採服之、莫能持久而止、時有王眞者學道之人、聞之採服不息遂得長生、

【有石―】此一句は菖蒲を插み種おきたる盆石の狀を云、一个の石あり、形奇峭にして天然に琢き成せる姿にて人功を不借、自ら可玩異石也、【奇峭】峭高竦也、廣韻山峻也、盆石に山勢さがしくそびへたる奇態ある也、【有艸―】菖蒲を云也【夭々】詩周南桃夭篇、桃之夭々、灼々其華、朱注夭々少好之貌、わかやかにうつくしき貌也、盆石に插み種て一艸あり、葉の色夭々とし

―】三碗茶氣周く內に循て枯腸を捜る、孤悶已に破て曠濶にして內無物、惟平生記憶する所の文字五千卷のみ有ると也、【四碗―】又飲て四碗に至て輕汗を發し腠理を開く、平生所蓄不平の事盡く毛孔に向て汗とともに發散し盡る也、【輕汗】肌を潤すほどの汗を云、人汗を發すれば腠理疏通して毛孔開く、故に毛孔に向て散ずと云、【五碗―】累りに喫て五碗に至る、孤悶不平悉く盡て、唯肌骨淸淨なることを覺ると也、

六碗通仙靈、七椀喫不得也、唯覺兩腋習々淸風生、蓬萊山在何處、海中有三神山、一曰方壺、一曰瀛州、一曰蓬萊、皆神仙所居、玉川子盧仝自號、乘此淸風欲歸去、山上群仙司下土、地立淸高隔風雨、安得知百萬億蒼生命、墮顚崖受辛苦、便從諫議問蒼生、到頭合得蘇息否、玉川子詩法奇々怪々不拘常調、未言乘風欲仙、又却收歛乎實歸於諫議之蘇息蒼生、責望深矣、

【六碗―】飲て六碗に及て精神淸爽、直に眞仙の神靈に通達す、茶の功力こゝに至て能事畢ぬ、故に七碗もはや喫することを不用と也、不得は喫することならぬと云義に非ず、喫するまでもなきと云の意也、【唯覺―】既に仙靈の氣象に通じ、唯覺ふ兩の腋下より習々とおもむろに淸風の發生するやうなると也、【蓬萊山】東方朔十洲記云、蓬丘蓬萊山是也、對東海東北岸、周廻五千里外別有圓海繞山、圓海水正黑而謂之冥海也、無風而洪波百丈不可得往來、上有九老丈人九天眞王宮、蓋太上眞人所居、唯飛仙有能到其處耳、言は傳へ聞海中に神山ありと、彼蓬萊山何の處に在るや、玉川子此腋下の淸風に乘じて虛空に飛騰し、其神山に歸り去んと欲すと也、【習々】小雅谷風篇、習々谷風、朱注習々和調貌、【山上―】蓬萊山の群仙たとへ下土を司る神ありとも、其地の立つ所縹緲の外に在て、淸高にして人間と風雨を隔て逈に遐し、安ぞ世間百萬億の蒼生を、命途不幸にして顚崖に墮して辛苦を受ることを知り得んやと也、【下土】人間世を指て云、神仙は淸虛の上に住す、故に人間を下土と云、【蒼生】萬民を指す、前の浩々歌に見たり、【墮顚崖】は墮

艸―】百艸も敢て茶花に先つては花を開くことなし、茶の花冬に在て開く、尙梅花の前にあり、【仁風】は仁和物を育するの風也、【蓓蕾】花のつぼみ也、韻會蓓蕾始華也、廣韻花綻貌、仁風の中に暗に凝結して珠の如く蓓蕾を生ずる也、【先春―】茶春に先つて葉を抽き出すとき、其色黃にして黃金の如くなる芽を生ずる也、【摘鮮焙芳】芽の始て出るを摘み采る故に鮮を摘と云、一芽一鎗とて葉二つは啓き、一つは卷て針の如くなるを采るを上とす、范希文の歌に、終朝采掇未盈襜、唯求精粹不敢貪と云と同じ、鮮を摘み采て芳く焙て如法製し畢て、旋封じ裹て入貢す、其製至て精粹に至て美好なれども、實に淸間の味にて奢侈に涉ることなき也、【至尊】天子を指す也、至精至好の新茶は先づ天子に献じ、其餘は王公大人に賜ふこと分に於て相合へり、何事ぞ此新品の團茶を許多く山人に贈り與へ、分外の貴物を賜ふことを得たるやと也、山人は盧仝自ら稱する也、

柴門反關無俗客、紗帽籠頭自煎喫、碧雲引風吹不斷、白花浮光凝碗面、一碗喉吻潤、(吻無分反)二碗破孤悶、三碗搜枯腸、惟有文字五千卷、四碗發輕汗、平生不平事、盡向毛孔散、五碗肌骨淸、

是より上の文には茶を賜ふことを謝す、此より以下自煎喫する狀を言ふ也、【柴門―】柴門を反て叉關して世俗の客至ること無也、反關字上文扣門に盧仝睡濃なる時、軍將來て門を扣くに因て開き出て使者を邀ふ、至此反て叉門を鎖す也、【紗帽―】身に山人の服を著け、紗の帽を戴て頭を籠め、自ら賜へる所の茶を煎して喫する也、【碧雲―】茶を煎る烟を碧雲と云、茶烟碧雲の如く起て、風を引て裊々と揚り吹て尙不斷也、【白花】茶の沫だつて白く見ゆるを云、【浮光】茶色の鮮なるを云、沫茶の團を湯に投じて煎ずる故に、白茶光を浮べて浮々と碗面に凝るの狀をなす也、【一碗】試に一碗を喫すれば先づ喉吻を潤すと也、吻は口わき也、【二碗―】再び一碗を喫すれば、胸次に欝悶のありしを破除し去て爽になりたると也、【三碗

押たるなるべし、其製今考へ難し、宋朝よりは斜封を不用か、宋人の書に斜封の字あるを不見、翰墨大全に宋朝書式を載れども斜封の説なし、只唐書に往々斜封の字あり、唐書外戚傳に斜封四出とあれば、唐朝には上下通じて斜封を用たると見えたり、

開緘宛見諫議面、首閲月團三百片、聞說新年入山裏、蟄蟲驚動春風起、天子須嘗陽羨茶、（陽羨今在常州、）百艸不敢先開花、仁風暗結珠蓓蕾、（蓓不上聲當骨猥反、）先春抽出黄金芽、摘鮮焙芳旋封裹、（裹音果）至精至好且不奢、至尊之餘合王公、何事便到山人家、

【開緘】封を開く也、來書を開て讀むに、宛も孟諫議の面に對して與之話るの想ひあると也、【首閲】は贈りもの或は數種あるべけれども、何かを置て先つ第一に閲檢すると云義也、閲は檢閲の義一々に點檢する也、【月團】即團茶也、月の團々たる形の如くなると云意にて月團と云るなるへし、茶經茶錄等を檢するに、月團と號する茶不見、宋朝の團茶龍鳳團は茶毎一斤を七八餅とす、小龍團は毎一斤を二十餅となす、大小の二團は茶の極品也、唐朝盧仝の時團茶の製未考、【三百片】は三百箇也、【聞道―】人の道ふを聞けば、頃ろ新年の氣山裡に入て春陽地煖にして、隆冬に蟄居せし蟲の屬皆驚動し、春風吹き起る時に及びたると也、禮記月令云、仲春之月雷乃發聲、始雷、蟄蟲咸動啓戸始出、【天子―】蟄蟲動て出春風已に發る時なれば、想ふに天子はもはや今年所獻の陽羨の茶を、始て嘗させらるゝにてあらんと也、【陽羨】は大明常州府宜興縣也、大明一統志常州府唐貢山、在宜興縣東南三十五里、山產茶、唐時入貢故名、○事文類聚續集十二、唐茶惟湖州紫筍入貢、毎歲以清明日貢到、先薦宗廟然後分賜近臣、紫筍生顧渚在湖常二境之間、當采茶時兩郡守畢至、最爲盛集、白樂天守姑蘇聞賈常州崔湖州茶山境會寄詩云、遙聞境會茶山夜、珠翠歌鐘俱遶身、盤下中分兩州界、後前合作一家春、【百

我言織女君莫歎、天地無窮會、相見、猶勝嫦娥不嫁人、夜々孤眠廣寒殿、（羿得不死之藥於西王母、嫦娥竊之以奔月、○李白詩白兎搗藥秋復春、嫦娥孤栖與誰隣、）

【我言―】末の四句詩人織女に説て解慰する也、別多く値ふことゝ少れなるは固に無爲、然れども却て歎息をなさゞるべし、一歳唯一夕相會と云へども、天地窮りなければ千歳萬歳會して相見るべし、猶是嫦娥の月中に栖て人に不嫁、夜々月中の廣寒殿に孤眠するには勝れること遠きほどにと也、【嫦娥】詳に第七卷李白把酒問月の詩に見たり、【廣寒殿】天寶遺事云、唐明皇遊月宮、見天府、榜曰廣寒清虚之府、見素娥十餘人皓衣乘白鸞舞於桂樹下、注第七卷に解釋す、李白が詩は即第七卷把酒問月詩也、

○茶歌　謝孟諫議簡惠茶、

詩林廣記前集八載、題作走筆謝孟諫議寄新茶、詩尾引藝苑雌黄云、玉川子有謝孟諫議惠茶歌、范希文亦有鬪茶歌、此二篇皆佳作也、殆未可以優劣論、然玉川子歌云、至尊之餘合王公、何事便到山人家、而希文云、北苑將期獻天子、林下雄豪先鬪美、若論先後之序、則玉川子之言差勝、注【孟諫議】萬姓統譜、孟簡字幾道平昌人、工詩尚節義、擧進士宏詞、連累官至諫議大夫、唐書列傳八十五有傳、

盧仝

日高丈五睡正濃、軍將扣門驚周公、（語子曰吾不復夢見周公、）口傳諫議送書信、白絹斜封三道印、

【日高―】盧仝は山人にて間多し、故に晏く起く、朝日高く昇ること一丈五尺ほどに至れども、睡正に濃にて猶未覺也、【軍將】は孟簡に屬したる軍の少將なるべし、來て盧仝が門を扣て仝が夢を驚かし覺したると也、周公は論語述而篇、吾不復夢見周公と云影を用て直に夢のことゝす、【口傳】は軍將口づから傳へ言也、孔安國尚書序云、濟南伏生年過九十、失其本經、口以傳授裁二十餘篇、【諫議―】孟簡より書信を送り致したると云つたへたる也、【白絹―】書翰に封したる形を云、白絹を以て斜めに封じて、上に三道の印を

阿房宮賦、綠雲擾々梳曉鬟也、【貪歡―】織女牽牛を悦て歡娛を貪り、終に帝の所に歸寧せず、於是天帝怒て罪を責て召歸し、却て夫家に嫁し來る時の舊路を踏て河東に還らしむ、禁じて常に行かしめず、但一歳に一たび相見を許して、七月七日にのみ橋邊に至て渡らしむる也、

別多會少知奈何、却憶從前歡
愛多、匆々萬事說不盡、玉龍已
駕隨義和、義和、義仲、和仲、掌日之官、河邊靈官催
曉發、令嚴不肯輕離別、便將淚
作雨滂沱、淚痕有盡愁無歇、

【別多―】一年唯一夕のみ河を渡る、別離の時常に多くして會合の時甚少れ也、二星の心不知奈何んかあらんや、却て昔を憶ふに、前かた同く居て少時も離れさりし時歡愛の多かりしことを思ふて、今の別れがちなるを歎く也、【匆々】俗にふた〱としてと云辭の如く、いそがはしき意也、字彙匆々猶切々也、禮祭義匆々諸其欲饗之也、又州里所建旂亦曰匆、州里建旂以聚民事貴速也、故凡急遽者率稱匆々、今俗乃于匆々中斜加一點而讀音聰、失眞甚矣、○顏氏家訓勉學篇云、世中書翰多稱匆々、相承如此不知所由、或有妄言此忽々殘缺耳、案說文匆者州里所建之旗也、象其柄及三游之形、所以趣民事、故忽遽者稱爲匆々、言ろは會遇匆々、平生欝結の襟懷を說き盡すことを不得也、【玉龍已―】天既に曙に及で日の出んとするを云、【義和】書經堯典乃命義和欽若昊天、曆象日月星辰敬授民時、分命義仲宅嵎夷曰暘谷、寅賓出日平秩東作、義和は日を掌るの官、此に假り設て云也、言は萬事猶未だ說き不盡に、はや日既に玉龍に駕して義和義仲を隨へて東方に出る也、河邊に事を司る靈官曉を催し告て、織女の駕を發して還んことを趣す、天帝の制令甚だ嚴峻なれども、猶眷戀踟躇して肯て離別を輕じ不得、便ち淚を墮すこと雨の滂沱と下るが如く也、滂沱小雅漸々之石篇、月離于畢、俾滂沱矣、字彙滂沱大雨也、【淚痕】淚の流て面上に痕ある也、面上の淚痕は盡ることありとも、別離の愁は終に歇るの期なからんと也、

北斗昏建用斗杓星指寅也、斗杓は北斗七星の尾の一星を杓と云、斗杓正月は寅を建す、二月は卯を指す、次第移て十二月に至て丑を建す、杓の所建を以て月を紀す、こゝに回らすと云は、六月に未を建たる杓回て申を建を云卽七月也、言は人間には始て桐の葉落ち、天上には蓐收の神七月の令を行て、斗杓回て申を建す時に至りたる也、【神官】天帝の令を奉行する神官也、假り設けて云也、【役靈鵲】靈鵲を驅せ集て役し使ひ、直に銀河の上をさしわたして、横に橋を作しむる也、今夕は天帝の孫女の渡られる時なりとて、預め道を治るの意也、靈鵲橋を作すの事、諸注皆淮南子烏鵲塡河而渡織女と云を引く、今世に行るゝ淮南子を檢するに偶〻不見、或は異本あるか、

河東美人天帝子、機杼年々勞玉指、織成雲霧紫綃衣、辛苦無歡容不理、

【河東美人】卽織女也、此四句及び下の數句皆述異記所載に據て作れり、銀河の東に美麗の女人あり、乃天帝の女子也、機杼は織具也、此女兒機杼を事としてやむことなく、年々勉て玉を刻めるが如き手指を勞する也、【織成—】綃字彙綺屬也、雲霧の紋の紫綃衣を織り成して、自ら辛苦を致し歡樂をなさず、容貌を理め粧ふ暇もなくて、只紝織をのみ事とする也、

帝憐獨居無與娛、河西嫁與牽牛夫、自從嫁後廢織紝、綠鬢雲鬟朝暮梳、貪歡不歸天帝怒、責歸却踏來時路、但令一歲一相見、七月七日橋邊渡、

【帝】天帝也、尙書說命夢帝賚予良弼と云帝字と義同し、天帝織女の獨り居て、唯機杼をのみ勉め相偕に歡娛するなきを憐て、河の西へ嫁せしめて牽牛夫の妻とす、織女河西に歸てより後織紝を廢して事とせず、止管に容つくりして、綠の鬢雲の鬟朝な夕なに梳り整て冶容をなせり、【織紝】字彙紝機縷也、或作織絍、絍與紝同繒帛之屬、禮記內則織紝組紃、【雲鬟】杜牧

○明張鼎思代醉篇云、述異記、天河之東有美麗女人、乃天帝之子機杼女工、年々勞役織成雲霧綃縑之衣、辛苦殊無歡悅、容貌不暇整理、天帝憐其獨處、嫁與河西牽牛之夫婿、自後竟廢織紝之功、貪歡不歸、帝怒責歸河東、但使一年一度與牽牛相會、古樂府迢々牽牛星、皎々河漢女、纖々擢素手、札々弄機杼、終日不成章、涕泣零如雨、河漢淸且淺、相去距幾許、盈盈一水間、脈々不得語、余按天孫織紝之星、世人乃爲此媟嫚之語、其爲不經甚矣、海上浮槎之客謂、見一丈夫牽牛飮河、見織女與以支機之石、今其石安在、君平之言亦寔言耳、荊楚歲時記黃姑者河鼓也、牽牛謂之河鼓、後人訛其聲爲黃姑、潘子直云、亦猶是桑落之語轉呼爲索郎耳、古樂府、東飛百勞西飛燕、黃姑織女時相見、李太白詩、黃姑織女星、相去不盈尺、李後主詩、迢々牽牛星、杳在河之陽、粲々黃姑女、耿々遙相望、則又誤以黃姑爲織女、鼓音訛而爲姑、姑字訛而爲女人可笑、桂陽成武丁有仙道謂其弟曰、七月七日織女當渡河暫詣牽牛、今人謂織女嫁牽牛者似始於此、張衡靈憲經云、牽牛織女七月七日相見、癸辛雜志渡河之說、洪景盧辨說最爲精當、蓋渡河乞巧之事、多出於詩人及世俗不根之論、何可盡據、

張文潜

人間一葉梧桐飄、蓐收行秋回斗杓、
神官召集役靈鵲、直渡銀
河橫作橋、

【人間】此詩天上の事を叙ふ、起句に時令を云ふには先づ天下所見の氣候を紀す、故に人間の二字を起句の首に置けり、人間に始て梧桐樹の一葉飄り落るを見るときに至る也、淮南子云、一葉落而天下知秋、【蓐收行秋】禮記月令、孟秋之月日在翼、昏建星中、旦畢中、其日庚辛其帝少皞、其神蓐收、注蓐收金官之臣、少皞氏之子該也、蓐收は孟秋を司る神也、【回斗杓】史記天官書云、北斗七星所謂旋璣玉衡以齊七政、杓攜龍角、衡殷南斗、魁枕參首、用昏建者杓、杓自華以西南、夜半建者衡、衡殷中州河濟之間、平旦建者魁、魁海岱以東北也、斗爲帝車、運于中央、臨制四鄉、分陰陽、建四時、均五行、移節度、定諸紀、注索隱曰、說文云杓斗柄、音匹遙反即招搖也、正義曰杓東北第七政也、言

面春風和、 此篇謂大丈夫生於世、當與天地同一體、無纖毫凝滯於胸中、用則金馬玉堂、不用則竹籬茅舍、稍容心於物、則非浩然之氣矣、終篇歌詠以富貴榮華、如好音之過耳、使貪名狥利者聞之、亦可以少警焉、

【浩々―】復た重て起語を言て我が所思を云、【玉堂】翰林を指て云也、蘇易簡宋淳化中拜翰林學士、上飛白書玉堂之署四字賜之曰、美卿居清華之地也、【金馬】三輔黃圖卷三云、金馬門宦者署、武帝時大宛馬以銅鑄像立署門、因以爲名、東方朔主父偃嚴安徐樂皆待詔金馬門、卽此、言ろは玉堂の署金馬の門、不知何の處にか在るや、我これを不希、但雲山石室の居高して嵯峨たる處、林岳の樂みあることを知るのみ、【嵯峨】山高貌、【低頭―】我願は頭を低れ勉然と勤て耕し耘て稼穡を事とせんと欲す、其田地の不多ことを不恨、時に面を仰て長く嘯て目を恣にすれば、宇宙廣大にして邊際なし、天何ぞ其れ如此多きや、【長嘯】楚辭臨深水而長嘯、【天何多】中庸二十六章、今夫天斯昭々之多、及其無窮也日月星辰繫焉、【請君―】君字汎く世間の人を謂ふ、專ら指す所なし、時人に請言ふ我を縱して一斗の酒に醉ふことを得せしめよ、酡顏の紅光面に入て醉發する時、春風の微和を扇くに向て歌咏して樂しまんと也、風舞雩詠じて歸らんと云ふ氣象あり、注【纖毫】纖は細微也、細微なる毛の末ほどもと云義也、【凝滯】物になづみ滯て不通也、漁父辭云、聖人不凝滯於物、【用則金―】時に遇て用らるゝ時は、金馬玉堂の地に身を處して進み仕ると也、此注本文の意に非ず、本文の下に就て熟く見るべし、【竹籬茅舍】村落農家の居也、竹を以籬とし茅を蔽ふ也、【浩然之氣】詳に孟子に見たり、其文甚長し故に此に不引、當に本書に就て考べし、【好音之過耳】おもしろき音を聞過たるが如し、聞了て迹なし、【使貪―】世間の譽名を貪り利に殉ふて厭ことなき者をして聞此詩しめば、少しく警め省るの意あらんと也、

○七夕歌 此歌善於叙事狀、

事文類聚前集十載、史記天官書織女天女孫也、焦林大斗記、天河之西有星、煌々與參俱出、謂之牽牛、天河之東有星、微々在氐之下、謂之織女、崔氏四民月令、七月初七其夜灑掃於庭、露施几筵、設酒脯時果、散香粉於河鼓織女、二星神當會、守夜者咸懷私願、或云、見天漢中有奕々正白氣、有光曜五色、以此爲徵應、

き人と云意を云へり、【西山】首陽山也、夷齊采薇歌ニ曰、登彼西山兮采其薇、

丈夫犖々不可羈、有身何用自滅磨、吾觀聖賢心、自樂豈有他、蒼生如命窮、吾道成蹉跎、直須爲弔天下人、何必嫌恨傷丘軻、

【丈夫】注第二卷離別詩に見たり、【犖々】說文超絕也、史記二十七天官書云、此其犖々大者、若至委曲小變不可勝道、索隱曰犖音力卓反、犖々事之分明也、○漢書張東之傳云、卓犖奇材、註卓犖有辨材也、犖々は磊々落々など云意也、豁達にして物に拘束せられず、萬物の表に超絕するを云、大丈夫たる者は常に犖々と物表に超絕して、羈係せらるゝことなかるべし、此身を以て何ぞ自ら磨滅しすつることをせんや、【吾觀――】吾れ聖人を窺ひ觀るに、只道を以て自樂むのみ也、論語に孔子は只樂むと云ひ、又孔子も自ら言ふ曲肱而枕之樂亦在其中矣、又顏淵は一簞の食一瓢の飲より外はなきまで窶けれども、其樂を不改、聖賢の心は自樂より外豈他あらんや、【蒼生】書經益稷云、蒼生萬邦、注蒼生者蒼々然而生、視遠之義也、晉書列傳四十九謝安傳云、安石不肯出、將如蒼生何、蒼生は萬民を指して云、【蹉跎】文選西京賦云、鯨魚失流而蹉跎、注善曰、楚辭曰驥垂兩耳中坂蹉跎、廣雅曰、蹉跎失足也、言は天下の蒼生如し天命窮困して聖人至治の澤を被ることを不得、吾道時に行るゝことなくば、直に是天下の人の不幸なるを弔すべし、吾道の蹉跎と足を失して行れざるは天下の愁也、何ぞ必ず道の不行を嫌恨すること、孔丘孟軻の上にのみ止らんや、只道の天下に行れざるを傷むべし、孔孟の時を得ざるとて其人を傷むは、傷むところ少しき也、屈原夷齊は何ぞ一己身の不遇なるを恨て枉て死し空く餓て自ら磨滅するやと也、

浩々歌、天地萬物如吾何、玉堂金馬在何處、雲山石室高嵯峨、低頭欲耕地雖少、仰面長嘯天何多、請君醉我一斗酒、紅光入

て人をして邀へ請ひ、子陵先づ己れが家に經過せよと云しことよと也、注即本傳の文を引也、本傳に云齊の國より言す者あり、一りの男子羊裘を披て澤中に釣ると、光武聞て嚴光なるべしとて、安車玄纁を備て使を遣して聘す三たび反して後に至りて北軍に舍す、即ち牀褥を給し、大官朝夕に膳を進めて饗養す、司徒の官侯覇字は君房と云者、子陵と素より舊識なり、故に書を遣して曰聞先生至、欲即詣造迫於典司、是以不獲、願因日暮自屈語言、其舍へ行て對面すべけれども、官の事忙迫なる故に行くことを不獲、暮に及で我が方へ屈し來て話說せよと云ひやりたれば、光不答して札を投じ、口づから使者に云ひ授けて曰、君房足下位至鼎足甚善、仁を懷き義を輔くれば天下の人悦ぶ、阿り諛て上の旨にのみ順て犯し諫めざれば、竟に身を亡し刑に遇て要領斷絕するぞと云、侯覇書を得て封して光武に奏す、帝笑て曰狂奴のもとからのかたぎなると云へると也、

浩々歌、天地萬物如吾何、屈原枉死汨羅水、（楚屈原遭上官之讒、投汨羅江而死、）夷齊空餓西山坡、（史記武王伐紂、伯夷叔齊扣馬諫不聽、義不食周粟、餓死于首陽山、）

【浩々—】重て言て歌の節奏に合する也、意上の義と同じ、屈原枉死、楚の屈原身を沈め天年を不終して死す、故に枉て死すと云、史記列傳二十四屈原者名平楚之同姓也、爲楚懷王左徒、博聞强志明於治亂、嫻於辭令、與王圖議國事以出號令、王甚任之、上官大夫與之同列爭寵而心害其能、因讒之、王怒而疏屈平、懷王死頃襄王立、令尹子蘭使上官大夫短屈原於頃襄王、頃襄王怒而遷之、屈原至於江濱、被髮行吟澤畔、乃作懷沙賦、遂投汨羅以死、注應劭曰、汨水在羅、故曰汨羅也、索隱曰地理志長沙有羅縣、羅子之所徙、荊州記羅縣北帶汨水、音覓、正義曰、故羅縣城在岳州湘陰縣東北六十里、春秋時羅子國秦置長沙郡、按縣北有汨水及屈原廟、【伯夷叔齊】が事、史記六十一に見たり、已に首卷貪泉の詩に出づ、此二句枉てと云ひ空くと云ふ、是屈原夷齊を不足とするの辭也、屈原は讒せられたるを愁て水に投ず、死ぬまじきことを枉て死せり、夷齊は周の粟を食むまじきとてせばきことを云て、空く西山の坡に饑て死す、二人とも胸次の狭

師行師尙父左杖黃鉞、右把白旄以誓曰、蒼兕蒼兕總爾衆庶與爾舟楫、後至者斬、遂至明津、諸侯不期而會者八百諸侯、皆曰紂可伐也、武王曰未可、還師、居二年、太公彊之勸武王、武王於是遂行誓牧野、伐商紂、紂師敗績、遂追斬紂、武王已平商而王天下、封師尙父於齊營丘、

又不見子陵橫足加帝腹、帝不敢動、豈敢訶、皇天爲忙逼、星宿相擊摩、嚴光傳、光字子陵、少與光武同遊學、及光武即位、乃變姓名、被羊裘釣澤中、光武使人物色、訪得之、引光入內道舊故、因共偃臥、光以足加帝腹上、明日太史奏客星犯帝座甚急、帝笑曰朕故人嚴子陵共臥耳、可憐相府癡、遨請先經過、光舍於北軍、司徒侯霸與光素舊、遣使遨請、光得書不答、口授使者曰、君房足下懷仁輔義天下悅、阿諛順旨要領絕、霸奏之、帝笑曰狂奴故態也、

【又不見】上には仕て天下を救て大に功ある二人を云、此には徼とも不仕、富貴冠冕を視ること土芥の如くする子陵を引て一種の豪傑を證す、故に端を更て又不見やと云也、【子陵】後漢書列傳七十三に載す、此集に所引即ち後漢書の傳也、故に別に引載せず、子陵少し時光武と同く游學す、其時は光武未だ位を不得庶人にてありしが、王莽を亡して皇帝の位に即けり、子陵定て己れを徵れんと思ひ、姓名を變じて迹を滅し、羊の裘を被て澤中に釣を垂て隱れ居たり、光武子陵を得んことを欲して人を遣し、子陵か形容顏貌の物色を云ひ屬て、其ごとくなる人品の者を尋ね求めしむ、竟に訪ひ得て子陵に遇たり、乃子陵を引て大內に召入れ、共に舊故の事を談じて因て衾を共にして偃臥す、子陵光武天子の貴きことを不思、惟昔日同く遊學せし時の如く心やすく思ふて、自らの足を以て光武の腹上に加へ置たり、其明日天文を司る大史奏して曰、昨夜客星ありて帝座を犯すこと甚急迫なりと云ふ、帝笑て曰朕が故人嚴子陵我と共に臥たり、定て其應なるべしと云へり、此句言は子陵足を橫へて光武帝の腹上に加へたれども帝敢て驚動せず、豈に復た敢て訶し去らしめんや、然れども皇天はこれが爲に變じて忙卒に逼迫し、星宿相擊ち摩ると也、【忙】韻會心迫也、注【物色】本傳注云、以其形貌求之、【可憐――】相府は侯霸を指て云、言は可憐相府侯霸が愚癡にして子陵が爲人を不知、常人の如くに思

貨志云、武帝初國家亡事、都鄙倉廩畜滿、大倉之粟陳々相因、【不用—】人若し我を不用ときは、獨り其身を善して隱居し、枕を拂て山阿の棲に高臥す、曾て求て仕んとすることなし、【山阿】文選十九首古詩、冉々孤生竹、結根泰山阿、注阿曲也くまと訓す、

君不見渭川漁父一竿竹、（呂尚以漁竿釣周西伯、西伯獵果遇太公於渭之陽、載之立以爲師、）
莘野耕叟數畝禾、（伊尹耕於有莘之野、而樂堯舜之道、湯使人以幣聘之、）
喜來起作商家霖、（說命、若歲大旱用汝作霖雨、）
怒後便把周王戈、（史記太公佐武王東伐、左杖黃鉞右把白旄以誓師、遂至孟津、諸侯不期而會者八百國、）

【渭川漁父】太公望也、渭川の漁父呂尚、其未だ遇に不遭ときは、只一竿の竹のみ身に隨て他の物有ることなし、史記三十二齊世家、太公望呂尚者東海上人也、本姓姜氏從其封姓、故曰呂尚、呂尚蓋嘗窮困年老矣、以漁釣奸周西伯、西伯將出獵卜之曰、所獲非龍非彲、非虎非羆、所獲霸王之輔、於是周西伯獵、果遇太公於渭之陽、與語大說、曰自吾先君太公曰、當有聖人適周周以興、子眞是邪、吾太公望子久矣、故號之曰太公望、載與俱歸立爲師、【莘野耕叟】伊尹也、孟子萬章篇云、伊尹耕於有莘之野、而樂堯舜之道焉、非其義也非其道也、祿之以天下弗顧也、繫馬千駟弗視也、湯使人以幣聘之、囂々然曰、我何以湯之幣聘爲哉、我豈若處畎畝之中由是以樂堯舜之道哉、湯三使往聘之、既而幡然改曰、與我處畎畝之中由是以樂堯舜之道、吾豈若使是君爲堯舜之君哉、吾豈若使是民爲堯舜之民哉、【喜來—】二の句に應ず、商家は殷の世と云義、湯王を指す【霖】傅說が事を借用、伊尹一たび聘禮に應じ喜て湯王に就くとき、殷の世を輔て萬民に恩澤を流すこと、旱するときの霖雨の如くなりたると也、書經說命云、夢帝賚予良弼、乃審厥象、俾以形旁求于天下、說築傅嵓之野、惟肖、爰立爲相、王置諸左右、命之曰、若濟巨川用汝作舟楫、若歲大旱用汝作霖雨、注霖三日雨、隱九年左傳凡雨自三日已往爲霖、【怒後—】起句に應ず、太公武王を佐け、一たび殷の無道を怒て後周王の戈を把て紂を誅し、武王の天下を定めたる也、史記齊世家云、文王崩武王即位、九年欲修文王業東伐以觀諸侯集否、

る時は、短檠を提挈て案の前に當りて燈を挑げ、書を看て學を勵ます、曉に到れども那ぞ能く眠に就くことをせんやと也、

一朝富貴還自恣、長檠高張照珠翠、吁嗟世事無不然、墻角君看短檠棄、

【一朝―】已に策に對て試に應じ擢て用られ富貴になるときは、嚮の苦學を棄て心を不用、還て自ら放恣にして宴樂を貪り、長檠を高く張て珠翠の華堂を照し奢をなす也、【吁嗟―】始あれども終なきこと、凡その世事皆然り、當時親近せし短檠置て用ることなく墻角の下に棄らる、如此なるは學問皆仕宦の捷徑として、己を修め人を治る爲にせず、最も戒とすべきことゝ云意也、

○浩々歌

楚辭九歌、與女沐兮咸池、晞女髮兮陽之阿、望媺人兮未來、臨風怳兮浩歌、浩歌の字出于此、字彙浩々廣大貌、此篇は大丈夫胸次曠達、世間の貴賤得失を以て心に不經、日月を扃牖とし、八荒を庭衢とするの氣象浩々然として宇宙に充塞して後、此歌を朗誦することを得、故に浩々を以て歌に名く、古文大全云、此篇謂大丈夫當以萬物爲一體、若富貴榮華如好音過耳而已矣、

馬子才

浩浩歌、天地萬物如吾何、用之解帶食大倉、不用拂枕歸山阿、

此三句一篇の主意、大丈夫曠達浩然の氣歌咏の間に形る、故に浩々として其志を歌ふ、天地萬物それ吾を如んかせんや、吾をして富貴ならしめんか吾竟に不淫、吾をして貧賤ならしめんか堅く執て志を不易、利を見ても不貪、害を見て苟も不避、物の爲に竟に化せられず、天地萬物それ如何ぞ吾を役せん、論語子罕篇、天之未喪斯文也、匡人其如予何、【用之解―】人若し擧て用るときは、爲に天下を善くして位に居祿を食て、大倉の粟を受く、大倉は官倉也、前漢書食

大學儒生東魯客、（退之曾爲博士、乃東魯人、）二十
辭家來射策、夜書細字綴語言、
兩目眵昏頭雪白、（眵尺之反）此時提挈
當案前、看書到曉那能眠、

【大學儒生】大學に入て儒學を爲諸生也、【東魯客】魯は聖人の國遺俗流風尙存して儒を學ぶ諸生多し、故に後世儒生を謂ふには魯を稱す、史記に叔孫通が、願徵魯諸生與臣弟子共起朝儀と云が如し、韓退之泛く學者を指して言ふに、東魯の客と云は、諸生の多き處なる故に假り設て云へる也、(注)に退之自ら言ふと云は非也、退之乃東魯人と云最も非也、魯は山東兗州の域也、韓愈は河南南陽の人也、東魯の人に非ず、退之自言ふと云說謬也、只泛く學問をする書生となして可看、【二十辭家】年二十にして鄉貢に應じ、家を辭して京に赴也、【射策】前漢書列傳四十八蕭望之傳、望之以射策甲科爲郎、注師古曰、射策者謂爲難問疑義書之於策、量其大小署爲甲乙之科、列而置之不使彰顯、有欲射者隨其所取得而釋之、以知優劣、射之言投射也、對策顯問以政事經義、令各對之、而觀其文辭定高下也、射策と云は士を試るに疑難の事を策に書して、策を封じて何事と云ことを顯し知らしめず、これを案の上に並べ置て意まかせに取らしむ、士其策を手に信て取て所問の疑義を釋して對ふるを射策と云、即今の探り題にて詩を作ると同意也、又對策と云は、或は經義或は政事を擧て題とし、衆の士に各〻對へしめて其文の優劣を觀て甲乙を定る也、たとへば定四時別九州聖功孰大、又九功九法爲國何先、又曾參何以不列四科など〻云類の如し、此題をうけて其義を釋して對るを對策と云、【夜書―】試に應ずる文を作るとて、夜細字を書して語言を綴り屬する也、宋國朝事實云、唐制禮部試擧人、夜以三鼓爲限、本朝率用白晝不許繼燭、【兩目―】意を盡し力を出して夜も不寐、故に兩の目には眵生して眼昏曚し、心力疲れて頭髮白に變ずると也、眵目汁凝也、二十歲の擧人頭雪の如く白と云は、文を作るに精神を勞するに依て髮白くなるを云也、周興嗣千字文を韻語となして編む時、一夜に髮盡く白くなるの類也、【此時―】對策の文を作て試に應ぜんとす

ることなく、水は冷々とすさまじく流る也、【經年蝴蝶―】年を歴て蝴蝶の遊ぶを見れども飛で去ことなし、桃花はいつも紅にして不散、曾て子を結で成ることを不見也、其常に在て改ることなきと云にて、圖中の景なること不言して知るゝ也、【一片―】一片の石を畫きたる處もあり、又數株の松を寫したる景致もある也、【遠又―】其遠きと見ゆる處は色を布くこと淡く、近き景を寫には草樹の色濃に畫き、遠近の景を淡濃の塗抹を以て、氣象をよく寫したると也、【不出門―】我家の門庭を三五歩も不出に、江山の千萬里も相疊りたる景致を觀盡したると也、畫圖を詠ずること甚だ分明にして、歴々と繪を見るが如くなれども、格法甚だ淺露にて溫雅の氣象すくなし、詩を學ぶ者宜く意を著て玩ひ看べし、

○短檠歌　公所以詠幽閨之思者如此

本集五載之、短檠を咏じて終に人の學問始ありて終のありがたきを歎ずる也、題注に幽閨の思ひを咏ずると云非也、是短檠の用を云て起句の便にして且つ光ありと云に應ず、重きこと此に不在して却て一朝富貴の句に在り、題注誤れり、

韓退之

長檠八尺空自長、短檠二尺便且光、黃簾綠幕朱戸閉、風露氣入秋堂涼、裁衣寄遠淚眼暗、搔頭頻挑移近床、

【長檠―】長檠は其高さ八尺、空く自ら長して用るに便ならず、短檠は高さ二尺平生用之利便にして且燈火の光明也、起句短檠の體制を云こと簡にして而も盡せり、【黃簾―】以下の四句短檠の用を云、閨女の居黃簾を垂れ綠幕を下し、朱飾の戸既に閉る時、晩來風露の冷氣稍〻秋節を報じ堂中に入て凉し、戍婦は已に刀尺を催し、征夫の衣を裁して遠に寄んとす、只相思の涙眼に滿て視こと暗し、此時頭を搔て愁悶し、頻に挑て近く床角に移しよすると也、【搔頭】西京雜記に云、武帝過李夫人就取玉簪搔頭、【頻挑】本注一作挑燈、

山水を畫たる繪を觀て、畫中に所有の景象を賦して、畫の妙を稱る也、

吳融

才子傳九、吳融字子華、山陰人、龍紀元年李瀚榜及進士第、韋昭度討蜀表掌書記、坐累去官流浪荊南、久之召爲左補闕、爲翰林學士、拜中書舍人、天復元年元旦東內反正、既御樓、融最先至、上命於前座跪草十數詔、簡[]精當曾不頃刻皆中旨、大加賞激進戶部侍郎、

良工善得丹青理、輒向茅茨畫山水、（以茅茨蓋屋）地角移來方寸間、天涯寫在筆鋒裏、

【良工】は上手也、孟子滕文公下篇云、趙簡子使王良與嬖奚乘、一朝而獲十禽、嬖奚反命曰天下之良工也、【丹青】畫を寫すは丹を以てし青を以てす、故に畫を謂て丹青と云也、楊子法言吾子篇云、或問屈原智乎、曰如玉如瑩爰變丹青、如其智、【茅茨】は茅茨を以て屋を葺たる家也、茅ちがや也、茨字彙茅茨、又以茅蓋屋曰茨、茨も茅と同じ草也、史記六秦本紀二世曰吾聞之韓子、曰堯舜采椽不刮茅茨不剪、漢王褒聖主得賢臣頌、生於窮巷之中長於蓬茨之下、言は畫手の良工善く丹青の道理をば會得し、茅茨の舍裡に向つて山水の象を畫き成したると也、【地角】山川の方隅なり、勝景の地角移し來て紙上方寸の間に縮しめ寫し、天涯萬里の遠勢をば筆鋒の裏に納れおきたると也、【天涯】は相去るの間遠して、望之遙に天の涯を見盡す處を云也、十九首古詩、相去萬餘里、各在天一涯、

日不落兮月長生、雲片々兮水冷々、經年蝴蝶飛不去、累歲桃花結不成、一片石數株松、遠又淡近又濃、（謂遠近之勢惟在於濃淡之間最妙）不出門庭三五步、觀盡江山千萬重、

【日不―】圖面に所見を叙ぶ、日は常に西山に傾てあれども竟に不落、月は東より生ずるよと見れども常に生處に在て升り移るを不見也、雲は片々と度て消

深衣なり、潜確類書八十八云、詩云麻衣如雪、如雪鮮潔也、麻衣深衣也、【一々重瞳】重瞳は天子の眼目を稱して重瞳と云、史記項羽本紀賛云、吾聞之周生曰舜目蓋重瞳子、又聞項羽亦重瞳子、羽豈其苗裔邪、重瞳を遍く回して衆多の貢士所上の科文を一々に御覧あつて、親ら品を鑒み別て甲乙の科を定め玉ふと也、【孤寒得路】孤陋寒賤の士、升進の路を得て各其所能を呈するに、皆容られて君恩を荷ふ、故に聚首相會しては多士皆言ふ、君恩の爲に臣が節を盡して忠を上に致んことを希ふと也、

小臣蹤迹本塵泥、登科曾賦御前題、屈指方經五六載、如今已上青雲梯、（杜携手升玉階、共登青雲梯、）位列諫官無一語、自愧將何報明主、應制非才但涙垂、强作狂歌歌舜禹、

【小臣】禹偁自ら稱す、七徳舞云、元和小臣白居易、【蹤跡—】我が身の蹤跡を云へば、本是塵泥の内より長じたり、一旦科擧に登り曾て御前の出題に應じて賦を作り程試に與かりき、今指を屈して年紀を算へみれば、方に五六歳を經過たると也、【如今已—】如今は已に聖恩を蒙て擢擧られて青雲の梯に上り、九重の上に侍列すると也、天子の宮を天の紫微垣にたとふ、故に禁中に上るを青雲の梯に上ると云也、宋謝靈運登石門最高頂詩云、共登青雲梯、【位列諫官】本傳太宗擢右拾遺直史館拜左司諫知制誥、右拾遺は天子の遺闕を告す諫官也、自ら謙して云ふ、我天子に諫を告ふす官に在ながら、曾て一語も聖德を助る言を上らずして官を曠す、自ら愧づ何を以てか明主に恩を報んやと也、【明主】唐孟浩然詩、不才明主棄、【應制—】天子の制勅に應じて文章を作らんとするに、其才に非ずして能することとなし、但涙を垂て自ら恨む、乃强て此狂歌を作爲して、舜禹の如き聖代の盛事を歌頌すると也、【舜禹】太宗の朝を舜禹の聖代に比して云也、即太宗親ら貢士を試み玉ふの盛事を歌に作て頌すると云義也、

○畫山水歌

賓儼が傳の文也、儼字望之、傳見宋史列傳二十二三、【盧多遜】周進士宋初爲翰林學士參知政事、傳見宋史列傳二十三、【楊徽之】字仲猷初仕周、宋太宗聞其名召見、傳見宋史列傳五十五、【貢多士】郡國より多くの才士を歳々に貢せしめて、都に召し聚る也、書經多士篇、王若曰爾殷遺多士、詩大雅文王篇濟々多士、文王以寧、【大張一網―】網を張て魚鳥を捕るが如く、天下の英才を不漏拔き擧らるゝを云なり、輔按に、此句の意韓文の中より得來るか、韓文送溫處士赴河陽軍序云、洛之北崖曰石生、其南涯曰溫生、大夫烏公以鈇鉞鎭河陽之三月、以石生爲才、以禮爲羅羅而致之幕下、未數月也、以溫生爲才、於是以石生爲媒、以禮爲羅、又羅而致之幕下、【羣英】衆の英才なる人を云、魏劉邵人物志云、草之精秀者爲英、獸之特羣者爲雄、故人之文武茂異取名於此、是故聰明秀出謂之英、

聖情孜々終不倦、日斜猶御金鑾殿、宮柳低垂三月烟、爐香飛入千人硯、麻衣皎々光如雪、一一重瞳親鑒別、（史記舜目蓋重瞳子）孤寒得路荷君恩、聚首皆言盡臣節、

太宗親ら貢士を試み玉ふ狀を云、【聖情】聖は天子を稱するの辭也、太宗情を盡し孜々と勉て文章をえらび定て、倦怠の色なきと也、【孜々】書益稷篇云、予思日孜々、注孜々者勉力不怠之謂、【日斜―】早朝より出御なつて、日の斜に傾くまで猶金鑾殿に御坐し玉ふ也、【金鑾殿】は玄宗李白を召し見處、長安に在り、宋は汴に都す、此に金鑾殿と云は唐を借て云か、或は汴都にも亦金鑾殿を造れるか、未詳、【宮柳―】二句時景を云、宮庭に植ゑたる柳は枝たれ低て三月の綠り烟を籠め、御爐の香烟は飛で貢士千人の硯中に入ると也、【麻衣―】御前の題を賦して殿庭に列する貢士の衣服は、皎々と潔きと也、杜氏通典、縉紳雖位極人臣、不世進士者不以爲美、其推重謂之白衣卿相、以白衣之士即卿相之資也、と云を以て觀れば、科擧の進士は白麻の服を著ること可知、又按に麻衣は即

復黜、宣和七年沈元用榜正奏名殿試至八百五人、又云開寶六年因徐士廉伐鼓訟不公、帝御講武殿覆試、御試自此始、

王元之

宋史列傳五十二、王禹偁字元之鉅野人、九歲能文、畢士安見而器之、擢進士、太宗聞其名召試、擢右拾遺直史館、賜緋、後拜左司諫知制誥、未幾判大理寺、至道元年爲翰林學士知審官院、兼通進銀臺封駁司、眞宗卽位召還復知制誥、時宰相張齊賢李沆不協、意禹偁搆之、又出知黃州、乃作三黜賦以見志、卒年四十八、禹偁詞學敏贍嘗云、吾若生元和時、從李絳崔羣間斯無愧矣、其爲文著書多涉規諷、以是不容、

天王出震寰宇淸、（易帝出乎震、）奎星燦燦昭文明、（宋竇儼善推步星曆、與盧多遜楊徽之同在諫垣、謂二公曰、丁卯歲五星當聚奎、奎主文明、自此天下始太平、二拾遺必見之、）詔令郡國貢多士、大張一綱羅羣英、

【天王】左傳桓公十五年春、天王使家父來求車、【出震】易說卦傳五章云、帝出乎震、齊乎巽、注帝者天之主宰、【寰宇】事文類聚雜集地理辨、寰內寰古縣字、天子封畿內縣、【宇】尸子云、天地四方曰宇、寰宇は天下と云義也、此句は宋の太祖の德を擧て、宋朝文明の由て興る初を云ふ、天帝萬物を主宰し、物を始ること東方の震より出ると均く、宋の太祖五代の周より起て、亂を撥ひ民を救て天下を一統し、宋の世を開て天下始て淸平になりたると也、【奎星】史記天官書奎曰封豕、正義奎苦圭反、十六星婁三星爲降婁、於辰在戌魯之分野、奎天之府庫、占以明爲吉、五星犯奎臣主共德權臣擅命、不可禁者、【燦々】音粲明也、【昭文明】易乾文言云、見龍在田天下文明、程傳龍德見於地上則天下見其文明之化也、言は太祖已に天下の亂を撥て國を立るの初、奎星燦々と明に聚て天下文明の精華を露し、天より斯文を啓き興すの兆をしめさるゝと也、綱鑑宋太祖乾德五年丁卯三月、五星聚奎、初周顯德中、竇儼與盧多遜楊徽之同爲諫官、儼善推步星曆、嘗曰、丁卯歲五星聚奎、自此天下始太平、二拾遺見之儼不與也、注月令云、季春之月日在奎、奎宿在戌降婁之次、聚奎如聯珠、奎主文章、此天下文明之象、【注此

也、【大原陳留榮陽】皆河南道に屬す、【奔竄】にげかくるゝ也、【受其節制】其は安祿山を指す、節は麾節也、制は制令也、【食盡力屈】顏杲卿起兵纔八日、守備未完、史思明引兵至城下、杲卿晝夜拒戰、糧盡矢竭城陷、賊縱兵殺萬餘人、執杲卿、顏氏死者三十餘人、【力士逢其欲】高力士媚び事て玄宗意の欲する所を逆へて助け成す也、【貴妃迷其情】楊貴妃寵を專にして玄宗の情を迷はす也、二其字玄宗を指す、【初年布衾―】貴妃庶人にて家に處時を云、【轉而―】貴妃と爲て後を云也、【以祿山爲養子】天寶六載祿山得出入禁中、因請爲貴妃兒、上與貴妃共坐、祿山先拜貴妃、上問何故、對曰、胡人先母而後父、上悅、【穢醜稔聞】天寶十載祿山生日、上及貴妃賜衣服寶器酒饌甚厚、後三日召祿山入禁中、貴妃以錦繡爲大襁褓裹祿山、使宮人以綵輿舁之、上聞後宮喧笑、問其故、左右以貴妃三日洗祿山兒對、上自往觀之喜、賜貴妃洗兒金銀錢、復厚賜祿山、盡歡而罷、自是祿山出入宮掖不禁、或與貴妃對食、或通宵不出、頗有醜聲聞於外、上亦不疑也、【出范陽】天寶十三載三月安祿山歸范陽、方辭歸上解御衣以賜之祿山驚喜、恐楊國忠奏留之、疾驅出關乘船而下、晝夜兼行日數百里、明年十一月遂反、【兩京】長安洛陽二京也【生靈】萬民を指す、弔古戰場文云、荼毒生靈萬里朱殷、

○觀聖上親試貢士歌

聖上は宋の太宗を指す、天子親ら國々貢擧する士の文を試みて、甲乙の科を定め玉ふを觀て、其狀を紀するの歌也、【貢士】禮記射義篇云、古者天子之制諸侯歲獻貢士於天子、天子試之射宮、○事文類聚前集二十六仕進部云、唐貢士之科有秀才、有明經、有進士、有明法、有書、有算、每歲仲冬郡縣館監課試其成者、長史會屬僚、設賓主、陳俎豆、備管絃、牲用少牢、行鄉飲酒禮、歌鹿鳴之詩、召耆艾敘少長而觀焉、既餞而與計偕、其不在館學而得者謂之鄉貢、又云進士科始隋大業中、盛貞觀永徽之際、縉紳雖位極人臣不世進士者不以爲美、其推重謂之白衣鄉相、以白衣之士郎鄉相之資也、重之如此、又云國初每歲放榜取士極少、乃安德裕作魁日九人而已、蓋天下未混一也、至太宗朝浸多、所得東南之秀、其後又別立分數考校五路擧人、熙寧二年廷試罷三題專以策取士、非雜犯不

徹、謂二祿山未一レ平、兩京未レ復也、

【牀々―】こゝもかしこも牀ことに屋漏滴り、淋漓として乾ける處なし、雨脚の盛なること麻の如くに降て未斷絕、屋漏のやむべきやうもなき也、【自經―】杜子美喪亂を歷てより以來、常に心の憂多くして安き時なし、故に尋常さへ睡眠すること少れなり、況や此長き秋の夜に、牀上はこゝもかしこも沾濕ふて臥すべき處なければ、何に由てか一夜を徹し明すべきやと也、徹通也達也、宵より曉に至るまでを徹すと云、

安得二廣廈千萬間一、大庇二天下寒士一俱歡顏、風雨不レ動安如レ山、亂而思レ治、臣子愛レ君之素心也、安得二天下平定一、庇三覆生靈一使レ無二震風凌雨之虞一、故曰不レ動安如レ山也、嗚呼何時眼前突兀見二此屋一、吾廬獨破受レ凍死亦足、

此五句は吾が屋破れ牀濕て窮困甚きに因て、廣く天下の士民窮する者多きを想ひ及ぼし、周く救はんことを思へる也、言は吾が屋吾か室已に如レ此、天下豈に吾が窮の如なる者少からんや、安ぞ廣廈の千萬間なるを得て、天下寒饑の士を庇ひ覆ふて各其所を得せしめ、皆歡喜の顏色をなし、烈風暴雨にも不レ動、安きこと泰山の如くなることを得んや、此れ吾が仰ぎ望て所レ希の願也、嗚呼何の時にか願の如く突兀と高大なる廣廈を起て、眼前に其屋宇を見んや、若然らば則吾が廬は獨破れて身凍死を受くとも、願に於て亦足れり、叉奚をか悔んやと也、○本集注趙曰、白樂天詩、爭得二大裘長萬丈一、與レ君都蓋二洛陽城一、然近二乎戲語一、豈有二萬丈之裘一乎、若二公言一千萬間之廣廈、自有二深旨一、○碧溪詩話云、孟子七篇論二君與一レ民者居レ半、其欲レ得レ君蓋以レ安レ民也、觀二杜陵詩一云、窮年憂二黎元一、嘆息腸內熱、又云誰能扣二沾門一、下レ令減二征賦一、寄二栢學士一云、幾時高議排二金門一、長使三蒼生有二環堵一、茅屋爲二秋風一所レ破歌、寧令三吾廬獨破受二凍死一亦足、而志在三大庇二天下寒士一、其仁心廣大異二夫求レ穴之螻蟻輩一、眞得二孟子之所一レ存矣、

注【八月陰中】秋三月陰に屬す、八月は七九の間に居す陰中也、【肅殺】しゞめからす也、歐陽修秋聲賦、夫秋刑官也、於レ時爲レ陰又兵象也、常以二肅殺一而爲レ心、【祿山】が事前に詳也、【中外】關中關外也、又朝廷藩鎭

ならざるを欺て、忍で暴をなし、面を對しながら畏ることなく盜賊をなす也、【忍】は史記吳起が傳に、起之爲ㇾ人猜忍人也と云忍の字の意也、むごきことを耐へ忍て爲を云、【對面】は俗にみしりごしにと云辭と同じ【公然】は忌み憚ることなくふるまふを云也、【入竹去】我が屋上より吹墜ちたる茅を抱き取て、竹林の陰へ入り去と也、鍾伯敬云入ㇾ竹妙々、【脣燋―】杜甫此盜を見て叫呼せんと欲すれども、脣焦れ口燥て呼び號ぶこともなり難きと也、

歸來倚ㇾ杖自歎息、俄頃風定雲墨色、巡遠翟擣ニ其心腹一賊勢漸衰、尤風定也、雲喩ニ禮樂法度一如ニ墨色不明一、秋天漠漠向ㇾ昏黑、布衾多年冷如ㇾ鐵、嬌兒惡臥踏ㇾ裏裂、天子以ㇾ義理ニ天下一、今也漠然不ㇾ明、又有ニ力士逢ニ其欲一、貴妃迷ニ其情一、初年布衾之儉轉而爲ニ錦繡之奢一、置而不ㇾ用、貴妃如ニ嬌兒安ㇾ寢、嘗以ニ祿山一爲ニ養子一、出ニ入官掖一不ㇾ禁、穢醜稔聞而明皇不ㇾ悟、祿山出ニ范陽一約ニ貴妃一爲ニ內應一、豈非ニ踏ㇾ裏裂一乎、

【歸來―】上の文には外に出て屋茅の飄揚するを見ることを云、歸來の句以下は室に歸て所ㇾ處を云、暴風茅を卷て飄擧し、羣童落茅を抱て盜將ち去れども力能く制禦することなし、故に歸來て杖に倚りすがりて自ら歎息を興し、奈何んともし不ㇾ得也、【俄頃】しばらくの間と云義也、俄頃に風は定りたれども雲猶凝て不ニ消散一黑色にして暝暗也、【漠々】は雲聚貌、風は定たれども雲猶黑く、秋天漠々として漸く昏黑に向て日の暮るゝ也、【布衾―】日も暮てあるほどに、牀に就て衾を擁して臥んとすれば、多年被服するに因て、垢膩に染みけかれて冷なること鐵に觸るが如しと也、【嬌兒】俗にわやくものと云兒也、嬌矜してしとやかになきを云、【惡臥】安寢せずいぎたなきを云、譚元春云、惡臥盡ニ小兒睡性一【踏裏裂】衾の裏を踏て破裂したる也、多年の故衾垢づきて煖ならざるのみに非ず、又嬌兒がいねわるく臥して裏までを破り裂きたると也、

牀々屋漏無ニ乾處一、雨脚如ㇾ麻未ニ斷絕一、牀者人所ニ卽以爲ㇾ安、喩ニ四方之安居者一、今皆陷ニ於賊一、是屋漏無ニ乾處一、變亂未ㇾ定如ニ雨脚未ニ斷絕一、自ㇾ經ニ喪亂一少ニ睡眠一、長夜沾濕何由

艸堂補注の僞蘇注の說、句々字々皆比當す、支離破碎固に可笑、今一二を擧て言んに、此注八月の句を解して云、八月は陰中也、陰以肅殺爲事、謂祿山起兵漁陽、又脣燋口燥呼不得の句を解して云、守義之臣如三顏巡遠輩、食盡力屈不能救、又俄頃風定雲黑色の句を釋して云、賊勢漸衰尤風定也、雲喩禮樂法度、如黑色不明と云の類、附會牽合いかにぞや、又僞蘇注南村羣童欺我老無力の句を解して云、南明也、村鄙也、童無知也、明朝鄙野無知之輩云云、是れ何等の注解ぞや、如此に詩を解せば天下の詩皆比を以て說ことを得べし、按に此詩杜公大風茅屋を破を見て其實事を敍す賦也、但結句に至ては賦にして興也、今此詩を解するに皆實事となして說く、此集に所載の注釋措て不取、然れども此注に據て講じ來ること已に久矣、遽に刪去がたし、故に詩尾に於て別に註の義を解す、

杜子美

八月秋高風怒號、卷我屋上三重茅、八月陰中也、陰以肅殺爲事、謂安祿山起兵漁陽、詭言誅楊國忠、中外震動、豈非秋高風怒號乎、是時方陷大原陳留滎陽三郡、故云卷三重茅也、

茅飛度江灑江郊、高者挂罥長林梢、下者飄轉沈塘坳、謂羣臣奔竄如茅灑江郊、長林君也、塘坳泥塗也、高義者從肅宗、喪節者處泥塗也、

八月は秋氣已に高し、偶々暴風起り震ひ鳴て怒號し勢烈しき也、屋上三重に葺たる茅を吹き卷て虛空に揚り去也、【茅飛―】屋上の茅風に卷かれ空中に飄擧し、江上を飛び度て江郊に散灑する也、【高者―】風に乘ずること高き者は長林の梢に吹き着られて、其梢に茅の桂り罥るを見と也、【下者―】茅の飛こと下き者は飄り轉して江のほとり塘坳の中に落ち沈むと也、【坳】於交切音凹、與凹同、地坳下不平也、

南村羣童欺我老無力、忍能對面爲盜賊、公然抱茅入竹去、脣燋口燥呼不得、謂從賊而叛者公然受其節制、守義之臣如三顏巡遠輩、食盡力屈不能救也、

南村の惡少羣童ども、杜子美の年老て無力禦ぐこと

是洪濤の風にもまれて直にのぶることを不得が故なり、亞字彙亞衣架切醜也、相依也、【洪濤】海賦洪濤瀾汗萬里無際、注洪大也、濤波也、

尤工遠勢古莫比、咫尺應須論萬里、（南史竟陵王子賁傳、賁字文煥、能書善畫、於扇上圖山水、咫尺之内便同萬里之遙、）焉得并州快剪刀、剪取呉松半江水、（秦靖見顧愷之畫、欣然曰、恨不帶并州快剪刀來、欲剪松江半幅紋練歸去、）

【尤工—】遠景の地勢を寫すの妙、工古の善畫する人と云とも比倫をなし難し、【咫尺】史記九十二淮陰侯傳、奉咫尺之書、正義曰咫尺八寸、圖面僅に咫尺の間、華夷千萬里の山水を盡く兼寫し、其形象歴々として某々と指點し論ずべきに堪たる也、【焉得并州】集注并州今山西大原府、【快剪刀】なるほど能きるゝはさみ也、或は裁刀也、【呉松】集註云、呉松謂呉地之松江府、○潜確類書三十七、呉淞江在崑山縣南、禹貢三江之一、東北下二百餘里曰婁江、亦曰下江、又名新江、宋置新江驛于此、結の二句意思分明ならず、焉ぞ并州より出す所の快剪刀を得て、呉松の半江を剪取て珍藏せんと云へるは、想ふに所以あるべし、諸注皆無解、此集所引は僞蘇注の説也、輔繙に按に老杜が此句晋の張翰が故事の影を用て、自ら歸隱の意を寓するか、晋の張翰齊王冏に仕て京師に在り、秋風の起を見て松江鱸魚の膾を思て、遂に駕を命じて東に歸る、其後幾もなく齊王冏敗る、翰竟に禍に免る、杜子美の意書を見に因て歸隱情内に發す、故に言ふ我れ張翰が如く歸り去て、身を江水の間に老せんことを欲す、只其地に家の可住なきを奈んがせん、并州の快剪刀を得て此呉郡松江の半ばを剪取て其地を領したらば、我れ去て身を隱すべし、焉ぞ如此ことを得んやと云へる意もあらんか、或は附會の説に類すと云へども、如此説かば結句稍々通ずべきか、姑く臆見を錄す、

○茅屋爲秋風所破歌（借物喩變、深有感傷、）

本集十二載之、秋風の起るに因て茅屋の飄散するを賦す此詩賦也、此集の注比の體となして説非也、本集注鶴曰、公在成都時嚴武死、欲依英乂而英乂驕縱而不可託、故舍之而去、所以託言茅屋爲秋風所破、蓋有所感傷也、此注は儘々好し、此集の注並に

萊曰蓬壺、瀛洲曰瀛壺、十洲記、方丈洲在東海中心、西南東北岸正等、方丈方面各五千里、上專是羣龍所聚、有金玉琉璃之宮、三天司命所治之處、羣仙不欲昇天者皆往來此洲、上有九源丈人宮、主領天下水神及龍蛇巨鯨之輩、

挂君高堂之素壁、巴陵洞庭日本東、（洞庭在巴陵之左、海東有日本國、）赤岸水與銀河通、（南兗州記瓜步山東五里、江有赤岸山、南臨江中、）中有雲氣隨飛龍、舟人漁子入浦漵、（音叙）山木盡亞洪濤風、

【素壁】白堊を以て塗たる壁也、【巴陵—】畫ける所曠遠なるを云、山水の遙なる巴陵洞庭より遠く、日本の東までも相連て看ゆる也、【巴陵】縣名即岳陽也、屬岳州府、潯江記羿射巴蛇於洞庭、其骨若陵故謂之巴陵、【洞庭】一統志、岳州府洞庭湖在府城西南、禹貢九江孔般注云、卽洞庭也、沅漸元辰叙酉澧資湘九水皆合於此、故名九江、每歲六七月間岷峨雪消水暴漲、自荊江逆入洞庭、清流爲之改色、勝覽廿九、岳州洞庭湖在巴陵西、西吞赤沙、南連青草、橫亙七八百里、日月出沒其中、○宋范希文岳陽樓記云、觀夫巴陵勝狀在洞庭一湖、銜遠山、吞長江、浩々湯々橫無際涯、【赤岸】本集注赤岸在廣陽、南兗州記曰、瓜步山南五里、江有赤岸山、南臨江中、濤水自海入江、衝徼六七百里至此岸側、其勢始衰、郭景純江賦、鼓洪濤於赤岸、淪餘波於柴桑、【銀河】天河也、赤岸の水は遙に天河の邊に連接して、銀河の流れと相通ずるが如くに看ゆる也、劉辰翁批云、他句法別謂其或似洞庭與日本與赤岸、然下語荒忽如此、自是老氣逼人、【中有—】圖面空中に雲氣あり、定て是は飛龍の空に登に隨て起る雲ならんと也、莊子齊物論、藐姑射之山有神人、乘雲氣御飛龍而遊乎四海之外、【舟人漁子】文選海賦、舟人漁子徂南極東、注翰曰漁子取魚人、【入浦漵】韻會漵水名、辰州漵浦縣有漵溪、出鄜渠山注於沅、楚辭入漵浦余邅迴、集韻或作潊、案說文浦水濱也、漵浦猶湘浦澧浦、舊韻皆注浦漵誤、圖中に舟人漁子の船を還て浦漵に入り歸る狀を畫きたる也、【山木盡亞】所畫の山木は悉皆屈曲偃側して醜亞の狀をなしたる也、

爵に昇る人を生じ出さんと也、【積善】易坤文言云、積善之家必有餘慶、又下係辭曰、善不積不足以成名、【衰々】不絕貌、【丈夫生―】丈夫の注は第二卷離別詩詳也、世間の丈夫子を生こと此徐氏の二雛の如くなる者を得ば、聲名爵位豈に卑微にして朽ちはてんや、必ず竟に家を起して貴顯なるべしと也、結句徐氏を祝して云へる也、【卑微】集注王充論衡云、位雖卑微、行苟離俗必與之友、

○戲題王宰畫山水歌

本集第七載之、杜詩集注十四載之、題注此詩形容畫筆之工、上元元年在成都作、【王宰】太平廣記二百十三畫部云、唐王宰者家于西蜀、貞元中韋皐以客禮待之、畫山水樹石出於象外、故杜甫贈歌云、十日畫一松五日畫一石、能事不受相促迫、王宰始肯留眞跡、又嘗於席夔廳見圖一障、陵江雙松一柏古藤縈繞、上盤半空下著水面、千枝萬葉交查屈曲分布不雜、或枯或茂、或垂或直、葉疊千重、枝分四面、精人所難凡目莫辨、山水松石並上上品、

杜子美

十日畫一水、五日畫一石、能事不受相促迫、王宰始肯留眞跡、
壯哉崑崙方壺圖、（崑崙方壺乃海上二仙山名、）

【十日―】二句王宰が繪を畫くこと、優游にして速に成すことをせざるを云、十日僅に一水を畫き、五日には又一の石を畫きなす也、如此徐々とするは何ぞや、凡そ能事は促し迫て速にすることを不受、只心の趣まゝに任せてなりしだいに成就するを尙ぶ故也、【王宰―】王宰始て心に肯ふて此圖を畫き、眞の筆跡を世に留めおけり、其圖を見れば筆の妙固に壯なることかな、崑崙方壺を圖に寫せることゝ也、【崑崙】東方朔十州記云、崑崙號曰崑崚、在西海之戌地北海之亥地、去岸十三萬里、又有弱水周廻繞市、山高地平三萬六千里、上有三角、方廣萬里、形似偃盆、下狹上廣故名曰崑崙山、○拾遺記云、崑崙山有昆陵之地、其高出日月之上、山有九層、毎層相去萬里、有雲色、從下望之如城闕之象、四面有風羣仙常駕龍乘鶴遊戲其間、【方壺】拾遺記海中三山形如壺、方丈曰方壺、蓬

相追隨、〔注〕詩小雅斯干篇、乃寢乃興、乃占我夢、吉夢維何、維熊維羆、大人占之、維熊維羆、男子之祥、【孔子釋子―】二子を指て言ふ也、夢に熊羆を感して此の孔子釋氏の如き二子を生じて、親ら抱き送りて徐卿に見せしむる也、婦人の子を産て後抱て夫に見せしむる禮は內則に見えたり、一説に二子は凡種に非ず、即是孔子と釋氏と各〻親ら抱き來て、徐氏に送り與へたる子なりと云、前説を可とす、【並是天―】二子並に是寶誌の云へる所、天上の石麒麟ども云べき子なると也、〔注〕氏族排韻、徐陵字孝穆陳人摛之子也、母臧氏夢五色雲化爲鳳集左肩、已而生陵、年數歲沙門寶誌摩其頂曰、天上石麒麟也、任吏部尚書、爲一代文宗、知道は陵と同姓也、故比し用ゆ、

大兒九齡色清徹、秋水爲神玉爲骨、司馬太子見王岳、謂客曰此兒神如秋水之清徹、骨如皓玉之美秀、小兒五歲氣食牛、尸子虎豹之駒、雖未成文已有食牛之氣、

【大兒―】大兒は今已に九歲、肌膚の色清くすきとほりて潔白なると也、秋水は清澄なるを取る、神は眼中の精神を云、眼中すゞしく澄て秋水の如くなると也、【玉爲骨】骨節瑩潔にて、玉を刻て造り成したるに似たる也、〔注〕僞蘇注也、【小兒―】小兒は今纔に五歲なれども、大氣ものにて既に牛を食はんとする大志あると也、〔注〕【尸子】は尸佼撰す、未見其書、故に此語は何の篇に出ることを不詳、琅琊代醉卷十云、尸子書亦不傳、今錄其雜出諸書者一二、説虎豹之駒未成文、而有食牛之氣、鵠鴻之鷇羽翼未合、而有四海之心、

滿堂賓客皆回頭、吾知徐公百不憂、積善袞々生公侯、丈夫生兒有如此二雛者、名位豈肯卑微休、

【滿堂―】徐卿が堂中に滿坐する賓客、皆頭を回らして二兒を視て奇異なりと稱る也、【吾知―】杜子美は即此子を視て、徐公の心凡そ百の事に憂はあるまじと計り知と也、百は凡百也、よろづの事と云義也、【積善―】世々善を積むこと袞々と不絕は、遂に公侯の

孔丘盜跖俱塵埃、崔祥曰、男兒當壯即仕、儒術於我焉有所損哉、杬兢曰、孔丘盜跖今爲塵、人生不樂胡爲解憂、不須聞此意慘愴

生前相遇且銜盃、

【先生】鄭虔を指す、【早賦】陶淵明彭澤の令となりて、僅に數月の後歸去來の賦を作て、官を棄て柴桑の舊廬に歸る、鄭虔も早く淵明に效て歸去來を賦し、官を棄て辭し去られよと也、【石田】二字本と史記子胥傳より出づ、後世痩たる田を謂て石田と云、久く官に備て京師に在り、故に舊里に棄置たる石田芽屋は荒れはてゝ蒼苔生じ、治る人も有まじ、早く還て田を耘り、屋を葺て安居せられよと云意也、【注】【史記】列傳六伍子胥諫呉王曰、夫越腹心之病、今信其浮辭詐僞而貪齊、破齊譬猶石田無所用之、【儒術—】所學儒者の術業、今日身に於て何の益すことかあるや、才も不才も各〻命あり、孔丘盜跖共に盡るに歸して皆塵埃となれり、戚々と苦て何にかせんと也、盜跖は楚の大盜也、莊子盜跖篇云、柳下季之弟名曰盜跖、盜跖從卒九千人、橫行天下侵暴諸侯、【注】崔祥杬兢並に僞蘇注也、【不須—】聞此の此は上の文に所謂轗軻不遇の歎也、此醉時の歌を聞て、必ず意を傷ましめて慘愴をなすことなかれ、只生前に相遇は且つ盃を銜て酒を飲み樂て日を遣るべしと也、

○徐卿二子歌

徐卿乃徐知道也、

本集八載之、題注鶴曰、公在成都時徐知道爲西川兵馬使、今題云徐卿、無乃是知道也、二子の姿質秀英なるを美て歌を作れる也、

杜子美

君不見徐卿二子生絕奇、徐卿乃蜀人有二子、

感應吉夢相追隨、詩吉夢維何、維熊維羆、

孔子釋氏親抱送、並是天上麒麟兒、徐陵年數歲家人携見寶誌上人、誌以手摩頂曰、天上石麒麟也、

【徐卿—】君不見は大抵泛く言て所指なけれども、此詩は滿堂の賓客に係て言ふも可也、徐卿の二子生質絕だ奇偉なり、想ふに詩に所謂の如く、吉夢に感應して二子相追ひ隨て生れたるものならんと也、追隨は長子に追隨して、次子又生るを云也、曹子建詩飛蓋

盃て置、其前に坐して酒を賣を當壚と云、【犢鼻褌】韋昭曰今三尺作形如犢鼻矣、褌は褻衣也、日本のもゝひきに似て膝の下までに至る者也、其端の脛をいるゝ處閧くして犢の鼻の如し、故に犢鼻褌と云、即日本の下帶と同じ、【子雲―】楊雄は奇字を識て天下の大儒なれども、尙終に閣より投じて身を傷るの禍あることを免れざりし也、楊雄字子雲、蜀郡成都人也、少而好學不爲章句、訓詁通而已、博覽無所不見、詳見前漢書列傳五十七、注所引は贊の中の語を摘て載せたり、【以符命自立】漢平帝崩して無嗣、王莽謀て宣帝の玄孫嬰二歲なるを立て帝と定む、時に謝囂と云者奏す、武功の長孟通井を浚て白石を得たり、上圓に下方なり、有丹書著石、文曰告安漢公莽爲皇帝と云と奏す、此符命に因て王莽皇帝の事を行て踐祚し、周公の故事に效て假皇帝と云、これより符命の事起りて後にさまゞゝの怪異を云ひ出して、遂に眞の皇帝の位に卽き、漢を改て新と號す、これを以符命自立すと云也、【誅豐父子】甄豐初め上公となる、又大阿右拂大司空に徙る、豐か子尋は侍中たり、尋自ら符命を作る、莽怒て尋を捕ふ、尋は亡て華山に入遂に捕らる、豐は自殺す、辭連て劉歆が子隆威、侯棻棻が弟泳、歆が門人丁隆が輩數十人罪に逮ふ、於是棻を幽州に流し、尋を三危に放、隆を羽山に殛す、舜の共工等を罰するに效て也、其外尋が事に連り及たる者をば便ち收捕て明めんことを請ふことを不許、此時楊雄は書を天祿閣に校す、然るに雄も其一類なりとて獄事を治る使者來て雄を收んとす、雄恐て閣上より身を投け下て幾んど死せんとす、其故を問へば劉棻が嘗て雄に從て古文の奇異なる字を作ることを學ぶに依て、棻が黨なりと云て收へたる也、然れども雄は素より符命の事に與らず、故に罪せられず、【唯寂寞―】是は楊雄が解嘲の語を以て雄を譏也、雄が語に云、脊靡爲宰、寂寞爲尸、これを以て譏て曰、寂寞を以て道化の主とすと言はれし楊雄が周章て閣より投下するものか、楊雄の寂寞はめづらしき寂寞かな、寂寞として閣上より投下せられたるほどにのと云意也、

先生早賦歸去來、石田茅屋荒蒼苔、（史記子胥曰、猶石田無所用、）儒術於我何有哉、

註沈々夜之永也、【動春酌】夜の沈々と靜なるに相對して、酒興を發し春酒を酌むと也、春酌は即春酒也、【燈前—】其夜をりふし雨ふり、燈前より見れば細雨の澆くに因て、檐邊の花落ち來ると也、又一說に燈前に細雨を見れば、簷に亂る花の如く散ると云義也、輔按に前說を可とすべし、又此句を巧なる句となして看ば、燈前に相對するの間、細雨の密々に澆く聲を聽て、雨のふるかと思へば雨には非ずして、簷頭の花の散り落るにてありしと云義もあるべし、然ども此句は清夜對酌の時所レ見の景を叙たれば、ありのまゝに可レ說、鑿して求れば却て趣不レ好、草注簷花乃夜雨細如レ花也、或以簷前之花因二夜雨一而落也、一作二簷前細雨燈花落一、千家注趙曰、近二乎簷邊一之花也、劉邈詩簷花初照レ月、學者多以二簷雨之細如一レ花、遂以二簷花一爲二簷雨之名一非也、【但覺高—】常に高歌すれば心怡み氣爽にて、凡障を離て逸與あり、但歌に鬼神の妙ありて如レ此ならしむると覺ると也、注僞蘇注也、【焉知】は何ぞ心に介まんやと云意也、言ろは痛飮を吾が師とし、毎に高歌して自ら樂む、何ぞ一旦餓死して行きたふれ、溝壑の中にすたれ塡んことを心に介んて、戚々と憂ることをせんやと也、注【汲黯】前漢書列傳二十、汲黯字長孺濮陽人也、武帝召二黯拜爲二淮陽太守一、黯伏謝不レ受二印綬一、詔數強予、然後奉レ詔、黯泣曰臣自以爲塡二溝壑一不三復見二陛下一、不レ意陛下復收レ之、【相如—】此二句古人の志を不レ得ことありしを引て、鄭虔官冷して飯不足を慰解する也、【相如】史記列傳五十七、司馬相如者蜀郡成都人也、字長卿、少時好レ讀レ書學レ擊劍、客二游梁一、著二子虛之賦一、會二梁孝王卒一、相如歸而家貧無二以自業一、素與二臨卬令王吉一相善、吉曰長卿久宦游不レ遂、而來過レ我、繆爲二恭敬一、日往二朝相如一、臨卬中多二富人一、卓王孫家僮八百人、令有二貴客一爲レ具召レ之、并召レ令、酒酣臨卬令前奏レ琴曰、願以自娛、相如爲鼓一再行、是時卓王孫有二女文君一、新寡好レ音、故相如以二琴心一挑レ之、文君竊從レ戶窺レ之心悅而好レ之、文君夜亡奔二相如一、相如乃與歸、家居徒四壁立、文君不レ樂曰、俱如二臨卬一從二昆弟一假貸、猶足レ爲レ生、相如俱之二臨卬一、盡賣二其車騎一買二一酒舍一酤レ酒、而令二文君當一レ鑪、相如身自著二犢鼻褌一與二保庸一雜作滌二器於市中一、卓王孫聞而耻之爲杜レ門不レ出、註韋昭曰鑪酒肆也、以レ土爲レ墮邊高似レ鑪、酒のうりば也、土をぬりあげて臺となし、其上に酒壺を埋て酒を

篇有為神農之言者許行、其徒數十人皆衣褐、注褐毛布賤者之服也、毛布の賤き服を被て、しかも長短く幅窄くて身に不稱、鬢色亦白して絲の如く年老たると也、【日糴】毎日買取也、糴音狄買穀也、糶音挑賣穀也、【大倉】は官倉也、前漢書二十四食貨志云、武帝初國家亡事都鄙倉廩盡滿、大倉之粟陳々相因、【五升米】注本集鶴注也、舊史に玄宗の天寶十二載八月、京城に霖雨ありて米穀の價貴し、是故に上令を下して大倉の官米を十萬石出して、價を減し賤く糶て貧人を救はれたり、此時杜公も長安に困窮して居られたる故に、毎日大倉の米を糴ふ貧人の數に入たると也、【鄭老】注指虔也【同襟】襟の著く所は胸也、故に心中の懷抱を謂て襟と云ふ也、心を同うして二人相忤ふことなきを同襟と云、時々に同襟相契ふの期約をなして鄭虔が所に赴也【得錢—】錢あるを見ては即相覓て酒を沽て飲む、曾て心おきをせず、不同心にもあるかとあやぶみ疑ふことはなきと也、【忘形】相接の際容を斂てとりつくろふこともなく、自墮落なれども互に心もつかず相忘て居る也、莊子讓王篇云、養志者忘形、養形者忘利、【到爾汝】平生相呼ぶに君とも公とも不曰して、只爾と云ひ互に相親しき也、俗におみがそなたがと云ふほどの友也、後漢書列傳七十下、禰衡字正平、少有才辨、而氣尙剛傲、善魯國孔融、常稱曰大兒子文擧、融亦深愛其才、衡始弱冠而融年四十、遂與為交友、列傳六十孔融字文擧、魯國人、孔子二十世孫也、融衡二傳ともに爾汝交をなすと云こと不見、【痛飲—】只痛く飲で醉ことを眞の吾が師と心得て尊ぶと也、批云但能痛飲即為吾師非謂鄭、

清夜沈々動春酌、燈前細雨簷花落、

但覺高歌有鬼神、吳萧醉發耳熱、浩歎春風、疑有鬼神所助、

焉知餓死塡溝壑、汲黯傳臣自以為塡溝壑、

相如逸才親滌器、司馬傳文君奔相如、倶之臨邛、盡賣車騎、買酒舍、乃令文君當壚、相如身著犢鼻褌、滌器於市、

子雲識字終投閣、楊雄傳王莽時甄豐為上公、莽既以符命自立、即位之後誅豐父子、投棻四裔、辭所連及便收不請、時雄校書天祿閣上、治獄使者來欲收雄、雄恐乃從閣上自投下幾死、劉棻嘗從雄學作奇字、京師為之語曰、唯寂寞自投閣、

【沈々】夜靜にして更の長也、艸注沈々言人寂也、集

々】字彙紛雜也衆也、又紛々亂也、甍を比べて多を云也、【厭粱肉】美食に厭て口腹を肥すを云也、粱、字彙に音良、粟類、詩詁粱似粟而大、肉は牛羊の類也、紛々と多く構へ並べたる甲第の內に居る人は、常に粱肉の美味に飽けども、廣文先生は飯ばかりさへ飽までには不足也、此二聯三の句一の句に應じ、四の句は二の句に應ず、諸公登臺省、故厭粱肉、廣文官獨冷、故飯不足、此句法を隔對と云、又扇對と云、

先生有道出羲皇、先生有才過屈宋、屈原宋玉德尊一代常坎軻、名垂萬古知何用、虔之才過屈宋、而又道全德備、惜矣坎軻不得於時也、

【有道】道德の內に備る也、學而篇就有道而正焉、【出義皇】義は伏義也、鄭虔が道は上古の伏義氏の道を繼で修行すると也、【有才】才學の茂異なるは、楚の屈原宋玉が才よりは尙踰へ過たると也、屈原宋玉傳前に出たり、【坎軻】本集注夢弼曰、轗音坎、說文車不平也、軻音可、折軸車也、一曰轗軻失志也、或は作坎坷、義同、文選十九首古詩無爲守窮賤、轗軻長苦辛、車をくぼき地に挽かけ、前へも後へもやりがたき如く、世事不如心を坎軻と云、俗に人の不幸なるを謂ていでのあがらぬと云、即坎軻の義也、鄭虔の德一代にすぐれて尊けれども、常に坎軻して志を不得、若し身後の名萬古の久に傳へ垂れて不朽とも、不知是何の用をかなすや、竟に身に益なき也、知は猶不知也、

杜陵野老人更嗤、被褐短窄鬢如絲、日糴大倉五升米、天寶十二載八月、京城霖雨米貴、令出大倉米十萬石、減價糶與貧人、公困於長安、亦在日糴之數、時赴鄭老同襟期、鄭老指虔也、得錢即相覓、沽酒不復疑、忘形到爾汝、文士傳禰衡有逸才、與孔融作爾汝交、痛飲眞吾師、

【杜陵】杜甫は杜陵の人にて家杜陵にあり、故杜陵野客と云、草注光武紀延岑破赤眉於杜陵、注縣名屬京兆、周之杜伯國在萬年縣東南、公詩有云杜陵、有云杜曲、有云少陵、有云下杜、其實皆杜陵也、【野老】批點作野客、【人】は世間の人を指て云、【被褐】孟子滕文公

書百八陸扆傳、扆屬辭敏速、如注射、○明唐汝詢曰、此賦八人之豪飲也、藉令八人而當聖世、未必不爲元愷之倫、今皆流落不偶、知章則以輔太子而見疎、適之則以忤權相而被斥、青蓮則以觸力士而放棄、其五人亦皆厭世之濁、而逃于酒、故子美詠之、亦有廢中權之義云、

○醉時歌　贈廣文館學士鄭虔

杜子美

本集二載之、題注卽杜子美自註也、夢弼曰、按虔本傳、玄宗愛其才、置廣文館、以虔爲博士、虔在官貧約甚澹如也、鄭虔が傳見第二卷、

諸公袞々登臺省、廣文先生官獨冷、臺省清要之職、今賢不肖無所甄別、相繼而登、鄭虔恥與之並進、甘心居乎冷官、

甲第紛々厭粱肉、廣文先生飯不足、甲第甲乙丙丁之次也、甲第皆厭粱肉、獨鄭虔之祿食不給也、

【諸公】は朝廷に仕て官に在る人々を指す、公卿の公に非ず、【袞々】古文大全云、袞々相繼而不絶也、杜詩集注云、袞々不絶貌、言賢不肖無所辨也、【登臺省】【臺】は御史臺蘭臺の類也、唐高宗龍朔中御史臺改爲憲臺、武后時改爲肅政臺、後去肅政之名、但爲左右御史臺、朝儀を糾し察し、官人の邪あるを彈劾する職也、【省】は尙書省、中書省、門下省などの類也、朝廷に進て仕を求る諸公たちは、賢なるも不肖なるも、皆袞々相繼で或は臺部或は省部に登て官を領すれども、廣文館の學士鄭虔先生ばかりは、官獨りさびし〳〵と冷淡なる下位に處らるゝと也、注【清要之職】臺省兩署ともに大職なる故に、清潔要約の人を擇て可置地也、【不肖】は賢に不似と云意也、不賢者の義也、孟子に見たり、【甄別】は甄は明也、分明に辨別することなく、混雜するを無所甄別と云、【與之】は不肖の人を指す【甘心】は厭ひ避ることをせず安じ處て、これにてもよきまでと思へるを云、【冷官】さびたるはかばかしくもなき下官也、【甲第】注甲乙丙丁之次也、甲乙の次第を以て呼ぶとき、第一の大宅と云意にて、甲第と云、左太冲蜀都賦云、亦有甲第、當衢向術、注濟曰、甲第第一宅也、文選十九首古詩、王侯多第宅、注善曰、魏王奏事曰、出不由里、門向大道者名曰第、【紛

御前に出て船に上ることを不得と也、[注]に玄宗白蓮池に宴して白を召すことを引く、此事本傳に不載、只云白與飲徒醉于市、帝坐沈香亭子意有所感、欲得白爲樂章召入、而白已醉、左右以水頮面稍解、授筆成文婉麗精切、帝愛其才數宴見、白嘗侍帝醉、使高力士脫鞾、力士素貴恥之、と云て、白蓮池の事なし、范傳正が白墓碑云、玄宗汎白蓮池召李白作序、時已被酒、命高將軍扶以登舟、墓碑を以て證とすべし、[注]【衫矜】は衣の領也、或人の船は衣の領也と云は妄説なると也、

張旭三盃艸聖傳、脫帽露頂王公前、揮毫落紙如雲煙、

漢張芝善艸書號艸聖、故以比張旭、蓋旭善艸書、每飲大醉、以頭濡墨就壁書、及醒自以爲神、

【張旭】新唐書李白傳附、旭蘇州呉人嗜酒每大醉呼叫狂走乃下筆、或以頭濡墨而書、既醒自視以爲神不可復得也、世呼張顚、張旭は三盃の酒を飲て、醉に乘じて書すれば、神妙にして艸書の聖と呼ふ名を傳ると也、【艸聖】後漢書列傳五十五張奐傳、長子芝字伯英最知名、注王愔文志云、芝少持高操、尤好艸書學崔杜之法、家之衣帛必書而後練、臨池學書、水爲之黑、韋仲將謂之艸聖也、【脫帽―】旭大に醉へば容儀を亂して、頭上の帽巾を脫し頂を露し、王公大人の前と云へども心とせず、毫を揮て紙上に落して書すれば、文字飛動萬變雲煙の族り起るが如くなると也、潘岳楊荊州誄云、翰動若飛、紙落如雲、

焦遂五斗方卓然、高談雄辨驚四筵、

焦遂口吃對客不出一言、醉後酬答如注射、時目爲酒吃、

【焦遂】唐書無傳、注所引者王仁裕唐史拾遺所載也、焦遂は酒を飲て五斗に至るときは、氣象方に卓然として所立あり、【高談】は高尚の談論也、陸機詩云高談一何綺、【雄辨】辨舌よく道理分明に言ふ也、劉孝標廣絶交論云、縱碧鷄之雄辨、【驚四筵】四旁の筵上に坐する賓客、皆聽て驚異し歎稱する也、[注]口吃口どもる也、【酬答】客と物語するうけこたへ也、【注射】增韻注字註云、灌注水流射也、言語の澁滯なく、瓶中の水をそゝいで流射するが如くに談ずると云義也、注は瓶を傾て水を灌ぐ也、射は注水の勢つよきを云也、唐

酒笑傲青天也、

【宗之】唐書列傳四十六、崔日用傳、日用封齊國公、子宗之襲封、亦好學寛博、有風檢、與太白杜甫以文相知、【瀟灑】孔德璋北山移文、瀟灑出塵之想、さはやかなる意也、【美少年】晋阮籍詩、朝爲美少年、夕暮成醜老、【擧觴】列子景公擧觴自罰、【白眼】晋書阮籍傳、籍任情不羈、能爲青白眼、見禮俗之士以白眼對之、【玉樹】世説容止篇云、魏明帝使后弟毛曾與夏侯玄共坐、時人謂蒹葭倚玉樹、崔宗之は姿容さはやかなる美少年也、擧觴白眼を張て青天を凝望すれば、清姿皎潔にして玉樹風前に臨てたてるが如し、注【笑傲青天】笑ひ傲て身を軒昂し、目八分にかまへて青天を望み見也、

蘇晉長齋繡佛前、醉中往々愛逃禪、

蘇晉學浮屠術、嘗得胡僧慧澄繡彌勒佛一本、晋寶之、嘗曰是佛好飲米汁、正與吾性合、吾願事之、他佛不愛也、

【蘇晉】唐書列傳五十三蘇珦傳附、晋數歳知爲文、作八卦論、擧進士、及大禮科、皆上第、先天中爲中書舍人、後出爲汝州刺史、終太子左庶子、【長齋】は長なへに潔齋して敬を致す也、【繡佛】注本集修可説也、他佛不愛の下に云ふ、彌勒佛即布袋和尚也、常於市中飲酒食猪頭、時人無識之者、繡佛は佛像を繡に刺たる也、即彌勒佛也、晋云ふ此佛は米汁の酒を飲むことを好まれるに因て、吾が性と相合ふ、故に事之、他の佛は酒を禁ず、故に吾不愛也、【醉中—】往々は常々と云義也、晋醉の中には常に俗を避け禪法に逃れ入ことを愛すると也、注【浮屠術】釋氏の敎也、事文類聚前集三十五云、浮屠佛也、佛者漢言覺也、將以覺悟羣生也、【胡僧】は天竺の僧也、

李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙、

玄宗嘗宴白蓮池、欲造樂府新詞、遣使召李白、白已醉於長安酒肆矣、及至帝所醉不能登船、帝命力士扶上船、或以蜀人呼衫衿爲船者非是、

【李白】傳見于第一卷、李白は一斗の酒を飲盡までの間に、詩を百篇作ると也、【長安—】長安の市上に行き酒家に醉臥して眠り居て、天子呼び來らしむれども、

恨みに思ふことは、肅州の酒泉郡に封ぜられずして、城下にある酒泉を飽まで飲むことを不得、これのみ遺憾なると也、【麴】說文酒母也、【酒泉】漢書地理志、酒泉郡武帝太初元年開、應劭曰其水若酒故曰酒泉、師古曰舊俗傳云城下有金泉、泉味如酒、注北齊王詢漢郭弘が故事並に千家分類注に所載、僞蘇注の說皆妄言也、

左相日興費萬錢、飲如長鯨吸百川、晉何曾日食萬錢、猶曰無下筯處、○言左相李適之、日費酒資萬錢、則豪飲有如鯨吸百川矣、銜盃樂聖稱世賢、李適之詩云、避賢初罷相、樂聖且銜盃、

【左相】李適之也、唐書列傳五十六、李適之恒山愍王孫也、始名昌、神龍初擢左衞郎將、開元中遷累通州刺史、以辦治聞、適之喜賓客、飲酒至斗餘不亂、夜宴娛晝決事、案無留辭、天寶元年代牛仙客爲左相、累封清和縣公、嘗與李林甫爭權不協、林甫陰賊之、適之懼不自安、乃上宰政求散職、終宜春太守、左相每日興れば輙ち萬錢の價を費し用て、酒を買て飲むこと長鯨百川を吸が如くなると也、【鯨】爾雅翼云、鯨从京大也、常以五月生子于岸、八月導而北、大者數千里長、【百川】木玄虛海賦、橫海之鯨吹澇、則百川倒流、唐魏徵詩、聲敎游四海、朝宗引百川、注【晉何曾】萬錢字の出處を引なり、晉書列傳三十三、何曹字穎考、仕魏爲司徒、武帝踐祚拜大尉、性奢豪務在華侈、厨膳滋味過王者、食日萬錢猶曰無下箸處、膳の中皆心に不愜して食んと思ふ物なきを無下筯處と云、【銜盃樂―】世賢當作避賢、適之常に稱す、口に盃を銜て清酒の聖を飲むことを樂み、身を退て朝廷賢者の列を避け去と云へる也、孟啓本事詩云、開元末宰相李適之疎直坦夷時譽甚美、李林甫惡之排誣罷免、朝客來雖知無罪謁問甚稀、適之意憤日飲醇酣、且爲詩曰、避賢初罷相、樂聖且銜盃、爲問門前客、今朝幾個來、李林甫愈怒、終遂不免、○容齋三筆云、杜子美八仙歌、銜盃樂聖稱避賢、正用適之詩語、今所行本誤以爲世賢、絕無意義、兼世字是太宗諱豈敢用哉、○唐詩解作避賢、分注云舊本作世、

宗之瀟灑美少年、擧觴白眼望青天、皎如玉樹臨風前、崔宗之資質潔白皎如玉樹、飲

杜子美

知章乘馬似乘船、眼花落井水底眠、阮咸醉騎馬欹傾、人皆指而笑曰、箇老子騎馬如乘船行波浪中、○王祥醉憑肩輿頭不擧、歸其親戲之曰、子眼花在井底、身在水中睡、亦不醒耶、以此比知章醉、

【知章】賀知章字季眞也、傳見第二卷、此二句諸説紛々として不著明、批點云浙人不喜騎馬而喜乘船、杜蓋嘲之、古文大全云、醉眼昏花若墜落于井中、水底眠臥不知身世之所在、此特形容其曠達之意、唐詩解注云、知章越人習于舟不喜騎、故醉而墜井、紀其實也、謝注以爲用阮王故事誤矣、集注云、似乘船此倒用文法、謂知章能乘船安若騎馬也、千家注師曰、井者目井也、醉人目井皆生花、故眼花落井、水底眠者謂醉臥舟中任其泛々所之、豈非水底眠乎、輔按に集注の説鑿せり、此二句拘捉して説がたし、知章醉て馬に騎り酩酊して知る所なし、醉貌ふら〳〵と動搖して鞍上不穩、故船に乘て浪の漾ふに任すが如し、眼花昏朦して誤て井に墜れども不覺、猶水中に眠て不省に似たると也、此れ醉後銘酊の狀を形容し極て其曠放を云也、或説に知章が目おちくぼにして井の深きか如し、くぼき目にて眠ること井の底にて眠るに似たると云意にて水底眠と云、此説の如きは是賓質を説て醉狀を云ふに非ず、題の意に不稱、故に取り用がたし、【注】阮咸王祥其人有て此事なし、共に僞注也、集注にも亦此故事を引き用、不擇の甚き也、

汝陽三斗始朝天、北齊王詢好飲、帝一日召詢、詢曰待此三斗盡方去見帝、道逢麴車口流涎、恨不移封向酒泉、郭弘爲漢帝寵顧、帝問曰欲封卿郡邑何地好、弘好飲對曰、若封酒泉郡實出望外、果封酒泉郡王、甫以此比汝陽王李璡之嗜酒、

【汝陽】新唐書列傳六讓皇帝憲子璡、眉宇秀整性謹潔善射、帝愛之封汝陽王、歷太僕卿、薨贈太子太師、王仁裕唐史拾遺云、汝陽王嘗於明皇前醉不能下殿、上遣人掖出之、璡謝罪曰、臣以三斗壯膽不覺至此、汝陽王は朝廷に進んとする時も、尙三斗の酒を飲て後始て天子に朝するときは、平生の嗜好は可知、偶〻道路を行て麴を載たる車に逢へば、其まゝ酒を思て口に涎を流し飲んことを欲する也、其常々

宋謝譓不妄交接、有時獨酌曰入吾室者但有清風、對吾飲者惟當明月、【玉山】世說十三容止篇云、嵇叔夜之爲人也、巖々若孤松之獨立、其醉也傀俄若玉山之將頽、○詩人玉屑十四載、六一居士云、落日欲沒峴山西、倒著接䍦花下迷、襄陽小兒齊拍手、大家齊唱白銅鞮、此常言也、至於清風明月不用一錢買、玉山自倒非人推、然後見太白之横放、所以驚動千古者固不在此乎、【舒州杓】本集注唐舒州同安郡、舒州より造り出す杓なるべし、【力士鐺】字彙鐺音堂釜屬有耳足、舊說に力士鐺は鐺に力士を雕て文となすを云、或は鼎足の如くにして、其足を刻て力士の面形に作りたるを云、按に字書に有耳足と云ときは鼎の類也、後の說を是とすべし、【李白―】此杓と鐺とを相親て友とし、一生の間分離せず、酒を酌て樂をなし、死て後已んと云意也、【同死生】とは生らば共に存し、死せば共に滅んと云義也、注【王―】襄王の事宋玉が賦具に前に見たり、言は昔襄王神女に遇て雲雨の約をなせり、今安んか在るや、古人去て迹なし、只江水東に流て哀猿夜叫聲あり、物に觸て感を興し易し、人生豈に酒を飲て自ら樂まざらんやと也、注【寓言】かりに設けなして言をよせ虚大の事を云ふ也、【到頭】とは畢竟歸着の處を云也、

○飲中八僊歌

本集一載之、題注洙曰、按唐史李白自知不爲親近所容、益鷔放不修、與賀知章、李適之、汝陽王璡、崔宗之、蘇晉、張旭、焦遂爲酒八仙、修可曰禁條云此歌重疊用韻、古無其體、嘗質之叔父元度、云此歌分八篇、人人各異、雖重押韻無害、亦三百篇分章之意也、

○劉須溪批云、不倫不理各極其平生醉趣、古無此體無此妙、謂爲八仙甚稱、又云八篇近之、吾意復如題畫人目、一二語集之成歌、像其醉中出口而成、更見佳趣、第難爲拘檢者道耳、此歌は八人の醉態を賦する也、毎句韻を押す、栢梁の體也、一篇の中同字を押するは、一人を賦して一章とす、八人を合て八章を一篇とす、此れ詩經三百篇の章を分つ意と同じと云、又一說に四章となして看る、起句よりして下六句を一章とし、左相日興の句より下六句を第二章とし、蘇晉以下六句を第三章とし、張旭より結句までの六句を第四章とす、此說も亦可也、

て金を以て飾れる罍を傾け、酒を酌て樂をなすに如ことはなきと也、【金罍】周南卷耳篇、我姑酌彼金罍、維以不永懷、注罍酒器、刻爲雲雷之象、以黄金飾之、

君不見晉朝羊公一片石、龜龍剝落生莓苔、淚亦不能爲之墮、心亦不能爲之哀、

【晉朝羊公】晉羊祜也、【一片石】峴山墮淚碑を指て云、太平廣記一百九十八云、梁庾信從南朝初至北方、文士多輕之、信將枯樹賦以示之、於後無敢言者、時溫子昇作韓陵山寺碑、信讀而寫其本、南人問信曰、北方文士何如、信曰唯有韓陵山一片石堪共語、薛道衡盧思道少解把筆、自餘驢鳴狗吠聒耳而已、【龜龍剝落】本集作龜頭、碑の制は首に螭を刻み趺を龜形に作る、事文類聚前集卷六十、唐葬令五品以上螭首龜趺、降五品爲碣、方趺圓首其高四尺、晉の時羊祜が碑も此制と同じきか、石を以て作れる龜の頭もいつとなく剝落して、莓苔厚く生じたる也、莓も亦こけ也、【淚亦―】羊祜が碑は望む者ごとに淚を墮して悲むに因て、墮淚の碑と名づけたれども、今は苔に埋もれて哀しむ者なし、見れども爲に淚を墮すこともなき也、此れ死後の功名幾ほどか久しき、所好には非ずと云意を含めり、

清風明月不用一錢買、玉山自倒非人推、（晉嵆康醉倒、人謂如玉山之將頹、）舒州杓力士鐺、（楚耕反）李白與爾同死生、襄王雲雨今安在、（宋玉高唐賦、楚襄王夢巫山神女、朝爲行雲、暮爲行雨、朝々暮々陽臺之下、）江水東流猿夜聲、（太白寓言皆酒、云功名富貴到頭如夢、因物興懷何如對清風明月飲酒自樂上、）

【清風―】此二句歐陽公極て稱之、本集作朝月、清風と明月とは常に自占て己が有とす、曾て一錢を出して買ふことをだも不用、取れども禁ずる者なく、賞すれども竭る時なし、此不盡の景を樂て友となし、酒を飲て醉ふときは頽乎として玉山の崩るが如し、只自ら倒れて人の推にも非ず、風月の間に醉ひ臥すと也、本集の注士贇曰、世說劉尹云、清風朗月輙思玄度、

也、王充論衡、紂釀酒積糟爲丘、〔注〕李白の意常に酒に在り、故に物に觸れて所見酒の看を作さずと云ことなし、其漢水は皆葡萄酒と看作し、壘麴高臺を築かば皆糟丘なるべしと云、太白が胸襟も亦廣大也、【讀此】此襄陽歌を指す、【恢拓】字彙恢枯回切、大之也、拓他客切、斥開也、【卑汚】ひきくいやしき也、【局促】身をくゞめしゞまりて不安貌を云、前漢書灌夫傳、今日廷論、局促效轅下駒、注、俛頭於車轅下、隨母而已、此太白が詩を讀たらば、世人の心を處すると、卑汚局促なる氣を大にし開て豁達ならしめんと也、

金鞍駿馬換小妾、笑坐金鞍歌落梅、車傍倒掛一壺酒、鳳笙龍管行相催、咸陽市上嘆黃犬、秦李斯臨刑嘆曰、安得復牽黃犬遊東門逐狡兎乎、何如月下傾金罍、

【金鞍駿馬】本集作千金駿馬、【換小妾】千金の價貴駿馬をも牽き出して、小妾に換てなぐさみとする也、李沆獨異志卷中云、後魏曹彰性倜儻、偶逢駿馬愛之、其主所惜也、彰曰余有美妾可換、唯君所選、馬主因指一妓、彰遂換之、異聞集云、酒徒鮑生多蓄聲妓、外弟韋生好乘駿馬、遊行四方、各以所好相遇於山寺、兩易所好、乃以女妓善四絃者換紫叱發、【坐金鞍】本集作坐彫鞍、彫り鏤たる鞍也、【歌落梅】太白集二十五觀胡人吹笛詩注、樂書古者羌笛有落梅花曲、憘び笑て彫鞍の上に乘ながら、落梅花の曲を歌ふと也、【車傍倒一】車に乘て行ときは、車の傍に酒壺を一箇掛ておき、行先にて酒を飲と也、【鳳笙】潘安仁笙賦云、管攢羅而表列、音要妙而含清、各守一以司應、統大魁以爲笙、基黃鍾以擧韻、望儀鳳以擢形、說文曰、笙十三簧象鳳之身、列管以象鳳翼、【龍笛】馬融笛賦曰、近世雙笛從羌起、美人伐竹未及已、龍鳴水中不見已、截竹吹之聲相似、鳳翼の笙龍鳴の笛を陳ねて、行々相催し吹き奏て樂をなす也、【咸陽市上】本集作市中、【嘆黃犬】秦李斯爲趙高所誣、二世二年七月具斯五刑、論腰斬咸陽市、斯出獄與其中子俱執、顧謂其中子曰、吾欲與若復牽黃犬俱出上蔡東門逐狡兎豈可得乎、遂父子相哭而夷三族、咸陽の市に出て刑せらるゝに臨て、黃犬を牽て兎を逐んことを嘆じて哭せんよりは、早く圖て害を避け、明月の下に於

活、失水則醉如一塊泥、故時人譏周澤曰、一日不齊醉如泥、小兒ども答て曰、山翁が酒に醉て正體なきこと泥の如なるがあまりのをかしさに、拍手はやして笑ふと云也、以上の六句は山簡が醉態を言ふ、其意は山簡酒を嗜て平生醉たること如此甚し、今日吾が輩亦如此に爛醉すべきぞと云意にて、先づ山簡が醉狀を具に云ふ也、【鸕鷀杓】齊賢注鸕鷀水鳥也、其頸長刻杓爲之形、鸕鷀さぎ也頸長し、其形に象て杓を作る也、【鸚鵡杯】齊賢注、山海經、黃山有鳥其形如鴞、青羽赤喙人舌能言、名鸚鵡、鏤杯爲之形、今人以海螺如鸚鵡形作之、亦曰鸚鵡杯、並酒器名也、杯を鸚鵡鳥の形の如く作ると也、【百年三—】人の一生涯能く壽くとも百年に不過、百年の日數又僅に三萬六千日也、況や百年には盈ち難きをや、是故に山簡平生醉て如泥、吾が輩も亦毎一日須く三百盃の酒を傾け飲で常に醉べしと云意也、

遙看漢水鴨頭綠、恰似葡萄初醱醅、此江若變作春酒、壘麴便築糟丘臺、李白意在於酒、則所見無非酒、漢水皆葡萄、壘麴築高臺、皆糟丘、白之胸襟亦大矣、讀此可以恢拓世人卑汚局促之氣、

【漢水】詩周南漢廣篇、漢之廣矣不可泳、朱注漢水出興元府嶓冢山、至漢陽軍大別山入江、【鴨頭綠】古文大全云、水色如鴨頭之綠、鴨の頭は羽毛深綠也、漢水の色深綠鴨頭に似たるに因て鴨頭綠と云鴨綠江を云に非ず、本集齊賢注、高麗有鴨綠水、唐志安東都護府故漢襄平城、東南至平壤城八百里、西南至都里海口六百里、南至鴨綠江其水如鴨頭綠、【葡萄】漢書西域傳、大宛國左右以葡萄爲酒、富人藏酒至萬餘石、久者至數十歲不敗、【醱醅】宋何剡酒爾雅云、醱重醞酒也、醅未沸酒也、醱は酒を以て再び釀する酒也、醅は未漉酒也、遙に漢水を望み看れば、鴨頭の綠の如く漫々と漾ふ、恰葡萄酒を釀して初めて熟し、未だ漉さるを見に似たると也、【此江—】因て思ふ、此江水若變じて春酒となるならば、麴を用ること壘の如くなるべし、既に漉しなば糟は便ち丘臺を築きたる如くなるべし、本注齋賢曰、毛詩爲此春酒、劉向新序曰、紂爲酒也足以運舟、糟丘足以望十里、士贇曰釋名糟酒滓

爲墮涙碑、荊州人爲祐諱名云、【倒着】倒にかぶりて上を下へなす也、【接䍦】世說には襴衫なりと云、士贇曰、韻釋接䍦白帽也、接或作睫䍦、或作䍦褷、通作攡、爾雅注、睫攡江東取白頭翅背上長翰毛、以爲睫攡、名之曰白鷺纕、【花下迷】花ある樹の下をこゝかしことさまよひありく也、注【晉山簡】晉書列傳十三、山簡字季倫、司徒濤之子、溫雅有父風、永嘉中爲征南將軍鎭襄陽、四方寇亂天下分崩朝野危懼、簡優游卒歲、唯酒是耽、諸習氏荊土豪族有佳園池、簡每出多之池上、置酒輒醉、名之曰高陽池、時有童兒歌曰云云、【倒載】うしろむきに馬に騎るを云、【酩酊】は正體もなきほど甚く醉たる貌也、【無所知】醉爛れて何事をも不記也、【葛强】は美童にて山簡が愛兒也、高陽池にて酒を飲て醉へは、即ち馬に騎て彼葛强が方へ遊びに行くに因て、童兒ども嘲て云ふ、酒にさへ醉へば直に葛强を問ひ行るゝが、並州の兒は何如があるや曾て目もかけずして、只管に葛强ばかりを寵愛せらるゝことよと云意也、

襄陽小兒齊拍手、攔街爭唱白銅鞮、傍人借問笑何事、笑殺山翁醉似泥、鸕鷀杓鸚鵡杯、百年三萬六千日、一日須傾三百杯、

【齊拍手】衆兒齊く一同に手を拍てはやす也、【攔】は遮也、街路を遮て口々に爭て白銅鞮の曲を唱る也、【白銅鞮】士贇曰、樂府都邑三十四曲有白銅鞮歌、亦曰襄陽白銅鞮、齊賢曰、隋樂志梁武在雍童謠曰、襄陽白銅鞮、反縛揚州兒、義師興實以鐵騎、揚州士皆面縛、如謠言、及即位更造新聲、帝自爲三曲、【傍人―】傍より見る人、街上の小兒ども何事を笑て如此拍手そと問なり、借は付字也、かりに問試むるの義也、【笑殺】南史垣崇祖傳云、自可拍手笑殺、殺は甚字の意也、笑ふこと絕て甚き也、俗に死ぬる程呵しきと云義也、【山翁】山簡を指す、【醉似泥】後漢書六十九周澤傳、澤爲太常、清潔循行盡敬宗廟、常臥病齊宮、其妻哀澤老病、闚問所苦、澤大怒以妻干犯齋禁、遂收送詔獄謝罪、時人爲之語曰、生世不諧作太常妻、一歲三百六十日、三百五十九日齋、一日不齋醉如泥、明陳繼儒群碎錄曰、南海有蟲無骨名曰泥、在水中則

降すこと、雲の風に逐れて飛揚するに比す、【威加海内】數年の間に秦を誅し楚を滅して國を漢と號し、天下の諸侯を賓服せしむるを云、【歸故鄉】功成り名遂けて今又沛の故鄉に歸り、父老と懽をなすことを云、【安得―】永く天下四方を守て安泰ならしめんと也、

注文選六臣注の翰が說也、○王世貞曰、大風三言氣籠宇宙、張千古帝王赤幟、高帝哉、朱晦菴論大風歌曰、文中子曰大風安不忘危、其霸心之存乎、美哉乎其言之也、漢之所以有天下而不能爲三代之王、其以是夫、然自千載以來、人主之詞亦未有若是其壯麗而奇偉者也、嗚呼雄哉、劉須溪曰、安得猛士兮守四方、古人以爲伯心之存　恐非也、自漢滅楚後信越布及同時諸將誅死殆盡、于是四顧寂寥有傷心者矣、語雖壯而意悲自是亦道病矣、或其悔心之萌乎、劉須溪か說自ら有理、

○襄陽歌

本集七載之、題注齊賢曰、唐禮樂志襄陽歌、宋隋王誕作、士贇曰樂府正聲、淸商曲有襄陽樂、宋隋王誕始爲襄陽郡、元嘉末仍爲雍州、夜聞諸女歌謠因爲之詞、

焉、古詞曰、朝發襄陽城、暮至大堤宿、大堤諸女兒、花艶驚郎目、○古文大全云、襄陽歌乃今之襄陽府也、李太白之意在於酒、則所見無非酒也、

李太白

落日欲沒峴山西、（晉羊祜卒、百姓於峴山建碑、望其碑者莫不流涕、因名爲墮淚碑、）倒着接䍦花下迷、（晉山簡每至高陽習家池、飲輙大醉歸、歌曰、山公出何許、往至高陽池、日夕倒載歸、酩酊無所知、時々能騎馬、倒着白接䍦、擧鞭問葛强、何如幷州兒、）

【落日】欲沒、夕陽已に峴山の西に下て入んとする時節也、【峴山】は大明一統志、襄陽府峴山在府城南七里、晉羊祜每登此山置酒、嘗謂從事鄒湛曰、自有宇宙便有此山、由來賢哲登此者多矣、皆湮滅無聞、湛對曰、公德冠四海、聞望當與此山俱傳、注【羊祜】晉書列傳四、羊祜字叔子、泰山南城人、世吏二千石、祜博學能屬文、魏高貴鄕公時公車徵拜中書侍郎、武帝有滅吳之志、以祜都督荊州諸軍事、出鎮南夏、累進征南大將軍南城侯、卒贈太傅、祜樂山水、每風景必造峴山、置酒言詠終日不倦、襄陽百姓於祜平生遊憩之所建碑立廟、歲時享祀、望其碑者莫不流涕、杜預因名

詩言志歌咏言、聖謀所析義已明矣、是以在心爲志、發言爲詩、舒文載實其在玆乎、○文體明辨云、按歌謠者朝野咏歌之辭也、○廣雅云聲比於琴瑟曰歌、

○大風歌

漢高祖有天下還沛致酒、召故人父老子弟飲酒、發沛中兒得百二十人敎之歌酒酣上擊筑歌之

史記卷八高祖本紀及前漢本紀一載之、史記云、十二年十月高祖已擊布軍會甀布走、高祖還歸過沛、留置酒沛宮、悉召故人父老縱酒、發沛中兒得百二十人敎之歌、酒酣　高祖自歌詩曰云云、令兒皆和習之、高祖乃起舞慷慨傷懷泣數行下、沛父兄諸母故人日樂飲極驩、道舊故爲笑樂十餘日、起句の二字を取て歌に名け大風歌と云、注【致酒】史記作置酒、宴を張り設るなり、【酒酣】史記注應劭曰、不醒不醉曰酣、一曰酣洽也、大醉までに不及、酒力身に洽きほどに飲たるを酣と云、【擊筑】史記注韋昭曰、筑古樂有絃、擊之不鼓、正義曰音竹、應劭云、狀似瑟而大頭安弦、以竹擊之、故名曰筑、顏師古曰、今筑形似瑟而小細項、

漢高祖

史記八高祖本紀云、高祖沛豐邑中陽里人、姓劉氏字季、父曰太公、母曰劉媼、其先劉媼嘗息大澤之陂、夢與神遇、是時雷電晦冥、太公行視則見蛟龍於其上、已而有身、遂產高祖、高祖爲人隆準而龍顏、美鬚髯、左股有七十二黑子、仁而愛人喜施、意豁如也、常有大度不事家人生產作業、及壯試爲吏、爲泗水亭長、秦二世元年爲沛公、三年懷王遣沛公西略地、沛公攻武關破之、又與秦軍戰於藍田南、秦軍解大破之、漢元年遂先諸侯至霸上、秦王子嬰素車白馬係頸以組、封皇帝璽符節降軹道旁、遂西入咸陽、與父老約法三章、五年敗項羽垓下滅之、乃即皇帝位氾水之陽、十三年四月崩長樂宮、

大風起兮雲飛揚、威加海內兮歸故鄕、安得猛士兮守四方、

翰曰風自喻雲喻亂也、言已平亂而歸故鄕、故思賢才共守之、

【大風起】高祖沛の豐邑より起て、三尺の劍を提て旗を擧げ義兵を起すに比す、【雲飛揚】高祖兵を揚てより、沛の令を殺すを初として、向ふ所の秦城悉く敗り

立山崖の兀肆たる如くにして心を傾けよせざる也、

丈夫壯節似君少、嗟我欲說安得巨筆如長杠、

音江旗竿也○按王直方詩話云、郭功父一日過梅聖俞、曰近得永叔書、方作廬山高詩送劉同年、自以爲得意、恨未見此詩、功父爲誦之、聖俞擊節歎賞曰、使吾更作詩三十年、亦不能道其中一句、

【丈夫】註二巻離別詩の下に見たり、【壯節】物に撓されぬ雄壯の節操也、【似君少】世間に劉中允が如き者は有ること少なると也、【巨筆】大筆也、劉氏の德を說て書に筆せんと思ふ、安ぞ大筆の長杠ほどなるを得所あらん、若其大筆を得ば正に劉氏の大德を說得べし、尋常の筆の能書す所には非ると云意也、巨筆如長杠、晉の王詢が故事の影を用られたり、晉王詢孝武時爲左僕射、夢人與大筆如椽、覺語人曰、當有大手筆事、俄帝崩哀冊謚議皆詢草也、【圈外注】郭功父少き時より喜て歐陽公の詩を誦せり、或時梅聖俞が家に過り訪たれば、聖俞功父に言て曰、近ろ歐陽永叔より書翰を得たり、其書中に言ひ來すは、廬山高の詩を作て劉同年に送、我自らおもふにも、得意の句なりとおもふとあり、然るに未見其詩これを恨とすと云、郭功父我其詩を記し得たりとて、聖俞が爲に誦之、聖俞聞了て擊節歎賞して曰、我れ詩の工夫をなして、今より以往三十年の力を積たりとも、此廬山高の一句を作り得るほどまでには得なるまじきと稱美したる也、此詩詩林廣記後集卷一にも載たり、○宋葉夢德石林詩話卷中云、前輩詩文各有平生自得意處、不過數篇、然他人未必能盡知也、毘陵正素處士張子厚善書、余嘗於其家見歐陽文忠子棐以烏絲欄絹一軸、求子厚書文忠明妃曲兩篇廬山高一篇、略云、先公平日未嘗矜大所爲文、一日被酒語棐曰、吾詩廬山高今人莫能爲、唯李太白能之、明妃曲後篇太白不能爲、唯杜子美能之、至于前篇則子美亦不能爲、唯吾能之也、因欲別錄此三篇藏之以誌公意也、○詩林廣記後集一、廬山高詩尾載、梅聖俞贈功父詩略曰、一誦廬山高、萬景不得藏、設今古畫師、極意未能詳、

歌類

氷川詩式二云、永言謂之歌、有高下之節、誦之使人興起、宜通暢響亮、○文心雕龍卷二明詩篇云、大舜云

種る也、挿は泥中にさしはさむ也、秧は禾苗也、【疇】うね也、說文耕治之田也、韓退之王弘中銘、風雨順易、秔稻盈疇、【釀酒】酒を造る也、【缸】字彙罌缸、もたい也、【欲令━】浮嵐山氣也、浮散してむらがる山谷の氣也、曖翠曖は不明也、鬱々としげりたる草樹の翠色也、言は田を買ひ室を築て此に居をトらるゝは、山中の嵐翠千萬狀の景を、坐臥常に軒窻に對せしめて觀之心目を喜ばしめんと欲せる故ならんと也、【君懷━】【磊砢】は衆石の貌、石のぐはら〳〵と衆く聚るを云、君の懷抱曠闊にて、中には衆石の聚る貌の如く、ぐはら〳〵と多くの至寶を蓄へたると也、【至寶】は懷抱に積む所の道德を指て云、論語子罕篇、子貢曰、有美玉於斯、韞匵而藏諸、求善賈而沽諸、と云意と同じ、【世俗━】【珉】說文石之美者、徐按禮、君子貴玉而賤珉、珉似玉而非也、【玒】音公玉名、言ろは劉中允は內に至寶を抱て眞の君子也、山に隱れて名を求め祿を釣る徒の君子に似て實は非なるが如きには非ず、世俗は珉と玒との眞僞を不辨、一樣の看を作せども、我は實に知て欽慕すると云意也、

策名爲吏二十載、青衫白首困一邦、（謂世俗不識劉中允之爲人）寵榮聲利不可以苟屈兮、自非青雲白石有深趣、（謂中允有隱君子之節操）其意兀硉何由降、（兀五忽反　硉即忽反）（降胡江反）

【策名】左傳僖公二十三年狐突曰、策名委質貳乃辟也、杜預注、名書於所臣之策、屈膝而君事之則不可以貳、名を官人の策中に書して臣の員に具るを云、二十載の間青衫を着け、白首に及で一邦の吏役に困て仕へられたる也、中允額上の令となりたるを云也、【寵榮━】中允下僚に居て聲譽を不希、遂に隱居することを云也、君の寵を承け尊榮に誇り、名聲利益多きは常人の慕ふ所なれども、中允はこれを以て苟も屈せらるゝ人に非ず、青雲白石の地塵外の深趣ある境に非んば、中允が意兀硉とかけはなれ隔たりて、思ひよりもなかるべし、何に由てか心を降して聲利に靡れんやと也、【兀硉】韻會本作峍、峍屼山崖貌、氣象屹

絶世遺紛厖、

【仙翁】道家の術士を指て云、廬山は三十六福地の一也、故に道流の宮觀多く在焉、【釋子】は僧徒を指て云也、廬山の中術士僧徒の居所多くして往々に其輩に逢へども、吾は嘗より彼れが學の虚幻にして實ならず、言の怪哤にて純ならざるを惡み嫌ふて、慕ひ希ふことなきと也、【哤】字彙語雜亂也、四方之民雜處則其言哤々雜異、【但見】道釋虚妄の道は所好に非ず、但其堂宇山に倚て趣をなす、勝絶の景致を見て歡ぶと也、【丹霞】霞の日に映じて紅に見ゆる也、【翠壁】崖壁に苔蘚生じて翠色なるを云、壁崖の峭なる也、字彙臨危謂之壁、【映樓閣】道釋の樓閣也、山の間遠近相錯て映對する也、【晨鐘暮鼓】樓閣に鳴す所、晨の鐘暮の鼓互に聞えて聲不斷也、【杳靄】山氣たちこめておぼろ〳〵とする間を云、【旛幢】共はた也、【旛】字彙、孚艱切旂也、【幢】旌旂之類、方言幢翳也、楚曰幬、關東西曰幢、釋名幢容也、施之車蓋童々然以隱蔽形容也、【幽花野艸】山中に所生の幽花或は野艸の類、常には見なれぬ種にて、曾て其名をも不知と也、【風吹――】異花薬草を見て名は知らねども風に吹かれ霧氣に濕ふて異芳を轉じ傳て澗谷に香しき也、【時有白――】或は時に白鶴の飛來て雙び舞を見る也、【幽尋――】幽趣を尋て遠く行き去れども、千巖萬嶺幾ばく重疊して竟に盡し極められぬと也、不可は禁止の辭に非ず、【便欲――】一旦に行遊し盡すべき處に非ず、便ち人世を斷絶し紛華厖雜の事を遺棄して此に遁んことを欲し願ふと也、【厖】雜也、

羨君買田築室老其下、插秧盈疇兮釀酒盈缸、胡江反 欲令浮嵐曖翠千萬狀、坐臥常對乎軒窻、君懷磊砢有至寶、〔砢〕音可反 世俗不辨珉與玒、音江

【羨君】劉中允を指して云、【老其下】老は衰老の老に非ず、歸老の老也、左傳隱公の使營菟裘吾將老焉と云へる老字と同じ、隱居して事に與からざるを老すと云、其下は廬山勝景の地を指て云也、【插秧】早苗を

聳る也、【晻靄】韻會晻、鄔感切、不明也、廣韻晻靄暗也、冥也、○班固終南山賦曖㬭晻靄若鬼若神、【后土】天地を崇て皇天后土と云ふ、左傳僖公十五年、晋大夫稽首曰、君履后土而戴皇天、【鴻龐】鴻大也龐注莫江反字彙高屋、廬山の勢下土の大なる高屋を壓しひしぐ如くなると也、上を凌き下を壓し、極て高大なるを云、

試往造乎其間兮、攀緣石磴窺空谾、千巖萬壑響松檜、懸崖巨石飛流淙、水聲聒々亂人耳、六月飛雪灑石矼、

【試往―】岸上より望て、上み青霄を摩し下后土を壓すを見て、近づきよつて登り見ばやと思ひ、試に往て山の間に造り、石の磴を攀ち緣て上に登り、空く杳かにして山の深き處を窺ひ臨む也、【攀緣】は攀援と同じ、木の根蔦かづらなとに執りついて山に登るを云、【石磴】磴小坂、又登陟之道、急なる坂を石をたゝみてがんぎとして人を上すきざはし也、【谾】注呼江反山深貌、相如賦深山涳谾、【千岩―】上より窺ひ見れば、千萬重の巖壑には松檜あつまり茂りて、風聲を振ひ遠く響く也、【懸崖】峭に截りたてたる崖を云、【巨】は大也、【淙】流水有聲也、懸絶してさがしき崖下に、大石に激して流れる水は、淙々と聲あつて飛奔する也、其水の聲聒々とかまびすしうして、人の耳を驚し亂す也、【聒々】說文讙語也、廣韻、聲擾也、【六月飛―】其石に激して飛奔するは、沫を噴き玉を碎く、看之ば六月の盛暑に當て、雪亂れ飛で石矼に散じ灑ぐかと思はるゝと也、矼は石橋也、柱を立たる橋に非す、石を聚て人の跳り踰るほどの橋となしたるを云、

仙翁釋子亦往々而逢兮、吾嘗惡其學幻而言哤、但見丹霞翠壁遠近映樓閣、晨鐘暮鼓杳靄羅旛幢、幽花野草不知其名兮、風吹霧濕香澗谷、時有白鶴飛來雙、幽尋遠去不可極、便欲

走其下、是爲揚瀾左里兮、洪濤巨浪日夕相舂撞、

【廬山―】廬山はさても高きことかな、幾く千仞あるやらん、窺ひ知がたき也、【仞】字彙孔安國云、八尺曰仞、王肅依爾雅云四尺曰仞、鄭又云七尺曰仞、禮祭義築宮仞有三尺、【根盤】山の根をきを云也、山の根さして盤踞すること、其廣大幾ばく百里あるやらん測り知られざると也、【巀然】字彙巀與巀同、巀音截、巀嶭山高峻貌、【屹立】屹魚乞切、屹崒山貌高くさかしうして、長江の滙に秀で立たると云義也、【長江西―】長江の流れ廬山の下を循て走り流る也、明吳拭武夷游記云、水與山相映發者武夷匡廬耳、匡廬水在山外、武夷水在山中、匡廬雖峙江湖浩蕩間、終是主客相偶、武夷則清溪九曲流出其中、【是爲揚瀾左里】未詳也、舊說傳燈錄二十六道堅禪師章云、如何是祖師西來意、師云、揚瀾左里無風浪起、抄云在江西廬山之下鄱陽湖中二處名、其處風波至多也、輔近ろ偶〻翰墨大全卷首の地圖を檢するに、揚瀾左蠡に作る、又大全に圖經を引て云、左挾彭蠡右傍通川、これに由て觀れば廬山は德化縣にあり、彭蠡湖は德化縣の東にあり、左蠡は山左の彭蠡湖と云義ならんか、長江西より來て廬山の下を走り東に流る、是を瀾を揚る山左の彭蠡湖と爲と云ときは、文義も通ずるに似たり、不知果して如此ならんや否、臆說と云へども姑く附して以地理に精しき人の正んことを竢つ、【洪濤】郭景純江賦、鼓洪濤於赤岸、注洪大也、濤波也、【巨浪】唐凌敬詩懸崖激巨浪、脆葉殞驚飈、【舂撞】舂はうすづく也、舂米也、盤渦の水は米を擣く臼中の如し、故に水勢うづまき湧を舂と云、撞は擊也突也、水勢岸を撞て激する也、

雲消風止水鏡淨、泊舟登岸而遠望兮、上摩靑霄之晻靄、（晻於感反）下壓后土之鴻龐、（莫江反）

此四句天晴れ湖靜なる景を云、雲も消し風も止て湖上無波ときは、水面鏡の如く淨して一碧萬頃也、此時舟中に泊り、或は岸上に登て遠く廬山の體勢を望めば、上は靑々たる高霄の晻靄を摩挲して山頂高く

○廬山高　贈劉中允、以廬山高名篇、蓋以廬山比中允之高節。

歐陽文集五載之、皇祐三年作也、起句の字を取て篇に名けたる也、【廬山】大明一統志五十一、南康府廬山在府北二十里、古名南障、世傳周武王時匡裕兄弟七人結廬隱居於此、故名其山、疊嶂九層崇巖萬仞、周五百餘里實南方巨鎭也、○藝文類聚卷七曰、廬山者江陽之名嶽、其大形也背岷流、面彭蠡、蟠根所據亘九百里、重嶺桀嶂仰插雲日、俯瞰川湖之流焉、○陳仁錫潛確類書二十一、江西九江府云、廬山在府城南山之陰也、古名南鄣山、高二千三百六十丈、周二百五十里、其山九層川亦九派、山海經所謂三天子鄣、亦曰三天子都也、一名匡廬山、亦曰康廬、又爲匡山、又曰匡阜、道書第三十六福地天將雨、則有白氣先摶而纓絡于山嶺下、俗謂之山帶、及至觸石吐雲則倏忽而集、或大風振岩逸響動谷、羣籟競奏其聲駭人、○寰宇記、匡裕兄弟七人皆有道術、結廬于此仙去宮廬尚在、故曰廬山、山有三宮、上宮居岩表人不能及、有三名梁長十丈潤盈尺、其下虛懸、晉術士吳猛嘗於此岩樹下見一老翁以玉盃承甘露漿與飮、次宮隔一谷有界城、悉是平石兩邊有一圓峯、呼爲左右帳、立羣石如駝馬之形、下宮在彭蠡湖際、其山有紫芝田四十畝、常有二仙童採芝、山有上霄峯、雙劍峯、雞公山、圭璧峯、錦繡峯、蓮華峯、佛手岩、香爐峯、大林峯、擲筆峯、紫霄峯、石門諸勝、而五老峯爲最高、又有蓮華洞、繙經臺、聖燈崖、虎溪、天池、康王谷、栖賢谷、文殊臺、清源池、金井、玉淵無不極其高深幽怪、而瀑布尤甲天下、至如石雁之翔舞寶樹之扶疎、乃其小者矣、伏滔謂爲江陽之名岳、梁元帝謂爲南國之德鎭、湛方生以爲神明之區域云、注【劉中允】萬姓統譜、劉渙字凝之、高安人、志尙高潔、精詳史學、天聖中進士仕爲潁上令、以剛直不能事上官、棄去家于廬山、歐陽修高其節、作廬山高詩以美之、自號西磵居士、○詩林廣記後集卷一載此詩、題作廬山高贈同年劉凝之歸南康、注劉渙字凝之、負氣節不屈于時、卜居廬山落星渚、歐公作此贈之、

歐陽永叔

廬山高哉幾千仞兮、根盤幾百里、巀然屹立乎長江、長江西來

ことは則險なり、只守る人忠義の士に非れば、豺狼となつて反噬の變起り易し、身かたの中竊に不臣の心ある者あらざることを得んや、此れ最も可虞の愁なると云意を云へり、

朝避猛虎、夕避長蛇、磨牙吮血、〔吮〕粗兗切、**殺人如麻、錦城雖云樂、**成都記、府城呼爲錦官城、以江山明麗錯雜如錦也、**不如早還家、蜀道之難、難於上青天、側身西望長咨嗟、**

按唐書、房琯杜甫仕於蜀、時嚴武爲帥、屢欲殺之、李太白作此篇、爲房與杜危之也、

【朝避―】猛虎長蛇は皆羌夷の心に比して云、蜀道の險なるのみに非ず、蜀中に所有皆人を害するの禽獸也、故に朝には猛虎の害を避け、夕には長蛇の毒を避けて雜り居かたしと也、朝に專ら虎を避け暮には妨なきと云に非ず、朝暮に虎蛇の害を避くの意也、此れ互文の法也、陸機詩、猛虎憑林嘯、謝玄暉詩、長蛇固能剪、【磨牙】楊雄長楊賦曰、鑿齒之徒相與磨牙而爭之、【如麻】史記天官書、秦以兵滅六王、幷中國、外攘四夷、死人如亂麻、虎蛇の害をなすこと、牙を磨き血を吮て人を殺し、麻を亂したる如くに骸骨相仍て多き也、【錦城】蜀の成都の府城を錦城と云、江山の景明かに麗く、萬象錯雜して錦文の如くなるに因て也、【不如―】古詩客行雖云樂、不如早旋歸、士贇曰、錦城雖云樂、不如早還家者、語意蓋自楚辭招魂中來、李白意らく、蜀は羌夷の國、人の心虎蛇の如くにして共に居かだし、恐くは變を生じ易からんことを、錦城云に樂と云とも、早く中國に還り玉はんには不如と云意也、【蜀道―】【側身】文選四愁詩、側身北望涕沾巾、【咨嗟】歎息する也、鮑照詩、絃絕空咨嗟、結句に又蜀道の難を云は、再び言て猶不足、故に三たび言て君を思ふの懷を伸ぶ、注蜀道難の詩房琯杜甫が爲に作ると云は、唐書嚴武が傳に據るの說也、士贇其謬を辨ずること題注に詳也、明唐汝詢曰、是篇三稱蜀道之難、慨歎彌切、雖三閭繫心懷王、亦不過此、青蓮可不爲忠乎、然世稱老杜一飯不忘君、而不及李者、正以其詩托興高遠、非俗輩所能窺、今余闡其奧旨、不惟辭義粲然、即孤忠憤激之意、庶可暴揚天地間矣、令逝者有知、亦千秋一快哉、

夏不竭、【喧豗】木華海賦磊匒々而相豗、洼豗擊也、水勢激して喧く相豗て流る也、【砯崖】郭璞江賦砯岩鼓作、洼砯水擊岩之聲、激水崖を擊て聲ある也、【轉石】急流の勢盛にて石を轉し流すなり、【萬壑雷】水聲萬壑に震ひ響て、雷の霹靂する如く也、上林賦、礧石相擊、硠々礚々若雷霆之聲、【其險也—】蜀道の險難なること如此、嗟爾遠道の人、危を侵し嶮を歷て胡爲そ此蜀道に來れるやと也、本集士贇曰、嗟爾遠道之人胡爲乎來哉者、以喩疏遠之臣、若白者雖欲從君於難、胡爲而來、輔按に此說未穩、胡爲乎來哉 と云語意を按ずるに、いかにぞや此には來りたると云義也、家語四孔子往觀之曰麟也、胡爲來哉、胡爲來哉、と云辭と同意也、なんぞ此に來ることあらんやと云意に非ず、愚謂らく上の文備に蜀道の險難なる狀を言ふ、因て嗟嘆し深く西幸の過計なることを愁て、首として諫をなせし楊國忠が輩を咎めて言ふ、遠道の人胡爲そ過計をなして此蜀道には來れるやと也、且つ下を起して蜀人羌夷の性虎の暴なるが如くにて、王者のたのみおはすべき所に非ることを云也、此句は承上起下となして看べし、遠道の人は直に入蜀人を指て云べし、疏遠の臣を指すに非ず、【劍閣】は蜀道絕險の處也、酈道元水經注、小劍去大劍三十里、連山絕險飛閣相連、故謂之劍閣、【崢嶸】高くそびえたる貌也、楚辭下崢嶸而無地、注崢嶸高貌、【崔嵬】爾雅石戴土謂之崔嵬、字彙崔嵬高峻貌、【一夫—】蜀都は要害の地、一夫險阻に據て關を守れば、一萬の軍士を以て攻れども能く破り開くことなきとなり、注【左太沖】傳前に見えたり、蜀都賦文選卷四に載せたり、【所守—】劍閣を守る者心腹の人なれば、關門堅牢にして身かたの衞となる、若し守る者其人に非ずして險に據て謀反するときは、身かたの固め却て敵の要害となり、豺狼と化して忽我を害す大事の關門也、張孟陽劍閣銘云、巖々梁山、積石峨々、遠屬荊衡、近綴岷嶓、南通邛僰、北達褒斜、狹過彭碣、高踰嵩華、惟蜀之門、作固作鎮、是曰劍閣、壁立千仞、窮地之險、極路之峻、世濁則逆、道淸斯順、閉由往漢、開自有晉、秦得百二、幷吞諸侯、齊得十二、田生獻籌、矧茲狹隘、土之外區、一人荷戟、萬夫趑趄、形勝之地、匪親勿居、四句言ふは玄宗蜀に幸し玉ふは、劍閣の險を固とし、敵若し來らば拒ぎ守るによからんと云を以て也、劍閣の固め險なる

か還り玉はんや、【畏途】は險絶おそろしき道途、【巉巖】はさがしき巖攀ぢ躋りがたからんと也、【悲鳥】啼聲の悲しき鳥也、【號】は啼也、【呼雌】本集作從雌、雄鳥其雌を呼て林間を飛めぐり啼く、山中所聞さびしき者也、李白言ろは玄宗既に蜀に幸なつて、何の時か又長安に還りて天下の主となり玉はんや、蜀の道路は畏ろしき途さがしき岩なれば、忠義の士幸に從んと欲する者ありとも攀附することなり難かるべし、兵衛の人少にして道中さびしく只悲鳥の聲古木に聞え、山鳥雌雄林を繞て飛ぶを見玉はんと云意也、【又聞—】子規は杜宇と云、又杜鵑と云、蜀の鳥也、故に云ふ或ときは又子規の夜月に啼て、聲空山に響き愁はしきを聞玉はんと也、華陽國志云、蜀魚鳧後有王曰杜宇、教民務農、七國稱王、杜宇稱帝號曰望帝、會有水災、其相開明決玉壘山以除水害、帝遂委以政事遂禪位于開明、帝升西山隱焉、時適二月子鵑鳥鳴、故蜀人悲子鵑鳥鳴也、【蜀道—】又申言ふは蜀道の險なること一言にして尙不足、故に再び言ふ也、【使人—】人は太白自ら言ふ也、太白玄宗の西に幸きあることの非計なるを思へども所訴なし、惟自心に感傷して顔色に形る、故に凋朱顔と云、王康琚詩凝霜凋朱顔、

連峯去天不盈尺、枯松倒掛倚絕壁、飛湍瀑流爭喧豗、〔豗〕音灰 砯崖轉石萬壑雷、〔砯〕普氷反、 其險也如此、嗟爾遠道之人胡爲乎來哉、劍閣崢嶸而崔嵬、〔崢〕王耕反〔嶸〕乎萌反〔崔〕徂回反〔嵬〕吾回反、 一夫當關、萬夫莫開、 左太仲蜀都賦、緣以劍閣阻以石門、一夫守隘萬夫莫當、 所守或匪親、化爲狼與豺、

【連峯】連綿相疊る峯也、謝靈運詩連峯競千仞、【不盈尺】峯高して天に逼り其一尺にも不足と也、甚だ高を云也、謝惠連雪賦、盈尺呈瑞於豐年、【枯松—】枯たる松枝幹下り垂れて倒に掛り、絕壁の截りたてたる崖に倚る也、【絕壁】は壁の如く屹立たる崖を云、【飛湍】飛流の湍水也、字彙激湍急瀨、【瀑流】俗に云ふ瀧也、孔靈符會稽記懸雷千仞謂之瀑布、飛流灑散冬

泥何盤々、百步九折縈岩巒、捫參歷井仰脅息、(捫音門)以手撫膺坐長歎、(他干反)

【上有橫河斷海之浮雲】本集作上有六龍回日之高標、蜀には海なし本集に從て說べし、蜀道の險仰ぎ瞻れば、上には六龍日をのせて往回し、道を取る高標の巔あり、下には崖を衝き石に激して流水逆折盤回してすさまじき川あると也、本集注春秋命曆序曰、皇伯登出扶桑日之陽、駕六龍以下上、蜀都賦羲和假道於峻坂、陽烏回翼乎高標、圖經高標山一名高望、乃嘉定府之主山、巋然高峙萬象在前、【黃鶴ー】黃鶴は飛ぶことの高き者也、猿猱は攀ることの捷者也、惟山高く道險しきこと絕だしき故に、鶴も飛び過ることを不得、猿も攀わたることを不得して愁ると也、【猿猱】爾雅猱猨善援、郭璞注便攀援、【青泥】輿地廣記云、青泥嶺在沔州長擧縣西北五十里、懸崖萬仭上多雲雨、行者多逢泥淖、青泥の嶺上入蜀の路也、言は青泥の路何ぞ盤々とめぐることの甚しきや、百步の中には九折して巖巒を縈り登ると也、【捫參歷井】參井は二星の名也、甘氏星經云、參十星玉井四星、在參左足下、【捫】楚辭據青冥而攄虹兮、遂倏忽而捫天、注捫摸也、地理志禹貢梁州之域、秦地鶉首之次、天官東井與鬼之分野入參一度、古蜀國也、【脅息】漢書酷吏傳嚴延年傳、豪彊脅息、師古曰脅歛也、屛氣而息也、參と井とは蜀の分野也、蜀道の險絕天に逼て星宿に近し、故に上み參井を捫り歷て、登るに行なやみて進み不得、仰で氣を屛て息し、膺を拊て坐して嘆息するのみ也、

問君西遊何當還、畏途巉巖不可攀、但見悲鳥號古木、雄飛呼雌繞林間、又聞子規啼夜月、愁空山、蜀道之難難於上青天、使人聽此凋朱顏、

【問君】士贇曰、君字非泛然而言、猶杜子美北征詩、恐君有遺失、及君誠中興主之義、所謂君明皇也、【西遊】は幸蜀あるを云、今西の方蜀郡に幸きありて、何の時

記蘇秦傳、秦四塞之國、東有關河、西有漢中、南有巴蜀、北有代馬、此天府也、李白言ろは蜀は褊僻の小國にて地の一隅にあり、自古聲敎の不及所にして秦の近きと云へども不相通、中國帝王の都となすべき所に非ずと云意也、【西當—】太白は山の名、注に星の分野と云非也、本注に太白山在洋州眞符縣西五十里、山面隷鳳翔府、山背屬眞符、大明一統志、鳳翔府太白山在郿縣東南四十里、【有鳥道】至高至險にて鳥ならでは往來しがたき路を鳥道と云、南中志交趾郡治龍編、自興古鳥道四百里、【可以橫絕】山巓をよこぎれに飛びかけりて稍〻度ると云義也、橫絕二字出史記高祖歌、曰羽翼已就橫絕四海、【峨嵋—】本注圖經云、大峨山峨眉縣南百里、兩山相對如蛾眉、記云、其山匝周千里、有石龕百一十二、大洞十二、小洞二十八、南北有臺、言ろは五丁未だ道を不開以前は、惟長安の西太白山に當て僅に鳥の往來する通路ありて、峨嵋の巓を橫絕す、人跡の往來は曾てならぬ所となり、【地崩山—】華陽國志蜀志云、蜀有五丁力士、能移山、擧萬鈞、秦惠王作石牛五頭、朝瀉金其後、曰牛便金、蜀人悅之使使請石牛、惠王許之、乃遣五丁迎石牛、既不便、金怒遣還之、惠王知蜀王好色、許嫁五女於蜀、蜀遣五丁迎之、還到梓潼、見一大蛇入穴中、一人攬其尾掣之不禁、至五人相助大呼拽蛇山崩、時壓殺五人及秦五女並將從、而山分爲五嶺、今其山或名五丁冢、【天梯】石棧蜀の棧道と云是也、天梯は急に登ること天に登る如なるに因て云也、石棧は片崖なる處にかけづくりに閣道を作て人を通ずる也、【鈎連】くさり連て長く相續を云、梁州圖經云、棧道連空極天下之至險、與利州至三泉縣、橋閣共一萬九千三百八十間、護險編欄共四萬七千一百三十四間、郡國志褒城縣北口曰斜、南口曰褒、長四百七十里、同爲一谷、兩谷高峻、褒水所流、昔張良送高皇帝至褒中、說燒棧道、卽此地、言ろは五丁既に道を開くの後、梯棧相連て行路を通すれども、玄宗幸の後、賊若此棧道を燒かば如何んともし難からんと云意也、

上有橫河斷海之浮雲、下有衝-波逆-折之回-川、黃-鶴之飛尙不能過、猿-猱欲度愁攀援、（猱）奴刀反　靑

自已故作是詩以達意也、明唐汝詢唐詩解十二云、按天寶十五載祿山陷潼關、玄宗懼用楊國忠計幸蜀、太白聞而憂之故作是詩、首稱蜀種之難非天子所宜幸、次述中途之險爲己所深憂、末言蜀中險惡非王者所宜居、蓋欲乘輿速返耳、此一篇或は杜甫が爲にすと云ひ、或は章仇が爲にすと云說あれども、取に不足こと士贇が所辨の如し、唐汝詢が解も士贇が所見の如なるときは、此詩玄宗蜀に幸せらるゝを非計なりと危み懼て作るの詩となして可見、

李太白

噫吁戲危乎高哉、蜀道之難難於上青天、蠶叢及魚鳧、開國何茫然、蜀王蠶叢祠、今呼爲青衣神、在聖壽寺、蠶叢氏教人養蠶蜀後爲魚鳧氏、

【噫吁戲】驚異するの辭也、蜀の方語也、宋祁筆記云、蜀人見物驚異輙曰噫嘻嚱、李白作蜀道難因用之、歎異して曰危かな高かな、蜀道險難にして難行こと青天に上るよりも難きと也、【上青天】劉向說苑云、枚乘諫吳王曰、必若所欲爲危如累卵、難於上天、【蠶叢】上古の蠶叢及び魚鳧國をこゝに開けると、何ぞ茫然として荒僻なるや、楊雄蜀王本紀云、蜀王之先名蠶叢柏灌魚鳧蒲澤開明、是時人民椎髻哤言不曉文字、未有禮樂、從開明上到蠶叢積三萬四千歲、成都記云、蠶叢之子有柏灌、柏灌之後有魚鳧、皆蠶叢之子、魚鳧治導江縣、嘗獵湔山得道、乘虎而去、杜宇遂繼魚鳧、秦惠王討滅蜀王、封公子通爲蜀侯、惠王二十七年使張儀築都城、後置蜀郡、以李氷爲守、氷穿兩江爲人開田、百姓享其利、蜀人始通中國、

爾來四萬八千歲、不與秦塞通人烟、西當太白有鳥道、西方正當太白星分野有鳥道至狹至高、可以橫絕峨嵋巓、地崩山摧壯士死、昔蜀中無路入秦、秦惠王聞蜀有五丁力士、乃以鐵作牛、詐稱其牛糞金、蜀侯使五丁壯士開山作路取牛、後五丁死蜀爲秦所滅、然後天梯石棧相勾連、

【爾來】蠶叢より以來四萬八千歲の久きを歷れども、竟に秦塞の間、人烟を絕て通問せず、【秦塞】は秦國の邊塞也、崔豹古今注塞者塞也、所以擁塞夷狄也、史

來にてはあるまじきやと也、【注】【白溺水】此事新唐書白傳不載、才子傳云、白晚節好黃老、度牛渚磯、乘酒捉月沈水中、

○蜀道難

論蜀道之險阻艱難、托興譏世道之危險人心之嶮巇也、

本集三載之、士贇曰、按王僧虔技錄相和歌瑟調三十八曲內有蜀道難、因知亦古樂府名也、本集圈外注云、士贇箋事已有客曰洪駒父詩話云、新唐書嚴武傳曰、武在蜀放肆、房琯以故宰相為部內刺史、武踞慢不為禮、最厚杜甫、然欲殺甫數矣、李白作蜀道難乃為房與杜危之也、新唐書據范攄雲溪友議言之耳、按唐書撫言載、李白始自西蜀至京、道未甚振、因以所業贄謁賀知章、知章覽蜀道難一篇曰、子謫仙人也、按白本傳天寶初因吳筠被召亦至長安、時往見賀知章、則與嚴武帥蜀歲月懸遠、嘗見李集一本於蜀道難題下注諷章仇兼瓊也、考其年月近之矣、謂危房杜者非也、新唐書第弗深考耳、沈存中筆談云、前史稱嚴武為劍南節度不法、李白為作蜀道難、按孟棨所記、白初至京師、賀知章聞名首詣之、白出蜀道難、時乃天寶初也、嚴武為劍南乃在至德以後肅宗時、年代甚遠、蓋小說所記率多舛訛、今予以何說為是乎、予曰以臆斷之其說皆非也、史不足徵、小說傳記反足信乎、所謂嘗見李集一本於蜀道難下注諷章仇兼瓊者、山谷黃魯直嘗於宜州用三錢買雞毛筆、為周惟深作艸書蜀道難、亦於題下注云、諷章仇兼瓊也、然天寶初天下乂安四郊無警、劍閣乃長安入蜀之道、太白非狂者、乃拳々然欲其嚴劍閣之守、不知將何所拒乎、以此知其不為章仇兼瓊也、嘗以全篇詩意與唐史參考之、是蓋太白初聞祿山亂華天子幸蜀時作也、若曰為房琯杜甫章兼瓊而作、何至始引蠶叢開國終言劍閣之險、復及所守匪親化為豺狼等語哉、引喩非倫、以是知其不為章與房杜也、按唐史哥舒翰兵敗潼關不守、楊國忠首倡幸蜀之策、當時臣庶皆非之、馬嵬父老遮道諫曰、宮闕陛下家居陵寢陛下墳墓、今舍此欲何之、又告太子曰、若殿下與至尊皆入蜀中原百姓何為主、建寧王倓亦曰、今殿下從至尊入蜀、若賊兵燒絕棧道則中原之地拱手授賊、既上至扶風士卒潛懷去就、往々流言不遜、比至城都從官及六軍至者千三百人而已、太白此時蓋亦深知幸蜀之非計、欲言則不在其位、不言則愛君憂國之情不能

が豪放尋常の物に非ず、定て是上天紫皇の案前に係き置れし五色の麒麟、忽然として繋ぎたる黄金の鎖を掣斷し、人間に來て游たるなるべしと也、案前本集作殿前【五湖】羣書拾唾云、太湖一名震澤、一名笠澤、一名具區、謝陽湖一作射陽、五庭湖又名青艸、又名雲陽、丹陽湖宮亭湖一名彭蠡澤、今鄱陽湖、五湖之名不一、周禮楊州其浸五湖、按張勃呉錄曰、五湖者大湖別名、以其周行五百里三萬六千頃、故以五湖名之、此說良是、揚升菴文集七十六云、五湖之說有二、周禮楊州其浸五湖、范蠡云與我爭三江五湖之利者非呉耶、史河渠書曰、於呉則通渠三江五湖、貨殖傳曰、夫呉有三江五湖之利、太史公自敘曰、登姑蘇望五湖、此五湖者即具區也、其派有五故曰五湖、一名震澤、一名笠澤、張勃呉錄云、五湖者太湖之別名、以其周行五百里三萬六千頃、故以湖名、義興記太湖、射湖、貴湖、陽湖、洮湖爲五湖、酈道元水經謂長塘、湖射、貴湖、上湖、滆湖、爲五湖、張守節史記正義云、菱湖游湖漠湖胥湖皆太湖、東岸五灣爲五湖、虞翻云太湖有五道、東通長洲松江、南通嘉興匪溪、西通宜興荊溪、北通晉陵滆湖、西南通嘉興匪溪、陸魯望云、太湖上稟咸池之氣、一水而五名、大同小異、皆禹貢之所謂震澤也、王勃文襟三江而帶五湖、則總言南方之湖、洞庭一也、青艸二也、鄱陽三也、彭蠡（一名宮亭湖卽禹貢滙澤）四也、太湖五也、呉越春秋五湖、貢湖、游湖、胥湖、梅梁湖、金鼎湖也、韋昭曰、胥湖、蠡湖、洮湖、滆湖、就太湖而五、虞翻曰、太湖水通五道、謂之五湖、陸龜蒙曰、太湖上稟咸池五車之氣、故一水五名、又揚全五湖賦止爲太湖而作、周禮楊州之浸曰五湖【如銀山】大浪高く揚て、白きこと銀を山とするが如き也、【滿船―】李白五湖の風浪に乘じて船を泛べ、船中酒を載て鼓を撾ち樂をなして經過する也、此れ白が牛渚磯を度ることを云か、【賀老】賀知章也、【成異物】死して鬼となる故に異物となると云、【顚狂醉態】放誕なること風顚狂の如くなるを云、【誰敢和】賀知章存生の時は、腰に帶たる金龜を以て酒に換て懽を盡したれども、賀老死して後は太白が氣象と相適者なくて、敢て和する人なき也、【寧知江―】此結句は太白捉月水に溺れ死と云說に據て作る也、言は太白は水に溺て死したりとて、江邊に墳あれども、寧ろ知んや李白醉て水に入り、其まゝ水底に醉ひ臥て、今に到るまで猶不醒して不出

帝時大宛馬以銅鑄像立於署門、因以爲名、東方朔主父偃嚴安徐樂皆待詔金馬門、即此、

虎殿龍樓無不可、一朝力士脫靴後、太白嘗醉、令高力士脫靴、力士深以爲恥、以白樂章飛燕事激妃子之怨怒、**玉上青蠅生一箇、**褚遂良被貶、韓瑗曰、遂良社稷臣、蒼蠅點白玉傷於讒也、

【虎殿龍樓】は假りに設て云也、實に此殿樓あるに非ず、玄宗七寶牀上に白を坐せしむ實に寵遇也、然れども白が仙才に於ては過當に非ず、たとへ虎殿龍樓の上に坐せしむとも亦可矣、處として不可なることなき人品なりと云意也、【一朝力―】事は第二卷李白が傳に詳也、玄宗李白を白蓮池に召されしとき、白醉て船に上り不得、高力士に命じて靴を脫しむ、力士素より貴し、白か爲に靴を脫しむるを以て深く耻とす、或時貴妃白が所作の樂章清平調を誦す、力士幸の時節なりと思ひ、貴妃を怒らしめて言ふは、白が詩飛燕を以て貴妃に比す、飛燕は氏族の賤き者也、是を以て比するは貴妃を賤むる也、然るに喜て誦せらるゝは何ぞやと云、貴妃げにもと思て太白を怨み、白が官を阻て不授、遂に放還さしむる也、【玉上】力士が太白を讒したるは、玉の上に青蠅の一箇生じたると同じきと也、蠅は古來讒人に比す、詩青蠅云、營々青蠅止于棘と云へるも、讒人多を云也、注【褚遂良】新唐書列傳三十、褚遂良錢塘人也、貞觀中爲起居郎、遷諫議大夫、俄授太子賓客、進黃門侍郎、參綜朝政、高祖即位、封河南郡公、帝將立武昭儀、遂良極諫致笏殿間曰、還陛下此笏、丐歸田里、帝大怒命引出、會李勣議異武氏立、乃左遷遂良桂州都督、貶愛州前史、【韓瑗】唐書列傳三十、韓瑗字伯玉、三原人、瑗博學曉吏事、

紫皇案前五色麟、忽然掣斷黃金鎖、五湖大浪如銀山、滿船載酒撾鼓過、賀老成異物、顚狂誰敢和、寧知江邊墳、白溺水葬采石江邊、**不是猶醉臥、**

【紫皇】天帝を云也、天に紫微垣あり帝坐其中にあり、故に紫皇と稱す、此二句白が前生を想像て云ふ、太白

不早富貴有時來、偸閒強歡笑、公謂功名富貴信有時命、不可溺意貪求、何如乘取青春及時行樂莫與離憂買生老、

【天子ー】今洛陽に赴て行かるゝはたのもしきぞ、天子は聖明にして上に在し、君は年正に少し必ず大に用らるべきぞ、たとひ功名遽に著顯せずとも恨み愁ることなかるべし、人の富貴は時ありて自然に來る、幸て致すべき物に非ず、只塵裡に間を偸て強て歡笑をなすべし、離索を憂るが爲に年をよらして、早く老貌をなすことなかれと也、老は外より買ふ物に非ざれども、心神を役して形をつからかすは、好て老を求るに似たり、故に買と云也、

○古意

禪月集卷二載之、題作常思李太白、古を憶ふの意を作れるに因て古意と云、

釋貫休

才子傳十、休字德隱、婺州蘭溪人、俗姓姜氏、風騷之外精於筆札、休一條直氣海內無雙、意度高疎學問叢脞、天賦敏速之才、筆吐猛銳之氣、樂府古律當時所貴、雖尚崛奇、每得神助、果僧中之一豪也、賜號禪月大師、勅塔葬丈人山青城峯下、

常思李太白、仙筆驅造化、玄宗致之七寶牀、李陽冰序太白集、公之文章力敵造化、天寶中玄宗下詔徵就金馬、降輦步迎以七寶牀、賜食御手調羹以飯之、

【常思ー】貫休常に李白が文章の妙を思ふに仙筆を以て千變萬化の神奇を製し出すは、天地の造化を驅逐して我より主宰を爲すが如くなると也、造化は天地の間萬物の消息をなす天道の流行也、造は今までなきものを生し出す也、化は今見在の物を消化して無に歸する也、【玄宗ー】李白始て玄宗に見ゆるとき、玄宗白を引て七寶の牀に坐せしめ玉ふこと、注に引李陽冰が序に見たり、【七寶牀】西京雜記云、武帝爲七寶牀雜寶案、注【李陽氷】氏族大全、李陽氷工篆法、處州有吏隱山、乃陽氷嘗爲縉陽令、秩滿退居此山、篆刻至今在焉、【金馬】三輔黃圖云、金馬門宦者署、武

んとおもへども、劒歌の聲調苦だ悲き故に、聞く人苦だ厭ひ嫌ふに因て不舞と也、家語好生篇、子路戎服見於孔子、拔劒而舞之曰、古之君子固以劍自衞乎、史記項羽記項莊入爲壽曰、軍中無以爲樂請以劒舞、此詩に劒歌と云何人の所作そ未考、注に歐陽修の詩を引は非也、乖崖は太宗の時の人歐陽より先輩也、注に所引の詩は事文類聚續集劍部に見えたり、【我欲—】我又瑤琴を彈して酒を勸めんとおもへども、淳風已に死し去て回らんと云の心なし、是れ又離別の宴に忌みあり、故に不彈と也、【淳風】は李淳風か、李淳風は唐の太宗の時の人、天文曆算陰陽の學に明かなり、唐書淳風が本傳、或は事文類聚等を考るに、淳風琴を彈すること不見、此句を以て觀れば淳風別時に琴を彈じ、去て終に死して不再來の故事あるに似たり、未考得後の人宜考證、【不如—】劍歌瑤琴以て懽をなし難し、不如只海を轉じて酒となし、何ほども多く樽に盈てゝ傍邊の花を帷幄となし、其中に於て痛飲し、青春の景を我が物と贏取て、片時間をも徒らに過さず歡樂すべしと也、【轉海】酒の甚だ多きを誇言する也、【幄】以布爲之、四合象宮室、

明朝疋馬嘶春風、洛陽花發臙脂紅、車馳馬走狂似沸、家々帳幕臨晴空、

【明朝—】明朝疋馬に乘て出られば、馬は春風に向て行々嘶にてあらんと也、【疋馬】事文類聚後集三十八馬部云、顏回望吳門馬見一疋練、孔子曰馬也、然則馬之光景一疋長耳、故後人號馬爲一疋、或曰馬夜行目明照前四丈、故曰一疋、或曰春秋左氏說、諸侯相贈乘馬束帛爲疋、與馬相疋耳、【洛陽花—】以下三句は行人洛陽に到て見ん所を想ひやりて云也、此去て洛陽に到られば、花の開けて臙脂の色の如なるを見られんと也、【臙脂】はかたべにと云者也、事文類聚別集六云、燕脂起自紂以紅藍花汁凝作脂、以爲桃花粧、蓋燕國所出、故名燕脂、【車馳—】洛陽は繁華の地、特に春の時節なれば、遊人公子車馬を馳せ走らして花を尋めぐり、狂遊湯の沸く如く盛にして、家々の帳幕を晴空に臨て張り圍むにてあらんと也、

天子聖明君正少、勿恨功名苦

春日遲々輾空碧、綠楊紅杏描春色、人生年少不再來、莫把青春枉拋擲、青春謂少年、言人貴及時行樂、青春去不復來、

起句先づ別時の景を叙す、【春日遲々】日長してゆるゆると遲く晩る也、豳風七月篇春日遲々、【輾空】碧晴天空の碧なるに、春日漸々に上るを輾と云、車輪の輾り行くに似たる故也、【描春色】春に色なし、百花の色を以て春の色とす、楊の綠杏の紅是春の色を呈し似す也、故に描春色と云、【人生―】人の年少き時は幾くもなし、一たび老て年少又來ることなし、幸に年少の時に當て綠楊紅杏の春色に遭へば、宜く時に及で樂み遊ぶべし、此青春の美景を枉て負き棄て拋擲し、よそに見らるゝことなかれと也、注【青春謂少年】補按に此說非也、直に綠楊紅杏の時を指て云べし、上の句既に年少と云、下の句又比し言ふこと重疊して不好、

思之不可令人驚、中有萬恨千愁幷、今日就花始暢飮、坐中行客酸離情、

【思之―】思之は年少再び來ることなく、佳時逝きやすきを思て、人の心を驚嘆すまじきことなると云意、【不可】は自制するの辭也、人を禁止するの義に非ず、【中有―】いかにとなれば、心中本より千愁萬恨を幷て結たる鬱懷あれば、思之歎息せば、愁恨益々甚しからんほどに也、暗に離別の事を含て未言出、【今日就―】今日花の下に就て、始て席を鋪て飮宴を暢る也、其坐中遠きに往くべき行客ありて、離別の情酸楚なると也、こゝに至て題を云ひ出す也、酸はすしと讀む、人愁甚しければ鼻中酸し、故に愁の甚きを酸鼻とも云也、

我欲爲君舞長劍、劍歌苦悲人苦厭、歐詩惟有壯士苦悲歌、拂拭塵埃舞長劍、我欲爲君彈瑤琴、淳風死去無回心、不如轉海爲飮花爲幄、嬴取靑春片時樂、

【我欲―】我れ君が爲に長劍を拔て舞を舞て、觴を進

て將來の世に傳へしむる也、【將來】は釋典に所謂未來也、後世を指す、【高山―】今猶傳て現に浯溪の高山十丈も高き蒼々たる崖石に刻みて世に存すると也、

誰能此碑入我室、使我一見昏眸開、百年廢興增歎慨、當時數子今安在、君不見荒涼浯水棄不收、時有遊人打碑賣、

【誰能―】誰か能此磨崖の碑を紙にすりて法帖とし、我が室中に入るや、一見して即ち昏翳したる眸を開て目を喜ばしむる、【百年―】百字不可泥看、數百年の間と云意也、碑文を讀て唐以來廢興の迹を觀て歎慨を增すとなり、【當時數子】郭子儀、元結、眞卿が輩を摠て云也、數子皆逝去て今は亡し、只荒涼とあれすさまじき浯溪の水邊に、磨崖は棄置て收る人なし、時々浯溪に遊ぶ人碑文を打して帖となし、世間に賣のみあると也、【打碑】は碑に刻みたる文を石ずりにするを云、打碑法居家必用九、文房部に詳也、打字歐陽公文集一百二十七、歸田錄卷二云、今世俗言語之訛、而擧世君子小人皆同、其謬者、惟打字爾、打丁雅反其義本謂考擊、故人相毆以物相擊皆謂之打、而工造金銀器亦謂之打、可矣、蓋有槌撾作擊之義也、至於造舟車者曰打船打車、網魚曰打魚、汲水曰打水、役夫餉飯曰打飯、以糊黏紙曰打黏、至於名儒碩學語皆如此、觸事皆謂之打、而徧檢字書了無此字、丁雅反者其義主考擊之打自音謪耿、以字學言之打字從手從丁、丁又擊物之聲、故音謪耿爲是、不知因何轉爲丁雅也、

○勸酒惜別

春日別を送て祖道の筵を設け、勸め飲しめて寬慰の語をなす也、

張乖崖

萬姓統譜、張詠濮州鄄城人、太宗時進士、兩知益州、築隄灌田萬餘頃、威惠及民、民皆信服、後以江左旱充昇宣等十州安撫使、遷吏部尙書知陳州、卒贈左僕射、謚忠定、詠剛方自任、爲治尙嚴猛、自號乖崖、以爲乖則違衆、崖不利物、

九廟無塵埃、

【金戈】金を以て飾たる戈也、【鐵馬】は鎧馬と云に同じ、鐵甲を被てよろひたる馬也、文選陸倕石闕銘云、鐵馬千羣、朱旗萬里、【從西來】郭子儀玄宗の命を承て、進んで東京を取を云べし、【郭子儀】傳見卷七贈郭功甫詩、【凜々】威武の猛きこと、霜氣のすさまじきが如くなるを云、【英雄】魏廣平劉邵人物志云、夫艸之精秀者爲英、獸之特羣者爲雄、故人之文武茂異取名於此、故聰明秀出謂之英、膽力過人謂之雄、此其大體之別名也、【舉旗―】此れ軍法精練にして、吏卒を用ること奇正自由に變化するを象り云ふ也、舉旗軍士を進る時は風の如く起り、旗を偃て兵を收れば雨の如く靜に集る、所麾に隨て變化する也、【灑掃】糞土を掃ふ如く、兵亂の紛冗を伐ち平くるを云、【九廟】天子の宗廟也、說見第八卷題磨崖碑詩、【無塵埃】天下靜謐にして、汗馬の塵を揚ることなきを云、

元功高名誰與紀、風雅不繼騷人死、水部胷中星斗文、（元結爲水部、作大唐中興頌）

太師筆下龍蛇字、（太師顏眞卿寫此頌刻碑）天遣二子傳將來、高山十丈磨蒼崖、

【元功】衆にすぐれたる大功也、漢高祖得天下、詔定元功十八人位次、蕭何爲第一、郭子儀が元功高名今誰と與にか紀せんや、風雅の文人繼て世に不出、騷人已に死去て其人なきと也、【水部】元結を指す、水部は官の名、事物紀原五、水部周禮夏官有司險掌溝瀆、蓋水部之職也、魏尙書始有水部郎、【胷中星斗文】胷中の文章、星斗の燦爛たる如くに製し出したる文也、是中興頌を指す、李長吉高軒過云、二十八宿羅心胷、元精烱々貫當中、【太師】顏眞卿を指す、新唐書列傳七十八、顏眞卿字淸臣、秘書監師古五世從孫、少孤、旣長博學工辭章、開元中舉進士、又擢制科、調醴泉尉、後爲太子少師、又改太子太師、李希烈僭稱帝使問儀式、對曰老夫耄矣、曾掌國禮、所記諸侯朝覲耳、希烈使閹奴害眞卿、遂縊殺之年七十六、眞卿善正草書、筆力遒婉世寶傳之、【龍蛇字】字勢龍の騰り蛇の走るが如くなるを云也、【天遣―】天意後世に元功を紀する者なからんことを恐て、此善文善書の二子をして、記し書し

之、稱其文汪洋冲澹有一唱三嘆之聲、○王直方詩話云、文潛先與周翰公擇輩來飲余家、作長句、後數十日再同東坡來讀其詩、嘆息云、此不是喫煙火食人道底言語、

玉環妖血無人掃、（楊妃外傳、術士李遐周先有詩曰、若逢山下鬼、環子繫羅衣、山下鬼馬嵬也、妃小字玉環、及死力士以羅巾縊焉、）
漁陽馬厭長安艸、（長恨歌漁陽鼙鼓動地來、）
潼關戰骨高於山、（哥舒翰伐祿山、兵敗於潼關、）
萬里君王蜀中老、

【玉環―】玄宗長安を避て蜀に幸ある時、六軍馬嵬に次す、楊國忠誅に伏するに因て、陳玄禮等貴妃を誅せんと請ふ、玄宗不得已して貴妃に死を賜ふ、高力士貴妃を引て佛堂に入り、羅巾を以て縊り殺して軍士に謝す、それより部伍を整て蜀に向ふ、貴妃血を澆て馬嵬に死す、亂裏葬を不得して空く棄らる、故に無人掃と云、注【李遐周】傳未詳、【小字】は幼き時に呼ぶおさな名也、【漁陽馬】安祿山が兵を指す、天寶十四載安祿山率藩兵十餘萬漁陽より起て、詭て奉詔楊國忠を誅すと云て、亂を作すを云也、【厭長―】祿山闕中に攻入て長安を陷るを云、漁陽の馬長安の艸を食て飽と云へば、胡賊の兵京師を奪掠することを可知、【潼關】在陝西華陰縣、【戰骨高於山】潼關にて哥舒翰祿山に敗られ、唐の兵戰死する者山よりも高く依疊するを云、天寶十五載六月哥舒翰與賊戰于靈寶大敗、賊遂入關、會有告賊將乾祐在陝兵不滿四千皆羸弱無備、上遣使趣翰進兵復陝洛、翰奏祿山習兵羸師誘我、若往正墮其計中、且賊遠來利在速戰、官軍據險利在堅守、要在成功何必務速、郭子儀李光弼亦請、惟應固守以弊之、不可輕出、國忠言於上、賊方無備而翰逼留、將失機會、上以爲然、續遣中使趣之項背相望、翰不得已、撫膺慟哭、引兵出關、遇賊於靈寶西原、乾祐先據險遣精騎擊翰、翰大敗、哭聲振天地、賊乘勝蹙之、後軍亦潰、翰與麾下百餘騎入關、【君玉】玄宗を指す、萬里の險を歷て蜀に幸あつて、天下の亂逆を憂ひ玉ふ故に、遂に年老ひ玉ふと也、注【哥舒翰】傳第五卷に見たり、

金戈鐵馬從西來、
郭公凜々英雄才、（謂郭子儀、）
擧旗爲風偃爲雨、灑掃

ふと也、

則知不獨善戰善乘時、以心感人人心歸、爾來一百九十載、天下至今歌舞之、歌七德舞七德、聖人有作垂無極、豈徒耀神武、豈徒誇聖文、太宗意在陳王業、王業艱難示子孫、

【則知—】太宗天下を一統せらるゝ事蹟を考て、則知る太宗は徒に兵に習て戰を善くすると云のみには非ず、善く時運に乘て、亂を撥め民を濟ふの師なると云意也、【乘時】劉向說苑云、魚乘于水、鳥乘于風、艸木乘于時、【以心—】威力を以て劫しおどすに非ず、仁心を以て下を御すれば、天下の人皆心をよせて歸服する也、論語堯曰篇、興滅國、繼絕世、擧逸民、天下之民歸心焉、【爾來—】自高祖即位元年武德戊寅至第十一主憲宗即位元和二年丁亥、凡一百九十載也、【聖人有作】作は禮樂を制作するを云、位あれども德なければ禮樂を作ることを不得、太宗聖德あり、故に此樂を製作せらるゝと也、中庸二十八章、非天子不議禮、不制度、不考文、雖有其位、苟無其德不敢作禮樂焉、【垂無極】子々孫々窮り盡ることなき世までに垂れ示して法とする也、無極二字老子經に見たり、【豈徒—】此舞を觀、歌を聞て樂の意を考るに、豈徒に神武と聖文とを耀かし誇らん爲に作れるならんや、太宗の本意は王業の所興を陳べあらはして、王業を始ること如此艱難を極めて後纔に一統をなすと云ことを、將來の子孫に示して位をたのみ、安を貪て天下を誤ることなかれと誡め玉へるなるべしと也、【王業】諸葛孔明出師表、慮漢賊不兩立王業不偏安、

○磨崖碑後

磨崖碑備見第八卷山谷磨崖碑詩下、磨字の上に題字か跋字か有べし、誤て脫失するか、

張文潛

宋史卷四百四十四文苑傳六、張耒字文潛、楚州淮陰人、幼穎異十三歲能爲文、十七時作幽關賦已傳人口、游學於陳學官、蘇轍愛之、因得從軾游、軾亦深知

公謹字弘愼、魏州繁水人、爲王世充洧州長史、李勣、尉遲敬德、數啓秦王、乃引入府、以功授左武侯將軍、封定遠郡公、進封鄂國侯、改襄州都督、以直政聞、卒年四十九、帝將出次哭之、有司奏日在辰不可、帝曰君臣猶父子也、情感於內、安有所避、遂哭之、【怨女三―】太宗即位年八月放宮女三千餘人、詔以宮女衆多幽悶可愍、宜簡出之、各歸親戚、任其適人、【死囚―】通鑑貞觀七年秋九月、赦死囚三百九十人、先是上親錄繫囚、見應死者、閔之縱使還家、期以來秋來就死、仍勅天下死囚、皆縱遣、至期來詣京師、至是皆如期自詣朝堂、無一人亡匿者、上皆赦之、

剪鬚燒藥賜功臣、李勣嗚咽思殺身、（李勣嘗暴疾、醫曰用龍鬚灰可治、帝乃自剪鬚以和藥、及愈入謝、勣頓首流涕、）**含血吮瘡撫戰士、**（〔吮〕粗兗切、）**思摩奮呼乞效死、**

【剪鬚―】注李勣嘗て暴疾を病む、醫の曰 龍鬚を燒て灰となし用は可愈と云、太宗自らの鬚を剪て 藥に入しむ、天子は龍顏と云を以て 自らの鬚をは 龍鬚に當られたるか、然ども本傳には龍の字なし、【李勣】新唐書列十八、李勣字懋功、曹州離狐人、大業末韋城翟讓爲盜、勣年十七往從之、李密亡命雍丘、勣說讓推密爲主、武德二年密歸唐朝、太宗以勣純臣也、詔授黎州總官、封萊國公、賜姓李、後從秦王伐東都、及平竇建德、俘王世充、俱有功、拜幷州大都督府長史、徙封英、治幷州十六年以威肅聞、嘗得暴疾、醫詔必用鬚灰、帝自剪鬚賜勣、高宗立召授同中書門下、參掌機密、總章二年卒年八十六、【嗚咽】感激に不勝 流涕してむせぶ也、【思殺身】は我が身を殺しても忠を 盡んと思ふ也、【含血吮瘡】創を被て血を流せば、血を含て瘡口より吮出し毒氣を拔き取也、及に毒藥を塗る故に、瘡口の血を吮ひ出して拔かざるときは、毒氣身に遍滿して死する也、貞觀十九年帝親征高麗、進軍白岩城、大將軍李思摩中弩矢、上親爲之吮血、將士聞之莫不感動、【思摩】唐書百四十突厥傳、思摩突利族人、武德初數以使者來、高祖喜爲誠封和順郡王、太宗以爲忠、授他州都督、【奮呼】創を被りて太宗の撫養に感じ、勇氣益〻憤激し、奮ひ呼て敵に當り、死を效んことを乞

文集八十一云、漢書三登曰太平、北史積儲九稔謂之太平、

功成理定何神速、速在推心置人腹、亡卒遺骸散帛收、飢人賣子分金贖、

【功成】天下を一統するの功成を云、老子經持而盈之章云、功成名遂、【理定】天下を平治して禮樂刑政備り定を云、【何神速】何として如此に速なることぞやと云意也、【速在―】功成理定るとの速なるは、太宗能く心を推し及ぼして天下の人の腹心に置き、天下の人をして信に悅はしむるに因ると也、後漢書光武紀云、光武立爲蕭王、降者相語曰、蕭王推赤心置人腹中、安得不投死乎、【亡卒―】隋の兵士戰死する者骸骨草野に暴露するを、帛を散し與て人をして收め葬らしむる也、太宗本紀貞觀二年四月瘞隋人暴骸、四年九月瘞長城南隋人暴骨、【飢人賣―】貞觀二年三月、遣使巡關內、出金寶贖饑民鬻子者還之、民の無食して飢る者子を賣たるをば、其價ほど金を賜て買たる者の方より贖ひ取て、親の家々に還さるゝ也、太平御覽卷八百一十金部、管子云、湯以杜山之金以贖民之賣子者、禹以歷山之金贖子、

魏徵夢見天子泣、徵疾甚、帝親問疾、是夕帝夢徵若平生、及旦薨、帝臨之慟、**張謹哀聞辰日哭、**張公謹卒、上出次發哀、有司奏辰日忌哭、上曰君之於臣猶父子也、情發於衷、安避辰日、**怨女三千放出宮、死囚四百來歸獄、**六年親錄囚徒死罪者三百九十人、縱之還家、期以明年秋即刑、及期囚皆詣朝堂、無後者、太宗嘉其誠信、悉赦之、

【魏徵】新唐書列傳二十二、魏徵字玄成、魏州人、少孤落魄、後入關、隱太子引爲洗馬、徵見秦王功高、陰勸太子早爲計、太子敗王責徵曰、爾鬩吾兄弟奈何、答曰、太子早從徵言不死今日之禍、王器其直、及即位拜諫大夫、進拜尚書右丞、兼諫議大夫、貞觀三年以秘書監參預朝政、四年斷死刑二十九、米斗三錢、十七年徵疾甚、徵家初無正殿、帝命輟小殿材爲營構、令中郎將宿其第、動息以聞、中使者綴道、帝親問疾、既薨帝臨哭之慟、陪葬昭陵、【張謹】新唐書列傳十四、張

取其易見也、武王の牧野にて白旄黄鉞を把て殷紂と戰ひ玉し如く、太宗も王者の兵を以て隋を伐れしと云義なり、【定兩京】長安洛陽を云、【擒充】王世充を擒にしたるを云、【戮竇】竇建德を戮するを云、唐書列傳十云、王世充字行滿、豺聲卷髮忌刻深阻、涉書傳喜兵法、出爲江都贊治、遷郡丞、煬帝數南行、世充善伺帝顏色阿邑順旨、帝愛昵之、爲隋將有功、後謀反矯侗（恭帝）策禪位、幽侗於含涼殿、遣諸將以兵淸宮、世充襲袞服、法駕導鼓吹入宮、更袞冕即正殿、僭位建元開明、國號鄭、高祖詔秦王率兵攻之、遂率將吏降軍門、王受之以屬吏、以世充歸長安、高祖赦爲庶人、與其族徙于蜀、將行爲羽林將軍獨孤德所殺、【竇建德】新唐書列傳十、竇建德貝州人、材力絕人、重然諾喜俠節、大業三年募兵伐遼東、以建德爲隊長、建德乃謀曰、觀時變以就大計、乃招亡兵及民無產者數百、遂築壇場於河閒、自立爲夏王、都樂壽、武德元年引兵討宇文化及拔之、二年陷刑趙滄三州、俄而世充廢侗、建德乃建天子旌旗出入警蹕、會秦王伐世充、世充來乞師、建德發兵三十萬往救之、鼓而前、遂大潰、建德被重創竄入牛口谷、唐師獲之傳斬長安、【二十有四―】唐武德四年辛巳夏五月、竇建德を擒にし王世充を降し、七月長安に至り、俘を大廟に獻し、十月功大なるを以て天策上將となり、位王公の上に在り、是功業成ると謂べし、按に隋大業十三年丁丑より武德辛巳に至まで五年也、丁丑の年太宗十八歲なるときは辛巳に至て當爲二十二歲、又即位癸亥の年は二十七歲なるべし、此詩に二十四歲功業成り、二十九即帝位と云に不合、通鑑隋大業乙亥十一年八月、李淵子世民年十六應募と云ときは、丁丑の義兵を擧る時十八歲なること無疑、若し丁丑の年を十八歲と定て數るときは、太宗功業成は二十二歲也、武德癸亥の八月即帝位は二十七歲なるべし、此詩に二十有四二十有九と云は誤なるべきか、宜詳考、【三十有五―】通鑑貞觀四年庚寅云、是歲天下大稔、流散者咸歸鄕里、米斗不過三四錢、終歲斷死刑纔二十九人、東至海南及五嶺、皆外戶不閉、行旅不齎糧、取給於道路焉、帝謂羣臣曰、此魏徵勸我行仁義、既效矣、貞觀四年は太宗三十一歲也、此詩三十五と云、是又史冊に所載と相違す、孰れか是なることを不知、白居易は唐朝の人、其說遽に斥け難し、姑く存疑のみ、【太平】楊升菴

【傳自武德】此れ樂の所由作を云、七德は貞觀以後の名也、然れども元和の時より追て稱する故に七德の舞と云也、唐太宗秦王たるとき、劉武周と戰て大に敗之は高祖の武德三年夏四月也、破陣樂此時に製す、故に傳自武德と云、武德は唐高祖の年號也、【元和】唐第十一主憲宗年號也、【小臣】太宗の事を陳ぶ、故に自謙して小臣と云、【曲終】樂を奏し終て也、【稽首】拜して首を地につけ、久しく留て遲く起る也、九拜の第一也、詩詁云、稽首謂下首至地稽留乃起、【陳其事】歌ひ舞ふ所の事實、即太宗亂を撥め治を致す、功業の始末を言ひ陳る也、

太宗十八擧義兵、白旄黃鉞定兩京、擒充戮竇四海淸、二十有四功業成、二十有九即帝位、三十有五致太平、

【太宗】新唐書太宗本紀云、太祖諱世民高祖次子也、爲人聰明英武有大志、而能屈節下士、時天下已亂盜賊起、知隋必亡、乃散財養士、與晉陽令劉文靜尤善、文靜坐李密事繫獄、太宗就獄中見之、與圖大事、時百姓避賊多入城、城中幾萬人、文靜爲令知其豪傑、因共部署計、已定乃因裴寂告高祖、已起兵建大將軍府、太宗率兵狗西河、拜右領軍大都督、武德元年進封秦王、薛仁杲率其衆求戰、太宗率兵敗走、太宗追之至其城下、仁杲乃出降、高祖遣李密馳傳勞之于豳州、密見太宗不敢仰視、退而歎曰眞英主也、獻捷大廟、三年七月討王世充敗之北邙、四年二月竇建德率兵十萬以援世充、太宗敗建德于虎牢執之、世充乃降六月凱旋、太宗被金甲陳鐵騎一萬介士三萬前後鼓吹獻俘于大廟、高祖謂、太宗功高古官號不足以稱、乃加號天策上將、領司徒陝東道大行臺尙書令、位在王公上、武德九年爲皇太子、八月甲子即皇帝位東宮、遣裴寂告于南郊、【十八擧義兵】隋恭帝大業十三年五月也、此時太宗年十八也、【義兵】前漢書七十四魏相傳曰、救亂誅暴謂之義兵、兵義者王、【白旄黃鉞】尙書牧誓云、王左杖黃鉞右秉白旄、以麾曰逖矣西土之人、注鉞以黃金飾斧、左手杖鉞示無事於誅、右手把旄示有事於教、白旄旄牛尾、正義曰、廣雅云鉞斧也、斧稱黃鉞、故知以黃金飾斧也、把旄何以白旄用白者

賜てこれを以死せよと云、或は自殺せよと云て自ら死しむるを賜死と云也、史記伍子胥傳、呉王賜伍子胥屬鏤之劍曰、子以此死の類是也、言ろは納言となり、內史となり、天子の左右にまぢかく侍て、朝に恩を承け富貴に榮るかと見れば、暮にはやがて旨に忤て譴斥せられ、死を賜て身を亡すと也、注【主意在此二句】太行路を作れる主意は、畢竟此二句を言ん爲め也、故に此二句を一篇の主とす、

行路難、不在水、不在山、（上章先言山、此章先言水、此作詩之法、）祇在人情反覆間、（人情之反覆、尤險於山川、）

【行路―】行路の危難は却て水と山とに不在、祇人の情反覆常なきの間に在りて、命を傷り身を滅すの禍忽然と起れば、險難固に水よりも山よりも甚き也、注【上章―】上の節には於山於水と山を先に云、此節には顚倒して用は同格の句を忌て也、是詩家の作法也、

○七德舞、

白氏文集三卷載之、此篇は七德の舞を見に因て、太宗の亂を撥て王業を興すことを美る也、唐書禮樂志十一云、唐之自製樂凡三大舞、一曰七德舞、二曰九功舞、三曰上元舞、七德舞者本名秦王破陣樂、太宗爲秦王破劉武周、軍中相與作秦王破陣樂曲、及即位宴會必奏之、謂侍臣曰、雖發揚踏厲異乎文容、然功業由之被於樂章示不忘本也、乃製舞圖、教樂工百二十八人、被銀甲執戟而舞、凡三變、每變爲四陣象、擊刺往來、歌者和曰秦王破陣樂、後令魏徵與員外散騎常侍褚亮、員外散騎常侍虞世南、太子庶子李百藥更製歌辭、名曰七德舞、舞初成、觀者皆扼腕踊躍、諸將上壽、羣臣稱萬歲、自是元日冬至朝會慶賀與九功舞同奏、舞人更以進賢冠、虎文袴、螣蛇帶、烏皮鞾、二人執旌居前、其後更號神功破陣樂、通鑑綱目貞觀七年春正月、更名破陣樂曰七德舞、注取禁暴戢兵、保大定功、安民和衆、豐財之義也、

白樂天

七德舞、七德歌、傳自武德至元和、元和小臣白居易、觀舞聽歌知樂意、曲終稽首陳其事、

婦人身、百年苦樂由他人、

【行路難】再び行路の險難を歎じ起して文勢を提く、行路の難塞に險し、渉り難きこと言語道斷、重て陳がたき也、注【換三字文勢】上の文皆長句、此に至て三字の句二句を以て文勢を換たる也、【人生―】凡そ人天地の間に生るゝならば、婦人の身となることなかるべし、何にとなれば一生涯百年の間苦樂皆人に由て、自ら世に立つことなければ也、大戴禮本命篇云、孔子曰、婦人伏於人也、是故無專制之義、有三從之道、在家從父、適人從夫、夫死從子、無所敢自遂也、事無擅爲、行無獨成、

行路難、難於山、險於水、不獨人間夫與妻、近代君臣亦如此、說出一篇主意君不見左納言、右納史、朝承恩暮賜死、主意在此二句、

【行路難】又重て行路の難を嘆息して、下の一節を起す也、行路難哉太行の山よりも難く、巫峽の水よりも猶難きことあり、獨り人間夫妻の上のみに非ず、近代君臣の間にも、摧敗顚覆の險亦如此ことあり、注【説出一篇主意】此篇の立意此一節にあり、然れども遽に云ひ出さずして太行巫峽の險より興し起して夫妻の恩に比し、遂に引てこゝに至て君臣の上に説及ぼす、故に一篇の主意此一節に在也、【君不見―】世間常に所見寵譴不恒を引て、上の文に亦如此と云を證す、【納言】書經舜典云、帝曰龍朕聖讒説殄行震驚朕師、命汝作納言、夙夜出納朕命惟允、注納言喉舌之官、聽下言納於上、受上言宣於下、必以信、蔡沈注云、納言官名、命令制敎必使審之、周之內史、漢之尙書、魏晉以來所謂中書門下者、皆此職也、【納史】周禮有內史外史左史右史、而無納史、納史恐內史之誤歟、周禮春官內史掌王之八枋之法、以詔王治、一曰爵、二曰祿、三曰廢、四曰置、五曰殺、六曰生、七曰予、八曰奪、執國法及國令之貳、以攷政事、以逆會計、掌敍事之法、受納訪、以詔王聽治、凡命諸侯及孤卿大夫、則策命之、凡四方之書事內史讀之、王制祿則贊爲之、以方出之、賞賜亦如之、內史掌書王命、遂貳之、【賜死】斬と云ひ誅と云は刑人をして殺さしむる也、賜死は劍を

元年子產曰、昔高辛氏有二子、伯曰閼伯、季曰實沈、居于曠林、不相能也、日尋干戈、以相征討、后帝不臧、遷閼伯于商丘、主辰、商人是因、故辰爲商星、遷實沈于大夏、主參、唐人是因以服事夏商、及成王滅唐而封大叔焉、故參爲晉星、實沈參神也、

古稱色衰相棄背、當時美人猶怨悔、何況如今鸞鏡中、妾顏未改君心改、爲君熏衣裳、君聞蘭麝不馨香、爲君盛容飾、君看珠翠無顏色、

【古稱—】色衰相棄背、五字蓋し古詩中の句ならん、出處未考、【當時—】婦人は色を以て人に愛せらるゝときは、色衰て後に棄らるゝは常の理也、それさへ當時の美人猶怨て、舊恩を不思して棄捐ることは、薄情なりと云者あり、此卓文君白頭吟の類也、卓文君年老ひ色衰て後に、相如茂陵の人の女を聘して妾とせんとす、文君作白頭吟以自絕、曰皚如山上雪、皎若雲間月、聞君有兩意、故來相決絕、今日斗酒會、明旦溝水頭、躞蹀御溝上、溝水東西流、凄々復凄々、嫁娶不須啼、願得一心人、白頭不相離、【鸞鏡中】劉敬叔異苑云、罽賓王一鸞、三年不鳴、夫人曰聞見數則鳴、懸鏡照之、鸞睹彩悲鳴、中宵一奮而絕、輔按に此故事に本て、鏡の裏面に鑄て鸞の形を作て此れを鸞鏡と云か、言ろは色衰て棄らるゝさへ古人猶怨とす、況や我今衰るに非ず、鏡を把て照し見れば妾が顏色の美未曾改、然るに君の心已に改て不我顧は、そもいかにぞやと也、【爲君熏—】君が爲に我が衣裳にたきものすれども、君却て馨香ありとせず、【爲君盛—】君が爲に我が容貌の粧飾を盛にすれども、君其珠翠を看て悅とせず、却て顏色なしとす、我れ心を盡して婦人の職を盡せども、皆心を留て顧ることなきと也、【無顏色】匈奴歌、失我燕支山、使我婦女無顏色、匯【三段】は鸞鏡中、熏衣裳、盛容飾、此三段を指す、【換五字文勢】顏色を云ひ、衣を云ひ、容を云ふ、五字の句を以て變化して文勢をなす也、

行路難、難重陳、換三字文勢、人生莫作

舟、（峽州有三峽、明月峽、巫山峽、廣澤峽、其水至險、）若比君心是安流、君心好惡苦不常、好生毛髮惡生瘡、與君結髮未五載、（設爲婦人之辭、）豈期牛女爲參商、

【太行―】太行山に上るの路は、天下第一險絕の處にて能車を摧き毀と也、李白が北上行にも亦曰、北上何所苦、北上緣太行、磴道盤且峻、巉巖凌穹蒼、馬蹄蹶側石、車輪摧高崗、【若比―】さしも險しき太行の路も、君の心の峻しきに比せば、太行猶數ならず、却て坦なる途の如しと也、此れ亦詩の邶風に誰謂茶苦、其甘如薺と云意也、注【禹貢】夏書の篇名恆山に五嶽の北嶽也、在定州、水經卷下、恆山爲北嶽、在中山上曲陽縣西北、碣石在遼西臨渝縣南水中、【巫峽―】巫峽詳に前に見たり、兩山高く峙ちたる間を水急に流るに因て勢甚險し、故に舟船傾覆の戒あり、此能舟を摧き覆す險流も、君が心の險に比すれば峽水却て安流となる、君の心の險は峽水よりも過ること甚しき也、【君心―】君の心に人を好みんじ、人を惡んずること

苦だ常なくして狂惑なり、偶〻心に稱ふて好みんずれば、喋々しく譽め悅て俄に毛髮をも生せしむる如く寵し又少〻心に不愜して惡めば、忽に瘡を生せしめるほど慘くあたりて人を痛ましむる也、文選西京賦、所好生毛羽、所惡生瘡痏、【與君結髮】結髮は少く長じて髮生長し、始て結時を以て婚姻したると云意也、文選蘇子卿詩、結髮爲夫妻、又李廣が傳に云、臣結髮而與匈奴戰、倭歌にくらべこしふりわけ髮も肩すぎぬ君ならずして誰か結へき注此句婦人の辭を設て怨み訴るの言をなすと也、【豈期―】初め嫁する時豈期せんや夫妻永く牛女の如く契るべき身の、却て參商二星の如くに隔り居らんとは、幾く程もなく心の外に隔りたると也、【牛女】牽牛織女の二星也、荊楚歲時記、七月七日爲牽牛織女聚會之夜、按戴德夏小正云、是月織女東向蓋言星也、春秋斗運樞云、牽牛神名略、石氏星經云、牽牛名天關、佐助期云、織女神名收陰、史記天官書云、是天帝外孫、傅玄擬天問云、七月七日牽牛織女會天河、此則其事也、河鼓黃姑牽牛也、皆語之轉、【參商】二星の名也、不相能して隔り居る星也、夫妻不相和、離居するに比して言ふ也、左傳昭公

山人索寞溪女啼、

【我來】東坡於潜に來ることを云、【觀政】其所の政善惡治亂を觀察する也、【問風謠】其所人民の風俗を問て、澆薄敦厚を量り所謠の詞を以て民の喜樂と憂患とを辨て、令尹の治を察するを云也、後漢書列傳七十二李郃傳云、和帝卽位分遣使者、皆微服單行各至州縣、觀採風謠、【皆云】於潜の人民皆云ふ、今の令を迎てより縣中治平にして盗賊の戒なし、故に里の犬驚き咎めて走ることなし、故に足下に氂を生じたると告る也、注【岑熙】後漢岑彭六世之孫也、後漢書列傳七云、熙少爲侍中虎賁中郎將、朝廷多稱其能、遷魏郡太守、招聘隱逸與參政事、無爲而化、視事二年、輿人歌之曰、我有枳棘、岑君伐之、我有蟊賊、岑君遏之、狗吠不驚足下生氂、含哺鼓腹焉知凶災、我喜我生獨丁斯時、美矣岑君於戲休玆、注魏郡秦時置故城在今相州安陽縣東北、枳棘多棒梗、以喩寇盗充斥也、蟊賊食禾稼蟲名、以喩姦吏侵漁也、氂長毛也、犬無追吠故足下生氂、【但恐】刁氏の於潜を治ること實に和平なり、但恐は此人一旦此縣を捨て去れんことを、若し然らば山人溪女をして所恃を失て、索寞として愁ひ啼かしめんと也、

○太行路

白樂天以人心之險比山川之險、以夫婦之好合比君臣之偶合、文意新

大明一統志、懷慶府太行山在府城北二十里、山勢綿亘數千里、雖各因地立名、其實皆名太行、禹貢太行恒山至於碣石、蓋相接也、魏武帝苦寒行、北上太行山、艱哉何巍々、羊腸坂詰屈、車輪爲之摧、楊升菴文集七十六云、山海經太行山一名五行山、列子作太形、行本音也、河圖括地象云、大行天下之脊、郭緣生述征記、太行首始河內、自河南至幽州、凡有八陘、崔伯陽感山賦、上正樞星、下開冀方、起爲名丘、妥爲平岡、巍乎甚尊、其名大行、注此篇は大行の險を以て人心の險隘に喩へ、夫婦の好み合ふを以て君臣の遇合に喩て、君恩の終を能しがたきことを云也、文格意思ともに新く作れると也、

白樂天

太行之路能摧車、（書禹貢太行恒山至于碣石、注大行山名、）若比君心是坦途、巫峽之水能覆

毎に溪山の間に來往し、山にしては麋鹿の遊ぶを見て友となし、溪に往ては梟鷖の悠游するを友とす、溪山の遊びを併せて爲に因て野翁亭と名づくと云意也、【麋鹿】の類、杜詩遠害朝看麋鹿遊、【鷖】字彙音衣、水鳥即鷗也、形色似白鴿而羣飛、詩大雅梟鷖在涇、

問翁何所樂、三年不去煩推擠、

翁言此間亦有樂、非絲非竹非蛾眉、

山人醉後鐵冠落、天目山唐道士、常冠鐵冠、

溪女笑時銀櫛低、於潛婦女皆插大銀櫛、長尺許、謂之逢沓、【櫛】久瑟反、

【問翁—】翁は野翁亭の主人卽ち刁氏を指して云、此亭何の所樂があるや、三年までに不去、人推擠して煩しくすゝむれども外に徙らず、此に住せらるゝぞとなり、【翁言—】此間は山に上り溪に下り、來往し遊ぶ所を云、溪山の間亦自ら樂みあり、【絲】は琴瑟の類、【竹】は簫笛の類也、【蛾眉】は美婦人を云、見衛風碩人篇、管絃美色の樂に非ず、山水の間一種の眞樂あると也、本集次公注、非絲非竹、雖語意當如此、亦出左太冲詩、何必絲與竹、山水有淸音、【山人—】二句は縣中協和して、人皆業を安じ自得するを云、これを見て友侶とす、縣令の樂み絲竹の比すべきに非ず、故に此二句を言ふ、山に上れば山人酒を酌て、醉後には頭上の鐵冠を落しても容を不理、放逸して樂めるを侶とし、溪に下れば、溪女笑語して頭に插む銀櫛を低れ、相和樂するを見る、これを樂て三年までに不去と云の意也、注【天目山】一統志杭州府、天目山在臨安縣西五十里、爲道家第三十四洞天、山下兩湖若左右目、故名、元和志云、天目有兩峯、峯頂各一池、左右相對、郭璞地記、天目之前兩乳長、龍飛鳳舞到錢唐、杭都賦、山雖多矣莫若天目之爲大、其高也凡三萬九千尺、仰夫虛兮日月低、坐絕頂兮乾坤窄【逢沓】東坡詩集四於潛女詩云、青裙縞袂於潛女、兩足如霜不穿屨、觰沙鬢髮絲穿杼、蓬沓障前走風雨、

我來觀政問風謠、【謠】音遙、皆云吠犬足生氂、岑熙爲魏郡太守、人歌之曰、我有枳棘、岑君伐之、我有蟊賊、岑君過之、吠犬不驚足下生氂、

但恐此翁一旦捨此去、長使

生前富貴、死後文章、百年瞬息
萬世忙、夷齊盜跖俱亡羊、不如
眼前一醉、是非憂樂都兩忘、

【生前―】世に生て未死、前に富貴なるも終に死て後は、只文章のみ世に遺れり、百年の暮は一瞬一息の間の如くにて、萬世も速に推移て忙しき也、【夷齊】伯夷叔齊也、【盜跖】古の大盜也、賈誼弔屈原賦、謂跖蹻廉、漢書注李奇曰跖秦大盜、師古曰莊周云、盜跖柳下惠之弟、蓋寓言也、【亡羊】二字莊子に出づ、此に借用て賢不肖ともに死亡すると云の義とす、莊子臧與穀二人相與牧羊而俱亡其羊、問臧奚事、則挾冊讀書、問穀奚事、則博塞以遊、二人者事業不同、其於亡羊均也、伯夷死名於首陽之下、盜跖死利於東陵之上、二人所死不同、其於殘生傷性均也、伯夷叔齊は行を潔し、盜跖は行を汚す、所爲不同と云へども、臧穀が俱に羊を亡すが如く、畢竟を見れば皆同く死し亡びたるときは彼此の別なし、檢束に身を苦んよりは、不如眼前酒に逢ば、一醉して世上の是非憂樂を都て忘て樂むが勝れると也、

○於潛令刁同年野翁亭

本集九載之、題注云、按圖經岩崿山在縣西二里、野翁亭在山之北、大明一統志、浙江杭州府於潛縣在府城西一百七十里、【刁同年】刁氏誰と云ことを不詳、或刁約字景純なりと云、然ども景純は於潛の令とならず、年紀及第俱に東坡に於て先輩也、一統志には刁璹なりと云、【同年】は同年に及第したる人を稱して云、又同年に生れたる人をも稱す、【野翁亭】一統志云、野翁亭在於潛縣治西、宋縣令刁璹建蘇軾詩云云、

蘇子瞻

山翁不出山、溪翁長在溪、不如
野翁來往溪山間、上友麋鹿下
鳧鷖、

此四句亭に名つくるの義を敘す、山翁は常に山中に住て外に不出、溪翁は長く溪に在て他を不知、共に偏なる所あり、野翁は不然、溪にも下り山にも上り、

代金金生水、至於立秋以金代火、金畏火故至庚日必伏庚日金也、注夏至後三庚爲初伏、第四庚爲中伏、立秋後初庚爲末伏、三伏は限て日を指すにあらず、初伏より末伏に至までの間を摠て極熱の時を指て云也、庚日に泥むべからず、【北窓涼】晉陶淵明傳云、夏月虛間高臥北窻之下、清風颯至、自謂羲皇上人、言は宰相の貴官となりて、五更に朝に進て漏を待ち、寒を凌て立て靴中に霜を滿んよりは、逸居して自ら放にし、三伏の暑き時日高るころ、北窻の清風颯と來て涼き下にて晝寢し、睡足て快きが勝れると也、【珠襦玉柙】前漢書卷九十三佞幸傳、董賢傳、哀帝詔將作大匠爲賢起大第、重殿洞門、武庫禁兵上方珍寶、其選物上第盡在董氏、及至東園祕器珠襦玉柙、豫以賜賢無不備具、師古曰、漢舊儀云、東園祕器作棺梓、素木長二丈崇廣四尺、珠襦以珠爲襦、如鎧狀、連縫之以黃金爲鏤、要以下玉爲柙、至足亦縫以黃金爲鏤、西京雜記卷一云、漢帝送死皆珠襦玉匣、匣形如鎧甲、連以金鏤、武帝匣上皆鏤爲蛟龍鸞鳳龜龍之象、世謂爲蛟龍玉匣、古文大全注云、襦短衣以珠爲飾、後漢和帝時、宦者趙忠葬父、僭爲玉匣、冀州刺末穆發墓剖其棺、蓋玉匣天子葬則用之以東其腰、此二つの物は葬具の貴器也、【祖送】白虎通卷四云、祖於庭何盡孝子之恩也、祖者始也、始載於庭也、乘軸車辭祖禰、故名爲祖載也、禮曰祖於庭葬於墓、古文大全注云、祖送猶祭送也、棺槨を舉て墓の所へ遷すを祖送と云也、【北邙】葬地也、大明一統志、河南府北邙山在府城北一十里、山連偃師鞏孟津三縣、綿亘四百餘里、東漢諸陵及唐宋名臣墳多在此、晉張協賦、地勢窊隆丘墟陂陀、墳隴㟪疊棊布星羅、陶淵明詩、一旦百歲後、相與還北邙、【懸鶉】荀子子夏之衣懸結如鶉、敝れたる衣を綴り結て鶉ふの如くなるを云、【百結】敝れ裂けたるを百處も結び集めたる衣也、逸士傳晉董京在洛陽隱居白社、以殘架縷帛爲衣、號百結衣、【負朝陽】列子云、宋國有田父、常衣縕黂、至春自曝於日、當爾時不知有廣廈隩室緜纊狐貉、顧謂其妻曰、負日之暄人莫知之、以獻吾君將有賞也、言ろは珠襦玉匣珍奇の葬具を以て禮をなし、萬人の衆庶祖載して柩を送り、北邙の葬地に埋れんよりは、生て懸鶉百結の賤き衣を被て獨坐し、朝日を負て俯して背を曝し、快樂なるが勝れると也、

【勳名―】唐の故事に随て、凌烟閣上に物色を畫かば、勳名の功臣今の世にも猶多して限りなし、何充徒に東坡の像を畫んよりは、往て今の世の褒公鄂公と云べき人を寫されよと也、褒公は段志玄也、鄂公は尉遲敬德也、傳は下の丹青引に詳也、唐の太宗の功臣の像を凌烟閣上に畫くこと二十四人、此其中の二人也、注【丹青引】杜詩全集十二に見えたり、此集卷十七に載す、

○薄々酒

本集十三載薄々酒二首、此其前篇也、序云膠西先生趙明叔、家貧好飲不擇酒、而醉常云、薄々酒勝茶湯、醜々婦勝空房、其言雖俚而近乎達、故推而廣之、以補東州之樂府、既又以爲未也、復自和一篇、聊以發覽者之一噱云耳、趙明叔が語を把て題として、樂府體の詩を作て、明叔が意を推し廣めて云へる也、

東坡

薄々酒、勝茶湯、麤々布、勝無裳、醜妻惡妾勝空房、

【薄々酒】酒味淡薄にて醇からざる也、魯酒千鍾不酔人と云の類也、如此酒も飲めば醉を取て心を樂しむる故に、茶湯よりは勝れり、【麤々布】麻縷ふとくあらき布は賤者の所服、鮮美ならねども身を蔽て暖を取ることは同じき故に、衣裳の無きより勝れる也、【醜―】醜き妻惡き妾、目を悅ばしむるには足らざれども、室を偕にし使令に奉ずる事は同じ、空虛の房中に獨居するよりは勝れる也、

五更待漏靴滿霜、不如三伏日高睡足北窻涼、珠襦玉匣萬人祖送歸北邙、不如懸鶉百結獨坐負朝陽、

待漏宰相たる人五更の時朝廷に朝すれば、天子の門闕猶未開、故に門外に在て禁中の漏刻晨を報じて門の開を待つを云、宋朝丹鳳門の右に待漏院を置、此れ宰相漏を待つの處也、冬の時味爽に朝すれば晨の霜靴中に滿る也、【三伏】曆忌釋云、四時代謝皆以相生、立春木代水水生木、立夏火代木木生火、立冬水

此身常擬同外物、浮雲變化無蹤跡、問君何苦寫我眞、君言好之聊自適、

【此身―】東坡以爲く、賢愚富貧共に皆亡滅すれば此身愛惜すべき者に非ず、常に擬すらくは外物と同く滅息して世に留めず、浮雲の空に滿て暫の間に變化し消散して、跡の無きが如くならしめんと思ふと也、

【問君何―】我が心已に如此、君に問ふ何が故ぞ心を盡して苦に我が眞像を寫せるぞと云へば、君は言ふ眞を寫すことを好て、これを以て聊か自ら意に適へりと思つて樂みとすると也、

黄冠野服山家容、郊特牲野夫黄冠艸服、意欲置我山岩中、顧愷之爲謝琨象、在石岩裏、云此子宜置丘壑中、

【黄冠】禮記十一郊特牲篇云、野夫黄冠、黄冠艸服也、注蔡沈曰、黄冠爲艸野之服、其詳未聞、【野服】羅大經鶴林玉露地集云、朱文公晩年以野服見客、榜客位云、榮陽呂公嘗言、京洛致仕官與人相棲皆以閒居野服爲禮、而歎外郡之不能、然其指深矣、某已叨誤恩許致其事、本末未敢遽以老夫自居、而比緣久病艱於動作、遂不免遵用舊京故俗、輙以野服從事、然上衣下裳大帶方履、比之涼衫自不爲簡、其所便者但取束帶足以爲禮、解帶足以燕居、且使窮鄉下邑得以復見祖宗盛時京都舊俗如此之美也、余嘗於趙李仁處見其服、上衣下裳衣用黄白青皆可、直領兩帶結之、緣以皂如道服、長與膝齊、裳必用黄、中及兩旁皆四幅不相屬、頭帶皆用一色、取黄裳之義也、別以白絹爲大帶、兩旁以青或皂緣之、見儕輩則繫帶、見卑者則否、謂之野服、又謂之便服、何充が東坡の像を畫に黄冠を冠らしめ、野服を着けて山家隱逸の人の容となせるは、何氏の意に東坡を山岩の中に住べき人なると思ふて、如此畫きたるならんと也、注【顧愷之】字長康傳見晉書列傳六十二、善畫人也、【謝鯤】晉書列傳十八、謝鯤字幼輿、好老易、顧愷之畫鯤坐石巖中、曰鯤嘗云一丘一壑、此子宜在丘壑中、仕爲豫章太守、

勳名將相今何限、往寫褒公與鄂公、杜詩丹青引、褒公鄂公毛髮動、英姿颯爽來酣戰、注褒公段志玄、鄂公尉遲敬德也、

衛尉少卿潞州別駕、【潞州】唐地理志潞州屬河東道、【別駕】事物紀原六、別駕唐六典曰、後漢州置別駕、杜佑云別駕本因漢置、隨刺史巡察、若今觀察之有副使也、通典曰、從刺史行部別乘一乘傳車、故謂之別駕、【眼如電】眼中光芒ありてきら〳〵と耀くを云、注【裴楷】字叔則、晉書列傳五有傳、【王戎】晉書列傳十三云、王戎字濬沖幼而穎悟、神彩秀徹、視日不眩、裴楷見而目之曰、戎眼爛々如巖下電、【左手―】明皇の獵の圖を畫くに、左手の臂に弓を掛て斜に視て箭を撚る狀を作すと也、注本集堯卿が注也、

又不見雪中騎驢孟浩然、皺眉吟詩肩聳山、或問鄭棨詩思、對曰詩思在灞橋雪中驢子上、孟浩然赴京、途中遇雪詩、迢遞秦京道、蒼茫歲暮天、窮陰連晦朔、積雪滿山川、饑寒富貴兩安在、空有遺像留人間、饑寒謂浩然、富貴謂明皇、二者皆歸於滅沒、

【又不見―】又浩然が雪中に驢に騎て京に赴く狀を畫くを不見や、眉を皺め詩を吟して瘦せたる肩山の聳たるが如き貌を寫すと也、【孟浩然】新唐書列傳百八云、孟浩然字浩然襄州襄陽人、少好節義、喜振人患難、隱鹿門山、年四十乃游京師、嘗於大學賦詩、一座嗟伏無敢抗、張九齡王維雅稱道之、維私邀入內署、俄而玄宗至、浩然匿牀下、維以實對、帝喜曰、朕聞其人而未見也、何懼而匿、詔浩然出、帝問其詩、浩然再拜自誦所爲、至不才明主棄之句、帝曰卿不求仕、而朕未嘗棄卿、奈何誣我、因放還開元末病疽背卒、注【鄭棨】唐書列傳百二十八、鄭棨字蘊武、及進士第、歷監察御史、擢累左司郎中、困窶甚、丐補廬州刺史、後爲宰相、以疾乞骸、拜太子少保、或鄭棨に問ふ詩思は何の時か最好きぞと云、鄭棨答に、詩興の面白は灞橋の上を雪の中に驢馬に騎て行く時に如はなきと也、此語本傳に不載、詩學大成に雜記を引て此語を載す、雜記又何の書たることを不知、或人の云劉肅が大唐新語に詳なりと、但未見其書、【孟浩然詩】三體詩下に載す、曰迢遞秦京道、蒼茫歲暮天、窮陰連晦朔、積雪遍山川、落雁迷沙渚、飢鳥噪野田、客愁空佇立、不見有人烟、此詩に因て浩然雪中驢に騎るの圖を畫くと也、【飢寒―】浩然が饑寒明皇の富貴兩の者今皆安んか在るや、共に盡るに歸して、只一時の狀を寫せる遺像のみ世上に存し留る也、

極大、杭人以旗鼓迓之、弄潮之戲蓋始于此、然或有沈溺者、【孤臣一】二句以上の二段を結ぶ、言は湘江浙江皆水の可泛無きに非ず、然ども孤臣詞客の輩此處に到ては、古を懐ひ讒を憂ひ、感慨を興して愁を生ずべし、何を以てか心懐を寛うして悞をなさんやと也、

長淮之水遶楚流、先生家住淮上頭、黄金萬斛浴明月、碧玉一片含清秋、酒花入面歌一聲、淮上百物無閑愁、

長淮の勝槩を叙て、他水の不足遊ことを證する也、【遶楚流】は楊州を遶て流る也、大明一統志十二楊州府沿革云、禹貢楊州之域、春秋時屬呉越、戰國時屬楚、【先生】は馬子才自稱する也、子才淮水の頭に居をトして住めると也、【黄金萬斛】波浪漾蕩して月に照さるゝときは、水上に光りあつて金の如し、故に黄金萬斛と云、范希文の岳陽樓記にも亦云、浮光躍金靜影沈璧即此意也、【浴明月】月水上にうつり、波漾ふて搖くときは明月を洗浴する貌に似たり、故に浴明月と云、【碧玉一】淮水碧にして一片の碧玉の如く澄み湛て、秋の氣色を含むと也、【酒花一】酒氣面に發して紅なるを酒花と云、月白く秋澄る時に當て景を玩て盃を進め、酒花面色に入て紅になり、醉酣なるとき歌を唱ふること一聲するときは、心曠く神暢て淮上に所見の百物皆目を喜ばしむべし、一箇も閑らに愁を興す物はなきと也、【無閑愁】は上の湘水浙江に應ず、彼れには愁多して此には無愁を云也、

○贈寫眞何秀才　秀才名充、

本集十一載之、【寫眞】人の容貌を畫に寫すを云、即影像也、【何秀才】圖繪寶鑑宋部、何充姑蘇人能寫貌、

蘇子瞻

君不見潞州別駕眼如電、潞州別駕唐明皇也、裴楷曰、王戎眼爛如巌下電、
左手挂弓横撚箭、尚書譚錄云、明皇有一目微斜、故作横撚箭之狀、

【潞州別駕】注唐明皇也、唐書卷五玄宗本紀云、玄宗諱隆基、性英武善騎射、始封楚王、後爲臨淄郡王、累遷

嫺於辭令、入則與王圖議國事以出號令、出則接遇賓客應對諸侯、王甚任之、上官大夫與之同列、爭寵而心害其能、因讒之、頃襄王怒而遷之、屈原至於江濱、被髮行吟澤畔、顏色憔悴形容枯槁、漁父見而問之曰、子非三閭大夫歟、何故而至此、屈原曰云云、寧赴湘流而葬乎江魚腹中耳、又安能以皓々之白而蒙世之溫蠖乎、乃作懷沙之賦、於是懷石遂自投汨羅以死、

【浙江】大明一統志三十八、杭州府浙江在府城西三里、舊志出歙縣玉山、其水經建德合婺溪、過富春爲浙江入于海、江口有山居江中、潮水投山、十折而曲、故云浙江、盧肇曰浙者蓋取潮水出海屈折倒流也、潛確類書卷三十七云、錢塘江在浙江杭州府、本名浙江、按史記水至會稽山陰爲浙江、虞喜志林謂、潮水投浙山下折而曲、一云江有反濤、水勢折歸故云浙江、一名浙河、山海經曰、禹治水至于浙河、莊翼曰浙河之水、濤山浪屋、雷擊霆碎、有吞天沃日之勢是也、今以其地介于錢塘縣遂名錢塘江、潮水晝夜再上、奔騰衝激撼地軸、

【鴟革漂胥骸】史記六十六伍子胥者楚人也、名員員父曰伍奢、楚平王殺伍奢、伍胥遂亡、吳王闔廬召伍員以爲行人、而謀國事、闔廬死夫差立爲王、伐越敗越於夫湫、越王勾踐請和、吳王將許之、伍子胥諫曰今王不滅後必悔之、吳王不聽與越平、其後興師伐齊、伍子胥諫曰今吳之有越猶人之有腹心疾也、而王不先越而務齊不亦謬乎、吳王不聽、吳太宰嚭既與伍子胥有隙、因讒云云、吳王曰微子之言吾亦疑之、乃使使賜子胥屬鏤之劍曰、子以此死、伍子胥告其舍人曰、必樹吾墓上以梓、令可以爲器、而抉吾眼縣吳東門之上、以觀越寇之入滅吳也、乃自剄死、吳王聞之大怒、乃取子胥尸盛以鴟夷革浮之江中、吳人憐之爲立祠於江上、注應劭曰、取馬革爲鴟夷、榼形、韻會夷字注鴟夷酒器、楊推酒箴鴟夷滑稽腹如大壺、應劭曰鴟夷榼形、吳王夫差取馬革爲鴟夷、受子胥沈之江、言は浙江には豈水なからんや、水ありと云へども此江も亦昔伍子胥が尸を鴟夷に盛て漂し棄たる處にて、今に至て但潮頭の怒氣憤激して、波浪山の如くに來るを見也、此江も亦遊觀の勝地に非すと云意也、[注]

【臨安志】臨安縣屬浙江杭州府、臨安志云、吳王既賜子胥死、乃取其屍盛以鴟夷之革浮之江中、子胥因流揚波、依潮來往蕩激隄岸、勢不可禦、或有見其乘白馬素車在潮頭者、因爲之立廟、毎歲仲秋既望潮水

し、池を高陽池と名く、高陽徒に非ず、酈食其を引て證とすべし、山簡が事は下の襄陽歌に詳也、【育學―】羣兒嘆圓缺、五字所據未詳、注に坡の詞を引て證とす、然ども五車韻瑞缺字の下を考れば、此詞を載て歐陽修の語とす、東坡六一共に一代の文宗也、子才も亦宋人也、此二人の間を指て群兒とは不可言、別に典故あるべし、偶〻考へ不得、後の人考へ補べし、

○長淮謠

長淮は淮水也、水經云淮水出南陽平子縣胎簪山、至下邳陰縣西、又東過淮陰縣、至廣陵淮浦縣入于海、釋名云淮圍也、圍繞揚州北界、東至海也、廣陵志序云、長淮之區綿亘數百里、揚州其都會也、迷樓九曲鳳池螢苑之名甲于前代、而十里珠簾二十四橋、風月之景尤爲東南佳麗、以至春風蕩城郭、滿耳沸笙歌、與夫重城向夕絳紗萬戸珠翠塡咽於街陌、又天下所無也、

馬子才

長淮之水青如苔、行人但覺心眼開、

二句先づ淮水の奇勝を云、長淮の水色青くして苔の如し、これを望むときは行人但心眼ともに闊開して胸次の豁なることを覺ると也、

湘江豈無水、魚腹忠魂埋、（楚屈原沈湘、葬於江魚腹中、）但見愁雲結雨猿聲哀、浙江豈無水、鴟革漂胥骸、但見潮頭怒氣如山來、（臨安志吳王既賜子胥死、乃取其尸盛以鴟夷之革、浮之江中、或有見其乘白馬素車在潮頭者、因爲之立廟、）孤臣詞客到江上、何以寛心懷、

此八句他水の遊ぶに不足ことを敍て、淮水の遊覽するに堪たることを美るの伏案とす、是即彼れを抑て此れを揚るの章法也、【湘江―】湘江には豈水なからんや、水はあれども此江は昔屈原身を沈めて、魚腹の中に忠臣の靈魂を葬り埋みし處也、其所見の景は漠々たる愁雲雨を結て凝て不流、兩岸には猿の聲哀しく聞て物さびしきのみ也、【屈原】史記八十四屈原者名平楚之同姓也、爲楚懷王左徒、博聞强志明於治亂

—】我が少年の朱顏常に留て、如し變衰することなくんば、其恩の重きこと丘山の高大なるが如ならんと也、【爲君—】我若し恩を蒙ることを得ば、我も亦君が爲に、月を蝕して明を失しむる蝦蟇の精を殺却して報とすべし、腰間幸に老劒の光芒凜々と寒きを帶たるほどにと也、【蝦蟇精】注韓月食詩韓文五載之、【臣心】作臣有事文類聚前集月部盧仝月蝕詩曰、又聞古老說、蝕月蝦蟇精、徑圓千里入海腹、如此癡騃阿誰生云云長篇の詩也、【老劒】は古劒と云義也、【光芒】は劒光きら〳〵として及の銛を云也、晉書雷煥傳、雷煥爲豐城令、掘獄屋基、得一石函、中有雙劒、煥以南昌西山北巖下土、以拭劒光芒艷發、注杜詩全集五蕃劒詩云、致此自僻遠、又非珠玉裝、如何有奇怪、每夜吐光芒、虎氣必騰上、龍身寧久藏、風塵苦未息、持女奉明王、

舉酒勸明月、聽我歌聲發、照見古人多少愁、更與今人照離別、（李詩今人不見古時月、今月曾經照古人、）我曹自是高陽徒、（晉山簡與山濤至高陽習家池、醉飲爲高陽徒、）肯學群兒嘆圓缺、（坡詞人有悲歡離合、月有陰晴圓缺、）

【舉酒—】酒を舉て明月に勸めて言、明月試に我が歌聲を發して唱るを聽かれよと也、歌聲は下の二句を指す、【照—】月に對しては感を興し愁を結ぶと多し、今夕所見の月古來多少の愁人をか照し見つらん、更に今人の爲に又離別の筵を照すと也、注【李詩】把酒問月詩也、【我曹—】史記九十七酈食其傳云、沛公引兵過陳留、酈生踵軍門上謁、曰高陽賤民酈食其願得望見口畫天下便事、使者入通、沛公方洗、問使者曰何如人也、使者對曰狀貌類大儒、衣儒衣冠側注、沛公曰爲我謝之言、我方以天下爲事、未暇見儒人也、使者出謝曰云云、酈生瞋目案劒叱使者曰、走復入言沛公、吾高陽酒徒也、非儒人、注索隱云、案高陽屬陳留圉縣、高陽鄉名也、故耆舊傳云、食其圉高陽縣人、正義云陳留風俗傳云、高陽在雍丘西南、括地志云圉城在汴州雍丘縣西南、言は亭上に會飲する我が曹の如きは、自ら是高陽の徒に等し、豪放を以て自適すると也、注簡が事を引く誤也、山簡習氏の園池に遊て置酒

【天風━】高天の淸風虛空を灑掃し、浮雲悉くに滅沒する也、萬里雲絕て宇宙澄徹す、故に千岩萬壑明朗にして瓊瑤の窟の如くなると也、【瓊瑤】美玉也、詩衞風木瓜篇、報之以瓊瑤、【桂花飛影】即ち月影也、月中に桂樹あり故に月を指て桂花と云、明月の淸影盞中の酒に映ずる也、酉陽雜俎云、月桂高五百丈、下有一人常斫之、樹創隨合、人姓吳名剛、西河人、學仙有過謫令伐樹、○瑯琊代醉編卷一云、劉績飛雪錄載杭州靈隱寺月中墜桂子事、似涉怪異、本艸圖經云、江東諸處多於衢路間拾得桂子、破之辛香、古老相傳是月中下也、不知當地何以獨有、寧非月路耶、餘杭靈隱寺僧云、種得一株、近代詩人多所著述、月路之說尤怪異、白樂天詩偃蹇月中桂、結根依靑天、天風繞月起、吹子下人間、【傾下━】盞中に映ずる月影を胷中に傾け下して飮ときは、內淸骨を照して潔きと也、

玉兎擣藥與誰餐、李白兎搗藥秋復春、且與豪客留朱顏、朱顏如可留、恩重如丘山、爲君殺卻蝦蟆精、韓月蝕詩、嘗聞古老言、疑是蝦蟆精云云、臣心一寸刄、可剗凶蟇腸、

腰間老劍光芒寒、杜詩如何有奇怪、毎夜吐光芒、

【玉兎擣藥】晉傅玄擬天問云、月中何有、白兎擣藥、文選十三謝莊月賦、引玄兎於帝臺、集素娥於后庭、注善曰、張衡靈憲曰、月者陰精之宗、積成爲獸象兎形、春秋元命苞曰、月之爲言闕也、兩說蟾蠩與兎者陰陽雙居、明陽之制陰陰之倚陽、明謝肇淛五雜俎卷一云、世間第一誕妄可笑者、莫如日中之烏月中之兎、而古今詩文沿襲相用、若以爲實然者、其說蓋出於春秋元命苞淮南鴻烈解及張衡靈憲語耳、然屈原天問已有畢羽之說、而史記龜策傳載孔子言、日爲德而辱於三足之烏、夫史記所載不見經書、而天問所疑皆兒童里俗之談近於戲遊、至漢以後遂通用之而不疑矣、言は玉兎は月中に在て常に藥を擣と云ひ傳たり、不知其藥は誰にか與て餐はしむるぞと也、注李白本集二十把酒問月詩也、【且與━━】詩人の願也、玉兎所擣之藥を分て、且く豪英の客に與て、少年の朱顏を留め長く老しむることなかれと也、【朱顏】少年の顏色紅にして美好なるを云、楚辭朱顏皓齒、豐肉微骨、【朱顏如

後代效レ之因以二金瑠一飾二首前一插二貂尾一陳仁錫潛確類書八十八黑貂裘條下、梁簡文帝謝レ裘啓、物華二雉毳一名高二燕羽一才慚二齊相一愧二白狐之飾一德謝二漢蕃一均二黑貂之賜一地卷二朔風一庭流二花雪一因以据二生惠氣一袖起二陽春一【枯槁】二字ともにかるゝと讀む、形容羸瘦する也、【黎黑】字彙黎黑木也、顏面潤澤なくして黑木の如くなる也、【龍蟠】龍を以て士に比す、龍は時に應じて出れば雲を興し雨を行れども、蟠て泥中に潜居し、雲を得ざる間は天に昇る翼を生ずること不レ能、士の窮して下流に處し、志を不レ得も亦如レ此、龍の如き德あれども時に不レ遇して困窮し、道を行ふことを不レ得と云意也、

○邀月亭

此亭子不レ詳レ在二何處一邀は招也求也、月を看ん爲めに構へたる亭なるべし、

馬子才

亭上十分綠醑酒、盤中一筋黃金雞、（李白詩、黃雞啄レ黍秋正肥、）滄溟東角邀二姮娥一

氷輪碾上青琉璃、（靈源夫人詩、氷輪碾二太淸一、）

十分酒の壺樽に盈て多き也、【醑】私呂切美酒也、綠色の美酒也、一筋、筋は骨絡也、舊說に一串之義也、黃金雞、雞の羽毛黃色にて金の如なるを云、已に十分の酒を置き又一筋の雞を設く、これを以て月の出來を待ち宴を張んと也、〔注〕李白詩南陵叙別の詩前に見たり、【滄溟】は海也、十洲記水黑色謂二之溟一【東角】は東隅也、姮娥は月を指す說前に詳也、【氷輪】月の形氷を削て造れる車輪の如くなるを云、【青琉璃】晴空亮へ澄て天色一碧にして些の雲翳なし、只一片の青琉璃の若くなるに因て、碧空を指て直に青瑠璃と云也、言は酒を置き肴を陳て月を待つ、少時の間に滄海の東隅より姮娥の清光を邀ふ、これを望めば圓月の清輝朗冷にして氷輪の如く、漸々に青天に碾り上ると也、【碾字】は氷輪より出來也、〔注〕靈源夫人詩未レ考、

天風灑掃浮雲沒、千岩萬壑瓊瑤窟、桂花飛影入レ盞來、傾二下胃中一照二淸骨一、

に見たり、【相思―】美人を相思て獨眠る、一夜偶〻梅花發て蕭洒たる馨香暗に窻前に至る、始て覺る時忽此清香を聞て驚て、美人の此に至れるかと疑ふと也、君は美人を指て云、[注]結句に梅花を以美人に比するときは、彼美人の風姿清潔なること想ひ見べしと也、

○行路難

李白詩集卷三有行路難、注齊賢曰、晉山松傳舊歌有行路難、曲詞頗疎質、山松好之乃文其辭句、婉其節制、每因酣醉縱歌之、聽者莫不流涕、士贇曰、行路難者古樂府道路六曲之一、亦有變行路難、此曲は命途舛ふこと多くして、道の行はれ難きを、道路の險澁にして行き難きに比して云ふ也、

張 轂

傳未詳、古文大全作張 轂、

湘東行人長歎息、十年離家歸未得、敝裘羸馬苦難行、僮僕盡飢少筋力、

湘東は湘水の東也、【行人】は行旅の人也、官の名に非ず、湘東の邊に行旅と爲てある人、長へに歎息して感慨す、十年來鄉里の家を離て客となり、今に至て猶歸ることを不得と也【敝裘―】久く征途を閲ふ、故に裘敝れ馬羸て苦だ行難む也、囊中空して資用不給、僮僕も疲れ飢て筋力乏く使令に不任と也、

君不見牀頭黃金盡、壯士無顏色、蘇秦說秦王書十上而說不行黑貂之裘敝黃金百斤盡資用乏絕去秦而歸形容枯槁顏色黎黑 龍蟠泥中未有雲、不能生彼昇天翼、

爾雅有翼曰應龍、未升天曰蟠龍、

此四句には、英雄の士も時に不遇志を遂げがたきことを云、【君不見―】君彼の蘇秦が事を不見や、屢說すれども說行れず、牀頭に所貯の黃金用盡て後、さしもの壯士牢落して顏色澤なくかじけたると也、[注]此語戰國策卷三上秦惠文君の下に見えたり、【蘇秦】史記列傳九、蘇秦東周雒陽人也、東事師於齊、而習之於鬼谷先生、出遊數歲大困而歸、後適齊宣王爲客卿、【黑貂】字彙貂音彫、陸佃曰朔地苦寒人以其皮溫額、

に巫山の雲の邊に醉て臥すとおぼへたると也、【巫山】唐地理志三十、山南道夔州巫山縣有二巫山一、【覺來涙—】一場の夢忽ち覺て涕涙滴り落ち、唯湘江の水の涯に在て行て見ることを不レ得なり、【湘江水】漢桑欽水經云、湘水出二零陵始安縣陽海山一、東北過二零陵縣東一、又東北過二洮陽縣東一、又東北過二泉陵縣西一、又東北過二重安縣東一、又東北過二酃縣西一、又東北過二陰山縣西一、又北過二澧陵縣西一、又北過二臨湘縣西一、又北過二羅縣西一、又北過二下雋縣西一、又北至二巴丘山一入二于江一、【湘江兩岸】夢覺て江の兩岸を望めば、花木茂り深きをのみ見て、美人は不レ可レ見景色倍〻人の心を愁しむると也、【含愁】美人を思へども不レ見、故に心不レ樂して愁を含む也、因て琴を把て自ら獨り彈する也、【綠綺琴】文選三十張孟陽擬二四愁詩一云、佳人遺二我綠綺琴一、何以贈レ之雙南金、注二善曰、傅玄琴賦序曰、齊桓公有二鳴琴一曰二號鍾一、楚莊有二鳴琴一曰二繞梁一、中世司馬相如有二綠綺一、蔡邕有二燋尾一、皆名器也、【調高】古文大全調曲譜也、琴の曲を彈する調子高して絃絕れども、音を知て能言ふ者なきと也、事文類聚續集二十二、琴部云、蔡琰邕之女、年六歲邕夜彈レ琴絃絕、琰問レ之曰第一絃也、復斷問レ之曰第四絃也、

邕曰偶中耳、琰曰昔季札觀レ風知二四國興衰一、師曠吹レ律知二南風不一レ競、由レ是言之何得レ不レ知、注【呂氏春秋】秦の呂不韋が撰する所の書也、史記呂不韋傳云、呂不韋爲二相國一、乃使下其客人人著二所レ聞、集論以爲二八覽六論十二紀二十餘萬言一、以爲備二天地萬物古今之事一、號曰二呂氏春秋一、【伯牙—】呂氏春秋卷十四云、伯牙鼓レ琴鍾子期聽レ之、方レ鼓レ琴志在二大山一、鍾子期曰、善哉乎鼓レ琴、巍々乎如二大山一、志在二流水一、鍾子期曰、善哉乎鼓レ琴、洋々乎若二流水一、鍾子期死、伯牙擗レ琴絕レ絃、終レ身不二復鼓一レ琴、以爲世無二足レ鼓レ琴者一也、

美人兮美人、不レ知爲二暮雨一兮爲二行雲一、

楚襄王與二宋玉一遊二於雲夢一、夢二一婦人一曰、妾本巫山之神女、朝爲二行雲一暮爲二行雨一、

相思一夜梅花發、忽到二窗前一疑是君、

終以二梅花一比二美人一、則其清潔可レ知也

美人兮美人再び呼ぶは、相親むことの厚く思ふことの深き也、【不知—】言ろは我れ美人を慕ふこと如レ此深し、不レ知美人も亦我を思て暮雨となり、行雲となるの情ありや否やと也、注宋玉高唐賦序文也、已に前

侠盡淹留、【珠箔】箔は簾也、珠を以て簾を飾る也、西京雜記卷二云、漢諸陵寢皆以竹爲簾、皆爲水紋及龍鳳之像、昭陽殿織珠爲簾、風至則鳴如珩珮之聲、【天之涯】文選十九首詩云、相去萬餘里、各在天一涯、注善曰、廣雅曰涯方也、相去るの間甚だ遠して、其在所を望めば遙に天の一方にあり、此に天之涯と云は阻ること甚だ遠の意也、言は昔日共に遊し美人の居所青樓珠箔今は遙に阻て天の涯に在と也、

娟々姮娥月、三五二八盈又缺、翠眉蟬鬢生別離、一望不見心斷絶、

【娟々】字彙嬋娟美好貌、【姮娥月】婦人の名也、仙を得月中に身を托す、故に月を指て姮娥と云、淮南子覽冥訓云、羿請不死之藥於西王母、姮娥竊以奔月、注姮娥羿妻、羿請藥於西王母、未及服姮娥盜食之、得仙奔入月中、李尤獨異志卷上曰、羿燒仙藥、藥成、羿妻姮娥竊而食之、遂奔入月中、【三五】十五夜也、【二八】十六夜也、二句は美人の麗質を云、娟々とうつくしき月色三五の夜光盈ち、二八の夜少く缺る時を望むが如くなる顏色にてありしと也、【翠眉】眉の色翠色にてうつくしき也、文選好色賦、眉如翠羽、肌如白雪、【蟬鬢】鬢を粧ふこと蟬の翼の如くなるを云、古今注云、魏文帝宮人絶所愛者有莫瓊樹、薛夜來、田尙衣、段巧笑四人、日夕在側、瓊樹乃制蟬鬢、縹眇如蟬、故曰蟬鬢、【生別離】死別に非ず生ながら別離する也、楚辭云莫悲兮生別離、言ろは彼の美人翠眉蟬鬢の姿に別離してより、領を引て望めども不得見、相思內に切にして心斷絶する也、

心斷絶、幾千里、夢中醉臥巫山雲、覺來淚滴湘江水、湘江兩岸花木深、美人不見愁人心、含愁更奏綠綺琴、司馬相如琴名、調高絃絶無知音、呂氏春秋伯牙鼓琴、鍾子期知音、子期死伯牙擗琴絶絃、

【心斷絶—】美人を慕ふこと切にして心斷絶し、幾千里の遠を思ふ也、相思て睡れば夢の中に美人とともに

の意也、死艸生華風とは枯れたる草も一旦春に遇て陽和の力を得れば、再び綠葉を生じ、光風に靡くことあり、二句言は漢の顏駟三代時に不遇、尨眉の年まで郎官に在て志を不得して、秋蓬の轉飄に感じて傷めり、誰か知ん一旦武帝の恩顧に遇て、遂に都尉となり、死艸の再び榮て華風を生ずるに似たることをと也、これを引て自ら期望する也、【我今―】【垂翅】とは高く飛ぶことを不得して下位に在を云、後漢書列傳七馮異傳、始雖垂翅回谿、終能奮翼澠池、【冥鴻】注謂二公也、冥々たる高空を飛ぶ鴻也、二公の名聲高大なるを云、楊子法言五問明篇云、鴻飛冥々、弋人何簒焉、【他日】後來の日を指て云、【蛇作龍】史記四十九外戚傳曰、丈夫龍變、傳云蛇化爲龍、不變其文、家化爲國不變其姓、二句上を承て言ふ、顏駟が時に不遇も終に一旦擢て用られたり、況や我が如き遂に下位に終んや、我今翅を垂て二公の下に附くとも、他日豈に蛇の龍と化するが如くならざらんや、一旦貴顯に至るとも、才に於ては不羞ところあると也、

○有所思

詩中所謂美人、即詩彼美人兮西方之人兮之意、

詩林廣記前集八載之、雪浪齋日記云、玉川子詩讀者易解、識者當自而知之、蕭才子宅問答詩如莊子寓言高僧對禪機、惟有所思一篇語似不類、疑他人所作、然飄逸可喜、又唐詩遺響五載之、注此詩中に美人と云は賢人君子を指て云也、即ち詩に彼美人と云と同意也、此詩は賢者の隱て不見を思慕するの意也、詩邶風簡兮卒章云、云誰之思、西方美人、彼美人兮西方之人兮、小序刺不用賢也、

盧仝

當時我醉美人家、美人顏色嬌如花、今日美人弃我去、靑樓珠箔天之涯、

【當時―】昔時美人の家に遊て酒を酌て樂み醉たり、其美人顏色艶美にして嬌たる粧ひ如花なりしと也、【如花】文選宋玉神女賦、燁乎如花、溫乎如瑩、【今日―】今は彼美人我を棄て行き去り見ることを不得なり、【靑樓】婦人の所居の樓を靑色を以彩飾す、故に倡女の所居を稱して靑樓と云、王褒詩靑樓臨大道、游

言、吾欲見鉅公、注張晏曰天子爲天下父、故曰鉅公也、師古曰鉅大也、こゝは借用て文章の大作手公と云義と爲也、

二十八宿羅心胷、角亢氐房心尾箕斗牛女虛危室壁奎婁胃昴畢觜參井鬼柳星張翼軫二十八位星宿、元精炯々貫當中、元氣精英、炯々光明貫于心胸、【炯】音耿殿前作賦聲摩空、筆補造化天無功、

【二十八―】星宿は天の文章也、韓公の文章高妙なること、天の二十八宿を心胷の間に羅ね懸たるが如くなると云意、羣書拾唾云、周天三百六十五度四分度之一、列布二十八宿以定天體、角亢氐房心尾箕爲東方蒼龍之體、凡七十五度、斗牛女虛危室壁爲北方玄武之體、凡九十八度四分度之一、奎婁胃昴畢觜參爲西方白虎之體、凡八十度、鬼柳星張翼軫爲南方朱鳥之體、凡一百一十二度、【元精】注元氣精英、【炯々】注光明貫于心胷、言は星宿の元氣精英の彩光、炯々と明に耀て心胷の當中に貫き掛れるが如くなると云義也、【殿前―】天子の殿前に進て賦を作ときは、韻音清亮にして諷誦の聲虛空に徹して空を摩するが如くなると也、或は殿前の題を賦して聲譽籍甚にて、氣燄發することの高きを云か、【筆補―】大筆を以て文章を作り、造化の力不及ところを補ひ助て、天は却て運行の功無きが如くなると也、文を作て雨を致し、晴を乞ては雨止の類、造化を補ふとも云ふべし、以上の四句は二公の文章妙あることを云也、

龐眉書客感秋蓬、誰知死艸生華風、我今垂翅附冥鴻、垂翅賀自謂也、冥鴻謂二公也他日不羞蛇作龍、異日如蛇變龍、賀自期也、

【龐眉書客】漢の顏駟に比して自ら謂ふ也、【尨眉】は後漢書循吏傳劉寵傳注、尨雜也、老者眉雜白黑也、眉毛の斑白なるを云、漢武故事曰、上至郎署舍見一老郎尨眉皓髮、問何時爲郎、對曰臣姓顏名駟、文帝時爲郎、文帝好文而臣好武、景帝好美而臣貌醜、陛下好少而臣已老、是以三葉不遇也、上感其言擢爲會稽都尉、【感秋蓬】流轉して不得所を云也、蓬艸秋に至て根斷へ、風に隨て飄轉するを轉蓬と云、秋蓬は轉蓬

○高軒過

李賀七歳能詞章、韓愈皇甫湜過其家、使賀賦詩、援筆輒就、名高軒過、

詩林廣記前集卷八、太平廣記卷二百二、並載之、廣記所載與此集有小異、廣記憐才部曰、李賀字長吉、唐諸王孫也、父瑨肅邊上從事、賀年七歳以長短之歌名動京師、時韓愈與皇甫湜、覽賀所業奇之、而未知其人、因相謂曰若是古人吾曹不知者、若是今人豈有不知之理、會有以瑨肅行止言者、二公因連騎造門請其子、既而總角荷衣而出、二公不之信、因面試一篇、賀承命欣然操觚染翰、旁若無人、仍目曰高軒過、曰華裾織翠青如葱、金環壓轡搖玲瓏、馬蹄隱々聲隆々、入門下馬氣如虹、云是東京才子文章鉅公、二十八宿羅心胸、殿前作賦聲摩空、筆補造化天無功、元精耿耿貫當中、龐眉書客感秋蓬、誰知死草生華風、我今垂翅負天鴻、他日不羞蛇作龍、二公大驚遂以所乘馬命聯鑣而還、所居親爲束髮、年未弱冠丁內艱、他日擧進士、或謗賀不避家諱、文公時著諱辨一篇、不幸未壯室而終、注【皇甫湜】新唐書列傳一百一韓愈傳附、皇甫湜字持正、睦州新安人、擢進士第爲陸渾尉、

李長吉

華裾織翠青如葱、金環壓轡搖玲瓏、轡鞍轡也、轡音閉、馬蹄隱耳聲隆々、入門下馬氣如虹、云是東京才子文章鉅公、已上言韓愈皇甫湜衣服車馬之華飾也、

【華裾】ははなやかなる裾也、翠の色に織り成して青きこと葱葉の如くなると也、文選南都賦章陵欝以青葱、注爾雅曰青謂之葱、【金環】は馬の銜兩旁にある環を金を以て作たる也、【壓轡】轡は手綱也、金環は轡を壓て口外にあり、故に金環壓轡と云、【玲瓏】文選甘泉賦、前殿崔巍兮和氏玲瓏、注良曰玲瓏光明貌、てりかゝやく貌を云也、【隱耳】漁隱玉屑廣記並作隱々、隱は微也、馬蹄の步む聲遠くより遥に聞ゆる也、【隆々】隆は盛也、金環の搖て鳴る聲を指す也、【入門—】二公李賀が家に到り、入門馬より下るを見れば、豪英の氣象虹の如くなると也、【東京】は洛陽也、韓退之洛陽の令となれり、故に東京の才子と云也、【才子】潘岳西征賦、賈生洛陽之才子、【文章鉅公】文章を作る名人なると云意、漢書郊祀志上云、羣臣有言、見一老父牽狗

有言音樂之悅耳

況是青春日將暮、桃花亂落如紅雨、春老花殘勸君終日酩酊醉、宜及時以行樂酒不到劉伶墳上土、晉劉伶字伯倫好飲酒、每出携鍤自隨、語人曰遇醉死輒即埋我、

【龍笛】音龍吟の如くなる笛を云也、文選馬季長長笛賦云、羌人伐竹未及已、龍鳴水中不見已、截竹吹之聲相似、剡其上孔通洞、之裁以當篴使易持、梁庾信詩惟有龍吟笛、【鼉鼓】詩靈臺篇云、鼉鼓逢々、草木疏云、鼉形似蜥蜴、四足長丈餘、甲如鎧皮堅厚宜冒鼓、【皓齒】曹子建洛神賦、丹唇外朗、皓齒內鮮、【細腰】後漢書列傳十四馬廖傳、夫改政移風必有其本、傳曰吳王好劍客百姓多創瘢、楚王好細腰宮中多餓死、注墨子曰楚靈王好細腰而國多餓人也、皓齒細腰共に皓齒細腰の美人前に歌舞すると也、美人を指て云、一句言は笛を吹き鼓を擊て樂を奏し、酒食皆美にして音樂美人悉く前に備る、是既に酒與を助くるに堪たり、【況是―】復齋漫錄云、長吉有桃花亂落如紅雨之句、以此名世、言は況是青春の麗日將に暮んとして、桃花の亂落紅雨の降るが如し、此時此景に遇て豈年華を惜て醉を恣にせざらんやと也、【勸君―】此一句題の進酒に歸す、【酩酊】字彙醉甚貌、君に勸む時に及ては宜く行樂すべし、此景に對して終日酒を酌て、酩酊として正體もなきほど醉て懽を盡し玉へと也、【酒不到―】此又酒を進るの活語也、人は只生てある間に時に遇はゞ劇飮を爲すべし、劉伯倫はさしもの酒嗜なれども、已に死して後は酒が墳上の土にまで到らばこそ、遂に飮むことを不得ほどに、生て時に遇ふこそ幸なれ、只いかほども觴を累て醉を極められよと也、【劉伶】晉書列傳十九、劉伶字伯倫、沛國人也、身長六尺容貌甚陋、放情肆志、常以細宇宙齊萬物爲心、淡默少言不妄交接、與阮籍嵇康相遇欣然神解、携手入林、初不以家產有無介意、常乘鹿車携一壺酒、使人荷鍤而隨之、謂曰、死便埋我、其遺形骸如此、嘗渴甚求酒於其妻、妻捐酒毀器涕泣諫曰、君酒太過、非攝生之道、必宜斷之、伶曰善、我不能自禁、惟當祝鬼神自誓耳、便可具酒肉、妻從之、伶跪祝曰、天生劉伶以酒爲名、一飮一斛五斗解酲、婦兒之言愼不可聽、仍引酒御肉塊然復醉、

昔日歌舞せし處今は月のみ在て、當時の人復た見ることなし、所見の事を撫して懷を興す、且つ酒を飲て樂むに如ことはなきぞと云意を云へると也、

○將進酒　鋪叙將欲薦進酒醴之意

客に酒を勸て飮ましむる也、注鋪叙一篇の中、美酒佳肴音樂風光を云ひ並て、これを因として酒を飮まれよと進めかくる詩なると云意、

李長吉

琉璃鍾、琥珀濃、小槽酒滴眞珠紅、烹龍炮鳳玉脂泣、羅幃繡幕圍香風、　首二句言酒味之美、次言食饌之珍羞、

【琉璃鍾】琉璃を以て酒鍾を造也、今の悶都魯の盞類也、前漢書九十六西域傳、罽賓國出封牛水牛珠璣珊琥魄璧流離、注師古曰、魏略云太秦國出赤白黑黃青綠縹紺紅紫十種流離、此蓋自然之物采澤光潤踰於衆玉、其色不恒、今俗所用皆銷冶石汁、加以衆藥灌而爲之、尤虛脆不貞實、非眞物、此れに由て觀れば琉璃鍾は今のビイドロの猪口盞也、【琥珀濃】陶隱居曰、琥珀松脂入地千年所化中有蜂形、色如生者能拾芥、酒の色濃にして琥珀の如し、故に琥珀濃なりと云、【小槽】韻會槽畜獸之食器、又酒槽也、【眞珠紅】酒の滴たる形眞珠の如くにて酒色紅なると也、陸務觀老學菴筆記卷五云、唐人喜赤酒甜酒灰酒、皆不可解、李長吉云、琉璃鍾琥珀濃、小槽酒滴眞珠紅、白樂天云、荔枝新熟雞冠色、燒酒初開琥珀香、杜子美云、不放香醪如蜜甜、陸魯望云、酒滴灰香似去年、【烹龍―】供具の美味多きを云也、楊升菴文集六十九曰、内典言飮食之侈曰炮鳳烹龍雕蚶鏤蛤、【玉脂泣】肉の脂膏椀の面に泛て玉のやうなるが、泣滴の如くに多きの意也、羅幃羅はうすもの也、幃は單帳也、たれぎぬ也、【繡幕】繡は繡と同じぬひもの也、【圍香風】緯幕を圍みたる中にて香を焚くときは、香烟風に轉じて滿坐に薫す、風の香しきが如し、故に圍香風と云也、注【珍羞】珍は異味の美物を云、八珍と云が如し、羞は薦也膳也すゝめもの也、

吹龍笛、擊鼉鼓、皓齒歌、細腰舞、

已摧、

【碧艸—】碧色の嫩艸已に地に満て生ずるは、春意已に遍き也、江文通別賦、春艸碧色、春水綠波、【柳與—】柳は綠芽を生じ、梅は花を開て互に春光を爭て榮るが如くなると也、【謝公自—】謝公を以て自ら比する也、題に携妓と云ときは此遊び謝公に似たることあり、故に比し言也、自有の字可見、今日我も亦自有妓と云の意也、【謝安】晉書列傳四十九、謝安字安石、陳國陽夏人、少有重名、初辟除、並以疾辭、有司奏安被召歷年不至、禁錮終身、遂棲遲東山、常往臨安山中、放情丘壑、然每遊賞、必以妓女從、注【棲遲】詩陳風衡門篇、衡門之下可以棲遲、朱注棲遲遊息也、【金屏—】金屏を立て筵を張り、花の如く佳麗なる妓女嬉笑して次坐ると也、宋玉神女賦燁乎如花、【今日非—】光陰の移ること甚だ速にして我を不待、今の日は已に昨の日に非ず、今日又不住して明日還て復た來ると也、【白髮—】白髮遲暮の年を以て、光陰を惜て綠酒に對す、感慨最深し、强て一曲の歌を唱れば歌て感を興すこと又多し、故に心已に摧くと也、本注歐陽建詩、痛酷摧心肝、

君不見梁王池上月、昔照梁王樽酒中、梁王已去明月在、黃鸝愁醉啼春風、分明感激眼前事、莫惜醉臥桃園東、大意謂、梁王昔日歌舞之地、今有明月、如曾人、安在哉、太白撫事興懷、不如且暢飲於桃園也、

【梁王池】西京雜記卷二云、梁孝王好營宮室苑囿之樂、築兎園、園中有雁池、池間有鶴洲鳧渚、言ろは梁王の池上を照す月は、昔梁王在し時游宴の席に臨て樽酒の中を照したる月なるべし、梁王已に世を去て久し、歌舞の地今蹤跡なし、只昔にかはらぬ物とては明月のみ在と也、【黃鸝—】苑中の黃鳥は愁醉して春風の中に飛鳴すると也、愁醉の二字未曉得、【感激】物感じて内よりふるひ興る意也、諸葛孔明出師表云、不勝受恩感激、言ろは今分明に眼前變易の事跡を見て感激す、世間只時は失ひ易く樂みは常にしがたし、今幸に此苑中に遊て春日の美景に値ふときは、酒を飲て樂んにはしかじ、桃園の中に醉臥することを惜み禁ずることなかるべしと也、注李白此篇の大意は、梁王

心悠遠になり、嵩丘に登りて臥て綵雲を夢むるの思ひあると也、古文大全嵩丘作高丘云或作嵩丘者非也、

○三五七言　風清月白葉落鳥飛、向此景而懷思友朋想不能爲情也、

本集廿五載之、注齊賢曰、古無此體自太白始、注不及解詩中に詳也、

李太白

秋風清、秋月明、落葉聚還散、寒鴉栖復驚、相思相見知何日、此日此夜難爲情、　難爲情者不能爲懷也、

【秋風—】秋風清冷に吹すさみて、月色皎々と明なる夜也、此秋晩の景也、【落葉—】此句第一句に應ず、秋風冷し故に落葉聚るかとすれば、又吹散して庭上に紛亂する也、【寒鴉—】第二句に應ず、月色明にして樹を照すこと晝の如し、故に寒鴉栖て復た驚き啞々と啼也、【相思—】因て相思ふに我が友索居て不相見已に久し、又相見んこと不知何の日にあらんやと也、【知】は猶言不知、【此日—】風冷しく月明なる夜、庭上の落葉蕭々として風に隨て聚散し、樹頭の寒鴉月に驚て啞々と啼く、此時此景に遭て友人を想ふの情切にして如何んともし難きと也、【難爲情】とは思ひのやるかたなきを云也、

○登梁王棲霞山孟氏桃園中

本集二十載之、題作携妓登梁王棲霞山孟氏桃園中、【梁王】梁孝王武者漢孝文帝次子也、與孝景帝同母、母竇太后也、孝文帝之十二年爲梁王、三十五年六月卒謚曰孝王、【棲霞山】大明一統志二十三、兗州府棲霞山在單縣東四里、世傳梁孝王嘗遊此、【孟氏】名字未詳、

李太白

碧草已滿地、柳與梅爭春、謝公自有東山妓、　謝安棲遲東山、放情丘壑、好音樂、毎遊賞必以妓從、　金屛笑坐如花人、今日非昨日、明日還復來、白髮對綠酒、强歌心

なる趣あると也、南史景陵王子良傳、賁字文煥善畫、能於扇上圖山水、咫尺之内便覺萬里爲遙、【翠屛】翠の苔むして屛を立たる如くなるを云、文選天台賦、踐莓苔之滑石、搏壁立之翠屛、【丹崖】赤土の岸也、晉書宋纖有遠操、不與世交、太守馬岌造焉、纖高臺重閣拒不可及、岌嘆曰、德可仰而形不可覩、然後知先生人中之龍也、銘詩于石壁曰、丹崖千丈靑壁萬尋、孔德璋北山移文、碧嶺再辱丹崖重滓、【粲】明也翠丹の色、相雜て綺紋のあやある如なると也、【蒼々】は樹色の深綠なるを云、【荊門】唐書地理志三十、山南道江陵府有荊門縣、荊門本山名、唐因山名縣、盛弘之荊州記郡西泝江六十里、南岸有山名曰荊門、上合下開路達山南、有門形、故因以爲名、遠樹の色蒼々然として荊門山をうち圍て見ゆると也、【歷々】文選十九首、玉衡指孟冬、衆星何歷々、あり〳〵と見ゆる貌也、【巴水】山南道巴州有巴水、水の流れ盤曲して巴の字の如し、故に巴水と云、行舟の巴水に汎ひたる景もあり〳〵と見ゆると也、以上の八句皆圖面の景象を敍する也、

水石潺湲萬壑分、烟光艸色倶氤氳、溪花笑日何時發、江客聽猿幾歲聞、使人對此心緬邈、疑入嵩丘夢綵雲、

【潺湲】楚辭九歌云、荒忽兮遠望、觀流水兮潺湲、字彙潺湲水流貌、水の石間を出ること潺湲と流れ出て萬壑分拆する也、【氤氳】字彙氤氳元氣交密之狀、又氛氳宋謝惠連賦、散漫交錯氛氳蕭索、烟の色と艸の色に倶に相雜て、もや〳〵と靄氣起ち罩むる景を寫したると也、【溪花—】溪に生じたる花は日に向て笑ふ如くに開らけたり、畫中の花なれば常に落ることなし、不知此花は何れの時よりか發け初たると也、【江客—】江上に客の猿聲を聽く狀ありて客終に不去、此客は幾歲よりか以前よりこゝに聞をるやと也、【對此】此は巫山の屛風を指す、【緬邈】文選二十五謝宣遠詩云、遵塗歎緬邈、注良曰緬邈長遠也、此圖に對して遠景を觀覽すれば觀者の心も自ら長遠にならしむると也、【嵩丘】四方中央に大山を封して天下の鎭とす、是を五嶽と云、嵩山は西京に在り中岳也、圖を見に依て

の裏に入たるかと疑ふ也、甚だ眞に逼りたると云の意也、西天僧惠理登杭州飛來峯嘆曰、此是中天竺國靈鷲山之小嶺、不知何年飛來、因名之、太白が此詩飛入字此に本くか、

寒松蕭瑟如有聲、陽臺微茫如有情、錦衾瑤席何寂寂、楚王神女徒盈々、高咫尺、如千里、翠屏丹崖粲如綺、蒼々遠樹圍荊門、歷々行舟汎巴水、

【寒松―】歲寒の時松の獨り秀で、蕭瑟とものさびしきを寫したるを見れば、風を含て聲ある如く覺ると也、蕭瑟楚辭九辨、悲哉秋之爲氣也、蕭瑟兮草木搖落而變衰、注蕭瑟寒涼之意、【陽臺】文選十九宋玉高唐賦序云、昔者楚襄王與宋玉游雲夢之臺、望高唐之觀、其上獨有雲氣、崒兮直上忽改容、須臾之間變化無窮、王問玉曰、此何氣也、玉對曰、所謂朝雲者也、王曰何謂朝雲、玉曰 昔者先王嘗游高唐、怠而晝寢、夢見一婦人、曰妾巫山之女、爲高唐之客、聞君游高唐、願薦枕席、王因幸也、去而辭曰、妾在巫山之陽高丘之岨、旦爲行雲暮爲行雨、朝々暮々陽臺之下、注陽臺神自言之實無有、○方輿勝覽云、十二峯上有神女廟陽雲臺、大明一統志云、陽臺山在巫山縣治北高百丈、上有雲陽臺遺址、【微茫】山色雲霧を籠めてをぐらく見ゆるを云也、天祿閣外史卷五遇樵篇云、環于漢陽而微茫者は其鳥鼠乎、【如有情】陽臺の邊に雲霧籠りて微茫たるは、今も尙神女の雨となり雲となるの情あるが如く思はると也、【錦衾―】此一聯を按ずるに、圖中に楚王の游ばれたる高唐を畫きたるなるべし、錦の衾瑤の席を陳たり、何ぞ寂々とさびしくして笑語の聲なきやと也、【錦衾】文選十九首古詩、錦衾遺洛浦、同袍與我違、注善曰毛詩曰、角枕粲兮錦衾爛兮、【瑤席】楚辭九歌云、瑤席兮玉瑱、注瑤美玉也、【楚王神―】盈々文選十九首詩、盈々樓上女、注向曰、盈々不得志貌、言ろは楚王の事狀を畫には寫せども實の神なければ、徒に盈々と隔て夢交なきと云意也、【咫尺】咫字彙音止、八寸曰咫、左傳僖公九年齊侯曰、天威不違顏咫尺、言ろは圖面咫尺の間に能く遠景を寫して千里の如く

【五花馬】本集注士贇曰、五花馬言其毛色也、如九花三花之類、老杜詩亦曰五花散作雲滿身、又个个五花紋其義並出于隋丹元子步天歌、曰五个吐花王良星、注云、王良五星其四星曰天駟、旁一星曰王良、亦曰天馬、其星動爲策馬、故曰王良策馬車騎滿野、謂馬之紋上應星宿也、楊升菴文集八十一云、唐詩朝騎五花馬、又五花馬千金裘、杜詩蕭々千里馬、箇々五花文、隋丹元子步天歌五箇花紋、以馬鬣翦爲五花或三花、皆象天文也、白樂天詩馬鬣翦三花、唐六典云、外牧歳進良馬印以三花飛鳳之字、士贇が注は五花を馬の毛色の花紋なりと云、升菴が説に據るときは鬣を翦て五个の花樣となす也、【千金裘】史記七十五孟嘗君傳云、幸姫曰、妾願得君狐白裘、此時孟嘗君有一狐白裘、直千金天下無雙、又叔孫通傳贊云、語曰千金之裘非一狐之腋也、臺榭之榱非一木之枝也、言ろは五花の馬千金の裘を出して、兒を呼て美酒に換させて、與爾同く醉て、共に萬古欝結の愁を銷せんと也、漢書東方朔傳銷憂者莫若酒、

○觀元丹丘坐巫山屏風

本集卷廿四載之、坐は置くと云義也、巫山の景狀を畫きたる屏風也、

李太白

昔遊三峽見巫山、見畫巫山宛相似、
疑是天邊十二峯、飛入君家綵屏裏、

【三峽】歸峽（又曰巴峽、曰瞿唐峽、）巫峽西江（又曰明月峽、又曰黄牛峽、）盛弘之荊州記三峽七百里中兩岸連山略無重岸疊嶂隱天蔽日非亭午及午夜不見日月、【巫山】唐地理誌三十、山南道夔州巫山縣有巫山、李白昔日三峽を遊覽せしとき巫山の景狀を見たりしと也、今丹丘が座上の屏に巫山を畫けるを見るに、昔所見の狀と宛も相似たると也、【天邊】甚だ高して天に逼りて見ゆる故に天邊と云、【十二峯】大明一統志七十、十二峯在巫山、曰望霞、翠屏、朝雲、松巒、集仙、聚鶴、淨壇、上昇、起雲、飛鳳、登龍、聖泉、沿峽首尾一百六十里、唐沈佺期詩巫山峯十二、合沓隱昭回、俯眺琵琶峽、平看雲女臺、言ろは巫山の天邊に秀でたる十二峯、飛來て君が家の綵屏

れ君が與に一曲を歌ふべし、君も我が爲に耳を傾け側て、聽かれよと也、【側耳】淮南子主術篇云、天下所側目而視、側耳而聽也、

鐘鼎玉帛不足貴、但願長醉不願醒、古來賢達皆寂寞、惟有飲者留其名、

【鐘鼎】富貴の大家鐘を鳴して人を集め、鼎を列して食するを云、張平子西京賦云、翁伯濁質張里之家、擊鐘鼎食、王勃滕王閣序云、閭閻撲地鐘鳴鼎食之家、必讀古文註云、大家將食必鳴鐘爲號、皆列鼎而食【玉帛】論語禮云禮云玉帛云乎哉、古文大全擁鐘列鼎而食、陳玉帛以爲禮、富貴之極方有之、言は鐘を鳴し鼎に食て玉帛を以て禮儀を爲す、富貴の家も貴び希ふに不足と也、平生の願は只長へに酒に醉んことを念ふて醒よかしとは不願と也、本集鐘鼎玉帛作鐘鼓饌玉、【古來賢達—】賢達本集作聖賢、古來賢達の人多けれとも今傳ることとなく名聲寂寞としておとなき也、惟酒を好み飮し者のみ今に云ひ傳其名を世に留め遺すと也、【寂寞】字彙無聲也、

陳王昔日宴平樂、斗酒十千恣歡謔、魏曹植字子建、封陳思王、嘗云我歸宴平樂、美酒斗十千、主人何爲言少錢、且須沽酒對君酌、

【陳王】魏文帝弟曹植字子建也、陳思王に封せられし故に陳王と云也、傳は前の七步の詩に見たり、文選二十七曹子建名都篇云、歸來宴平樂、美酒斗十千、注善曰平樂觀名、【斗十千】酒一斗の價錢十千を用て沽ふを云、酒美なるに因て價貴き也、言ろは陳思王子建昔日平樂觀に於て酒宴を開き、一斗價十千文の美酒を沽て、歡び謔るゝことを恣まゝにして遨遊せられしぞと也、【主人—】且須本集作徑須、沽酒作沽取、言ろは昔人已に美酒を沽て宴をなせり、今日主人何爲ぞ錢少しと言て辭することをせんや、徑に沽取て君と與に對し酌べしと也、

五花馬千金裘、呼兒將出換美酒、與爾同銷萬古愁、

だ題の意を云ひ出さ不、此二句に至て上を承て、所以に酒を飲て懽を盡したるがよきぞと、酒を進むるの意を云ひ出すと也、

天生我材必有用、千金散盡還復來、烹羊宰牛且爲樂、會須一飮三百杯、

【天生―】天我が材を生じて秀逸ならしむるからは、徒に空く朽ちはてしめはせまじ、必ず用ること有べし、千金の資財散じ盡すとも、還て復た聚り來る時節あるべしと也、【千金】史記平準書云、秦以一鎰爲一金、漢以一斤爲一金、史記貨殖傳云、范蠡之陶爲朱公、十九年之中三致千金、再散與貧交疏昆弟、【烹羊―】飮の美を云、宰は屠也、牛羊の美肉を供て膳と爲し宴樂をなす、酒を飮むこと須く一席に三百杯を盡すべしと也、太白襄陽歌にも亦云、百年三萬六千日、一日須傾三百杯、

岑夫子、丹丘生、(岑勛元丹丘當時與二二人一同會)進酒君莫停、與君歌一曲、請君爲我側耳聽、

【岑夫子】注岑勛なりと云、唐書萬姓統譜皆不載岑勛傳、李白詩集十九、有酬岑勛見尋就元丹丘對酒相待以詩見招之詩本集注齊賢曰、杜工部詩多與岑參唱和、且有詩云、岑生多新語、性亦嗜醇酎、岑夫子必此人也、按に岑勛と云說可ならんか、【夫子】字彙云、先生曰夫子、論語云遽伯玉使人孔子、孔子與之坐問焉曰、夫子何爲、賈誼弔屈原賦云、般紛々其離此郵兮、亦夫子之故也、【丹丘生】即元丹丘、太白集二十五有元丹丘山居詩、序云、丹丘家潁陽、新卜別業、其地北倚馬嶺連嶺嵩丘、南瞻鹿臺極目汝海、雲岩映鬱有佳致焉、白從之遊、又太白集七元丹丘歌、元丹丘愛神仙、朝飮潁川之淸流、暮還嵩岑之紫烟、【生】先生と云に同じ、都穆聽雨紀談云、先生之稱見於經傳者不一、然古人亦有止稱生者、如魯有兩生、楚有韓生、漢世則有賈生伏生董生歐陽生之類、顏師古曰、生猶言先生也、言ろは元丹丘岑勛の兩人に申す、酒を進むるならば盃を停ることなく一擧に飮盡さるべし、我

也、黃河は源崑崙山より出で、天下を周流して海に入、天下第一の大河也、【天上來】は崑崙の巓より流れ出て、天を去ること不遠、故に天上より來ると云、【奔流】は急流と同じ、水の勢急速なるを云、言ろは世間の人皆不見黃河の水は高天の上より出來て、奔流して遂に海に入り復た廻ることなきと也、先づ此二句を云て下の句を起す也、【高堂―】左太冲白髮賦、白髮將拔惄然自訴、稟命不幸値君年莫佀迫秋霜生而皓素始覺、明鏡惕然見惡、世上の人又不見、高堂の上に所對明鏡の中には白髮の生じ易きを悲むことを、朝に青絲の如く麗しき髮の色も、暮にははや變じて雪の如く成れり、人生老の至り易きこと甚だ速なるの意を云也、此二句を言て人は只意を得ては懽を盡し、酒を飲べしと進るの張本とす、北周王褒詩、村桃拂紅粉、岸柳被青絲、【注】【孟浩然】唐詩訓解姓氏、孟浩然名浩、襄陽人、少好節義、喜振人患難、隱鹿門山、年四十乃遊京師、失意放還、【淸鏡歎】見事文類聚續集二十八、白髮生作生白髮、輔按に孟浩然は李白同時の人也、太白が詩を注するに浩然が詩を引て證す不可也、

人生得意須盡懽、莫使金樽空對月、　引入進酒意

【人生】人の生涯也、史記李斯傳、二世皇帝曰、夫人生居世間也、譬猶騁六驥過決隙也、文選十九首詩、人生寄一世、奄忽若飇塵、【得意】意のまゝに自得する也、鮑照詩、人生貴得意、懷願待君申、【盡懽】懽樂を盡し極る也、列子曰、子產有兄曰公孫朝、好酒聚酒千鍾、積麴成封、子產以爲戚、因告以禮義之言、朝曰、吾知之久矣、擇之亦久矣、豈待若言而後識之哉、凡生難遇而死之易及、以難遇之生俟易及之死、可孰念哉、而欲尊禮義以誇人、吾以此爲弗若死矣、爲欲盡一生之歡、唯患腹溢而不得恣口之飮、不遑憂聲名之醜也、言人の一生涯は物に拘束せられず、只意のまゝに自得して懽樂を盡すべきことぞと也、【金樽】金を以て酒樽を飾る也、文選三十謝靈運詩、淸醑滿金樽、金樽に對しては酒を酌て樂をなすべし、樽を棄置て空く夜月に對せしむることなかれと也、【注】【引入進酒意】上の二聯には河水の流て廻ることなき如く、人生の老て白髮なり易きことを言て、未

【問春桂―】此三句桃李が春の桂に問の辭也、桃李の樹は春に遭て花を開き、芬芳華麗の榮に誇り、年光の美景こゝにもかしこにも所在に隨て滿ち敷く也、此時に何事ぞや、桂樹は獨花さくことなきと也、此れ言ろは諂諛の小人一旦君の寵を得、恩澤に誇て朝に滿ち、節義の君子は時に不遇して用らるゝことなく、有れども無きが如くなるを云、【芳華】梁丘遲詩、幽房一洞啓、二八盡芳華、【春桂答―】三句春桂の桃李に答る也、桃李春に遇て華さき妍きは固に美なれども、能く幾許の久を持んや、一旦の榮にしてやがて散り失ぬべし、桂は縱ひ春無花とも、秋冬風霜嚴烈にして萬木盡く搖落する時色を不變、衆木にすぐれて獨秀るものは、只桂のみ也、此節操を抱くと君知や否やと也、君は桃李を指て云、此れ言は小人一旦時を得て富貴に誇るとも、能く幾くか久からん、時世變易し、萬方亂離の時に當ては、只君子のみ百艱を經て節操を不改、衆にすぐれて獨立す、此時小人の輩能如此の操あることを得んやと云意也、【搖落】楚辭九辨悲哉秋之爲氣也、蕭瑟兮艸木搖落而變衰、

○將進酒

本集三載之題注士贇曰、將進酒者漢短簫鐃歌二十二曲之一也、魏曰平關中、吳曰章洪德、晉曰因時運、梁曰石首篇、北齊曰破侯景、後周曰取巴蜀、唐時遺音尚存、太白塡之以伸己之意耳、將進酒は古詩の篇名也、太白其體に傚て作れる也、士贇曰此篇雖似任達放浪、然太白素抱用世之才而不遇合、亦自慰解之詞耳、

李太白

君不見黃河之水天上來、奔流到海不復廻、又不見高堂明鏡悲白髮、孟浩然清鏡歎、愁來試取照、坐歎白髮生、朝如青絲暮如雪、設辭引起

本集到海作倒海、又不作君不、如雪作成雪、【黃河】漢桑欽水經云、崑崙墟在西北、去嵩高五萬里、地之中也、其高萬一千里、河水出其東北陬屈、從其東南流入于渤海、本注曹植詩曰、百川東到海、何時復西歸、【君不見】指す所あるに非ず、泛く世間の人に係て云

長短句

三字五字或は六字錯雜て章をなして、常法に拘らざる體也、

○春桂問答

此篇托レ物喩レ人、桃李之研ニ華於春光一、如ニ小人乘レ時而驕ニ富貴一、桂獨秀ニ於風霜搖落之時一、如ニ士窮見ニ節義一也、

春桂は春時の桂樹也、これを以て竊に自比す、天寶の亂に唐の士大夫多くは安祿山に屬し、賊に奉じて臣となれり、王維不幸にして賊に陷て擒らるれども遂に節を折かず、藥を飲て瘖となりたると稱して、祿山が官を授れどもつかへず、作レ詩自悼痛せり、此篇も亦感ずることあつて作れるなるべし、【桂】南方艸木狀云、桂出ニ合浦一、生必以ニ高山之巓一、冬夏常靑、其類自爲レ林、間無ニ雜樹一、交趾置ニ桂園一、桂有ニ三種一、葉如ニ栢葉一、皮赤者爲ニ丹桂一、葉似ニ柹葉一者爲ニ菌桂一、其葉似ニ枇杷葉一者爲ニ牡桂一、【注】【託物喩人】桂を君子に比し、桃李を小人に比す、彼れを借て此れに喩るを云、【桃李―】桃李の花色嬌て妍を極め春日の光に榮へるは、小人媚び諛て人主の寵を取り、一時の勢に乘じて富貴に驕るが如と也、【桂獨―】桂樹は獨秀て風霜肅殺の時に色不レ變は士の窮阨に値て節義の操を見すが如なると也、

王維

新唐書列傳一百二十七、王維字摩詰、九歲知レ屬レ辭、與ニ弟縉一齊レ名、資孝友、開元初擢ニ進士一、張九齡執レ政擢ニ右拾遺一、歷ニ監察御史一、累遷ニ給事中一、安祿山反、玄宗西狩、維爲レ賊得、以レ藥下利、陽瘖、祿山素知ニ其才一、迎ニ置洛陽一、迫爲ニ給事中一、賊平下レ獄、肅宗憐レ之、下ニ遷太子中允一、遷ニ中庶子一、三遷ニ尚書右丞一、上元初卒、年六十一、○才子傳ニ云、祿山愛ニ其才一、逼至ニ洛陽一、供ニ舊職一、拘ニ普施寺一、賊宴ニ凝碧池一、悉召ニ梨園諸工一合樂、維痛悼賦レ詩曰、萬戶傷レ心生ニ野烟一、百官何日再朝レ天、秋槐花落空宮裏、凝碧池頭奏ニ管絃一、時聞ニ行在所一、賊平後授ニ僞官一者皆定レ罪、獨維得レ免、

問ニ春桂一、桃李正芳華、年光隨レ處滿、何事獨無レ花、春桂答、春華詎幾久、風霜搖落時、獨秀君知不、(方九反)

郊甸に重く受て掠られ、伏し竄べき所なし、敢て隱れず罪を得べし、周の大君惟宜く命じ玉へと云、周の天王聞て曰、晉の欒盈を逐しことをとがめて非なりとしながら、又此にて掠め奪たるは人の非を尤め我も亦效て非をなす也、甚だ僻事なりと云へり、韓退之も東都の惡少年を暴惡なりと尤て罰レ之こと度に過て、放縱なる刑を加たるは是又尤に效て道理に違へり、故に左傳を引て自らの過を云へる也、【戮僕】是又左傳の事也、借用て惡少を戮することを云也、左傳襄公三年、晉侯之弟楊干亂二行於曲梁一、魏絳戮二其僕一、晉侯怒謂二羊舌赤一曰、合二諸侯一以爲レ榮也、楊干爲レ戮、何辱如レ之、必殺二魏絳一、魏絳至授二書僕人一、將レ伏レ劔、其書曰云云、不レ能レ致レ訓至二於用一レ鉞、臣之罪重、敢有下不レ從以怒二君心一、請歸中死於司寇上、晉侯の弟楊干と云者、諸侯と會するときに曲梁にて行列の次を亂る、魏絳見て執事不敬なりとて、車を御する僕を殺戮して晉侯に怒れたり、退之惡少の輩を殺して盧仝に詰られたると相類す、故に引用也、【前史】前世に凡そ事の善惡を書し褒貶をなして方策に載ることを掌る史官の人を指て云、此には左丘明を指て云べし、言は尤に效ひ戮レ僕こと已に前史の記に筆して戒とす、我今其戒を不レ愼して又效尤戮僕の過をなせるときは、前世の史に愧かしきことなると也、

買レ羊沽レ酒謝二不敏一、偶逢二明月耀一二桃李一、先生有レ意許二降臨一、更遣二長鬚致一二雙鯉一、（雙鯉書也、）

【買羊―】論語鄕黨篇、沽酒市脯不レ食、朱注沽市皆買也、肉を備へ酒を置て燕席を設る也、【謝不敏】敏聰也、捷也、論語の中處々に見たり、自謙の辭也、退之さとからずして政を誤ることを慙謝するとなり、【偶逢―】此一句時景を叙す、只今明月の輝さやかにて、桃李の花に映じ耀ける春夜の時節に遇たると也、上に長養時節と云に應ず、【有意】恩意を加て遠き棄ざれと云義也、降はくだる也、盧仝を仰ぎ尊て我が席上にくだりのぞまれよと請へる也、【致雙鯉】書翰を贈り致す也、文選二十七樂府上、客從二遠方一來、遺二我雙鯉魚一、呼レ童烹二鯉魚一中有二尺素書一、雙鯉の説詳に第四卷古詩の下に見たり、

所望、況又時當長養節、都邑未可猛政理、

【先生―】先生賊を刑することを聞て、又長鬚の奴を來らしめて云、如此刑戮を以て賊を處置することは我が所望に非ずと也、【處】は制也、定也、【置】は安也、措也、判斷して宜に因てさばくを處置と云なり、【況又―】長養の節は春の時を云也、天地の生德盛に行れて萬物を長じ養ふ時に當ては、必政治を猛くすべからず、殺氣を以て天地の和を傷ればなり、只今賊を刑するは愈ふ宜しからぬしおきなると云意也、禮記月令云、仲春之月安萌芽、養幼少、存諸孤、命有司省囹圄、去桎梏、毋肆掠、止獄訟、【政理】理治也、字彙治民治獄皆曰理、古來唐朝の文を讀むときは政理と讀む、唐は李氏也、理音李、故に諱として治の字の音を借て讀む、理與治義同き故也、今は如字に讀も亦可也、

先生固是余所畏、度量不敢窺涯涘、放縱是誰之過歟、效尤戮僕愧前史、若效尤晉之魏絳戮揚干之僕、有愧於春秋之前史、

【先生―】盧仝先生は、韓愈が常に畏敬をなして仰ぎ尊ぶ所の人なると也、【度量】度音鐸量也、料也、量度量也、能容之謂量、胸次寬廣にしてよく物を受け容れて褊狹なることなきを云也、【涯涘】涯水際也、涘水涯也、度量の廣きこと大海の如にて邊際もなく、涯涘いづこともなく窺ひ知がたきと也、【放縱】共にほしひまゝと訓ず、惡少の徒を遽に刑罰して市に尸し、肆なる政を爲したるを云、此暴肆のしおきをしたるは是れ誰か過ぞや、固に我が失政なりと自ら責る也、【效尤】は已に人をとがめて我も亦過るを云、左傳襄公二十一年、欒盈過於周、周西鄙掠之、辭於行人曰、天子陪臣盈得罪於王之守臣、將逃罪、罪重於郊甸、無所伏竄、敢布四體、唯大君命焉、王曰、尤而效之其又甚焉、杜預曰尤晉逐盈而自掠之是效尤、晉の欒盈と云者晉の君に逐れて周の國を過ぐ、周の西邊鄙にて盈が財物を掠めて奪たり、盈周王の行人に辭して云は、天子の陪臣盈は王の命せる守臣范宣子が爲に逐れて罪を逃んと周に過れり、然るに罪を西鄙の

何侯、立召賊曹呼五百、韋昭曰五百字本作伍陌、伍當也、陌道也、使人導引當道陌中以驅除也、今俗呼行杖人為五百、盡取鼠輩尸諸市、

【嗟】劉熙釋名嗟佐也、言之不足以盡意、故發此聲以自佐也、【赤縣尹】京都の縣尹也、事文類聚外集卷十四云、唐制縣有六等之差、赤畿望緊上中下、京都所治為赤縣、旁邑邑為畿縣、其餘則以戶口多少地美惡為差、【操權】權は稱の錘也、物の輕重を稱るには錘を上下へ移して平にかけ定る也、人の上に居て事の是非を判斷し、平に治むるは權を以て物の輕重はかり定ると同じ、故に政を行ふことを掌るを操權と云也、言は退之東都の尹となつて百姓を安し、寃屈を察し、獄訟を判斷することを掌る、權を專にするの職也、然るに尹の令不行、縣に惡少多きは是尹の權を操ても用られざる也、如此なるときは何を俟てか苟も此職に居らんやと也、【立召—】【賊曹】事文類聚遺集十五云、兩漢有決曹賊曹掾、主刑法、歷代皆有唐掌律令定罪盜賊贓贖之事、【伍佰】崔豹古今注上云、伍佰一伍之伯也、五人曰伍、五長為伯、故稱伍伯、一曰戶伯、漢制兵吏五人一戶竈、置一伯、故戶伯亦曰火伯、以為一竈之主、漢諸公行則戶伯率其伍以導引、○後漢書列傳六十八曹節傳云、節弟破石為越騎校尉、越騎營五白妻有美色、破石從求之、注韋昭辨釋名曰五百字本為伍陌、伍當也、陌道也、使之導引當道陌中以驅除也、按今俗呼行杖人為五白也、同列傳七十下禰衡傳云、黃祖大會賓客、而衡言不遜順、祖大怒令五百將出、注五百猶今之問事也、賊曹は律令を以て罪を考へ、輕重に隨て刑の當を定る者也、五百は笞杖を執て人を刑する者也、退之即ち賊曹五百を召て惡少の徒を罰せよと命ずるなり、注後漢書の注を引て此に附する也、【韋昭】、傳未考、伍は當字の義、陌は道字の義、罪人を引導て道の街陌の中に當て驅り除ふて行に由て、伍佰と云と也、行杖人は笞杖にて人を刑罰する人也、【盡取鼠輩】鼠輩は惡少の輩を云、罵言ふの辭也、三國志魏大祖殺華佗曰、天下無此鼠輩乎、【尸】屍也、殺て屍を市に棄る也、即今の礫也、惡少の輩を悉く捕て市に礫にして尸を暴す也、

先生又遣長鬚來、如此處置非

行其義也、道之不行已知之矣、

昨夜長鬚來下狀、隔墻惡少惡難似、毎騎屋山下窺瞰、渾舍驚怕走折趾、憑依婚媾欺官吏、不信令行能禁止、先生受屈未曾語、忽此來告良有以、

【長鬚】上に所謂一奴の長鬚なる者を來して、一封の牒狀を持して韓退之の所に訴へしめたる也、狀は牒也、簡也、【隔墻―】其狀を閲するに曰、墻を隔て侵陵する惡少年あり、其暴惡似せかたどり難きと也、【惡少】韓文注荀子無廉耻而嗜乎飲食、可謂惡少者也、【毎騎―】韓文注、孫曰、屋山屋危也、瞰視也、輔按に騎跨馬也、無登躋之義也、屋舍也、居也、無危險之義、騎屋山を危山に登ると云義に解すると不通の說に似たり、臆說を以て解之ば惡少年輕捷にして家の屋上に躍り升て、屋脊に跨りて下庭中を窺ひ瞰るなるべきか、然れども屋脊を屋山と云こと未見出處、故に强て說がたし、姑く所見を錄するのみ、【瞰】字彙苦濫切、俯視曰瞰、【渾舍】渾はすべてと云義也、渾舍は擧家と云に同じ、惡少屋山に騎て庭中を窺ふに驚き怕れ、一家の人悉く逃走りて或は顚仆して趾を毀ひ折くと也、【趾】音紙足指也、【憑依―】【婚媾】易震上六云、婚媾有言、婚娶婦也、媾音姤重婚也、惡少の徒婚媾の禮をなして親を結ぶと云に憑て、官吏の人を欺き誣て惡をなし、政令の行れて凡その姦惡皆禁止せらるゝことを不信して、忌み憚ることなきと也、【先生受屈】は惡少の徒に侵し侮らるれども、辱を受て報ふことなきを云、顏氏家訓治家篇云、鄴下風俗以婦持門戶、代子求官、爲夫訴屈と云屈の字と同じ、人の曲を我れに施すを受也、【未曾語】屈を受けても容忍して告げ語らざる也、【忽此―】先生毎に容忍して不語、今忽ち此に告げ來るは良に故あるべし、惡少の惡不止して益々恣にて忍ぶに不勝に至るが爲ならんと云意也、【有以】詩邶風旄丘篇何其久也必有以也、朱注云以他故也、

嗟我身爲赤縣尹、操權不用欲

り、【先生—】盧仝奇才を抱て內に養ふ、一朝顯達せば必大に用らるべし、天子を佐て天下の政を掌る宰相の職に任ずべきと許し召さるゝに非んば、終に出て仕へはせられまじ、棟梁の材は椽に用ることとなり難ければ也、

假如不レ在ニ陳力列一、立レ言垂レ範亦足レ恃、苗裔當ニ蒙ニ十世宥一、（左襄二十一年社稷之固也猶將ニ十世宥之以勸ニ能者一）豈謂貽ニ厥無ニ基址一、（詩詒ニ厥孫謀一）故知忠孝出ニ天性一、潔レ身亂レ倫安足レ擬、

【陳力列】論語季氏篇周任有レ言曰、陳レ力就レ列不レ能者止、列は位也、職事を掌て力を竭し陳て朝廷の列位に就く也、言は盧仝假令終に不レ仕して力を陳て朝廷の列位に在ることなくとも、其平生言を立て人の爲に法となるの軌範を後世に垂れ貽さるゝことは、亦固に後の人頼り恃むに足るべしと也、【苗裔】楚辭離騷經第一、帝高陽之苗裔、朱注苗裔遠孫也、苗者草之莖葉根所レ生也、裔者衣裾之末衣之餘也、故以爲ニ遠末子孫之稱一也、【十世宥】左傳襄公二十一年、祁奚見ニ宣子一曰、夫謀而鮮レ過惠訓不レ倦者叔向有焉、社稷之固也、猶將ニ十世宥之以勸ニ能者一、今壹不レ免ニ其身一以弃ニ社稷一不ニ亦惑一乎、言は盧仝の才德如レ此なるときは、子孫必ず永く榮ずべし、十世の後子孫たとひ罪ありとも、猶賢者の後と云を以て寬宥を蒙て罪を免るにてあらんと也、【豈謂—】【詒厥】は詩經の字を摘み取て、德を積て子孫永く榮るの謀をなすを云也、盧仝德を積めること厚し、是厥の子孫の謀を貽し後裔を安ずるの基址なしと謂んやとなり、基始也、本也、址基也、【注】詩大雅文王有聲篇、詒ニ厥孫謀一以燕ニ翼子一、朱注謀及ニ其孫一則子可ニ以無一レ事矣、【故知—】盧仝の忠孝なること勉强してなせるに非ず、眞に天性自然の德より流出するの誠也、盧仝の不レ仕して處れるは豈に一箇の身を潔うするを高しとして、人の大倫を亂る者の屬ならんや、荷蓧の丈人安比擬するに足んと也、論語微子篇、子路從而後、遇ニ丈人以レ杖荷一レ蓧、子路問曰、子見ニ夫子一乎、丈人曰四體不レ勤五穀不レ分、孰爲ニ夫子一植ニ其杖一而芸、子路曰欲レ潔ニ其身一而亂ニ大倫一、君子之仕也

寓して怪僻の辭を作る、其詩衆人を驚して工なれども、これを恨る人多して謗りをなすこと不已と也、才子傳云、元和間月蝕、仝賦詩意切當時逆黨、愈極稱工、餘人稍恨之、

近來自說尋坦途、猶上虚空跨騄駬、（良馬名馬耳色綠〔騄〕音綠）去歲生兒名添丁、意令與國充耘耔、國家丁口連四海、豈無農夫親耒耜、先生抱才終大用、宰相未許終不仕、

【近來】上の句往年に對す、往年壯歲の時は筆を弄し、怪僻を作て衆を驚せしが、近きころは自說道ふ坦途の平易なる處を尋て行ふ、衆に異なるの事は曾て不爲と、【坦途】坦は平夷也、たいらかなる道途也、【猶上―】險怪の處を不涉、平易無事なる處を尋ねて行ときは、縱橫無碍にして物に忤ふことなし、譬へば虚空に上り騄駬の駿馬に跨て馳するが如し、行路難の勞更になきとなり、【騄駬】列子作綠耳、周穆王八駿の一也、良馬の名也、淮南子云騏驥騄駬天下疾馬也、【去歲―】此句上の尋坦途の句を證す、去年一兒を生めり、怪僻なる名を命することなく、只添丁と名づく、又一人の丁夫を添たると云義也、盧仝の意におもへらく、此子を以て國の爲めに田畝を耘耔する丁夫の員に充つべしと也、韓文注孫曰、盧仝有添丁詩、【耘耔】字彙耘音云耔音子、耘除草也、耔壅禾根也、詩小雅今適南畝、或耘或耔、○才子傳云、時王涯秉政、胥怨於人、及禍起、仝偶與諸客會食涯書館中、因留宿、吏卒掩捕仝、竟同甘露之禍、仝老無髮、奄人於腦後加釘、先是生子名添丁、人以爲讖云、【國家丁口】農夫也、韻會云唐志男子二十爲丁、一說二十以上爲丁、人壽百年爲期、一幹十年則丁當四十強壯之時、故曰丁、○新唐書食貨志四十一云、凡民始生爲黃、四歲爲小、十六爲中、二十一爲丁、六十爲老、授田之制丁及男年十八以上者人一頃、其八十畝爲口分、二十畝爲永業、凡授田者丁歲輸粟二斛稻三斛、謂之租丁、言ろは國家の賦役に使はるゝ丁口は四海を連て甚多し、豈に親ら耒耜を把て耕す農夫に乏しからんや、盧仝の子丁夫とはなるべからず、必ず貴顯ならんと云意を云へ

注刺作七亦切讀む、按當如字讀作音次、言は彼の三子者其處ときは皆高尚にして自ら潔し、常に諷刺の口舌を以て世事を論じ流俗を譏れる人也、【有力】志を立ること豪毅にして力ある也、【不免】力なきにには非れども、猶時の爲に驅使せらるゝことを不免、或は辟て幕下に致され、或は官を授けて仕を促るゝの煩きに遭ふと也、【先生―】先生は盧仝を指す、【事業】平生身を修る行狀を云、盧仝の高德は量知やすからず、外聞達を不求、惟聖人の法律を用ひ守て、自ら已が身を繩し戒めらるゝと也、【繩】は字彙云、直也、約也、戒也、

春秋三傳束高閣、獨抱遺經究終始、往年弄筆嘲同異、仝與馬異詩、同不同異不異

怪辭驚衆謗不已、

【春秋三傳】左丘明、公羊高、谷梁赤三家の傳也、これを春秋三傳と云也、【束高閣】は已に熟讀して義理を究め明し些も疑ふ所なし、故に束て高く閣て復た見ることなきと云意也、此三字本と出晉書殷浩傳、殷浩才多冠世、庾翼曰、此輩宜束之高閣、後天下太平徐議其任爾、閣字字書を按ずるに措置の意なし、禮記檀弓上云、曾子曰始死之奠其餘閣也與、疏云架擔之屬、蔡沈注閣所以庋置飲食也、由此觀れは閣は案の類也、書卷を束縛して架上に挿むは、閣上に飲食を陳ぬる貌に似たるに因て、閣字を借用て高く閣くと云か未詳也、【獨抱―】獨り聖人の遺經を抱持して其旨を玩味し、終始を推究て道理を明されたり也、【弄筆】筆を把て文章をおもしろく作爲するの意也、【嘲同異】とは盧仝と馬異と、各自の名を以て同異を論じて詩を作り、馬異と贈答せられしことを云也、韓文注孫曰、仝與馬異結交、詩云、仝不同異不異、是謂大同而小異、仝自同異自異、是謂同不往兮異不至者、注【馬異】才子傳五云、馬異睦州人也、與元元年禮部侍郎鮑防下進士第二人、少與皇甫湜同硯席、賦性高疎詞調怪澁、雖風骨稜々不免枯瘠、盧仝聞之頗合己志、願與結交、遂立同異之論、以詩贈答、有云、昨日仝不同異自異、是謂大同而小異、今日仝自同異不異、是謂仝不往而異不至、斯亦怪之甚也、後不知所終、【怪辭―】是月蝕の詩を指て云、物に托し意を

○事物紀原六云、府尹按漢百官表曰、右内史、武帝大初元年更名京兆尹、唐以州郡建府者皆曰尹、洛陽城は後漢の都也、唐は長安に都す、故に洛城に東都の留守あり、河南の尹あり、韓文注樊曰、是時鄭餘慶留守東都、李素以少尹行大尹事、盧仝に人勸めて洛城の留守に參覲し、又大尹にも謁見せられよと云者あれば、其事を悉く聞了らず、言語纔に口より出れば輙ち耳を掩て聞くことをだに不欲と也、【水北山―】以下六句三の隱逸皆遂に出て仕へ、或は徵辟を受ることをかぞへ云て、益玉川が清操世間に意なきことを稱する也、【水北】韓文注孫曰、水北水南謂洛水之南北、也、在洛陽城中、元和五年烏重胤爲河陽三城節度使、辟石洪爲從事、洪居水北、溫造字敬輿亦爲所辟、造居水南、故云水北水南山人也、洛水の北に居て不仕、佳名聲譽を得たれども遂に仕路に就て、去年節度使重胤が幕下の士となりたると也、【幕下】は幕府の下也、事物紀原六云、漢書李廣傳注晉灼曰、衞青征匈奴大克、就拜大將軍於幕中、故曰幕府、幕府之名始於此也、顏師古曰、幕府者以軍幕爲義、軍旅無常居止、故以帳幕遮之、廉頗李牧市租皆入幕府、此則非因衞青始有號矣、又漢文帝問馮唐、唐對有上功幕府之說、則上將之稱幕府、其來久矣、今人以稱元帥、義取諸此、【水南―】洛水の南に家居せし溫造も、亦石洪に繼で往て祿に就く、忽隱者の野服を改て鞍馬に乘り、僕從を多く備て閭里を塞ぎ充つるばかりなると也、【少室―】韓文注孫曰、李渤字濬之、刻志於學、與仲兄涉偕隱廬山、久徙少室山、元和元年以左拾遺召不至、四年河陽少尹杜兼遣吏持詔敦促、又不赴、公爲河南令、遺渤書譬說、渤善公言、始出家東都、少室山に隱居する李渤は高尙の行をなして聲價を索ること高し、故に兩度まで天子詔を下して諷諫を言し、天子の遺闕を拾補せしむるの官を授んと徵せども、遂に不赴して隱れ處ると也、

彼皆刺口論世事、〔刺〕七亦切、有力未免遭驅使、先生事業不可量、惟用法律自繩己、

【彼皆】は水北水南の二山人と、少室山人とを指て云也、【刺口】字彙刺音次、諷刺譏切也、又音戚穿也傷也、

少助祭祀、

至今盧仝洛陽に居してより、今退之縣尹となる時に至まで也、【乞米送】乞あたふる也、字彙音氣與也、音詰求也、隣僧より米を送り與へて乏絶を贍す也、【僕】退之自言ふ、字彙云周禮隷僕給勞辱之役者、漢韋玄成傳自稱爲僕　卑辭也、【忝】は天子の恩命を以て任となるを忝しとする也、【縣尹】は縣令也、事文類聚外集卷十四云、縣尹春秋千里百縣、縣有四郡、時縣大而郡小、上大夫受縣、下大夫受郡、縣邑之長曰宰、曰尹、曰公、曰大夫、戰國以來郡大而縣小、秦有縣令長漢因之、凡掌治其縣萬戶以上爲令、滅萬戶爲長、唐制縣有六等之差、凡一千五百七十三縣令、各一人掌導揚風化、撫字黎民、敕四民之業、崇五土之利、養鰥寡、恤孤獨、審察寃屈、躬親獄訟、凡民田收受縣令給之○韓退之傳云、元和初權知國子博士分司東都、三歲爲眞改都官員外郎、拜河南令、【能不恥】我れ此縣の尹と爲て、賢者を賑し豐ならしむること不能ときは、豈能く鄰僧に耻ることなからんやと也、【俸錢―】官に居る者秩祿の差に因て皆月ごとの俸錢あり、毎月の俸錢を以て公私の用度に供給し、其餘を以て時々に少し許の錢を盧仝の家に送り致して、歲時に先祖の祭祀をせらるゝ用度を助くると也、【致】は字彙致使之至也、

勸參留守謁大尹、言語纔及輒掩耳、水北山人得名聲、去年去作幕下士、水南山人又繼往、鞍馬僕從塞閭里、少室山人索價高、兩以諫官徵不起、

【參】字彙趨承也、覲也、謁也、【留守】事文類聚外集卷七云、漢和帝南巡、張禹以太尉兼衞尉留守、唐太宗正觀十七年親征遼東、置京城留守、以房玄齡充、蕭瑀爲副、其後車駕不在京都、則置留守、以金吾大將爲副、咸亨二年高宗幸洛陽、以雍州長史李晦爲西京留守、其後車駕發京都、則置留守、以右金吾大將軍爲副留守、大原府亦置尹及小尹、以尹爲留守、小尹爲副留守、謂之三都留守、【大尹】古文大全云、大尹即府尹也、

後卜居洛陽破屋數間而已、終日苦哦、隣僧送米、朝廷知其清介之節、凡兩備禮徵爲諫議大夫不起、時韓愈爲河南令、愛其操敬待之、嘗爲惡少所恐訴於愈、方爲申理、仝復慮盜憎主人願罷之、愈益服其度量、注【清高】心清して行高き也、【儉材】約にして不奢、事を任して用に足れる材を蓄へ抱く也、【泰然】はゆたかなる貌、【昌黎】は韓愈を稱す、【古風】古風體の詩也、【字々】此二句韓退之の此詩を評する也、【盤旋】めくりめぐる也、字の下しやうぬらりとせず、字ごとに文あつて水のめぐり流れてうつくしき如くなると云意、【委折】句ごとに心を不殘委曲に云ひ開く也、

韓退之

玉川先生洛城裏、（仝居東都自號玉川子）破屋數間而已矣、一奴長鬚不裹頭、一婢赤脚老無齒、辛勤奉養十餘人、上有慈親下妻子、先生結髮憎俗徒、閉門不出動一紀、

【玉川―】玉川は盧仝が號也、先生は尊長の稱盧仝を尊て云へり、洛陽城の裏に居らるゝが、其所居は僅に破れたる屋數間ばかりにて甚だ清貧也、注【東都】は即洛陽也、長安は函谷關の西に在故に西都と云、洛陽は東に在り故に東都と云、後漢の都也、【一奴―】其使令の僕只一奴あり、鬚むさ〳〵と長して頭をも不裹と也、又一婢ありこれ又跣足をもせず韈を不著、赤脚にして而も年老て齒のなき嫗なると也、【辛勤―】此一奴一婢能く辛苦し勤めて、一家十餘人の主に奉養すると也、其一家の裡上に慈親の在すあり、下には妻子數人あり、共に一室の裏に聚り處ると也、【先生―】結髮は兒童の時頭髮稍長して始て結しより以來と云義也、前漢書李廣傳云、廣結髮與匈奴大小七十餘戰、言は盧仝少年の時より已に凡俗の徒を憎み辟て不交、門を閉て外に不出こと動もすれば一紀の間ほどこもり居られしとなり、【一紀】韻會十二年曰一紀、取歳星一周、

至今鄰僧乞米送、僕忝縣尹能不恥、俸錢供給公私餘、時致薄

彙美好貌、【丹楓―】秋の景を云、秋深て楓葉霜に染て紅なるとき、船を留て岸に傍へば楓林に飄飛する鴉噪て我が水宿に伴ひし也、水宿は東坡自言也、【長松―】冬の景を云、長松に雪ふり積て高枝の上より頽れ落れば、庭上聲あつて醉眠を驚破したると也、杜詩に晴雪落長松、【桃花―】桃花流水桃源の事を用、言は上の聯に所謂景致の如きは武昌即是桃花流水の境也、武陵の桃源豈遠く方外に不求して人世の間に在り、必神仙の地にして見ることを得ざる處ならんや、李白詩桃花流水窅然去、別有天地非人間、

江山清空我塵土、雖有去路尋無緣、還君此畫三嘆息、山中故人應有招我歸來篇、陶淵明有歸去來辭、左太冲有招隱篇、

【江山―】上に所謂桃花流水の境自ら人世の間に在れども、江山は清淨空寂の處、我れは塵土の俗累多き身なれば、常に其間に逍遙しがたし、故に去て到るべき路は有れども、尋るに緣なくして隱るゝことを不能也、【還君―】此圖を卷て君が家に還し、因て三たび嘆息す、此江山の勝地を見れども、去て隱るゝことを不得して、世事に勞役す、想ふに必ず山中の故人は、我が早く世を辟て歸り來んことを招て作れる詩篇あるべきと也、【故人】舊友也、史記高祖紀、高祖還歸過沛、留置酒沛宮、悉召故人父老子弟縱酒、【左太冲】晉書列傳六十二、左思字太冲臨淄人、其先齊之公族有左右公子、故因以爲氏焉、貌寢口訥而詞藻壯麗、造齊都賦一年乃成、復欲賦三都、構思十年、及賦成、皇甫謐大稱善、遂爲之序、于是豪貴之家競相傳寫、洛陽爲之紙貴、齊王冏命爲記室、辭不就、終于家、招隱詩見文選二十二、注良曰思苦天下溷濁、故招尋隱者、欲以退不仕、

○寄盧仝

盧仝淸高儉材泰然自安、拔出流俗之表、昌黎爲縣令、以古風寄之、字字盤旋句句委折、宜深味之、

韓文卷五載之、題注韓曰、元和六年春公爲河南令作、【盧仝】新唐書列傳一百一、韓愈傳末附、盧仝居東都、愈爲河南令、愛其詩、厚禮之、仝自號玉川子、嘗爲月蝕詩以譏切元和逆黨、愈稱其工、○才子傳五云、盧仝范陽人、初隱少室山、號玉川子、家甚貧、惟圖書堆積、

て天色を水中にうつし涵すを云、注此數句畫圖の趣を極て寫し狀る也、

使君何從得此本、點綴毫末分清妍、不知人間何處有此境、徑欲往置二頃田、

【使君】は王定國を指て云也、此本は疊嶂圖を指て云也、點綴墨を點し綴て書き寫を云、【分】は界境歷々として分明なるを云、清妍は景致の清空妍麗なるを云、言ろは使君王定國何れの處よりか此圖本を得られたる也、畫手精妙にして毫末纖微の景を點綴し、畫き得て清妍の趣を分ち寫したると也、【人間―】人間の裡何の處にか此畫に寫せるやうの佳境あるや、若眞に有りと聞かば、我徑に其境に往て二頃の田を買置て幽居を占めて住すべき也、【頃】字彙百畝爲頃、

君不見武昌樊口幽絕處、東坡先生留五年、春風搖江天漠々、暮雲捲雨山娟々、丹楓翻鴉伴水宿、長松落雪驚醉眠、桃花流水在人世、武陵豈必皆神仙、武陵神仙

事見前桃源圖注、

【武昌―】武昌樊口共に湖廣府に屬す、黃州と江を隔て相對す、故に東坡黃州に謫居の時留り遊て幽絕の景を賞觀せり、今疊嶂の圖武昌の景に似たることあり、故に及之也、【東坡先生】東坡紀年錄云、元豐四年公在黃州、是年馬正卿爲於郡中請得故營地數十畝、使得躬耕其中、地既久荒、墾闢之勞、釋耒而歎、乃作東坡八詩、自是始號東坡居士、【留五年】元豐三年二月黃州に到る、四年東坡に室を築き雪堂作る、七年四月黃州より汝州に移れり、黃州に居ること出入共に五年也、【春風―】以下昔日所見幽趣絕勝の景を叙也、此句春景を云、【漠々】字彙廣也、大也、三台對類云、漠々輕渺之義、言は春の時は溫風江を吹て浪を搖し、天色霞わたりて漠々と見ゆる也、【暮雲―】夏の景を云、夏日の暮れ片雲遽に起て一陣の雨を捲て過るときは、江山一洗して翠色娟々とうるはしき也、【娟々】字

烟空雲散山依然、

【江上三疊】本集作千疊、江上の愁心山百千の峯巒重疊せる狀を畫き、空中に浮べるが如き山色の積翠は雲烟の簇る如くなると云意、【積翠】は翠色深濃なるを云、注【張說】才子傳 一說字道濟、洛陽人、垂拱四年舉學綜古今科中第三等、後累遷鳳閣舍人、開元十八年終左丞相燕國公、詩法特妙、晚謫岳陽詩益悽婉、人謂得江山之助、【愁心賦】見唐文粹九、【山耶—】圖上淡抹の處を見るに、山耶雲か渺遠にして知がたき也、注【接得好】本集劉須溪批語也、此句一二の起句に接し得て好と也、【烟空—】或は烟空しく消し雲散し盡たる處を看れば、山峯依然として景象ありくと見ゆる也、

但見兩崖蒼々暗絕谷、中有百道飛來泉、縈林絡石隱復見、下赴谷口爲奔川、

【兩崖—】又見れば兩の崖蒼々とあをく峙て、其間險絕の谷あつて幽暗なる處あり、谷中より派流百道も多く岐れて飛流し來る泉あると也、【縈林—】縈廣韻繞也、絡音落、聯絡也、泉水谷口より出て林を繞り、或は石を絡ふて屈曲盤旋して流れ行、或は林に掩はれ巖に隔たりて、泉流或は隱れ、或は見れて見ゆると也、【下赴—】谷を流れ出て下谷口に赴ては、徑ちに流れて奔川となる也、奔川は急流の川を云、

川平山開林麓斷、（麓音鹿）小橋野店依山前、行人稍度喬木外、漁舟一葉江呑天、此極盡趣

【川平—】奔激の勢漸く漫なり、川流平にして山勢開け稍平野に向ふ、林麓これより斷て曠闊の地となる也、【麓】音盧谷切、廣韻山足也、陸佃云林屬於山爲麓、ふもとと讀、【小橋—】山下に居落あり小き橋をわたし、野店山前に依て造たる也、杜子美が詩野店引山泉、【店】字彙音點肆也、所以置貨鬻物也、【行人—】行人稍く度り過て喬木の外に行去もあり、喬木は高き樹也、【漁舟—】漁舟一片の葉の如くにして江に浮び、江水澄み湛て天光を涵す也、【呑天】は江清し

禁止の辭に非ず、漁子の心に此地には住み得られまじきと思ふ也、【依然】衣の身に傍ふが如くに親みて離れがたきを云、【難爲情】情内に切にしてたへ得がたきの意也、

船開棹進一回顧、萬里蒼茫煙水暮、世俗寧知僞與眞、至今傳者武陵人、眞僞不可辨、應起句神仙渺茫之說、

【船開—】遂に洞中を辭し、溪に出て向に舍おきし船に乘て岸を離る、船頭開けて舊路に向ひ、棹を進めて村に還る、時に一たび頭を回して桃源を望めば、はや萬里を隔つるが如し、蒼茫と曠遠にして烟色水光簇り籠て日景暮れたり、【世俗—】結の二句起句に照應す、世俗の傳稱すること如此と云へども、寧ろ其僞と眞とを究め知ることを得んや、今に至るまで此事を傳る者は只武陵の漁子一人が所見にして、繼で遊ぶ人なければ、眞僞竟に辨すべきやうなきと也、注此結句は神仙の事は渺茫虛誕にて信しがたきと云に應すると也、

○書王定國所藏烟江疊嶂圖、王晉卿畫、

本集十二載之、【王定國】萬姓統譜、王定國字安卿、宋高宗時人也、按に東坡は仁宗の時の人也、高宗の朝と時不同か、然れども東坡の卒年を按ずるに徽宗の元年也、徽宗より高宗まで僅に三十年なるときは、王定國或は數朝に歷仕するか、本集十一次韻王定國詩云、卜築君方淮上郡、歸心我已劒南川、次公注定國爲楊州倅、○四河入海に定國は王鞏字定國を指すと云、王鞏は御史王素が子也、【王晉卿】東坡詩集十九和王晉卿詩序云、元豐二年予得罪貶黃州、而駙馬都尉王詵亦坐累遠謫、不相聞者七年、予既召用而詵亦還朝相見殿門外、感歎之餘作詩相屬、詵字晉卿、功臣全斌之後云、

蘇子瞻

江上愁心三疊山、張說有江上愁心賦、**浮空積翠如雲烟、山耶雲耶遠莫知、**好接得

自漢高祖至後漢獻帝己亥四百二十五年、自魏文帝庚子至元帝甲申四十五年、自晉武帝乙酉至愍帝丙子五十二年、自東晉元帝丁丑至孝武帝大元元年丙子六十年、總五百八十九年也、大元の年號を行ふこと二十一年にして改元す、大元十二年正當六百年、

爭持牛酒來相饋、禮數不同罇俎異、月明伴宿玉堂空、骨冷魂清無夢寐、

【爭持―】洞中の人漁子の說を聞て家に停て宿せしめ、酒食を設てもてなせば、洞中の人此人の來るを聞て、皆爭て酒肉を持來て相饋也、【牛酒】は肉と酒とを云、漢高祖本紀云、秦人大喜爭持牛羊酒食獻饗軍士、【禮數―】洞中の人は秦世の民なるに因て、皆秦時の禮を用、故に漁子を展待するの禮數晉時の禮と不同也、所用の器も皆秦時の物なるに因て、晉の世の制とは形異にして不同也、淵明桃花源詩所謂、俎豆猶古法、衣裳無新製と云の意也、【月明―】月の明なる夜洞中に伴ひ宿すれば、玉堂寂空にして虚寒なり、人骨凛然と冷にして精魂自ら淸し、故に終夜不寐して夢をなすことなきと也、

夜半金鷄啁哳鳴、楚辭鵾雞啁哳而悲鳴【啁】音嘲、火輪飛出客心驚、火輪日也、人間有累不可住、依然離別難爲情、

【夜半―】夜半のころ金雞啁哳と聲を揚て晨を唱る也、【金雞】は金色の黄雞を云か、【啁哳】字彙云、言奮翼鳴呼而低昻也、鷄の羽たゝきをして鳴くとき、頸を昻くのびあがりて又俯し低するを云、楚辭の朱注には啁哳は聲の繁なる貌と云、注【楚辭】六九辨一云、鵾雞啁哳而悲鳴、朱注鵾雞似鶴黄白色、啁哳聲繁細貌、【火輪】注日也、日は陽の精火に取、故に火輪と云、【客心】は漁子の心に驚駭する也、朝日初て出て輝爍にして洞中特に明亮也、故に漁子心に驚く也、【人間―】人間の俗子甚だ塵累あつて、此淸淨の地には留り住れまじとおもへり、因て辭し去んと請ふ、然れども洞中饗饔の德意に感じて依然と去りあへぬ思ひありて、離別をなすこと情にたへがたきと也、【不可住】は

主は東晉を指す、言は洞中の人已に隱れて以後に漢の高祖と云人起て秦の二世皇帝を滅せり、漢より三國を歷て晉となり、西晉又滅て羣馬江を渡り南に移て都を建て、東晉新主の世を開く、惟今は即東晉の世なりと、歷代を具に語り陳る也【大蛇中斷】注漢書高紀の文也、高祖以亭長爲縣送徒酈山、徒多道亡、自度比至皆亡之、到豐西澤中止飲、夜乃解縱所送徒、曰、公等皆去、吾亦從此逝矣、徒中壯子願從者十餘人、高祖被酒、夜徑澤中、令一人行前、行前者還報曰、前有大蛇當徑、願還、高祖醉曰壯士行何畏、乃前拔劍擊斬蛇、蛇遂分爲兩、徑開行數里醉因臥、後人來至蛇所、有一老嫗夜哭、人問何哭、嫗曰、人殺吾子、故哭之、人曰嫗子何爲見殺、嫗曰吾子白帝子也、化爲蛇當道今爲赤帝子斬之故哭、人乃以嫗爲不誠欲笞之、嫗因忽不見、後人至、高祖覺、後人告高祖、高祖乃心獨喜自負、秦の襄公西戎に居、少昊の神を主として白帝を祠れり、獻公の時櫟陽に金を雨らすことあり、これを瑞として又白帝を祠る、少昊は金德也、故に秦は金德を尊ぶ、白は金の色也、因て白帝の子と云、赤帝は堯の後なり、即漢是なり、赤は火の色也、漢は火德を尊ぶ故に漢を赤帝の子と云、赤帝の子白帝の子を殺と云は、漢起て秦を滅すべき祥也、【晉書元帝—】晉書帝紀六に見たり、元帝即位の始末備に第二卷金陵新亭の注に見たり、【建業】は金陵也今南京也、【童謠】兒童の街衢にして歌ひ時尙せる口號なり、後竟に元帝金陵に於て帝位に即き、都を建つべき前兆となれり、五馬は瑯琊王、西陽王、汝南王、南頓王、彭城王を指に似たり、瑯琊王睿竟に大位に登る、これを一馬化爲龍と云なるべし、

聽終辭絕共悽然、自說經今六百年、當時萬事皆眼見、不知幾許猶流傳、

【聽終—】洞中の人漁子の談を聽了り、辭絕て共に悽然として時變興廢を傷みて自說て云、世を避てより今に至て年を經ること六百年なり、當時秦の世萬事の得失は皆眼前に歷見せり、それより後今に至までの間幾許の代を改て、猶轉流せんとは曾て知らざりしと也、【六百年】秦始皇三十四年避亂至於漢七年、

なり、【魏】姓曹氏なり、曹操基を始て未及昇大位して薨ず、太子丕魏王の位に即く、後漢獻帝建安二十五年庚子冬十月、獻帝位を魏王に禪る、魏王丕帝位に即て元を黄初と改む、是を魏の文帝と云、明帝、帝芳、帝髦、元帝の四主を繼ぐ、元帝咸熙甲申に司馬炎位を簒て魏を滅す、魏共に五主四十六年にして亡ぶ、【晉】姓司馬氏なり、魏の咸熙二年乙酉八月司馬炎相國晉王となる、十二月魏元帝位を晉王に禪る、晉王司馬炎帝位即く、これを晉武帝と云ふ、武帝より惠帝懷帝を歷、愍帝に至て僞漢の劉聰に滅さる、此四帝五十二年の間を西晉と云、瑯琊王睿江を渡て帝位に即て建康に都す、是を東晉の元帝と云、武陵の人桃源に行たるは東晉の時なり、

種桃處々惟開花、川原遠近蒸紅霞、初來猶自念鄕邑、歲久此地還成家、

【種桃—】洞中に桃樹を種て、春ごとに惟花の開を見、川原遠近皆紅氣を蒸し起して一片の霞を籠る也、【初來—】舊里を逃れ避て此溪に移る、其初め來りし時は猶自鄕邑の舊居を思念す、こゝに住すること歲久して後此地にも皆家居を成して住み慣るに因て、復鄕邑を思ふの意もなく、此洞中に安堵すると云意也、

漁舟之子來何所、物色相猜更問語、大蛇中斷喪前王、（漢紀高祖拔劍斬蛇、有一老嫗夜哭曰、吾子白帝子也、今爲赤帝子斬之、）**羣馬南渡開新王、**（晉書元帝即位建鄴童謠云、五馬渡江一馬化爲龍、）

【漁舟—】桃源の人怪み問也、洞中の人漁人の來を見て驚き怪て問ふ、何の所より此に來るやと、【物色】は顏色容貌を熟視して其爲人を窺ひ見を云、後漢書嚴光傳云、光少與光武同遊學、及即位乃變名姓隱身不見、帝思其賢令以物色訪之、上の句に怪み問ふに對て漁子の來由を說けども、猶顏色容貌をつくづくと望み視て相猜て不措、更に世間の事變を問ひ語て、今は是いかなる時ぞと云て漁子をして說しむる也、【大蛇—】二句人間の事を說て洞中の人に答へる也、大蛇中斷は漢の起るを云、前王は秦王を指す、新

て、此桃源の圖を寫さしめて緘封し、上に名を題して遠く寄せて退之の所居南宮の下に贈られたると也、好事者前の海棠の詩に見へたり、【題封】は封したる上に、某の所某の人に寄すと名を題するを云、【南宮】韓文注南宮禮部、注【禮部郎中】事文類聚新集十三、禮部郎中周官大宗伯屬官下大夫、蓋郎中之任也、魏晉宋齊梁陳後魏北齊有殿中郎儀曹郎、殿中掌表疏、儀曹掌吉凶禮制、皆禮部郎中之職也、【南宮―】南宮先生は退之自謂ふ也、【得之】は桃源の圖を指て云也、【波濤―】此篇を作ることを云、文思頻に動て波濤の勢筆に入來て、文辭を驅り促すが如し、即ち筆に信せて詩を作れば文特に工也、文章の工み畫圖の妙、各〻至極を盡すに臻ると也、【異境恍―】咏ずる所の詩を誦し、畫く所の圖を看るときは、恍惚として異境の桃源を幻に斯に移し置て見の思ひあると也、異境は即ち桃源を指て云、【恍惚】字彙失意、不分明也、

架巖鑿谷開宮室、接屋連墻千萬日、嬴顚劉蹶了不聞、秦漢之亡、〔嬴〕音盈〔蹶〕音厥

地折天分非所恤、晉魏之亂、

【架巖―】洞中の居落は巖上に屋を架し、谷中を鑿り穿て宮室となして内に處る、一洞の人聚り居て屋を接へ墻を連ね、隣家相並て世を經ること幾千萬日と云ことを不知也、【嬴顚―】嬴は秦の氏也、劉は漢氏也、洞中に隱居してより後は、人間と音問を不通、故に秦は終に顚覆して漢の世となり、漢又蹶き倒れて亡びぬること了に聞知ることとなし、史記卷五秦本紀云、秦之先帝顓頊之苗裔孫、曰女脩、女脩生子大業、大業取少典之子、曰女華、女華生大費、與禹平水土已成、帝錫玄圭、禹受曰非予能成、亦大費爲輔、帝舜曰、咨爾費贊禹功、其賜爾皁游、爾後嗣將大出、大費拜受、佐舜調馴鳥獸、鳥獸多馴服、是爲栢翳、舜賜姓嬴氏、○史記八漢高祖本紀云、高祖沛豐邑中陽里人、姓劉氏、【地折―】注晉魏之亂、後漢の後天下三つに判れ、漢の末葉は蜀に據り、魏は洛に都し、呉は建業に都す、各〻天下に王たらんとす、其後に蜀は魏に亡され、魏は晉に禪る、晉遂に呉を亡して天下を一統す、其間兵亂止む時なく、天地分折して此に得れば彼に失ひ、萬民安し處ることとなし、然れども洞中の人は名をだに聞ざれば、兵亂の憂曾て所恤に非ず、常に安穩

道一也、既出得二其船一、便扶二向レ路一、處處誌レ之、及二郡下一詣二太守一說レ如レ此、太守即遣二人隨一其往一、尋二向所一レ誌遂迷不レ復得レ路、南陽劉子驥高尙士也、聞レ之欣然親往未レ果、尋病終、後遂無三問レ津者一、詩省て不レ載、詩尾評東坡曰、世傳二桃源事一多過二其實一、考二淵明所一レ記止言三先世避二秦亂一來二此一、則漁人所レ見似二是其子孫一、非二秦人不一レ死者一也、又云殺レ雞作レ食豈有二仙而殺者一乎、○古詩歸九鍾伯敬評云、桃源人可レ謂レ隱不レ可レ謂レ仙、蘇長公辨レ之矣、南公此記亦會未二一字及一レ仙、獨迷レ路一語似二道仙家行徑一爲二後人口實一耳、

韓退之

神仙有無何渺茫、桃源之說誠荒唐、（晉太元中武陵人捕レ魚從レ溪行、忘二路遠近一、逢二桃林夾一レ岸、無二雜花草一、云秦人避レ世至レ此）流水盤廻山百轉、生絹數幅垂二中堂一、

【神仙——】神仙の事實に有りや或は無しや、渺茫無邊にしてたしかに料り知がたき也、【渺茫】韻會茫々廣大貌、虚誕にして著實になきと云意也、【桃源——】世に桃源の事を言て神仙怪異の說をなす、固に荒唐の說にしてまことしからぬ事也、【荒唐】莊子天下篇謬悠之說荒唐之言、注荒唐廣大而無レ極也、○說文荒唐大言也、○古文大全、荒唐謂レ不レ可レ信、注【太元】は東晉の孝武帝の年號也、【武陵】郡名在二湖廣常德府一、【無雜花草】一溪總て桃花ばかりにて餘樹の雜る者なし、【云】は洞中の人の云ふ辭也、題注に詳也、【流水——】此二句圖畫の形象を云、溪流の水盤り廻て、山峯の勢百轉し疊り連ると也、盤は盤曲也めぐると訓ず、【百轉】種々轉展して峯多き也、【生絹】織て未レ練を生絹と云、すゞし也、其圖の大さ數幅の生絹を以て寫してこれを中堂に掛る也、垂は掛の意也、

武陵太守好事者、題封遠寄南宮下、（時愈爲二禮部郎中一）南宮先生忻得レ之、波濤入レ筆驅二文辭一、文工畫妙各臻二極一、異境恍惚移二於斯一、

此一節此圖の從て來る處を云、又圖に因て此詩作ることを云、【武陵——】武陵の太守は奇事を好める人に

九原は古の葬地の名也、後の人借用て人の死して地下に葬るを謂て九原に歸すと云也、【籃輿】晉書傳云、陶潛素有脚疾、向乘籃輿、亦足自反、又南史云潛有脚疾、使一門生二兒舉籃輿、三才圖繪籃輿の圖あり、日本の駕籠と云もの丶如し、言ろは世間道義の風なきこと久し、若し九原の地下に歸せし淵明をして今作しかへして、復た此世に生せしめば、我れ其人の奴僕となり、爲に籃輿を舉て役となるとも惡しとせじ、我れ願は爲之と云意也、是亦史記に司馬遷が假令晏子而在、余雖爲之執鞭所忻慕焉と云へるの意也、注【末謂】【儒林】以下の四句を指す、【復生】死せる者復た生て世に在らばと云意也、【僕役】僕隷となりて役使せらる丶也、

○桃源圖

按陶淵明叙桃源事云、先世避秦隱居於此、指以後人不深考、因謂秦人至晉猶有不死、爲神仙、惟韓退之桃源圖、王介甫桃源行、東坡和桃源詩、深得淵明之指也、

韓文三載之、【桃源】在湖廣常德府、勝覽三十載、桃源八景、桃川仙隱、白馬雲濤、綠蘿晴晝、梅溪烟雨、潯陽古寺、楚山春晩、沅江夜月、童坊曉渡、注陶淵明桃花源記見淵明集卷五、淵明が記には、先世秦の亂を遁れ隱て此處に居住すと云まで也、曾て神仙の事を不言、然るに後の人深く考ることなく妄に謂く、秦の時の人晉の世まで長生して猶未死と、因て指て神仙なりとす、是妄説也、韓退之の此詩と、王介甫東坡が詩とは皆神仙の説を不取、武陵の人の所逢は秦の時に隱れたる者の子孫とす、深く淵明が記する所の指を得たる者也、王介甫桃源行見此集卷十六、東坡和桃源詩本集不見、○陶淵明桃花源詩序云、晉太中武陵人捕魚爲業、緣溪行忘路之遠、忽逢桃花林、夾岸數百歩中無雜樹、芳草鮮美落英繽紛、漁人甚異之、復前行欲窮其林、林盡水源便得一山、山有小口髣髴若有光、便捨船從口入、初極狹纔通人、復行數十歩、豁然開朗、土地平曠屋舍儼然有良田美池桑竹屬、阡陌交通鷄犬相聞、其中往來種作、男女衣著悉如外人、黄髮垂髫並怡然自樂、見漁人乃大驚問所從來、具答之、便要還家、設酒殺雞作食、村中聞有此人咸來問訊、自云先世避秦時亂、率妻子邑人來此絶境不復出焉、遂與外人間隔、問今是何世、乃云不知有漢、無論魏晉、此人一一爲具言所聞、皆歎惋、餘人各復延至其家、皆出酒食、停數日辭去、此中人語云、不足爲外人

を漉す葛巾あるを取て、新醅を漉し自ら酌めり、注【陶詩】此集第二卷問來使の詩也、李詩此集第二卷贈鄭溧陽の詩也、【老農—】年老たる農父時々に問訊し來て、桑麻の生長することを說て、農事を談じ、或は壺を提げ榼を挈け酒を持し來て、淵明に親み睦じく勸め飮ましむる也、注【陶詩】此集第三卷歸田園居詩也、【提壺】文選劉伯倫酒德頌云、動則挈榼提壺、濟曰榼壺皆酒器也、○晉書淵明傳云、其親朋好事者、或載酒肴而往、潛亦無所辭焉、每一醉大適融然、【一樽—】酒に遇へば則ち飮み、一樽を盡して徑に醉ひ、大に自適し、心ゆたかに北窻の下に高臥し、習次蕭然として累なきときは、自ら謂へらく我は是塵世中の人に非ず、上古伏羲氏より上つかた、淳朴の世の民なりと思へり、○晉書傳云、嘗言夏月虛閑高臥北窓之下、清風颯至自謂羲皇上人、注【李詩】此集第二卷贈鄭溧陽の詩也、

此公聞道窮亦樂、容貌不枯似丹渥、（詩顏如丹渥、）儒林紛紛隨溷濁、山林高義久寂寞、假令九原今可作、擧公監與也不惡、（末謂世俗溷濁久無山林道義之風、使淵明復生、雖爲之執僕役、亦不爲惡也、）

【此公】は淵明を指て云、淵明は道を聞て自得す、故に貧窮すれども其樂を不改、容貌枯槁することなくして顏色愉悅し澤ひあること丹の渥きが如し、【丹渥】詩秦風終南篇云、錦衣狐裘、顏如渥丹、○韻語陽秋東坡拈出淵明談理之詩有三、曰、采菊東籬下、悠然見南山、二曰笑傲東軒下、聊復得此生、三曰客養千金軀、臨化消其寶、皆以爲知道之言、蓋絺章繪句嘲風弄月雖工何補、若觀道者出語自然超詣、非常人能蹈其軌轍也、○許彥周詩話云、彭澤歸去來辭云、旣自以心爲形役、奚惆悵而獨悲、是此老悟道處、若人能用此兩句出處有餘裕也、【儒林紛—】儒林史記百二十一有儒林傳、儒者家流の傳と云意也、【紛々】亂也、【溷濁】離騷一云、世溷濁而不分兮、注溷亂也、言は今の儒者流俗紛々と亂て、世間濁れる習に詭隨し、拔群特行の志を立る者なし、故に山林の間高義の士あることを不聞、久しく寂寥として鳴る者なきと也、【九原】古文大全云、九原春秋晉大夫葬地、今通用言死者歸地下、

卷責子詩、雖有五男兒、總不好紙筆、阿舒已二八、懶惰故無匹、阿宣行志學、而不愛文術、通子垂九齡、但覓梨與栗、言は大兒は頑に鈍くして詩書を學ぶに懶し、小兒は嬌てからす只梨と栗とを愛して得んことを覓也、【嬌】字彙妖嬈也、【癡】不慧也、按に嬌癡は戲弄を好て事の是非を不辨の意也、古詩歸に左太冲嬌女の詩を載す、詩中所言を以て想ひ見べし、【老妻―】老妻は野に出て耘り、日暮に及で鋤を荷て家に歸る、淵明欣然とよろこび樂て妻子と共に蝸室に處して年を終ると也、【蝸室】かたつぶりの殼の如く圓く小き室を云、蝸韻會云、蝸蠃、以有兩角故名蝸牛、亦曰瓜牛、魏隱者焦光作瓜牛廬即蝸也、爲廬舍圓而小如蝸殼、注陶詩見第二卷歸田園居詩、

哦詩不遣愁肝腎、醉裏呼兒供紙筆、時々得句輒寫之、五言平淡用一律、

【哦詩】字彙哦牛何切吟也、淵明貧を樂て詩を吟し、內心を愁しむることなし、【肝腎】は人の腹裏の臟なり、猶本心と云んが如し、醉の裏に兒輩を呼紙筆を備へ供せしめ、時々句を覓め得ては則自ら寫之、其詩皆是五言にして詩格平淡を好み、常に一律を用て奇窟の體を雜ることなし、○梁鍾嶸詩品卷中云、陶潛其源出於應璩、又協左思風力、文體省靜殆無長語、篤意眞古辭興婉愜、每觀其文想其人德、世欲其質直、古今隱逸詩人之宗也、○宋蔡寬夫西淸詩話云、淵明意趣眞古淸淡之宗、詩家視淵明猶孔門視伯夷、○龜山語錄云、淵明詩所不可及者沖澹深粹出於自然、若曹用力學然後知淵明詩非著力之所能成、

田家酒熟夜打門、（陶詩歸去來山中山中酒應熟、）**頭上自有漉酒巾、**（李詩漉酒用葛巾、）**老農時問桑麻長、**（陶詩相見無雜言、但道桑麻長、）**提壺挈榼來相親、一樽徑醉北窻臥、蕭然自謂羲皇人、**（李詩淸風北窻下、自謂羲皇人、）

【田家―】田家に釀し造れる酒新に熟するとき、田園の居に歸り來り、夜門を打して室に入、頭上に自ら酒

意足、廟堂之姿老蓬蓽、環堵蕭條僅容膝、（歸去來辭審容膝之易安、）

【世紛―】世間の塵事紛然として盡ること無きも、眼を過れば便ち空うして迹なく、內心に經ることなし、【生事】は生活をなす事業也、家に儲へなく平生の食物不豐どもこれを以て戚とせず、常に意に隨て止足すると也、東坡志林云、俗傳書生入官庫見錢不識、或怪而問之、曰固知其爲錢但怪其不在紙裹中耳、予偶讀淵明歸來詞云、幼稚盈室瓶中無儲粟、乃知俗傳信而有徵、使瓶有儲粟亦甚微也、此翁平生只於瓶中見粟也耶、これに由て觀れば生事の不豐こと可見、【廟堂―】廟は大廟也、堂は朝堂政を行ふところ也、廟堂は禁中を指て云、淵明が道德文才當に公相の位に上り、廟堂の上に立て君を佐け政を掌るべきに足れり、故に廟堂の姿と云、然れども仕ることを肯んせずして、廟堂の姿を隱して自ら蓬蓽の裡に老せる也、【蓬蓽】禮記儒行篇云、蓽門圭窬蓬戶甕牖、蔡沈注、蓽門以荊竹織門也、蓬戶編蓬爲戶也、【環堵―】淵明五柳先生傳云、環堵蕭然不蔽風日、歸去來辭云、倚南窻以寄傲、審容膝之易安、言は淵明が所居環堵の小室、蕭條とすみあれて僅に膝を容れ坐るに足れるばかり也、【環堵】禮記儒行篇云、儒有一畝之宮環堵之室、蔡沈注、疏曰、一畝謂徑一步長百步也、折而方之則東西南北各十步、宮牆垣也、牆方六丈、環周廻也、方丈爲堵、東西南北各一堵、環堵は一丈四方也、方丈の室を環堵之室と云也、【蕭條】は寂寥也、すみあれたる貌を云、【容膝】の二字本出韓詩たり、韓詩外傳卷九云、楚莊王使使齎金百斤聘北郭先生、先生曰臣有箕箒之婦、願入計之、即謂婦人曰、楚欲以我爲相、今日相即結駟列騎食方丈於前如何、婦人曰、結駟列騎所安不過容膝、食方丈於前所甘不過一肉、以容膝之安一肉之味而殉楚國之憂其可乎、於是遂不應聘、

大兒頑鈍懶詩書、（責子阿舒已二八懶惰故無匹、）小兒嬌癡愛梨栗、老妻日暮荷鋤歸、（陶詩帶月荷鋤歸、）欣然一笑共蝸室、

【大兒―】此二句は淵明責子詩中より得來る也、第三

【天涯】は天のかぎりと云意甚だ遠き處を云なり、東坡は蜀の眉山の人也、海棠も亦蜀の花也、今東坡黃州に貶せられて偶〻海棠を見る、人花ともに天涯のはてに流落して今相逢ふときは、彼此俱に念ふべし、故に爲に一樽の酒を酌て花を賞し、此海棠を咏ずるの曲を歌ふと也、【明朝―】今日相會て已に醉ふ、明朝此醉醒て後還て獨り此に來らば、花も亦散過て雪の飄落する如く紛々たるべし、那ぞ觸れ侵すに忍んやと也、【紛々】字彙紛々亂也、

○陶淵明寫眞圖

陶淵明が像を寫せる圖に題する也、寫眞とは人の容貌を畫き、色を布て顏色精神眞の生活底の人の如く寫すを云也、此詩は陶潛が集中の詩句を摘み取て點綴し、淵明一生の行狀を云ひ叙る也、

謝幼槃

萬姓統譜謝邁字幼槃、宋徽宗時人、與兄無逸修身厲行、俱入江西詩派中、

淵明歸去潯陽曲、杖藜蒲鞵巾一幅、陰々老樹囀黃鸝、艶々東籬粲霜菊、

【淵明―】陶淵明彭澤の令を辭し、潯陽の曲に歸去て後は、藜の杖をつき蒲の鞵を着て、頭に一幅の巾を戴き、隱者の服を以て舊廬に居れり、【潯陽】勝覽江西江州路有潯陽郡、【杖藜】字彙、藜一名落帚、初生可食、大可爲杖、○莊子原憲居魯、子貢往見、憲花冠縰履杖藜而應門、【鞵】字彙鞵革履同鞋、蒲鞵は蒲にて織たる鞵也、【陰々―】淵明が宅の景を云、陰々とは林の深くしげりものふりてしんしんたるを云、陰々たる老樹の間には春黃鸝の囀る聲を聞くと也、唐の王維が詩、陰々夏木囀黃鸝と云句を沿襲す、【黃鸝】はうぐひす也、事文類聚後集四十五云、說文云黃鸝倉庚也、鳴則蠶生、詩疏云黃鳥鸝鶹也、或謂黃栗留、幽州謂之黃鶯、一名倉庚、一名商庚、一名鵹黃、應節趣時之鳥、或謂之黃袍、【艶々―】艶々は籬の美好なるを云、粲は明也、艶々たる東籬には秋霜に傲る菊花の粲と明なる色あると也、淵明詩採菊東籬下、悠然見南山、

世紛無盡過眼空、生事不豐隨

門看脩竹、

【先生】は東坡自を謂へり、東坡食已に飽て後一事のなすべきことなし、故に心のまゝに歩行して逍遙し、自ら手を以て腹を捫して樂むと也、【逍遙】離騷云聊逍遙以相羊、朱注逍遙遊也、【捫】字彙捫撫持也、【不問—】散歩逍遙して行く處人家僧舍のきらひなく、拄杖を以て門を敲て內に入り、脩竹を看て自ら心を樂ましむると也、【拄杖】拄は支也、二字呂氏春秋に出たり、本は杖を拄るの義也、然るを常に拄て行く杖と云意にて、今は杖を拄杖と云也、呂氏春秋云、孔子見弟子抱杖而問其父母、拄杖而問其兄弟、曳杖而問其妻子、尊卑之差也、

忽逢絶艷照衰朽、歎息無言揩病目、陋邦何處得此花、無乃好事移西蜀、寸根千里不易到、啣子飛來定鴻鵠、

【忽逢—】絶艷は甚だうつくしき也、海棠を指て云【衰朽】は東坡自ら身の老に向として、形體の衰朽するを謂へる也、言は行遊の次で、忽ち艷花の盛に我が衰朽の老貌を照すに逢着して驚歎大息し、言語を絶して樹下に近き、病眼を揩て仰ぎ看ると也、【揩】字彙摩也擦也【陋邦—】此遠方鄙陋の邦に有るべき花に非ず、不知何處よりか此花を得たるや、或は好事の者ありて西蜀より移し來て、こゝに有ことを得たるやと也、【好事】孟子萬章上云、好事者爲之也、朱注好事謂喜造言生事之人也、【寸根—】假令好事の者一寸の根ある小苗を移し來るとも、千里の路を隔てたれば容易は到り難し、海棠の實を啣て此に到るべき者は鴻鵠也、定て是鴻鵠西蜀より子を啣み來り此に遺棄して、此一株の海棠を生じたるなるべしと云意也、【鴻鵠】事文類聚後集四十六云、詩疏云、鴻鵠羽毛純白似鶴而大、肉美如鴈、

天涯流落俱可念、爲飮一樽歌此曲、明朝酒醒還獨來、雪落紛々那忍觸、

主宰する者、即天命をさして云、言ろは天公の物を生ずるに自ら深意あることを知たり、いかにとなれば、此閒雅の佳人をして市朝喧囂の地に在らしめず、故らに空谷幽邃の處に生ぜしめたると也、佳人は海棠花を美人に比して云也、注杜詩は第五卷佳人の詩の起句也、杜子美の詩に一代に絕れて美よき佳人あり、空谷幽寂の地に獨居すと云へる句の意を用たると也、【自然―】海棠空谷幽閒の處に生ずれども、容態曾て野ならず、自然に富貴艷麗の氣象あること、天生より出たる姿なり、金盤に盛り華屋の下に薦て尊び尙ぶことを不待して、自ら貴きと也、

朱唇得酒暈生臉、翠袖卷紗紅映肉、此二句形容花之顏色最妙、林深霧暗曉光遲、日暖風輕春睡足、雨中有淚亦悽慘、月下無人更淸淑、

六句花の顏色風情を形容す、【朱唇―】花の顏色をかたどり寫す也、上の句に於て花を佳人に比す、故に此以下六句皆美人の上に就て形容する也、言ろは海棠の色を云はゞ、たとへば美人の朱唇酒を嘗ることを得て微く醉を發し、白く潔き臉上に紅暈を生じたるに似たると也、臉は頰也、【暈】は日月旁氣也、うすくくまどりたる如く色を生ずるを總て暈と云也、頰さきのほつこりと紅なるを暈生臉と云也、又たとへば翠袖の薄き紗を卷て、紅の色肌肉にうつろひてほのかに見ゆるに似たると也、【林深―】花の風情を云、林の深き閒朝霧暗くたちこめたる中にしては、曙の光采を見ること稍ゝ遲き也、春の日暖にして風そよそよと輕き靜晝には、花房重く垂れて春の睡已に足れる艷態あり、此句暗に貴妃が事を用たり、楊妃外傳云、上皇登沈香亭召大眞妃子、妃子時卯醉未醒、命力士從侍兒扶掖而至、妃子醉顏殘粧鬢亂釵橫不能再拜、上皇笑曰此眞海棠睡未足耳、【雨中有―】春雨の中には花顏淚あり、美人閨怨に不勝して顏色悽慘たるが如し、【悽】悲痛也、【慘】愁也痛也、春宵月下獨立て傍無人ときは、風趣更にきよらか也、【淑】淸湛也、

先生食飽無一事、散步逍遙自捫腹、不問人家與僧舍、拄杖敲

黄の牡丹花を進めて人主の目をよろこばしめ、恩寵を買、是宦官宮妾の君を愛する也、愈ゝ士人の爲すべきことに非ず、故に併せて譏之也、可憐はあはれみいたむべしの意なり、

○定惠院海棠

子瞻序云、寓居定惠院之東雜花滿レ山、有二海棠一株一土人不レ知レ貴也、

東坡詩集十四載之、東坡元豐三年黄州に貶せらる、二月の初に黄州に到り定惠院に寓居して此詩を作れり、【海棠】事文類聚後集海棠條下載、李贊皇集云、花木以レ海爲レ名者悉從二海外一來、沈立海棠記云、唯紫綿色者謂二之海棠一徐乃棠梨花耳注本集の題辭也、東坡の寓居せられし定惠院と云寺の東に山あり、無名の雜花山に滿て多し、山中に海棠只一株あり、本地の人其海棠と云花なることを不レ知、故に貴レ之ことを不レ知、東坡偶ゝ見ることを得て此篇を作れる也、

蘇子瞻

江城地瘴蕃二艸木一、只有二名花一苦幽獨、嫣然一笑竹籬間、登徒子賦、嫣然一笑惑二陽城一迷二下蔡、桃李漫山總麤俗、

【江城】黄州の地を指す、【瘴】は烟嵐深して四時の氣不和なるを云、地氣温暖にて烟嵐深きに因て、艸木蕃り榮なりやすし、故に雜樹の花多して山に遍し、其中只一林の名花あれども並び類する花なく、甚だ幽に獨山中に立てる也、【幽獨】文選二十二謝靈運詩、安排徒空言、幽獨賴二鳴琴一注善曰、楚辭幽獨處二乎山中一【嫣然】一花の開たる貌を云、嫣然はにこやかに笑ふ貌也、好色賦の字を借用也、海棠の花うるはしく開て竹籬の間に倚を云へる也、注文選十九登徒子好色賦云、嫣然一笑惑二陽城一迷二下蔡一注濟曰、嫣笑貌陽城下蔡楚之二郡名、蓋貴人所居中多二美人一故以爲レ喩、【桃李一】桃李の花は山に漫り滿て甚多く開けども、此海棠に比並すれば總て皆麁俗にして見るに不レ足と云意也、

也知造物有二深意一、故遣二佳人在一空谷一、杜絶代有二佳人一幽居在二空谷一自然富貴出二天姿一、不レ待二金盤薦一華屋一、

【也知一】【造物】は天地の間に萬物を造り出すことを

如此、注【大小龍團】茶を碾て後圓餅に爲り、餅の上に龍鳳の文を印したるを龍團と云、書言故事卷十二云、龍鳳團茶之品莫貴於龍鳳團、八餅重一斤、慶曆間蔡君謨爲福建運使、始造小片龍茶、其品絶精謂之小龍團、凡二十餘餅重一斤、直金一兩、每南郊致齋中書樞密各賜一餅、宮人往々綴金其上、貴重如此、

爭新買寵各出意、今年鬪品充官茶、吾君所乏豈此物、致養口體何陋邪、

【爭新―】新焙を爭ひ進て寵顧を買求め、各〻奇意を出して新品を造る也、【今年―】本集注云、今年閩中監司乞進鬪茶許之、鬪茶は新焙の茶を多くあつめて、試に品を評し勝劣を定るを云、建安にて製する茶を鬪しめて、上品を擇て官茶に充ると也、【吾君―】【吾君】は天子を指て云、【此物】は茶を指て云也、言ろは天子の乏き所豈に此物ならんや、宗廟に薦るにも非ず、只口體の嗜好に備るまで也、口體を養ふことは君子の不爲ところ也、今貴之貢物とす、何ぞ鄙陋の擧をなすやと也、孟子離婁上篇云、問有餘曰亡矣、將以復進也、此所謂養口體者也、

洛陽相君忠孝家、謂錢惟演、可憐亦進姚黄花、即牡丹花也、

【忠孝家】は錢惟演を云、錢惟演は吳越王錢鏐之玄孫也、錢氏は忠孝の家也、東都事略三十四、錢惟演傳末臣稱曰、子孫世有爵邑、豈非忠孝之報乎、又東坡の表忠觀の碑、錢氏が爲に作れり、其銘曰天祚忠孝、世有爵邑、尤文允武、子孫千億、注【錢惟演】排韻云、錢惟演字師聖幼有俊才、文學與楊億劉筠齊名、宋咸平中除知制誥翰林學士、尋知樞密、【可憐―】東坡詩集注云、洛下貢花自錢惟演始、【姚黄】歐陽永叔洛陽牡丹記云、姚黄者千葉黄花出於民姚氏家、此花之出於今未十年、姚氏居白司馬坡、其地屬河陽、然花不傳河陽、傳洛陽、洛陽亦不甚多、一歲不過數朶、又云歲遣牙校一員乘驛馬一日一夕至京師、所進不過姚黄魏花三數朶、以菜葉實竹籠子、藉覆之使馬上不動搖、以蠟封花蔕、乃數日不落、言ろは茶を貢して口體の養に奉ふるすら猶陋し、頃ろ又聞く洛陽の錢氏より姚

君不見武夷溪邊粟粒芽、建安武夷茶爲天下絶品。前丁後蔡相籠加、大小龍茶始於丁謂而成於蔡襄。歐陽公聞襄進小龍團歎曰、君謨士人也、何至作此事。

【武夷—】本集注次公曰、武夷山在建州、粟粒芽茶之極品者也、天下以建茶爲第一、【武夷】勝覽武夷山在福建建寧路崇安縣南、按神仙傳第十六、昇眞元化洞天、昔有神仙降此山、曰予爲武夷君、統錄地仙受館于此、由此得名、漢唐の時龍眼茘枝を貢して民の害をなす、近世の茶を貢することも亦相似たり、故に茘枝を歎ずるに因て茶のことを云ひ及す也、言は建安武夷の溪邊に、粟粒芽と號する茶を造ること、前には太宗の時丁謂始を造し、後には仁宗の世に蔡襄重て精を極てこれを成就す、遂に此絶品を造り出して、貢物をなしたる也、【籠加】二字出處未考、○事文類聚續集卷十一、引建州郡志云、建州大小龍團始於丁晉公而成於蔡君謨、國朝太平興國二年始置龍焙造龍鳳茶、咸平中丁晉公爲福建曹監、造御茶進龍鳳團、慶曆間蔡公端明爲漕、始改造小龍團茶、仁廟尤所珍惜、是後最精者曰龍團勝雪、外有密雪龍一品、號爲奇絶、方靈芽敷折之初、常先民焙十餘日、進發飛騎疾馳、不出中春頭綱已至京師、又云歐陽永叔聞君謨進小龍團、驚歎曰君謨士人也、何至作此事、【丁謂】氏族排韻云、丁謂字公言、宋太宗朝登第、眞宗朝拜參政、後拜相、自以爲令威後、故好鶴人呼爲鶴相、【蔡襄】氏族排韻、蔡襄字君謨、文章清粹工小楷草書、歐公以爲獨步當世、宋慶曆初知諫院、終端明殿學士、○蔡襄茶錄序云、朝奉郎右正言同脩起居注臣蔡襄上進、臣前因奉事伏蒙陛下諭臣先任福建轉運使日、所進上品龍茶最爲精好、臣退念草木之微首辱陛下知鑒、若處之得地則能盡其材、昔陸羽茶經不第建安之品、丁謂茶圖獨論採造之本、至於烹試曾未有聞、臣輒條數事、簡而易明、勒成二篇、名曰茶錄、伏惟清間之宴或賜觀采、臣不勝惶懼榮幸之至謹序○歐陽永叔龍茶錄後序云、茶爲物之至精、而小團又其精者錄序所謂上品龍茶者是也、蓋自君謨始造而歲貢焉、仁宗尤所珍惜、雖輔相之臣未嘗輒賜、惟南郊大禮致齋之夕、中書樞密院各四人共賜一餅、宮人剪金爲龍鳳花草貼其上云云、因君謨著錄輒附于後、庶知小團自君謨始而可貴

趾七郡獻生龍眼等、鳥驚風發、南州土地惡蟲猛獸不絕於路、至於觸犯死亡之害、死者不可復生、來者猶可救也、此二物升殿未必延年益壽、帝從之章報、羌即弃官還家、不應徵召、著唐子三十餘篇、○後漢書列傳無唐羌傳、

我願天公憐赤子、莫生尤物爲瘡痏、雨順風調百穀登、民不飢寒爲上瑞、

【我願―】我願は詩人自ら希願する也、【天公】天命流行して萬物を化生すること、人あつて主宰する者に似たり、故に造物の主を指して天公と云、【赤子】百姓を指て云也、書康誥云、若保赤子、惟民其康乂、注云、愛養人如安孩兒赤子、不失其欲、惟民其皆安治、書の意民を視ること赤子孩兒とす、東坡これに由て民を指て赤子と云へるか、【尤物】左傳昭公二十八年、夫有尤物、足以移人、苟非德義、則必有禍、杜預注、尤異也、左傳に尤物と云は美女を指て云、此には借用て怪異の珍物を云、即荔枝龍眼を指す、【瘡痏】張平子西京賦、所好生羽毛、所惡成瘡痏、注痏亦瘡也、瘡痏は猶憂患云意也、二句言は我願は造物此百姓を憐閔して尤異の珍物を生じ、百姓の憂患をなすことなかるべし、尤異の物を生ずるに因て人君貪り求て、百姓を苦ましむることをすれば也、【雨順―】雨順とは十日に一たび雨ふり、雨必夜を以て降の類也、風調は五日に一たび風ふき風不鳴條の類也、【百穀】詩豳風篇、亟其乘屋、其始播百穀、凡そ穀の類を總て百穀と云也、五雜俎卷十一云、說者謂五穀之屬各有二十、合而爲百、近於穿鑿、百成數也、五穀者擧其大言之也、【瑞】異常の物を生じて祥を示すを瑞と云、字彙祥瑞天以人君有德、將錫之以歷年、錫之以五福、先出此以與之爲信也、○王充論衡十六云、瑞以應善、災以應惡、此二句言は凡そ天地の間風雨時に順調し、氣候和平にして百穀登り熟し、天下家ごとに給し、戶ごとに足て、民飢寒の憂なきときは、天子の有德を表する上瑞とすべし、何ぞ非常珍奇の物を生ずるをのみ瑞と云べけんや、珍物を生じて却て民の憂を貽すことなからんことを願ふの意也、

永元荔枝來交州、天寶歲貢取之涪、

【永元】、後漢和帝の年號也、永元年中の荔枝は交州より進め來る也、【交州】の交趾郡より獻ずる也、後漢書郡國志五、交州交趾郡武帝置、即安陽王國、雒陽南萬一千里、【天寶】唐玄宗の年號也、【歲貢】は年ごとに貢しすゝむる也、【涪州】唐書地理志三十、山南道涪州涪陵郡武德元年以渝州之涪陵鎭置、○勝覽云涪州禹貢梁州、寰宇記地產荔枝、

至今欲食林甫肉、李林甫相玄宗、不能諫止荔枝之貢、天下怨之欲食其肉、

無人舉觴酹伯游、漢永元中交州貢荔枝龍眼、十里一置五里一堠、奔騰死亡者無數、唐羌爲臨武長、上書言狀和帝罷之

【至今―】玄宗の時李林甫相たり、然れども荔枝を貢獻に因て、百姓疲斃することを玄宗へ言して罷ることをせず、故に天下の人怨望すること甚して、彼れが肉を割き食んことを思へり、【李林甫】唐書列傳一百四十八、李林甫長平肅王叔良曾孫、哥奴林甫小字也、開元初遷太子中允、蕭高薦林甫有宰相才、妃陰助之、即拜黃門侍郎、爲禮部尙書同中書門下三品、累封晉國公、卒贈大尉揚州大都督、林甫居相位凡十九年、固寵市權蔽欺天子耳目、諫官皆持祿養資無敢正言者、○人氏族大全云、林甫唐天寶中拜相、奸猾專政、奸諂以甘言而陰陷之、世謂口有蜜腹有劍、【無人―】此句永元句應す、永元の間交州より荔枝を貢するを、唐伯游天子に狀を言して罷之、民の患を除きしかども、今は人の觴を擧て酒を酹て伯游を祭ることもなきと也、【酹】字彙音類餟祭也、以酒沃地、○古文大全云、以酒沃地而祭曰酹、【注】後漢書和帝紀元興元年之文也、和帝紀云、舊南海獻龍眼荔枝、十里一置五里一堠、奔騰阻險死者繼路、時臨武長汝南唐羌縣接南海、乃上書陳狀、帝下詔曰、遠國珍羞本以薦奉宗廟、苟有傷害豈愛民之本、其勅大官勿復受獻、由是遂省焉、注謝承書曰、唐羌字伯游、辟公府補臨武長、縣接交州、舊獻龍眼荔枝及生鮮獻之、驛馬晝夜傳送之、至有遭虎狼毒害頓仆死亡不絕、道經臨武、羌乃上書諫曰、臣聞上不以滋味爲德、下不以貢膳爲功、故天子食大牢爲尊、不以果實爲珍、伏見交

を植て柴を束ねて懸けおき、若し兵起ることある時は柴に火を放つ、次の堠より烽火を望み見て又火を揚ぐ、次第に烽火を以て相報して、速に京に達す、此詩に兵火催すと云は、只今茘枝來るほどに速に傳馬を辦せよと告る爲に、堠火を擧る也、二句轉送の急速なるを云也、【顚坑―】古文大全顚墜也、仆僵也、藉謂死者首相處而自相藉也、顚はくつがへりおつる也、坑與阬同塹溝也陷也、【枕藉】死者多して枕をならべて相よるを云也、前漢書列傳六十尹賞傳、收捕群盜以次內虎穴中、百人爲輩、覆以大石、數日壹發視皆相枕藉死、急脚傳遞の人馬險阻を走て坑谷に顚仆し、多く死亡するを云、急傳如此なるを見ては、即是龍眼茘枝の菓貢し來ることを知と也、【龍眼】草木狀云、龍眼樹如茘枝、但枝葉稍小、殼青黃色形圓如彈丸、核如椀子而不堅、肉白而帶漿、其甘如蜜、一朶五六十顆作穗如葡萄然、注【和帝】後漢第四主名肇章帝第四子、在位十七年而崩、

飛車跨山鶻橫海、風枝露葉如新採、宮中美人一破顏、驚塵濺血流千載、此四句言明皇時涪州貢茘枝

此四句唐の玄宗貴妃が爲に、茘枝を貢せしむることを云、【飛車】東坡詩集注曹曰、飛車車名也、金樓子曰奇肱之民能爲飛車、【鶻】注、鼂父曰言船也、兵書海鶻頭低尾高、前大後小、如旗之狀、飛車と海鶻とは此に借用て馳送の速なるを云、飛車の山を過ぎ鶻の海を渡る如くに急速に馳せ來て長安に進獻するに、色香些も不變、風を含み露に濡へる枝葉の間より、只今新に採來る如くなると也、【宮中―】美人は楊貴妃を指て云、楊妃外傳云、妃子既生於蜀、酷嗜茘枝、天寶中每歲馳驛以獻、○古文大全云、楊貴妃好食生茘枝、以馬進、馳載七日七夜至京、人馬俱斃、唐人詩云、一騎紅塵妃子笑、無人知是茘枝來、言は茘枝已に京に來るときは宮中の美人楊貴妃破顏して喜び笑ふと也、破顏は笑貌也、驚塵は傳馬馳來るに因て俄に塵埃を揚るを云也、濺血は人馬險阻に顚仆して斃死するを云、言は只妃子が喜びを得ん爲に遠國の珍菓を求め、道路に驚塵を起し人馬の血を濺くことをなして、百姓を茶毒する患を千載の後まで流傳せしめたると也、

ければ少頃の間に年老て、鶴髮亂れて絲の如くなる衰朽の翁となりたると也、晩唐許渾詩、昨日少年今白頭と云も亦此意なり、【但見―】老來但看古より以來歌をうたひ舞を舞て繁華なりし地、多くは荒凉たる墟となりて、唯黃昏の時節鳥雀の飛び集るのみ有て更に人跡なし、時變如此にして往年行樂の處復た見ることなし、今日白頭の翁、豈に紅顏少年の昔を不思ことを得んや、題に有所思と云、此篇を作る立意の處也、

○荔枝歎

此篇譏下臣子貢二花果一以媚二其上一、貽中百姓無窮之害上

東坡詩集卷十載之、此首は唐の荔枝を貢することを云て、兼て當時茶花を貢して君上に媚び、民の憂をなすことを譏れり、【荔枝】晉嵇含南方草木狀云、荔枝樹高五六丈餘、如桂樹、綠葉蓬々冬夏榮茂、靑華朱實實大如雞子、核黃黑似熟蓮、實白如肪、甘而多汁、似安石榴有甜酢者、至日將中翕然俱赤則可食、一樹下子百斛、漢武帝元鼎六年破南越、建扶荔宮、扶荔者以荔枝得名也、自交趾移植百株於庭、無一生者、其實則歲貢焉、郵傳者疲斃於道、極爲生民之患、○白樂天荔枝圖云、荔枝生巴蜀間、形狀團々如帷蓋、葉如桂冬靑、花如橘春榮、實如丹夏熟、朵如蒲桃、核如琴軫、殼如紅繒、膜如紫綃、瓤肉潔白如氷雪、漿液甘酸如醴酪、大略如彼其實過之、如離本枝、一日色變、二日香變、三日味變、四五日外香色味盡去也、

蘇子瞻

十里一置飛塵灰、五里一堠兵火催、顚坑仆谷相枕籍、知是荔枝龍眼來、

此四句言漢和帝交州貢荔枝

此四句は漢の和帝交州より荔枝を都へ貢せしむるを云也、後漢書卷四和帝紀云、舊南海獻龍眼荔枝、十里一置五里一堠、奔騰阻險、死者繼路、【置】字彙云、置驛傳也、馬遞曰置、漢烏孫傳有便宜因騎置以聞、師古曰、即今舖馬也、十里ごとに馬つぎの舍をおきて傳馬を出す處を置と云、十里の間を疾馬を以て馳て次の置に送る故に、馬ぼこり簇り飛て急速也、塵灰はほこり也、【堠】は字彙堠音後、封堠里堠、五里一堠、堠望也、以望烽火也、堠は土を高く築て小城とし、上に柱

孫】親王の子孫也、美少年なりし時は公子王孫と倶に遨遊して、芳樹の下に宴を開き、清歌を歌ひ妙舞を舞ふて、落花の前に醉を勸めしと也、【光祿―】行樂せし所の樓閣華麗なりしことを云、【光祿】事物紀原卷四云、魏晉以來有左右光祿及光祿大夫、皆銀印青綬重者詔加金章紫綬、因稱金紫光祿大夫、後周以爲散官、〇古文大全文飾也、光祿大夫銀青從一品掌管酒食、親近天子受恩寵富貴奢侈、故特言之、【將軍】事物紀原五、周禮天子六軍、軍萬二千五百人、其將皆命卿、蓋在國稱大夫、在軍稱將軍、自晉獻公作三軍而公將上軍、故將軍之名特出於此、左傳閻沒汝寬偕謂魏獻子爲將軍、後漢書百官志云、初漢武將軍始自秦晉以爲卿號、七國皆有其事、漢以來其命官之名極多、謂之雜號也、言ろは光祿の園囿には池臺を構へ、亭觀に錦繡を張て文飾をなす、將軍の樓閣には神仙の貌を畫きて華靡を極む、我れ少年の時は常に其間に遊で、歡樂をなして日を送りしと也、

一朝臥病無相識、三春行樂在誰邊、　謂公子王孫少年享池臺樓閣歌舞之娛、一日老病無復三春之行樂矣、

【一朝】は一旦と同じ、論語顏淵篇云、一朝之忿忘其身、【三春】は正二三月を總て三春と云、【行樂】行遊して娛樂する也、謝玄暉遊東田詩、携手共行樂、言は昔し紅顏なりし時は公子王孫倶に遊びたるが、一朝病に臥てより後は更に相識の人なし、たとひ三春美景の時に値ふとも、行遊宴樂誰か邊に在てか又なすべけんやと云意、

婉轉蛾眉能幾時、須臾鶴髮亂如絲、但看古來歌舞地、惟有黃昏鳥雀飛、　古人歌舞行樂處、今皆荒涼黃昏惟見鳥雀矣、

【婉轉】は俗にとろ〳〵とすると云辭の如し、【蛾眉】詩經衞風碩人篇、螓首蛾眉、朱注蛾蠶蛾也、其眉細而長曲、蠶の變じて蝶となるを蛾と云、蛾の眉細くたはみてうつくしき故に、人の眉美なるを蛾眉と云、此には少年の容貌美なる時を指す、【須臾】少頃之間也、中庸道也者不可須臾離、【鶴髮】鶴毛の如く白き髮也、梁庾信賦鶴髮雞皮、言ろは婉轉と美しき蛾眉を粧へる少年の容貌は、能幾時をか持ち得んや、日月逝き易

へることを、此れに由て觀れば、東海すら猶變ず、況や老易すき人の顏色をや、故に落花を見て感慨を興し長歎息すると也、松栢摧爲薪五字は、文選古詩十九首の第十四首の詩の全句也、云古墓犂爲田、松栢摧爲薪、注に所引の古詩未考、桑海變爲海列仙傳三に見たり、已に前卷刺少年詩の注に出たり、

古人無復洛城東、今人還對落花風、年々歲々花相似、歲々年々人不同、此即人面不知何處去、桃花依舊笑春風之意、

【古人—】古來幾許の人逝去て皆土に歸す、再び復て洛城の花を見人なし、今の人は此落花の風に對して春を賞すれども、終に又古人の如くなるべし、【年年—】此一聯又劉希夷が詩也、年々歲々花の開くこと同しけれども、見る人互に替て不同と也、注按東坡詩集十四留別釋迦院牡丹詩厚注云、麗情集載、崔護清明遊都城南、得居人莊、叩門求飲、有女子開門以盂水至、及來歲清明、護往尋之、則門已扃鎖、因題詩曰去年今日此門中、人面桃花相映紅、人面不知何處去、桃花依舊笑春風、此三四の句之間が詩意と相同き故に引用也、予往年見花陣綺言、其尾附麗情集、今無其書、故姑引東坡詩集之注爲證也、

寄言全盛紅顏子、須憐半死白頭翁、此翁白頭眞可憐、伊昔紅顏美少年、公子王孫芳樹下、淸歌妙舞落花前、光祿池臺文錦繡、將軍樓閣畫神仙、

【寄言—】言を寄せて世間に時めく全盛の紅顏子に說與す、須く此老衰して死臨める白頭翁を憐愍すべし、【寄言】文選二十二徐敬業古意詩云、寄言封侯者、數奇良可歎、【紅顏】少年の時顏色紅にして美麗なるを云、【此翁—】此翁の白髮眞に憐み傷むべし、いかにとなれば此白髮始より如此なるに非ず、伊も亦昔時は紅顏うるはしき美少年にてありしとなり、【公子—】、以下の四句白頭翁昔し少年の時に全盛なりしことを云也、【公子】貴家の子也、劉伯倫酒德頌貴介公子、【王

是筆力最戒似對非對、謝茂秦曰、長篇之法如波濤初作一層緊於一層、李崆峒曰、長篇古風最忌鋪叙、意不可盡力不可竭、貴有變化之妙、

○有所思

此篇謂世變無常老少更相禪代、深寓慨嘆之感、

唐詩遺響一載之題作代悲白頭翁、作者作劉希夷、此詩は劉希夷が二聯を竊取て足し成して一篇とす、才子傳劉希夷傳云、希夷嘗作白頭吟、一聯云、今年花落顏色改、明年花落復誰有、既而歎曰此語讖也、石崇謂白首同所歸復何以異、乃除之、又吟曰、年々歳々花相似、歳々年々人不同、復歎曰死生有命豈由此虚言乎、遂併存之、舅宋之問苦愛後一聯、知其未傳於人、懇求之、許而竟不與、之問怒其誑己使奴以土囊壓殺於別舍、時未及三十、人悉憐之、

宋之問

洛陽城東桃李花、飛來飛去落誰家、幽閨兒女惜顏色、坐見落花長歎息、今年花落顏色改、明年花開復誰在、已見松栢摧為薪、

古詩山中千歳松、摧為地下薪、

更聞桑田變為海、

麻姑謂王方平曰、自接待以來已三見東海變為桑田、

【洛陽—】洛陽城の東に桃李の花あり、桃李の花散亂れ春風の吹に任せて飄揚し、飛去て何人の家やらん亂れ落る也、【幽閨—】、幽邃たる閨房の中に春を送る兒女は、我が顏色の終にはうつろひ改りなんことを惜み、坐ろに落花の飛を見て感慨を興し長く歎息を發すると也、人慨歎するときは息大にして長し、故に長歎息と云也、【今年—】此一聯劉希夷が句なり、落花を見て歎息する所以は、世變無常今年既に花落て春空く過くるときは人の顏色も隨て改り、妖艶うつろひ易し、明年たとひ花又開くとも人の存沒料りがたければ、誰か復たかはらぬ色にて在んや、【松栢—】上の句を承て云ふ、いかにとなれば已に見松栢の寒を凌て色變ずることなく幾許の年を歴しも、終には摧かれて薪となり盡るに歸することを、更に聞麻姑仙人が東海の桑田と變じ、桑田又海と成るを見しと云

斂與、蓋豪其傷憐而已、諸使何爲忍苦徵斂、故作詩一篇以示官吏、詩は略して不載、此二首を觀て當時の政煩苛にして民の困弊すること可見、故に山谷此二三策を引て證とす、【臣甫—】杜子美也、杜詩批點十三杜鵑詩云、我昔遊錦城、結廬錦水邊、有竹一頃餘、喬木上參天、杜鵑暮春至、哀々叫其間、我見常再拜、重是古帝魂、生子百鳥巢、百鳥不敢嗔、仍爲餧其子、禮若奉至尊、鴻雁及羔羊、有禮太古前、行飛爲跪乳、識序如知恩、聖賢吾法則、附與後世傳、君看禽鳥情、猶解事杜鵑、今忽暮春間、値我病經年、身病不能拜、涙下如迸泉、此杜鵑の詩は杜子美有所感、物に托して云へる也、禽鳥だも猶尊者ありて、百鳥杜鵑に禮すること若奉至尊と云は、天寶の末より天下亂て不臣の心を抱き天子に不服者多し、若是鳥にだも不如ことを譏れり、此詩を觀るときは肅宗の天下を治ること太平を致すに非ず、王命を不尊貢賦を不納の國あることを可見、故に山谷此詩を引て證とせり、【安知—】世間の人安んぞ忠臣結甫が輩の如き、皆蒼生の困弊を悼み、諸使の不臣を憤て痛み骨に徹するの詩を作ることあるを知んや、世上但此中興の碑に肅宗の大業の功を頌する瓊琚の如き美文を賞して、深く考ることなきと云意也、【瓊琚】詩衞風木瓜篇投我以木瓜報之以瓊琚、衍義云瓊琚美玉也、こゝには肅宗を頌する美辭を指て云也、

同來野僧六七輩、亦有文士相追隨、斷崖蒼蘚對立久、凍雨爲洗前朝悲、（凍雨暴雨也、）

結の四句同伴の人あることを記し、又一時の景を云、此日同く浯溪に來る者は野僧六七輩あり、亦文章を能する士も後に追隨して來る者あると也、【斷崖—】、斷崖に蒼々たる苔蘚まとひ封したる古碑に向て對立すること良久し、をりふし一とほりの凍雨ふり來て碑石に澆ぐは、前朝の悲みを洗滌するに似たると也、楚辭九歌云、使凍雨兮灑塵、凍音東暴雨也、

七言古風長篇

唐詩訓解首卷范德機曰、長篇古體參差中出整齊語、猶

馬、問何爲者、輔國以甲騎數十馳奏曰、陛下以興慶宮湫陋、奉迎乘輿還宮中、力士厲聲曰、五十年太平天子、輔國欲何事、叱使下馬、力士復曰、輔國可御太上皇馬、輔國韡而走、與力士對執轡還西內、居甘露殿、侍衛才數十皆尫老、太上皇執力士手曰、微將軍、朕且爲兵死鬼【高將軍】高力士也、傳前に見たり、先天中以誅蕭岑等功、爲右監門衛將軍、知內侍省事、帝或不名而呼將軍、帝幸蜀力士從帝、進齊國公、從上皇還、上皇徙西內居十日、爲李輔國所誣、除籍長流巫州、

臣結春陵二三策、元結於春陵上時議三篇**臣甫杜鵑再拜詩、**杜甫在杜鵑詩數篇譏切時政**安知忠臣痛至骨、後世但賞瓊琚詞、**

此四句には言ふ、杜甫元結皆詩作て時政を譏切し、世を憂ひ民を痛むこと甚し、後世の人不知之して但此中興の功を稱する碑文をのみ賞することを云へり、【臣結―】元結也、【春陵二三策】注に元結時議に對して上つりし三篇を指すと云非也、元結上時議三篇は、京師に詣て肅宗に見えて對策する時の文也、春陵にての作に非ず、此詩に云二三策は春陵行の詩と、賊退示官吏の詩を指て云べし、【二三策】孟子盡心下、吾於武成取二三策而已矣、此には借用也、策はふだ也二三篇と云意に看べし、【元結】唐書列傳六十八、元結字次山、後魏常山王遵十五代孫、結少不羈、十七乃折節向學、天寶十二載擧進士、會天下亂、沈浮人間、蘇源明見肅宗薦結可用、帝召結詣京師、問所欲言、結自以見軒陛拘忌諱恐言不悉情、乃上時議三篇、帝悅擢右金吾兵曹參軍、攝監察御史、爲山南西道節度參謀、代宗立固辭乞侍親歸樊上、授著作郎、卒年五十、○唐詩歸卷二十三元結春陵行序云、癸卯歲漫叟授道州刺史、道州舊四萬餘戶、經亂已來不滿四千、大半不勝賦稅、到官未五十日承諸使徵求符牒二百餘封、皆曰失其限者罪至貶削、於戲若悉應其命則州縣破亂、刺史欲焉逃罪、若不應命又即獲罪戾必不免也、吾將守官靜以安人待罪而已、此州是春陵故地、故作春陵行以達下情、詩は略して不錄、又賊退示官吏詩序云、癸卯歲西原賊入道州、焚燒殺掠幾盡而去、明年賊又攻永破邵、不犯此州邊鄙而退、豈力能制

終ることなく、邪臣の謀を用て南內を蔑にす、眞の庸主なることを識れり、【內間━】內には張皇后稍〻政に與て、顏色を以て事を可否し、天子の權を撓ますことをせり、【可否】は事の是非を論じて、某は可也某は不可なりと措圖するを云、唐書七十七、肅宗廢后庶人張氏、鄧州向城人、乾元初冊拜淑妃、遂立爲皇后、后能牢寵、稍〻預政事、與李輔國相助多以私謁撓權、與輔國謀徙上皇西內、帝內制於后卒不敢謁西宮、寶應九年后與內官朱輝光等謀立越王係、而李輔國程元振以兵衞太子、幽后別殿、代宗已立群臣白帝、請廢爲庶人、【外間━】外朝廷には李輔國政を專にして權柄を取り、天下の事を頤を動して指揮して、意のまゝにすると也、【李父】は李輔國也【頤指】は前漢書列傳十八賈誼傳云、今陛下力制天下頤指如意、注、如淳曰、但動頤指麾則所欲皆如意、【指揮】は俗に指圖をすると云辭と同じ、唐書列傳百三十三、李輔國以閹奴爲閑廐小兒、年四十餘最王鉷薦之皇太子、得侍東宮、太子至靈武愈親近、勸遂即位、肅宗稍任以肱膂事、還京師拜殿中監、兼隴右群牧、封成國公實封戶五百、宰相羣臣欲不時見天子皆因輔國以請乃得

可、常止銀臺門決事、州縣獄詔三司制劾、有所捕逮流降皆私判臆處因稱制敕、【南內━】南內は興慶宮也、玄宗蜀より還り玉ひて興慶宮に居れり、後上元元年に西內に徙り玉へり、言は上皇の居玉ふ南內の興慶宮は、肅宗來り謁し玉ふこともなければ、百官皆よそにして上謁せず、故に凄涼と物さびし、且へ李輔國慶〻邪謀をなす、然れども高力士陳玄禮が輩、常に上皇の左右に在に因て害には遇玉はず、苟も活て宮中に在せり、高將軍輔國が爲に貶斥せられて後は左右人なく事最危かりしと也、【南內】唐地理志關內道西京注云、皇城謂之西內、大明宮在禁苑東南、西接宮城之東北隅、曰東內、興慶宮在皇城之東南、開元初置、至十四年又增廣之、謂之南內、【幾局活】李輔國傳云、太上皇居興慶宮、帝自複道來起居、太上皇亦間至大明宮、或相逢道中、帝命陳玄禮高力士王承恩魏悅玉眞公主常在太上皇左右、輔國妄言於帝曰、太上皇居近市通交外人、玄禮力士等將不利陛下、願徙太上皇入禁中、帝不寤、先時興慶宮有馬三百、輔國矯詔取之裁留十馬、會帝屬疾、輔國即詐言皇帝請太上皇按行宮中、至睿武門、射生官五百遮道、太上皇驚幾墜

上皇跼蹐還京師、

此四句肅宗不受玄宗之命して、帝位に即くことを譏れり、【撫軍監國】左傳閔公二年、晉侯使太子申生伐東山皐落氏、里克諫曰、太子奉冢祀社稷之粢盛、以朝夕視君膳者也、故曰冢子、君行則守、有守則從、從曰撫軍、守曰監國、古之制也、夫帥師專行謀、誓軍旅、君與國政之所圖也、非太子之事也、言ろは君軍に行ときは、太子留り守て國を監す、若し留守の人あれば君に從て行て軍を撫す、撫は慰勉也、撫軍監國は太子の職事也、然るに肅宗は留り守に非ず、又玄宗の軍に不從、何ぞ乃遽に位に靈武に即て玄宗の命を受ることを不待して、趣に大物の天下を取ることをせるやと也、唐書肅宗紀云、天寶十五載玄宗避賊行至馬嵬、父老遮道請留太子討賊、玄宗許之、太子乃還治兵於朔方、七月至靈武、裴冕等請皇太子即皇帝位、甲子即皇帝位于靈武、尊皇帝曰上皇天帝、贊云、天寶之亂、大盜遽起天子出奔、方是時肅宗以皇太子治兵討賊、眞得其職矣、雖不即尊位亦可以敗賊矣、【大物】本集注、莊子天下大物也、【事有至難】四字中興頌の字也、中興頌事有至難、宗廟再安二聖重歡、言は事至て成り難きことあり、宗廟再び安く、玄宗肅宗の二聖主重京師に還り歡をなし玉ふは大功なりと頌すれども、是天幸なるのみ、賊を平げて後位を玄宗に還すにも非ず、自立し玄宗は跼蹐と安からぬていにて京師に還り玉ふ、如此は正き道を以て天下を得たるに非ず、只天の幸を以て得たるまで也と云意也、【天幸】前漢書霍去病傳云、常與壯騎先其大軍、軍亦有天幸未嘗困絶也、【跼蹐】詩小雅正月篇云、謂天蓋高不敢不局、謂地蓋厚不敢不蹐、注局曲也、蹐累足也、韻會跼通作局、詩不敢不局、注疏云、曲身也、蹐說文小步也、徐曰、步小而輕也、詩注累足、箋曰畏怖之言也、

內間張后色可否、外間李父頤指揮、

肅宗立皇后張氏私與政事與李輔國相助多以私謁撓權帝不能制、

南內淒凉幾苟活、高將軍去事尤危、

高力士貶斥、

此四句肅宗內外を治ること不能、玄宗に於ても孝を

りにしたる墨本をのみ看たりしが、今眞の磨崖を見て石刻の文を摩挲して讀んとすれば、眼力衰て分明ならぬに因て、首を搔て省れば、是れ鬢色已に白して如絲なる老に及で方に見るに因てなりと云意、此一句上四字下三字自ら是二意也、徽讀をなして讀むべし【摩挲】手にてなでする也、韓退之石鼓歌、誰復著手爲摩挲、

明皇不作包桑計、顚倒四海由祿兒、九廟不守乘輿西、萬官奔竄鳥擇栖、

【明皇—】明皇は玄宗也、玄宗太平久に處し、心怠りて政を不勤、天下を邪臣の手に委ね、胡賊を寵して藩兵を專にせしめ、自ら安穩なりとおもへり、曾て危からんことを慮るの戒謹なくして、易に所謂苞桑の計をなさず、故に四海を顚倒して亂を作すの禍、祿山よりしておこりしと也、【苞桑】は易否九五云、九五休否大人吉、其亡其亡繫于苞桑、程傳云、大人當位能以其道休息天下之否、以循致於泰、猶未離於否也、故有其亡之戒、否既休息漸將反泰、不可便爲安肆、當深慮遠戒常慮否之復來、曰其亡矣其亡矣、繫于苞桑、謂爲安固之道、如維繫于苞桑、繫辭曰危者安其位者也、亡者保其存者也、是故君子安不忘危、【九廟—】祿山に兩京を陷れられて、祖宗の九廟をも守り不得捨置て、天子の乘輿兵を避けて西に幸し、朝廷の萬官も悉く奔竄して賊に從て臣となること、鳥の栖を擇て爭ひ集るが如し、【奔竄】本集作已作鳥擇栖、注鳥字或作烏非、【九廟】天子は本と七廟を建つ、王莽九廟を建つ、唐には開元の間九廟を爲る、故に此詩に九廟不守と云也、新唐書禮樂志三云、開元十年詔宣皇帝復祔正室、謚爲獻祖、幷謚光皇帝爲懿祖、又以中宗還祔太廟、於是太廟爲九室、【乘輿】天子を稱して乘輿と云、此にては玄宗を指す、蔡邕獨斷上云、乘輿出於律、律曰敢盜乘輿服御物、謂天子所服御者也、天子至尊不敢渫瀆言之、故託之於乘輿、或謂之車駕、

撫軍監國太子事、何乃趣取大物爲、（譏肅宗無所受命而自立、）事有至難天幸耳、

山谷詩集卷二十載之、題作書磨崖碑後、此篇山谷六十歲、崇寧三年三月作也、磨崖碑唐中興碑也、肅宗天下を恢復し玉ふ功を頌して、崖石を磨して碑と爲し鐫刻たる者也、元結頌を作り、顏眞卿頌を石に書して刻めり、山谷其碑を見て當時の事迹を想ふて此詩を題せる也、【題注】即是大唐中興頌の序也、天寶玄宗の年號也、【陷洛陽—】新唐書五玄宗紀、天寶十四載十二月丙申、封常淸及安祿山戰于甖子谷敗績、丁酉陷東京、東京は即洛陽なり、【陷京師】十五載六月己亥、祿山陷京師、京師は即長安也、【幸蜀】玄宗蜀郡に入玉ふは十五載七月庚辰也、【太子】肅宗也、即位は八月庚子也、【靈武】大明一統志、慶陽府靈武臺在環縣東北三里、此地舊屬靈武郡、相傳唐肅宗即位於此、【明年】天寶十五載の明年、即至德二年也、【皇帝】肅宗也、去歲已に帝位に即く、故に皇帝と稱す、【移軍鳳翔】唐書六肅宗紀、至德二載二月戊子次于鳳翔、【鳳翔】唐書地理志關內道鳳翔府扶風郡本岐州、至德元載更郡曰鳳翔、二載復郡、【復兩京】復は賊に克て恢復する也、至德二載九月壬寅、廣平郡王叔及慶緒戰于灃水敗之、癸卯復京師、十月壬子復東京、慶緒奔于河北、【上皇】玄宗也、肅宗已に即位、故に玄宗を上皇と稱す、前漢書高祖紀上尊大公曰太上皇、註師古曰太上極尊之稱也、皇君也、天子之父故號曰皇、不預治國故不言帝也、【還京師】至德二載十二月丁未、至自蜀郡居于興慶宮、

黃山谷

春風吹船著浯溪、扶藜上讀中興碑、平生半世看墨本、摩挲石刻鬢如絲、

【春風—】第一句先づ遊觀の時を記す、春風船を吹き送て浯溪の崖に著く、故に藜杖に扶て船より上り、唐の中興碑を讀むと也、【浯溪】陶岳零陵記曰、浯溪在永州北、水路一百餘里流入湘江、此溪口水石奇絕、【扶藜】字彙藜一名落帚、初生可食大可爲杖、莊子云、原憲居魯、子貢往見、憲花冠縰履杖藜而應門、【中興】王室已に亡んとして再興るを中興と云、漢の光武唐の肅宗の如き是也、漁隱云藝苑云、凡王室中否而復興謂之中興、【平生—】平半生世の間、此中興の碑を石づ

一】浮雲空を蔽て卷舒すれども、明河は高く掛て相關ことなし、故に任二浮雲一と云也、星稀に、空晴るときは明河の光輝殊に鮮かなり、月出て明に照すときは明河の輝稍、微なり、故に流月に讓ることを不レ惜と云也、

明河可レ望不レ可レ親、願得レ乘レ槎一問レ津、更將二織女支機石一還訪二成都賣卜人一、博物志、有三人乘レ槎到二天河一、見二婦人織丈夫飮一レ牛、還問二嚴君平一、君平曰、某年某月客星犯二斗牛一、即其人也、

【明河一】明河は只仰ぎ望むべし、親み近き難し、願くは昔人の如く浮槎に乘ずることを得て、天河に遡り渡口の津を尋ね問ひたきこと也、張華博物志卷十云、舊說云、天河與レ海通、近世有三人居二海渚一者上、年々八月有二浮槎一去來不レ失レ期、人有二奇志一立二飛閣於槎上一、多齎レ糧乘レ槎而去、十餘日猶觀二星月日辰一、自後芒々忽々亦不レ覺二晝夜一、去十餘日奄至二一處一、有二城郭狀一屋舍甚嚴、遙望二宮中一多二織婦一、見二一丈夫牽レ牛渚次飮一レ之、牽牛人乃驚問曰、何由至レ此、人具說二來意一、並問此是何處、答曰、還至二蜀郡一訪二嚴君平一則知レ之、竟不レ上レ岸、因還如レ期、後至レ蜀問二君平一、曰某年月日有二客星一犯二牽牛宿一、計二年月一正是此人到二天河一時也、【更將一】天河に至り又織女の機を支る石を將來て、蜀の成都の市に卜を賣て在りし君平が如き人に扣き問たきことに思ふと也、【支機石】白孔六帖第二引二集林一云、昔人有下泛レ槎至二天河一者上、得レ石歸、嚴君平曰、此織女支機石也○氏族排韻、張騫漢武時奉レ使大夏、乘レ槎到二河源一、見二一婦人織一、丈夫牽レ牛飮レ渚、女與二一石一、歸問二嚴君平一、君平曰此織女支機石也、【賣卜人】嚴君平を指て云、人の爲に卜筮して錢を取り衣食に給す、故に賣レ卜と云也【嚴君平】前漢書無レ傳、華陽國志云、高尙逸民嚴遵字君平成都人、而無レ傳、氏族排韻云、嚴遵字君平西漢時人、卜二筮於成都市一、日閱二數人一、每依二卦辭一教レ人以二忠孝一、日得二百錢一足二以自養一則閉レ肆下レ簾而讀二老子一、楊雄少從レ之學、曰其風聲足下以激二貪勵一レ俗、亦近古之逸民也、年九十餘以二其業一終、

○題二磨崖碑一

唐天寶十四載安祿山陷二洛陽一、明年陷二長安一、玄宗幸レ蜀、太子卽二位於靈武一、明年皇帝移二軍鳳翔一、其年復二兩京一、上皇還二京師一、元結刻二頌於浯溪石一、

出東城接南陌、

【雲母—】雲母を以て作れる帳の前にして望めは、初て見て汎濫と空中に泛ぶ也、【汎濫】字彙漫延也、水精を以て織れる簾の外に臨ては、轉た逶迤と遠長なると云意也、水精は水晶と同じ、【逶迤】文選鼓吹曲、逶迤帶涤水、注、善曰逶迤長貌、【倬彼昭回】詩大雅雲漢篇云、倬彼雲漢昭回于天、注昭光、回轉也、其光隨天而轉也、【倬】字彙著也、言ろは倬と著明なる彼の銀河の光は、天に隨て回りて練の白が如し、【復出—】東城の邊に出て、再々轉して南陌に接する也、詩經衍義雲漢篇、曹氏曰、雲漢起于東方、經箕尾之間、向西南行、

南北征人去不歸、誰家今夜擣寒衣、鴛鴦機上踈螢度、鴛鴦篇、夜々學織連枝錦、織作鴛鴦人共憐、烏鵲橋邊一雁飛、淮南子、烏鵲塡河而度織女、

此二聯河漢明なる夜に當て、聞見する所を云也、【南北—】南北の邊へ遠く征たりし人は、猶未だ歸り來らざるにや、誰家か今夜征夫に寄ん爲の寒衣を擣つ砧の聲のきこゆる也、【鴛鴦—】風涼く河漢清める夜、婦女鴛鴦を織成せる機杼の上には、踈螢幽に照して度り過るを見る也、注【鴛鴦篇】は李德裕が作、見于事文類聚後集四十六、此注に鴛鴦篇を引て之問が詩を證す誤也、之問は唐の景龍の間武后に仕ふ、德裕は寶曆中に敬宗に仕へし人也、【烏鵲—】烏鵲橋をなして河を渡すは、七夕の故事也、こゝには直に銀河を指て云也、言は時已に秋の中なれば、烏鵲の嘗て橋をなして織女を渡せし河漢の邊には、始て一雁の飛て南に向ふを見ると也、注淮南子を遍檢するに、いづれの篇に出るや偶考へ不得、

雁飛螢度愁難歇、坐見明河漸微沒、已能舒卷任浮雲、不惜光輝讓流月、

雁始て來り螢踈に照して度るときは、秋氣已に冷し、故に感懷を起して愁思歇がたきと也、坐に望て明河の漸く微々として、輝の沒するを見ると也、【坐】文選、體澤坐自捨、注、李善曰、無故自捨曰坐捨、【已能

新唐書文藝傳百二十七曰、宋之問字延淸、汾州人、之問偉儀貌雄于辯、甫冠武后召與楊炯分直習藝館、累轉尙方監丞左奉宸内供奉、武后游洛南龍門、詔從臣賦詩、左史東方虯詩先成、后賜錦袍、之問俄頃獻、后覽之嗟賞更奪袍以賜、景龍中遷考功員外郎、復下遷汴州、未行改越州長史、窮歷剡溪山置酒賦詩、流布京師人々傳諷、睿宗立流欽州、又流嶺南賜死、魏建安後訖江左詩律屢變、至沈約庾信以音韻相婉附、屬對精密、及之問沈佺期又加靡麗、回忌聲病約句準篇如錦繡成文、學者宗之、號爲沈宋、

八月涼風天氣晶、萬里無雲河漢明、昏見南樓淸且淺、(見音現)曉落西山縱復橫、

【八月―】八月は殘暑已に盡て涼風起り、金氣の令盛に行はれて天氣殊に晶明なり、禮記月令、孟秋之月涼風至白露降、【晶】は字彙精光也、此時萬里の長空一點の雲なく、河漢耿々と明に見るゝ也、【昏見】昏に始て南樓の上に見はれて、鮮に淸んで流れも淺く見ゆるなり、【淸且淺】文選十九首古詩、河漢淸且淺、曉に及ては西山に傾き落て、宵に縱に見るも、轉じて横になると也、

洛陽城闕天中起、長河夜々千門裏、複道連甍共蔽虧、畫堂瓊戸特相宜、

【洛陽―】洛陽の城闕、廣大峨々として天中に當て高起す、河漢其上に見れて、夜々千門の裡にうつろひ映すると也、【千門】漢武帝本紀、作建章宮度爲千門萬戸、【複道】前に見たり、【連甍】字彙甍音萌屋棟也、所以承瓦いらかと訓ず、甍を連て宮殿多也、【蔽虧】、司馬相如子虛賦、日月蔽虧、注日月虧缺半見、言は複道連甍に蔽ひ隔られて河漢全く見れず、虧缺して半見るを云、【畫堂―】畫て飾れる堂瓊を以て爲せる戸の裡は、明河の輝互に映じて、特に相宜きと也、

雲母帳前初汎濫、水精簾外轉逶迤、倬彼昭回如練白、(詩倬彼雲漢昭回于天)復

從流下而忘反謂之流、從流上而忘反謂之連、朱注從流下謂放舟隨水而下、從流上謂挽舟逆水而上、【宴安—】宴に耽るは鴆毒を食ふが如し、必ず身を亡せども、奢惑に因て自ら知ことなきと也、左傳閔公元年、管敬仲言於齊侯曰、宴安酖毒不可懷也、杜預注、以宴安比之酖毒、○古文大全云、鴆毒鳥、黑身赤目、食蝮蛇、以其毛血歷飲食則殺人、宴安之禍甚於鴆毒也、【三風—】書伊訓云、敢有恒舞于宮酣歌于室、時謂巫風、敢有殉于貨色恒于遊畋、時謂淫風、敢有侮聖言逆忠直遠耆德比頑童、時謂亂風、惟茲三風十愆、卿士有一于身家必喪、邦君有一于身國必亡、正義云、三風十愆謂巫風二、舞也歌也、淫風四、貨也色也遊也畋也、與亂風四爲十愆、愆は音牽、過也罪也、あやまちと讀む、三風の目十あり、合て三風十愆と云也、言は三風十愆は古より所戒也、若一つも身に有ときは、何の處に在ても皆亡ぶべし、此驪山のみ不吉の處にて、遊ぶ人必ず亡ぶと云にあらず、先代こゝに遊で敗亡を取りし人主は、皆三風十愆の無道あるに因て禍に及たると也、注【敬宗】唐第十四主、名は湛、穆宗太子、在位二年爲宦官劉克明所弑、壽十八、寶曆中按綱目、寶曆元年冬十一月也、【張權輿】唐書無傳、【紫宸】は唐の內便殿也、天子日御之、古の燕朝也、書言故事九云、朝廷前殿曰紫宸、職官分紀施敬本上疏曰、紫宸殿前漢之前殿周之路寢、陛下所以負黼扆居黃屋饗萬國朝諸侯、人臣致敬之所、【幽王】周第十二主也、史記四周本紀、幽王嬖后褒姒廢申后及太子宜臼、以褒似爲后、其子伯服爲太子、宜臼奔申、申侯召犬戎攻王、王擧烽火徵兵不至、犬戎殺王驪山下、秦始皇幸驪山事は始皇三十五年に見たり、玄宗幸驪山、玄宗の天寶六年に見たり、先帝は穆宗を指す、穆宗壽三十にして長慶二年に崩ず、故に年不長と云、

○明河篇

此篇光明俊傑、宛然星河之顯著雲漢之昭回、

明河を詠するの篇也、注は此篇を評する也、一篇の體光明俊偉にして、宛然としてげにも能寫したると云意也、星河雲漢ともに銀河を云、顯著昭回は光景を指て云、氏族大全云、之問武后朝求爲北門學士不許、作明河篇以自見云、

宋之問

游宜春、八九月上與侍中常侍武騎、及待詔隴西北地良家子能騎射者、期諸殿門、微行以夜漏下十刻、廼出、且明入山下、馳射鹿豕狐兎、手格熊羆、馳騖禾稼稻杭之地、時夜出夕還、後齎五日糧、會朝長信宮、上大驩樂之、是後南山下知微行數出也、丞相御史知指乃使右輔都尉徼循長楊以東、右內史發小民共待會所、後廼私置更衣、從宣曲以南十二所、中休更衣投宿諸宮、長楊五柞倍陽宣曲尤幸○三輔黃圖卷一云、長楊在今盩厔縣東南三十里、本秦舊宮、至漢修飾之以備行宮、宮中有垂楊數畝、因爲宮名、門曰射熊觀、秦漢遊獵之所、又卷三云、五柞宮漢之離宮也、在扶風盩厔、宮中有五柞樹、因以爲名、五柞皆連抱、上枝覆蔭數畝、

江都樓成隋自迷、 隋煬帝開汴河、爲江都之遊、浙人頃昇進新宮圖、帝愛之、即始圖營建、既成幸之、曰使眞仙遊此亦當自迷、可目之曰迷樓、

隋の煬帝樓を作て廣大を極め、眞仙を遊ばしむとも方所を失て迷はしめんと云へども、自ら迷て天下を失ふに至ことを不知、是隋自ら迷ふ也、【隋煬帝】名廣小字阿摩、文帝第二子、在位十三年、巡狩揚州、爲宇文化及所弑、壽三十九、葬於江都之雷塘、注【開汴河】煬帝紀云、大業元年發河南淮北諸郡民前後百餘萬、開通濟渠、自西苑引穀洛水以達河、復自板渚引河、歷滎澤入汴、又自大梁之東引汴水入泗、以達於淮、【江都之遊】江都は縣の名、淮南の揚州に屬す、大業元年八月上幸江都、發顯仁宮、自漕渠出洛口御龍舟、挽船士八萬餘人、謂之御脚、皆以錦綵爲袍、舳艫相接二百餘里、照曜川陸、騎兵翊兩岸而行、旌旗蔽野、又六年三月至江都宮、以王世充領江都宮監【頃昇】傳未考、

由來流連多喪國、宴安鴆毒因奢惑、 左傳宴安鴆毒不可思也、 **三風十愆古所戒、** 書伊訓事 **不必驪山可亡國、** 唐寶曆中敬宗欲幸驪山、時拾遺張權輿伏紫宸殿下諫曰、昔周幽王幸驪山、爲犬戎所殺、秦始皇葬驪山而國亡、玄宗宮驪山而祿山亂、先帝幸驪山而年不長、帝曰驪山若此之凶耶、我宜一往以驗彼言、〔鴆〕直禁反、

由來はもとよりと云義也、【流連】は舟を泛て遠遊無度を云也、由來流連の樂を肆にするときは、多くは國を喪ふと也、孟子梁惠王篇云、流連荒亡爲諸侯憂、

有蓮花湯、貴妃澡沐之室、

我上朝元春半老、滿地落花無人掃、羯鼓樓高掛夕陽、長生殿古生青艸、

【朝元羯鼓長生】皆驪山の樓閣也、東坡驪山に上り朝元閣の邊に至れば、時已に春半過たるころにて、落花は地上にしき滿てあれども、誰あつて掃ふ人なく、寂寥たるありさま也、羯鼓樓高く構たれども上る人なく、只夕陽の返照斜に掛るのみ也、長生殿も已に古りて、空く青艸を生じて荒れはてたるありさま也、

可憐吳楚兩醯雞、築臺未就已堪悲、（楚靈王築章華臺、吳王夫差築姑蘇臺、謂二王如醯雞無所見、）長楊五柞漢幸免、（漢武帝建長楊五柞宮、幸免喪亡、）

【可憐—】憐むべし吳楚兩國の王、共に無知にして道に闇きこと醯雞の蟲の如し、國の力を費して臺を築きしが、未だ成就せざるにはや身亡び國敗て固に悲むに堪たり、【吳王】は闔閭の子夫差也、吳越春秋卷五云、大夫種曰、吳王好起宮室、用工不輟、王選名山神材、奉而獻之、越王乃使木工千有餘人入山伐木、大二十圍長五十尋、乃使大夫種獻之於吳王、吳王大悅、子胥諫、吳王不聽遂受而起姑蘇之臺、三年聚材五年乃成、高見二百里、行路之人道死巷哭不絕嗟嘻之聲、民疲士苦人不聊生、吳の夫差姑蘇の臺を築き未幾して越王勾踐に亡されたり、楚の靈王名は熊虔、章華臺を築く、靈王遂に身を亡して餓死せり、史記楚世家靈王七年就章華臺、下令內亡人實之、○賈傅新書云翟王使至楚、楚王夸使者以章華之臺、々甚高三休乃至、楚王曰翟國亦有此臺乎、使者曰否、翟寠國也惡見此臺也、【醯雞】莊子田子方篇云、孔子出以告顏回曰、丘之於道也其猶醯雞與、微夫子之發吾覆也吾不知天地之大全也、注醯雞甕中之蠛蠓也、醋を入る甕の中に生ずるせう〴〵と云小蟲也、【長楊—】漢武帝遊獵を好て園囿を開き、長楊五柞等の離宮を所々に建て遊獵次宿の所とす、されども敗亡を致すに不及は是幸にして免れたる者也、前漢書東方朔傳云、建元三年微行始出、北至池陽、西至黃山、南獵長楊、東

裳羽衣曲、後安祿山亂西幸入蜀、伍子胥諫吳王曰、臣將見麋鹿游姑蘇之臺、北山移文蕙帳空兮夜鶴怨、山人去兮曉猿驚、

此一節安祿山亂を作し玄宗蜀に幸あつて後驪山荒廢することを云、【六龍―】玄宗亂を避けて六龍の駕御西に幸し、峨眉の棧道を歷て蜀に入玉ひしより、驪山の繁華荒廢し、只悲風の聲すさまじく淸華院に入るのみなると也、【峨眉】唐地理志劍南道嘉州有峨眉山、○楊用修文集七十八云、顏師古曰棧即閣也、劉禹錫有山南西道新修驛路記、有云、我之提封距右扶風、觸劍閣千一百里、自散關抵褒城次舍十有五、自褒而南踰利州至于劍門十有七道、塗次舍可見于此、又云、棧閣淩虛下臨唅呀、層崖峭絕枘木垣鐵因而廣之、限以鉤闌、狹徑深陘從而拓之方駕從容、棧閣之制亦可想也、大抵漢中雖是平川、東北入長安、西南出劍門、皆有棧閣之路、惟今洋州子午谷、南北正對長安王莽所開、唐明皇荔枝路老杜云、百馬死山谷至今耆舊悲、信爲險絕、【悲風】老杜詩、悲風日暮多、【霓裳―】玄宗驪山に在せしときは、常に霓裳羽衣の曲を奏して、楊貴妃をして舞はしめたりしが、西幸の後は此遊も絕て、蕭散とものさびしく、響を絕つて空しくなりたると也、【霓裳】西淸詩話云、葉法善引明皇入月宮、聞樂聲歸、但記其半、會西京府楊敬達進婆羅門曲、聲調脗合、按之便韻乃合二者製霓裳羽衣曲、【蕭散】文選三十一、江文通雜體詩云、蕭散得遺慮、注、濟曰、蕭散空遠也、【麋鹿―】伍子胥が語移文の字を取用て、驪山荒蕪して寂寞たるありさまを云也、麋音麋鹿屬、宮殿あれはてゝ草莽となり、野外の麋鹿來て遊び、猿鶴の聲も悲怨にしてものすごき也、注【伍子胥】傳史記列傳六に見へたり、此語不見、吳越春秋卷五、勾踐陰謀外傳第九云、子胥曰、今大王捐國家之福以饒無益之讎、棄忠臣之言而順敵人之欲、臣必見越之破吳豸鹿遊於姑胥之臺、荆榛蔓於宮闕、【北山移文】孔德璋作也、見文選四十三、注【明皇―】地理志太宗貞觀十八年營建御湯名湯泉宮、高宗咸亨二年名溫泉宮、明皇天寶六年改爲華淸宮、北向正門曰津陽、東曰開陽、西曰望京、南曰昭陽、其中有瑤光殿、飛霜殿、九龍殿、宜春亭、朝元閣、長生殿、羯皷樓、重明閣、芳風閣凡十八名、華淸宮治井爲湯池、環山列宮室、○明皇雜錄云、上新廣一湯制度宏麗、每年冬十月行幸、至明年春還宮闕、去即與貴妃同輦、華淸有端正樓、貴妃梳洗之處、

當止處當行道也、【人生—】人の生涯各當爲の事あり、常に安穩逸樂なる處には處り難き者也、天子は自ら天子の業あり、然るに先代の帝王其止るべき處に不止して、何爲ぞ此驪山の中に來て安穩を肆にせるやと也、【何爲來】孔子家語卷四辨物篇、人告孔子曰、有麏而角者何也、孔子往觀之曰麟也、胡爲來哉、

複道淩雲接金闕、樓觀隱烟橫翠空、林深霧暗迷八駿、朝東暮西勞六龍、

二聯は驪山の形狀を云、【複通】史記秦始皇本紀云、周馳爲閣道、自殿下直抵南山、表南山之顚以爲闕、爲複道、自阿房渡渭屬之咸陽、【金闕】謝眺出尙省詩云、既通金闕籍、複道は雲を淩て遠く連て金闕に接屬し、樓觀高大にして靄烟の外に聳へ、隱映として翠空に横て見ゆると也、【林深—】八駿六龍皆天子の駕御を指て云、驪山の中曠遠にて林木深く、霧暗く蔽ふて方所を失ふて、駕御をも迷はすべきほど也、朝には東に馳せ暮には西に幸して、常に六龍を疲勞せしめて遊覽を恣にせると也、【八駿】の名列子拾遺記博物志等に皆載之、三書の名各異也、既に第四卷淵明が詩の注に見たり、楊升菴文集八十一云、八駿之名見於列子、而他書所載互有不同、今列之於後、一蒴䮻、漢書作華騮、唐人名紫騮、今曰棗騮、二綠耳、一作騄駬、又作騄耳、三赤驥又作赤驢、宋世名好頭赤、四白㶟、㶟古犧字、形似牛、五渠黃、一作駏騜、又名翠黃、又名訾黃、六踰輪、又作踰輪、蜀都賦所謂魚文也、馬目如魚、劉邵賦蓋如飛鶴馬似遊魚、七山子、又作屾子、今之五明馬又名玉頂、又名叱發、又名玉抱肚、又名花抱肚、太白詩所謂五花馬也、古以爲奇今以爲忌、曰破面孤鬼也不騎、八盜驪、一曰溫驪今之鐵青色、荀子作纖離、又作踐驪、盜驪言少竊驪色、又作騊栗驪栗色也、後代轉名騊駼、【六龍】は六馬也、周禮夏官瘦人云、馬八尺以上爲龍、〇秦本紀云、數以六爲紀、輿六尺乘六馬、

六龍西幸峨眉棧、悲風便入華清院、霓裳蕭散羽衣空、麋鹿來遊猿鶴怨、

唐明皇於驪山之地作華淸宮、朝元閣、羯鼓樓、長生殿、歲與楊貴妃幸溫湯、妃能舞霓

塵】平地と爲て、沙塵を風の吹揚る如くにならんとなり、【枯榮―】【遞】字彙傳遞也、【傳】字彙、音轉去聲驛遞也、釋名、傳傳也、人所止息而去後人復來、轉相傳無常主也、○古文大全云、傳舍急遞鋪送文書者、言一枯一榮更相來往如箭之疾速、言ろは人間の一榮一枯常主なきこと、馬やどの旅客の如し、往來箭よりも急にして、曾て定ることなきと也、【天公―】盛衰の常なきは天運の自然也、天公豈に少年の爲に私をなして、いつも少年ならしむるの偏あらんや、日月は更に與我延ることなき也、【莫道―】結の二句は少年を誡る也、【韶華】春色を韶光と云、韶華は春色の華麗を云、即ち人の年少なるを指て云也、言は少年の人道ふことをやめよ、顏色の少好鎭へに變ずることなく長く在ものなりと、光陰我を不待、暮れ逝てやがて老年となり、頭白く面皺むの衰貌、專に相待て侵し至るべきぞと也、

○驪山　譏人君留意於土木遊幸之事、皆足以亡國也、

東坡詩集七載之、【驪山】新唐書地理志、驪山在關內道京兆府昭應縣、○大明一統志、陝西西安府驪山在臨潼縣東南三里、因驪戎所居故名、【注】此詩意は人の君と爲て天下を有つ人は、位を安し政を勤むべし、若し意を外事に留め、土木の功を起し、宮殿を廣め、遊幸の樂を貪るときは、皆國を亡すに至ことを譏刺せる也、【土木】は土を築き材木をあつめて宮室を造を云、書叙指南卷十六、繕造曰凝土度木、

蘇子瞻

君門如天深幾重、君王如帝坐法宮、人生難處是安穩、何爲來此驪山中、

【君門―】天に九天あり、擬之天子の門も亦九門あり故に云、君門は如天にして深邃幾重と云ことを不知と、【君王】は天子を指す、【如帝】とは天帝の如く威嚴なるを云、【法宮】前漢書列傳十九鼂錯傳云、五帝神聖其臣莫能及、故自親事處于法宮之中、注、如淳曰、法宮路寢正殿也、言は王宮は門闕深重にして天の幽邃なるが如し、天子は其中に在て威嚴天帝の如く、令を下し政を爲て正く南面して法宮に坐す、即是天子の

に、我れ生れてよりこのかた終に客となることなく、一身の奉養の爲に美妾を貯ること三百人に過ぎたると也、【豈知—】如此遊樂にふける人は、豈知んや地を劚て種田農民の家官家より租稅を頻に催促して、人の織ものを沒收するに苦むの愁あることを、徒に自己の爲にすることをのみ知て、外の憂を知ることなきを譏也、【官稅】は官家へ納る年貢を云、稅は租也歛也、

長金積玉誇豪毅、（長）音丈、每揖閑人多意氣、生來不讀半行書、（行）音抗

只把黃金買身貴、

【長金—】長積は其多を云也、【豪】は俠也强也、【毅】果敢也、强忍也、言ろは多の金玉を費し用ひ、をのこだてをして豪毅を以て人に誇り肆なる也、【每揖—】、揖は交の意也、閑人の閑はいたづらと云意也、遊俠無賴にして、生業を勤ることなき者を閑人と云なり、【意氣】は氣槩の剛なるを云なり、前漢書李廣傳、會暮吏士無人色、而廣意氣自如益治軍、言ろは每々無賴の閑人を揖讓し、交を締て意氣殊に多と也、【生來—】生れてこのかた半行の書をだに習ひ讀むことなく、內に蓄るの德なければ、只黃金を用て美麗をなして、身の貴顯を買ひ得ると也、

少年安得長少年、海波尙變爲桑田、列仙傳、麻姑謂王方平曰、自接待以來見東海三變爲桑田、向到蓬萊水乃淺於往者畧半也、豈復爲陵乎、方平曰、東海行復揚塵耳、

枯榮遞傳急如箭、遞音弟、天公豈肯爲君偏、莫道韶華鎭長在、

白頭面皺專相待、

【少年—】人の少年なること、安ぞ長にいつも少年なることを得んや、東海の波浪だも尙變じて桑田となることあり、況や人の身に於てをや、富貴少年何ぞ特むに足んや、注 列仙傳卷三に見たり、【接待】接は交也待は遇也、昔日相遇てより以來と云意也、【見東—】東海變じて桑を植る田となり、又變じて海となる、如此已に三たび變ずるの間、不遇して今又遇たると也【東海—】行復は、そろ〳〵と又變ずると云意也、【揚

新唐書列傳一百二十八、李賀字長吉、系出鄭王後、七歲能辭章、韓愈皇甫湜始聞未信、過其家使賀賦詩、援筆輙就如素構、自目曰高軒過、二人大驚、自是有名、爲人纖瘦通眉、長指爪能疾書、每旦日出騎弱馬、從小奚奴背古錦嚢、遇所得書投嚢中、未始先立題然後爲詩、及暮歸足成之、母使婢探嚢中見所書多即怒曰、是兒要嘔出心乃已耳、以父名晉肅不肯擧進士、愈爲作諱辨、然卒不就擧、辭尙奇詭、所得皆警邁、爲協律郎、卒年二十七、

青驄馬肥金鞍光、龍腦入縷羅衣香、美人狎坐飛瓊觴、貧人喚云天上郎、

【驄】字彙馬青白色、富貴全盛の少年所乘は青驄、馬の肥たくましきに金鞍のてりかゝやくをおかせて騎たり、衣裳の美は龍腦香を縷に薫じ入て、羅綺の香を衣ると也、其俱に遊ぶ者は美人傍に狎れ坐して、筵を開き酒を置て瓊の觴を飛し行らして終日に醉ふ、此ありさまを貧乏の人望み見ては、即貴び呼て天上の郎と云ふ也、

別起高樓連碧篠、絲曳紅鱗出深沼、有時半醉百花前、背把金丸落飛鳥、

富貴の家、遊樂の爲に園を開き、別に高樓を構へ起て、碧篠に連接して景趣を取る也、【篠】字彙小箭屬小竹也、【絲曳―】或は水に臨て絲綸を垂れ、紅鱗の魚を曳て深沼の底より釣出して樂とし、又有時は酒を携て百花の前にして半醉し、背に金丸の彈を把て飛鳥を射て落し、以て樂とする也、【金丸】西京雜記第四云、韓嫣好彈、常以金爲丸、一日所失者十餘、長安爲之語曰、苦飢寒逐金丸、京師兒童每聞嫣出彈、輙隨之望丸之所落輙拾焉、

自說生來未爲客、一身美妾過三百、〔過〕音戈 豈知劚地種田家、官稅頻催沒人織、

【自說】は年少の人の自道ふ辭也、其自ら矜て云ふ辭

王意氣盡、賤妾何聊生、【青血―】人の血久して色變ず、故に青血と云、地上に殘る青血は化して原上の草と爲て、此美人草となりたると也、

芳心寂寞寄寒枝、舊曲聞來似歛眉、哀怨徘徊愁不語、恰如初聽楚歌時、

此四句美人艸の形象を叙る也、【芳心】は虞美人の精神を指す、【寂寞】無聲也、言は虞美人の芳心寂寞として、猶留て今原上寒艸の枝に寄託すると也、【舊曲―】此艸に對して人虞美人の曲を歌へば葉動くに似たり故に云、舊日の歌曲を聞ては、眉を歛て愁る貌に似たると也、【歛眉】は顰眉と同じ、愁の貌也、【哀怨―】草の形哀み怨み、徘徊して不進、心に愁てものをも不云氣色あり、其形狀恰も初め玉帳の中に在て、漢軍の楚歌するを聽し時の如なると也、【徘徊】韶會徘徊不進貌、○前漢書息夫躬傳、鷹隼橫厲鸞徘徊兮、注徘徊謂不得其所也、○文選思玄賦、馬倚輈而徘徊、

滔々逝水流今古、漢楚興亡兩丘土、漢興楚亡終歸於盡、英雄功業到底死葬丘墓、獨有逝水東流今古不已而已當年遺事久成空、慷慨樽前爲誰舞、

此二聯は舊を感じて古を傷むの情を云て結せり、【滔々】水大貌、世間不易の物は惟滔々と東に逝く水のみ、古今流れて不窮、漢は興り楚は亡ぶ、興亡不同ども漢も亦遂に亡びぬ、畢竟兩ら盡に歸して共に丘土の下に葬らる、誰か常住の者あらんや、注【到底】、歸着の處也、畢竟と云意也、【當年―】當年成敗の遺事を思へば久して皆空となりぬ、今樽前に慷慨して自傷む、又誰が爲にか起舞せんや、【慷慨】慷同忼、字彙忼慨感傷也、又內自高忼憒激也、

○刺年少

譏刺少年多以豪氣凌人、不知光景如梭老景專相待、

年少の人血氣盛にして任俠を好み、豪氣を以て人を凌き驕て、光陰の移ること速にして、老に至りやすきことを不知を譏也、注【光景】は光陰也【梭】は織具所以行緯者、機を織る杼也、緯をわたして往來忙しき者也、故に日月の互に逝て無暇に喩る也、

李長吉

其大體之名也、【陰陵】項羽本紀注正義曰、括地志云、陰陵縣故城在濠州定遠縣西北六十里、地理志云、陰陵縣屬九江郡、【萬人敵】史記項籍少時學書不成去、學劍又不成、項梁怒之、籍曰書足以記名姓而已、劍一人敵不足學、學萬人敵、於是項梁乃敎籍兵法、籍大喜、【屑々】韻會云說文屑動作切々、方言屑々不安也、注【垓下】史記注徐廣曰、在沛之洨縣、正義曰、按垓下是高岡絕巖今猶高三四丈、其聚邑及堤在垓之側、因取名焉、今在亳州眞源縣東十里、【漢兵】周殷九江の兵を擧て、劉賈彭越に隨て、皆垓下に會して項王を攻るの兵也、【四面皆楚歌】漢已に楚の地を略し得ること多し、故に漢軍に楚歌するもの多し、【楚歌】正義曰、顏師古云楚人之歌也、猶言吳謳越吟、【起與―】史記漢軍及諸侯兵圍之數重、夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、漢皆已得楚乎是何楚人之多也、項王則夜起飮帳中、有美人名虞常幸從、駿馬名騅常騎之、於是項王乃悲歌忼慨自爲詩曰、力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何、項王泣數行下、左右皆泣莫能仰視、於是項王乃上馬騎、麾下壯士騎從者八百餘人、直夜潰圍南出馳走、平明漢軍乃覺之令騎將灌嬰以五千騎追之、項王至陰陵迷失道、問一田父、田父紿曰左、左乃陷大澤中、以故漢追及之、項王乃復引兵而東、漢騎追者數千人、項王自度不得脫、謂其騎曰、吾起兵至今八歲矣、身七十餘戰、所當者破、所擊者服、未嘗敗北、遂霸有天下、然今卒困於此、此天之亡我、非戰之罪也、今日固決死、

三軍散盡旌旗倒、玉帳佳人坐中老、
香魂夜逐劍光飛、（謂虞美人自刎）青
血化爲原上草、

項王の三軍悉く敗散し盡て、旌旗も倒れすたれ防ぎ戰ふ人なく、漢軍の圍み已に迫れり、此時玉帳の中に隨侍せし佳人、かゝるうきめを見るに因て座中にして忽年老たると也、【佳人】虞姬を指す也、楚辭九歌聞佳人兮召予、將騰駕兮偕逝、注佳人謂夫人也、【香魂―】注此句謂虞美人自刎、自ら頸を刎て死す、故に逐劍光飛と云也、項王帳中に飮して詩を爲り、數々歌ふてをはる時、美人又和して歌ふて則自刎せし也、漢楚春秋云、美人歌曰漢兵已略地、四方楚歌聲、大

燼滅、

項羽兵を引て西咸陽を屠り、秦の二世子嬰を殺し、秦の咸陽の宮殿を悉く焼て、火三月まで不滅、故に三月紅と云、項羽如此秦を亡して霸王となれども、幾ほどなくして又相尋で漢の爲に亡さるゝときは、秦烟燼に隨て滅亡する者也、【咸陽宮殿】三輔黄圖卷一云、自秦孝公至始皇帝胡亥、並都此城、案孝公十二年作咸陽、築冀闕徙都之、始皇二十六年徙天下高貲富豪於咸陽十二萬戸、諸廟及臺苑皆在渭南、秦每破諸侯、徹其宮室作之咸陽北阪上、南臨渭自雍門以東至涇渭、殿屋複道周閣相屬、所得諸侯美人鐘鼓以充之、二十七年作信宮渭南、已而更命信宮爲極廟象天極、自極廟道通驪山、作甘泉前殿、築甬道自咸陽屬之、始皇窮極奢侈、築咸陽宮、因北陵營殿、端門四達以制紫宮象帝居、引渭水灌都以象天漢、橫橋南渡以法牽牛、橋廣六丈、南北二百八十歩六十八間、八百五十柱、二百一十二梁橋之南北隄激立石柱、咸陽北至九嵕甘泉、南至鄠杜、東至河、西至汧渭之交、東西八百里、南北四百里、離宮別館相望聯屬、木衣綈繡土被朱紫、宮人不移樂不改懸、窮年忘歸猶不能徧、

剛強必死仁義王、陰陵失道非天亡、英雄本學萬人敵、何用屑々悲紅粧、

項羽少學劍曰、劍一人敵不足學、乃學萬人敵、〇羽至垓下兵少食盡、漢兵圍之數重、夜聞漢軍四面皆楚歌、起與虞姬飲帳中、悲歌慷慨泣數行下、乃乘駿馬潰圍渡淮至陰陵、迷失故道、謂其騎曰吾起兵八歲七十餘戰未嘗敗也、今困於此、此天亡我、非戰之罪也、

【剛强―】剛强は項羽を指す、仁義は沛公を指す、剛强にして力を以て人に勝つ者は竟に死亡し、寛仁大度なるは終に天下の王となるは理の常也、項羽の陰陵に道を失へるは天の亡せるに非ず、人を殺すことを嗜て殘賊を恣にするの報にして、自取るの禍也、【英雄本―】項羽は英雄にして大志あつて、書を學び劍を學ぶことを意とせず、萬人の敵に勝つことを學んと云し人也、何ぞ屑々と不安悲歌慷慨して、紅粧の婦人に訣るゝことを悲めるやと也、【英雄】丹鉛錄十五云、草之精秀者爲英、獸之特群者爲雄、故人之文武茂異取名于此、是故聰明秀出謂之英、膽力過人謂之雄、此

萬降兵夜流血、

鴻門の一會漢楚興亡の機關也、項羽已に沛公を放し還へすときは楚の亡んこと此に本く、故に項羽亡て虞氏死することを云んとて、先づ鴻門の會に范增望を失て、玉斗を摧しことを以て云ひ起す也、【鴻門】史記注孟康曰、鴻門在新豐東十七里、舊大道北下阪口名也、【玉斗】字彙斗飲器、詩大雅酌以大斗、起句言は項羽の亡るは何の處より始るや、鴻門にて沛公を放し還せしに因て、范增沛公の贈りし玉斗を撞破て、紛然と雪の如くならしめしより端を造て、それより關中に入て至る所悉く殘殺し、秦の降兵をも悉く殺て血を流せしより、士民の望を失て竟に亡るの本となると云意也、注詳に史記第七項羽本紀に見たり、參考すべし、史の文甚長し悉くこゝに不錄、項羽行略定秦地函谷關有兵守關不得入、又聞沛公已破咸陽、項羽大怒曰、旦日擊破沛公軍、當是時項羽兵四十萬在新豐鴻門、沛公兵十萬在霸上、范增說項羽曰沛公入關財物無所取、婦女無所幸、此其志不在小、急擊勿失、楚項伯素善張良、張良是時從沛公、項伯乃夜馳之沛公軍、私見張良具告以事、良乃入具告沛公、沛公大驚曰君爲我呼入、張良出要項伯、項伯即入見沛公、沛公奉卮酒曰吾入關所以遣將守關者、備他盜之出入與非常也、日夜望將軍至、豈敢反乎、願伯具言臣之不敢倍德也、項伯許諾、於是項伯復夜去、至軍中具以沛公言報項王、沛公旦日從百餘騎來見項王、至鴻門謝、項王因留沛公與飲、范增數目項王、擧所佩玉玦以示之者三、項王默然不應、范增起出召項莊謂曰、若入前爲壽、壽畢請以劍舞、因擊沛公於坐殺之、莊則入爲壽、壽畢項莊拔劍起舞、項伯亦拔劍起舞、常以身翼蔽沛公、莊不得擊、於是張良至軍門告樊噲、噲卽帶劍擁盾入軍門、遂入披帷西嚮立、項王曰客何爲者、張良曰沛公參乘樊噲者也、項王曰坐、樊噲從良坐、坐須臾沛公起如厠、因招樊噲出、張良入謝曰、沛公不勝桮杓不能辭、謹使臣良奉白璧一双再拜獻大王足下、玉斗一雙再拜奉大將軍足下、項王則受璧置之坐上、亞父受玉斗置之地、拔劍撞而破之曰、唉豎子不足與謀、奪項王天下者必沛公也、

咸陽宮殿三月紅、霸業已隨烟

李白は學問杜子美が如く必ずしも萬卷の書を讀めるにあらざれども、自然に鬼工神作の妙を得られし也、

【注】杜詩は贈韋左丞詩見全集卷一、

我曹本是狂吟客、寄語溪山莫相憶、他年須使襄陽兒、再唱銅鞮滿街陌、（襄陽歌、襄陽小兒齊拍手、攔街爭唱白銅鞮、）

我曹の如きは詩を善する人に非ず、本是狂吟の客なり、語を寄て溪山に說與す相思ふことなかるべし、我も亦溪山に隱逸し、踈放山簡が如き身となりて、他年須く襄陽の小兒をして再び白銅鞮の曲を歌て、手を拍て街陌に滿て嘲らしむべきとなり、李白詩集七襄陽歌、落日欲沒峴山西、倒著接䍦花下迷、襄陽小兒齊拍手、攔街爭唱白銅鞮、傍人借問笑何事、笑殺山翁醉似泥、山翁と云は晉の山簡也、【銅鞮】李白集四注齊賢曰、白銅鞮曲名、士贇曰樂府都邑三十四曲有白銅鞮歌、亦曰襄陽白銅鞮、

○虞美人草

（項王亡滅虞姬自刎、其墓上草、人呼爲美人草、）

類說云、褒斜山谷中有虞美人艸、狀如鷄冠大而無花葉皆相對、或唱虞美人曲、則兩葉如人撫掌頗中節拍、楚の項羽烏江にて亡し時虞氏同く自殺、其墓上に生ずる草を、人呼で虞美人艸と名くる也、【注】【項王】は楚の項羽也、【姬】は婦人の美稱也、【刎】は字彙音汶、割也、斷也、自刎は自ら頸を刎て死する也、

曾子固

宋史列傳七十四、曾鞏字子固、建昌南豐人、生而警敏、讀書數百言脫口輙誦、年十二試作六論、援筆而成、辭甚偉、甫冠歐陽修見而奇之、嘉祐二年進士第、調太平州司法參軍、後判三班院、拜中書舍人、時自三省至百執事、選授一新除書日至十數、訓辭典約鞏之能也、數月丁母艱去、又數月卒年六十五、○氏族大全云、曾鞏字子固、號南豐先生、王震序其文曰、南豐以文章名天下久矣、其文雄渾瓌偉、若江湖之波濤烟雲之姿狀一何奇也、

鴻門玉斗紛如雪、（沛公會項羽於鴻門、范增數目羽、擧所佩玉玦示之者三、項羽不應、增使項莊以劍舞、因擊沛公、項伯亦以劍起舞、以身翼蔽沛公、莊不得擊、樊噲帶劍擁盾直入譙羽、沛公遂得脫身遁、因以白璧一雙獻羽、玉斗一雙獻增、羽受璧、增拔劍撞破玉斗、羽引兵西屠咸陽、燒宮室火三月不滅、）**十**

下自有鬼與神、

（杜詩讀書破萬卷、下筆如有神）

此四聯李白を稱す、【我憶—】、金鑾殿上の人は即白也、玄宗に金鑾殿にて見へし故に云爾なり、【宮錦】は即宮錦袍也、【烏角巾】は隱士の野服也、言ろは李白嘗て玄宗に遇せられし時豪英拔群の氣象一時を傾しことを憶ふと也、注金鑾殿にて玄宗に見と白蓮池に召さるゝと一時の事に非ず自ら兩事也、白本傳云、玄宗召見金鑾殿、論當世事、奏頌一篇、帝賜食親爲調羹、有詔供奉翰林、又云、白嘗侍帝醉、使高力士脫鞾、力士素貴恥之、【巨靈—】、此一聯上句は太白が勢氣を云、下句は太白が器量を云、李白一時の勢は巨靈山を擘き開て河流を傾け竭すが如く其量の曠濶なること長鯨海水を吸盡して萬壑の水を貧乏ならしむるが如くなると也、【巨靈】、史記封禪書云、自華以西名山七名川四曰華山、注正義曰、括地志云、華山在華州華陰縣南八里、古文以爲敦物也、謂云華嶽本一山當河水過而行、河神巨靈手盪脚蹋開而爲兩、今脚跡在東首陽之下、手掌在華山、今呼爲仙掌、河流二山之間也、關山圖云、巨靈胡者偏得神仙道、能造山川出江河、○王涯太華仙掌辨云、昔河自積石出於西流、既越龍門遂弭、南馳者千數百里、折波左旋將走東溟、連山塞之壅不得去、有巨靈、於此乃力擘而剖其中、跖而北者爲首陽、絕而南者爲太華、自此泄其掌跡猶存、【如傾—】此一聯文章を作るの妙あることを云、天地の間萬物を化育する者は元氣也、李白は元氣を傾て胷腹の中に入れ納るが如し、文章を作るときは須臾の間に詞句艶麗百の媚をなし、陽春の和氣を挽回して筆下に生ずると也、【須臾】は少頃の間なり、楊升菴文集四十四云、儀禮聘禮速賓辭曰、寡君有不典之酒、請吾子與寡君須臾焉、注須更言不敢久、古者樂不踰辰、燕不移漏、故少頃之間皆稱須臾、須待也、左傳寡君須矣是也、臾字从申乙、乙屈也、如今人請客云恭候屈降之義也、今之所云俟屈古之所云須臾也、解字必宜如此方暢本原、○僧祇律云、二十念爲瞬、二十瞬名一彈指、二十彈指名一羅預、二十羅預名一須臾、一日一夜有三十須臾也、【百媚】白樂天長恨歌、回頭一笑百媚生、【讀書—】書を讀て萬卷の多を看破して其道理を識得すれば、筆を下して文章を作に及で、自然に妙にして神工あるが如なると云は杜子美が事也、

篇、杜詩李白一斗詩百篇、
【李白―】、此句梅聖兪が詩を引て李白が死を云也、言ろは李白采石に沉て死してより世間文章の高手なく江南の風月作者に不レ過して閑らに過ること已に許多の年を歷ると也、【縱有―】、即今縱ひ高亭と美酒とともに有とも何人か又一斗の酒を飲て百篇の詩を作ることと太白が如き者あらんや、注梅聖兪詩は前に見たり、【杜詩】は杜子美飲中八仙歌の句第十二卷に見たり、

主人定是金龜老、李白見二賀知章一、知章呼レ白爲二謫仙一、以二金龜一換レ酒、盡レ懽而罷、未レ到二亭中一名已好、紫蟹肥時晚稻香、黃鷄啄處秋風早、

此二聯思亭の主人を褒稱し盛膳を嘆美する也、【主人―】、此亭の主人は定て是金龜を把て酒に換し知章が如き風流の老なるべし、未だ亭上に到て其人を見ざるに其名聲を聞て已に好主人なることを知たると也、注李白が賀知章に見へし時知章金龜を以て酒に換てもてなしたること第二卷對レ酒憶二賀監一詩の下に見たり、【金龜】は官人の腰に佩る具也、事物紀原三曰、實錄曰三代以レ韋爲レ之、謂二之算袋一、魏易レ之爲レ龜、唐高祖給二隨身魚一、三品以上其飾金、五品以上其飾銀、故名二魚袋一、天后改爲レ龜、【紫蟹―】、事文類聚後集蟹部云、越王勾踐召二范蠡一曰、吾與レ子謀レ吳、子曰、未レ可也、今其稻蟹不レ遺レ種、其可乎、注蟹食レ稻、李太白南陵叙別詩云、黃鷄啄レ黍秋正肥、蟹は稻を食て味美也、故に云紫甲蟹肥て美なるとき晚稻も香く熟すると也、鷄は秋に入て新穀を啄て後肥て味美也、故に云黃鷄啄む處秋風早く起て穀粒を飡ふに因て味美なりと也、

我憶金鑾殿上人、醉着宮袍烏角巾、天寶中召二李白一見二金鑾殿一、帝與二妃子一泛二白蓮池一、召レ白賦レ詩、白已醉、命二力士一扶以登レ舟、解二宮袍一以賜レ之、巨靈擘山洪河竭、長鯨吸海萬壑貧、如レ傾二元氣一入二胸腹一、須臾百媚生二陽春一、讀レ書不二必破一萬卷一、筆

清渭東流劍閣深、去住彼此無消息、人生有憶涙沾臆、（音乙）江水江花豈終極、黄昏胡騎塵滿城、欲往城南忘南北、（欲往城南、省家、忘南而走北也、【忘】音望、）

【清渭―】、集注清渭在西安府城中、劍閣在四川保寧府劍州、【清渭】は渭水也、涇は濁り渭は清し故に清渭と云、【劍閣】、大明一統志、劍閣在劍州北三十里、兩岸峻拔聳石架閣而爲棧道、連山絶險故謂之劍閣、劍閣は蜀道の棧道也、【深】は險の意也、言ろは玄宗祿山が亂を避て渭水を過ぎ劍閣の深險を經て蜀に入玉ひしより、胡賊天下を擾亂し去住彼此の間曾て消息を聞くことも隔絶するとなり、去は玄宗蜀に幸するを云、住は長安に居者を云也、蜀と長安との間梗り隔て不通を云、集注に去は玄宗を云、住は貴妃を指すと云は甚誤也、【人生―】、有憶本集作有情、人生死石に非ず皆有情、古を思ひ亂を傷み涙臆を沾すこと無ことを得んや、此江水を望み江花を見ときは感慨の情豈終極ことあらんや、【黄昏―】、胡騎は安祿山史思明が輩を云、黄昏の時胡騎縱橫し汗馬の塵京城に滿て紛亂す我れ城南に往んと欲すれども恍惚として鄉ふところを不知と也、注【省家】、省は俗にみまふと云義也、省悟の省に非ず、

○燕思亭

思亭の所在未考、想ふに唐の李白曾て遊で題咏せし所か、此詩全篇の意は李白已に死てより文章繼ぐ人なくして風月賦することあらず、閑に年を經此亭の主人定て是知章が如き風流の人なれども客李白に非を奈何んせん、只是狂吟の客なれば小兒をして拍手嘲らしむるにてあらんと云意を云へり、

馬子才

萬姓統譜、宋人馬存字子才、善屬文、有豪氣、觀浩齋歌等作可見、

李白騎鯨飛上天、（梅聖俞采石月詩、采石月下訪謫仙、夜披錦袍坐釣船、醉中愛月江底懸、便當騎鯨上青天、）江南風月閑多年、縱有高亭與美酒、何人一斗詩百

に全盛なりしと也、【昭陽殿】は漢の未央宮に在る殿の名也、成帝の皇后の趙飛燕が所居也、第一の人と云は即趙飛燕也、これを借て楊貴妃を指云也、後宮第一の美人貴妃輦を同君の幸に隨て常に君の側に侍りしと也、【才人】、事物紀原、南史曰晉武帝采漢魏之制三夫人外有三人、又云、晉武所置而通典內命職漢有才人則疑漢置、○集注、才人唐制、皇后之下有九夫人九嬪婕好九人美人九人才人七人、帶弓箭、晉宣帝出獵長春苑、輦前才人皆帶畫弓白羽箭、玄宗亦然、黃金勒勒馬銜外鐵、明皇時上幸華淸宮、貴妃姊妹各騎名馬以黃金爲銜勒、言は玄宗御遊の時は輦前に從ひし才人弓箭を帶て白馬に黃金の勒を嚼せて騎り鳥を見ては身を翻し天に向て仰て雲中を射れば一箭にて雙ひ飛ぶ翼をつなぎに射て墜したると也、【明眸―】、集注云、明眸言眼之黑白分也、皓齒言齒之白也、指貴妃之美也、眸は目の瞳子也、目中すゞしく黑白の分明なるを明眸と云、常に天子に隨侍したりし貴妃が明眸皓齒の美貌も今安んかあるや玄宗蜀に幸の時馬嵬に於て殺され兵刃の下に血を汚して遊魂竟に歸ことを不得往事を思へば今其迹だになくなりたると云意也、

注【上皇】は玄宗をさす、肅宗靈武にて帝位に即かせられてより玄宗を上皇と稱する也、史記六秦始皇本紀、追尊莊襄王爲太上皇、注漢高祖尊父曰太上皇亦放此也、【次】、やどる也、字彙云、左傳凡行師再宿爲信、過信爲次、【馬嵬驛】、在西安府興平縣西、○通鑑綱目云、帝出奔蜀、哥舒翰麾下來告急、上召宰相謀之、楊國忠首唱幸蜀之策、上然之、乃命龍武大將軍陳玄禮整比六軍、厚賜錢帛、選閑廐馬九萬餘匹、黎明上獨與貴妃姊妹皇子妃主皇孫及親近宦官宮人出延秋門、上至馬嵬驛將士飢疲、皆憤怒、陳玄禮曰、禍由楊國忠、欲誅之、會吐蕃使者二十餘人遮國忠馬訴以無食、國忠未及對軍士呼曰、國忠與胡虜謀反、追殺之以鎗揭其首、上杖屨出驛門慰勞軍士令收隊、軍士不應上使高力士問之、玄禮對曰、國忠謀反、貴妃不宜供奉、願陛下割恩正法、上曰、貴妃居深宮安知國忠謀反、力士曰、貴妃誠無罪、然將士已殺國忠而貴妃在陛下左右、豈敢自安、願陛下審思之、將士安則陛下安矣、上乃命力士引貴妃于佛堂縊殺之、輿屍寘驛庭、召玄禮等入視之、於是始整部伍爲行計、

江曲、（京兆朱雀街東龍華寺南有二流水一屈曲、謂二之曲江一、）江頭宮殿鎖二千門一、細柳新蒲爲レ誰緑、

【少陵】、即杜陵也、野老は杜子美自ら謂へる也、杜子美は杜陵の人也、故に自ら少陵の野老と稱する也、【呑聲】、梁昭明太子擬古詩、憶レ人不レ忍語、含レ恨獨呑レ聲、聲を不レ出して咽びて哭する也、悲の甚也、春日の時賊中を逃て身をひそめて此曲江の曲を經行すると也、此起句倒裝の句法也、少陵の野老聲を呑て哭するは何故ぞ春日潜に曲江に過て荒涼のありさまを見るに因てなりと下の句にて上の句をことわりたる也、【曲江】、集注云、曲江在二長安龍華寺南一、有二流水屈曲一、謂二之曲江一、在二秦時一爲二宜春苑一、漢時爲二樂遊苑一、唐玄宗開元中引レ水環、植二花木一、爲二京師勝賞之地一、注【京兆】、長安城中也、三輔黃圖卷一云、京兆在二長安城南尙冠里一、三輔者謂二主爵中尉及左右內史一、漢武帝改曰二京兆尹左馮翊右扶風一、共治二長安城中一、是爲二三輔一、【江頭―】、司馬溫公曰、唐曲江開元天寶中旁有二殿宇一、安史亂後其地盡廢、文宗覽二子美詩云一、江頭宮殿鎖二千門一、細柳新蒲爲レ誰綠上、因建二紫雲樓落霞亭一、歲時賜レ宴、又詔二有司一於二兩岸一建二亭館一、言曲江の頭には宮殿人なくして空く千門を鎖せり、細條の柳新に生ずる蒲今誰が爲にか依レ舊綠なるや賞覽する人もなく荒涼たるありさま也、

憶昔霓旌下二南苑一、（南苑即芙蓉苑、）苑中萬物生二顏色一、昭陽殿裏第一人、（謂二楊妃一、）同レ輦隨レ君侍二君側一、輦前才人帶二弓箭一、白馬嚼二嚙黃金勒一、翻レ身向レ天仰射レ雲、一箭正墜雙飛翼、明眸皓齒今何在、血汚遊魂歸不レ得、（謂上皇車駕次二馬嵬一、大軍不レ發、賜二貴妃死一、明眸皓齒今安在哉、）

【憶昔―】、集注云、霓旌天子之旂、羽毛染二五色一似二雲霓之氣一、霓屈虹也、南苑曲江坊南有二南苑一、昭陽漢殿名、李白詩、漢宮誰第一、飛燕在二昭陽一、以二漢之趙飛燕一比二唐之楊貴妃一、言ろは憶ふに昔太平の時天子御遊の爲霓旌を樹させて南苑に幸ありし日は繁榮云ふばかりなく、苑中の萬物時に遇ふことを得て殊に顏色を生じ固

【玉堂學士】、翰林學士也、蘇易簡字大簡、宋淳和中拜翰林學士、上飛白書玉堂之署四字賜之曰、美卿居清華之地也、【劉向】、前漢書列傳六、劉向字子政、本名更生、年十二以父德任爲輦郎、既冠擢諫大夫、是時宣帝招選名儒俊材置左右、更生以通達能屬文進對、講論五經於石渠、元帝時爲散騎宗正給事中、成帝時遷光祿大夫、詔向領校中五經秘書、作洪範五行傳、卒年七十二、【禁直】、文選三十直中書省詩注銑曰司直謂宿於禁中以備非常、禁中にとのゐして宿するを云、【岧嶢】、字彙山高貌、九天禁中を指て云、淮南子に九天は皞天陽天赤天朱天成天幽天玄天變天鈞天言ろは翰林に置るゝ學士は皆名儒俊材の人今の世の劉向なり、常に岧嶢と高き九重の上に昇て禁中に直宿せるとなり、【不須―】、對此は眞人を指て云、今翰林の學士は眞人に對することを待て心神を融會する輩には非ざれども會ゝ時に青藜をついて夜相訪て閣上の校書をも照されよと也、注劉向が本傳を按ずるに無此事、三輔黄圖天祿閣の下に載、老父扣閣而進、今此に附錄す、黄圖卷六云、天祿閣藏典籍之所、漢宮殿疏云、天祿麒麟閣蕭何造以藏秘書處賢才也、劉向於成帝之末校書天祿閣、專精覃思、夜有老人著黄衣植青藜杖叩閣而進、見向暗中獨坐誦書、老父乃吹杖端煙然、因以見向授五行洪範之文、恐詞說繁廣忘之、乃裂裳及紳以記其言、至曙而去、請問姓名、云我是太乙之精、天帝聞卯金之子有博學者下而觀焉、乃出懷中竹牒、有天文地圖之書、曰、余略授子焉、至子歆從授其術、向亦不悟此人焉、

○哀江頭　是年初復東京、公潛行曲江有感而賦

本集三載之、題注夢弼曰、曲江爲京都勝賞之地、遭祿山焚刧之後荒涼、公故有感也、○草堂九云、至德二載丁酉(杜四十六)在賊中所作、杜子美祿山が亂に賊中に陷て後幸に逃れ歸て曲江を經過する當時勝賞の地悉く荒廢することを傷て感槩して此詩を作れり、曲江の頭を哀の意也、注【是年】は肅宗の至德二載を指て云、【復】は祿山に陷れられたるを官軍の方へ克ち復したる也、【東京】は洛陽也、

杜子美

少陵野老呑聲哭、春日潛行曲

中竟何所有、乾祐曰、隨我手看之、月規半圓瓊樓玉宇滿焉、と云ときは月を指て玉宇とも云べきか、

中流蕩漾翠綃舞、穩如龍驤萬斛舉、不是峯頭十丈花、世間那得葉如許、（韓古意、太華峯頭玉井蓮開花十丈、藕如船、）

【蕩漾】、增韻浮游貌、波にまかせてゆら〳〵とたゞよふ貌也、【翠綃】、字彙綃音宵、生絲繒也、所乘の蓮葉翠色清鮮なること翠に染たる綃の如くにて水上に悠揚する也、【穩如―】、【龍驤】、前漢書班氏叙傳下、雲起龍襄、化爲侯王、注襄擧也、○古文大全云、龍驤晉王濬爲龍驤將軍、月造大艦以伐吳、言は蓮舟大にして穩なること晉の龍驤將軍が造りし萬斛の船浪を凌て擧るが如くなると也、王濬が大艦を造ることは事文類聚舟の部に見たり、【不是―】、眞人所乘の蓮葉如此大なるは定て是太華峯頭の玉井に生じて十丈の花を開く所の荷葉なるべし、若しからずは世間那ぞ葉の大なること如此蓮あることを得んやと也、［注］韓退之古意詩第六卷の尾に見えたり、

龍眠畫手老入神、（李伯時自號龍眠居士、）尺素幻出眞天人、恍然坐我水仙府、蒼烟萬頃波粼粼、

【龍眠】、氏族大全、李公麟字伯時、宋元祐中登第、工草書圖畫、時比顧陸、元符中歸老肆意泉石間、作龍眠山莊圖、自號龍眠居士、畫手の妙老て愈〻神に入て一尺の素絹の上に於て幻に眞人を畫き出されたる也、【恍然】、增韻恍惚不分明也、ほるゝと訓ず、をぼめきたる貌也、言はまのあたり眞人の像に對すれば恍然として我も共に水仙の府に坐蒼烟縹緲として萬頃の波粼々たる處に在るの思ひあると也、【粼々】、韻會水生厓石間粼々也、詩唐風揚之水篇、白石粼々、

玉堂學士今劉向、禁直岧嶢九天上、不須對此融心神、會植青藜夜相訪、（劉向校書天祿閣、夜有老父手植青藜杖扣閣而進、乃吹杖端、烟光照見向在暗中、讀書、曰我太乙之精、）

爽、以蔭調太原府參軍事、累遷殿中侍御史、從玄宗入蜀、擢諫議大夫、至德初赴肅宗行在、久之遷東川節度使、上皇合劍南爲一道、擢武成都尹劍南節度使、還拜京兆尹、復節度劍南、武在蜀頗放肆用度無藝、最厚杜甫、然欲殺甫數矣、永泰初卒、年四十、

○題太乙眞人蓮葉圖

胡苕溪曰、李伯時畫太乙眞人臥一大蓮中手執書一卷仰讀、蕭然有物外之思、子蒼題詩其上、語意絕妙、眞能詠盡此畫、【太乙】、前漢書郊祀志上云、武帝時亳人謬忌奏祠泰一方曰、天神貴者泰一、泰一佐曰五帝、古者天子以春秋祭泰一東南郊、日一太牢七日、爲壇開八通之鬼道、於是天子令太祝立其祠長安城東南郊、常奉祠如忌方、又曰、作甘泉宮中爲臺室畫天地泰一諸鬼神、○古文大全云、漢元狩中東南守臣言、每見有異人乘大葉如舟汎水上臥而觀書、邑人聚觀異人不見、惟蓮葉及書有焉、皆古篆文、問遍莫能識、惟東方朔識之曰、此天神太乙之秘書也、太乙所見其國太平、遂衍其文以傳於世、今五福數學之書也、太乙之星十六、其一曰五福、即太乙之主星也、○輔按漢史郊祠志五行志及東方朔傳並不載此事、不知大全有何所本而引證乎、

韓子蒼

氏族大全云、韓駒字子蒼、自布衣時有詩名、著詩法名陵陽正法眼、呂居仁列爲江西詩派法嗣、宋政和初召除正字、終徽猷待制、

太乙眞人蓮葉舟、脫巾露髮寒颼々、輕風爲帆浪爲檝、臥看玉宇浮中流、

【太乙―】、太乙眞人蓮葉の舟に乘る、其形巾を脫し髮を露してつゝまず氣象清寒にして颼々たるとなり、【颼】、字彙颼音搜、颼々風聲、颼同颼、【輕風―】、本より蓮葉なれば帆檝を不具輕風を帆としてゆく所にまかせ浪を檝として漂すに任て舟を縱にす、【臥看―】、玉宇大全作玉字、指所觀書、臥ながら手中の書を看て中流に浮遊する也、字のまゝに讀まば玉宇は晴天を指て云、又神仙拾遺翟乾祐與十許人翫月、或問月

靑蓋、（蜀先主舍東南有一木、童々如車蓋、）野客頻留懼雪霜、行人不過聽竽籟、

四句柟木を惜む也、【滄波―】、惜哉滄波に倚て年を歴ること久き老樹は我が性の素より愛せし所なり、浦上より遙に望めば童々と獨立て一箇の靑蓋を樹たるが如く見えし者をと也、【童々】、字彙童獨也、【靑蓋】、後漢書二十九輿服志、皇太子皇子皆安車朱輪靑蓋、皇子爲王錫以乘之、故曰王靑蓋車、蓋は車上にたつるきぬがさ也、注【蜀先主】は蜀の劉備也、蜀志先主姓劉、諱備、字玄德、涿郡人、景帝子中山靖王之後也、身長七尺五寸、垂手下膝、建安二十四年有漢中、自稱漢中王、漢帝已遇害、於是漢中王發喪制服、漢中王卽帝位武擔之南、改元章武、三年夏薨于永安宮、時年六十三矣、【野客―】、野客は頻に此木の陰に留て雪霜を避け行人も過不得して駐て此樹の風聲竽籟を奏するが如きを聽たると也、【竽】、事文類聚續集二十三云、竽管三十六宮在右、【籟】、集注籟三孔籥、又凡孔竅機括皆曰籟、本集趙注曰、宋玉高唐賦纖條悲鳴聲似竽籟、言其聲之鼓動如之、

虎倒龍顚委榛棘、淚痕血點垂胸臆、我有新詩何處吟、艸堂自此無顏色、（楩柟杞梓天下之良材、柟樹爲風雨所拔、喩嚴武之死、如虎倒龍顚、使艸堂無所棲託、故歎云、自此無顏色也、）

【虎倒―】、柟木の倒る貌を云、蒼然たる古幹風の爲に拔れて龍虎の顚倒せし如く地にたをれて榛棘の裏に委棄す誠に可哀此を見て哭泣し淚痕血となりて胷臆に垂れ濡ふと也、【榛】、字彙叢生貌、【棘】、如棗多刺、木堅色赤叢生、むばら也、【我有―】、我平生柟木の陰に憇ふて詩を咏吟す此木を失ふときは我たとひ新詩ありとも何處に於てか吟哦せんや、柟木たをれてより草堂の美觀頓に盡て何の景趣もなく顏色も無きていになりたると也、注師注也、楩柟杞梓の類は天下の良材也これを以て嚴武の奇材に比す、杜子美の蜀に滯留せらるゝは嚴武の蔭に賴也、今嚴武死せるときは虎の倒れ龍の顚るが如し、杜子美依賴を失て艸堂託くところなし、故に柟木に比して嚴武の死を嘆ずると也、【嚴武】、新唐書列傳五十四、嚴武字季鷹、幼豪

非爲武也、舊注爲比嘆息武者非也、○千家鶴注曰、柟木在成都草堂之前、而師以虎倒龍顚喩嚴武之死、則是詩作於永泰元年五月、蓋武以其年四月死、按史、永泰元年三月大風拔木、而此詩云、五月彷彿聞寒蟬、東南飄風動地至、又非三月爲風所拔、師之說或是、【柟木】、爾雅梅柟子似杏而酸、郭璞曰、柟葉似桑、○杜詩集注七枯柟詩注云、柟與楠同、楩柟皆美木、葉如牛耳、子似杏而酸、不可食、蜀中多有之、

杜子美

倚江柟樹艸堂前、故老相傳二百年、誅茅卜居總爲此、五月髣髴聞寒蟬、

【倚江—】、江のほとりに依て生ずる柟木は即ち我が艸堂の前にあり、故老の人相傳て云ふは植てより以來二百年の久を歷ると也、【誅茅—】、我れ茅を誅て盧を結び此處に居を卜することは此樹の枝葉茂して多く陰を愛するが爲也、毎に五月のころは葉茂して風を含み髣髴として寒蟬の鳴く聲を聞くが如くありしと也、【卜居】、本出楚辭、居るべき處を擇て吉凶を卜ふを卜居と云、即住居の意也、【髣髴】、說文若似也、廣韻髣髴見不審貌、【寒蟬】、禮記月令、孟秋之月涼風至白露降寒蟬鳴、

東南飄風動地至、江翻石走流雲氣、幹排雷雨猶力爭、根斷泉源豈天意、

【飄風】、爾雅迴風曰飄、楚辭一、飄風屯其相離兮、注飄風回風也、集注漢文四年、大風起東南江浪翻飛沙驚石走、言は東南の方より飄風地を動して起り來に遇て江波も翻騰し沙石も揚走て狂雲空に流れ飛で天色甚たすさまじき也、【幹排—】、此時當て林木多く折れとも柟木は古幹剛强にて猶能く雷雨を排斥し力爭ふて折れずと云へども、奈何んがせん根柢地中に斷て終に拔き倒さる豈是天意の所致に非らんやと也、泉源は地中と云意也、

滄波老樹性所愛、浦上童々一

白兎搗藥秋復春、傅玄擬天問、月中何有、白兎搗藥、〔搗〕音倒、姮娥孤棲與誰鄰、張衡靈憲、羿得不死之藥於西王母、嫦娥竊之以奔月、將往救筮之於有黃、有黃占之曰吉、翩翩歸妹、獨將西行、逢天晦芒、毋驚毋恐、後且大昌、嫦娥遂託身於月、今人不見古時月、今月曾經照古人、

【白兎—】、聞く月中には白兎あつて藥を搗くと、幾許の秋復春を歷て尙藥を搗くや、又聞く姮娥嘗藥を竊て日中に奔り入て孤り棲むと、不知今誰とか鄰をなすやと也、注【傅玄】、排韻、傅玄字休奕、晉武帝朝爲司隸挍尉、每有奏劾、或値日暮、捧白簡、整簪帶、竦踊不寐、坐而待旦、【擬天問】は楚辭に天問の篇あり、傅玄又楚辭に擬して天問を作る也、故に擬天問と云、【張衡】、後漢書列傳四十九、張衡字平子、南陽西鄂人也、衡少善屬文、遊三輔、因入京師、觀大學、遂通五經、貫六藝、尤致思於天文陰陽曆算、作渾天儀、著靈憲算罔論、言甚詳明、順帝初再轉爲太史令、【靈憲】は張衡が所著の書名也、【羿】、有窮后也、夏の時の諸侯也、此事本見淮南子、【西王母】、傅前に見たり、【有黃】、未詳、【嫦娥遂—】、翩々以下五句は易の歸妹卦の繇の辭也、有黃が占し如く嫦娥西に行て遂に身を月中に託せしと也、【今人—】、今の人は古照せし月を見に及ざれども今の月は已に古來幾許の人をか照すことを經しやど也、

古人今人若流水、如流水之逝去無可復、共看明月皆如此、惟願當歌對酒時、月光長照金樽裏、

【古人—】、古へ月を見し人既に逝去は今見る人も亦竟に逝くべし、古今の人逝て不住と流水の如くなれば古今共に月を看るの情皆如此なるべし、【惟願當—】、明月昔に替らねども見る人屢〻改ときは人の世に於ること幾許ぞや惟願は相倶に歌て酒に對するとき月光長へに我が金樽の裏を照して幽賞をして已ことなからしめんことをと也、

○柟木爲風雨所拔歎

全集十二載之、集注五載之、題注柟木在成都艸堂之前、按史風雨在永泰元年三月辛亥、柟木當是此時所拔、嚴武乃於是年五月方卒、此詩公自嘆柟木耳、

とを知る、古尚しかり今の功父は古の太白が後身なることと又奚ぞ疑んやと云也、羊祜を引て證とする也、【康莊】、爾雅釋宮云、五達謂之康、六達謂之莊、䟽云、康樂也、交會樂道也、莊盛也、道煩盛三道交出、【羊祜】、晉書列傳四、羊祜字叔子、泰山南城人、世吏二千石、至祜九世並以清德聞、祜年五歲時令乳母取所弄金環、乳母云云○漁隱曰、李白從永王璘之辟、璘敗當誅、郭子儀請解官以贖其罪、有詔長流夜郎、聖俞用事尤爲親切、若非郭姓亦難用矣、

○把酒問月 李白氣豪、而文亦豪、

本集二十載之、自注云、故人賈淳令予問之、注李白が氣宇豪放なるに因て作れる文章に發する所亦豪誕也、鍾伯敬曰、誕得妙、

李太白

青天有月來幾時、我今停盃一問之、人攀明月不可得、月行却與人相隨、

【青天―】、天上に始て月と云者を生じ出してより以來今日に至るまで凡そ幾く日至を歷しや、我今盃を停て試に一たび問ふと也、高空の月に向て事を問ふ、放誕の極人の不言ところを言ふ、故に妙也、【人攀―】、此れ又問也、人は明月の在處に攀ち昇ることを得ざるに月は却て人の行に相隨て人疾く走れは月も疾く行て隨ふが如く人徐に歩すれば月も遲く行が如し、如何して如此なるやと也、

皎如飛鏡臨丹闕、綠煙滅盡清輝發、但見宵從海上來、寧知曉向雲間沒、

【皎如―】、此一聯月の始て出る光景を云、月の將出とき先づ光芒を發して漸く海嶠を離る、皎たること飛鏡の丹飾の門闕に臨むが如し、暮かたに起ち罩たる綠烟も月の出るに隨て稍ゝ滅へ盡るときは清輝始て滿天に發しかゞやくと也、【但見―】、但如此宵ごとに海上より出來るを見のみ、寧ろ曉に及で雲間に向て沒するの後を知んや、此亦如何ぞやと也、

齊宣城太守謝朓築室于山南、遺趾猶存、絶頂有謝公池、唐天寶間改爲謝公山、謝朓詩還望青山郭、即是也、【有家】、家字疑は冢字ならんか、言ろは青山有冢人識に相傳て李白を葬るの處と云然れども神魂は却て人間に來り住すること已に幾く年と云ことを知らずと也、

在昔孰識汾陽王、納官貰死義難忘、白客并州、識汾陽王郭子儀於行伍間、爲脫其刑責而奬重之、及白坐永王之事、子儀功成、請以官爵贖白罪、因而免誅、今觀郭裔奇俊郎、眉目眞似攻文章、死生往復猶康莊、樹穴探環知姓羊、羊祜年五歲令乳母取所弄金環、乳母曰、汝先無此物、祜即詣鄰人李氏東垣桑木中探得之、主人驚曰、此吾亡兒所失物也、乳母具言之、知李氏子則祜前身也、

後六句陽韻を押す、【在昔―】、昔し李白交遊の中孰か最相識れるや即是汾陽王郭子儀也、初め李白郭子儀が厄を救て脱せしむ、後又子儀太白が爲に我か官を納れ還して庶人となり白が死を貰んと請ふに因て白誅を免れたり、其交儀の厚き終に忘れ難きことならんと也、【汾陽王】、新唐書列傳六十二、郭子儀字は子儀華州鄭人、長七尺二寸、以武舉異等、天寶八歳累遷安北都護府使、兼九原大守、十四載祿山反、詔子儀爲衞尉卿靈武郡大守、充朔方節度使、歷仕玄肅代德四朝、平安史之亂、功居人臣第一、封汾陽郡王、以身爲天下安危者二十年、建中二年薨、年八十五、贈太師、陪葬建陵、注【識汾―】、白が子儀を救しは子儀未達の時也、此に汾陽王と云は後より追て稱するなり、初め太白子儀を行伍兵卒の間に見て奇之死罪を救て刑罰の責を免れしめて又奇材を奬重せし也、永王已に前に詳なり、白が罪誅に當せしを子儀が請に因て死罪を宥て夜郎に流されし也、【今觀―】、【裔】、字彙冑也、來裔後嗣也、苗裔種類也、郭裔は郭氏の後裔子孫也、太白が於子儀交儀の厚きこと幽明ともに忘れ難かるべし、今郭氏の子孫に奇俊の郎功父が如きを生ずるは是太白が再び來て郭氏の裔となれるなるべし其眉目の秀清眞に太白が文章を攻くに似たると也、【死生―】、もとより死生循環して往つ復りつすることは猶康莊の道を來往するが如し、桑樹の中に環を探り得を見ては隣の李氏の兒は今姓を羊とする家に生るゝこ

馬、別是風流賢主人、我且爲君槌碎黄鶴樓、君亦爲吾倒卻鸚鵡洲、赤壁爭雄如夢裡、且須歌舞寬離憂、

○採石月贈郭功甫　此詩謂郭功甫爲李白後身

【採石】大明一統志卷之十五、太平府采石山在府城北二十五里牛渚北、昔人於此取石因名、臨江有磯曰采石、唐李白嘗乘月與崔宗之自采石至金陵、著宮錦袍坐舟中、即此、【郭功甫】東都事略文藝傳九十八、郭祥正字功父、當塗人也、其母夢李白而生、祥正少有詩名、梅堯臣曰、天才如此眞太白後身也、王安石亦歎美其詩、此詩採石の月を見に因て李白を憶ひ又今の功甫を觀に天才眞に太白が風あるときは李白が後身今尚在ことを思て此詩を作て功甫に贈也、汪後身佛氏の再來の意と同、

梅聖俞

氏族大全云、梅堯臣字聖俞、以詩名、張芸叟評之曰、聖俞詩如深山道人草衣木食王公大人見之不覺屈膝、宋慶曆中爲郎官、

採石月下訪謫仙、夜披錦袍坐釣船、醉中愛月江底懸、以手弄月身翻然、不應暴落飢蛟涎、便當騎鯨上青天、青山有冢人謾傳、卻來人間知幾年、

以上八句毎句韻を押す、即是栢梁體也、【採石—】採石に月の明なる時李謫仙が遺跡を訪ひ弔ふ也、此所こそ昔太白夜錦袍を披て釣船の中に坐せし處と也、白嘗乘舟與崔宗之自采石至金陵、著宮錦袍坐傍若無人、【醉中—】白醉中月色の明輝を愛して江底はるかに深き處へ舟を移し手を以て水面にうつりたる月影を弄るとて誤て身を失して翻然と水中に沈し也、此事本傳年譜等に不載、只才子傳に所謂に據るべし、白晩節好黄老、度牛渚磯乘酒捉月沈水中、【不應—】言は李白は本謫仙人なれば縱ひ水中に沒するとも暴に飢蛟の涎を流して食を待つ口に落て腹の中には葬らるべからず便ち當に鯨に騎て青天に上昇すべき人なると也、【青山—】才子傳云、白初悅謝家青山、今墓在焉、謝公の青山は在當塗縣三十里、寰宇記

帝遊宴後庭、始用宦者典事尚書、謂之中書謁者、置令僕射、司馬遷被腐刑之後爲中書令、即其任也、唐武德初爲内史省、龍朔二年改令爲右相、唐六典云、掌軍國之政令、緝熙帝載、統和天人、入則告之、出則奉之以釐萬邦、以度百揆也、仗南は兵衞の儀仗を列する所の南を指す、【絳】は赤也、

○醉後答丁十八以詩譏予槌碎黃鶴樓

本集十九載之、丁氏の名字未詳、故に譏て贈し詩も無可考、李白醉に乘じて實に黃鶴樓を槌碎したることあつて譏たるか、或は贈韋南陵詩我且爲君槌碎黃鶴樓、君亦爲我倒却鸚鵡洲と云句を詰て譏たるか、今考へ知がたし、此詩全篇意思不分明解し不得こと多し、故に强て說を不作、姑く闕之以待後學者而已、

李太白

黃鶴高樓已槌碎、（公贈韋南陵詩、我且爲君槌碎黃鶴樓、）黃鶴仙人無所依、黃鶴上天訴上帝、却放黃鶴江南歸、神明太守再雕飾、新圖粉壁還芳菲、一州笑我爲狂客、少年往往來相譏、君平簾下誰家子、云是遼東丁令威、（續搜神記、遼東城門有華表柱、白鶴集其上、言詩云、有鳥有鳥丁令威、去家千載今來歸、城郭如故人民非、何不學仙冢纍々、）作詩悼我驚逸興、白雲遶筆牕前飛、待取明朝酒醒罷、與君爛熳尋春輝、

上帝本集作玉帝、悼我作調我、本集注齊賢曰、漢書嚴君平賣卜於成都市、日閲數人、得百錢足自養、則閉肆下簾而授老子、士贇曰、漢書黃霸爲潁川太守、吏民咸稱神明、莊子曰、大德不同而性命爛熳矣、【注】贈韋南陵詩本集十一載、江夏贈韋南陵氷詩長篇一首、其畧云、愁來飲酒二千石、寒灰重暖生陽春、山公醉後能騎

し歌舞を玩て玳瑁の筵上に淹留して樂を極めしと也、【麒麟殿】、三輔黃圖三云、未央宮有麒麟殿、漢書哀帝燕董賢父子於麒麟殿、注【選詩】、謝玄暉鼓吹曲の句也、前に見たり、【淹留】、劉安招隱賦曰、攀援桂枝兮聊淹留、【與君―】、此二句紙韻の字を押す、昔日の遨遊眞に樂し當時常に與君自謂て言ふ如此長へに同く交歡すべしと、其日に於て寧ろ一旦艸木動搖して亂賊の風塵起るべきことを知んやいつまでも太平ならん思ひをのみ爲たると云意也、

函谷忽驚胡馬來、秦宮桃李向誰開、我愁遠謫夜郎去、何日金雞放赦回、

唐中書令放赦日直金鷄於仗南、竿長七丈鷄首銜絳幡七尺、以放赦、

此一節灰韻の字を押す、【函谷】、大明一統志三十六、河南府函谷關在靈寶縣南一十里、【胡馬】は安祿山を指す、此句は天寶の末安祿山叛逆して胡賊亂擾し函谷の險を踰來て兩京を陷るを云也、【秦宮】は猶唐宮と云が如し、桃李は即起句に所謂花柳也、言は安祿山叛してより胡賊の亂擾を歷て唐室敗亡して丘墟となれり、向に盃酒を同くせし所の五侯七貴も今安んか在や宮裡の桃李賞する人なし縱ひ依舊花を著とも今誰に向て開やと也、【向誰開】、本集作向明開、注士贇曰、太白詩意是指同時儕類如辛判官之輩、因兵興之際不次被用、爲人桃李向明者向陽花木之義也、輔按、此集に向誰となすに從ふも可也、桃李を人に比す、美稱に非ず、桃李は自ら桃李となして賞する人なきことを云の句と看は稍勝んか、【我愁―】、我今累に坐せられて遠く夜郎の地に謫せらる不知何の日か金鷄を樹て放赦を行れる時に遇てゆるされ回て再び交歡をなすべきやと也、【金鷄】、楊文公談苑曰、杜鎬曰金鷄肆赦不知起於何代、關東風俗傳曰、宋孝王問司馬膺之後魏北齊赦日立金鷄事、膺之曰、按海中星占云、天鷄星動爲有赦、蓋王者以天鷄爲度、隋書刑法志、北齊赦日令武庫設金鷄及鼓於閶門右、撾鼓千聲、宣赦建金鷄、或云、起於西涼呂光、未知孰是、究其旨蓋西方主兌、兌爲澤、鷄主巽神、巽主號令、故合二物置其形揭於長竿使衆覩之、唐百官志曰、中書令赦日立金鷄於仗南、有鷄黃金飾首、嘴銜絳幡、承以采盤、維以絳繩、注【中書令】、事文類聚新集五云、漢武

本集十一載之、【夜郎】、新唐書三十一、江南道沅州有夜郎縣、天寶元年更名峨山縣、辛氏名字本集注闕、【判官】、事物紀原六云、秦漢以來郡府之幕有掾史從事、逮於梁齊亦無判官、續事始曰、隋元藏機始爲過海使判官、此使府判官之始也、唐景雲之後有節察防團等使、亦各隨使置之、舊唐志云、皆天寶後置也、馮鑑乃云、開元後始有之、尙爲諸使官屬、

李太白

昔在長安醉花柳、五侯七貴同盃酒、氣岸遙凌豪士前、風流肯落他人後、

此一節有韻の字を押す、【昔在―】、昔日長安に在し時は花に傍ひ柳に隨て春色に沈醉し、五侯七貴のれきれきとも盃酒を同くして共俱に遨遊したると也、五侯七貴は共漢の事借て以て當時の貴戚を云、【五侯】、本集注云、漢河平二年六月成帝封諸舅王譚平阿侯、商成都侯、立紅陽侯、根曲陽侯、逢高平侯、五人同日封故世謂之五侯、【七貴】、本集注、西征賦窺七貴於漢庭、注謂呂霍上官趙丁傅王也、【氣岸―】、氣岸を高張て豪士の前をも意とせず遙に凌き歷て眼下に視しと也、其風流に於ては豈肯て人の後に落んや常に人に勝れたりと也、【氣岸】、本集注、南史張充與王儉書曰、實由氣岸疎凝情塗狷隔、【風流】、第二卷憶賀監詩注に詳に見たり、

夫子紅顏我少年、章臺走馬着金鞭、文章獻納麒麟殿、（杜詩麒麟前殿拜天子、選詩獻納雲臺表、）歌舞淹留玳瑁筵、與君自謂長如此、寧知艸動風塵起、

此一節先韻の字を押す、【夫子―】、夫子は尊て稱する也、論語蘧伯玉使人於孔子、孔子與之坐而問焉曰、夫子何爲、【紅顏】、壯年の人を云、鮑照詩、紅顏難長時易戢、【章臺】、前漢書列傳四十六張敞傳云、敞無威儀、時罷朝會過走馬章臺街、注孟康曰、在長安中、言は長安にて昔遊し時は夫子は紅顏の壯年なり我は尙少年にて共に章臺の街に馬を走らし金鞭を著て同く行遊せしと也、【文章―】、文章を作ては麒麟殿に獻納

氏、籍少時學書不成去、學劒又不成去、梁怒之、籍曰、書足記姓名而已、劒一人敵不足學、學萬人敵耳、【龍鍾—】、龍鍾は志を失て形容しほたれたる貌を云か字義不分明、倶に左方に載す、二千石は大守也、言は向の高尙の志遂にとぐることなく今龍鍾として大守の任を守り二千石の俸を受ることを忝す、これ何そ四方に遨遊するに如んや、杜子美は四方に遊歷して東西南北の人也、我れ如此なるときは杜子美に於て愧ること無らんやと云意也、【龍鍾】、埤蒼云、龍鍾行不進貌、○荀子云、隴種而退、注遺失也、杜詩輯注、引錢益謙詩箋云、龍鍾按荀子議兵篇、觸之者角摧、隴種東籠而退耳、注隴種遺失貌、如隴之種物然、或曰即鍾也、新序作隴鍾而退、龍鍾似即隴種語轉而然耳、○瑯琊代醉編三十七云、丹鉛錄龍鍾竹名、年老曰龍鍾、言如竹之枝葉搖曳不能禁持也、巵言云、龍鍾二字尙不得解、所謂南越志、羅浮竹每節一二丈曰龍鍾竹、爲喩抑何遠也、且竹名本自曰籠籦、余按、洞冥記陽關之外花牛津時得異石、長十丈高三丈、立於望仙宮、因名龍鍾石、則石亦名龍鍾、且無枝葉搖曳如老人之狀、又裴度未遇時過天津橋、二老人倚柱愕然曰、禁州未平、須得此人爲將、僕聞之告公、公曰、見我龍鍾故相戲耳、大抵相傳鄉語難以盡解、必强而解之誤也、蘇林演義、龍鍾不昌檝不翹首髮鬖鬆縣柢拾之類、黃朝英曰、古語有二聲合爲一字者、如不可爲叵何不爲盍、從西域二合之音切字之元也、龍鍾潦倒正如二合之音、龍鍾切癃字、潦倒切老字、老羸癃疾即以龍鍾潦倒目之者正此義也、湘素雜記、龍鍾爲字母、龍靈連癃潦倒爲字母、潦靈連老、此說與余言相傳鄉語難以盡解意相合而更有理、【二千石】、前漢書十九公卿百官表云、郡守秦官、掌治其郡、秩二千石、景帝中二年更名太守、師古曰、漢制三公號稱萬石、其俸月各三百五十斛穀、其稱中二千石者月各百八十斛、二千石者百二十斛、比二千石者百斛、【東西—】、禮記檀弓上云、孔子既得合葬於防曰、吾聞之古也墓而不墳、今丘也東西南北之人也、不可以弗識也、於是封之崇四尺、注云、孔子之父墓在防、故奉母喪以合葬、墓塋域也、封土爲壟曰墳、東西南北之人言其宦遊無定居也、識記也、

○流夜郎贈辛判官

【人日—】、人日は歳初也、因て詩を題して杜子美の居處草堂に寄せ贈也、年改り節至に因て懷を興し遥に故人杜子美を憐み且我が故郷を思想ふと也、【艸堂】、杜子美年譜、乾元二年公入蜀、裴冕爲成都尹、爲卜浣花溪草堂居之、【柳條—】、時春に至て柳條漸く黃芽を生して嫩き色を弄すれども不忍見是を以て懷を興すのたねとなれば也、梅花は枝に滿て開けどもこれに對して空く愁を結び腸を斷て曾て樂とせず、注に云ふ觸景は懷を興し物を視て思人に因て尋常心目を娛しむる所の物皆不忍見却て腸を斷て心を傷しむる也、

身在南藩無所預、心懷百憂復千慮、今年人日空相憶、明年人日知何處、

【身在—】、訓解注、南藩謂蜀也、言は我身蜀に在て藩となり政に與ることなし、然れども時世擾亂して萬方多難なるに因て心常に百千の憂慮を懷て歎き傷むとなり、【今年人—】、世亂れ時變じて官に居る者常の職なし、今年の人日我此處に在て空く相憶ふと云へども未知明年の人日又何の處に在てか値ふことを得んやと也、是今の所居明歲猶難謀の意也、

一臥東山三十春、謝安傳、高臥東山、安石不如天下蒼生何、**豈知書劍老風塵、**項籍傳、籍學書不成、曰書足記姓名而已、乃去學劍、學劍不成、曰劍一人敵不足學、學萬人敵、**龍鍾還忝二千石、愧爾東西南北人、**禮記、孔子既得合葬於防曰、吾聞之古也墓而不墳、丘也東西南北之人也、不可以弗識也、東西南北謂所居無常、

【一臥—】、二句言は我れ向に東山に臥て不出と三十年自ら高尚の志を抱けり、豈其れ今日書劍の小技を事として不得志時の多難に遇て亂賊風塵の間に身を老し朽はつべきと云ことを知んやと也、【臥東山】、注謝安傳已前見えたり、謝安が事を借て自ら嘗て高尚の志ありしことを云也、【書劍】、項籍が事を借て我が大に用らるゝことなく或は掌書記となり又武官となりて小職に在ことを云也、前漢書列傳一、項籍字羽、下相人、初起年二十四、家世楚將封於項、故姓項

酒を强て飮れよと勸也、【洞簫】、文選十七洞簫賦注善曰、如淳漢書注曰、洞簫簫之無底者、釋名曰、簫肅也、言其聲肅々然、大者二十三、管長三尺四寸、小者十六、管一名籟也、此句題注に所謂王氏の吹ける洞簫也、洞簫も吹罷て聲斷へ只月の明なるのみ也、宴も既に闌にして漸終んとす、故に月落て庭上暗く樽盡て酒盃の空しからんことを憂る也、【明朝―】、言は今宵幸に花月の美景に値ふ明朝若し地を吹卷くほどのあらき春風起りなは滿林の花を攪亂し盡すべし、然らば此景復た見ることを不得但綠葉の間に殘紅を栖しむるを見るのみならんと也、注韓文五雙鳥詩云、兩鳥各閉口、萬象銜口頭、春風卷地起、百鳥皆飄浮、兩鳥忽相逢、百日鳴不休、【飄浮】は鳥の聲盛發揚するを云也、

○人日寄杜二拾遺

唐詩訓載之、【人日】、正月七日也、事文類聚前集卷六云、東方朔占書歲後八日一日爲雞、二日爲犬、三日爲豕、四日爲羊、五日爲牛、六日爲馬、七日爲人、八日爲穀、其日晴主所生之物育、陰則災、【杜】、杜子美也、【拾遺】、事文類聚新集二十一、左右拾遺古無其官、漢汲黯願爲中郎署、是出入禁闕、補闕拾遺、文帝初立給事中劉向侍中金敬拾遺於左右、續漢書張衡爲侍中、從容諷議拾遺左右、唐武后垂拱中創立各二員、

高適

新唐書列傳六十八、高適字達夫、滄州渤海人、少落魄不治生事、客梁宋間、張九皐奇之、擧有道科、中第、調封丘尉、不得志去、祿山亂、召哥舒翰討賊、即拜適左拾遺、佐翰守潼關、天子西幸、適走間道及帝於河池、俄遷侍御史、擢諫議大夫、負氣敢言、權近側目、永王叛、肅宗召之、除揚州大都督府長史淮南節度使、而永王敗、李國輔惡其才、數短毀之、下除太子少詹事、未幾蜀亂、出爲蜀彭二州刺史、永泰元年卒、贈禮部尙書、諡曰忠、適尙節義、語王霸衮々不厭、年五十始爲詩、即工、以氣質自高、

人日題詩寄艸堂、遙憐故人思故鄕、
柳條弄色不忍見、梅花滿枝空斷腸、觸景興懷、覩物思人、

廣韻、織荊門也、【淹留】、楚辭九辨云、蹇淹留而無成、

○月夜與客飲酒杏花下

東坡詩集卷十載之、題注安國按先生詩話云、僕在徐州、王子立子敏皆館於予、蜀人張師厚來過、二王方年少吹洞簫飲酒杏花下、春の夜の月を賞して杏花の下にて酒を飲で此詩を作れる也、

蘇子瞻

杏花飛簾散餘春、明月入戸尋幽人、褰衣步月踏花影、炯如流水涵青蘋、花間置酒清香發、李白詩、花下一壺酒、獨酌無相親、爭挽長條落香雪、

【杏花―】、此一句は老杜が詩に一片花飛減却春の意也、春の餘は猶花あるを以て徵とす、杏花頻に落て簾外飛ときは春の色盡んとす故に餘春を散すと云、【明月―】、春夜の明月は意ありげに戶の內へさし入て幽人の居所を尋て照すと也、【褰衣―】、明月に尋ね照されて興を催し園に出で衣を褰げ月に乘じて步行し花影の地に印するを踏遍すると也、明月の庭上を照す中に花影の移る貌を見れば流水の潔きが青蘋を涵して鮮なるに似たると也、【花間―】、置酒は酒を設備る也、杏花の間に酒を置て酌は清き香氣發揚して興趣面白也、注李白が詩前に出たり、月下獨酌の詩也、此詩と意不同引用がたし、【爭挽―】、杏樹の長き條を動してふるひ落す也、杏花雪の飛如にて香氣ある故に香雪と云也、醉に乘じて枝を動し花を散らするなるべし、【置酒】、史記漢高祖本紀云、高祖置酒洛陽南宮、

山城薄酒不堪飲、勸君且吸杯中月、洞簫聲斷月明中、惟憂月落酒盃空、明朝卷地春風惡、韓詩、春風卷地起、百鳥皆飄浮、但見綠葉棲殘紅、

【山城―】、不堪飲とは酒のあしくして不可口を云、山城のことなれば薄酒味不好して飲には堪へねども只盃中に月の移るはよき興趣なり此月を吸ん爲に

書、劉混傳云、吾枕戈待旦、志梟叛逆、常恐祖生先我着鞭、注此二句には居所の樂を憶ふの意は無して遠く遊て功を立てんと欲の志あることを云也、

會稽愚婦輕買臣、余亦辭家西入秦、

朱買臣字翁子、嘗賣薪樵、行且誦書、妻羞之求去、其後買臣爲會稽太守、入界見故妻治道、命後車載之、〔會〕音膾、〔稽〕音圭、秦川、

【朱買臣】、傳見于前漢書列傳三十四、買臣初家貧薪樵を芟て賣て食に給せり、薪を擔て道を行ながら書を誦し或は歌をうたふ、其妻も薪を頭に戴て買臣に随て賣しが買臣が道中にて歌謳することを患て數〻止れども曾て不聽愈益疾く歌ふに因て妻買臣が婦たることを羞て求去、買臣が曰我やがて富貴なるべし姑く待てと云ふ妻怒て遂に去りぬ、其後數歲を過て長安に至り禁闕に詣りて上書し竟に會稽の太守に拜せらる、買臣駟馬の車に乘て會稽に至る、會稽の民太守來ると聞て道を掃除し縣吏皆出て迎たり、吳の界に入とき買臣が故の妻後夫と共に道を治て掃除することを見て呼て後車に載せ太守の舍に到て園中に養ひ置たり其後妻自經れて死せり、此詩に引用る意は買臣は初會稽の愚婦にさへ輕れたれども後長安に至て天子に見え遂に太守となれり、是故に余も亦今家を辭し兒女を別て西の方秦に入て京に上んと旅だつと也、秦は即長安の京を指て云、

仰天大笑出門去、我輩豈是蓬蒿人、

丈夫有四方之志、蒿萊蓬蓽之下不足以淹留我輩爾、

結句には別に臨て戚々の顏なく豪雄の氣あることを云、家を辭するに曾て情を不含仰天大に笑て門を出去る也、いかにとなれば我輩の如き豈是一生の間蓬蒿の中に埋れ朽はつべき人ならんや、一たびは聲名を顯して譽を可取ものをと思へば也、本集注士贇曰、列子晉文公出會欲伐衞、公子鉏仰天而笑、齊賢曰、三輔決錄張仲蔚隱身不仕、所居蓬蒿沒人、注【四方之志】、男子生れ出ればはや四方の志あり、古に男子生れば桑孤蓬矢を以天地四方を射るも遠大に事あらんことを期望するの意也、【蒿】、字彙呼高切、蒿類甚多、有蓬蒿、埤雅晏子曰、蒿草之高者也、【萊】音來、田廢生艸曰萊、【篳】、音必、藩落也、又篳門柴門也、

○南陵叙別　此篇有懐古之意、

本集十五載之、題作南陵別兒童入京、【南陵】、新唐書地理志、江南道宣州有南陵縣、此詩南陵にて兒童に別れて出る時離別の情を詩に云叙る也、注此一篇は古人の跡を懐ふて自擬するの意ある也、

李太白

白酒初熟山中歸、黃雞啄黍秋正肥、此言鷄黍之樂、呼童烹鷄酌白酒、兒女嬉笑牽人衣、此言兒女之情、

【白酒—】、本集初作新、注齊賢曰、詩黃鳥黃鳥、無啄我黍、○大全山中歸歸山中也、言は白酒の初て熟する時山中の居に歸たれば秋の時節にて家畜の黃鷄は黍を飽まで啄み食ふて肉十分に肥實したると也、注此二句には南陵の居に鷄黍の食に具るに足れる樂あることを云也、【呼童—】即ち童を呼て命じて彼肥たる鷄を烹させて膳に備初て熟する白酒を酌て自樂めは、兒女の輩嬉笑して傍に圍繞し人の衣を牽て酒を勸め歡を爲すと也、注此二句には兒女親愛の情を云也、

高歌取醉欲自慰、起舞落日爭光輝、游說萬乘苦不早、(說)(乘)並去聲、著鞭跨馬涉遠道、此言无懐居之樂而有遠遊之志、

【高歌—】、高聲に歌ふて酒興を助け醉を取て自慰せんと欲し起て舞へば我が醉顏の紅なる色落日の紅と光輝を爭ふばかりなると也、本集注士贇曰、潘岳閒居賦、頓足起舞、抗音高歌、【遊說—】、游說は四方の國に遊歷して國の要害を謀り兵の得失を論じ人主を說誘するを遊說の士と云、說音稅、以言說人使從己也、史記蘇秦傳賛曰、蘇秦兄弟三人皆遊說諸侯以顯名、又李斯傳曰、布衣馳騖之時而遊說者之秋也、【萬乘】、前漢書二十三刑法志云、天子畿方千里、提封百萬井、定出賦六十四萬井戎馬四萬匹兵車萬乘、故稱萬乘之主、言は萬乘の天子を干して吾道を遊說することは速ならんことを欲す故に只不早ことを苦む也、是故に鷄黍の樂を舍て兒女の親愛に別れて鞭を著け馬に跨て遠道を涉り京に赴くと也、【著鞭】、字出晉

物之妙者也、雉の箭に中て空中より箭を帶ながら墮る貌を詠ずる也、

韓退之

原頭火燒靜兀々、野雉畏鷹出復沒、將軍欲以巧伏人、盤馬彎弓惜不發、

【原頭—】原頭を獵の爲に火を放て茅塞を燒はらふに因て獵場靜にして兀々と平なると也、【兀】、字彙高而上平也、鐘伯敬曰、此處乃着一靜字妙甚、【野雉—】、野中の雉は鷹の搏んことを畏れ出ては復沒して敢て高く飛不得して叢中に隱れをる也、【將軍—】、將軍射藝の巧を以て諸人を伏せしめんと欲し雉の射處を目がけて馬を乘り盤し弓を矢ごろに引つめて尙惜てたやすく不發益ふより近づく也、

地形漸窄觀者多、雉驚弓滿勁箭加、衝人決起百餘尺、紅翎白鏃相傾斜、（鏃矢末、【鏃】作木反、）將軍仰笑軍吏賀、五色離披馬前墮、（潘岳射鷄賦、有五色之名翬、）

【地形—】、雉の伏す處を圍てより近づき次第に地形窄く逼て矢ごろまぢかくなれば今や將軍の弓勢を見んと觀者多し雉忽驚て出る所を引滿たる弓を發てば勁箭即中て雉の身に射加る也、【衝人—】、雉箭に中て圍みし人を衝破して決起し飛ぶこと百餘尺されども紅翎に白鏃射貫きたれば正く飛不得して空中にてひら〱傾斜する也、鏃はやじり也、【將軍—】、將軍は雉の箭を帶て傾斜するを見て仰ぎ望で喜び笑へば軍吏は巧に中りたりと賀する間に、雉は則力盡て五色の羽毛離披と散亂して馬の前にはたと墮たると也、【離披】は花の散貌を云也、雉の羽毛五色なるが花の如く散り墜を離披と云、注【潘岳】、晉書列傳二十五、潘岳字安仁、滎陽中牟人也、岳少以才穎見稱鄕邑、號爲奇童、才名冠世、爲衆所疾、出爲河陽令、晉惠帝朝爲黃門侍郎、【射鷄賦】、鷄は雉字の誤也、文選九潘岳射雉賦、聿采毛之英麗兮有五色之名翬、注翰曰、翬雉也、○爾雅雉五色皆備曰翬、

載以前のこと也、其時君の年は壯夫にて我は尙少年なりし也、【壯】、禮記曲禮三十曰壯、鄭玄曰、氣力浸强之名、【我爲—】、今日又一樽の酒を置て相逢て共に酌む因て思へば舊遊を去ること十載の後也、其間顏色互に改て昔少かりし我は忽壯夫となり君は既に白髮の首となられしと也、

我才與世不相當、戢鱗委翅無復望、〔戢〕尺立反、〔望〕音忘、當今賢俊皆周行、音伉、君何爲乎亦遑々、退之謂我材不用於世、方今賢俊並進、君何爲亦不仕乎、盃行到君莫停手、破除萬事無過酒、

【我才—】、我が才學は今世の人と敵當するに不及、不才なるゆゑに魚の鱗を斂て縱に游がざる如く鳥の翅を委ねて高く飛ことなき如に身を藏して名聲を望むことなきと也、韓文注韓曰、選與稀茂齋書、時不我與、垂翅遠逝、戢斂也、阻立切望平聲、【當今—】、二句鄭兵曹の祿位薄福なることを怪て云、當今の世賢俊の人は皆朝廷の列位に立て志を遂る也、周行は卷耳篇の字を借用て朝廷を指て云也、如此なる時に在ながら君は何としてか遑遑として所を不得遭遇ことなきやと也、【周行】、詩卷耳篇云、嗟我懷人、寘彼周行、注懷思寘置行列也、思君子官賢人置周之列位、箋云、周之列位謂朝廷臣也、【何爲乎】、詩云、何爲乎泥中、【遑々】、楚辭九辨云、鳳獨遑々而無所集、注良曰、遑々不得所貌、〔注〕【不仕乎】、按に鄭氏兵曹の官あれば不仕には非ず只武官となりて朝廷の政事に與かることなく下僚に在を云なるべし、【盃行—】、結の二句鄭氏を慰安するの辭也、世間萬事皆是命也奈何ともすべからず只一醉に附すべし、盃行りて君が前に至らば幾盃を酌で手を停ることなく飮まれよ、萬事の不平を破除して消遣する者は酒に過たることとなきほどにと也、前漢書東方朔傳云、銷憂者莫若酒、

○雉帶箭、

韓文三載之、題注樊曰、公陽山縣齋詩有曰、大梁從相公、彭城張僕射、弓箭圍狐兎、絲竹羅酒炙、此詩公佐張僕射于徐從獵而作也、讀之其狀如在目前、蓋寫

之所見蓋其小小者耳、名曰雲夢、雲夢方九百里、注【木堦】、かけはしと訓ず、俗にはしごと云是也、○詩林廣記前集五云、楊誠齋云詩有驚人句、如白樂天月中桂是也、愚謂、昌黎此詩云、開花十丈藕如船、亦可謂句之驚人者也、○瑯琊代醉卷四十云、韓昌黎古意詩太華峯頭玉井蓮、開花十丈藕如船、始意退之自爲豪傑之辭、後見關尹令喜傳老子曰、眞人遊時各坐蓮花之上、花輙徑十丈有返生香、逆水聞三千里、又北齋脩文御覽有返生香一門、專載此事、諸家註集韓詩皆遺而不收、特表出之、

七言古風短篇

唐詩訓解首卷袁石公曰、七言短古篇詞明意盡、與五言相反、○按に五言詩は十句より十二句に至までを短篇とす、七言詩は十句より四十四句までを短篇とす、長篇と云者も亦二十四句也、短篇長篇の別必ず說あるべし、未だ考へ不得、

○贈鄭兵曹

感慨老少之禪代世變之推遷、終於飲酒消愁、

本集三載之、題注韓曰、鄭或以爲鄭通滅、張建封節度武寧時、通滅爲副使、公爲其軍從事、樽酒相從在其時歟、樊曰、白樂天哀二良云、祠部員外郎鄭通滅、此云兵曹所未詳、○新唐書萬姓統譜等無鄭通滅傳、【兵曹】、新唐書百官志三十九、左右衛上將軍之下云、兵曹參軍事各二人掌五府武官宿衛番、第受其名數而大將軍配焉、○事物紀原六云、兵曹漢公府掾史有兵曹主兵事、司隷屬官有兵曹從事史、郡國爲使、北齊同諸曹爲參軍、今又獨置開封府也、注此詩意は少より壯に及壯者は老に至り老少互に禪代て不止其間世變推遷て無常を感慨して、とかく人世は暫時の間なれば酒を飲み愁を消し世を遣れたるがよきと云に終りたると云意也、

韓退之

樽酒相逢十載前、君爲壯夫我少年、樽酒相逢十載後、我爲壯夫君白首、相去十年之間、昔少而今壯、昔壯而今老矣、

韓文注樊曰、公貞元十五年去汴即徐爲軍從事、時三十有二、故云言は樽に酒を盈て相逢て共に酌しは十

致意於此爾、文公憤趍榮貪位者、若陟懸崖險不能止、至顚危蹈蹶然後歎不知稅駕之所焉可及矣、悲矣、按公諸詩及國史補所云、公實如此、初無他旨也、此詩は華山の蓮に言を寓して難得の富貴を貪り取んとする者を憤て作れる也、注【昌黎】、韓退之死後に昌黎の伯に封ぜらるゝに因て後世の人韓昌黎と稱する也、【寓言】は我が言んと欲することを直にあらはに不言して物を借てそれに意をよせて云を寓言と云也、二字本と莊子に出たり、

韓退之

太華峰頭玉井蓮、（西岳有太華山少華山、）開花十丈藕如船、冷比霜雪甘比蜜、一片入口沈痾痊、（痾病、痊愈也、【痾】音阿、【痊】音荃、）

【太華】、韓文注唐曰、山海經曰華山一名太華、大明一統志三十二、西安府有太華山、太華山の峯頭の玉井に生ずる蓮は花を開くこと大さ十丈ありて其藕根如船に大なると也、藕は說文荷根也、注【西岳】、泰山衡山華山恒山嵩山此五山を四方中央に封して天下の鎭とす、是を五岳と云、西岳は即華山也、【冷比—】、藕の味云也、藕根の冷なることは雪霜を嚙が如く味甘きことは蜜を嘗るが如なり、一片口に入れば骨髓に沈みたる愈がたき病も忽痊ると也、

我欲求之不憚遠、青壁無路難夤緣、安得長梯上摘實、（梯木堦也、）下種七澤根株連、（雲夢有七澤、）

【我欲—】、此藕を求んと欲して其路の遠きことは憚らざれども山色青々と苔滑にて壁を立たるが如く峙て登るべきやうなければよぢのぼることなりがたきと也、【青壁】、文選十八嵇叔夜琴賦、青壁萬尋、注良曰、青山色、壁石壁也、【夤緣】、文選五吳都賦、夤緣山嶽之岊、注翰曰、夤緣言衆草滋長皆緣上山嶽而生、【安得—】、何とぞして峯頭までとゞくほど長き梯を得て玉井に上りて彼の蓮實を摘み取て楚の七澤に遍く種て根株相連絡して不斷ほど多くはびこらせて心のまゝに藕根を食しめたきとゝ云意也、【七澤】、文選七子虛賦云、臣聞楚有七澤、嘗見其一、未覩其餘、臣

抱奇才、手把犂鋤餓空谷、

【虎有ー】、二句先づ喩を以て起す、虎には爪あり牛には角あり、爪あるものは必ずこれを以て搏べし、【搏】、音博、手擊也、角あるものは必ずこれを以て物に觸るべし是固に常の理なり、【奈何ー】、禽獸既に爪角あるときは搏觸の用をなすへし、況や人才あるときは必用て功をなすべし、奈何ぞ君は獨奇特の才を中に抱き蓄へながら其用をなさずして手に犂鋤を把て耕すことを勤め祿なく食乏して空谷に餓を忍で處らるゝぞと也、

當今天子急賢良、匭函朝出開明光、（匭匣也、函匱也、明光宮名、【匭】、音軌、）胡不上書自薦達、坐令四海如唐虞、（唐堯帝虞舜帝、致君堯舜、）

【當今】、唯今と同じ、急は尋ね求めらるゝこと急切なるを云、【匭函】、本集孫曰、武后垂拱二年命鑄銅爲匭、置之朝堂以受天下表疏、銘其東曰延恩、獻賦頌、求仕進投之、南曰招諫、言朝政得失者投之、西曰伸寃、有寃抑者投之、光明殿名、○天梯古文云、唐武后垂拱十年從魚保宗之請、匣匱爲四匭而論之、傍有一小竅、可入而不可出、置之朝堂以受天下表章、言は唯今天子賢良の臣を尋ね索らるゝこと急なるに因て匭函朝に出て明光の殿を開き天下の表章を受け上言の道を開かるゝ時なるに何ぞ天子へ上書して自我が才を薦め達して進て朝廷に仕へ天子の政を輔けて四海の內をして堯舜の世の如くならしむることをせざるやとなり、帝堯は唐に居玉ふ故に唐堯と稱する也、舜は虞に封ぜられしに因て帝舜を虞舜と稱する也、

○古意 （此昌黎寓言、）

韓文三載之、韓文注韓曰、華山記曰山頂有池生千葉蓮花、服之羽化、因曰華山、觀公詩意與前詩皆有興寄、其曰古意旨深遠矣、樊曰、公縣齋有懷曰、求官來東洛、犯雪過西華、答張徹曰、洛邑得休告、華山窮絕徑、李肇國史補言、愈好奇登華山絕峯、度不可返、發狂慟哭、縣令百計取之乃下、而沈顏作登華旨略曰、仲尼悲麟悲不在麟也、墨翟泣絲泣不在絲也、且阮籍縱車於途、途窮輙慟、豈始慮不至邪、蓋假事諷時

載空悠々、

四句には此樓を造るの由を叙ぶ、昔人此處に於て黄鶴に乘て飛去りし後其地に樓を建てより今に殘て黄鶴樓と名くる也、當時黄鶴一たび去てより復た返の期なく只白雲のみ千載改ることなく空く悠々と長に在ると也、【悠々】、韻會眇邈無期貌、

晴川歷々漢陽樹、芳艸萋々鸚鵡洲、日暮鄕關何處是、烟波江上使人愁、

後の四句は感慨の情を云也、【晴川―】、二句樓に登て眺望する景を云、【漢陽】、古文大全、漢陽軍漢沔之南故曰漢陽、唐詩訓解、漢陽東接武昌、隔江七里、鸚鵡洲訓解云、鸚鵡洲尾正黄鶴磯、黄祖殺禰衡處、衡嘗作鸚鵡賦、故遇害、言樓に上て遠く望めば晴川の歷々と分明なる邊に漢陽の樹を認て看芳艸の萋々と盛にしげりたる處乃鸚鵡洲を想ひ望むと也、【日暮―】、晴川の遠きを望み古人の遺跡を覽て忽感慨の情を起し因て我が鄕關を思へども何處とも不見烟波空く目觸愁を生ぜしむると也、○嚴滄浪曰、唐人七言律詩當以黄鶴樓爲第一、顧華玉曰、此篇太白所推服、一氣渾成、太白所以見屈想是一時登臨高興流出、未必常有此作、田子秇曰、篇中凡疊十字、只以四十六字成章、尤奇尤妙、

○贈唐衢　勉衢出仕以致君澤民、

本集三載之、題注云、衢從退之游、舊史附公傳末、新史削之、舊史云、衢應進士久而不第、能爲歌詩、意多感慨、見人文章有所傷歎者、讀訖必哭、涕泗不能已、每與人言論既別發聲一號、音辭悲切、聞者莫不涙下、故世稱唐衢善哭、白樂天亦嘗贈以詩、略曰、賈誼哭時事、阮籍哭岐路、唐生今亦哭、異代同其悲者是也、注【致君】は君を輔て堯舜の聖に致す也、【澤民】、恩澤を民に施也、

韓退之

虎有爪兮牛有角、虎可搏兮牛可觸、虎有爪則可以搏、牛有角則可以觸、猶人有才則可爲時用、奈何君獨

江横、

【坐對】は坐して水仙に對する也、【眞成】はまことにと云意にて成は助字の如し、眞成にと云へるは上の三聯に形容するに仙子美人を以てすれども實は艸花にして形容皆虛擬也、然れども坐して對し見れば愛賞の情にたへず心を放て執着するに至る、故に云く眞成に花の爲に惱さると、因て門前に出て一笑して望見れば大江横て洋々と流去る、これを看て胸襟を開て曠闊にすると也、結句は不羈超脫自得の趣あり、

○登黃鶴樓 上四句叙樓名之由、下四句寓感慨之情、

三體詩唐詩訓解唐詩歸等皆收之、【黃鶴樓】、大明一統志五十九、武昌府有黃鶴樓、○唐詩訓解注云、在武昌城西南隅黃鶴磯上、世傳費褘登仙駕黃鶴憩此、○天梯古文題注云、南齊志仙人子安乘鶴過此、又連相善惡報應錄載、江夏郡辛氏沽酒爲業、有一先生魁偉襤褸入坐謂辛曰、有好酒飲吾否、辛飲以巨杯、明日復來、辛不待索而與之、如此半載、辛無倦意、一日謂辛曰、多負酒債無錢酧女、遂取黃橘皮於壁畫鶴、謂客來飲酒但令拍手歌之、其鶴必舞、將此酧酒債、後客至如其言、鶴果蹁躚而舞、回旋宛爾浪々音律、爲橘皮所畫色黃、人謂黃鶴、莫不異之、欲觀者可費千金、十年間家置巨萬、一日先生至曰、向飲君酒所咨薄否、辛謝曰、賴先生畫鶴今至百倍、如少留當舉家供備酒掃、先生笑曰、吾豈爲此、取笛數弄、須臾白雲自空而下、所畫鶴至先生前、遂跨鶴乘空而去、辛氏以飛昇處建樓乃名黃鶴樓也、

崔顥

新唐書列傳百二十八、崔顥擢進士第、有文無行、好蒲博嗜酒、娶妻惟擇美者、俄又棄之、凡四五娶、終司勳員外郎、李邕聞其名虛舍邀之、至獻詩邕叱曰、小兒無禮、不與接而去、○才子傳云、顥少年爲詩、意浮艶多陷輕薄、晚節忽變常體、風骨凜然奇造往々並驅江鮑、後遊武昌登黃鶴樓感慨賦詩、及李白來曰、眼前有景道不得、崔顥題詩在上頭、無作而去、爲哲匠斂手云、天寶十三年卒、

昔人已乘黃鶴去、此地空餘黃鶴樓、黃鶴一去不復返、白雲千

句を造也、水仙の潔白飄逸なる形象は波を凌て水面を歩する仙子の波に塵を生ずる韈を著て水上を盈々とゆるやかに微月の光に映じて歩行する風情なると云意也、【微月】を山谷集の注には蓋言韈如新月之狀と云へり、然ときは微月を歩ましむと讀へし、注【洛中賦】と云誤也、洛神賦也、文選十九曹子建洛神賦云、體迅飛鳧飄忽若神、凌波微步羅韈生塵、注向曰、微步輕步也、步於水波之上如塵生、善曰、凌波而韈生塵言神人異也、說文曰、【韈】足衣也、

是誰招此斷腸魂、 楚辭恐其魂魄離散而不復還、假巫語以招之也、

種作寒花寄愁絕、

【是誰―】、言は誰か此神仙能人を惱まして腸を斷しむる靈魂を招きて、種て淸寒の花となして仙子愁絕の風情を託し寄せてはおきたるぞやと云意也、帳中香云、此聯言何人招此仙子靈魂種以爲此花斷腸傍人見之斷腸也愁絕此仙子之愁絕也、種訓栽也、絕は甚き也、注【楚辭】、招魂の序中の文也、楚辭卷七宋玉之招魂序云、宋玉哀閔屈原無罪放逐恐其魂魄離散而不復還、遂因國俗託帝命假巫語以招之、

含香體素欲傾城、 選詩一顧傾人城、 **山礬是弟梅是兄、** 山礬俗呼爲七里香花、

本注云、應劭漢官儀、尙書郎含鷄舌香、此借用、淵明詩曰、君其愛體素、傾城見漢書、山礬卽瑒花也、言は水仙香を含て花氣馨く素を體質として肌膚淸白なり此絕世の美を具て人の城を傾んと欲するに似たると也、【傾】は一城の人の心を悉く傾けて慕はしめ一國の人の心を皆引傾るを傾國傾城と云、前漢書李夫人傳李延年歌曰、北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國、【山礬―】、冬の時開く花を以て擬して兄弟とする也、注【選詩】、前漢書に出たる詩を以て選詩とす、引證の誤也、【山礬】、本名は俗に七里香花呼ふ、又鄭花と云、山礬は山谷始てつけたる名也、山谷詩集十九詠山礬花詩序云、江湖南野中有一種小白花、木高數尺、春開極香、野人號爲鄭花、王荊公嘗欲求此花栽、欲作詩而陋其名、予請名曰山礬、野人采鄭花葉以染黃、不借礬而成色、故名山礬、

坐對眞成被花惱、出門一笑大

向來開處當嚴冬、（梅當冬而開花、）白者未白紅未紅、（是時未有桃李、）只今已是丈人行、（丈人長上之稱、行輩行、如漢匈奴傳云漢天子我丈人行之謂、行戸浪反）肯與年少爭春風、（年少謂桃李也、）

【向來】はさきにと云義、前かたの意也、さきに梅の開し時は嚴冬極寒の月に當れり、其時は李花の白き者も未だ花を開かず桃の紅なる者も未だ花を結ぶとなし、只今二月に至ては桃李時を得て各〻妍を爭ふ、梅は已に色香衰て老人なみになりたり何ぞ年少の桃李と春風を爭て榮を貪ることをせんやと也、詩の意謂らく、今時小人世に多して言を巧にし色を令し能く媚諂て寵恩に誇ること桃李の春に遇ふが如し、此時節に當てそなたの如くなる廉潔の士出づべからず必ず是天子の强て召さるゝに因てなるへし、そなた家に處するときは窮阨を甘じて一个の身を修るのみにて傍に小人讒諛の累ひなし、今朝に入ときは左右皆便佞諂諛の小人也、其間に獨雜り處をは定て昔風の窮屈なる男とて小人皆忌み嫌べし、必ず彼れ等と爭ひ進て主恩を得んとして害にあひ玉ふなと誡るの意也、注【丈人】は年長したるを尊て稱する辭也、丈人の字は本と易の師の卦に出たる字也、備に第五卷に見たり、【行】は去聲に讀て輩行の行也、並と云辭と似たり、【匈奴傳—】、前漢書列傳六十四匈奴傳上云、漢天子我丈人行、師古注、丈人尊老之稱也、行音胡浪反、舅を尊て丈人と稱する也、匈奴の單于は漢の公主を迎て閼氏とするに因て匈奴の爲に漢の天子は舅也故に我が丈人行と云、

○水仙花（俗呼爲金盞銀臺花是也、）

本集十五載之、題作王充道送水仙花五十枝欣然會心爲之作詠、

黃魯直

凌波仙子生塵韈、（洛神記、凌波微步、羅韈生塵、）水上盈々步微月、（形容水仙字、）

【凌波—】、此二句は水仙の名に依て神仙となして花を形容する也、故に洛神の賦の文字を取て點綴して

嗅馨香泣、　語子路共之、三嗅而作、

【涼風】は秋の風也、【蕭々】はすさまじき貌也、史記刺客傳荊軻歌曰、風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不復還、此二句言は決明たとひ霖雨の中能耐て顏色を不變とも涼風蕭々とすさまじく起て汝を吹拂ふこと嚴急ならば、恐は汝時に後れ能耐て獨立ことの難からんことを想に必ず遂に毀ひ傷られんと也、堂上の書生は杜子美自謂也、我れ空く年老て白頭となり汝か憂を救ふことなし、故に風前に向て三たび其馨香を嗅て泣と也、此杜公當時の暴虐を傷み己れが用られずして救ふによしなきことを嘆ずる也、【語】は論語鄕黨篇に出づ、三嗅の字の出處を證するまで也、文義は自ら別也、

○二月見梅

譏刺翠小用事、以梅比君子、以桃李比小人、

此詩は唐子西贈張無盡の詩也、瑯琊代醉に所載は此集に収る所の詩と小異あり、代醉編三十四引墨莊漫錄云、唐庚子西嘗見桃李盛開而梅尚存數枝因作詩、時張無盡天覺見召、乃以詩投之云、桃花能紅李能白、春來無處無春色、不應尚有數枝梅、可是東君苦留客、向來開處當嚴冬、桃李樂在交遊中、只今已是丈人行、勿與年少爭春風、無盡大加稱賞、

唐子西

東都事略列傳文藝九十九、唐庚字子西、眉州丹稜人也、張商英薦其才、商英罷、相庚亦坐貶、安置惠州、會赦復官提擧上淸太平宮、歸蜀道卒、年五十一、

桃花能紅李能白、春深何處無顏色、不應尚有一枝梅、可是東君苦留客、

二月の時景を云、桃花は已に能紅を開李花已に能白色也、春深き時に及では何の處にか顏色艶麗の花なからんや、此時に至ては尚一枝の梅は有まじきにと也、然るに今一枝の梅のさき殘たるを見るときはいかさま所以あるべし、想ふに是東君の苦に客を留て謝し去らしめざるものにてあらんと也、東君は春を司る神也、春は木に屬して東方の木神令を司る故に春の神を東君と云也、此四句陌韻の字押、

第八首云、冉々孤生竹、結根泰山阿、【劉彦節】、萬姓統譜、劉秉字彦節、宋宗室也、少有才俊、朝野推譽之、泰始初尹丹陽、時蕭道成專政、將圖簒逆、秉與袁粲謀誅之、不克遇害、春氣は下より升り秋氣は上より降る、故に高樹先つ傷く者也、城上に生ずる草は地甚だ高に因て風霜に傷らるゝこと早き也、【隰桑】は小雅の篇の名也、小人在位君子在野八字は隰桑小序の文也、【抱養】は心を正し道修て德性を養ふ工夫を云、【結託】はよせつくの意也、【不得其人】とは我を任用する人に遇ふことを不得を云、

○秋雨歎　此詩刺時之暴虐、君子在患難之中而特立獨行不變也、

本集二載之、三首の第一首也、集注の題注云、玄宗天寶十三載秋天霖雨六旬不止、帝憂之、楊國忠取禾之善者以献曰、雨雖多不害稼、此詩刺時之暴虐君子不見容于朝、注【暴虐】、政あらくしへたけて仁惠なき也、【特立】、群を出て特に身を立衆に同うせずして獨道を行也、

杜子美

雨中百草秋爛死、堦下決明顏色鮮、決明佳蔬夏初始苗、七月有花黄白色、喩君子在患難中而獨立也、著葉滿枝翠羽蓋、東京賦樹翠羽之高蓋、開花無數黄金錢、

【雨中―】、霖雨止むことなきに因て諸の草秋に入て悉く爛腐て死る也、政の暴虐なるに因て士人皆困弊するに比する也、秋字漁隱後集詩林廣記等には作皆字、【堦下決―】、只堦下の決明草のみ霖雨に耐て靡爛せず顏色鮮明にてうるはしき也、是君子患難の中に在れども曾て節操を不改獨立して行を危ふするを云、決明は倭名ゑびすくさと云、本艸云、決明夏初生苗、七月有花黄白色、【著葉―】決明の形を云、葉を著て枝に滿ち盛に茂きとは翠羽の蓋を樹たるが如く花を開くこと多して無數形黄金の錢の如なると也、文選張平子東京賦、樹翠羽之高蓋、

涼風蕭々吹汝急、恐汝後時難

獨立、堂上書生空白頭、臨風三

に及とも猶摘むに堪るほども開不レ得也、【明日―】、集注云、盡醉醒公言、衆人有レ菊而盡醉、已因レ無レ菊而獨醒、猶ニ屈原衆人皆醉我獨醒之意一、○輔按、此說於ニ文義一不レ通恐非也、明日は節後十日を指て云、此二句言は、九日は菊花盛に開の時重陽の佳節に當り、家々酒を酌て歡をなし或は山に登り籬に歩して菊を把て盃に泛節物と云て賞翫す、菊に於ては一年第一日の佳期也、此時に開ことを不レ得ときは時を失と云べし、既に十日に至時は節去り客歸て世間寂寥として昨日の宿醉人盡く醒む、此時に至て彼さき後れたる菊の花開て爛熳たりとも誰か又賞せんや、然則たとひ開くとも亦何益ぞや、畢竟無用の物となると云意也、【蕭條】は寂寥貌、【爛熳】は花の盛に開たる貌也、

籬邊野外多ニ衆芳一、采ニ擷細瑣一升ニ中堂一、

詩芣苢、薄言采之、薄言擷之、公之意細瑣升ニ中堂一細碎微瑣者得レ用也、衆芳多在ニ籬邊野外一、是出レ類者廢棄也、

【衆芳】は細瑣の野花を指て云、【細瑣】は小貌也、籬邊には野外の衆芳無名の草花多し、菊花は已に時を失て賞せられず、彼瑣細無名の野花は却て采りとつて中堂に升せて愛せらるゝ也、是れ言は賢人は所を失て下に冷落し小人は却て用らるゝことを得て廟堂の上に登ると云意也、詩經周南芣苢篇、采ニ采芣苢一、薄言采レ之、注采始求レ之也、采ニ采芣苢一、薄言襭レ之、注襭以レ衣貯レ之而扱ニ其袵於帶間一也、中堂は堂中也、古人多く倒語を用、中谷中林の類也、注【細碎微瑣】、四字ともに小なる義、數にもならぬ物と云意也、【衆芳】を此注に出レ類の賢人野に在に比すとす謬れり、此篇菊を以て主とす、衆芳は無名細瑣の者野外の雜艸を指て云、此れ小人に比す、君子に比するに非ず、

念レ茲空長ニ大枝葉一、結レ根失レ所纏ニ風霜一、

古詩結ニ根太山阿一、南史劉彥節詩、城上草植レ根非レ不レ高、自恨風霜早、此詩與下騾桑詩小人在レ位君子在レ野無上レ異、然賢者所ニ抱養一雖レ大奈ニ何結託不一レ得ニ其人一、故至ニ於失レ所而埋ニ沒乎風霜一、

【念茲】は甘菊にかけて云、大禹謨念レ茲在レ茲、細瑣の草已に堂に登れりこゝに此菊を思へば空く長じて枝葉を大にすれども時に不レ遇して用られず根を託結ぶこと所を失て安からず更に風霜に纏はれて終に草莽に委する也、注【古詩】は文選二十九古詩十九首の

【世人―】、本集恒作指、【殊調】は俗習と同からず、別ことやうなるを云、【大言】は俗に大口と云辭也、過大の言をなすを云、言は世の人が李白の俗流にかはつて豈を才ありとし、又大鵬に比する大言を聞て皆不信してしらわらひをなし何か云らんとさみする也、本集注云、莊子大言炎々、小言詹々、楚辭有宋玉大言賦、北齊崔瞻爲三恪議、魏收讀訖笑而不言、瞻曰、瞻議若是、當贊其所長、若非當詰其不允、何容讀國士議文直此冷笑、【宣父―】、宣父は孔子也、文宣王を贈られしより宣父とも稱する也、言は論語の子罕篇に孔子の語にも祇今聖賢の人なくとも後れて世に生る人成德の者なきにしもあらじ後生可畏と云へり、丈夫は年わかしとて輕じ侮るべからず、才ある者は後來の顯達はかるべからず、我が所言何ぞ必過言ならんやと云意、注【比方】、くらべたくらぶる也、

○歎庭前甘菊花　此詩譏小人在位賢人失所也、

全集二載之、此詩は天寶十三載に長安にての作、蓋杜公用らるゝこと晩く徒らに老衰せんことを傷て作れる也、【甘菊】、事文類聚後集二十九云、南陽郡酈縣有甘谷、水甘美、云其山上有大菊、落水從山下、流得其滋液、谷中有三千餘家、不復穿井、仰飲此水、上壽百二三十、其中年亦七八十、○宋范成大菊譜云、甘菊生雍州川澤間、開以九月、深黃單葉、閭巷小人且能識之、固不待記而後見也、然余竊謂、古菊未有瓌異如今者、而陶淵明張景陽謝希逸潘安仁等或愛其香、或詠其色、或採之於東籬、或泛之酒斝、疑皆今之甘菊花也、夫以古人賦詠賞愛至於如此、而一旦以今菊之盛遂將棄而不取、是豈仁人君子之於物哉、故余特以甘菊置白紫黃菊三品之上、其大意如此、

杜子美

簷前甘菊移時晩、菊以移晩而花遲、故爲失所爾、青蘂重陽不堪摘、明日蕭條盡醉醒、殘花爛熳開何益、

【簷前―】、移時は春中菊苗を分て移し栽る時節を云、言は簷前の甘菊苗を移し栽るの時晩し、故に菊其所を不得して根を深し枝を長することを得がたし、故に花を開く精力なくして僅に青蘂のつぼみを結で重陽

天寶中左驍衛兵曹參軍柳勣有罪下獄、宰相李林甫忌邕、因傳以罪、詔就郡杖殺之、時年七十、邕雖屈不進而文名天下、時稱李北海、

李太白

大鵬一日同風起、扶搖直上九萬里、（莊子鵬之背不知其幾千里也、怒而飛其翼若垂天之雲、搏扶搖而上者九萬里、）假令風歇時下來、猶能簸却滄溟水、（同上鵬之徙於南溟也水擊三千里、）

四句皆比也、大鵬を以て邕に比す、【大鵬】注【莊子】內篇逍遙遊篇云、北冥有魚其名爲鯤、鯤之大不知其幾千里也、化而爲鳥、其名爲鵬、々之背不知其幾千里也、怒而飛其翼若垂天之雲云云、鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里、希逸注云、搏飛翔也、扶搖風勢也、鵬は鯤と云魚の化する所の者、其鳥の背長大なること幾千里とも不知、此鳥力を出し怒激して飛起つときは其翼天より垂れ覆ふ雲を見るが如し、凡そ水鳥の起つときは必ず羽を以て水面をたゝきたてゝ其勢にて飛あがる也、此大鵬北海より南海に徙るときは水面を擊つこと三千里の間を過、それより大風の勢に乘て高く翔り九萬里の上を飛去と也、此詩言は大鵬一日大風と同く飛起は扶搖の風勢にまかせて直に九萬里の高空に上るべしたとひ中路にて風歇て勢を失て南海まで到り不得して時に下り來るとも垂天の雲の如くなる翼にてあふぎたてたらば猶滄海の水をあふぎ飛すほどの事はすべしと也、【簸】は箕にて米をひて糠を飛すを云、簸却はあをち飛ばすの義也、詩の意謂らく、李邕か才の宏大なること大鵬の如し若し一旦拔擢を得ば直に上て朝廷の上に至り百官を下に見るべし、たとへ時を不得勢を失ふとも、猶能く天下の耳目を驚して、大に聲名を振ふべしと云意也、

世人見我恒殊調、聞余大言皆冷笑、宣父猶能畏後生、（語子曰後生可畏焉知來者之不如今也、）丈夫未可輕年少、（以大鵬比方李邕之才、末句謂邕雖年少不可輕、）

靑草市一名謝家市、晉書陶淵明傳、陶潛門前有五柳、因作五柳先生傳以自況、

好鳥迎春歌後院、飛花送酒舞前簷、客到但知留一醉、盤中祇有水晶鹽、（鹽色白似水精、）

【好鳥—】、此一聯一時の景を云、好鳥は春を迎て暖なるに誇て聲を弄して後園に歌ひ、飛花は人の酒興をそへて簷の前に亂れ舞ふと也、【客到—】、東谿公の客を好て不倦ことを云、客さへ到れば空く還すことなく但留て酒を勸め一醉せしめざれは還さゞるものとのみ知たる人なると云意、然れども華靡の遊宴を好むに非ず、盤中には祇水晶の如き鹽一種也、これを肴として酒を飮で風景を悅び淸談を樂めると云意也、【水晶鹽】、北史魏大武與崔浩語大悅、劇談至中夜、賜縹醪酒十斛水精戎鹽一兩、曰朕味卿言若此鹽酒、

○上李邕

本集九載之、本注士贇曰、按此篇似非太白之作、今匣在卷末、○輔按に李邕は武后の時李嶠張廷珪が薦に因て左拾遺となる、玄宗の天寶の初李林甫に忌れ罪を誣られて杖殺せらる時に年七十也、太白は天寶三年始て長安に至て玄宗に見ゆ肅宗の寶應元年に卒す年六十四也、然則李白は李邕より少きこと二十餘歲なるべし、李白豈に李邕少年の時を見ることを得んや、此詩丈夫未可輕年少と云ときは事實と甚相違す、此詩李白が作に非ること可證、或は李北海に非ずして別に又李邕と云人あるか我れ詩を知る者に非れば巧拙を以て眞僞を論じ難し、但事實を參考して疑を存するのみ、【李邕】、新唐書列傳二百二十七、李邕字泰和、揚州江都人、父善有雅行、淹貫古今不能屬辭、故人號書簏、爲文選注表上之、邕少知名、始善注文選釋事而忘意、書成以問邕、邕不敢對、善曰、試爲我補益之、邕附事見義、善以其不可奪、故兩書並行、既冠見特進李嶠自言、讀書未徧、願一見祕書、嶠乃假直祕書、未幾辭去、嶠驚試問、奧篇隱帙了辨如響、嶠嘆曰、子且名家、嶠爲內史薦邕、乃召拜左拾遺、中宗立、鄭普思以方技幸、擢祕書監、邕諫曰、云云不納玄宗即位召爲戶部郞中、後出爲汲郡北海太守、

に滴り降也、文選江淹別賦、秋露如珠月如珪、

月下長吟久不歸、古今相接眼中稀、解道澄江靜如練、謝朓詩、令人却憶謝玄暉、

本集長吟作沈吟、今作來、靜作淨、却作長、【月下―】月の下に沈吟し久くたゝずみて歸去らず、因て古を懷ふに吳孫權始て此に都を建しより晉宋齊梁陳までの六朝相接で金陵に都し文物衣冠全盛なりしも終に皆亡て故丘となり昔の繁華の風景盡く索落として今見ると稀なると也、眼中は望み見て眼の及ほどの間を指て云也、【解道】はよくも道たることかなと云意也、澄江の句は文選廿七謝玄暉晚登三山還望京邑詩云、餘霞散成綺、澄江淨如練、と今樓に上て江を望めば固に淨して練の如し佳句尚存すれども玄暉今安んか在や、景に觸れ詩を感じ因て長く古の人を憶ふと也、【謝朓】、字玄暉、傳前に見たり、

○題東溪公幽居

本集廿五載之、東谿公の姓名未考、東谿に卜築して幽居するに因て呼て東谿公と號するなるべし、

李太白

杜陵賢人淸且廉、東溪卜築歲將淹、宅近靑山同謝朓、門垂碧柳似陶潛、

【杜陵】は漢の宣帝を葬る處也、京兆に屬す、杜陵の賢人は即東谿公を指て云、其心淸淨にて且廉潔なる人なり、【卜築】新に宅をかまゆるには必ず地の吉凶を占て後築く故に卜築と云、東溪の邊にやしきをかまへてよりはや久くなると云意也、【宅近―】、幽居の景象を云、宅の所在は靑山に近して謝公の宅に同じ門には碧の柳をうゑたれば晉の陶潛柴桑の宅に能似たると也、此詩に所云の靑山は山の名に非ず山色の靑々としたるをさして云、是を以て謝公の靑山に比して云也、謝公の靑山在當塗縣南三十里、寰宇記齊宣城太守謝朓築室于山南、遺址猶存、絕頂有謝公池、唐天寶間改爲謝公山、謝朓詩還望靑山郭、即是也、山下有

也、柳芽を生ずるときは色黄也故に黄金の色と云、禮記月令孟春之月東風解凍、【陌】、字彙、阡陌田間道南北爲阡、東西爲陌、又市中街亦曰陌、

碧水渺々雲茫々、美人不來空、斷腸、預拂青山一片石、與君連日醉壺觴、

【碧水—】、此二句景に觸て故人を思ふを云、渺々本集作浩々、【渺々】、大水貌也、【茫々】、廣大貌、言は碧色の遠水渺々たるを望み雲の茫々たるを見て興を起し友を懷ふに美人久く不來これを思て愁を生じ腸を斷と也、美人は君子を比して云、詩經に彼美人兮西方人兮と云、又離騷經にも美人を君子に比して作れり、此には王漢陽を指て云也、【預拂—】王漢陽が來らんことを欲して招き邀る也、預は俗にかねぐ〵と云辭の意、前かたの義也、かねて青山一片の石を拂ひ潔くして待ほどに必來られよ與君石上に坐して連日いくかも壺觴の酒を酌て醉ひ樂むべきと也、本注云、玉泉子庾信自南朝至北方、雅愛溫子昇所作韓山寺碑、或問信曰、北方何如、曰惟韓山一片石、堪共語、餘若驢鳴狗吠耳、此用其字、陶淵明歸去來辭云、引壺觴以自酌、

○金陵城西樓月下吟

李太白

本集七載之、此詩も亦高きに登て眺望し懷古古人を慕て作れる也、

金陵夜寂涼風發、獨上高樓望吳越、白雲映水搖空城、白露垂珠滴秋月、

【金陵—】、金陵城夜寂々と靜にて凄涼たる秋の風吹發る時獨高樓に上て遙に吳越の地を望み見るとなり、本注齊賢曰、越州會稽郡勾踐所都、蘇州吳郡闔閭所都、今浙東西之地皆吳越也、【白雲—】、二句所見の景を云、秋の天なれば白雲多く起て水に映じ秋風に波たつに因て高城の影も共に動搖するを搖空城と云、白露は珠の如く圓かに結て秋月のさやかなる中

みに非ず、特に浮雲の能白日を蔽て暗からしむるに因て長安を望めども見ることを得ず懐望して愁を生ず、是讒人君の明を蔽ふが爲に賢者進み仕るの路塞て通ぜざるに比す、此詩登臺に懐古を懐ふに因て君を懐ふの思ひを興し帝鄕を望めども見ることを得ず境に觸て逐臣の愁を生ず、太白が志最哀むべし、【注】【今之建康】、建康初め吳の都せし時は建業と云、東晉の時愍帝の諱を避て建業を改て建康と云、六朝皆同じ、即今の南京應天府也、【末句】、七八の結句を指す、【不滿】俗にふがいなきと云辭の如し、【江左】は楊子江の東を江左と云、即東晉の都を指、【復】は敵を平けて我が方へ克ち復へすを云、【中原】は洛陽の故都を指て云、輔按に此注甚謬也、李白が本意に非ず、刊去て可不取、○瀛奎律髓方萬里評云、此詩以鳳凰臺爲名、而詠鳳凰臺不過起語兩句已盡之矣、下六句乃登臺而觀望之景也、三四懷古人之不見也、五六七八詠今日之景而慨帝都之不可見也、○訓解劉會孟曰、其開口雄偉脫落彫飾俱不論、若無後兩句亦不必作出於崔顥而特勝之以此、

○早春寄王漢陽

本集十四載之、王漢陽の名字未考、

李太白

聞道春還未相識、起傍寒梅訪消息、昨夜東風入武陽、陌頭楊柳黃金色、

【聞道―】、起聯は先づ春を試み尋ることを云、聞道は傳へ聞と云義也、道は助辭の字也、言ろは聞けば春ははや還り來りたると云へども未だ春の面目を識らざる故に起て後園に出寒梅に倚傍て春は來たるや否やと消息を訪ひ尋る也春が來れば即梅花が開に依て梅は春の來ると云おとづれ也、故に梅に傍て春の消息を訪、【消息】、易剝云、君子尙消息盈虛、○消息音信也、蜀志諸葛亮傳亮與孟達書曰、承知消息慨然永嘆、【昨夜―】此二句春の已に來ることを云、園に出て見ればいかにも春回て昨夜東風か吹來て武陽に入たると見えて陌頭の楊柳は黃金の色の如く黃芽をふくみたると

逐臣の思を起し此詩を作れる也、

李太白

鳳凰臺上鳳凰遊、鳳去臺空江自流、吳宮花草埋幽徑、晋代衣冠成古丘、

【鳳凰―】、起聯言は此鳳凰臺上は本と鳳凰の遊びし處にて當時の帝都なればさしも佳麗の地なりしに、鳳凰も去て不復遊只臺のみ空く存して長江昔に易らず自流るばかり也、【吳宮―】、二句言は昔孫權始て此金陵に都を建國を吳と號して繁昌なりしが今は名のみ遺りて昔吳宮に植し花草は空く幽徑を埋て人の賞するなし其後永嘉の末晋室南に徙て金陵に都して文物盛なりしも終に故國となり當時衣冠束帶して朝に立し世臣大家も總て死亡て黄土となり今日僅に古丘をのみ留ると也、通鑑綱目後漢後皇帝建興七年、四月吳王即皇帝位、大赦改元黄龍、九月遷都建業、云云、吳王は孫權也、建業は即金陵今の南京也、詩に吳宮と云は孫權が都せしことを云、晋の 永嘉の 末西晋は亡びて瑯琊王睿が金陵に徙て都を立て皇帝の位に即く是を東晉の元帝と云、事は見于第二卷金陵新亭下、

三山半落青天外、二水中分白鷺洲、總爲浮雲能蔽日、長安不見使人愁、

金陵今之建康、晋南渡都於此、太白詠鳳凰臺而感慨懷古、末句不滿於晋之偷安江左而無志於復中原也、

【三山】、唐詩訓解注云、三山在金陵西南、下臨大江、三峯排列故名、二水又云秦淮源出勾容溧水兩山間、合流至金陵、分爲二支、一入城、一遶城外、共夾一洲、曰白鷺、大明一統志、應天府白鷺洲在府西南江中、二句は遠く望む景を云、三山は極て高く雲を凌て天に逼る故に下地より秀たるとは不見して却て天上より落ちかゝりたる如く也、故に半落青天外と云、二水の分れて洲を夾て流るゝは是即白鷺洲なりと云意、【總爲―】、訓解注 陸賈新語、邪臣蔽賢猶浮雲之障日月、○秦苻堅幸慕容垂夫人、宦者趙整曰、不見鶴來入燕室、但見浮雲蔽白日、詩或用此、本集注 晋明帝曰、擧頭見日不見長安、結句言は 但古を弔して 感慨するの

因て歸り來ること遲き也、蘆の花白に依て遙に望めは霜の白くおきたる如く見る者也、故に云秋色は先づ蘆花に着たるやらん蘆のしげりたる兩岸を見ればはや霜の重く降たる色見ゆると也、爾雅萍蓱也、大者曰蘋、郭璞注、江東人謂之薸、本艸綱目、時珍曰、夏秋開小白花故稱白蘋、

扁舟繫岸依林樾、（林樾樹林之蔭、樾音曰）蕭々兩鬢吹華髮、萬事不理醉復醒、長占烟波弄明月、（八句會景象於胸中、脫塵凡於世表、眞有悠然自得之趣、）

【扁舟】は小き舟也、史記貨殖傳范蠡傳、乃乘扁舟浮於江湖、註漢書音義曰、特舟也、○楊升菴文集六十七云、或問予、詩人多用扁舟何處爲始、予按、南史天淵池新製鯿舟、形甚狹、故小舟稱扁舟、六朝詩惟王由禮有扁舟夜向江頭泊句、至唐人則多用之、小き舟をさしよせて岸に繫き林のこかげに依り傍て泊る也、【樾】は木かげのしげみを云、字彙、樾樹陰也、【蕭々】、髮の色易りてうるほひなく亂れたる貌を云也、【華髮】、白髮を云、劉向新序卷五云、齊宣王謂閭丘卬曰、夫士華髮墮顚而後可用耳、言は色易てばら〳〵としたる兩鬢を風の吹て華髮を亂すと也、【萬事―】、世間萬事の紛冗を心に介むことなく悉く絕棄て不理只酒を以自慰み醉ては復た醒め醒れば復醉て長に萬頃の烟波を我が物と占なして其間に優游し明月を弄して悠然として自得すると也、注全篇八句の趣天地自然の景象を胸中に融會し景情相合して氣象淸高にて塵冗凡俗を世の外に脫け出たる意ある也、【悠然】、心遠貌也、【自得】は自ら心に會得して獨り樂むの意なり、

○登金陵鳳凰臺

本集二十一載之、注齊賢曰、宋元嘉中王顗見異鳥集于山、時謂鳳凰、遂起臺於山、○三才圖繪云、鳳凰故基在江陰縣治之南、玄宗李白を寵し玉ひて官を授んとせられしを高力士貴妃を激して怒らしめ李白が官に進んとするを沮み止るに因て竟に官を授られず白も亦親近の爲に妨らるゝことを知て懇に暇を請て長安を去てより四方に周遊し崔宗之と采石より船に乘て金陵に至り鳳凰臺に登りて古跡を覽に因て感慨して

身の様子をつくろふを冶と云、遊行冶容の郎と云義也、【郎】は男子之稱也、【紫騮嘶ー】、彼遊冶郎の騎たる紫騮馬は頻に嘶て花の散り亂る林の中へ去て見えずなれり採蓮の女此冶郎を見て意を屬して眷戀し遙に目送したゝずみて去りあへず空く竊に腸を斷て思ひを結ぶと也、【紫騮】は說文騮赤馬黑鬣、【躊躇】は本集作踟蹰、躊躇注緩步不欲去也、たちやすらふてさりあへぬ貌也、たちもとをると訓ず、

○清江曲 首章形容江景之清幽、次章備言情懷之蕭散、

此詩は宋朝の人の作也、此集に作者の名を闕、按氏族排韻、蘇庠字養直、有詩名、清江曲云、長占烟波弄明月、坡謂置太白集中誰疑其非、○鶴林玉露天集五云、蘇養直之父伯固從東坡遊、我夢扁舟浮震澤之詞爲伯固作也、養直屬玉雙飛水滿塘之句亦見賞於坡、稱爲吾家養直、作此詩時年甚少而格律已老蒼如此、宋紹興間與徐師川同召、師川赴養直辭、師川造朝便道過養直留飲甚歡、二公平日對奕、徐高於蘇、是日養直拈一子笑視師川曰、今日須還老夫下此一着、師川有愧色、遊誠之跋養直墨蹟云、後湖胸中本無軒冕、是以風神筆墨皆自蕭散、非慕名隱居者比也、士生斯世苟無功利及人、區々奔走老死塵埃不如學蘇養直、注前章は起句より第四句まで陽韻の字を押す、此章には江上の景清幽なるをかたどり寫す、後章には五六八の句に月韻の字を押す、此章にては情懷の蕭散たるを言叙る也、【蕭散】はさはやかなる意也、

屬玉雙飛水滿塘、屬玉鸀之類也、屬音燭、菰蒲深處浴鴛鴦、匹鳥也、白蘋滿棹歸來晚、秋着蘆花兩岸霜、

【屬玉】、事文類聚後集四十六、鷺水鳥毛白而潔、故謂之白鳥、齊魯之間謂之舂鋤、青脚高尺餘、解指尾喙長三寸許、頂上有毛、十數枝毿々然、一名屬玉似鵁鶄、屬玉の一雙並び飛ぶ邊を望めば水まん〳〵とたゝへて塘に滿ち汀嶼の邊菰蒲の生しげりて深き處には鴛鴦水中に出沒し羽毛を浴して優游し悞と也、注【匹鳥】、崔豹古今注云、鴛鴦水鳥、鳧類也、雌雄未嘗相離、人得其一則一思而至死、故曰疋鳥、【白蘋滿ー】、水中のうきくさ棹に滿てもつをほれ船を移すこと溢るに

水寒、水中照見催租瘢、東坡自注云、土人謂布穀爲脫却布袴、先生此詩太相類、

八句

此八句亦是古風の短篇也、近體の律詩にあらず、皆古詩の體也、

○採蓮曲

（耶溪勝景此曲描畫得眞、豈非曲中之雅奏也、）

本集四載之、題注齊賢曰、秦川唱采蓮歌、今競渡船唱齊橈引笛唱、采虹于船頭刻爲獸頭起齊景公、公造采蓮舟令宮人綵女撐之、士贇曰、樂錄草木二十四曲內有採蓮曲、荷花の開たる時に船を泛て美女を載せ花を採て遊ぶ時唱る歌也、古樂府の題にて作れる也、曲字注前に見たり、

李太白

若耶溪傍採蓮女、（若耶溪在會稽山陰）笑隔荷花共人語、日照新粧水底明、風飄香袂空中擧、

本注士贇曰、越絕書薛燭對越王曰、若耶之溪涸而出銅、今在會稽縣東南、北流二十五里與鏡湖合、梁羊侃性豪侈善音律、自造採蓮棹歌、甚有新致、姬妾列侍、○大明一統志紹興府、若耶溪在府城南二十五里、與鏡湖合、西施採蓮、歐冶鑄劍於此、若耶溪の傍に船を泛て蓮を採て遊ぶ女は歡び笑て荷花を隔てながら伴ふ人と共に物がたりなどして花を採と也、【日照―】、晴日婦女の新に粧ひたる顏色を照して水にうつろひ水底に明にうるはしく見ゆる也、溪風は香袂を吹飄してひら〳〵と飄揚し空中に擧ると也、注山陰大明一統志紹興府、有會稽郡山陰縣、

岸上誰家遊冶郎、三三五五映垂楊、紫騮嘶入落花去、（紫騮良馬名、）見此躊躇空斷腸、（躊躇緩步不欲去也、）

【岸上―】、岸上に往來するは何れの家の人か容貌ふりよきをのこ或は三人づれ或は五人づれにて綠楊の緣をたれたる陰にうつろひてなまめき遊ぶと也、【遊冶】、上繫辭、冶容誨淫、韻會妖冶女態也、媚をなして

泣涕如雨、注【塞城】は邊軍の關城也、然れども此詩の城邊と云は戍婦の所處の城邊ならんか、若邊塞の城とせば此詩は征夫が郷里の婦を憶ふの作とすべし、

○戲和答禽語、

詩式云、禽言鳥語也、因其自呼之名而名之、宋梅聖俞蘇東坡諸公倶有之詩、鳥の鳴聲人語に似たるに因て其語に依て戲に和答する也、此詩は布穀の鳴に答る也、布穀は常に脱却布袴と鳴に因て布袴を脱却せよと人に勸むると聞なして其語に答るの詩也、此山谷農父に代て作れる也、

黄山谷

南村北村雨一犂、新婦餉姑翁哺兒、田中啼鳥自四時、催人脱袴著新衣、著新替舊亦不惡、去年租重無袴著、

【南村—】、帳中香云、此一聯擧農務之時、及此時聞鳥聲而有感慨也、起句には先づ農事の時に及ぶことを云、雨一犂は田地を犂にてすきかへす深さほど土に濕ひ透る雨のふるを一犂雨と云、春に及で南村北村ともに一犂の雨過て土沃ふ時は農事も始りて壯盛の夫は田に出て耕作忙しく新婦は姑に餉をすゝめ老翁は兒孫を愛して食物をくゝめて食はしむる也、【田中—】、帳中香云、此一聯啼鳥四時催人著新衣、農務之時聞之尤有感、田中に鳴鳥はいつとなく自ら四時ともに人を催し布袴を脱却して新衣を著よと勸むる也、【著新—】、帳中香云、此一聯所以答啼鳥也、如或說則此句云去年、指元豐三年也、公代農父而答鳥也、本注云、前漢食貨志曰、租挈重、注云、收田租之約令也、農父啼鳥に答て云汝が勸る如く新服を著て舊服を替へすつることは固に惡からぬこと最快かるべし然ども去歲年貢のめん重してものなりを多く官家へ收めとられし故に著るべき袴なくて舊を脱却し新に替べきやうもなきと也、○山谷本注云、東坡在黃州日、效梅聖俞躰作五禽言、布穀云、南山昨夜雨、西溪不可渡、溪邊布穀兒、勸我脱布袴、不辭脱袴溪

は沙州燉煌郡に在り、即玉門關なり、長安の都より三千六百里を隔たる處也、此には大數を擧て三千里と云、言は征夫の所處玉關までは此より三千里の道を隔たればたとひ音信の書翰の寄せたりとも那そ夫のかたへ達して便を聞くことを得べきや只空く憶ふのみなると云意也、注班超傳見于第二卷、

○烏夜啼　爲戍婦作

本集三載之、題注士贇曰、按樂錄烏夜啼清商曲也、乃周房中樂之遺聲、江左所謂梁宋新聲也、其辭始於宋臨川王義慶所作、宋元嘉中徙彭城王義康豫章郡、義慶時爲江州相見而哭、文帝聞而怪之、召還宅、義慶大懼、妓妾聞烏夜啼叩齋閣云、明日應有赦、及旦改南兗州刺史、因此作歌、故其詞云、籠窻牕不開、烏夜啼夜々望郎來、蓋詠其妾也、太白此詩亦祖此、意詞不同耳、○烏夜啼は樂曲の名也、此太白が詩は昔の樂曲を取て題に命ずれども詩の意は樂曲と不同これは邊郡へ戍に往たる者の婦家に在て遠征の夫を思ふの詩也、注戍婦は遠國へ戍に往たる人の婦が家を守て內に居るを云也、

李太白

黃雲城邊烏欲棲、歸飛啞々枝上啼、機中織錦秦川女、碧紗如烟隔窻語、停梭悵然憶遠人、獨宿孤房淚如雨、塞城之烏欲棲、機中織女因而有感、停梭以思征夫、獨宿空閨、隕淚如雨、

【黃雲―】、本注士贇曰、淮南子黃泉之埃上爲黃雲、啞啞烏聲、言は黃雲の低れ覆ふ城の邊日もやう〳〵暮れかゝるころ烏も棲み宿らんとて林に飛歸り枝上に集て啞々と啼き噪也、【機中―】、機中に錦を織て業とし秦川に征夫の家を留守する女は碧紗の鮮麗如烟なるを衣て窓を隔て共に機を織人と語り在しが枝上に烏の啞々啼を聞て忽心に感ずること有て所織の梭を停て悵然と心に愁て遠方に在人を憶に林烏だも棲宿の時を知て暮には林に還る我が夫は去て久しく不還我獨孤房に宿して偕に處ことなしこれを思へば泣淚如雨におつると也、【淚如雨】、詩邶風燕々篇云、

となかるべしと云意也、注【繾綣】、なごりを惜むの心親切にて相着して離れがたきを云、韻會繾不二相離散一也、詩以謹二繾綣一、毛傳反覆也、正義云、昭二十五年左傳繾綣從レ公、是牢固相著之意、○詩眼云、山谷言學者若不レ見二古人用レ意處一、但得二其皮毛一所三以去レ之更遠一、如二風吹柳花滿店香一、一人復能爲二此句一、亦未二是太白一、至二于吳姬壓レ酒勸二客嘗一、壓酒字他人亦難レ及、金陵子弟來相送、欲レ行不レ行各盡レ觴、益不レ同、請君試問二東流水一、別意與レ之誰短長、至レ此乃眞太白妙處當レ潛レ心焉、故學者先以レ識爲レ主、釋家所謂正法眼直須レ具二此眼目一方可レ入レ道、

○思邊　此即采薇昔我往矣楊柳依々、今我來思雨雪霏々之意、

本集廿五載レ之、邊塞へ戍に往し夫を思ふの詩也、注采薇は小雅の中の篇也、此詩は邊塞へ往たる軍士歳の暮に還るとき往返の時景を述る辭也、【依々】、嚴粲詩緝云、依々柔弱之貌、柳條のたはやかにてゆら〳〵と物に依り傍ふが如くなる樣子を依々と云、【霏々】、毛傳霏々甚也、ひら〳〵と雪のしきりに降を云、正義云、總述二往反一之辭、昔出レ家往矣之時楊柳依々、今我來思事得二還返一、又遇二雨雪霏々一、

李太白

去歲何時君別レ妾、南園綠艸飛二蝴蝶一、今歲何時妾憶レ君、西山白雪暗二秦雲一、玉關去レ此三千里、班超曰不三敢望レ到二酒泉一、但願生入二玉門關一、欲レ寄二音書一那得レ聞、

【去歲―】二句夫に別れし時を云、去歲何れの時節か君妾に別れて邊塞の戍りに行れしや、憶ふに南園艸綠にて蝴蝶の飛ぶ春のころにてありしと云意也、【蝴蝶】は本胡蝶也、莊子に夢爲二胡蝶一と云是也、後人蟲を加て蝴とす、胡は鬚也、ひげの長き蝶と云義也、本艸綱目、李時珍曰蝶美二於鬚一故名二蝴蝶一、俗謂レ鬚爲レ胡也、【今歲―】別離の時久きを云、戍婦家に在て遠國の夫を憶ふ今何れの時ぞや別れし年も暮て春に改れども不レ還又夏秋も過さりぬれど尙不レ還して已に西山には白雪ふりつみて秦雲のすさまじく暗して嚴寒の時になりたると也、【玉關―】、本集得聞作二可聞一、【玉關】

ぼらけに空晴て山も水も一樣の綠に見えたると也、此句の妙久く江湖に慣たる人に非んば識べからず、【回看―】、櫓をおしながら首を矯て天際を回らし看て中流に船を下せば岩上には無心の行雲相逐て空をわたると也、注陶淵明が歸去來の辭也、

○金陵酒肆留別

本集十五載之、金陵注第一卷に見えたり、【酒肆】は酒を賣る家也、字彙肆市鬻之舍也、【留別】は旅に赴く人我を送來る人に與るを留別と云、詩を留めおきて別れ去の意也、金陵の酒をうる家にて離別の酒宴をして此詩を作て留おく也、

李太白

風吹柳花滿店香、吳姬壓酒喚客嘗、（本集作使）金陵子弟來相送、欲行不行各盡觴、請君試問東流水、別意與之誰短長、（金陵子弟餞客於酒肆、欲去不去之際其繾綣之情較之江流東去、別意與江流相爲無窮爾、）

第一句離別する時節の景を叙ぶ、暮春の風柳花を吹亂して酒店に滿て香しき也、【店】、肆也、所以置貨鬻物也、柳絮は梅花桂花の如く香き物に非ず、然れども柳絮も亦自ら少く柳絮の氣あれば香とも云べきにや竹を細々香と云類也、【吳姬】、吳國越國は美女の多き處なり故に美人を總て吳姬越女と云也、姬は婦人の美稱也、前漢文帝本紀云、母曰薄姬、注師古曰、姬本周之姬、貴於衆國之女、所以婦人美號、皆稱姬焉、後總謂衆妾爲姬、史記云、高祖居山東時好美姬是也、【壓酒】は杯の上へかろきなどとておさへて酒を盈しむるを云、酒肆に貯へ置ける美人酒を強て客に飲しむるを云、【金陵―】、金陵のわかき者ども李白に餞せん爲に皆來て相送也、既に行んとすれども尙離情に不勝して行き不得又止て各〻觴の數を盡して痛飲する也、【請君】は來て相送子弟どもへ泛くかけて云請ふ試に東流の水に問へ日夜窮もなく逝く水と今日離別をなす愁傷の意緒と誰か短く誰か長きやと恐は別意の窮もなきと東流の長く不斷と共に等く盡るこ

値て洞口には雲深く夜色暝暗にて月もなければ宿すべきやうもなきと也、注【宿於】、岩底に宿せんとすと云へどもと云意に看べし、

六句

氷川詩式云、七言六句律作者最少、惟李太白一首在古詩中、今錄出以備一體、送羽林陶將軍詩是也、

○漁翁

柳文四十三載之、○嚴滄浪詩話評曰、柳子厚漁翁夜傍西巖宿之詩、東坡刪去後二句、使子厚復生亦必心服、

柳子厚

漁翁夜傍西巖宿、曉汲清湘燃楚竹、
烟消日出不見人、欸乃一聲山水綠、欸乃歌聲也〔欸〕音襖、〔乃〕音靄、
回看天際下中流、岩上無心雲相逐、歸去來辭、雲無心而出岫、

一二の句【清湘】は即湘水也、注前に見たり、【楚竹】、竹譜事文類聚等に不見、竹の名に非ざるか、言は漁翁釣を罷て夜西岩の岸に傍ふて船を繫で宿し曉起て清流の湘水を汲で楚竹を折て篷底にて幽に火を燃也、三四の句【欸乃】、字彙云、欸乃棹船相應聲、黃山谷曰、欸乃湖中節歌聲、元結有欸乃曲、黃直翁案項氏家說曰、劉蛻文集有湖中靄廼歌、劉言史瀟湘詩有閑歌曖廼深峽裏、元次山有湖南欸乃歌、三者皆一事但用字異爾、欸本音哀、亦作上聲讀、後人因柳子厚集中有注云一本作襖靄、遂欲音欸爲襖音乃爲靄、不知彼注自謂別本作襖靄、非謂欸乃當音襖靄也、黃山谷不加深考、遂從而實之、是特未見劉蛻劉言史之詩爾、靄廼襖靄不妨兩本並行、豈必比而同之以爲一言也、あふあいの音に讀こと久し、仍舊あふあいと讀べし、船をやるとき櫓の船に觸れて聲相應じて鳴ることを欸乃と云、其拍子に合せて歌ふを欸乃の歌と云、此詩に欸乃一聲と云は欸乃の歌を云なり、二句言ろは楚竹を燃して湘水を煮る間にそろ〳〵と曙に至て江上の水烟も稍消て夜もあけはなれ朝日始て出るころ江上靜にて人不見やがて船に棹さしておし出し欸乃の歌を一聲歌ふて江上を見はらしたれば朝

詩曰、城中寸土云云、又有久從林下遊頗識林下趣、從渠綠陰繁、不礙淸風度、閑來石上眠、落葉不知數、一鳥忽飛來、啼破幽絕處、荊公遊湖上愛之乃稱揚其名、坡晩年亦與之遊、甚多酬唱、

城中寸土如寸金、幽軒種竹只十箇、春風愼勿長兒孫、韓笋詩環立比兒孫、穿我堦前綠苔破、

一二の句言は都城の中は四民集ひ聚る故に第宅狹して餘地なし、宅の難得こと方寸の土地は方寸の金を以て買ほど貴し故に廣く宅をかまゆることを不得、幽軒の傍に竹を種ること僅に唯十箇竿に不過と也、三四の句春風溫暖の和氣を以て化育すれば必多く笋を生ず然れども此竹は笋を生ずることを不願故に春風に寄語して云愼て此竹をして兒孫を長ぜしむることなかるべしいかにとなれば多く笋を生すれば階前に生布たる靑苔を穿ち破て迸出し庭上の景致を殺却すべきほどにと也、【韓】は韓退之也、韓文十和侯協律詠笋長篇あり、其中一聯に云、成行齊婢僕、環立比兒孫、

○遊三遊洞

東坡詩集一載之、【三遊洞】大明一統志、荊州府三遊洞在夷陵州西北二十五里、唐白居易與弟行簡及元稹三人游此作三遊洞記刻石壁上、後人因名、宋蘇軾與弟轍及黃庭堅三人亦嘗遊焉、

蘇子瞻

凍雨霏々半成雪、遊人屨冷蒼崖滑、不辭攜被岩底眠、洞口雲深夜無月、洞中幽寒況値雪景、雖攜衾被宿岩底、亦奈雲深月黑何

【凍雨】はみぞれまじりの雨也、【霏々】ひら〳〵と雪のふる貌也、詩小雅采薇篇云、今我來思雨雪霏々、朱注霏々雪甚貌、一二の句みぞれまじりの凍雨霏々としきりに降て半は雪となつて飛也、此時節なれば寒氣甚し、遊人の屨も冷く蒼々と苔むしたる崖滑かにて徑路も行き易からぬと也、滑とはすべるを云也、三四句被を攜へ來て此岩底に眠ることを嫌ふ心にてはなし、かねては一宿もすべき心なれども偶、雨雪の時に

遠寥亮道士效作歩虚聲、備言衆仙縹緲輕擧之事、仙人の虚空中に飛歩して輕擧自在なるを言ふ詩也、此詩作者遺響三體詩並作高駢、遺響注云、此詩氏族大全以爲、明皇賜葉法善詩、法善處州人、今處州有點易亭、

高駢

新唐書列傳一百四十九下叛臣傳有高駢傳、文甚長、不悉錄此、才子傳云、駢字千里、幽州人也、少閑鞍馬弓刀、善射有膂力、初事朱叔明爲府司馬、遷侍御史、駢爲西川節度、築成都城四十里、朝廷疑之移鎭渚宮初駢以戰討之勳累拜節度、時巣賊日々甚、兩京亦陷、駢遂無勤王之意、包藏禍心欲便徼幸、帝知之以王鐸代爲都統、駢失兵柄威望頓盡、棄人間事屬意神仙、爲呂用之張守一等所惑卒至叛逆首亂、磔屍道途、

青溪道士人不識、上天下天鶴一隻、洞門深鎖碧窻寒、滴露研朱點周易、

【青溪】、在浙江處州府青田縣三十六洞天之一也、三體詩作清溪、注庾仲雍荊州記曰、臨淮縣有清溪山、山東有泉、泉側有道士舍、郭景純神仙遊詩曰、清溪千仞餘、中有一道士、【道士】、仙道を學ぶ人也、注第二卷に見たり、【洞門】、前漢書佞幸傳董賢傳、重殿洞門、師古注、洞門謂門々相當也、按に此詩所謂洞門は洞口の門なるべし、重殿洞門の洞門にては有まじきか、言は青溪に道士あれども世人曾て識ことを不得或は天に上り又天より下るにも只一隻の鶴に乘て飛行自在にせらるゝ也其平生は洞口の門を深く掩ひ鎖して碧窻氣の寒き中に座して露を滴て朱を研て周易の書を注し點などをして道を修すると也、

○十竹

謂城市地狹人稠、軒前只種十竹、謂春來不須生、筍迸破階苔也、

冷齋夜話載此詩、軒前に竹を十竿植て此詩を題する也、【注】【城市】は城中の市店也、天下の人來て聚り居に依て地狹きに人稠して宅を廣くかまゆることを不得が故に僅に十竹を種也、【筍迸】は俗にはしり竹と云是也、竹根地中をくゞりて傍に迸出する也、

清順

冷齋夜話云、西湖僧淸順頎然淸苦、多佳句、嘗賦十竹、

酒を飲むときはいよいよ驕矜の勢を益すなれば其の豪勇任俠の意氣の盛ならんこと想ひやりて可見と也、

○尋隱者不遇

隱逸の人を訪ひ尋れども他出して不在家遇ふことを不得に依て此詩を留題すを也、

魏野

宋史列傳二百十六、魏野陝州人、嗜吟咏、居州之東郊、手植竹樹、淸泉環遶旁對雲山、景趣幽絶、前爲艸堂、彈琴其中、眞宗祀汾陰、被薦、野上言曰、麋鹿之性頓纓則狂、豈能瞻對殿墀仰奉淸燕、

尋眞悞入蓬萊島、（蓬萊山在海中、神仙所居、）**香風不動松花老、採芝何處未歸來、**（四皓隱於商山、採芝而茹、）**白雲滿地無人掃、**

【悞入】悞字恐是誤字歟、【蓬萊】は海中の三神山の一也、蓬萊山方丈山瀛洲是を三山と云、共に神仙の所居也、こゝに蓬萊と云は隱逸の人の所居を仙山に比して云也、一二の句言ろは隱逸の眞人を尋來に因ておもはずも誤て蓬萊の仙境に入たると也、是隱者の居に尋ね到るを云、二の句仙境の景象を看ればしんしんとして香風も吹動かず松樹の花は開老て空山寂寞として人跡隔りたえたる幽致なると云意、風は元香なけれども花木を吹ときは其香氣自ら風に從て轉ずる故に香風と云也、松花は三四月の時節葉間に小黃花を開也、蘇邁經三泉路詩云、三月松作花、春行日漸賒、三四の句不遇の意を云、【芝】は仙者の食物也、第一卷勸學文の注に詳也、言は隱者の居を叩けば偶ゝ出られたる後にて遇ふことを不得想ふに定て芝を採ん爲に出られたらんが何の處に採てか在や未だ歸來らず幽廬には白雲うち掩て地に滿ち人の掃ふていもなく寂々たるのみなると云意也、

○歩虚詞

唐詩遺響七及三體詩載之、三體詩題注異苑曰、陳思王遊漁山、忽聞空裏有誦經聲、淸遠寥亮、使解音者寫之、爲神仙之聲、道士效之作歩虚、此歩虚之始也、唐詩遺響一有呉貞節歩虚詞、題注曰、異苑錄神仙聲淸

樓垂柳邊、以二咸陽之少年一飲二新豐之美酒一、其豪俠之意氣可二想見一矣、

【新豐】、前漢書地理志上、京兆有二新豐縣一、注應劭曰、太上皇思二東歸一、於レ是高祖改二築城市街里一以象レ豐、徙二豐民一以實レ之、故號二新豐一○西京雜記卷二曰、太上皇徙二長安一居二深宮一、悽愴不レ樂、高祖竊因二左右一問二其故一、以二平生所レ好皆屠販少年酤レ酒賣レ餅鬪レ鷄蹴レ鞠以レ此爲レ歡今皆無レ此故以不レ樂、高祖乃作二新豐一移二諸故人一實レ之、太上皇乃悅、故新豐多二無賴一無二衣冠子弟一故也、高祖少時常祭二枌楡之社一、及レ移二新豐一亦還立焉、高帝既作二新豐一並移二舊社一、衢巷棟宇物色惟舊、士女老幼相携路首各知二其室一、放二犬羊鷄鴨於通塗一亦競識二其家一、其匠人吳寬所レ營也、移者皆悅二其似一【斗十千】、酒一斗の價錢十貫文也、瑯琊代醉編二十二云、王楙曰、郭生次象嘗與レ僕論二唐酒一、郭謂前輩引二老杜詩速令三相就飲二一斗一恰有二三百靑銅錢一、以レ此知二當時酒價一、然白樂天與二劉夢得一沽レ酒閒飲詩曰、共把二十千一沽二一斗一、相看七十欠二三年一、當二劉白之時一酒價何太不レ廉哉、僕謂不レ然、十千一斗乃詩人寓言、此曹子建樂府中語耳、唐人引レ此甚多、如二李白詩曰一、金尊沽レ酒斗十千、王維詩曰、新豐美酒斗十千、崔國輔詩曰、與沽一斗酒恰用二十千錢一、唐人言二一斗十千一類然、一斗三百錢獨見二子美所一レ云、故引以定二當時之價一、

【咸陽】は秦の故都、即唐長安也、大明一統志西安府咸陽縣在二府城西北五十里一、其地在二山南水北一、山水皆陽、故名二咸陽一、【遊俠】はをのこだてをして客を結て互に救レ難報レ讎氣岸張て世に矜る徒を遊俠と云、荀子曰、立二氣岸一作二威福一結二私交一以立二强于世一者謂二之遊俠一、史記集解序索隱云、遊俠謂輕レ死重レ氣如二荊軻豫讓之輩一也、遊從也、俠挾也、持也、言能相從遊行挾二持之事一、【意氣】、楚漢春秋云、項羽美人虞氏歌曰、漢兵已略レ地、四方楚歌聲、大王意氣盡、賤妾何聊レ生○前漢書李廣傳云、吏士無二人色一、而廣意氣自如益治レ軍、言ろは新豐の酒は美味にして價甚だ貴し、一斗の直に錢十千文ほどを出して沽ふ也、咸陽城中に遊俠を好て驕矜を恣にする者多は少年也、此輩相逢て會飲するには彼新豐の美酒を沽て互に强ひ勸むれば豪勇の意氣を張て君がさされたる盃なればなにがさて辭すべきと引うけて痛飲してつよみを見し相共に飲むほどに騎たる馬は樓下の柳の邊に繫ぎすてゝ歸期をも不レ知日を暮すと也、[注]咸陽の少年血氣盛なるを以て新豐の美

江水、（詩彼美人兮西方之人兮、）枕上片時春夢中、行盡江南數千里、（數千里行於片時間非夢而何、）

【洞房】、文選靈光殿賦、洞房叫窱而幽邃、注銑曰、洞通也、通房長遠而幽邃也、【湘江】、湘水也、大明一統志、衡州府湘水在府城東、源出廣西興安縣陽海山、流至分水嶺分流北流者謂之湘水、一の句は時節を記す、洞房の中昨夜春風吹き起る因て時改り春來り物候の新なるに感じて久く隔りたる人を思て遙に湘江の水の邊を想ひやると也、美人は賢者に比して云也、我が友の賢なる人を思ふの意也、[注]詩邶風簡兮篇、云誰之思、西方美人、彼美人兮、西方人兮、詩經に美人と云も賢者を比して云へる也、【枕上―】、遠方の人を思ひながら枕を支て睡たれば枕上に於て片時の間夢中に湘江の南數千里をこえて彼美人を尋ね訪ふと覺たると也、【江南】は即湘江の邊を云、杜常が詩所謂江南に非ず、杜常が行盡す江南と云は楊子江の南也、[注]數千里の路を夢ならでは俄に行きがたし此詩片時の間に行盡と云へば眞に夢の詩と見えて能く題にかなふたると云評也、

○少年行

王右丞詩集一唐詩歸九載之、少年行は豪俠の少年意氣を以て世に矜るありさまを形容する也、李白詩集六少年行の題注に士贇曰、樂府遺聲、遊俠三十一曲有少年行、

王維

新唐書列傳一百二十七、王維字摩詰、九歲知屬辭、與弟縉齊名、資孝友、開元初擢進士、調大樂丞、坐累爲濟州司倉參軍、張九齡執政擢右拾遺、歷監察御史、累遷給事中、安祿山反、玄宗西狩、維爲賊得、以藥下利陽瘖、祿山素知其才、迎置洛陽、迫爲給事中、祿山大宴凝碧池、悉召梨園諸工合樂、諸工皆泣、維聞悲甚、賦詩悼痛、賊平皆下獄、或以詩聞行在、肅宗憐之、下遷太子中允、久之遷中庶子、三遷尚書右丞、上元初卒、年六十一、

新豐美酒斗十千、咸陽遊俠多少年、相逢意氣爲君飮、繫馬高

作武夷九曲棹歌、此其一也、詩云、九曲將窮眼豁然、桑麻雨露靄平川、漁郎更覓桃源路、除是人間別有天、朱文公の詩も此李白が詩に本て作れると也、

○山中對酌

本集二十三題作山中與幽人對酌、山中にて幽人と相對して酒を飲酔後に此詩を作て客を謝する也、

李太白

兩人對酌山花開、一盃一盃復一盃、我醉欲眠君且去、明朝有意抱琴來、二人對飲而至於醉、我眠君歸、明日抱琴相就不妨、又對酌也、

本集君作卿、注齊賢曰、陶潛貴賤造之有酒輙設、潛若先醉便語客、我醉欲眠卿可去、山中にて兩人相對して酒を酌むをりふし山花開て樽前に向ふ此花を看て肴として一盃酌では飲み又酌では飲ほどに已に陶然と酔てとろ〳〵と眠を催す故に客を謝して曰我已に酔て眠んとす君且く歸去べし明朝又對飲せんとするの意あらば琴を抱て來られよ又相對して一酔すべしと也、譚元春云、有意二字有不敢必之意、【琴】、事文類聚續集二十二云、琴長三尺六寸六分、廣六寸、上曰池、下曰賓、前廣後狹、象尊卑也、上圓下方法天地也、五絃象五行、大絃爲君、小絃爲臣、文王武王加二絃以合君臣之恩、琴操 注【相就不妨】、相就は我に來り就て遊也、不妨は惡しかるまじと云意也、

○春夢

唐詩正音六載之、春の夜遙に友人を思ふて臥たれば夢に行て友の所に到ることを記する也、

岑參

新唐書無岑參傳、才子傳三云、參南陽人、天寶三年趙岳榜第二人及第、累官左補闕起居郎、出爲嘉州刺史、杜鴻漸表置安西幕府、拜職方郎中兼侍御史、辭罷、別業在杜陵山中、後終于蜀、參博覽史籍、尤工綴文、屬詞清尚、用心良苦、詩調尤高、放情山水、故常懷逸念、奇造幽致所得往々超拔、孤秀度越常情、至德中裴休杜甫等常薦其識度清遠議論雅正、未及大用而謝世、

洞房昨夜春風起、遙憶美人湘

もに流ると也、三四の句三溪本集作清溪、縣の名也、夜清溪縣より發して三峽に向ふ、三峽は兩山流を夾て甚高く峙つ、其間を船にて過るに上天を仰げば兩山の間より僅に線ほどに天狹く見る也、こゝに至ては半輪の月をも見がたし、故曰思君とも不見空く渝州に下り向ふと也、君は月を指て云也、月を愛して不已の意也、○王元美曰、此是太白佳境、然二十八字中有峨眉山平羌江清溪三峽渝州、使後人爲之不勝痕跡矣、益見此老鑪錘之妙、

○山中答俗人

本集十九載之、題作山中問答、詩林廣記唐詩歸並題作答山中俗人、鍾伯敬曰、此題妙在不渾厚、此詩は題を設けて自問自答して自ら志を云也、

李太白

問我何事栖碧山、笑而不答心自閑、
桃花流水宛然去、別有天地非人間、（文公九曲棹歌、漁郎更覓桃源路、除此人間別有天用此詩也）

【何事】、本集作何意、【宛然】、作窅然、注齊賢曰、蜀志人問諸葛亮之志、亮抱膝笑而不答、士贇曰、列子曰仲尼笑而不答、莊子知北遊適遭無爲謂而問焉、三問無爲謂不答也、非不答也、不知答也、俗人我問ふそなたは何の意にてか此碧の山を好て栖るゝやと也、此意俗人の解べきに非ず故にうち笑て不答自若として心清閑なり、心自閑なる即是碧山を樂むの意也、但人に向て說がたし、末の二句は心自閑なる中より見出し來る者也、三四の句桃花源記より生じ來るならんか、陶淵明桃花源記云、晉太元中武陵人捕魚爲業、緣溪行、忽逢桃花林、夾岸數百步中無雜樹、行窮其林、林盡水源便得一山、山有小口、舍船從口入、屋舍儼然雞犬相聞、人見漁人乃大驚問所從來、具答之、便要還家設酒殺雞作食自云、先世避秦時亂來此、遂與外人間隔、【宛然】、韻會宛然如依然、此二句は自言栖碧山之意也、言は桃花流水に泛て日夜宛然として流れる曾て一點塵世の氣なし、別に一天地人間の外に在る者の如し、故に此碧山を樂て栖むと也、譚元春曰、已答了俗人卒不省得妙々、注此詩の注に非ず、詩の後に詩話を附する也、武夷山有九曲、朱文公

七言古風短篇

氷川詩式ニ云、七言始于漢武栢梁、○唐詩訓解首卷李滄溟曰、七言沿起咸言始于漢武栢梁、然歌謡等作出自古也、聲長字縱易以成文、故藴氣調辭與五言略異、

四句

即絶句也、唐詩訓解首卷李滄溟曰、古樂府挾琴歌梁元帝烏棲曲江總怨詩行等作、皆七言四句、唐人始穩順聲勢定爲絶句、○王敬美曰、晩唐詩萎薾無足言、獨七言絶句膾炙人口、其妙至欲勝盛唐、愚謂絶句覺妙正是晩唐未妙處、其勝盛唐乃其所以不及盛唐也、絶句之源出於樂府、貴有風人之致其聲可歌、其趣在有意無意之間、使人無處捉著盛唐惟青蓮龍標二家詣極、李更自然、故居王上、晩唐快心露骨、便非本色、議論高處逗宋詩之徑、聲調卑處開大石之門、

○峨眉山月歌 在眉州、峩眉山名、

本集八載之、【峨眉山】在西蜀嘉定府峨眉縣南、兩山相對如娥眉、周匝千里、本注齊賢曰、峨眉山在嘉州峨眉縣羅目鎭、【平羌江】在嘉州龍遊縣、有平羌山、資州青溪縣乾德五年省入内江、内江在州東九十八里、資州東至昌州二百二十八里、昌州南至渝州三百里、渝州治巴縣、水自渝上合曰内江、自渝由戎瀘上蜀曰外江、自渝州明月峽至夔州西陵硤四千里、巴峽明月峽巫峽是曰三峽、蜀都賦、經三峽之崢嶸、注巴東永安縣有高山相對、相去可二十丈、左右崖甚高、謂之峽、古歌曰、巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲涙沾裳、士贇曰、圖經平羌江在雅州嚴道縣東北城下、嘉州亦號平羌江、圖經【渝州】は即今重慶府治巴縣、

峨眉山月歌　李太白

峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流、夜發三溪向三峽、（三峽西陵峽、巫峽歸郷峽也、並在夔州、）思君不見下渝州、（地名、〔渝〕音俞、）

一二の句峨眉山は山高して月の升ること遲し、日中夜半ならでは日月を不見、月常に山に掩はれて全月を不見山頂僅に半輪の光を望む故に半輪の秋と云へり、其月影は平羌江の水に映じて月の輝も水とと

也、薫は香き草也、無蕕薫と云は一座中の客悉皆文を能し詩に巧みにて賢愚相雜ることなきと云意也、左傳僖公四年、一薫一蕕十年尙猶有臭、【險語―】、韓文注、開元天寶遺事云、李杲爲洛陽令有劉兼者、過其壙宿、夜深聞戶外語聲曰、古今正人李令是、見其行事令人破膽、開戶視之、無物、乃鬼神、【皇墳】、韓文注祝曰、爾雅妃媲也、注相偶媲也、樊曰、書序伏羲神農黃帝之書謂之三墳、皇三皇、墳書也、言我と數子の輩奇險の語を吐くときは幽冥の鬼神をも驅逐して彼れが膽を破らしめ高古の詞を作るときは三皇の墳書にもおしならぶほどの妙あると也、【至寶―】、二句又文を稱する也、至重の寶は彫琢の外飾を不假自然の本色にして自ら貴し神靈の功を以生ずるものは土を鋤き草を耘るの養を不待自然と成就す是文章の骨氣を豪傑にして浮華の辭をかざらず自然に混成して斧鑿の痕なきに喩る也、

方今向泰平、元凱承華勛、（音勳左傳、高陽氏有才子八人、天下謂之八凱、高辛氏有才子八人、天下謂之八元、世濟其美、堯典曰放勳、舜典曰重華協于帝、此謂賢者在朝如八元八凱得以輔承堯舜泰和之治、）吾徒幸無事、庶以窮朝曛、

【方今―】、韓文注韓曰、時憲宗即位杜黃裳鄭餘慶李吉甫裴垍李藩之徒相繼爲相、故云、【元凱】は當時朝に在る大臣を指て云、華勛は聖天子を指て云、言は只今天下泰平の時に向て八元八凱の如なる賢臣朝に立て堯舜の如き天子を承け輔けて政を行はると也、注左傳文公十八年云、昔高陽氏才子八人、（高陽帝顓頊之號、八人其苗裔、）蒼舒隤敳檮戭大臨尨降庭堅仲容叔達、齊聖廣淵明允篤誠、天下之民謂之八愷、（愷和也、）高辛氏有才子八人、（高辛帝嚳號、八人亦其苗裔、）伯奮仲堪叔獻季仲伯虎仲熊叔豹季貍、忠肅共懿宣慈惠和、天下之民謂之八元、（元善也、）此十六族也世濟其美不隕其名、尙書堯典曰、若稽古帝堯曰放勳欽明文思安々、舜典曰、若稽古帝舜曰重華協于帝濬哲文明溫恭允塞、堯を號して放勳と云、舜を號して重華と云、此に華勛と云は舜と堯とを云也、勛は勳と同じ、元凱を朝廷に仕る臣に比し華勛を憲宗に比する也、【吾徒―】、退之幷に座上の數子を指て吾徒と云、幸に無事は天下泰平なるに因て吾徒までも幸に兵戈征戍の事もなく安閒に居る世なれば庶は共に聚り會して文字の飮をなして朝暮を送り樂で年を窮めんと思ふと也、曛は日入のころくれがた也、

笑談も闘になるときは誠に酒中の趣意を得たると云べし、【餘外—】、此句上を結び下を起す餘外は座上に有あふの外を云、已に下に云ふ羶葷紅裙の類を銜みたり、繽紛は雜亂の貌なり、言は已に酒意を得ば足れり、此餘外の物は徒らに雜亂なるばかりで不足取也、

長安衆富兒、（譏世俗、）盤饌羅羶葷、（許文反、）不解文字飲、（音蟹、）惟能醉紅裙、雖得一餉樂、（音洛、）有如聚飛蚊、（詩謂長安富兒酣飲於女色、雖得一食頃之歡、適不過如蚊蚋成群、）

此又一種俗間の酒宴、即起句に所謂人の所勸韓公の不聞が如くせる者也、【長安】は即京師也、富家の人士を斥て兒と云は賤しみ譏て也、【盤饌】、韻會饌具食、字彙饌饔具也、俗に云料理也、【羶葷】、韓文注、葷辛臭菜、禮記膳葷、羶說文羊臭也、言は長安城中衆〻の富兒は常に盤上の料理に羶肉葷菜を設け羅て美食を事とする也、【不解】、曉不得也、【文字飲】、文を作ん爲に酒を設け醉に乘じて詩を賦す羽觴傳へ行りて詩篇間り出づ是即ち興を酒に取て情を文章に暢る者也、文字の飲と云べし、口腹の飲に非ず、俗兒いかんぞ解得んや、【惟能—】紅裙は婦人の服、是妓女を指す也、富家の酒宴を開には多の妓女盃盤を備へ美人酒を壓して醉を勸む、一曲の歌聲に情を蕩し半邊の笑靨に目を迷すこれを以樂として日を盡し夜を窮む唯能紅裙に醉ふと云べし、【雖得—】、一餉は注【一食頃】得とは云へどもと云意、【有如—】猥雜瑣碎のしわざなれば蚊蟲の聚飛て聲喧きが如にて論ずるにも足らぬことゝ云の意也、韓文注蔡曰、前漢中山靖王傳、聚蟁成雷、顏師古注、蟁古蚊字、言聚蚊飛聲有如雷也、注【酣飲】、字彙酣酒樂也、洪嗜也、一曰酣洽也、ふけり飲むの意也、

今我及數子、故無蕕與薰、（蕕臭草、薰香草、（蕕）夷猶反、）險語破鬼膽、高詞媲皇墳、至寶不雕琢、神功謝鋤耘、

【今我—】、數子は張籍東郊が輩を指す、蕕は臭き草

者秦下邽人、程邈所作也、邈字元岑、始爲縣吏得罪、始皇幽繫雲陽獄中、覃思十年、益小篆方圓、而爲隷書三千字奏之、始皇善之用爲御史、以奏事煩多篆字難成乃用隷字、以爲隷人佐書、故曰隷書、○韓文注蔡曰、按郭氏佩觿集八分之說有二、或曰八分篆法二分隷文、又曰似八字勢有偃波之文、二說皆非也、書有八體、一曰大篆、二曰小篆、三曰刻符、四曰蟲書、五曰摹印、六曰署書、七曰殳書、八曰隷書、漢蔡邕以隷作八分體、蓋八體之後又分此法、謂之八分、杜甫八分歌曰、陳倉石鼓今已訛、大小二篆生八分、【張吾軍】、韓文注韓曰、左傳楚鬭伯比曰、我張吾三軍、言は阿買は字義韻聲を廣く究め識にはあらざれども頗る八分體の字を書することを知得たり座中の詩成ときは阿買をして寫さしむれば字勢可觀、是又吾か筆陣の軍を張大にするに足り、謝肇淛五雜俎卷十三云、韓昌黎詩云、阿買不識字、頗知書八分、夫世豈有不識字而能書者、抑昌黎之所謂識字非世人之泛然記憶已也、漢儒之訓詁極其宏博、而獨稱子雲識字、至使四方學者載酒以問、此其學豈淺鮮者、唐王起於世間字所不識者、惟八駿圖中數字、則識字良亦不易而昌黎之詩動用僻字古韻、至今千世之下讀之尚不盡識、何況阿買也、

所以欲得酒、爲文俟其醺、酒味既冷冽、酒氣又氤氳、（氤音因、氳於云反、）性情漸浩々、諧笑方云云、此誠得酒意、餘外徒繽紛、

【所以―】、酒を呼で索る所以は文を作る爲に微く醉て興趣を催しほの〴〵と醺じて面白なるを俟て作らばやと思ふに依て也、【醺】、字彙醉也、又和悅貌、【酒味既―】、韓文注祝曰、玉篇冽寒氣、詩冽彼下泉、注冽寒也、【氤氳】、字彙、元氣交密之狀、酒の味冷かにして清烈なり、酒氣又熏蒸して氤氳とにほふ也、【性情―】、此二句酒力循環してそろ〳〵と醉來る氣象を能寫し出せり、【浩々】廣大貌、【諧笑】字彙、諧雄皆切音骸和也、合也、談笑と同じ、【云云】、文選四十一李陵書注、多言也、言は酒力中に行て血脈も暢び性情も漸々に廣大になりて座中の談笑も些こはだかにて言多になりたると也、【此誠―】、已に微く醉て性情も發暢し座上の

ば此座上に聚まりたる客どもは不レ殘余までも皆各文を能く作る者也、故に酒與に乘じて人々文章を作らんと思ふに依てさて酒を勸ると云意也、

君詩多二態度一、藹々春空雲、

君は主人を云、即ち張秘書を指て云、【態度】は風情けだかく樣子面白く作たる體の詩也、もやうを云はゞのどかなる春の空にむら〳〵とたちたる雲を見るが如くなると也、【藹々】、韻會雲集貌、韓文注樊曰、徹詩不レ見二于世一、唯會合聯句有下愁去劇箭飛、讙來若二泉湧一、馬辭虎豹怒、舟出蛟鼉恐上、兩聯亦奇語也、

東野動驚レ人、天葩吐二奇芬一、孟郊字東野

東野は孟郊が字也、傳第二卷遊子吟に見たり、東野が文章動すれば人の耳目を驚す奇妙を作り出す人也、其品を論せば天生の葩奇異の芬芳を吐が如くなる文也、葩は花也、芬は花の香氣也、

張籍學二古淡一、軒鶴避二雞群一、

【張籍】、新唐書列傳一百一、張籍字文昌、和州烏江人、第二進士一、爲二太常寺太祝一、久次遷二秘書郎一、韓愈薦爲二國子博士一、歷二水部員外郎主客郎中一、當時有二名士一皆與游、而愈賢二重之一、籍性狷直、爲二詩長於樂府一、多二警句一、仕終二國子司業一、【軒鶴】、韓文注孫曰、晉書嵆紹始入レ洛、或謂二王戎一曰、昨於二稠人中一見二嵆紹一、昂々然如二野鶴之在一レ雞群一、張籍が文章は古風淡泊を學て華麗を不レ好、其品は軒昂とたちのびたる鶴雞の群り聚りたるを避け去て特地に立たるが如くなると也、

阿買不レ識レ字、退之姪、名阿買、雖レ不レ識二古字一、頗知レ書二八分一、李斯八分小篆字法、詩成使二之寫一、亦足レ張二吾軍一、張去聲、

【阿買】、韓文注趙堯夫曰、或問二魯直一、阿買是退之何人、答曰、退之姪、必有レ所レ據而云、韓曰、此必其子姪小字、如二陶淵明家阿舒阿宣一之類耳、八分注李斯小篆の字法を八分とす非也、小篆と八分と不レ同、唐張懷瓘書斷云、大篆周宣王太史史籀所レ作也、始變二古文一、小篆者秦丞相李斯所レ作也、增二損大篆一、異二同籀文一、謂二之小篆一、亦曰二秦篆一、八分者秦羽人上谷王次仲所レ作也、始皇得二次仲文一、簡略赴二急疾一之用、甚喜遣レ召レ之、三徵不レ至、隷書

神氣索然、○范元實詩眼云、山谷謂文章必謹布置、每見後學多告以原道命意曲折、後予以此槩考古人法度、如子美贈韋左丞詩云、紈袴不餓死、儒冠多誤身、此一篇立意也、故使人靜聽而具陳之耳、自甫昔少年日、至再使風俗淳、皆言儒冠之事業也、自此意竟蕭條、至蹭蹬無縱鱗、言誤身如此也、則意舉而文備、故已有此詩矣、然必言其所以見韋者、於是有厚愧眞知之語、所以眞知者謂傳誦 其詩也、然宰相職在薦賢不當徒愛人而已、士固不能無望、故曰竊效貢公喜難甘原憲貧、果不能薦賢則去之可也、故曰焉能心怏々、秖是去踆々、又將入海而去秦也、然其去也必有遲々不忍之意、故曰尙憐終南山回首淸渭濱、然所知不可以不別、故曰常擬報一飯況懷辭大臣、夫如是可以相忘於江湖之外、雖韋亦不得而見矣、故曰白鷗波浩蕩萬里誰能馴 終焉、此詩前賢錄爲壓卷、其布置最得正體、如官府甲第廳堂房舍各有定所不可亂也、又曰、詩有一篇命意、有句中命意、如老杜贈韋詩前後布置是一篇命意也、至其道遲々不忍去之意則曰、尙憐終南山回首淸渭濱、其道欲與韋別則曰、常擬報一飯況懷辭大臣、此句中命意也、蓋如此然後可謂頓挫高雅、

○醉贈張秘書

此韓昌黎與張秘書、爲文字飲而作此、

韓文二載之、題注孫曰、張秘書徹元和四年登進士第、娶韓氏禮部郎中雲卿之孫開封尉之女、於公爲叔父孫女、【秘書】、事文類聚新集二十九云、漢圖籍所在有石渠石室延閣廣內、貯之於外府、又有御史中丞居殿中、掌蘭臺秘書及麒麟天祿二閣、藏之於內禁、後漢圖書在東觀、桓帝始置秘書監一人、掌典圖書古今文字考合同異、屬太常、以其掌圖書秘記、故曰秘書、

韓退之

人皆勸我酒、我若耳不聞、今日到君家、呼酒持勸君、爲此座上客、及余各能文、

平生人が來て我に酒を飲かしと勸れども我れ耳のきこえざる者の如にしてこたへもせぬ也、徒らに酒を飲ことを好まざれば也、今日君が家に到ては却て我より呼び索て持して主人に強ひ勸る也、いかになれ

す然れども左丞若し賢を薦るに心なくんば我必去べし焉ぞ能快々と不平を抱て留り居んや便走て踆々と疾く去て東の方海にも入て此西方秦は辭去べしと思ふと也、入海は孔子乘桴浮海と言の意也、實に海外に遁んと云には非ず、假設の辭也、

尙憐終南山、回首淸渭濱、果不能薦則去之、

常擬報一飯、况懷辭大臣、况大臣相知不獨一飯

其去別之懷抱爲何如、

【終南山】、在陝西西安府、遠亘四縣之境、渭水亦在西安府、渭水は甚淸し故に淸渭と云也、終南淸渭に託して帝都を去に不忍の意を云也、或は海にも入て此秦を去んと欲すれども尙終南山を憐て心を留め回首渭水に別れんことを惜むと也、鶴林玉露地集云、杜子美儒冠忍餓垂翅靑冥、殘盃冷炙酸辛萬狀不得已而去秦、然其詩曰、尙憐終南山、回首淸渭濱、戀君之意藹然溢於言外、其爲千載詩人之冠冕良有以也、【注】【果不—】、此注當在西去秦句之下、誤て入于此、【常擬—】、史記七十九范睢傳、一飯之德必償、睚眦之怨必報、言は平生一飯を與られし德意をも償ひ報せんことを擬に况や大臣の顧盼を承て知己たりし恩情一飯の類に非ず、今將別戀々の情いかばかりか切なると云意也、【大臣】、韋左丞を指て云、

白鷗波浩蕩、萬里誰能馴、此二句言自此可以

相忘於江湖之外、雖韋濟亦不得而見也、

【白鷗】、かもめ也、晉張華禽經注云、鷗水鳥、如鴿鷉而小、隨潮而翔、迎浪蔽日、曰信鳥、鷗之別類、羣鳴喈々優々隨大小潮來也、食小魚蝦螻之屬、【浩蕩】、水勢廣平貌、集注、波字當作沒字、看禽經鳧善浮鷗善沒是也、劉須溪批云、沒字本不如波字之趣、但以上下語勢當是沒字相應、言ろは我一旦遠去て白鷗の烟波浩蕩の外に滅沒するが如くならば世と隔ること萬里にして誰か狎れ馴ることを得んや韋左丞と云とも亦相見ることなからんと云意也、○東坡志林云、淵明採菊東籬下、悠々見南山、採菊之次偶然見山、初不用意而景與意會、故可喜也、今皆作望南山、子美白鷗沒浩蕩、萬里誰能馴、蓋滅沒於烟波間耳、而宋敏求謂余云、鷗不解沒、改作波字、二句改此兩字便覺一篇

【愧】は忝と云に同じ、慚愧の愧に非ず、【丈人】は左丞を指て云、我を接待せらるゝことの懇に厚を甚忝く思ふ也、眞とは丈人の心眞實に我を憐て虛僞の飾にてはなきことを知得と也、注【懷抱】は心中と云に同じ、【每於—】、集注云、百寮之上言尙書丞位在百寮之上、史相國位諸侯王百寮之上、佳句新謂中丞每向達官稱公佳句之新、【寮】は官寮を云也、字彙小窻也、楊升菴曰、古人謂同官爲寮、亦指齋署同窻爲義、韋左丞つねに百の官人の間に於て杜子美の佳句新奇なると稱揚せらるゝと也、

竊效貢公喜、劉孝標廣絕交論、王陽登而貢公喜、**難甘原憲貧、**原憲在艸澤中、子貢相衞、結駟連騎過謝原憲、子貢曰、夫子豈病乎、憲曰、吾聞之無財者謂之貧、學道不能行謂之病、若憲貧也、非病也、子貢慙、○宰相職在薦賢、固不能無望也、

【貢公喜】、前漢書列傳四十二王吉傳云、王吉字子陽、瑯琊皐虞人也、少好學、明經、吉與貢禹爲友、世稱王陽在位貢公彈冠、言其取舍同也、貢禹字少翁、瑯琊人也、以明經潔行著聞、元帝時徵禹爲諫大夫、此句言は王子陽貢禹友として出處不相違故に王陽徵れて位に在れば貢禹冠を彈て待は必又徵されて仕るにてあるべしと思へば也、今我左丞と友たると又王貢に異ならず、故に竊に貢公が喜に效て吾も亦左丞に依て擧げ用らるゝことかあらんと心たのもしく思ふと也、注劉孝標は劉峻が字也、梁書列傳四十四文學傳、劉峻字孝標、平原人、梁天監中詔峻掌石□閣、以病乞骸骨、後隱金華山、文選五十五廣絕交論云、王陽登則貢公喜、罕生逝而國子悲、云云【難甘—】孔門の弟子原憲は貧を樂て病めりとせず我は尙病めりとせざること不能故に貧を甘じ難し是左丞の吹噓を望て徵祿を求る意也、注莊子讓王篇史記弟子傳並に此事を載たり、【結駟】四馬を結て一車にかけるを云、連騎從者の騎馬を多く引つれたるを云、

焉能心怏々、祇是走踆々、今欲東入海、即將西去秦、

杜詩集注云、【怏々】不平貌、【踆々】、奔走貌、東入海假設之辭、西去秦秦即長安之地公故鄕也、詩眼云、果不能薦賢則去之可也、故曰焉能心怏々、祇是走踆々、此二聯言は我れ左丞の吹噓を望むことなきに非

富兒の門を扣て問候し暮に外より歸るときは富貴の人肥たる馬に乘て馳驅する後塵に隨て步するとなり、【殘盃―】、顏氏家訓雜藝篇云、見レ役二勳貴處一之下坐、以取二殘杯冷炙之辱一、人の席末に坐して餘殘の盃酒を飲み冷たる炙を承て辱めをうくること多ければゆくさきにて潜に悲辛の心を生ずると也、到處は到る處ごとにと云意也、俗にゆくさきにてと云辭と同じ、注僞蘇注也、

主上頃見レ徵、歘然欲レ求レ伸、青冥却垂レ翅、（李斯曰、丈夫見レ提レ筆鼓レ吻取二富貴一易若レ舉レ盃、何青冥之翮與レ鵠共垂レ翅乎、）蹭蹬無二縱鱗一、

【主上】、前漢書列傳四十二貢禹傳云、主上時臨二朝入レ廟一○事物紀原一云、司馬遷作二史記一、凡指二斥君尊一皆依違不二正言一、但稱曰レ上、太史公自敘書二漢武本紀一曰二今上一之類是也、今臣子亦呼二天子一曰レ上、由二司馬子長一始也、【主上】は集注には指二玄宗一と云、草注には指二肅宗一と云、此詩本集鶴注幷に集注に據て天寶七載の作とせば主上は是玄宗也、若し洙注に據て至德二載の作とせば此時は肅宗已に即位の明年也、按に詩中に騎驢三十歲と云へるときは至德二載の作と云說可也、此詩唐室中興の初にて武官の勢盛にて文學の士不レ振の日也、此詩必ず至德の作ならんか、然らば主上は肅宗を指て云べし、【頃見徵】は杜子美賊中より亡て鳳翔に走て肅宗に上謁す、肅宗其忠節を感じ玉ひて甫を拾遺の官となされたるを云、【歘然】、たちまち也、拾遺は天子一切の行事を聞見して闕たるを補ひ遺たるを拾て諷諫を致す官なるに依て杜公夙昔の願を伸んことを求の時なるとおもへる也、【青冥―】、然るに房琯が事を以て上疏するに坐せられて忽ち退けらる是青冥の天に翔らんとする鳥却て翅を垂て下に向ふが如しそれより蹭蹬とをちぶれて巨魚の縱にふるひ游ぐひれ鱗も無か如く勢を失たると也、易明夷卦初九、明夷二于飛一垂二其翼一、【蹭蹬】、文選海賦、或乃蹭蹬窮レ波、注濟曰、蹭蹬失レ勢貌、【縱鱗】、王褒頌、沛乎若二巨魚縱一レ大壑一、注僞蘇注也、

甚愧丈人厚、甚知丈人眞、（厚者相待之厚、眞者懷抱之眞、）毎於百寮上、猥誦佳句新、

云へり比に非ず、

自謂頗挺出、立登要路津、（古詩何不策高足先據要路津上、）致君堯舜上、再使風俗淳、

【自謂】は心に自ら期望する也、【挺】は特也、挺出は特に身を擢て顯達しての意也、【登要―】、要路津は人の出入する要約の處也、故に國政の柄を執て樞要の位に居をも登要路津と云也、注文選二十九古詩十九首第四首也、人生寄一世、奄忽若飇塵、何不策高足、先據要路津、注善曰、高上也、亦謂逸足也、向曰、策進也、要路津則人出入由之、【君】は泛く天子を指て云べし、玄宗肅宗などを云に非ず、言は初の心自ら謂ふは一旦身擢でゝ公相の位に登り君を輔けて德行堯舜の如ならしめ澆季の風俗をも和化して淳朴になすべきものをと思しと也、

此意竟蕭條、行歌非隱淪、騎驢三十載、旅食京華春、

此より以下無縱鱗に至までの十二句誤身ことを具に陳也、【此意】は上文四句に所言素願の意也、【蕭條】、字彙、寂寥貌、夙昔の壯志も竟に衰はてゝ蕭條となりたる也、【行歌―】、行歌は道路を行々歌ふ也、夙志不遂貧賤にて路に行歌すれども心に世を絶ち棄て自ら隱逸して沈淪するには非ず、只時に遇ことなきに因と云意也、前漢書列傳三十四、朱買臣家貧好讀書、常艾薪樵賣以給食、擔束薪行且誦書、其妻亦負戴相隨、數止買臣毋歌嘔道中、買臣愈益疾歌、妻羞之求去、買臣不能留、即聽去、其後買臣獨行歌道中、【騎驢―】、驢は遲鈍の馬にて賤者の騎る者也、杜公開元廿二年鄉貢に赴てより此詩作るまで凡廿四年也、此に大數を擧て三十載の間京華に旅食して春秋を送りしことを云へる也、【騎驢】、後漢書獨行傳、向栩字甫興、少爲書生、性卓詭不倫、騎驢入市乞匃於人、【旅食】、集注云、客寓京師而寄食也、

朝扣富兒門、暮隨肥馬塵、殘盃與冷炙、（吳起嘗嘆曰、丈夫兒事未濟甘晦休山林、焉能逐浮濵子苟冷炙殘盃焉、）到處潛悲辛、

京師に寓して寄食するありさまを云へる也、朝には

を作るときは自然に妙處あつて自ら心にも神靈ある如く覺たると也、

賦料揚雄敵、　揚雄字子雲、嘗好詞賦、每擬相如、○公於賦言可敵揚雄、**詩看子建親、**　曹植字子建、善屬文詩、出國風、卓爾不群、○公於詩言可親近子建、

【揚雄】、前漢列傳五十七、雄字子雲、蜀郡成都人也、雄少而好學、博覽無所不見、嘗好辭賦、先是蜀有司馬相如作賦甚弘麗溫雅、雄心壯之、每作賦常擬之以爲式、天鳳五年卒、【子建】、傳前に見たり、此二句言ふ、賦を作ることは漢の揚雄が敵手と云ほどに作り詩は曹子建が詩の品と親近して間なきほどに作り得たると也、汪【擬】はなぞらへて作也、【屬】は著也、【國風】は詩經の周南より豳風まで十五國風の詩を云、【卓爾】高くつったちたる貌也、【不群】は衆にすぐれる也、

李邕求識面、　唐李邕有才名、後進想慕求識其面、**王翰願卜隣、**　唐王翰有文名、杜華嘗與遊從、華母崔氏云、吾聞孟母三徙、吾今欲卜居使汝與王翰爲隣、○甫以文章施名當世、故以李邕王翰自比、

【李邕】、新唐書列傳一百二十七、李邕字泰和、揚州江都人、邕少知名、武后用邕拜左拾遺、玄宗即位召爲戶部郎中、開元二十三年起爲括州刺史、【王翰】、新唐書列傳一百二十七、王翰字子羽、幷州晉陽人、少豪健恃才、及進士第、張說至禮、方說輔政故召爲秘書正字、擢通事舍人駕部員外郎、後出爲汝州長史、日與才士豪俠飮樂、言ろは李邕はさしも名高き士なれども我が面を識んことを求て來り王翰は豪健の人なれども我を慕て家を遷し隣とならんことを願し也、此二句杜子美自己に才ありて一時の名士も求て交を締しことを云へる也、二句皆實錄也、故事を用たるに非ず、又自ら比するにも非ず、注甚謬れり、故に不取、汪【後進—】、此說非也、後進が李邕の面を識んと求るに非ず、李邕が杜子美の面を識んと求たる也、新唐書杜子美本傳云、少貧不自振、客吳越齊趙間、李邕奇其材先往見之、これを以て證とすべし、【唐王翰—】、此注三十五字僞蘇注也、杜華と云者唐朝になし、【甫以—】、此注非也、李邕王翰杜甫共に是同朝同時の人、李王は杜甫よりも稍〻先輩なるのみ也、杜子美豈に同時の人を以て自ら比せんや、杜子美の句は實事を

假、唐龍朔元年改左右丞曰左右肅機、咸亨元年復舊名、〇此詩本集第一載之、集注題注云、天寶六歳詔天下有一藝者赴轂下、公時應詔會李林甫爲相、恐士或斥己、請委尚書省試問、遂無一中程式者、公由是遂退下、故贈此詩、當是天寶七載、千家注曰、至德二載作也、注【偶儷】は屬對を云也、日月乾坤の類也、杜子美の長篇は對句すぎて少く混成になき處があると云意也、【典刑】は法度也、【布置】は辭の立樣初中後の次第よくまくばりて顚倒なく重複せざるを云也、【正體】は長篇の詩の體式に合たるを云也、【前輩】先儒先賢と云と同じ、【錄之】、えらび採ての意也、【壓卷】、俗に卷頭におくと云に同じ、集中第一の絶唱にて諸作を壓て卷首に居と云意也、

紈袴不餓死、儒冠多誤身、此二句一篇立意也、

丈人試靜聽、丈人者尊長之稱、賤子請具陳、

【紈袴】、前漢書自叙傳上云、班伯與王許子弟爲群在於綺襦紈袴之間、注晉灼曰、白綺之襦氷紈之袴也、師古曰、紈素也、貴戚子弟之服、白き練にて製したる袴也、言は富貴の人美服あれば必美食あり故に終に飢餓して死することなし儒冠を戴く文學の士は多は時に不遇して命不達其身を誤て困窮に至ること多と也、注此二句は此詩一篇の頭腦、意を立るの張本也、【丈人】は韋左丞を指す、易師卦丈人吉無咎、程注丈人者尊嚴之稱、朱注丈人長老之稱、【賤子】、杜子美自稱也、前漢書列傳六十二樓護傳、賤子上壽、杜子美儒冠多は身を誤るの説を陳んと欲す故に丈人靜に聽け我れ具に陳と云て下に情を具に陳べ布く也、

甫昔少年日、早充觀國賓、易觀國之光、利用賓于王、讀書破萬卷、下筆如有神、

此より以下十二句儒冠の事業を云、【觀國】易觀卦六四觀國之光、利用賓于王、程傳云、五居尊位、聖賢之君也、四切近之、故云觀國之光、觀見國之盛德光輝也、古者有賢德之人則人君賓禮之、故士之仕進於王朝則謂之賓、四方より京に來て仕進し王朝文物の光輝を觀を觀國の賓と云、此二句言は杜子美自言ふ昔し少年の日早く仕進觀國の士の員に充て入られて名を薦書の中にしるし載せられたると也、【讀書―】、平生書を讀て萬卷の道理を悉く識破し筆を下して文章

【幾年―】、幾年が春艸の歌を見て年々送り過し今日老に臨て暮途の困窮に遇ふことを云也、梁元帝云、既看春草歇、【軍事―】此二句翰に從んことを望む也、【孫楚】、晉書列傳二十六、孫楚字子荊、大原中都人、才藻卓絶爽邁不群、多所凌傲、缺鄉曲之譽、年四十餘始參鎭東軍事、終馮翊太守、杜子美此時年四十二三也、故に孫楚を引て曰、昔し軍事に參たらしむるに四十にあまりし孫楚を用たり只今我も孫楚が如く願は翰が軍中に留置て軍事にも參たらしめられよかしと云意也、【呂蒙】、吳志卷九有傳、本注洙曰、呂蒙隨姊夫鄧當擊賊、職吏輕之、蒙殺吏、因校尉袁雄承間言於孫策、策奇之引置左右、言ろは孫策行伍の間に於て呂蒙を識り擧て左右におけり我も亦哥舒翰のめがねを以て軍士の員にも入れ用られんことを望むの意也

注【行伍】、軍を行るとき兵士を五人づゝ組合せたるを伍と云、それを又合せ或は二十五人或は五十人を一備とす、備は伍より立定る故に人數多ても備を出すを行伍と云、行伍中とは即軍中と云義也、

防身一長劍、將欲倚崆峒、崆峒山在西正、當吐蕃所入之道、子美謂將欲倚劍崆峒、從翰守節鎭也、

願は平生身を防き護る所の一長劔を以て崆峒吐蕃の出入する場に倚て尺寸の功をも致さんことを欲と也、【崆峒山】、集注云、崆峒山名、在陝西平涼鞏昌臨洮三府之間、當吐蕃所入之道、【守節】、邊國の鎭となりて行には必節を持て出づ天子より授けられたる節を執守て鎭たるを云也、

○贈韋左丞

左丞姓韋名濟、○杜詩長篇傷於偶儷、惟此詩有典刑布置、最得正體、前輩錄之以爲壓卷也、

【韋濟】、新唐書列傳四十一云、濟開元初調鄄城令、或言吏部選縣令非其人、既衆謝、有詔問所以安人者、對凡二百人、惟濟居第一、不對者悉免官、於是擢醴泉令、濟四遷戶部侍郎、爲太原尹、天寶中授尚書左丞、凡三世居之、濟文雅頗能修飾政事、所至有治稱、終馮翊太守、【左丞】、事文類聚新集卷八、漢成帝建始四年置尚書員五人、有四丞、光武始減其二、唯置左右丞、掌錄文書期會、左丞主吏民章服及騶伯史、晉不改、晉左丞主臺內禁令宗廟祠祀朝儀禮制選用署吏給

る丹書は諸侯を某の國に封ぜらるゝと云ことを丹を以て書したる信なるべし、

策行遺戰伐、契合動昭融、勳業青冥上、交親氣槩中、

【策行―】策は謀也、翰が軍策行れて吐蕃の賊に克ち敵亡て邊郡安きに因て兵を用ることなく戰伐を遺たると也、【昭融】、詩大雅既醉篇、昭明有融、注融明之盛也、杜詩集注云、昭融帝之哲聰言君臣契合自然動主眷也、昭融は人君を指て云、聖睿と稱すると同意也、君臣の間契合して人生の心を動し傾かしめて恩顧をうけたる也、【勳業―】、勳業はたび〳〵の戰功を立ること高く青冥の天に出るばかり盛大なるを云也、【交親―】集注云、氣槩中五侯門戸棨戟森列百夫守衛、出入交舊親契皆在豪英氣槩之中、誰敢反目、翰が武威盛にして交親の間豪雄氣槩の中に接待すると也、

未爲珠履客、已見白頭翁、壯節初題柱、司馬相如初過成都昇仙橋、題其柱曰、不乘駟馬車、不復過此橋、○公自言、壯節有相如題柱志也、

生涯似轉蓬、

此より以下結句に至まで杜公自家の上を叙て哥舒翰に依て戎軍に從ひ征したきの意を云へり、【珠履客】史記七十八春申君傳、春申君客三千餘人、其上客皆躡珠履、言ろは杜子美終に珠履を躡て上客の列にあるほどの身となることもなき間にむざ〳〵と年老て已にはや白頭の翁となりたるを云、【壯節―】盛年の初は雄壯の志節をはげみ張一たびは顯達すべしと相如が橋柱に題書したるほどの氣勢ありしかども終に志を遂げしことなく一生涯轉蓬の風に任て飄揚し常の所なきが如き身となりたると也、【題柱】史記漢書相如傳不載、按華陽國志云、蜀大城北十里有升仙橋送客觀、相如初入長安題其門云、不乘赤車駟馬不過汝下也、駟馬車は馬を四疋かけたる車也、【轉蓬】、文選二十九曹子建雜詩云、轉蓬離本根飄々隨長風、

幾年春艸歇、今日暮途窮、軍事留孫楚、晉孫楚字子荊、才藻卓絶、年四十餘始參鎭東軍事、行間識呂蒙、吳志、呂蒙字子明、年十六、拔刀殺吏於行伍中、見知於孫策、策用之、

で西平郡王に封ぜらるゝを云、【茅土】、禹貢徐州厥貢惟土五色、注王者封五色土爲社、建諸公則各割其方色土與之使立社、燾以黃土、苴以白茅、茅取其潔、黃取王者覆四方、正義曰、王者封五色土以爲社、若封建諸侯則各割其方色土與之、使歸國立社、四方各依其方色、皆以黃土覆之、其割土與之時、苴以白茅、白茅取其潔清也、【名數】前漢高紀云、民前或相聚保山澤不書名數、注師古曰、名數謂戶籍也、【山河―】、是功臣を封ずる時誓の辭也、哥舒翰も此誓の辭を受て封ぜられしと云意也、[注]【使黃―】漢書功臣表文也、應劭注曰、封爵之誓國家欲使功臣傳祚無窮也、帶衣帶也、厲砥厲石也、河當何時如衣帶、山當何時如厲石、言如帶厲國尤永存以及後世之子孫也、師古曰、丹書解在高紀、白馬之盟謂刑白馬歃其血以爲盟也、○輔按、高紀丹書無注解、鄭瑗代醉編九云、用修曰、大戴禮武王踐祚三日召師尙父而問曰、黃帝顓頊之道存乎、意亦忽不可得見歟、師尙父曰、在丹書、其言曰、敬勝怠者吉、怠勝敬者滅、義勝欲者從、欲勝義者凶、注不解丹書爲何物、按左傳襄公二十三年、斐豹隸也、著於丹書、注犯罪沒爲官奴、以丹書其罪、

近世魏律緣坐沒配、爲樂工雜戶者皆以赤紙爲籍、其卷以鉛軸、此亦古人丹書之遺法、據此則丹書古人之法律書名也、蓋戒人之怠與欲而勉以敬義、失敬義則入怠欲而隸於刑矣、然以法律之書而陳敬義之訓、先王以道治天下而不恃乎法、其亦異乎、鄭書晉鼎乎、余按、用修之說甚善、然以左傳斐豹事及魏律證丹書爲刑書則似未確、蓋丹書乃黃帝所以自警敬勝怠數何名曰瑞書、黃帝既作戒于丹書、又作巾几之銘、又命孔甲爲盤盂等銘、以彌縫其闕、是丹書乃箴銘之類、以丹書之、故成王問黃帝顓頊之道、周公擧此告王而王聞書之言、惕若恐懼、退爲戒書、几席盥盤戶牖觴豆莫不有銘、蓋著于器者爲銘、書于策者爲書、總是一物、原無刑律之說、用修之言似牽合耳、史記大任生昌有聖瑞、尙書帝命驗云、季秋之月甲子赤爵啣丹書入於鄷、止于昌戶、其書云云、然則丹書者黃帝瑞書、而赤爵啣以授周爲周之瑞、其非刑書明矣、若刑書自是丹書不可强同、漢高紀丹書鐵劵、然則封功臣亦以丹書、丹書之不可强而一此又一證、代醉の說に據ときは丹書の類一樣ならず、又書籍の名に非ず、丹を以てしるすの書也、高紀幷に功臣表に云へ

て歸服すると也、【逐北】、賈誼過秦論、追亡逐北、伏尸百萬、後漢書列傳八臧宮傳、乘勝追北、注、人好陽而惡陰、北方幽陰之地、故軍敗者皆謂之北、史記樂書曰、北者敗也、【宛馬】、史記大宛列傳六十三云、大宛在匈奴西南、在漢正西、去漢可萬里、多善馬、馬汗血、其先天馬子也、前漢書武帝本紀太初四年春、貳師將軍廣利斬大宛王首、獲汗血馬來、【受命――】天子の命を受て河西の節度と爲て邊塞沙漠の遠きに赴き河湟を克復し功成て京に歸しかば天子御席を同して宴を賜て寵賞盛なりしと也、

軒墀曾寵鶴、左傳衛懿公好鶴、鶴有乘軒者、畋獵舊非熊、文王將出獵、卜之曰、所獲、非熊非羆非虎非彪乃霸王之輔、及獵遇太公釣于渭之陽、載歸以爲師○言翰之貴寵已如乘軒之鶴、明皇得之如文王之得呂望也、

【軒墀】軒は屋軒也、墀は階上の土也、然れども墀字連綿の熟字なる故に帶て云まで也、實は屋軒の軒に非ず、軒車の軒也、哥舒翰玄宗の恩寵にあづかること昔懿公の鶴を寵して軒に乘せられたるが如くになさるゝと也、左傳閔公二年狄人伐衛、衛懿公好鶴、鶴有乘軒者、將戰國人受甲者皆曰、使鶴々實有祿位、杜預注、軒大夫車、【畋獵――】、文王の畋獵なされし獲もの舊と羆熊の屬に非ず賢人の太公を得られたり只今哥舒翰の玄宗に用らるゝも亦如此と云意、注【卜之】獵せんとする前に龜を燒て甲の裂文を視て獵の吉凶獲ものゝ多少を占也、【熊】、くまと云獸也、似豕、山居冬蟄、美在掌、【羆】音卑、しくまと云獸也、似熊黃白色、長頭高脚猛憨多力、【彪】、武經開宗六韜注云、彪螭同、龍無角曰彪、【霸王】武威を以て天下を治るを霸王と云、史記三十二齊太公世家云、西伯將出獵卜之曰、所獲非龍非彪非虎非羆、所獲霸王之輔、於是周西伯獵、果遇太公於渭之陽、與語大說、載與俱歸立爲師、○邵氏聞見錄云、子美軒墀曾寵鶴、左傳注云、軒大夫車也、非軒墀之軒、或以爲惟知詩者能辨之、

茅土加名數、言翰進封西平郡王也、山河誓始終、高祖即位封功臣、爲之誓曰、使黃河如帶太山若礪、國以永存爰及苗裔、於是申以丹書之信、重以白馬之盟、

【茅土―】茅を以てつゝめる土を賜て戸口の名數を益加へて國に封せらるゝを云、是涼國公に封せられ又進

盟諸戎、此二句廉頗魏絳を以て哥舒翰に比す、廉頗が敵を破て走らしめたるが如く魏絳が戎を治めたると等しき大勳功なると也、

毎惜河湟棄、新兼節制通、（王忠嗣守河湟、爲寇所敗、翰入朝陳攻守計、帝以翰兼河西節度使、）智謀垂睿想、出入冠諸公、日月低秦樹、乾坤繞漢宮、（此言收復之功也、所謂日月所臨特低秦樹、乾坤所包獨繞漢宮、）

【河湟】、本注師曰、河湟乃河曲、築湟以備邊寇、此句言は黄河の河湟久しく吐蕃に侵し奪はれたるを惜て遂に收め復さんことを謀り儀同三司を以新に河西の節度使を兼て遂に天寶十一載黄河の九曲を收復したるの功を云也、注【王忠嗣】は華州鄭人、九歳始入見帝、帝撫之曰、須壯而將之、更賜名、試守代州別駕、數以軍功累遷爲河西隴右節度使權朔方河東節度、佩四將印、備見新唐書列傳五十八、戰として不勝と云ことなし、後李林甫に讒せられて漢陽の大守に貶す忠嗣爲寇所敗こと傳中に不載、此注或は誤ならんか、【智謀ー】哥舒翰軍略を陳て帝に言ふすときは玄宗睿襟を傾て其謀を納れ用玉ふを垂睿想と云、垂はたれしむるの意也、【出入ー】朝廷に出入するときは功勳諸公の右に出て常に冠首たると也、【日月ー】此一句極て功の大なることを形容する也、杜詩集注云、言日月至高以其功而比之、則日月反若秦樹之低、乾坤至大以其功而比之、則乾坤止遶漢宮之小、此甚言其收復之功大也、哥舒翰の功を以て日月に比すれば日月も却て秦樹に低るが如く乾坤に比すれば乾坤僅に漢宮をのみ遶て小なるごとくに覺ると也、是大功天地の表に彌倫するの意也、注【收復】は一旦吐蕃に侵し奪れたるを又克ち復して唐の地となすを云也、

胡人愁逐北、宛馬又從東、（翰之威武胡人愁其攻逐而敗北、宛馬復來朝貢也、）受命邊沙遠、歸來御席同、

胡人は吐蕃を指す、翰が武威盛にて當りがたく我が軍敗北して追ひうちにあはんことを恐れ愁る也、故に中國に寇することを不得大宛汗血の名馬を貢し

良略地、師古曰、凡言略地謂行而取之也、言は哥舒翰敵に臨て先がけをし百戰て百勝の功あり故に夷狄の地を略取して兩隅ともに敵なくして空濶になりたると也、兩隅は西北の兩邊隅也、注【突厥】、(下九勿切)新唐書列傳一百四十上云、突厥阿史那氏蓋古匈奴北部也、居金山之陽、臣于蠕〻、種裔繁衍至吐門遂疆大、更號可汗、猶單于也、妻曰可敦、其地三垂薄海、南抵大漠、突厥は今の韃靼也、【吐蕃】、新唐書列傳一百四十一上云、吐蕃本西羌屬、蓋百有五十種、散處河湟江岷間、有發羌唐旄等、祖曰鶻提勃悉野、健武多智稍并諸羌、據其地、蕃發聲近、故其子孫曰吐蕃、直京師西八千里、

青海無傳箭、（翰築城青海、吐蕃不敢近、）天山早掛弓、（薛仁貴三箭定天山、）

【青海】、杜詩集注云、青海在今陝西行都司、【無傳箭】、本注趙曰、胡人每起兵則傳箭爲號、【天山】、集注云、天山即祁連山在今西夷火州、匈奴謂天爲祁連、早掛弓則不復用矣、青海の句は吐蕃を云、翰か吐蕃に克て青海に城を築てより後は吐蕃敢て近き不得故に箭を傳て兵を起すことなき也、天山の句突厥を云、翰突厥に克て天山を定て後は賊來ることなく弓箭を事とすることなきに依て弓を壁に掛おきて用ることなきと云意也、【薛仁貴】、新唐書列傳三十六、薛仁貴絳州龍門人、太宗用仁貴拜左武衛將軍、封河東縣男、時九姓衆十餘萬令驍騎數十來挑戰、仁貴發三矢輒殺三人、於是虜氣懾皆降、軍中歌曰、將軍三箭定天山、壯士長歌入漢關、永淳二年卒、年七十、

廉頗仍走敵、（廉頗趙將、出師而敵不敢近、）魏絳已和戎、（魏絳勸晉侯和戎以爲有五利、公從之、）

【廉頗】、史記列傳二十一云、廉頗者趙之良將也、趙惠文王十六年廉頗爲趙將、伐齊大破之取晉陽、拜爲上卿、以勇氣聞於諸侯、東攻齊破其一軍、居二年復伐齊幾拔之、後三年攻魏之防陵安陽拔之、【魏絳】、左傳襄公四年晉侯曰、莫如和戎乎、對曰、和戎有五利焉、戎狄荐居貴貨易土、土可賈焉一也、邊鄙不聳民狎其野穡人成功二也、戎狄事晉四鄰振動諸侯威懷三也、以德綏戎師徒不勤甲兵不頓四也、鑒于后羿而用德度遠至邇安五也、君其圖之、公悅使魏絳

案とす、注前の上韋左相詩の注に見たり、【宣帝】、前漢第七主、名詢、戻太子之子、在位二十五年、壽四十三、【霍光】、前漢書列傳三十八、霍光字子孟、票騎將軍去病弟也、宣帝立明年下詔曰、夫褒有德賞元功古今通誼也、大司馬大將軍光宿衞忠正、宣德明恩、守節秉誼以安宗廟、其以河北東武陽益封光萬七千戸、光薨上及皇太后親臨光喪、【張安世】、張湯が子也、前漢書列傳二十九、張安世字子孺、少以父任爲郎、昭帝即位用安世爲右將軍光祿勳、久之天子下詔曰、右將軍光祿勳安世輔政宿衞、肅敬不怠十有三年、咸以康寧、夫親親任賢唐虞之道也、其封安世爲富平侯、【丙吉】、前漢列傳四十四、丙吉字少卿、魯國人也、治律令爲魯獄史、積功勞稍遷至廷尉右監、後爲光祿大夫、宣帝初即位賜吉關内侯、封博陽侯、後五歲代魏相爲丞相、

君王自神武、駕馭必英雄、吳張昭曰、人君能駕馭英雄、

開府當朝傑、唐制開府儀同三司者三公也、從一品官、論兵邁古風、

【君王】、左傳成公九年、公曰、君王何如、對曰、非小人之所得知也、君王は玄宗を指て云、【神武】、本集注洙曰、漢刑法志高祖躬神武之才、摠擥英雄以誅秦項、玄宗の躬自神聖武勇なるを云、駕は車を駕する也、馭は轡を執て馬を使ふ也、臣下にめしつかはるゝ者皆必英雄の人なると云意也、【開府】、新唐書四十六百官志三十六云、文散官階二十九從一品曰開府儀同三司、○事文類聚新集三云、漢文帝元年用宋昌爲衞將軍、位亞三司、章帝建初三年使車騎將軍馬防班同三司、三司之名始此、殤帝延平元年鄧隲爲車騎將軍儀同三司、儀同之名始此、魏黃權以車騎將軍開府儀同三司、開府之名始此、唐以開府儀同三司爲文散官、雖三公三師亦冠以此號、開府は哥舒翰を指て云、天子神武の運に應じて翰朝廷の豪傑と云に當て兵勢を論ずること古代名將の風にもこえすぐれたるとなり、當字は當戸當壚と云當字と同意也、

先鋒百勝在、略地兩隅空、翰北征突厥、西伐吐蕃、政取其地、故云兩隅空、

【先鋒】は先登の意也、【略】は字彙云、行取曰略、漢張

至こと張華博物志十雜說に見えたり、文甚長し省て不錄、問津二字、出論語微子篇、

○投贈哥舒開府二十韻 開府名翰、

本集二載之、天寶十三載在長安作、

【哥舒翰】、唐書列傳六十、哥舒翰其先蓋突騎施酋長哥舒部之裔、父道元爲安西都護將軍赤水軍使、故仍世居安西、翰少補效穀府、果毅家富于財、任俠重然諾、游河西、事節度使王倕、倕攻新城、使翰經略、稍知名、又事王忠嗣、署衙將、翰疏財多施予、故士歸心、爲大斗軍副使、佐安思順不相下、忠嗣更使討吐蕃副使倨見、翰怒立殺之、遷左衛郎將、吐蕃盜邊、與翰遇苦拔海、吐蕃枝其軍爲三行、從山差池下、翰持半段槍迎擊、所嚮輒披靡、名蓋軍中、擢授右武衛將軍、副隴右節度、爲河源軍使、先是吐蕃候積石軍麥熟歲來取、莫能禁、翰乃使王難得楊景暉設伏東南谷、吐蕃以五千騎入塞、放馬褫甲將就田、翰自城中馳至塵鬪、虜駭走、追北伏起悉殺之、隻馬無還者、翰嘗逐虜馬驚陷于河、吐蕃三將欲刺翰、翰大呼、皆擁矛不敢動、救兵至追殺之、會忠嗣被罪、帝召翰入朝部將、翰至帝虛心待、與語異之、拜鴻臚卿、爲隴右節度副大使、翰已謝、踰年築神威軍青海上、吐蕃攻破之、更築於龍駒島、號應龍城、翰相其川原宜畜牧、謫罪人二千戍之、由是吐蕃不敢近青海、天寶八載詔翰以朔方河東群牧兵十萬攻吐蕃石堡城、數日未克、翰怒捽其將高秀巖張守瑜將斬之、秀巖請三日期、如期而下、遂以赤嶺爲西塞、開屯田、備軍實、加特進賜賚彌渥、十一載加開府儀同三司、久之進封涼國公、兼河西節度使、攻破吐蕃洪濟大莫門等城、收黃河九曲、以其地置洮陽郡、進封西平郡王、賜音樂田園、

杜子美

今代麒麟閣、何人第一功、 宣帝甘露三年圖功臣於麒麟閣、唯霍光不名、其次張安世丙吉等凡十一人、

【麒麟閣】、三輔黃圖云、麒麟閣廟記云、麟麒閣蕭何造、云云、此閣は漢の閣也、唐朝に又建るには非ず、今代と云は言は今代の功臣を昔麒麟閣に圖像を畫し如くに選て畫かば何人が功勳第一に居べきやと云意、此二何先づ一篇の大意を提げ起し哥舒翰の大勳を叙るの

大夫、立四年薨、子戊嗣、初元王敬禮申公等、穆生不嗜酒、元王毎置酒常爲穆生設醴、及王戊即位常設、後忘設焉、穆生退曰、可以逝矣、醴酒不設、王意怠、不去楚人將鉗我於市、稱疾臥、【鄒陽】、前漢列傳二十一、鄒陽齊人也、陽與吳嚴忌枚乘等倶仕吳、吳王陰有邪謀、陽奏書諫、吳王不內其言、是時景帝少弟梁孝王貴盛、亦待士、於是去之梁、從孝王游、陽爲人有智略、忼慨不苟合、介於羊勝公孫詭之間、勝等疾陽、惡之孝王、孝王怒下陽吏、將殺之陽廼從獄中上書、此一聯言は李白が永王に仕る本より禮し重せらるゝに非ず、故に穆生楚の筵を辭して逝の思ひありて謀にあづかるに非ずと云へども永王に脅し行れて不能去軍敗れて後遂に永王に與したると云に坐せられて尋陽に繫れ鄒陽が無辜して梁の獄に下るが如なる患にあへると云意也、

已用當時法、誰將此義陳、　永王璘待白之薄

而白豈與謀哉、當時不知察此而施之以法、誰以此義陳之、

李白實永王に與して謀をなす者にあらざれども糺明せずして已に當時の律法を以て罪に抵したり誰か白が爲に無辜ことを上陳して寃をすゝぐ人あらんやと也注【待白之薄】、永王の白を視ことくにして禮重せず待遇うすき也、【豈與謀】、永王已に專ら任用することなきからは白何ぞ彼と與に亂を起す大事を謀ることを爲んやと也、【察此】、此は白が無辜を指す、

老吟秋月下、病起暮江濱、莫怪恩波隔、乘槎與問津、　言白之才器當蒙上知而恩波頓隔、子美欲乘槎而問之天也、【槎】音査、

【老吟―】、此一聯は杜公自言也、我も年老て秋月の下に吟し病より起て暮江の濱にさまよふと也、病起は疾作るには非ず、病始て間るを云、【莫怪―】、李白を慰安するの辭也、李白が才を以て却て天子に得られず恩波隔て及ことなし固に如何ぞや、然ども怪むことなかるべし皆天也不可料知只槎に乘て天に到て君が爲に命路の要津を問んことを思と也、乘槎問津ともに故典の字を借用ゆ、畢竟は命の通塞常なくして料り知がたし、皆天なれば屯蹇を以意に介むことなかれと云の意也、【乘槎】、海上の浮槎に乘て天河に

二十九張耳傳云、北有長城之域、南有五嶺之戍、註漢書音義曰、嶺有五、因以爲名、在交阯界中也、索隱曰、裴氏廣州記云大庾始安臨賀桂陽揭陽斯五嶺【三危】、杜詩集註云、三危山名、在今陝西行都司瓜州城、本集注希曰、書注三危西裔、白以永王璘之累流夜郎、五嶺三危與夜郎隣境也、此二句言は南方五嶺の炎蒸甚き地に謫せられ三危の邊に放ち逐れたる臣となりて居と也、

幾年遭鵩鳥、（賈誼爲長沙王傳、不得志、有鵩集于舍、鵩音服、）獨泣向麒麟、（孔子見麟而泣曰、出非其時、吾道窮矣、○喩白之困窮不得志、）蘇武先還漢、（蘇武在匈奴十九年而還、白比武則先還也、）黃公豈事秦、（黃公四皓之一、辟秦居商山、以喩白不從永王璘也、）

【幾年——】、前漢書列傳十八、賈誼雒陽人也、年十八以能誦詩書屬文稱於郡中、文帝召爲博士、超遷至太中太夫、後以誼爲長沙王太傅、有服飛入誼舍、止於坐隅、服似鴞、不祥鳥也、誼既以適居長沙、長沙卑濕、誼自傷悼以爲、壽不得長、廼爲賦以自廣、○春秋哀公十有四年春西狩獲麟、公羊傳云、麟者仁獸也、有王者則至、無王者則不至、有以告者、曰有麕而角者、孔子曰、孰爲來哉、孰爲來哉、反袂拭面涕沾袍、曰吾道窮矣、此二句二事を借て云、幾年か遠謫に遭て吾が道の窮することを傷憂ると也、【蘇武】、傳前に見えたり、蘇武は匈奴に在こと十九年にして漢に歸れりこれに比すれば李白は先たつて早く赦し還されたり黃公豈に秦に事る者ならんや白永王に與せざること又如此也、[注]通鑑漢高祖十二年張良曰、上所不能致者四人、曰東園公、綺里季夏、黃公、角里先生、この四人商山の四皓と云、永王璘傳前に見たり、玄宗の子肅宗の弟也、

楚筵辭醴日、（言白在永王璘、如穆公見楚王不設醴則辭去、）梁獄上書晨、（白坐事下潯陽獄、如鄒陽於梁孝王獄中上書即出、）

此二句は李白實に永王に與するに非ずして累に坐せられて獄に下ることを云也、【楚筵】、前漢書列傳六、楚元王交字游、高祖同父少弟也、好書多材藝、少時嘗與魯穆生申公俱受詩於浮丘伯、及秦焚書各別去、漢六年交爲楚王、元王既至楚以穆生白生申公爲中

に話談をなしては山野飄逸の雅致あることを憐む也、【嗜酒―】、酒を嗜て志氣宏放なるを觀て天性飄然として世に超るの眞趣あることを見得たると也、

醉舞梁園夜、行歌泗水春、才高心不展、道屈善無鄰、處士禰衡俊、（禰衡字正平、爲平原處士、）諸生原憲貧、（孔門弟原憲至貧、二事比白之有才而無祿也、）

【醉舞―】、本注夢弼曰、按公傳、嘗從白及高適過汴州、酒酣登吹臺慷慨懷古、太白集、有梁園醉歌、汴州即梁園故地、又公與太白嘗同遊山東、故曰行歌泗水春、此一聯舊遊を叙する也、嘗て共に梁園に遊て醉舞せし夜もありき又泗水の濱にて春のころ相與に行歌したりし時もありしと也、【才高―】、李白天才さしも高けれども不幸にて志を不遂常に不平を抱て心展ることなき也、白が平生內に養ふ所の道屈して行ふことを不得、善なれども人親みたすくる者なし、是德必有鄰の反也、【處士】、孟子滕文公下云、聖王不作、諸侯放恣處士橫議、直解云、處士未仕的人、【禰衡】、後漢書列傳七十下、禰衡字正平、少有才辨、而氣尙剛傲、孔融上疏薦之曰、竊見處士平原禰衡、年二十四、字正平、淑質貞亮、英才卓礫、云云【原憲】、家語九弟子解、原憲宋人、字子思、少孔子三十六歲、淸靜守節、貧而樂道、此二句二人を借て言ふ、白が高才なることは禰衡が賢俊なると等しと云へども祿なきに依て孔門の諸生原憲が如く貧乏なると也、

稻粱求未足、薏苡謗何頻、（馬援征交趾、載薏苡還、人謗之以爲明珠、喩白之遇讒也、）五嶺炎蒸地、三危放逐臣、（太庚始安臨賀桂陽揭陽是爲五嶺、白長流夜郎、五嶺三危與夜郎接境、）

【稻粱―】、白已に原憲が貧の如し故に朝暮稻粱の求め足ることなし馬援薏苡の謗の如く無實の讒譖に遇ふこと何ぞ頻に甚きぞやと也、㊟【馬援】、後漢書列傳十四、馬援字文淵、扶風茂陵人、初援在交趾、常餌薏苡實、用能輕身省慾以勝瘴氣、南方薏苡實大、援欲以爲種、軍還載之一車、時人以爲、南土珍怪、權貴皆望之、援時方有寵、故莫以聞、及卒後有上書譖之者、以爲、前所載還皆明珠文犀、帝益怒、【五嶺】史記列傳

の意なり、獸錦袍の新なるを賜ふと云意也、文字を錯綜して句をつくる也、注【作樂章】、絲竹の樂を奏するには樂章の詩を歌て其歌に樂を合する也、俗にしやうがと云是也、樂史李翰林集後序云、開元中禁中初重木芍藥、得四本紅紫淺紅通白者、上因移植於興慶池東沈香亭前、會花方繁開、上乘照夜車、太眞妃以步輦從、詔選梨園弟子中尤者、得樂一十六色、李龜年手捧檀板押衆樂前將歌之、上曰、賞名花對妃子、焉用舊樂辭焉、遽命龜年持金花牋、宣賜翰林供奉李白立進清平調辭三章、白欣然承詔旨、援筆賦之云云、龜年以歌辭進、上命梨園弟子略約調撫絲竹、遂促龜年以歌之、【白日來—】、玄宗白を金鑾殿に置て翰林に出入せしめ國政を問ひ玉ふを云也、白日進て殿上に升れば朝廷の間敢て先だつ者なく青雲の士皆白が後塵に追隨せしと也、【青雲】は朝廷に仕る冠蓋の士を指て青雲士と云也、史記六十一伯夷傳云、非附青雲之士惡能施于後世哉、

乞歸優詔許、（白爲高力士所譖、懇求還山、帝賜金放還、）遇我宿心親、未負幽棲志、兼全寵辱身、劇談憐野逸、嗜酒見天眞、

【乞歸—】李白親近の臣の爲に容られずして潜らるゝことを知て懇に天子に請て舊山に還んと求し故に玄宗優詔を以て金を賜て放し還し玉へり、【優】は字彙、和也、饒也、俗結構なる御意にてと云義なり注【白爲高—】、高力士以脫靴爲深恥、異日太眞妃重吟前辭、力士曰、始以妃子怨李白深入骨髓、何翻拳々如是耶、太眞妃因驚曰、何翰林學士能辱人如斯、力士曰、以飛燕指妃子賤之甚矣、太眞妃頗深然之、上嘗三欲命李白官、卒爲宮中所捍而止、【遇我—】、遇は遇合也、交の意也、宿心は久欵の心と同じ、久しき好みの心親しき也、【未負—】、白盛に恩寵を受れども幽棲の志を易へずして故舊の友を不忘と也、杜公集中與白詩最多し、白が幽棲の志に不負して宿心の親き交情あること可見、【兼全—】、白初め恩寵を承け後に讒辱せられ因て山に還んことを求て害を遠く是寵辱の身を全うする也、【劇談】、前漢書揚雄傳、雄口吃不能劇談、默而好深湛之思、劇は甚也、【野】は卑野の野に非ず、塵外山野の風趣を云也、【逸】は飄逸也、共

筆落驚二風雨一、詩成泣二鬼神一、聲名從レ此大、汨沒一朝伸、文彩承二殊渥一、流傳必絕倫、

【筆落―】、文章を作るの敏速なるを云、紙上に筆を落して文作ること風雨の驟に驚くが如に勢速なる也、【詩成―】、詩律の高妙なるを云、詩を作り成すときは靈妙を寫し出して鬼神を感動し泣かしむると也、淮南子云、蒼頡造レ書而天雨レ粟鬼夜哭、【聲名―】、從此は賀知章白が文を見て驚て謫仙人なりと云しより白が多年の汨沒一朝に伸び達したり、【汨沒】は衆人の間に埋れ沈で在しを云、【文彩―】、知章が薦を以て玄宗に見え、頌一篇を奏し文彩の美に因て玄宗より殊に渥き恩寵を承て一時の名聲中外に流傳すること群倫に絕れ超たる也、唐李陽氷李翰林集序云、天寶中皇祖下レ詔徵就二金馬一、降レ輦步迎如レ見二綺皓一、以二七寶牀一賜レ食、御手調レ羹以飯レ之、謂曰、卿是布衣名爲二朕知一、非二素畜二道義一何以及レ此、置二於金鑾殿一出二入翰林中一、問以二國政一、

龍舟移棹晚、（玄宗泛二白蓮池一召レ白、白被酒、命二高力士一扶登レ舟、）獸錦奪袍新、（白作二樂章一帝賜二錦袍一、）

【龍舟―】、本集注趙曰、太白墓碑云、玄宗泛二白蓮池一召レ白作レ序、時白被酒、命二高力士一扶以登レ舟、【龍舟】は龍頭の舟、即ち天子の御舟を指す、玄宗蓮池にて御遊の時酒宴に侍りしを云也、注【被酒】は酒に甚だ醉たるを云也、前漢高祖紀云、到二豐西澤中亭一止飲、高祖被酒、注師古曰、被加也、被酒者爲二酒所一レ加也、【高力士】、唐書列傳百三十二宦者傳、高力士馮盎曾孫也、聖曆初嶺南討擊使李千里上二二閹兒一曰金剛、曰力士、武后敕給二事左右一、高延福養爲レ子、故冐二其姓一、玄宗以レ誅二蕭岑一功爲二右監門衛將軍一知二內侍省事一、【扶登舟】、白傳云、白嘗侍レ帝醉、使二高力士脫一レ鞾、【獸錦―】、本集注夢弼曰、白外傳云、白作二樂章一賜二錦袍一、今云二獸錦一蓋錦織二成獸文一也、奪字如二宋之問傳一、武后遊二龍門一詔二從臣一賦レ詩、東方虬先成、后賜二錦袍一之問俄頃獻、后覽之嗟賞更奪レ袍以賜、此句は李白樂の章歌を作て上り玄宗より錦袍を賜しを云也、錦の地紋に獸を織つけたるを獸錦と云、奪字宋之問か故事を借用ゆ、即ち賜と云

記檀弓上云、子夏曰吾離羣而索居亦已久矣、注索散也、

回首驅流俗、生涯似衆人、巫咸不可問、列子有神巫、自齊來、命曰季咸、知人生死存亡禍福壽夭、鄒魯莫容身、莊子孔子再逐於魯、削迹於衛、窮於齊、圍於陳蔡、不容身於天下者豈足貴耶、

【回首—】、杜子美回首自ら身を省れば世間の流俗に驅られて安きことなく生涯は不肖の衆人と殊なることなく終に顯達するなき也、【巫咸—】、此一聯は言は人間の窮通料りがたし孟子の大賢さへ時に不合して身を容る處なし況や我が如きもの困窮すること宜也巫咸に問ふまでもなきと云意也、注列子黃帝篇に見えたり、莊子は盜跖篇の語なり、正宗云、指孟子事、舊注引莊子盜跖篇以爲孔子事者誤、

感激時將晚、蒼茫興有神、時將晩傷衰老也、蒼茫曠遠貌、言興之超遠、爲公歌此曲、涕淚在衣巾、

【感激】は情内に動てふるひおこるを云、一生衆人に殊ならずして流俗に驅られ壯志終に遂ることなく年衰老に及で暮景の將晩が如し、故に惘然として意興神あるやうに覺と也、注【曠遠】はむなしくとほき也、【爲公—】、見素に我が牢落をのべ告ん爲に此詩を作て歌へば詩に依て愈〻悲傷を添て涕淚衣巾を濕すと也、

○寄李白 白坐繫潯陽獄、宋若思釋囚辟爲參謀、乾元元年長流夜郎、子美寄此詩、 杜子美

全集六載之、題作寄李十二白二十韻、題注古今詩話云、老杜贈太白二十韻備敘白事、盡得其故迹矣、注【宋若思】傳唐書無、【參謀】、軍中にて將軍の傍に與參して共倶に謀略を計るの職也、

昔年有狂客、號爾謫仙人、賀知章自號四明狂客、呼白爲謫仙人、

【昔年—】、李白天寶三年吳筠とともに長安に至て紫極宮にて賀知章に見えたるを云也、【狂客】は賀知章を云、具に第二卷憶賀監詩の注に見えたり、

盡還淳、此言宰相之能事畢矣、

【豈是―】此二句故事を假用て云、見素の爲人豈是俗間凡庸の屬ならんやもとより廟堂の上に立て天下の政を司り萬民を惠み救ふ棟梁の材ある人と云意也、【池中物】、注晉書卷一百一、劉元海新興匈奴人、冒頓之後也、名犯高祖諱、故稱其字焉、○呉志周瑜傳、劉備詣京見權、瑜上疏曰、劉備以梟雄之姿而有關羽張飛熊虎之將、必非久屈爲人用者、愚謂、大計宜徙備置呉、分此二人各置一方、使如瑜者挾與攻戰、大事可定也、此三人倶在疆場、恐蛟龍得雲雨、終非池中物也、【由來】はもとよりと云意也、【席上珍】、禮記儒行篇、哀公命席、孔子侍曰、儒有席上之珍以待聘、言ろは儒は平生席上に於て講學道を修て治己治人の珍方を抱きこれを以天下の用を待つと云意也、【廟堂―】、廟堂は朝廷と云と同じ、朝廷の大事は先づ宗廟に告て謀也、只大臣のみ其謀に與て廟堂に昇るに依て大臣を稱して廟堂に立て政を爲と云也、此一聯言は朝廷に於て事を處し政を施すに治道の至理を窮め知て行ふに依て政和し民治て世の風俗も盡く變化して淳朴に還りたると也、注【能事畢】、天下如此太平なるときは政を司る宰相の任に於て能をほせたると云べし、故に能事畢と云、易繫辭云、天下之能事畢矣、

才傑倶登用、愚蒙但隱淪、子美自謂也、

長卿多病久、司馬相如字長卿、常有消渴病、子夏索居貧、家語離群索居、○子美以二人自比、

【才傑―】、此二句上を承け下を起す、上の文天下の太平を說、此に言は此時に當て才傑の人は倶に皆登げ用ひらるれども我は愚蒙なるに因て用らるゝことなく俗閒に隱れ淪てをると也、【長卿―】、昔長卿常に消渴を病めり吾も亦その如くに多病なること久し子夏は朋友の群を離て散居せり吾もその如くにて貧なること甚き也、【長卿】、前漢列傳二十七、司馬相如字長卿、蜀成都人、武帝讀子虛賦而善之曰、朕獨不得與此人同時哉、楊得意曰、臣邑人司馬相如自言爲此賦、上驚乃召以爲郎、○西京雜記二曰、長卿素有消渴疾、及還成都、悅文君之色、遂以發痼疾、卒以此疾至死、【子夏索居】、注引家語謬矣、家語に此語無し、禮

履ー】、天子の所居を天の紫微宮に比す、故に朝廷に上るを上星辰云、是見素朝廷に上り帝の旁に親近して任用せらるゝを云也、注【鄭崇】、前漢列傳四十七、鄭崇字子游、少爲郡文學史、哀帝擢爲尚書僕射、數求見諫爭、上初納用之、毎見曳革履、上笑曰、我識鄭尚書履聲、【吏部侍郎】、見素本傳に此官に除すること不見、【銓】、字彙、且縁切、次也、度也、允信也、

獨步才超古、餘波德照隣、聰明過管輅、（天寶十五歲十月丙申有星犯昴、見素言於肅宗曰、昴者胡也、祿山將死、昴金忌火行當火位、昴之昏中乃其時也、及祿山死日月皆不差、魏管輅善天文地理、今見素所言如此、其聰明過於管輅遠矣、）尺牘倒陳遵、（漢陳遵善於文辭、與人尺牘皆藏去爲榮、）

【獨步】、曹子建與楊德祖書曰、昔仲宣獨步於漢南、才能の世にすぐれて我と並び行く人なきと云意にて獨步と云也、獨步の才古人にも超たるとなり、【餘波】、左傳僖公二十三年、重耳對楚子曰、子女玉帛則君有之、羽毛齒革則君地生焉、其波及晉國者君之餘也、言は見素惠衆の恩澤流れ施して仁德遠く四鄰に及ぶと也、【聰明ー】、智の聰明は古の管輅にも超へ過たると也、注【天寶十五載】は即肅宗の至德元年也、見素本傳云、十月丙申有星犯昴、見素言於帝（肅宗）曰、昴者胡也、天道謫見、所應在人、祿山將死矣、帝曰、日月可知乎、見素曰、福應在德、禍應在刑、昴忌火、行當火位、昴之昏中乃其時也、既死其月亦死其日、明年正月甲寅祿山其殪乎、及祿山死日月皆驗、【管輅】、魏志二十九、管輅字公明、平原人、輅年八九歲便喜仰視星辰、得人輒問其名、夜不肯寐、自言、家雞野鵠猶尚知時、況於人乎、及成人明周易、觀風角占相之道、無不精微、【尺牘】、後漢書列傳四北海靖王興傳、敬王睦能屬文、又善史書、當世以爲楷則、及寢病帝使驛馬令作草書尺牘、註說文云、牘書板也、蓋長一尺因取名焉、【陳遵】、前漢書列六十二、陳遵字孟公、杜陵人也、略涉傳記、贍於文辭、性善書、與人尺牘主皆藏去以爲榮、牘の長を一尺に削に因て尺牘と云也、【倒】は陳遵をも推倒して勝つほどの上手なると云意也、

豈是池中物、（晉劉元海傳、蛟龍得雲雨非復池中物、）由來席上珍、（記儒有席上之珍以待聘、）廟堂知至理、風俗

帝追美充國、乃召楊雄、即充國圖像而頌之、此謂見素之父湊、韋賢二句集注云、此句湊之先祖仕隋、遂歸唐室之謂、○輔按ずるに此等の註に依ときは詩意第一二の兩聯に不聯屬、血脉不貫に似たり、故に今皆不取、第一句より六句までは玄宗に係け應圖の句より固絶倫に至までの八句見素にかけて看るときは詩意脉絡自ら貫通することを覺ふ、然れども舊說の旨に相違、臆說の謗を免れがたきのみ、

豫樟深出地、言其材之良、 滄海闊無津、言其量之廣、

北斗司喉舌、李固傳、陛下之有尚書猶天之有北斗也、北斗爲天之喉舌、尚書亦爲陛下喉舌、 東方領搢紳、時公爲丞相率百官、故云領搢紳、

【豫樟】は良材也、見素材器の偉大なること豫樟の根を深して土中より生出するが如し、【滄海──】、見素識量の寛廣なるは滄海の渺々と闊して津涯のほとりもなきが如くなると也、【北斗──】、注【李固傳】後漢書列傳五十三云、李固字子堅、漢中南鄭人、少好學、常步行尋師、不遠千里、遂究覽墳籍、郡擧孝廉、辟司空掾、皆不就、陽嘉二年有地動山崩火災異、公卿擧固對策、對曰、云云今陛下之有尚書猶天之有北斗也、斗爲天喉舌、尚書出納王命賦政四海、北斗の天運を司る如くに見素も天子の喉舌を司て王命を出納せると云意也、是見素が武部尚書たるを云也、【東方──】、【搢紳】、史記封禪書云、搢紳之屬皆望天子封禪改正度也、索隱曰、搢挺也、言挺笏于紳帶之間、紳は大帶也、衣冠裝束して笏を大帶にさしはさみて朝に立つ官人を稱して搢紳と云也、東方は北斗に對して云也、東字に泥むべからず、凡四方搢紳の官人を率て朝廷の上に立て天子の政を相るを云、

持衡留藻鑑、聽履上星辰、鄭崇哀帝時爲尚書僕射、毎曳革履、上笑曰、我識鄭尚書履聲、○見素爲吏部侍郎、留藻鑒、言其銓序平允、上星辰、言其親帝之旁、

【衡】は斤兩也、稱のさほを衡と云、物の輕重を料りて私なき器也、【藻】は水草也、水中に在て甚だ鮮明なる者也、【鑒】はかゞみ也、言は見素平判と爲て能否を判斷すること、衡を持して物をはかる如くにて藻鑑の如くに明察なる行迹を留たると也、本傳云、遷文部侍郎平判、皆稱於口銓序平允なりと云是なり、【聽

沙汰江河濁、調和鼎鼐新、韋賢初相漢、（韋賢字長儒、授昭帝詩、宣帝用之爲相、）范叔已歸秦、（史記范雎字叔、入秦、昭王大說拜秦相、）盛業今如此、傳經固絕倫、

【沙汰】、字彙、汰音泰、沙汰、淘汰、杜詩集註沙汰以篩貯沙去其細而存其大曰汰、謂吏部之於百官揀選亦如之、此言見素爲吏部丞也、三足曰鼎、大鼎曰鼐、皆烹魚飲食之器、書若作和羹爾維鹽梅、此言爲相日也、沙汰とは沙を篩に入て水中にてゆりたゝ細土を洗ひ流し大なる砂をとゞむるを云也、是は見素黜陟使職に在時繩糾の精しきを云也、【調和】は料理のあんばいするを云、鼎中の羹をあんばいする如くに天子を相けて朝廷の政を調和するを云、是見素相となるの時を云、【韋賢】、前漢書列傳四十三、韋賢字長孺、魯國鄒人也、賢爲人質朴少欲、篤志於學、兼通禮尚書、以詩教授、號鄒魯大儒、徵爲博士、給事中、進授昭帝詩、稍遷光祿大夫詹事、至大鴻臚、昭帝崩無嗣、大將軍霍光與公卿共尊立孝宣帝、帝初即位賜爵關內侯、本始三年代蔡義爲丞相、年八十二薨、賢少子玄成復以明經歷位至丞相、故鄒魯諺曰、遺子黄金滿籯不如一經、【范雎】、史記七十九、范雎者魏人也、字叔、游說諸侯、欲事魏王、先事魏中大夫須賈、須賈爲魏昭王使於齊、范雎從、齊襄王聞雎辯口、賜金十斤及牛酒、雎辭謝不敢受、須賈知之大怒、告魏相、魏相大怒使舍人笞擊雎、雎佯死、即卷以簀置廁中、賓客更溺雎、雎從簀中謂守者曰、公能出我我必厚謝公、得出亡伏匿、更名姓曰張祿、當此時秦昭王使謁者王稽於魏、王稽辭魏去載范雎入秦、上書曰、臣聞云云臣願得少賜游觀之間望見顏色、一語無效請伏斧質、於是秦昭王大悅、范雎乃得見於離宮、秦王乃拜范雎爲相、封范雎以應號應侯、此二句上の一聯を承て比して云、見素求に應じ朝に出て沙汰調和せることたとへば韋賢が初て漢の相となり范雎が已に秦に歸して相となりて功勳あるが如くなると也、【盛業—】、范雎の句に應ず、范雎秦王を相て盛大の功業あり今日見素も亦如此也、【傳經—】、韋賢の句に應ず、韋賢經を傳て鄒魯の大儒と稱す、見素も亦固に博學世倫に絕れ超たると也、○丹青一句本注洙曰、成

統に平なるを云、【八荒】、荒は大也、八方と云義也、【壽域】、前漢書七十二王吉傳上疏曰、歐一世之民躋之仁壽之域、注師古曰、以仁撫下則羣生安逸而壽考、【洪鈞】、正宗洪作鴻、注鴻大也、鈞謂陶家摸工圓轉者、制器大小由之、天梯古文注云、洪大也、天之於物隨類賦形生成之、故曰天鈞、帝者法之以馭天下、猶陶人以轉洪鈞、鈞は陶する者器を作るとき用るろくろと云物也、ろくろを轉じて器の形を心のまゝに作り出す也、天子は天下を掌の上に運らし禮樂刑政のしなぐ〵を制作なさるゝこと、鈞を轉じて器を作るが如し、故に大なる鈞を轉ぜらると云意にて天子の天下を治めらるゝを轉洪鈞と云也、此一聯言は玄宗在位の間八方のはてまでも長久にめでたき天下にて萬國一統にして反く者なく只一氣に天下を治め玉ふと云意也、

霖雨思賢佐、丹青憶老臣、應圖求駿馬、驚代得麒麟、（言見素以才見用、）

【霖雨—】、此一聯玄宗の賢相名將を得んことを願ひ玉ふを云也、書經說命曰、若金用汝作礪、若濟巨川用汝作舟楫、若歲大旱用汝作霖雨、注三日雨爲霖、【丹青】、通鑑漢宣帝甘露二年云、上以戎狄賓服思股肱之美、乃圖畫其人於麒麟閣、法其容貌署其官爵姓名、唯霍光不名曰大司馬大將軍博陸侯姓霍氏、其次張安世、韓增、趙充國、魏相、丙吉、杜延年、劉德、梁丘賀、蕭望之、蘇武、凡十一人、○通鑑漢明帝永平三年云、帝思中興功臣乃圖畫二十八將於南宮雲臺、以鄧禹爲首、云云言は殷の高宗は傳說を得られて佐翼とし川を濟らば汝を舟とし旱ならば汝を霖雨とせんと云へり、今日も如此の賢人佐翼の臣となりて出よかしと思ひ望み玉ふと也、又漢の時は功業の名臣多くして戎狄賓服せしに因て其功を思て其像を丹青に寫せり唯今もさやうの名將老臣あれかしと憶ひ慕ひ玉ひしと也、此二句は下もに見素時に乘じて出ることを云はん爲の張本也、【應圖—】、前漢書六十七梅福傳、欲以三代選擧之法取當世之士、猶察伯樂之圖求騏驥於市、而不可得亦已明矣、こゝには翻案して用ゆ、圖の如なる駿馬を求とは古の傳記に載たるやうの賢人を求め得られしと云意、【驚代—】、一代の耳目を驚して靈異の麒麟を得たると也、

相、此詩乃天寶十三載公在長安作、按史、是年見素止任同中書門下平章、未爲左相、今題曰左相、乃後來編寫之誤、或追補之歟、○新唐書列傳四十三、韋見素字會微、質性仁厚、及進士第、授相王府參軍、襲父爵、擢累諫大夫、天寶五歳爲江西山南黔中嶺南道黜陟使、繩糾吏治所至震畏、遷文部侍郎平判、皆誦於口、銓序平允、十三載拜武部尚書同中書門下平章事集賢院學士、知門下省事、明年祿山反、從帝入蜀、詔兼左相、封豳國侯、肅宗立、與房琯崔渙持節奉傳國璽、乃冊宣揚制命、謁見肅宗於順化郡、至鳳翔拜尚書左僕射、罷知政事、徙太子太師、詔至蜀郡奉迎太上皇、以功食實封三百戸、上元初以疾致仕、寶應元年卒、年七十六、贈司徒、謚忠貞、○輔按、據本集註則此詩之作見素未爲左相之前也、然詩中所說皆是宰相事也、似見素爲左相後作、考史、見素爲左相玄宗在蜀之時、即肅宗至德元年七月也、此時天下大亂、不是昇平之日、又與詩所言不合、按唐百官志、中書門下平章事宰相職、杜公詩想必稱見素爲平章事之職也、

杜子美

鳳曆軒轅紀、（鳳鳥知天時故以名曆正之官、軒轅黄帝名、）龍飛四十春、八荒開壽域、一氣轉洪鈞、

【鳳曆】、左傳昭公十七年秋郯子來朝、與之宴、昭公問焉曰、少皞氏鳥名官何故也、郯子曰、吾祖也、我知之、我高祖少皞摯之立也鳳鳥適至、故紀於鳥爲鳥師而鳥名、鳳鳥氏曆正也、杜預注云、鳳鳥知天時、故以名曆正之官、【軒轅】、史記五帝本紀云、黄帝少典之子、姓公孫、名曰軒轅、軒轅之時神農氏世衰、諸侯相侵伐暴虐百姓、而神農氏弗能征、於是軒轅乃習用干戈以征不享、諸侯咸來賓從、乃修德振兵、治五氣藝五種、注王肅曰、五氣五行之氣、索隱曰、謂春甲乙木氣、夏丙丁火氣之屬、是五氣也、○史記曆書云、太史公曰、神農以前尚矣、蓋黄帝考定星曆、建立五行、起消息、正閏餘、云云言鳳鳥氏の司て造りし曆日を以て黄帝の定られし年紀をかぞへて見ればと云義也、畢竟は曆をくりてかぞへて見ればと云意也、【龍飛】、易乾云、九五飛龍在天、これは玄宗天子の位に在すを指て云、玄宗即位太極元年より天寶十三載まで四十三年也、故に四十春と云、八荒二句玄宗在位の間天下一

か逃れ歸せんとおもへるやと云意、注【西漢】は前漢也、前漢は長安に都し、後漢は洛陽に都す、長安は關西也、故に西漢と云也、【蒯通】、范陽人也、傳見于前漢書列傳十五、韓信淮陰人也、傳見于前漢書列傳第四、【震恐】、震懼也、をぢをそるゝ也、持此の一句は即蒯通が傳中の語なることを證す、造物萬物を作り出す者は天命也、故に天命を指て造物と云、人逃れ去んと欲れども天命我を捨ておかずして逃れしむることなし言は溫公臥て不出と云へども天命必當用と云の意也、【名聲―】、人世を逃れんと欲しても名聲の身をはなれざること我が輩を逐て隨ひ來るか如し、終に不能逃也、是莊子に云ふ影を畏て日中に走れば影も亦隨て疾く走て終に身を不離と云と同意也、【此病―】、本集批劉須溪曰、古刑衣赭衣、若莊子天刑之耳、用始皇赭山非是、此病は名の身を不離を指す、是又人の一病也、所赭は所罪と云義也、刑人には赭衣を衣する也、名の身を離れざるは天より我に赭衣を衣せて罪するが如くなると云意なり、【撫掌―】、結句は此時荊公宰相として方に新法を行ひ、呂惠卿が徒權を專にして政を誤り、天下の民悉く困窮す、司馬公は道不合に因て逃れて洛に歸て不出、然れども天意捨ることなく名聲身を逃れずして四海領を引て公の陶冶を望む、これ當に出て政を改め民を救ふべき時也、然るに公臥て不出口を絶て不言事、故に云撫掌先生の年來喑啞に效て口を箝て居らるゝことを笑ふと云へり、東坡の如此に溫公の不出ことを非笑せるは實は時の宰相善人に非ず新法の不便を譏れる者也、註【招】字衍文か、或は傳寫の誤なるべし、【蒼生】は萬民也、【非其人】、其任に當るべきほどの德あらず、不善の人なるを云也、新法は即靑苗の法也、○詩林廣記卷四載此篇詩後註云、詩按云、司馬光在西京葺一園名獨樂園作詩寄之、此詩言四海望光執政陶冶天下以譏見任執政不得其人、又言兒童走卒知其姓字、終當進用、緣光曾言新法不便、某亦曾言新法不便、既言終當進用、光意亦譏朝廷新法不便、終用光改變此法也、又言光却瘖然不言、意望光依然上言攻擊新法也、

○上韋左相二十韻　左相韋見素也、

本集二載之、集注八此詩題註云、韋見素襲父爵拜左

夫の致仕人文彥博席汝言等、年七十以上の諸老十二人を集て耆英會を爲せり、司馬公年未だ七十に不至ども其德行を重じ特に請て會中に入られたり、此時司馬公年纔に五十なれども洛中の諸老傾き慕ふこと如此、故に傾洛社と云也、【雖云―】、孟子梁惠王篇云、與衆樂樂、客を引友を邀て酒を酌み碁を圍て與衆共に園中の景を樂と云へども其道を悟り得て心に自適するの樂は衆人の知不得ところにて溫公獨り悅び樂める處也、故に中有獨樂者と云也、【才全―】、莊子德充符篇云、是必才全而德不形者也、老子七十章云、知我者希則我貴矣、是以聖人被褐懷玉、才內に全して德外に不形ときは外味して人窺ひ知やすからず故に我を知者希也、君子の道は內己れに足て外に不形を貴ぶ、故に所貴は人の我を知ること寡に在也、是溫公獨り道を樂て出ざるを云也、

先生獨何事、四海望陶冶、兒童誦君實、走卒知司馬、持此欲安歸、西漢蒯通說韓信曰、足下歸楚楚人不信、歸漢漢人震恐、足下欲持是安歸乎、造物不

我捨、名聲逐我輩、此病天所赭、撫掌笑先生、年來效瘖啞、按公詩案招此詩言

四海蒼生望司馬執政、譏相非其人新法不便也、

【先生】、論語爲政篇、有酒食先生饌、朱注先生父兄也、凡そ人を尊て父とし兄とし敬するとき先生と稱す、又韓詩外傳云、古之謂知道者曰先生何也、猶先醒、不聞道術之人茫々乎其猶醉、先生は溫公を指す、【何事】はいかにぞやと云意、【陶冶】、陶は瓦器を作也、すへものづくりと訓ず、冶は鐵を鑄て器を造る也、二字を借て政を執て天下を和化することを云也、四海の民皆悉く司馬公の丞相となられて天下を治られんことを望を云、【兒童―】、君實は司馬光の字也、【走】は僕也、司馬遷が書、太史公牛馬走、馳走の僕卒也、兒童僕走の賤き者までも皆溫公の姓字を知て尊也、公居洛十五年天下以爲眞宰相、田夫野老皆號爲司馬相公、婦人孺子亦知其爲君實也、帝崩赴闕臨、衞士望見皆以手加額曰、此司馬相公也、所至民遮道聚觀、馬至不得行、曰公無歸洛、留相天子活百姓、【持此―】、此天下の大望を身にうけながら安くに

寺、隋開皇十三年又爲學、煬帝即位改曰國子監【故營地】は昔時人の經營して居を卜たる舊宅を云也、創は始也、舊宅を求て園を創造せられし也、

蘇子瞻

青山在屋上、流水在屋下、柳子厚盩厔縣食堂記、高山在前、流水在下、可以俯仰、可以宴樂、中有五畝園、花竹秀而野、花香襲杖履、竹色侵盞斝、樽酒樂餘春、棊局消長夏、

一二の句園の所在の形狀を云、青山は高く聳て屋の上に覆ひ流水は遠て屋の下を行也、注柳文二十六、盩厔縣新食堂記の文也、【盩厔】、前漢書武帝紀云、行幸盩厔五柞宮、註音灼曰、盩厔扶風縣也、師古曰、盩音張流切、厔音竹乙切、柳子厚の文の句法に效て東坡此詩の起句を作たると也、【中有五—】、〔畝〕、司馬法六尺爲步、步百爲畝、青山流水の中間に五畝ばかりの園あり園中には花竹秀て蕭散として原野の趣あると也、【花香—】、上の句花竹の字を分て二句を以て應ずる也、花香芳して遊人の履杖に香氣つき薫する也、【襲】は因也、及也、入也、竹の色は翠にして酒盞を侵して酒にうつろふと也、斝は音嫁、玉爵也、【樽酒—】、客來るときは樽中の酒を酌み餘春の美景を樂み或は棊局を圍で夏日の長きを消遣し常に從容として園中の樂みをなせると也、

洛陽古多士、風俗猶爾雅、先生臥不出、冠蓋傾洛社、雖云與衆樂、中有獨樂者、才全德不形、莊子全句、所貴知我寡、老子云、知我者希則我貴矣、

【洛陽—】、多士詩文王之什、濟々多士、文王以寧、洛陽は古より賢哲の士多きの地也、其遺風ありて今に於て士人の風俗猶儒雅に通き也、【先生—】、溫公論政の說王荊公と不協それより洛に歸て十五年絕口國事を不論故に臥て不出と云、【冠蓋】、文選西都賦、冠蓋如雲七相五公、冠を戴き蓋を翳す貴官の人也、【洛社】は文潞公老後に唐の九老會を慕て洛中の公卿大

丞相言、雖懇不見錄、遂行過滻

水、（音産）【滻水水名、出京兆藍田谷】東望不轉目、

【我雖—】、韓退之官の員に備て朝廷には在れども任用せらるゝことなければ氣勢日にくゞまりしゞまつて伸ることなし故に直に天子へ奏して李繁を薦ることを不得屢〻丞相に李繁が才能を言ふすこと懇切なれども丞相も亦其薦を錄し聽るゝことなきと也、不見錄は俗にとりあげもせぬと云意也、【遂行—】、韓文註韓曰、滻水出京兆藍田谷北、至灞陵入灞、內官に薦ることを不得に因て又外郡の守となりて任に赴るゝ故に其行を送て出滻水を過て手を分て相別れとも猶眷戀して遙に東の方を望て目をも不轉見おくると也、以上二十句李繁が始末を云也、

今子從之游、學問得所欲、入海

觀龍魚、矯翮逐黃鵠、勉爲新詩

章、月寄三四幅、【翮戶革反】

以上六句諸葛覺を送るの辭也、【從之】は李繁に從て隨州に往を云也、李繁は群聖の書を悉く腹に載たる人也、これに從て遊ぶからは學問は心に願ひ欲する所を遂げ得にてあらんと也、【入海—】、諸葛覺が學問の大志を云、言は覺が李繁に從て學で大に所欲の志を遂んこと大海に入て龍魚の飛騰を觀大翮を矯て黃鵠を雲霄に逐ふが如ならんと云意也、【强爲—】、勉强して詩を學び新奇の篇章を爲て月々に三四幅を寫して我に寄せ贈て見せられよと也、

○司馬温公獨樂園　公居洛、於國子監之側得故營地、創獨樂園、

宋李文叔洛陽名園記云、司馬温公在洛陽、自號迂叟、謂其園曰獨樂園、園卑小不可與他園班、其曰讀書堂者數十椽屋、澆花亭者益小、弄水種竹軒者尤小、曰見山臺者高不過尋丈、曰釣魚菴、曰採藥圃者又特結竹杪、落蕃蔓草爲之爾、温公自爲之序、諸亭臺詩頗行於世、所以爲人欣慕者不在園耳、獨樂の二字孟子梁惠王篇に出、温公取て園の名とせり、邵康節の集中に獨樂園の詩多し、花菴には牽牛花を植られたること詩に見えたり、【注】【國子監】、事物紀原六云、晉武帝咸寧四年初立國子學、國子周舊制也、北齊爲國子

るべし、但牙を以て飾るか又は牙を以て籤を作るか博古の君子これを辨すべし、【新若—】、書卷の裝飾新に美なること未だ手を觸てひらかざる如くなると也、是鄴侯典籍を多く藏め能愛護して毀損せしめざるを美る也、注【西京雜記】、六卷晉葛洪撰、【祕閣—】、西京雜記を遍撿するに此語不見、雜記或は異本あるか、祕閣は天子の書籍を藏る閣を云、【表】は裱裝する也、

爲人强記覽、（孔叢子博聞强記）**過眼不再讀、**
偉哉群聖書、磊落載其腹、

【爲人—】、李繁はむまれつき記臆のつよき人にて凡の書を能くをぼえ能覽らるゝ也、注【孔叢子】、嘉言第一、洽聞强記博物不窮、【過眼—】、一たび眼を經れば即ち記取するに因て再び讀むことを不用也、【偉哉】偉は大也、【群聖】は五帝三王周公孔子の經典を云、【磊落】、字彙、磊音雷、衆石貌、磊落磈磊貌、【載】は記臆して腹中に藏めおくを云、言は多の書をおぼえてぐはら〳〵と石の衆く積む如く腹中に收めおかれし也、

行年逾五十、出守數已六、（李繁年過五十已六爲大守矣）
京邑有舊廬、不容久食宿、
臺閣多官員、無地寄一足、（謂繁不得廁迹於臺閣之列）

【行年—】、李繁年紀五十に過ぎ外郡に出て太守となること已に六たび任ぜらると也、韓文註洪曰、公處州孔子廟碑爲繁作也、而傳不言其爲處州、所載特隨亳二州、而亳又在公亡後、爲之、此詩言出守數已六、而白樂天有繁刺吉州及遂州制、即知、史氏所遺略多矣、【京邑—】、京邑は長安也、舊廬は鄴侯よりの第宅を云、李繁は度々太守に任ぜられて外郡に出長安の舊廬には久く留て食宿することを得ざる也、【臺閣】は學士の所居也、天子の臺閣には天下の學士を召入られて官の員に備る人多けれども李繁は一足をも其列に寄せ容ることを不得常に外任にのみ在と也、注【廁迹】、廁は次也雜也、廁迹は班列にまじはり入を云也、

我雖官在朝、氣勢日局縮、屬爲

○送諸葛覺往隨州讀書、

本集七載之、題注韓曰、諸葛覺或云即澹師、後去僧爲儒、公逸詩有澹師晝睡二首、爲此人作、孫曰、此詩所謂鄴侯則言宰相李泌也、泌字長源、正元中爲相、封鄴縣侯、泌之子繁時刺隨州、後以亳州刺史賜死京兆府、此詩は諸葛覺が李繁に從隨州へ往て讀書學問せんとて赴くを送て作れる也、

韓退之

鄴侯家多書、架插三萬軸、（唐宰相李泌封鄴侯、其子繁刺隨州、）
一一懸牙籤、新若手未觸、（西京雜記、祕閣圖書皆表以牙籤、）

【鄴侯】は即李泌也、李泌鄴縣侯に封ぜらるゝ故に鄴侯と云、新唐書列傳六十四、李泌字長源、魏八柱國弼六世孫、七歲知爲文、玄宗開元十六年召之、泌既至、帝大悅曰、是子精神要大於身、後因軍功拜中書侍郎同中書門下平章事、累封鄴縣侯、卒年六十八、贈太子太傅、玄宗肅宗代宗德宗四朝に、歷仕す、德宗の朝に鄴縣侯に封ぜらる、大に國家に功ある者也、三萬軸は即三萬卷也、【懸牙籤】、韓文注韓曰、唐經籍志甲乙丙丁四部書、各爲一庫御書、經庫紅牙籤、史書庫綠牙籤、子庫碧牙籤、集庫白牙籤、以別之、○新唐書卷五十七藝文志云、玄宗兩都各聚書、四部以甲乙丙丁爲次、列經史子集四庫、其本有正有副、軸帶帙籤皆異色以別之、○牙籤は什麼樣の物と云こと未詳、或の曰、今書帙の端に象牙を以て作たるせんをつけて帙の側に插みおくを牙籤と云と云へり、此說は非也、刻板印本は五代の馮道より始といへども唐より以前の書寫本を貴て皆卷本とす、今如なる摺本はなし、然ときは今の方なる帙は不可有、且一一懸と云へば卷ごとに牙籤あるべし、按に字彙云、籤標也、韻會云、字林幖幟也、輟畊錄卷二十三云、唐貞觀開元間、人主崇尚文雅、其書畫皆用紫龍鳳綾爲表、綠文紋綾爲裏、紫檀雲花杵頭軸、白檀通身柿心軸、此外又有靑赤琉璃二等軸牙籤錦帶、南唐標以廻鸞墨錦、籤以潢紙、云云、籤或は牙を以てし或は潢紙を以とす云ときは其狀略可知也、籤は簽と同字也、近代書翰封筒に紅紙を貼して稱呼を寫すを簽と云、由是觀れば籤は俗に云外題と云物な

在るとき澄て清し山を流れ出れば不潔に汚されて濁水となる吾が夫も亦如此其初の心我を憐て兩情なし其後に美色に惑されて心を變じ我を棄たると也、[注]人の情慣れ習ふ所に因て遷り移るは猶水の流れ行て遇ふ所の地に因て清濁あるが如く也、

侍婢賣珠廻、牽蘿補茅屋、見其自守之操、

摘花不挿髪、亦詩所謂豈無膏沐、誰適爲容之意、采栢動盈掬、

天寒翠袖薄、日暮倚脩竹、天色已寒而翠袖尚薄、喩時之亂離而君子在外也、栢與竹歲寒不改其操、采栢倚竹則所思遠矣、猶君子見逐於君操守不易、所以爲忠臣貞婦、

【侍婢】、佳人に從侍する女奴也、【賣珠】、珠をあきなふて朝夕に供る資とする也、東方朔傳云、董偃始與母以賣珠爲事、【牽蘿―】、蘿はつたかづら也、女蘿薜蘿の類也、蘿を牽て茅屋の破を補て僅に風雨を禦ぐと也、[注]【見其―】、婢は珠を賣て廻り自ら蘿を以て屋を補ふと云ときは辛苦を嘗て自ら身を守るの操自ら見と也、【操】、字彙持也、節操也、みさをと訓ず、【摘花―】、已に夫に棄られて容飾をなすに心なし故に花を摘ても髪に挿むことなき也、[注]【詩】は衛風伯兮篇第二章云、自伯之東、首如飛蓬、豈無膏沐、誰適爲容、詩意は髪亂て蓬の如し豈膏を以てうるほし沐して垢を去ること無らんや只伯役に行てより主として容りすべき人なきが故也、此句不挿髪と云も亦詩の意と同じ、【採栢―】、栢は霜雪に不凋貞節の操あり我が心を秉の專なるに似たることあり故に心に嘉し慕ふて摘采に因て動もすれば掬に盈ると也、掬兩手にて奉るを云、小雅采綠篇、終朝采綠、不盈一匊、朱注兩手曰匊、【天寒―】、天氣已に寒に向へども翠袖尙薄して冬の具へなし只日暮のころ脩竹に倚て獨徘徊すると也、[注]天寒しても翠袖尙薄と云は時世の亂離に因て君子外に在て阨窮するに喩也、栢と竹とは歲寒しても霜雪を凌で色不變其節操を不改者也、今結末の句に栢を采り竹に倚と云は佳人心を寓するの所思固に悠遠也、猶君子たる人の君に逐ひ斥けらるれども怨をなさず忠節の操守を易ることなきが如し、如此の人は男にしては忠臣女にしては貞婦と云べきと也、

は悉く流離して我が骨肉の兒女をだも收め養ふことを得ざりし也、【世情―】、世情は世間の人情也、【衰歇】、字彙、歇消散也、家衰へ財散ずるを云、轉燭は燭焰の風に隨て轉ずるが如く定めなきを云、言は世人の常情は榮盛なるを尊び重じて衰歇なるを惡み棄るに因て萬事皆昔に易て燭の風に轉ずる如くなると也、注僞蘇注也、徐邈字景山、魏朝の人也、傳は魏志二十七に見へたり、

夫婿輕薄兒、新人美如玉、合昏尚知時、（本艸合歡即夜合也、一名合昏、其葉至昏而即合、）鴛鴦不獨宿、（鴛鴦雌雄未嘗相離、人謂之匹鳥、○此佳人自怨之辭、言物之有合有偶而人之不若也、）

【夫婿】、字彙、婿與壻同、思計切、女之夫曰壻、妻謂夫亦曰壻、夫婿は佳人我が夫を稱する辭也、【輕薄兒】、輕卒薄情の人を云、文選二十二阮嗣宗詠懐詩、平生少年時、輕薄好絃歌、【新人】は更に娶たる新婦を云、詩の谷風に新昏と云と同じ、言は夫婿は輕薄の人心を一にせずして我を棄て不顧又新人の美貌玉の如なるを娶と也、【合昏】、注本艸を引て云、合歡樹の一名也、其葉晝は披散し昏には又合すると也、又古今註云、合歡樹似梧桐、枝葉繁、互相交結、每風來輙身相解了不相牽綴、樹之階庭使人不忿、【鴛鴦】、をしどりと訓す、古今注云、鴛鴦水鳥、鳧類也、雌雄未嘗相離、人得其一則一思而至死、故曰疋鳥、此二句は合昏鴛鴦を以て興を起し自ら獨居ことを怨也、言は合昏は樹なれども尚時を知て昏には枝葉合す鴛鴦は鳥なれども尚雌雄匹居して嘗て獨宿せず我ひとり如何そや棄られて偕に處ることなきと云の意也、注有合は合昏を指す、有偶は鴛鴦を指す、

但見新人笑、那聞舊人哭、在山泉水淸、出山泉水濁、（情因所習而遷移、猶水因所遇而淸濁、此亦佳人念夫之辭也、）

【但見―】、輕薄の夫婿は朝暮新人の媚び笑をのみ悅び見て他念なし、那ぞ衰朽せる舊人の哭泣するを聞て憐み顧るの意あらんやと也、【舊人】は自ら我を云也、【在山―】、詩小雅四月篇云、相彼泉水、載淸載濁、此二句は今の昔に不若ことを云、泉水を視るに山に

於臣亦猶夫之於婦、君用新進少年、必至於疎棄舊臣、夫淫於新婚、必至於離絶舊室、此必然之理、注簡兮國風邶風之篇名也、【刺不用賢】、毛詩小序之文、【彼美人―】、二句は簡兮卒章之文也、正義云、西方之美人謂周室之賢人、西方之人謂宜爲西方之人、故傳曰、乃宜在王位、言宜在王朝之位爲王臣也、【言賢者―】簡兮の詩は賢者の佳美の徳あるを思ふの意也、此杜公佳人の詩も亦佳人をば賢者に比喩せる也、是は祿山か亂に長安陷て後老大成德の賢者は皆志を失て凋喪し朝廷に用らるゝ者は皆新に進たる少年の輩ばかりなることを云へると也、此詩は肅宗の乾元二年の作也、

杜子美

絶代有佳人、幽居在空谷、

前漢外戚傳李夫人傳、李延年侍上、起舞歌曰、北方有佳人、絶世而獨立、【在空谷】、小雅白駒篇、皎々白駒在彼空谷、言は一代に絶れたる美好の佳人あり空谷幽寂の地に獨居せると也、集注云、絶代擧一世無此佳人也、

自云良家子、趙充國傳云、郡良家子、**零落依草木、關中昔喪敗、兄弟遭殺戮、官高何足論、不得收骨肉、世情惡衰歇、萬事隨轉燭、**徐邈曰、萬事與衰轉燭相似、何必計較、

【自云】は佳人自ら説道也、【良家子】、注前漢列傳三十九、趙充國字翁孫、隴西上邽人也、後徙金城令居、始爲騎士、以六郡良家子善騎射補羽林、擢爲後將軍、年八十六甘露二年薨、謚曰壯侯、良家の子はれき〳〵の家の子孫と云意也、佳人自ら云ふ我は本是良家の女めなれども今はおちぶれ零落して草木に依より外憑み親む人とてもなく煢獨の身となりたると也、依草木と云ときは身を寄て依り憑む人は一人もなきと云ことと自可知、【關中】は即長安の都を云、前漢高祖本紀云、懷王與諸將約、先入定關中者王之、注師古曰、自函谷關以西總名關中、安祿山亂を起し長安を陷に依て關中悉く喪敗す此時に佳人の兄弟たる者皆賊徒に殺戮せられたると也、【官高―】、平生官高く家盛なるも何ぞ論じ恃むに足らんや時變じ世亂るとき

昔別君未婚、兒女忽成行、怡然敬父執、問我來何方、問答未及已、兒女羅酒漿、郭育見戴逵、使羅酒漿、兒女進果、

【昔別―】、二十年前の昔別れし時は君未だ婚姻を結ばず家室なかりしが只今ははや兒女已に多く行をなして並びたると也、【行】は行伍也、立ならびてつらなるを云、雁行班行の類なり、【怡然―】、怡然は悦樂の貌也、【父執】は父が所交の朋友也、曲禮上云、見父之執、不謂之進不敢進、不謂之退不敢退、蔡注父之執父同志之友也、言は兒女の輩父の客來を悦て我が傍に來て客は何處より來り玉ふぞと問也、其問答未だやまざる内にはや饗膳を進め來て兒女の輩酒漿の類を案上に羅ね備へたると也、〔注〕僞蘇注也、郭育史傳に此人なし、戴逵字安道、譙國人也、傳見晉書隱逸傳、

夜雨剪春韭、郭林宗見友人、夜冒雨剪韭作炊飯、新炊間黃粱、主稱會面難、一擧累十觴、十觴亦不醉、感子故意長、選詩雄雄孔文擧、百觴亦不醉、明日隔山岳、世事兩茫々、

【夜雨―】二句筵上の備を敍る也、夜雨の中に春の嫩き韮を剪り來て羹に調へ新に炊きたる飯には黃粱を間へて備へたると也、〔注〕僞蘇注也、郭太守林宗、傳見于後漢書列傳五十八、然ども此事實なし、【主稱―】、主人酒を勸る辭に會面は難有ことと也、偶ゝ相見たるおもひでに一擧に十觴を累て飮まれよと云也、【十觴亦―】、主人の强るにまかせて十觴の酒を飮でも猶不醉いかにとなれば主人故舊の情意深長なるを感ずるに因て也酒は窮屈なる處にては一盃飮でも醉心に愜ふ友と飮むときは多く飮でも不醉もの也、史記に淳于髡が酒量の多少を云しも此意也、〔注〕此注又僞蘇也、文選此句不見、孔融字文擧、魯國人、後漢書列傳六十有傳、

○佳人

詩簡兮刺不用賢也、彼美人兮西方之人兮、言賢者有佳美之德、此詩亦以佳人喩賢者、蓋感傷關中亂後老成凋喪而所用皆新進少年也、

本集第五載之、佳人は美好の婦人也、臣の君に仕るは婦の夫に從ふと同じ故に佳人の薄命なることを云て臣の君に用られざるに比する也、草堂題注云、君之

不相得、各居一方、人之離別不得聚會者似之、

人の生涯は會聚の歡び常に有ことなく別離多して互に不相見動もすれば參星と商星と各天の一方在て不相近が如なることあると也、注左傳昭元年、晉侯有疾、鄭伯使公孫僑如晉聘且問疾、叔向問焉曰、寡君之疾病、卜人曰、實沈臺駘爲祟、史莫之知、敢問此何神也、子產曰、昔高辛氏帝嚳有二子、伯曰閼伯、季曰實沈、居于曠林、曠林地闕 不相能也、日尋干戈以相征討、后帝不臧、遷閼伯于商丘主辰、商人是因故辰爲商星、遷實沈于大夏主參、唐人是因以服事夏商、云云故參爲晉星、由是觀之、則實沈參神也、

今夕復何夕、共此燈燭光、少壯能幾時、武帝秋風辭、少壯幾時兮奈老何、鬢髮各已蒼、訪舊半爲鬼、驚呼熱中腸、焉知二十載、重上君子堂、王仲宣詩、高會君子堂、

【今夕—】、詩唐風椒聊篇、今夕、何夕見此良人、言ろは今夕は是いかなる夕ぞや幸に舊友に遇て床を聯ね此燈燭の光に共に照さるゝことよと也、【少壯—】、少壯は盛なる年也、言ろは人の少壯なること能幾ほどの時年をか保つや互に離別せし間に忽年老て二人各鬢髮の色變じ已に蒼然となりしと也、杜詩集注云、深青色曰蒼、又老成曰蒼、注【武帝】は漢の第五主孝景帝中子也、武帝諱は徹、年十七にして即位、在位五十四年、秋風辭は見文選四十五、【訪舊半—】、舊識の人を訪問へば半は死去て已に幽鬼となりたりこれを聞て驚呼し我が腹中の腸を熱して悼痛する也、驚呼は驚駭して咄嗟する也、孟子萬章上不得於君則熱中、朱註熱中躁急心熱也、【焉知—】、因て思ふ當初別離する時後來二十年の久きを過て重て又此堂に上んと云ことを焉そ知得んやおもはずも久く闊別したる也、注【王仲宣】、魏志二十一、王粲字仲宣、山陽高平人也、獻帝西遷、粲徙長安、左中郎將蔡邕見而奇之、時邕才學顯著貴重朝廷、常車騎塡巷、賓客盈坐、聞粲在門倒屣迎之、粲至、年既幼弱容狀短小、一坐盡驚、邕曰、此王公孫也、有異才吾不如也、○文選二十王仲宣公讌詩云、高會君子堂、並坐蔭華榱、

閑の境も此鬪鳥鳴蟬の喧く人の耳を亂すに遭て心も靜ならねば誰か吾が廬を幽靜なりと云んやと也、【水花―】、水花は蓮花也、崔豹古今注草木第六云、芙蓉一名荷華、生池澤中、實曰蓮、花之最秀異者、一名水芝、一名水花、【淹留】、楚辭九辨、蹇淹留而無成云云、此句の意はゆる〳〵と留りやすらひて遊樂するの意也、言は林頭は鳥蟬噪き喧けれども幸に水邊の蓮花清潔なるが晩に及ころ水に映ずる景氣幽靜也、只是のみ賞玩して客をゆる〳〵と留て遊ばしむるの景とするに足れり、此花を看て肴と作して酒を飲み遊ばれよと也、【預恐―】、客を留て酒をすゝむれども樽中にはや酒の盡んことをきづかひて更に坐を起て内に入とやかくと酒を索むべきさいかくをして客を不足になきほど醉しめたきと謀也、㊟遊樂の興は餘り有て盡ることなけれども杯中の物不足にて飲みたらず無興にならんかと恐る也、故に坐を起て謀ると也、【云云】は辭多を略して云ひさすの辭なり、前漢書列傳二十汲黯傳云、上方招文學儒者、上曰、吾欲云云、師古曰、云云猶言如此如此也、史略其辭耳、○文選四十二阮元瑜書云、各求進軍其言云云、注銑曰、云云謂辭多略而不能載也、

○贈衛八處士

按唐史拾遺、甫與李白高適衛賓相友善、時賓年最少、號小友、今據詩云、昔別君未婚、知贈衛八處士即賓也、敍殷勤道故舊情義甚重、結末意味尤妙、

本集一載之、題註天寶九載自東都復歸長安作、衛八が傳未考、衛は姓也、八は生次の序也、【處士】は不仕して家に處るの士を云、孟子滕文公下篇、聖王不作、諸侯放恣處士橫議、○劉伯倫酒德頌云、有貴介公子縉紳處士、聞吾風聲議其所以、呂向注、處士有德之稱、㊟本集題註師說也、唐史拾遺作者の姓名未考、【高適】、新唐書列傳六十八、高適字達夫、滄州渤海人、少落魄不治生事、客梁宋間、宋州刺史九皐奇之、擧有道科、中第調封丘尉、【今據詩―】、以下は此書の註者の說也、【情義】は欵情交義とも厚重なるを云、結末は明日隔山岳の結聯を指す、

杜子美

人生不相見、動如參與商、　左傳昭元年子產曰、昔高辛氏有二子、伯曰閼伯、季曰實沈、居於曠林、不相能也、帝遷閼伯于商主辰、爲商星、遷實沈于大夏主參、爲晉星、二星

朴、所願亦易求、隔屋問西家、借問有酒不、（甫鳩反、）牆頭過濁醪、（友人見陶侃、家貧無以致誠、其隣人賢、謂侃曰、子門有長者軒車、何不延之論常世事、侃曰、貧不能備醇酎、隣人密於墻頭度以濁酒隻鷄、遂成終日之樂、）展席俯長流、

【遠林】は遠く望み看る林に非ず、只是里ばなれて遠かりたる林と可看、林深きに因て夏日の暑氣も薄して涼き也、此處へ偶ゝ公子經過して我を尋ね訪て遊るゝ也、【貧居—】、杜公自ら云貧き居なれば只四壁のみにて展待に供すべき物もなし村塢の路頭にて遇會するに類すると也、【塢】は與隖同、字彙云、隖安古切、山阿也、壘壁也、【僻近—】、僻とは杜公貧居の所在、地形は褊僻にて長安城の樓に近き處なると也、本注趙曰、城南樓長安城南公之所居也、【旁舍—】、即杜公所居の四旁に近く隣りたる民舍也、【淳】はあつき也、【朴】はかざりのなきを云、民間の俗は古風ありて輕薄になきに依て所願は互に相乞て求め得やすきと也、【隔屋—】、かきごしに西の隣家に問て酒が有か無かを尋る也、借問の借字は付字也、只是問と云意まで也、文選曹子建七哀詩、借問歎者誰、【墻頭—】、西家より酒こそあれとてやがて墻ごしに濁醪を越し過して與へたる也、酒を得て則席を展べ長流に臨で酒を飲也、俯は臨の意也、岸より深を臨めば身少しうつむくに依て俯と云也、注【陶侃】字は士行と云、晉書列傳三十六に傳を載す、然れども此注僞蘇注也、故に本傳此事なし、

清風左右至、客意已驚秋、巣多衆鳥鬪、葉密鳴蟬稠、苦遭此物聒、孰謂吾廬幽、水花晚色靜、（蓮花一名爲水花、）庶足充淹留、預恐樽中盡、更起爲君謀、（荷花清潔猶清人之神思、只恐樂有餘而杯不足故云云、）

【清風—】、酒宴の間所遇の景を云也、清く冷かなる風左右より吹來て衣さむきに因て客の意はや秋になりぬと心に驚く也、【巣多—】、席を展る邊には林木しげり鳥の巣多して衆の鳥棲を爭て鬪ひ噪き葉は繁り密にて涼きに依て多の蟬集りて鳴聲甚だ稠なり尋常靜

も裊々としてなびく貌物に依り傍ふが如なる故に依々と云也、此二句遠處景を云、【狗吠—】、犬は人稀なる深巷の中に吠へ鷄は宅邊桑樹の巓に棲て鳴皆村落の中に所聞の聲也、

戸庭無塵雜、虛室有餘閑、久在樊籠裏、復得反自然、十二句言終之自然所以復其天也、夫人役役於名利、如墮塵網樊籠之中、而喪其真心矣、今淵明歸休田園、一毫之勢利不足動心、非自然乎、

【戸庭—】、田園の居なれば朝市に遠かるに因て戸庭の閒も靜にて閒暇あると也、【虛室】、莊子人閒世篇、虛室生白、【久在—】、樊廣韻樊籠也、○莊子養生主篇云、澤雉十步一啄、百步一飲、不蘄畜乎樊中、樊籠は二字ともにかごと訓ず、世閒に居て聲利に羈され心を以形の役として超脫することを不得は鳥の樊籠中に在と等し故に世閒の聲利を指て樊籠と云也、淵明三十年世閒塵網の中に在て官祿に羈されしを一朝棄去て田園に歸り農桑を勤め他の世事を以て心を不役天眞の自然を樂む故に曰今得反自然、注十二句は方宅より以下反自然までの十二句也、【復其天】、天性の眞にたちかへるを云也、【役々】は不休息貌也、名の爲利の爲に心を役せられて休息することなき也、【喪其良心】、天性自然の本心を喪て塵慾にのみ汚さるゝ也、孟子告子上篇云、所以放其良心者、亦猶斧斤之於木也、注良心者本然之善心、【今淵明】、官祿を棄て田園の居に歸り休して一毫ばかりの勢名功利も我心を動かして求ることなし只天性の眞を樂むばかり也、即是自然にかへる也、

○夏日李公見訪

李炎爲太子家令、一本云、李家令見訪、

本集載之、題註公自注、李時爲太子家令、鶴曰、按宗室世系表、李公當是李炎、○集注十載之、題注李公指李炎、有作李白者非、此詩天寶十四年作、炎宗室蔡王房之子、時爲太子家令、夏の日に李公の訪を承て相與に對飲するの興を叙て詩を作る也、注【太子】肅宗未即位の時也、

杜子美

遠林暑氣薄、公子過我遊、貧居類村塢、僻近城南樓、旁舍頗淳

南野際、守拙歸園田、四句言中之守拙所以存其天

【羈】はつなぎほだす也、鷹或は鶻鵰の類、あしかはを以係て養ふ鳥を羈鳥と云、羈れたる鳥猶舊棲し林を忘るゝことなく戀慕ふ也、鸚鵡賦、順籠檻以俯仰思鄧林之扶疎と云の意也、【池魚】、盆池などに養ふ魚を云、魚の捕れて小池に放たれたるは猶故の深き淵に潜んことを思ふ也、是淵明塵網の中に在れども本より丘山を愛するの心は忘ることなく田園に歸んと思の心に比する也、【開荒—】、丘山の樂を思ふに依て遂に塵網を脫して舊里に歸南野の際に草莽の荒田を開きて農業を勤め吾が天眞朴拙の性を養ひ守て田園に歸休すると也、

方宅十餘畝、草屋八九間、楡柳蔭後簷、桃李羅堂前、曖々遠人村、依々墟里烟、狗吠深巷中、鷄鳴桑樹顚、

田園の居のありさまを言ひ叙る也、【方宅—】、やしきどりをかまへたる地形十餘畝四方ほどの大さなると也、字彙云、六尺爲歩、歩百爲畝、六尺四方のつぼ百あるを一畝と云也、【草屋】、麁草に建たる家也、屋を草にて葺と云のみに非ず、八九間此一間と云は丈尺幾許を云やらん分明ならず、字書間の字の注にも此解不見、或云日本の家づくりに家內を區畫して其一區を一間と云類なりと云說あり、輔按するに柱と柱との間を一間と云べし家の大小に因て柱の間の丈尺は不同あるべし、家廣ければ柱の數多し故に兩柱の間を數て家の廣さ幾間と云べきか、三才圖繪宮室部國朝房屋等第條下云、公侯前廳七間或五間兩廈九架造、中堂七間九架、後堂七間七架、門屋三間五架、此文義を按すれば柱と柱との間を一間と云說近からんか、楡柳の類は枝葉盛に茂りて後簷をかざし掩ふ也、桃李は堂の前に羅り列てうゑおきたると也、是近處の景を云、【曖々—】、此句名句也、繪にも難畫と云評あり、【曖々】、字彙、晻曖日不明貌、又云晻曖深邃也、おぼろにうちかすみたる中に遠村の人家林木の間に點綴して幽に見ゆるを云也、【依々】詩小雅采薇篇、楊柳依々柳葉の柔弱なるがたよ〳〵と悠揚する貌、物に依り傍ふが如なるを依々と云也、烟のたちのぼる

て不レ恥、上を簒ひ下を凌くを事とする風俗の世となりて天下國家の事憂ひ悲むべき者多し、淵明傷レ之見に不レ忍心に常〻憂を抱けり、但酒を飲み醉を取て其愁を掃ふより外如何んともすることなし、故に上の句に接て言ふ世既に如レ此ときは若復快飲して興遣るにあらずんは酒を漉す頭上の巾に孤負すべし、所以に只管酒を飲て醉なりと云へる也、【頭上巾】、本傳云、淵明酒熟、取二頭上葛巾一漉レ酒、畢復着レ之、【但恨―】、上の節に當世の事を云ときは是一時の諱を犯せり故に酒狂に託して云、我言ふことはさぞ謬誤の辭のみ多かるべし但醉人のたはことなれば何事も恕宥して咎めらるゝなと云意也、指て云ふ人もなきに君當云是泛く世上の人にかけて云へる也、辭ゆるやかにて心深し、注【麴糵】は麴はかうじ也、糵はもやしと云物也、共に酒を作るに用ゆ、書經說命、若作二酒醴一爾惟麴糵と云是也、故に酒の異名を麴糵と云、又麴生と云也、【昏迷】は甚だ醉て正體なきを云也、酒の咎に託して俗人の道を不レ知を嘆し傷むと也、

○歸二田園居一

本集二載レ之、歸二田園居一詩六首之第一也、

陶淵明

少無下適二俗韻一、性本愛二丘山一、誤落二塵網中一、一去三十年、四句言下始之誤落所二以失一其天上、

【少無―】、俗韻は世俗のかたぎと云意に看べし、年少き時より世俗の人と調子が不レ協俗風に合ふことなかりしと也、天性本より丘壑山林の景を愛して世間の産業を營むことを不レ好と也、本傳潜少懷二高尙一穎脫不レ羈なりと云、此に由て觀れば寔に俗韻に適ひがたかるべし、【塵網中】、世間煩擾の中に處して身心物に繫れて自由ならざるを云也、是淵明壯年の時州の祭酒の官となり又鎭軍建威參軍事となり其後暫く彭澤の令となりたるまでの間を指て云へるなるべし、言は、俗韻に不レ適して丘山を愛する性を枉て誤て世間の塵網の中に落在し一たび去て三十年の間徒に身心を役したりと也、注【失其天】、天性自然の眞趣を喪失するを云、

羈鳥戀二舊林一、池魚思二故淵一、開レ荒

して止息することなきを云、絶世下は絶て久しき後の世と云義なり、【六籍】は即六經也、言は聖人を去こと絶て久しき世に生れては六經の書籍を讀に非んば爭でか聖人の道を知んや然るに如何ぞや今の人は絶世の下に生れて六經の書を一つも親み玩て習ひ學ぶことなきやと也、【馳車走】は利を逐ひ慾に殉て一生奔走して止息せざることを車を馳て走るに喩る也、【問津】、論語微子篇に云、長沮桀溺耦而耕、孔子過之使子路問津焉、津は水邊の渡口也、問津は渡口の所在を何の處ぞと問を云、此二字を借て道の所在を問ひ學ぶことに用る也、言ろは當世の人六經を學て實行を踐むことなく終日名利に馳逐して終に道の所在を問ことを不知と也、注六句は上の節の區々の一聯と此節の四句とを指て云也、【訓詁】は前漢書儒林傳、丁寛作易説三萬言、訓故擧大義而已、今小章句是也、注師古曰、故曰經之旨趣也、○韻會曰、通作故、詩注疏詁者古今異言通之使人知、又曰、訓者釋所言之理、故者明所載事物之故、文字の訓詁にのみ拘て道の本源を不知、性命の理に暗き者を訓詁の陋と云也、○按ずるに此注謬れり、區々諸老翁爲事誠殷勤、此二句は自ら一節となして看べし、首句より誠に殷勤の句までには言ふ、聖人の世去て久し故に世の人道を不知、其後孔子魯に生れ玉て禮樂を修正ありて聖道復世に明也、爾しより後聖人又興らず道漸く微にして遂に秦に及で經を焚き儒を坑するに至て壞亂極れり、聖教殆ど滅息せんとせしに幸に漢初の諸老猶在て遺經を灰塵の餘に傳て六經又世に存することを云へり、此に至るまでの十二句は聖教の盛衰通塞を云へり、何如絶世下以下四句又當時の絶學を云て道不行ことを嘆じて因て飲酒の張本とす、分段如此に看て可ならんか、

若復不快飲、空負頭上巾、但恨多謬誤、君當恕醉人、四句言麴蘗昏迷之謬而嘆俗人之不知、

此處に到て飲酒の題を云ひ出す也、若復不快飲と云は前を承て云句に似たり、然れども上の數句には曾て不接して飲酒を云ひ出すことと謂れなきが如し、されども實は接し得て好し、此詩の妙即此處也、淵明の時の人六經は措て讀む者なく只利を見て進み害を避

秦】とは秦世暴逆無道の政狂人の所爲の如くなるを云也、【詩書—】、詩經書經の類何の罪があるや甚だ忌み惡て悉く焚きすてゝ一朝の間に灰塵となりたると也、史記卷六始皇本紀云、始皇三十四年李斯上書曰、古者天下散亂莫能相一、是以諸侯並作、語皆道古以害今、飾虚言以亂實、人善其所私學以非上所建立、今皇帝幷有天下、別黑白而定一尊、私學而相與非法教人、聞令下則各以其學議之、入則心非、出則巷議、夸主以爲名、異趣以爲高、率群下以造謗、如此不禁則主勢降乎上、黨與成乎下、禁之便、臣請史官非秦記皆燒之、非博士官所職敢有藏詩書百家語者悉詣守尉雜燒之、有敢偶語詩書棄市、以古非今者族、吏見知不擧者與同罪、令下三十日不燒黥爲城旦、所不去者醫藥卜筮種樹之書、若欲有學法令以吏爲師、制曰可、

區々諸老翁、（指漢伏生之徒）爲事誠慇懃、

此二句は六籍已に秦に亡たれども又幸に漢の諸老有て六經を傳て聖人の書世に存して後世の人猶古を學べきことを云へり、【區々】は韻會小貌、廣雅區々愛也、○李陵答蘇武書、功大罪小不蒙明察、孤負陵心區區意、○文選十九首詩、一心抱區々、懼君不識察、按此句の區々とは誠實に心を盡すの意と看べし、瑣小の貌を云の區々に非ず、【諸老翁】は漢書の儒林傳に所載、漢初の諸儒を指て云べし、淄川田生は易を傳へ、濟南伏生は書を傳へ、魯申公齊轅固生は詩を傳へ、魯の高堂生禮を傳へ、胡母生は春秋を傳ふ、此等の諸儒皆絶學の世に生れ秦火の厄を歷て猶心に記し口に誦して終に不失聖經再び世に出後世の人聖人の敎を聞くに與るは皆此諸老の力也、是事を爲こと誠に慇懃と云べし、此五字伏生等が好處を云ひ盡せり、後世雜學訓詁の腐儒と同日して言ふべきに非ず、【注】【伏生】、前漢書八十八儒林傳、伏生濟南人也、故爲秦博士、孝文時求能治尚書者天下亡有、聞伏生治之欲召、時伏生年九十餘、老不能行、於是詔太常使掌故鼂錯往受之、

如何絶世下、六籍無一親、終日馳車走、不見所問津、（六句言世儒訓詁之陋、而嘆聖人之不生也）

此四句は世人書を不學して徒に利を逐ひ慾を恣に

久遠なり、故に世の風俗も頽敗して道明かならず、擧世悉く慾に惑ひ利に殉ふて天性をくらまし本然の眞に復る者は少なると也、【汲々】、韻會不休息貌、休み息むことなく勤ることと急なるの意也、【魯中叟】は即孔子也、叟は長老の稱也、尊ぶの辭也、孔子は魯人也、故に魯中叟と云、【彌縫】、左傳桓公五年、先偏後伍、伍承彌縫、注彌縫闕漏、又昭公二年、拜子之彌縫敝邑、注、彌縫猶補合、彌縫は闕漏を修補糊合して罅隙のなきやうにするの意也、【使其】は少復眞を指て云、言は孔子世を憂ひ民を救んと欲して汲々と勤て不休、風俗の澆浮なるを彌縫して淳朴復るやうにせしむるの意也、風俗を淳になしたると云ときは下の二句と意相矛盾する也、【鳳鳥―】、此二句雖字暫字を用るは孔子世を救ひ淳に復らしむれども天子の位なければ天下を偏く淳朴にならしむることを不得、只六經を修て道を書に筆して著せるを以て也、二句言は孔子の時鳳凰は猶未だ來儀せずと云へども禮樂は孔子の修正に因て暫く新に正くなりたると也、論語子罕篇、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫、△張南軒曰、鳳至圖出蓋治世之徵也、聖人嘆明王之不興而道之終不行耳、○史記孔子世家云、孔子之時周室微而禮樂廢、詩書缺、追迹三代之禮、序書傳、上紀唐虞之際、下至秦繆、編次其事、又曰吾自衞反魯然後樂正、雅頌各得其所、〔注〕以上の六句は孔子の六經を脩め正されしに因て羲農聖人の道復以世に明になりたると也、六經解已に第一卷勸學文の注に見えたり、

洙泗輟微響、漂流逮狂秦、詩書亦何罪、一朝成灰塵、（四句言秦皇焚六經而孔子之道以晦）

【洙泗】、正宗云、二水之名、孔子居二水之間、洙水出秦山入泗、泗水出魯國濟陰乘氏、史記注、泗水源在兗州泗水縣東陪尾山、其源有四因以爲名、【輟】、廣韻已也、增韻歇也、洙泗は孔子居玉ふ所の側を流る水の名也、孔子と指し不云して其所居の名をあげて稱ずる也、孔子六經を修せられしより聖人の道世に明かなり、それより以後戰國の時に入て又漸く微ふになりて聖學振ひ興らず攻伐をのみ事として六經の道はおともなくなりたり故に輟微響と云也、爾より後繼き興す人も不出漂流して終に狂秦の世に及也、【狂

攄ときは雙鯉魚は書を結たる形を云、烹ると云は魚の緣に依ていへども實は鯉魚の形に結たるを解て書を開て見を云と也、

長跪讀素書、書中竟何如、上有加餐食、下有長相憶、

【跪】は敬をなす也、夫の書なるに因て敬て跪て書を讀と也、【竟何如】は書中に何と書れたるやと思へばと云意也、【上有―】、夫の意我が相思ふて飮食を甘んぜざらんことを想へるにや、書の首には先づ言ふ餐食を强て加へ食し身を自愛して健かにすべしと云へり、書の尾には長く家を相思ふとかゝれしと也、

○飮酒

傷風俗澆浮吾道晦蝕、不若痛飮自陶其天眞

本集載之、飮酒二十首此詩則末篇也、【注】【風俗】、字彙云、上所化曰風、下所習曰俗、○風俗通序云、上行下傚謂之風、衆心安定謂之俗、風俗は萬民のならはし也、【澆浮】、字彙、澆薄也、人の心うすくなりて溫厚になきを澆と云、外の飾を專にして眞實になきを浮と云、【晦蝕】、道の天下に明になきこと日月の光り晦く或は蝕にかゝりて明を失たる如くになりたる也、【痛飮】は酒を强て痛飮で甚醉を云、【自陶】は字彙、陶化也、天性自然の眞趣を融化して自ら適して樂むを云、

陶淵明

羲農去我久、伏羲神農古之帝王、擧世少復眞、汲々魯中叟、彌縫使其淳、鳳鳥雖不至、語鳳鳥不至吾已矣夫、禮樂暫得新、六句言孔子修六經而羲農之道以明、

羲農伏羲神農也、史記三皇本紀云、太皥庖犧氏風姓代燧人氏繼天而王、母曰華胥、履大人迹於雷澤而生庖犧於成紀、蛇身人首有聖德、仰則觀象於天、俯則觀法於地、旁觀鳥獸之文與地之宜、近取諸身、遠取諸物、始書八卦、○同本紀云、炎帝神農氏姜姓、母曰女登、感神而生炎帝、人身牛首、長於姜水、因以爲姓、火德王、故曰炎帝、斲木爲耜、揉木爲耒、耒耨之用以敎萬人、始敎耕、故號神農氏、始嘗百草始有醫藥、言は伏羲神農の如き聖人の世我を去り隔ること已に

寛うする辭也、吾が夫時を過て不レ歸、故に常に思ふて心中に不レ絶、然れども邊塞遠道を隔つ思へども無レ益、只措て不レ可レ思甚だ思ふに因て昨夜夢に夫を見たると也、【夢見―】、夢中に見ときは夫まさしく我が傍に在り、忽に夢覺れば夫傍に不レ在尙他鄕に在ると也、【他鄕―】、詩經周南篇、輾轉反側、朱注、輾轉之半、轉輾之周、臥不レ安レ席之意、我れは家に在り夫は尙他鄕に在り各隔て所レ居の縣異なり、輾轉とふしまろびても終に見ることを得がたき也、

枯桑知二天風一、海水知二天寒一、入レ門各自媚、誰肯相爲言、

文選注善曰、枯桑無レ枝尙知二天風一、海水廣大尙知二天寒一、君子行役豈不レ離二風寒之患一乎、但人入レ門咸各自媚、誰肯爲言乎、皆不レ能レ爲言也、言は枯れたる桑は已に枝葉なけれども天風ふくときは尙不レ搖ことなし海水は廣大にて常に凍ることなけれども天寒き時は水冷なり況や是我が夫瓦石に非ず豈に風寒に感ずることなからんや、想ふに風寒を侵して疾を生ぜるに因て時を過て不レ歸なるべし、我が門に入て訪ひ來る人は各自ら媚て辭を文て平安ならんとのみ云ふ也、誰か肯て夫の實狀を將來て我が爲に告げ云んやと也、○文選注翰曰、知謂豈知也、枯桑無二枝葉一則不レ知二天風一、海水不レ凝凍一則不レ知二天寒一、喩二婦人在レ家不レ知二夫之信息一、雖レ有二親戚之家一皆入レ門而自愛、誰肯相爲訪レ門而言者乎、

客從二遠方一來、遺二我雙鯉魚一、呼レ童烹二鯉魚一、中有二尺素書一、

文選注善曰、鄭玄禮記注曰素生帛也、向曰、尺素絹也、古人爲レ書多書二於絹一、偶〻客ありて遠方夫の所より來れり、因て我に一雙の鯉魚を遺りたり、即ち童を呼で烹さしむ、既に魚腹をたち開きたれば中に一尺の素絹にかきたる書翰ありしと也、是夫よりの書翰を得たる也、○楊用修丹鉛總錄云、古樂府詩尺素如二殘雪一、結成二雙鯉魚一、要レ知二心裏事一、看取二腹中書一、古人尺素結爲二鯉魚形一、即緘也、非レ如二今人用一レ蠟、文選、客從二遠方一來、遺二我雙鯉魚一、即此事也、下云レ烹レ魚得レ書、亦譬況之言耳、非二眞烹一也、五臣及劉履謂、古人多於二魚腹一寄レ書、引二陳涉罩魚倡禍事一證レ之、何異二癡人說一レ夢耶、此說に

篇、經始靈臺、經之營之、注經度也、【迎新—】、注新穀を迎るの時と解するは謬れり、前漢書八十九黄覇傳云、數易長吏、送故迎新之費、所易新吏又未必賢、或不知其故、從相益爲亂、云云迎新の字此に出たり、言ろは此歳は故吏を易へ新吏を迎て交代の時なれば愈勉て早く租を納べし、未だ新吏の治法を不知、只恐は故吏の前迹を踵て又嚴酷なるべきかと憂也、

○樂府上　此詩去古未遠、頗有三百篇之遺風、

文選二十七樂府上注善曰、漢書曰武帝定郊祀之禮、而立樂府、濟曰、漢武帝定郊祀、乃立樂府、散採齊楚趙魏之聲以入樂府、名字磨滅不知其作者、○天梯古文注、古樂府三篇、此篇居首故曰上、○文選樂府四首此詩其第一首也、題作飲馬長城窟行、題注銑曰、長城秦所築以備胡者、其下有泉窟可以飲馬、征人路出於此而傷悲矣、言天下征役軍戎未止、婦人思夫故作此行、○宋嚴儀卿滄浪詩話云、文選飲馬長城窟古詩無人名、玉臺以爲蔡邕作、此詩は戍婦家に在て邊塞へ戍りに往たる夫を思ふて作れる詩也、[注]此詩は古の聖人の世を去こと年數甚だ遠く隔に非ず、故に詩經三百篇の作者思無邪の遺風尚存すると也、三百篇は詩經に所載の詩を指て云、

無名氏

青々河畔草、緜々思遠道、

文選注善曰、言良人行役以春爲期、期至不來、所以增思、王逸楚辭注曰、【緜々】細微之思也、銑曰、緜緜心不絶貌也、こゝに青々と嫩く盛なる河畔の草を見に既に春の深きを覺ふ、因て思ふ吾が夫遠く邊塞に戍りとして行しが春に及なば役を代りて家に歸らんと期を約せり、今既に春深れども未だ歸り來を不見故に夫の安否いかゞあるやと心に不絶くれ〴〵遠道の邊塞を思ひ想ふと也、

遠道不可思、夙昔夢見之、夢見在我傍、忽覺在他鄉、他鄉各異縣、輾轉不可見、

【遠道—】、文選注、夙五臣作宿、善曰廣雅曰、昔夜也、【夙昔】は昨夜と云義也、【不可思】は此れ自ら胷次を

の文を云ふれながしの條目也、【督責】はきびしく責はたるを云、史記列傳廿七李斯傳云、夫賢主必且能全道而行督責之術者也、索隱云、督察也、察其罪責之以刑罰也、是言ろは農民ども胥を請じたる家へより集つて里胥の云ひわたすを聞て皆言ふ、頃ろ官長たる人嚴しく峻きに因て民へ下る號令の文字酷だ苛く責はたるの辭多と也、注【催租】、租は字彙田賦也、年貢を促する人也、

東郷後租期、有輸納租後期者 車轂陷泥澤、猶車輪陷落水澤中、費推挽之勞也、 公門少推恕、鞭撲恣狼藉、努力愼經營、肌膚眞可惜、須早納官、肌膚可惜、毋取其答辱也、 迎新在此歲、惟恐踵前跡、此乃迎新割稻之時、即當以東郷之事爲戒也、

【東郷―】此より以下は農家互に相勸て東郷の事を引て戒とする也、【租期】は某月某日に田賦の年貢を倉へ納むべしと預じめ定たる日限也、東郷の民租稅を辨ずることなりがたくて納こと期日に後れたる也、

【車轂】、轂は車の輪のこしき也、字彙轂音谷、轂者居輪之正中而爲輻之所湊也、言は租稅に後れたれば甚だ督責に値て鞭うたれ繫れて難艱に苦むこと車の輪を澤中に引こみて轂泥に陷沒して進退ならざるが如し、注【推挽】、推は車を後より推しやる也、挽は車を前より挽也、車輪水澤の深き處へ陷て推せども挽けどもあがらず勞苦するが如くなると也、【公門―】、門を指には非ず、俗に公儀と云の意也、官家を指て公門と云也、【少推恕】は民の困窮を推はかりて少く寛うするの恩惠を施すこともなきと也、【鞭撲】、前漢書二十三刑法志云、大刑用甲兵、其次用斧鉞、中刑用刀鋸、其次用鑽鑿、薄刑用鞭撲、注師古曰、撲杖也、竹の節あるを以て作たるを鞭と云、節を削去を撲と云也、【狼藉】、綱目集覽、蘇鶚演義曰狼藉草而臥、去則滅亂故凡物之縱橫敗亂者謂之狼藉、言は鞭撲を以て罰責すること恣にして狼藉甚しきと也、【努力―】、農家各相勸戒して云ふ、人々力を盡し勉て經り營みて愼で早く租稅を輸し納べし、少も後れなば東郷の如く叉罰責せらるべし、此身の肌膚眞愛し惜むべし、必鞭を受て破り毀ふこと勿れと云意也、【經營】、大雅靈臺

蠶絲盡輸稅、機杼空倚壁、

【籬】は字彙に、郭璞爾雅注藩籬也、まがきと訓す、【落】、韻會、落居也、人所聚居、故謂村落院落聚落、田廬はやしきをかまゆるに園墻を築くこともなく柴竹の類を以籬を結ふて一家々々のやしきの界を限る故籬落と云也、籬の透間より鄰家の煙火光もれて幽かに見ゆるを隔烟火と云、隔字を用たるに因て籬ごしに火の見ゆる體を能く形容する也、故に注に下し得て妙也と云、【農談―】、田家農業の事を談說して四隣の人うち集る夕べのころと云意也、【庭際―】、以下四句田家所見の景を云也、庭の際には秋の蛩の鳴く聲あり刈あましたる麻は疎になりてあはらに殘りたるていものさびしき也、寂歷はものさびき貌也、【蠶絲―】【輸】、增韻凡以物送之曰輸、【稅】は字彙租也、輸稅は年貢に納る也、【機杼】、詩經小雅大東篇、杼柚其空、朱注、杼持緯者也、空盡也、杼は機を織に緯をわたすひと云者也、即梭也、案ずるに機杼と云ときは杼のみに不限、織具を總て云也、字彙に、機杼は織具也、此注に從ふべし、梭小物也、壁に倚べき者に非ず、言ろは蚕絲は夏生ず今已に秋の時なれば蚕絲は既にはや皆官へ租稅に輸納れて我が家一絲も可織ものなし故機杼は空しく壁によせ置無用也、

里胥夜經過、鷄黍事筵席、各言官長峻、文字多督責、催租之人又來、

【里胥―】、里胥は里の號令を掌る小吏也、周禮閭胥の類也、周禮地官閭胥各掌其閭之徵令、以歲時各數其閭衆寡、辨其施舍、凡春秋之祭祀役政喪紀之數聚衆庶、既比則讀法書其敬敏任恤者、凡事掌其比觵撻罰之事、【鷄黍】、論語微子篇云、止子路宿、殺鷄爲黍而食之、【筵席】、座敷を設けかまゆるを云、字彙云、筵席重曰筵、單曰席、周禮春官司几筵注、筵亦席也、鋪陳曰筵、藉之曰席、謂設席之法、筵鋪于下、席加于上、所以爲位也、【里胥】は年貢を催促に巡る人也、【夜經過】とは夜のみ巡ると云に非ず、晝は云ふに不及夜と云へども尚經過して責めはたると云意也、農家には胥を畏るに因て鷄を殺し黍を炊て饗膳を調へ筵席を設て胥を請しちそうするを事とする也、【各言―】、官は一縣の長にて里胥の頭奉行也、文字は號令

百鳥豈無母、爾獨哀怨深、應是母慈重、使爾悲不任、昔有吳起去、母歿喪不臨、哀哉若此輩、其心不如禽、慈烏復慈烏、烏中之曾參、（曾參孝於事母、禽中亦有此者、）

是より以下は詩人慈烏を賛美するの辭也、【百鳥―】、凡百の鳥孰れか母なき鳥あらんや、就中爾のみ獨如此母を哀痛怨慕するの情深し、【應是―】、想ふに是爾が母の子を養育するの慈愛重かりつるなるべし、さればこそ爾をして悲みの情に任へざらしむると也、【昔吳―】、吳起史記六十五、吳起衞人也、嘗學於曾子、事魯君、魯卒以爲將、將而攻齊大破之、魯人或惡吳起曰、起之爲人猜忍人也、其少時家累千金、游仕不遂、遂破其家、鄕黨笑之、吳起殺其謗己者三十餘人、而東出衞郭門、與其母訣、齧臂而盟曰、起不爲卿相不復入衞、遂事曾子、居頃之、其母死、起終不歸、曾子薄之而與起絕、言ろは昔吳起は一たび國を去て他に適て母歿しても歸て喪に不臨人也、是母に孝の心なくして哀傷せざる故也、哀哉不孝如此輩は人にして人の心なし、其心禽にだも劣たると也、【慈烏―】、再呼で歎美して曰、慈烏々々爾が孝心の深き即是鳥中の曾參と云べしと也、【曾參】は孔子の高弟、曾子と稱する人也、孔子家語卷九弟子解云、曾參南武城人、字子輿、少孔子四十六歲、志存孝道、故孔子因之以作孝經、齊嘗聘、欲與爲卿而不就曰、吾父母老、食人之祿則憂人之事、故吾不忍遠親而爲人役、參後母遇之無恩、而供養不衰、及其妻以藜蒸不熟因出之、人曰非七出也、參曰、藜蒸小物耳、吾欲使熟而不用吾命、況大事乎、遂出之、終身不取妻、

○田家

柳文四十三載之、即第三卷の尾に載る田家の詩と同時の作也、此其第二首也、

柳子厚

籬落隔烟火、（籬落之外見火、下得一隔字妙、）農談四鄰夕、庭際秋蛩鳴、疎麻方寂歷、

貧賤、
坡才之大小固殊、然其剛介自守之操未始有異也、

小大材則殊、氣味固相似、 山谷自謂己之於東

【小大―】言ろは東坡は風聲十里に振ふ千尺の青松也、三學士及び山谷は其上下の茯苓兎絲皆松に依附する物なれば材の大小は甚だ殊なり、然れども倶に松に寄生して氣を受るに因て久に耐て不朽人の頽齡を制するの氣味に至ては相似たると也、是三學士山谷の東坡より授受せる學問の統緒は自ら相同きとの意也、注【剛介】は志氣堅固にして物に屈られざるを云、【操】身とり守所行迹を云也、

○慈烏夜啼

白氏長慶集第一載之、【慈烏】、禽經張華注云、慈烏曰孝鳥、長則反哺其母、大嘴烏否、○孔叢子小爾雅篇云、純黑而反哺者謂之烏、小而腹下白、不反哺者謂之鴉烏、○東坡志林云、陳伯辨曰、慈烏比他烏微小反哺之聲可聽、大喙及白頸者皆不能反哺、然不謂之孝烏、此詩は慈烏の母を失て哀啼く聲を聞に因て烏類にも尙孝心あることを憐で人として孝心なき者を戒る意也、

白樂天

慈烏失其母、啞々吐哀音、晝夜不飛去、經年守故林、夜々夜半啼、聞者爲沾襟、聲中如告訴、未盡反哺心、 烏反哺其母、

【慈烏―】、啞々は字彙に鳥の聲也、慈烏我が母を失ひ慕思て啞々と啼て哀き音を出すと也、【晝夜―】、哀み啼て舊栖を去に不忍して他所に飛去らず年を經るまで故林を守り棲む也、【夜々―】、夜ごとに夜半のころは殊に哀く啼に因て其聲を聞く者感慨して慈烏の爲に涙を墮して襟を沾すと也、【聲中―】、夜半哀く啼く聲の中に告げ訴るが如し其哀音を想ふに是慈烏の意未だ反哺養をなす孝心を致し盡さずして已に母を失ことを悲と云に似たる也、反哺は口に食を含て母の口へくゝめ與るを云、

後以總統功進太保、薨贈太傅、【郗隆】世說新語補十八云、郗隆七月七日出日中仰臥、人問其故、答曰、我曬腹中書、注云、西征寮屬名曰隆、字佑、治汲郡人、仕至征西參軍、郗隆が小草の答は山に在れば遠志と云、世間に出れば小草と云、是謝安を嘲る也、謝安東山に處るときは遠大の志あり出て仕ればさしたる勳功もなきは藥草の一物二稱あると同じと云意也、

醫和不竝世、深根且固蔕、人言可醫國、何用大早計、

晉語、平公有疾使醫和視之、文子曰、醫及國家乎、對曰、上醫醫國、其次醫人、固醫官也、○謂依附賢者足以自樂、至其不爲當世所知、則亦自重難進而未嘗汲々也、

【醫和―】、醫和事左傳昭公元年にも見へたり、古の名醫也、【不竝世】、史記六十七弟子列傳云、數稱臧文仲柳下惠銅鞮伯華介山子然、孔子皆後之不竝世、【深根】老子治人事天章云、深根固柢、長生久視之道也、言は醫和は上古の名醫也、是能藥艸の性を知て採用る人也、若茯苓兎絲の類を見ば即採用べし、今其人と世を並て一時に生れざるときは靈藥あれども識る者なくして採用られず、故に只根を深く土にさし且蔕を堅固にして自養ふと也、是三學士及び山谷が輩皆希世の才あれども識者なくして用られざるを云、【人言―】、【大早計】、莊子齊物論云、汝亦太早計、見卵而求時夜、見彈而求鴞炙、言ろは人は皆此藥廣く國をも醫するほどの能ありと云ふ然れども古の醫和が如き名醫の能知て採り用れば國をも可醫、今其識者なきときは用やうあしきに依て藥の能を盡しがたし人が可醫國と云へばとて何ぞはやがてんをして此方より出て醫せんことを求むべきやと也、【太早計】はものごと先だち過て太だ早く計をなし時も不來事にも不臨以前にはや其事を思ひはかるを云也、俗にはやがてんと云意也、【注】【晉語】は國語第十四卷晉語の第八に見たり、【平公】は晉侯也、名を彪と云、悼公の子なり、疾める時に醫を秦に求められたり、秦伯景公より醫和を遣して平公の疾を視せしめたる也、【謂依附―】、此四句意おもへらく、常に賢者に依附て道を學は自樂みとすべし當世の爲に識れずとても心に不介自ら身を保重して汲々といそがはしく利を求て自售ことをせざると也、汲々字彙【汲々】不休息貌、○前漢書列傳五十七、楊雄不汲汲於富貴、不戚戚於

說に據て說べし、强て兎絲を辨すべからず、

自性得久要、爲人制頽齡、　此句指茯苓、

小艸有遠志、相依在平生、　世說桓溫問謝安、

遠志又名小艸、何以一物而有二名、郝隆曰、處則爲遠志、出則爲小艸、○此句以下並指兎絲、言其不依附凡木所志遠矣、

【自性】、第四句に應じて茯苓の能を云、自性二字山谷集の注圓覺經に見たりと云ふ、自然の性也、【久要】論語憲問篇云、久要不忘平生言、此句論語の字を借用たるまで也、要の字省て可看、只是自然の性能久きに耐て不朽ことを禀得たると也、山谷本集注云、按本艸木部茯苓陶隱居注曰、爲藥無朽蛀、嘗得昔人所埋、計三十二年而色理無異、明其眞全不朽矣、而本經言、久服安魂、養神、不飢延年、【制頽齡】、陶淵明九日閑居詩、菊爲制頽齡、人の形體漸く老衰頽廢せんとするを禁制して能老ざらしむるを云、【小草】第三句に應ず、兎絲の性を云也、小艸遠志は謝安が故事の文字を借り用れども其心は自ら別也、言は兎絲は無根して蔓縈小草也、然れども其性は遠大の志ありて妄に物に依りつかず、常に松枝にまとふて相依ること平生に在て永く松を不離也、是山谷自言ふ我本小生なれども志を立ることは遠大にて常に東坡に身を依託して所學恒あると云意を云へる也、○博物志四云、遠志苗曰小艸、根曰遠志、注世說新語補卷十八排調下云、謝公始有東山之志、後嚴命屢臻、勢不獲已始就桓公司馬、于時人有餉桓公藥艸、中有遠志、公取以問謝、此艸又名小草、何一物而有二稱、謝未即答、郝隆在坐應聲答曰、此甚易解、處則爲遠志、出則爲小艸、謝甚有愧色、桓公目謝而笑曰、郝參軍此過乃不惡、亦極有會、【桓溫】、晉書卷九十八列傳六十八、桓溫字元子、宣城太守彝之子也、生未朞而太原溫嶠見之曰、此兒有奇骨、可試使啼、及聞其聲曰眞英物也、彝以嶠所賞故遂名之曰溫、【謝安】晉書列傳四十九、謝安字安石、尙從弟也、父裒太常卿、安年四歲時譙郡桓彝見而歎曰、此兒風神秀徹、後當不減王東海、初辟除、並以疾辭、年四十餘始有仕志、征西大將軍桓溫請爲司馬、朝士咸送、中丞高崧戲之曰、卿屢違朝旨高臥東山、諸人每相與言、安石不肯出、將如蒼生何、蒼生今亦如卿何、安有愧色、後拜吏部尙書、時孝武立政不自己、桓溫威振內外、安盡忠匡翼終能輯穆

の出處を明す、然れども本集作レ不レ適レ口詩見ニ于杜全集八一【但使―】、梅實たとひ人口に不レ適して賞せられずとも梅樹の本根をさへ貞固に在らしめば梅に於て全く妨なし梅子の棄捐せらるゝは最も末也果して何ぞ傷とするに足んや、此結句東坡を慰するの意也、東坡德を養ひ道を修て身を保つことさへ堅固なれば本分に於て已に足れり、遇不遇は時也、何ぞ傷むに足らんやと也、

○又　後篇松以屬ニ東坡一、茯苓以屬ニ門下士之賢者一、兎絲以自况、

注後篇の此詩は松を以て東坡に比し、茯苓は東坡の門下に學ぶ秦觀張耒晁補之が輩の賢者に比する也、兎絲山谷自の身に况へて云へる也、

青松出ニ澗壑一、十里聞ニ風聲一、　此意謂、東坡以ニ大材一而沈ニ下僚一、其蓋世之名則不レ可レ掩也、

【青松】は葉色青々たる松樹也、澗壑の深き處より生出す澗壑に生ずと云へども千尺の古幹雲霄を凌て高く聳へ稷々の風聲遠く十里の外に聞ゆると也、是東坡蜀眉山に生れ邊隅にて成長し、嘉祐元年蜀より始て京に上り文章の聲名天下に振ひ聞るを云也、注【大材】は大才也、才德の廣大なるは棟梁の材料に用べき大木の如し、故に人才を謂て材と云、【下僚】は下位と云意也、字彙に僚官僚也、

上有ニ百尺絲一、下有ニ千歲苓一、　淮南子曰、千年之松、下有ニ茯苓一、上有ニ兎絲一、

【上】は松上也、【百尺】は長を以て云、【絲】は兎絲也、ねなしかづらと云草也、根は無して樹にまとふて生ず、山谷自ら東坡に依ることを云へる也、【下】は根底也、千歲は久を以て云、茯苓は松根に生ずる藥也、是東坡の弟子秦觀張耒晁補之などを指て云也、青松衆木にすぐれて高大なるに因て上下又此靈物を生ずる也、注山谷本集注云、淮南子說山訓曰、千年之松下有ニ茯苓一、上有ニ兎絲一、注云、茯苓千歲松脂也、兎絲生ニ其上一而無レ根一名ニ女蘿一、又按ニ頍弁詩一、蔦與ニ女蘿一施ニ于松栢一、注云、女蘿兎絲松蘿也、正義則曰、陸機疏云今兎絲蔓ニ連草上一生、非ニ松蘿一、松蘿自蔓ニ松上一生、事或當レ然、陶隱居注ニ本草一、兎絲條亦云、舊言、下有ニ茯苓一、上有ニ兎絲一、今未ニ必爾一、讀ニ山谷此句一、當レ不ニ以レ辭害一レ意也、淮南子の古

れて不合を云、嘉祐二年仁宗東坡を用て中書の條例を修せしめんとす、王荊公が曰、軾は與我皆異なり、別の事を以て試み玉へと云、又東坡を起居注に用んとし玉ふを荊公又曰、非是可奨之人と依是東坡を官告院に寘れたる類を指て云べし、

古來和鼎實、此物升廟廊、

【和鼎實】、文選二十潘安仁金谷集作詩、王生和鼎實、石子鎮海沂、○書經説命下云、爾惟訓于朕志、若作酒醴爾惟麴糵、若作和羹爾惟鹽梅、此二句は梅實を云也、【和】は調和する也、【鼎實】は鼎の中に實て烹る所の者也、即ち羹を云也、【此物】は梅實を指て云、【廟廊】は宗廟を云、言は古より以來鼎中の羹を作るには此梅實を用て調和し宗廟に升せ薦る也、和鼎實は宰相天子を導き輔て君德を成就するに比す、此物は東坡を指す、東坡は王佐の才有て宰相の位に升べき人なることを比し言ふ也、

歲月坐成晚、烟雨青已黃、

歲月いつとなく坐に逝き晚で烟雨のころに及び初め梅花の始て實を結で青かりしも已にはや黃ばみ熟したると也、【坐】文選詩、體澤坐自捨、注善曰、無故自捨曰坐、是東坡翰林に除せられんとせし後ははかぐしく用らるゝこともなく光陰冉々と推移て三十四五歲の時に及を云也、

得升桃李盤、以遠初見嘗、終然不可口、擲置官道傍、杜病橘詩、紛然不可口、豈只存其皮、

但使本根在、棄捐果何傷、

【得升―】、梅已に黃ばみ熟して桃李を盛たる盤上に雜り升ることを得たり、於是遠方の物なりと云を以て初てすゝめ嘗らるゝことを得也、【終然】は終にと云義也、然は助字也、偶々嘗られたれども終に酸して口に可ならず故に貴重せられず、官道の傍に擲て捨置かるゝと也、是東坡三十六歲にして熙寧四年に遷太常博士攝開封府推官の事を云、東坡は蜀の人也、故に以遠と云、【不可口】は東坡政事を議論して大に不協王荊公甚だ東坡を不悅故に外に任せんことを乞て杭州に通判たるを云也、注【杜病橘詩】此不可口字

篇は梅を以て東坡に比して云へる也、【東坡云】、山谷本集此詩の題注に云、東坡報山谷書云、古風二首託物引類得古詩人之風云云【託物】は物によせかこつけて意を寓するを云、【引類】は等類の物を引合てたくらべて言ふを云也、後篇茯苓兎絲の類を借用て比するを云、【古詩人】、詩經三百篇の作者を指て云、【風】は風體と云意也、

黄山谷

江梅有佳實、託根桃李場、

本集註文選古詩云、冉々孤生竹、結根太山阿、此句倣其體、【江梅】、宋范至能梅譜云、江梅遺核野生不經栽接者、又名直脚梅、或謂之野梅、凡山間水濱荒寒清絶之趣皆此本也、花稍小而疎瘦、有韻香最清、實小而硬、又一説に蜀江の梅也、東坡は蜀人也、故に比して云也、江梅は花を云、佳實はよき子を結也、篇中花の皎潔を云て次に子の用を云、故に起句に花實を並べて言ひ起す也、【託根―】、託は寄する也、此江梅根を桃李の場圃の中に寄託して雜り立也、是東坡仁宗の朝に二十二歳にして洛に入て及第せしことを云也、桃李は一時朝に在る人を指て云、桃李は媚たる色を以て人目を悦ばしむる故にこれを以朝廷の小人に比する也、

桃李終不言、朝露借恩光、（言江梅爲桃李所忌、意謂東坡見嫉當世、獨人主見知耳、）孤芳忌皎潔、氷雪空自香、

【桃李―】、前漢書列傳二十四李廣傳贊云、桃李不言、下自成蹊、此には字を借用たるまでにて心は別也、桃李の類梅を忌み惡て與之不言ども朝の露は梅を潤して恩光を借與する也、是當時の小人ども東坡の才を忌てすゝめあげざれども只英宗東坡が才名を聞せられて翰林に除せんとし玉ふを比し云也、東坡年譜云、治平二年英宗在藩邸聞公名欲以唐故事召入翰林、宰相限以近例召試秘閣、及試二論皆入三等、除直史館、注【人主】は天子也、【孤芳―】梅は群をすぐれて孤り芳に因て色を媚る桃李と不合して皎潔なるを忌み惡まるゝ也、故に梅花氷雪の姿親むものなくして空く自ら香しき也、東坡權貴の人に惡ま

々譬如網然、雖甚疏闊而無有漏失者、言善惡吉凶無一毫不定也、【恢々】とは大なる貌也、老子の意おもへらく、天道は森羅萬象を包罩して恢々たること網の如し、網目疏闊なるが如なれども善惡吉凶の報應昭にして竟に逃ることを不得、故に不失と云也、此句言は李白は才德の君子也、たとへ其初命蹇るとも理當に終には顯達すべし、然に今日尙如此、故に老子を引て云誰か是天網恢々として不漏と云や、李白に於ては天網に漏たるにや年老んとするに及で反て身を累して蹭蹬すると也、人は老後に安樂ならんこと常の願也、此句將老字最悲むべし、注【嵇昂】、僞蘇注也、【千秋——】此句暗に天網恢々の意を不離して可說、才德の人は其身顯れざれども其德は不滅して死後榮名永く世傳、是又天網不漏の意也、李白が才德當世に位を不得とも後世必ず名あるべし、杜子美言ふ、李白生前の困窮寠に傷むべし、たとひ天其德を不滅千秋萬歲永傳の嘉名有らしむとも是寂寞たる死後の事也、何ぞ其身に關かることを得んや、注【阮籍】、晉書列傳十九云、阮籍字嗣宗、陳留尉氏人也、籍容貌瓌傑、志氣宏放、傲然獨得、任性不羈而喜怒不形於色、或閉戶視書、累月不出、或登臨山水、經日忘歸、博覽群籍、尤好莊老、嗜酒能嘯、善彈琴、當其得意、忽忘形骸、時人多謂之癡、【張翰】、字季鷹、晉書文苑傳有傳、已見于第二卷李白詩注、我をして命終り身亡ての後に嘉名あらしむとも何の關ることあらんや、即時一盃の酒の心を樂ましめ憂を破て身に益あるには不若と云意なり、圈外注【子美蓋——】、此注又白が死後の作と看る說也、甚不可也、已に前首に於て其謬を辨す、【白身後唯有二孫女】、唐書李白本傳云、白至姑熟悅謝家青山、欲終焉、及卒葬東麓、元和末觀察使范傳正祭其塚、禁樵採、訪後裔唯二孫女、嫁爲民妻、進止仍有風範、因泣曰、先祖志在青山、頃葬東麓非本意、傳正爲改葬立二碑、因告二女將改妻士族、辭以孤窮失身命也、不願更嫁、〇輔按、杜子美肅宗乾元二年に此詩を作れり、元和末に至五十年に近し、而孫女の年尙改め嫁すべし、然則乾元の初子美焉ぞ孫女を知んや、附會牽合誠に可笑哉、

○贈東坡、

前篇梅以屬東坡、東坡云、託物引類、得古詩人之風、

山谷本集載之、題作古詩二首上蘇子瞻、注前の一

問ふ來ること不易と云へるは何故ぞと云へば李白言ふ來往江湖を渡り風波の多險を侵し淩ぐに因て舟楫の失墜しあやまちせんことを恐る、故に來ること辛苦にして不易と也、【出門―】、李白が魂歸を告るに因て杜子美夢中に出て送り門外にて別をなし自ら白髮の首を搔て歎き傷むは李白が嘗て胷次に蓄へたる所廟堂の上に在て天子をも輔相せばやとおもへる大志に孤負して遠方に漂流し羅網にかゝりて夢魂だも猶局促することよと也、注【諸葛松曰―】、僞蘇注也、

冠蓋滿京華、斯人獨顦顇、（左太中詩、濟々京城內、赫赫王侯居、冠蓋蔭四術、朱輪竟長衢、寂々楊子宅、門無卿相輿、）

此句より結句に至まで夢覺て以後李白を憐むの句也、【冠蓋―】、滿字獨字句中の字眼也、限なき悲怨此二字に在也、批云、語出情痛自別、【蓋】は車上に張て日を蔽ふかざし也、又さしかざす衣傘也、冠を戴き蓋をかざすは皆官位貴重の人也、【華】は字彙、中夏曰華、京華は即帝王都を云也、【顦顇】、又作憔悴、離騷漁父篇云、顏色憔悴、形容枯槁、韻會、瘦也憂患也、かしけたりと訓す、言は今の世志を得て官位に進み冠蓋をはなやかにして時めく人帝都の內にみち〳〵て多し、然るにいかにぞや唯斯人李白ばかりは奇才を負ながら志を失て位を不得異方に流浪し形も瘦はてゝかしけたるやと也、注【左太仲】、晉書列傳六十二文苑傳云、左思字太仲、齊國臨淄人也、少博覽史記、作三都賦、構思十稔、門庭藩溷皆著紙筆、偶得一句即疏之、徵爲秘書、及賦成皇甫謐大稱善、爲之序、于是豪貴家競相傳寫、洛陽爲之紙貴、【詩】は文選二十一左太仲詠史詩八首中之第四首也、此本文冠蓋字の出處を引也、全篇十六句の詩也、こゝには略して引也、注銑曰、濟々赫々美盛貌、術衢皆道也、貴人所乘車朱其輪、濟曰楊雄素嗜酒、人希至其門、故云無卿相車輿也、

孰云網恢々、（老子天網恢恢疎而不漏、）**將老身反累、**（嵇昴曰、吾將老矣、反爲牛尾累身）

千秋萬歲名、（阮籍詩、千秋萬歲後、榮名安所之、）**寂寞身後事、**（張翰曰、使我有身後名、不如即時一杯酒、○子美蓋傷太白身後惟有二孫女家聲不振、徒留千秋萬歲名也、）

四句批云、結極慘黯情至語塞、【網恢々】は老子經勇於敢章第七十三云、天網恢々疎而不失、希逸注、天道恢

生別常惻々、又云逐客無消息、又云今君在羅網、此等の句奈何か看んや、其結句無使蛟龍得と云は李白が神魂遠く歸んことを思て遙に祝するの辭也、夢寐の神交は思ふに因て感ず必しも故人の魂格り來るを待て後夢むるには非れども、此首全篇李白が神魂來て夢に入となして言を立るときは結句も亦當に如此なるべきこと也、是又死後の作と云所を不見故此注措て不取、

○又

浮雲終日行、遊子久不至、古詩浮雲蔽白日、

遊子不顧返、此言與比時君昏暗爲羣小所蔽而君子在外也、

【浮雲―】、批云、此兩詩起語千言萬恨、此起句は興比し起す也、浮雲終日流行して白日を蔽ふ、小人常に君の側に侍て君の明を蔽ふも亦猶如此、故に君子用られず遊子久く外に在て還り至ることなきと也、【遊子】は李白を指て云、注【古詩】注詳に前に見へたり、【時君】は當時位に在す天子也、當今と云と同じ、【昏暗】は智慧不明を云、【群小】は多の小人也、詩邶風栢舟篇、憂心悄々、慍于群小、【在外】は朝に不立して四方に漂流する也、

三夜頻夢君、情親見君意、告歸常局促、苦道來不易、

四句批云、人情鬼語偏極苦味、【三夜―】、鐘伯敬曰、明我常相憶、情親見君意、是一片何等精神往來、三夜まで頻につゞいて李白を夢しと也、夢中の交歎情親切にして君が我を思ふの意厚きことを想ひ見ると也、【告歸―】二句夢中神魂の語也、白が魂來て相親み語て已に歸んといとまごひするに臨では常に局促として苦み道へるは我此に來ること容易からず寔に艱苦なると也、【局促】、又作局趣、韻會沃韻、局促蹙小貌、○前漢書列傳五十二灌夫傳云、今日廷論局趣效轅下駒、注應劭曰、局趣蹙小之貌、身をしゞめ小して憂戚貌也、

江湖多風波、舟楫恐失墜、出門搔白首、諸葛松詩、出門無往還、時復搔白首、苦負平生志、

四句批云、夢中賓主語具足、【江湖―】、杜子美夢中に

得陶隱居正一法、逮而四世矣、因辭去徧游名山、廬天台不出、【謝自然】、傳未詳、唐の女道士也、韓文第一有謝自然詩曰、果州南充縣寒女謝自然童騃無所識、但聞有神仙、輕生學其術、乃在金泉山、云云○汪雲鵬列仙傳補云、謝自然蜀華陽女眞也、幼而悟道、遇師示以黃老仙經、一覽皆如舊讀、及長風神清爽言談迥異、年四十出遊名山洞府、聞司馬禎在天台玉霄峯、遂往師之、承禎授以上清秘法、後歸蜀於貞元十年、白日昇天、【賀知章】、傳見第一卷、【八極之表】、八方極遠の表に超出して縹渺の境に周遊すべしと也、【風采】は風趣貌采を云、後漢書列傳七十下趙壹傳云、趙壹字元叔、體貌魁梧、美鬚豪眉、望之甚偉、名動京師、士大夫想望其風采也、【傳神】、此れ特に容貌寫すのみに非ず李白が精神を傳寫するの詩也、○西清詩話云、太白歷見司馬子微謝自然賀知章、或以爲可與神遊八極之表、或以爲謫仙人、其風神超邁英爽可知、後世詞人狀其風貌者多矣、亦間於丹青見之、俱不若少陵云落月滿屋梁猶疑照顏色、熟味之、百世之下想見風采、此與太白傳神詩也、

水深波浪闊、無使蛟龍得、 宋玉賦、海水深浩波浪廣闊、非萬斛舟不可泛、按太白溺死於采石、此詩當是白死後作、故曰、死別已吞聲、而終云、水深波浪闊、無使蛟龍得、而殆誠有捉月之事故也

【水深―】、是夢覺て後李白の魂遙に還んことを思ふて云へる也、李白が潯陽に歸る路は水深して波浪闊く險しき處也、必好去て蛟龍の類に害せらるゝこと勿れと云意也、此結句は暗に宋玉が招魂の詩の意に本ける也、[注]宋玉賦、此注僞蘇注也、【按太白―】、【溺死於采石】、此事舊書新唐書並に不載、是俗間の雜說也、但才子傳に云、白晚節好黃老、度牛渚磯、乘酒捉月沈水中、云云其說如此なりと云へども、舊新史幷に劉全白が碣記、薛仲邕が年譜及び李陽氷樂史宋敏求曾南豐等の諸賢李集の序文を作れるにも一言も此事に不及ときは俗說不足取可知也、○輔按に、此詩尾の注は此篇二首を李白死後の作として死別巳呑聲の句を引て證とす、甚謬れり、特に不知此句は第二句の爲に設け言ふことを句中巳字當字を玩ときは言を立るの意自ら分明也、若し果して死後の作と云ば

迷不知、逡回、

【故人―】、故人字注前詩に見たり、此李白を指て云、李白吾が夢に入て見へ來るは是我が常に相憶ふ情の厚きに感ずるの心を明さん爲に神魂格來ると也、注【樂府云】、樂府の詩左方に見たり、【恐非―】、夢中杜子美心におもへらく恐くは李白平生の魂にてはあるまじきかと疑しき也、いかになれば來る所の路の程遠きこと測がたし、夢魂よもこゝまでは來り得ましければ也、注【韓非子曰】、韓非子の中に此語不見、事文類聚前集二十三云、六國時張敏與高惠爲友、每相思不能得、敏於夢往尋、但行至半路即迷不知路、

魂來楓林青、魂返關塞黑、今君在羅網、何以有羽翼、

【魂來―】、草堂注云、楚岸多楓、白魂從南楚而來、此二句は夢中李白が辭也、白云ふ我來るときは楓樹の青き林を歷て來り魂返るときは關塞の黑闇なる處を過て歸ると也、【今君―】、杜子美夢中に白に言ふ辭也、今君は獄に下て身を苦めて羅網の中に在て自由ならぬ人也、然るに今來らるゝは何としてか羽翼ありて飛來れしそやと也、

落月滿屋梁、猶疑見顏色、

宋玉神女賦若白日初出照屋梁、西清詩話白歷見司馬子微謝自然賀知章、或以爲可與神遊八極之表、或以爲謫仙人、俱不若少陵云落月照屋梁猶疑見顏色、百世之下尚想見其風采、此李太白傳神詩也、

【見顏色】、本集作照顏色、批云、偶然實境不可更遇、此二句は夢始て悟たる時のもやうを云也、李白を夢にありありと見て語を交へたるが、忽夢破れて目を擧れば曉の殘月は落かゝりて斜に我が屋の梁に光滿てり、其皓潔瀟洒の光景を見れば猶是李白英爽の顏色を照し見るが如くに思ふと也、此夢覺るの初李白の精神猶眼前にあるかと思ふのもやう也、註【宋玉神―】、照屋梁の字の出處云、宋玉は屈原弟子、楚大夫、文選十九神女賦、其始來也耀乎若白日初出照屋梁、【西清詩話】三卷、宋蔡條字寬夫撰、此に所引は元本と同異あり、故に全文左方に錄す、【司馬子微】、新唐書列傳百二十一隱逸傳、司馬承禎字子微、洛州溫人、事潘師正傳辟穀導引術、無不通、師正異之曰、我

相思て情最切なるは互に世に在ながら索居するを悲み再相見んことを思へば也、故に常に惻々として心に措くことなき也、〔注〕馬融字は季長と云、後漢の人也、傳見後漢書五十上、然ども此注僞蘇注也、故に本傳此語不見、僞蘇注の説第二卷に見たり、【江南―】、江南は白が在所潯陽を指す也、【瘴癘】は山嵐谷霧深き處四時の氣候和順せず不正の時氣多きを云、【逐客】は罪に坐せられて逐ひ斥けられたる人を云、即李白を指て云也、史記八十七李斯傳云、秦宗室大臣皆言秦王曰、諸侯人來事者大抵爲其主游間於秦耳、請一切逐客、消息は音信也、言は江南は元より四時の氣も不和にして能く人を病しむるの所也、其地に逐斥せられたる客李太白は在と聞けども久しく消息のをとづれもなし安否いかゞあるやらん常に心掛て不忘の意也、【消息】、事言要玄卷二云、音問謂之消息、猶言安否善惡、消消耗也、息生息也、○字彙、消息音信也、〔注〕【永王璘】は玄宗の子肅宗の弟也、事詳見于新唐書列傳七、又綱目肅宗至德元年云、永王璘反、上皇遣淮南節度使高適等討之、初上皇命諸子分總節制、諫議大夫高適諫以爲不可、上皇不聽、以璘領四道節度使鎭江陵、時江淮租賦山積於江陵、璘召募勇士數萬人、日費巨萬、子瑒有勇力好兵、薛瑒等爲之謀主、以爲天下大亂、惟南方完富、宜據金陵保有江表、如東晉故事、上聞之勅璘歸蜀、璘不從、上乃以高適爲淮南節度使、來瑱爲淮南西道節度使、與江東節度使韋陟共圖璘、璘遂引舟師沿江東下、吳郡太守李希言手牒璘詰之、璘怒遣其將渾惟明襲吳郡、李廣琛襲廣陵、破其兵於當塗、江淮大震、後爲江南採訪使李成式所敗走死、【累】は李白永王璘に仕て謀反に與したる輩なるべしとて其黨類につながれて執へられたるを云、累は係累の意也、俗にまきぞへに罪せらるゝと云が如し、【夜郎】、新唐書地理志三十一、沅州有夜郎縣、天寶元年更名峨山縣、夜郎は黔中に屬したる縣也、【江州】、大明一統志五十二、九江府即江州也、

故人入我夢、明我長相憶、樂府云、夢見在我傍、已覺在他鄉、上有加餐食、下有長相憶、恐非平生魂、路遠不可測、韓非子曰、六國時張敏與高惠二人爲友、每相憶不能得見、敏便於夢中往尋、但行至半道即

集諸方士仙術之要、云云西王母乘翠鳳之輦而來、前導以文虎文豹、後列雕麟紫麏、曳丹玉之履、敷碧蒲之席黃莞之薦、共玉帳高會、薦清澄琬琰之膏以爲酒、西王母與穆王歡歌、【西王母】、列仙傳云、西王母即龜臺金母、姓緱、諱回、字婉妗、一字太虛、配位西方、與東王公共理二氣、凡上天下地女子之登仙得道者咸所隸焉、【神禹】、夏の禹王也、洪水を治て神功あり、故に神禹と云、【張僧繇】、圖繪寶鑑云、張僧繇吳人、天鑒中歷官至右將軍吳興太守、以丹靑馳譽于時、世謂、僧繇書骨氣奇偉、規模橫宏、逸筆六法精備、【俛仰終―】、文選注向曰、讀此書俛仰之間、終見天下之事、可謂樂也、【俛仰】はふしあをく也、然れども形を俛仰すると云に非ず、俛つ仰つするほどの暫の間にと云意也、【宇宙】、字彙云、天地四方曰宇、往古來今曰宙、穆王傳山海經の書を讀で俛仰暫時の間に天下の事を歷覽する也、故に胷中曠達也、これに依て自ら樂むこと甚也、

○夢李白

本集第五載此二首、題注趙曰、白坐永王璘事當誅、郭子儀請解官贖罪、詔長流夜郎、會赦、還潯陽、復坐事下獄、潯陽郡今江州屬江南道、此詩は李太白潯陽に在時杜子美白を思ふて作れる詩也、實に李白生前の作也、注に死後の作と云は誤れり、

杜子美

死別已吞聲、生別常惻々、（馬融傳、不忍生別）（我心惻々、）
江南瘴癘地、（今江州路乃潯陽江南東路、）逐客無消息、（白坐永王璘之累、詔長流夜郎、會赦還潯陽、坐事下獄、潯陽）

此四句は未だ夢みざる前常に相思ふの意を云て下を起す也、【生別―】、本集批云、使其死耶、當不復哭矣、乃使人不能忘者生別故也、已の字常の字重く看べし、【吞聲】は哭して聲を失するを云也、梁昭明太子擬古詩、憶人不忍語、含恨獨吞聲、【惻】はいたむ也、字彙悽也痛也、言は世に死別ほど可悲ものはなし、然れども死別は當時聲を吞で慟哭すれども已に哭して後歲月うつり隔ればいつとなく哀うすくなりて忘るべし、是は既に死去永く訣れ又再會を思ふの心なき故也、唯生て別離する者は心に忘るゝことなく遙に

傳于世張僧繇書以爲圖焉、

俛仰終宇宙、不樂復何如、 俛音免、

【窮巷―】、文選注向曰、大路車馬行多、故轍迹深也、頗少也言窮巷之曲隔此大路、少能廻故人之車以過我也謂所居幽僻、窮巷は窮寠の陋巷と云意也、【深轍】は車馬來往の大路也、言は繁華の地を隔て遠りて幽僻なると也、此所へ故舊の友人車を廻して訪來られしと也、【故人】、史記七十九、范睢傳綈袍戀々有故人之意、【欣然】、本集作歡然、【春酒】は春時の酒に非ず、酒の性溫暖にて春光の和煦の如し故に酒を春と云也、東坡の自造れる酒を羅浮春と名けしも其意也、蔬は菜也、言は故人を邀て欣然とよろこびて春酒を酌て客に勸め園中の蔬菜を摘て膳に調て客をもてなす也、正宗注、酌酒摘蔬以待故人、物薄而情厚、【微雨―】、をりふし微しばかりの雨東の方よりふり來て又そよそよと涼しき好風雨と倶に吹來也、正宗注、細雨乍過、淸風徐來、胸襟自然爽快、【汎覽―】、本注、周穆天子傳者太康二年汲縣民發古塚所獲書也、文選注善曰、周王傳穆天子傳也、山海圖山海經也、穆天子の傳は汲冢の中より出たる古文にて書たる書也、晉の荀勗校定して六卷とす、有序言、其言雖不典其文志古、頗可觀覽云云今獨世間に行る穆天子傳六卷あり、闕字甚多して難讀書也、周の穆王天下を經歷なされし事迹及び山川禽獸等奇異の事を多しるしたる史の記なり、注【太平廣記】、五百卷、宋太平興國初承詔李昉等纂之、故事小說等を多く載たる書也、【周穆王】、周の第五主也、綱鑑云、穆王名滿、昭王之子、崩年一百有四歲、初王得八駿馬、有造父者、以善御得幸、王欲肆其心、周行天下、將必有車轍馬迹焉、【八駿】、晉王嘉拾遺記卷三云、穆王即位三十二年巡行天下、馭黃金碧玉之車、傍氣乘風、起朝陽之岳、自明及晦窮寓縣之表、王馭八龍之駿、一名絕地、足不踐土、二名翻羽、行越飛禽、三名奔霄、夜行萬里、四名超影、逐日而行、五名踰輝、毛色炳燿、六名超光、一形十影、七名騰霧、乘雲而奔、八名挾翼、身有肉翅、○列子所載八駿の名拾遺記と不同、一驊騮、二綠耳、三赤驥、四白犧、五渠黃、六踰輪、七盜驪、八山子、○張華博物志にも八駿の名を載す、又拾遺記列子と不同、【宴西王母】、拾遺記三云、穆王三十六年王東巡大騎之谷、指春宵宮、

符はこゝもとのわりふと同じ、竹に物の形を刻みて割て兩片となし各一片を收む後に信をなすことあれば兩片を將來て相合て刻文不違を以て證とす、故に物の能相合してたがひなきを云に假用て符合と云也、淵明と東方の士と志趣兩ながら相契合する也、【歳寒之盟】、歳寒の時松栢の霜雪を凌て凋零せざるが如くに患難百變を歷るとも終に固く結で易るまじきとの盟を云也、

○讀山海經

陶淵明因讀山海經賀次悠然有自得之趣作此以詠其幽居之適、

本集第四讀山海經詩十三首、此其第一也、題注云、按讀山海經穆天子傳、止題讀山海、又文選三十載之、注翰曰、山海經者所記衆山百川草木禽獸之書、潛讀之而發詠、山海經凡宇宙の間山川草木禽獸怪異のことまでを悉く記するの書也、淵明此書を讀て胸襟轉た曠潤也、故に此詩を詠ずる也、注【賀次】、心中と云義也、【悠然】は思ひのはるかに遠き也、【自得】は道理の妙趣を心に自ら識得する也、【適】は身心に能愜て安きを云、

孟夏艸木長、繞屋樹扶疏、衆鳥欣有托、吾亦愛吾廬、既耕亦已種、時還讀我書、

【孟夏—】、此二句先づ當時の景物を叙、孟夏は四月也、此時は千草萬木皆長茂し室屋を圍繞して樹木扶疏と繁りて枝葉垂れ布く也、【扶疏】、文選司馬相如上林賦、垂條扶疏落英幡纚、注善曰、說文扶疏四布、呂氏春秋曰、樹肥無使扶疏、良曰、扶疏分布貌、樹木の枝葉茂りて四邊ともに盛に垂れ覆ふを云、【衆鳥—】、衆の鳥は茂樹の扶疏たるに栖て依托する所あることを欣也、吾も亦吾が所居の廬を愛す、是人物各其所を得て心相樂の意也、【既耕—】、田家の事を云、已に田を耕了て亦已に穀苗を種て農事を營み時に廬に還讀書と也、

窮巷隔深轍、頗廻故人車、欣然酌春酒、摘我園中蔬、微雨從東來、好風與之俱、汎覽周王傳、按太平廣記周穆王好神仙、乘八駿之馬、日宴西王母於瑤池之上、流觀山海圖、神禹治水有山海經、

に有德の人は困窮に處と云へども常に道を樂て憂る色なし、豈に衣食の豐饒なると儉約なるとを計較して心を動さんやと也、

我欲觀其人、晨去越河關、靑松夾路生、白雲宿簷端、知我故來意、取琴爲我彈、上絃驚別鶴、下絃操孤鸞、（別鶴孤鸞皆曲名、）**願留就君住、從今至歲寒、**（淵明志趣與之符合、願就其居定交友歲寒之盟也、）

【我欲――】、淵明其有德の人を見んと欲する故に跋涉の勞を憚からず、晨に起去て河關を越へ過て尋ね行となり、【靑松――】、此二句は遂に其所に到て所見山居の景致を云也、靑松道の兩傍に生じて枝葉交り掩を【夾路】と云、其廬を窺へば人稀に路絕て白雲常に簷端に宿す、山居のありさま寔に幽閑也、【知我――】、故は俗にわざと〻云意也、唐話にわざと〻云ことを故意と云、其故字の意也、彼有德の人我がわざ〳〵と訪ひ來りし心を知て我爲に琴を彈じて聞しむると也、

說話をなさずして琴を彈ず最も心あるべし、人の心曲は皆音聲に顯る人德あれば聲和し人暴なれば聲も亦暴也、心に思へば聲に發す、其賢不肖少も掩ふことを不得、能く音を知る人は音を聽て即其德を知也、故に琴を彈じて我が心を示したるなるべし、【上絃――】、此一句は琴曲のもやうを云也、驚操は皆琴を彈ずる曲調のもやうをかたどる字也、【驚】は琴聲の發揚する貌などを云べし、【操】は指を弄して曲調をなす貌を云也、注別鶴孤鸞皆曲名、○古今注音樂第三云、別鶴操商陵牧子所作也、娶妻五年而無子、父兄將爲之改娶、妻聞之中夜起倚戶而悲嘯、牧子聞之愴然而悲、乃歌曰、將乖比翼隔天端、山川悠遠路漫々、攬衣不寢食忘餐、後人因爲樂章焉、○正宗注云、漢侍中善琴、能爲雙鳳離鸞曲、又孤鸞照鏡則悲鳴、一奮而絕、【願留――】、淵明已に其人に遇ひ又琴を聽に因て其心を知て我心の趣と相契ふ也、故に曰願は此所に留て君に就て居住して自今友となり堅く不變の交を締んと也、【歲寒】は松栢の歲寒に至て色を不變を假用て契合堅固にして永く變易することなからんと云意也、注【與之】、之字は東方の士を指て云、【符合】、

に疲る故に形體衰へ疲て腰の圍みも細くなり衣帶日にそひてのび緩るべ身に不愜と也、【浮雲―】、我遠く行ことは讒佞の臣浮雲の白日を蔽ふが如く君の明を蔽ひくらまして忠臣を阻に因て忠臣志を失て長く外に去て顧み返ること無と也、【令人―】の人は即我也、君を戀ひ思ふに因て我が形を老衰せしめ空く日を度りて歲月已に晩景に逼ると也、是歲月已に晩て君に忠を致すの日幾くもなきことを嗟也、【弃捐―】、此二句は思深く情切にして憂懷いかんともしがたき中より此辭を言て自ら胸中を寛うするの意也、言は君を思ふことの深き形を老するに至るそれ如此、思ふと云へども終に益なし、我身又眞に惜むべし、因て自我が身に勸めて云ふ只弃捐て心に忘れ復た道ふことなかるべし、努力て餐飯を加へ倍して自ら身を保重すべきと也、○譚元春云、人皆以此勸人、此似獨以自勸、又高一格一想、

○擬古

本集四擬古詩九首此其五首也、

陶淵明

東方有一士、被服常不完、三旬九遇食、十年著一冠、言士之困窮如此、辛苦無此比、常有好容顏、德足以潤身、豈計衣食之豐約哉、

東方の一士は想ふに陶公自ら云るならんが、陶公は東晉の末に出たる人也、故に破題に東方有一士と云て自ら云ひ却て又自ら其人を思ふと云へるなるべし、是又杜子美自贈詩の類ならんか、【被服―】、身に被り服する衣裳破れ綻び百結して常に完きことなき也、【三旬―】、本注に曰、說苑に子思三旬九食、此句食の乏を云句は十日也、三旬は即三十日也、三旬の間僅に九たびほど食に遇ふと也、然ども文字に泥むべからず、只常に乏して食に遇ふことの稀なるを云へる也、十年の間只一つの冠を用ひ著て新を替ることなし、或の曰十年の間只一日冠を著と云の義也、按に然らば當言一著冠前說を可とせんか、【辛苦―】、其艱難の辛苦なること外に如此なる比ひ又あることなし、然れども此人衣食を以て心を不累、只天眞を樂て憂の色なく常に好容顏ある也、注【德潤身】、大學章句傳六章云、富潤屋、德潤身、德は身を潤に足れり故

此情切なりと云へども歸ことを不レ得、安んぞ風を凌て高く翔る翰を得て鳥の如くに飛歸て聊山林泉石に遊で玩賞を恣にすることを得んやと也、[註]首言二中書省之美麗一終思二園林之閑雅一方レ春而欝陶以思二我交朋一安得下羽翰凌レ風而歸恣中賞山林泉石上也翰音韓、

○古詩

文選二十九、十九首中之第一首也、題注向云、不レ知二時代一、又失二姓氏一、故但云二古詩一、○嚴儀卿滄浪詩話云、古詩十九首非二止人之詩一也、行々重行々樂府以爲二枚乘之作一、則其他可レ知矣、○文選注、此詩意爲下忠臣遭二佞人讒譖一見中放逐上、

無名氏

行行重行行、與レ君生別離、楚辭樂莫レ樂二兮新相知一、悲莫レ悲二兮生別離一、相去萬餘里、各在二天一涯一、道路阻且長、詩道路阻且長、會面安可レ期、胡馬依二北風一、越鳥巢二南枝一、相去日已遠、衣帶日已緩、謂二別後憔悴而衣帶舒緩一、浮雲蔽二白日一、阻隔如二雲蔽一レ日、遊子不二復返一、思レ君令二人老一、歲月忽已晚、弃捐勿二復道一、努力加二餐飯一、

【行々―】は行と云意まで也、同辭を疊みかへして聲を永して歌曲の節奏に合する也、言は國を去て出行し與レ君生ながら別れ離ると也、[注]楚辭第二九歌の辭也、人の歡樂は始て新に相知て交るより樂はなし、世に悲きは死し去にもあらで生ながら別離するより悲はなきと云へり、此詩に生離別の字を取用たると也、【相去―】、今より行き行ては君と相去の間萬里の餘も遠して長天遙に隔り此の天末と彼の天末と各一方に索居すると也、【道路―】、萬里の道なれば山川阻て路程はてしもなく長き也、如此なるときは後會の對顏はいつを限りと定め期すべきやうもなきと也、【胡馬―】、此二句故國を不レ忘の意を云、胡國の馬中國に來て後北風の吹に遇へば必胡國の思ひを感じて風に向て嘶也、越鳥は南方より來る鳥なれば舊を不忘して常に南を指す枝に巢ふて棲む也、是皆其舊國を思ふ也、是を假て我が舊國を思ふて不レ措に比する也、【相去―】、ひたと行々に隨てこしかたの隔ること日々に遠くなる也、舊國は日に遠くなり道路の勞は日

逸注曰、罔綺文縷也、綴緣也、網與網同而義異也、濟曰、綺錢朱網並宮殿之飾也、玲瓏踈貌、沈亦深也、【玲瓏】はあざやかにうつくしく見ゆるを云、連錢の紋を織成したる綺羅をはりたるがあざやかに見ゆる也、【深沈】はおくふかくしん〳〵たる貌を云、朱網も亦宮殿の窓などの飾也、しん〳〵とをぐらうして朱網の光彩互に相映ずると也、【紅藥—】、文選注銑曰、紅藥謂所植草色紅者、庭に植たる草花は紅にして堦の前に當てさきみだれるを云、紅藥或は紅芍藥ならんか、天梯古文には紅芍に作たり蒼苔は青色の苔也、砌は階下の石だゝみの所を砌と云、苔色庭上よりせん〳〵に砌をつたふて滋り上るを云、

玆言翔鳳池、鳴珮多清響、信美非吾室、中園思偃仰、朋情以鬱陶、春物方駘蕩、安得淩風翰、聊恣山泉賞、

【玆言—】、文選注韓曰、翔集也、【鳳池】中書省也、【鳴珮】、所佩玉也、○文獻通考中書省條下云、以其地在樞近、多承寵任、是以人因其位謂之鳳凰池焉、注云、晉荀勗守中書監侍中、參贊朝政、及遷尚書令、最久在中書、專管機事、失之甚惱、人有賀者、勗怒曰、奪我鳳凰池、諸公何賀焉、【翔】は聚の意也、鳳の字より原て翔と云也、【鳳池】は即ち中書省を指て云、言は我中書の員に備て鳳凰池に聚り居て身に朝服を着て玉を佩び進退に玉觸て清き響多き也、【信美—】、魏王粲登樓賦云、雖信美而非吾土兮、曾何足以少留、【非吾室】は中書省を指て云、【中園】は園中也、古人の倒語此類多し、言は鳳池に聚て盛服して玉を佩ぶ信に是榮美なれども官舍は本是我が平生の室廬に非ず、只願故里の園中に在て自ら肆に偃仰して生を安んぜんことを思ふと也、【朋情—】、書經五子之歌篇云、鬱陶予心、顏厚有忸怩、○孟子萬章上云、象曰鬱陶思君爾、朱注、鬱陶思之甚、而氣不得伸也、○文選注良曰、駘蕩春光色也、朋友を思ふの情切にして胸中に鬱陶して結で不伸と也、【春物】は和日溫風禽鳥花木の類を總て云也【駘蕩】は春光のどやかにかすみわたる景氣を云也、朋を思の情殊に切なるは此春物の艶麗を見に因が故也、【安得—】、今我官に居て身自由ならず

總國內樞要、而尚書唯聽受而已、被委此官多擅威勢、後魏亦謂之西臺、北齊中書省管司王言幷司進御之樂及清商龜茲諸武伶官、中書の官は天子の詔命を掌り文書を作ことを典る官也、【省】は官人の居る所を云、禁中の官舍也、注【闥】、字彙云、闥門也、漢號禁門曰闥、師古曰、宮中小門曰闥、

謝靈運

萬姓統譜云、謝靈運玄之孫、家于上虞、少好學博覽群籍、文章爲江左第一、仕宋爲永嘉大守、襲祖父封爵、故世稱謝康樂、

紫殿肅陰々、彤庭赫弘敞、風動萬年枝、日華承露掌、玲瓏結綺錢、深沈映朱綱、紅藥當堦翻、蒼苔依砌上、

此八句禁中の景を云、【紫殿―】、文選注善曰、紫殿紫宮也、向曰、紫殿天子居也、彤庭謂禁中多赤色、肅嚴也、陰々沈貌、赫盛也、弘敞高大貌、〇正宗注云、紫殿猶紫閣、肅深閒也、赫明盛貌、敞仗闢也、紫殿天子居所を云、禁中を天の紫微宮に比す故に天子の居所を紫閣紫宮など云て紫字を加る也、【肅陰々】、王居のありさま嚴にしてしん／＼と靜なるを云、【彤庭】は禁庭のたゝき土に朱砂を雜へて色を赤くするに因て彤庭と云、彤、字彙丹飾也、【赫弘敞】、はてりかゞやきて弘くほがらかなるを云、【風動―】、正宗注、萬年枝今冬青木、言其堅實耐歲寒凌霜雪、〇楊升庵文集七十九曰、謝眺詩風動萬年枝、唐詩青松忽似萬年枝、三體詩注、以爲冬青非也、草木疏云、檍木枝葉可愛、二月花白、子似杏、今官園種之、取億萬之義、改名萬歲樹、即此也、【承露掌】、三輔黃圖卷三云、漢書曰建章有神明臺、廟記曰、神明臺武帝造祭仙人處、上有承露盤、有銅仙人舒掌捧銅盤玉杯以承雲表之露以露和玉屑服之、以求仙道、長安記、仙人掌大七圍、以銅爲之、魏文帝徙銅盤折、聲聞數十里、風は禁中に植たる萬年樹の枝をそよ／＼と吹動し日の輝は仙人の承露掌にうつろひてきら／＼と光あるなり、【玲瓏―】、文選注善曰、晉灼甘泉賦注曰、玲瓏明見貌也、東宮舊事曰、窓有四面、綾綺連錢、楚辭曰、網戶朱綴刻方連、王

田翁笑相念、昏黑慎原陸、（此二句言昏黑之時、不分明朗當自愼、）今年幸少豐、無惡饘與粥、

【田翁—】、此以下の四句佳句なりと前輩評せり、年豐食足れば愈々身を保攝することを思ふは人情の常也、【笑】、字自然に喜意あり相念ふ天色昏黑の時は原を行に宜く愼て身を自愛すべし、今年幸に五穀登少く豐か也、饘となし粥となして相享するに厭ふことなからんと也、【惡】本集作厭、【饘粥】、正宗云、稀曰饘、稠曰粥、言値此少豐可辨饘粥以餉客也、○史記四十七孔子世家、正考父鼎銘云、饘於是粥於是以糊余口、

五言長篇

五言の解は第一卷に詳也、此より以下は皆長篇の詩を集る也、按に前の卷にも長篇の詩あり其句數を計に前卷に所載の詩は毎章不過十四句、此より以下は毎章十六句以上の詩也、十四句以下を短篇とし、十六句以上を長篇と定むること想必據ころ有べし、但未考得耳、○唐詩訓解首卷袁石公曰、五言古詩凡作一篇、先分爲幾段、毎節句數多少要略均齊、前段是敘了、敘了通篇之意皆含蓄其中、結段要照前段、如選詩分段甚均、並不參差、杜却不甚如此太拘、然亦不太長不太短、次要過句爲血脉、引過此段過處用二句一結上、一生下、爲最緊、非老手未易能之、回照十步一回首、要照題目、五步一消息、要閑語贊歎、方不甚結蹙、長怕雜氣一意爲一段、已上四法備見選詩北征篇、亦擧一偶之道也、此說は是長篇を作るの法式を云ふ也、然れども此法を以古詩を見は其分段鋪敘の大意易見かるべし、故に附錄す、

○直中書省、（此直宿中書省圖所作也、）

文選三十載之、是謝玄輝が詩也、靈運が作に非ず、選注銑曰、【直】謂宿於禁中以備非常、直はとのゐの番にて省中に宿するを云也、【中書】、文獻通考卷五十一云、中書之官舊矣、謂之中書省自魏晉始焉、梁陳時凡國之政事並由中書省、省有中書舍人五人領主書吏二百人分掌二十一局事各當尚書諸曹並爲上司、

本集四十三、田家詩三首あり、此詩は其第三首也、田家秋後の景象を寫せる詩也、

柳子厚

唐書列傳九十三、柳宗元字子厚、河東人、宗元少聰警、尤精西漢詩騷、下筆搆思精裁密緻、璨若珠貝、當時流輩咸推之、登進士第、應擧宏辭、授校書郎藍田尉、貞元十九年爲監察御史、順宗即位王叔文韋執誼用事、尤奇待宗元、轉尚書禮部員外郎、欲大進用而叔文敗矣、宗元因貶爲邵州刺史、在道再貶永州司馬、元和十年量移柳州、江嶺間爲進士者皆師之、故時號爲柳柳州云、卒年四十七、○東坡曰、子厚詩在陶淵明下韋蘇州上、退之豪放奇險則過之、而溫麗靖深不及也、所貴於枯淡者謂外枯而中膏似淡而實美、淵明子厚之流是也、

古道饒蒺藜、（蒺藜有刺之艸也、）縈迴古城曲、蓼花被隄岸、陂水寒更綠、是時收穫竟、落日多樵牧、風高榆柳疎、霜重梨棗熟、（言一時之景）行人迷去徑、野鳥競棲宿、（上二句含下面昏黑意）

【古道—】、蒺藜本艸綱目十六、陶弘景曰、蒺藜多生道上及墻上、葉布地子有刺、狀如菱而小、古道は掃ふこともなき荒たる道を云、村中の荒たる道は蒺藜と云草多く生じて道すぢも直からず、田圃の地形にまかせて道を取り廻りて古城の曲に通ずるなり、【蓼花—】秋の末なれば蓼の花盛に開て隄岸に遍く敷陂中の水氣寒して綠色更に深き也、【是時—】、此時節至て田畝の五穀も成熟して收め穫ること功竟り落日のころ牛を牧ひ薪を樵て野外に人多く出る也、【風高—】、秋は風も高く吹くに因て高樹先づ色づきて葉おち榆柳もまばらに疎也霜も稍重く降て梨棗の菓類色つき熟すと也、皆是村落の景也、【行人—】、上句落日を云こゝに既に暮に及ぶ故に行人は去路に迷ふ也、村中は小徑多して岐路疑はし是故に昏黑に及べば去徑に迷ひ易き也、野鳥はとまりを競て枝を爭ひ喧き也、注行人野鳥の二句は既に暮れに逼る景を云て下面の句に昏黑を愼めと云句の張本とすると也、

○責子

本集三載之、題注舒儼宣俟雍份端佚通佟共五人、舒宣雍端通皆小名也、我が子の俊傑になきことを責誚る也、○黄山谷曰、陶淵明責子詩曰、云云、觀淵明此詩想見其人慈祥戲謔可觀也、俗人便謂淵明諸子皆不肖而淵明愁歎見於詩耳、又云、杜子美詩陶潛避俗翁、未必能達道、觀其著詩篇、頗亦恨枯槁、達生豈是足、默識蓋不早、生子賢與愚、何其挂懷抱、子美困頓於三川、蓋爲不知者詬病以爲拙於生事、又往々譏議宗文宗武失學、故聊解嘲耳、其詩名曰遣興、可解也、俗人便爲譏病淵明、所謂癡人前不得說夢也、詩人玉屑

陶淵明

白髮被兩鬢、（淵明自歎）肌膚不復實、

此二句先づ我が老を說、白髮兩鬢に亂れ被て肌膚の肉も消し皮皺みて充實することなきと也、責子の詩に先づ我が老衰を說くこと意思深し、凡そ人老年に及ては子の成立を望むこと愈々深し、是人の常情也、故に先づ衰老を以て云ひ起す也、

雖有五男兒、（淵明有子五人、長曰舒、次曰宣、三曰雍、四曰端、五曰通）總不好紙筆、阿舒已二八、懶惰故無匹、阿宣行志學、而不愛文術、雍端年十三、不識六與七、通子垂九齡、但覓梨與栗、天運苟如此、且進盃中物、（淵明歸之天運、自飮一杯中之酒、以釋憂悶也、）

【雖有―】、五兒ともに紙筆を不好して學問にうときも也、懶惰は俗にぶしやうものと云意也、をこたりて事を不形也、【行志學】はやう〳〵年十五になりたると也、然れども是も文學の術業を好み勤ることなき也、【垂九齡】、九歲に及也、是又但梨と栗とを覓て未だ讀ことを不知と也、【天運―】、五子ともに學を不好、自ら是れ天運の自然なりいかにともすべきやうなし、且杯中の酒を進めて自ら樂て憂を忘るにしくはなきと也、

○田家

客、詩顚之倒之、顚倒衣裳、夢覺兩愧負、坐談雜今古、不答顏愈厚、問我何處來、我來無何有、莊子無何有之鄕、

【主人―】、主人は家裡に在て書を枕として臥せり、午睡の中偶我が平生の交深き友を夢みたると也、是來客主人の夢に入ことを云、【平生】は平日を云、論語憲問篇、久要不忘平生之言、【忽聞―】、韓文卷四剝啄行云、剝々啄々有客至門、題注、剝啄叩門聲也、剝啄は啄木鳥の木を啄聲也、啄木鳥は喙にて木を啄て木中の蠹蟲を食ふ者也、其樹を剝啄する聲人の門をたゝく聲に似たるに因て門を扣く聲を剝啄と云也、夢の中に忽門外に剝啄の聲あるを聞て驚き起るとて枕の邊に置たる一盃の酒を覆寫し散したると也、【倒裳―】、詩經齊風東方之日篇云、東方未明、顚倒衣裳、顚之倒之、自公召之、周章て裝束するとて衣を下に着裳を上に着るほど忙しきと云意也、剝啄を聞て驚き起きやがて衣裳を顚倒し着てとりあへず趨出で客の訪れしを謝する也、夢覺て相見すれば客主兩ながら互に久く消息をおこたりて平生交歡の心に孤負したることを愧る也、【坐談―】、客坐して相對し今古の事を雜へ談ずれども答話をも爲し不得只顏愈厚く愧かしく思ふと也、【顏厚】は愧る色を云也、書經五子之歌篇云、鬱陶乎吾心、顏厚有忸怩、蔡沈注、顏厚愧之見於色也、【問我―】、客我に問へるはそなたは元來何の處より來られしぞや、答曰、我は無何有の鄕より來ると也、此結の二句意曉し易からず、輔按ずるに來字輕く看べし、身來由を問に非ず、但心上に就て說べし、其意以くそなたの平生心を處し道を修すること何の處に於て工夫を用らるゝやと問ふ、答曰、我が心本一物も惹るゝ所なし、只心を無何有の地に處して從容として自樂むのみ、別に工夫を用る所なしと也、如此說かば稍通ずべきか、若止身の來由の處を問と作て說かば意思褊淺なるに似り、姑く識者を俟つ、〔註〕莊子逍遙遊篇云、予有大樹、患其無用、何不樹之於無何有之鄕廣莫之野、彷徨乎無爲其側、逍遙乎寢臥其下、【無何有】は何の有る所もなきと云義也、畢竟無と云意也、

烟火の廬中に幽なるを望めば稚子簷隙のすきまより候となり、

問君亦何爲、百年會有役、但願桑麻成、蠶月得紡績、素心正如此、開逕望三益、論語、益者三友、損者三友、

文選良注云、問君謂自擧以問以答、何爲辛苦、答云、人生百年皆有勞役、善曰、毛詩曰蠶月條桑、家語曰、公文伯之母紡績不懈、紡韻會、說文網絲也、廣韻績紡也、【績】、韻會云、說文緝、詩八月載績、注麻事也、詩詁緝麻也、【問君―】、自問何事にかやうに作勞して終日辛苦するや、答曰人の生涯百年の內皆分に隨て經營の勞役あり誰か身を安逸にする者あらんや、但願は桑麻の長成して蠶月に紡績の功を得んことを希て勞役をは不厭と也、【素心―】、素は本也、素懷と同意也、もとよりの心と云意、【如此】は上の句二聯を指す、農業の勞を甘し勤め又逕を開て三益の友を望候と也、【三益】、論語季氏篇、益者三友、損者三友、友直、友諒、友多聞、益矣、

○和陶淵明擬古、

東坡詩集三十一載之、淵明全集四擬古詩九首あり、第一首を和する也、淵明詩云、榮々窓下蘭、密々堂前柳、初與君別時、不謂行當久、出門萬里客、中道逢嘉友、未言心相醉、不在接杯酒、蘭枯柳亦衰、遂令此言負、多謝諸少年、相知不忠厚、意氣傾人命、離隔復何有、

蘇東坡

有客扣我門、繫馬門前柳、庭空鳥雀噪、門閉客立久、

有客て訪來我が門を扣き乘たる馬を門前柳樹の下に繫おく也、【庭空―】、客所見の景を云、客內を窺へば庭前空寂にして人跡絕え鳥雀の聲噪き喧し門戶は深く閉て扣けども應へなければ客は入不得して外に久しく立やすらふ也、

主人枕書臥、夢我平生友、忽聞剝啄聲、驚散一杯酒、倒裳起謝

るに非ず、不レ能レ飲して常々に醒て酔ことなき者を云、【勿爲】を勿謂に作は誤也、

○歸二田園一 叙二東皐之勝槩一、終歸二於農桑之務一、本朋友之責レ善也、

本集二載レ之、歸二田園居一六首の終篇也、本集評韓子蒼曰田園六首末篇乃序二後役一、與二前五首一不レ類、今俗本乃取二江淹種レ苗在二東皐一爲二末篇一、東坡亦因二其誤一和レ之、陳述古本止有二五首一、予以爲皆非也、當下如二張相國本一題爲中雜詠六首上、江淹雜擬詩亦頗似レ之、但開レ徑望二三益一、此一句不レ類、東澗曰、但願桑麻成、蠶月得二紡績一、則與二陶公語一判然矣、

陶淵明

此詩淵明か眞作に非ず、文選三十一江文通雜體三十首の中、陶徵君詠二田居一詩也、其序云、夫楚謠漢風既非二一骨一、魏製晉造固亦二體、云云、今作二三十首詩一敎二其文體一、是江文通淵明の詩體に擬て作れる詩也、

種レ苗在二東皐一、苗生滿二阡陌一、雖レ有二荷レ鋤倦、濁-酒聊自適、日暮巾二柴車一 周禮有二巾車職一、巾猶レ衣也、 路暗光已夕、歸-人望二烟火一、稚子候二簷隙一、

【皐】韻會澤也、詩鶴鳴二九皐一、注九折澤也、【阡陌】韻會、阡陌田間道、○史記秦紀、孝公十二年爲二田開一阡陌一、索隱曰、風俗通曰、南北曰レ阡、東西曰レ陌、評林吳國倫曰、按阡陌田間之道、即周禮遂上之徑、溝上之畛、洫上之涂、澮上之道也、苗を種て東の皐の邊に在苗能生長して阡陌に滿盛なると也、滿阡陌は田畝に滿の意也、【雖有—】、鋤を荷て田間に出て耕作し勞倦することあれども濁酒を酌て一醉すれば自ら心に適て樂て勞を忘ると也、【日暮—】、巾注周禮春官、有二巾車職一、注巾猶レ衣也、○文選注翰曰、巾飾也、柴車鹿車也、○古文大全、巾結束也、巾は車の具をゆはへ結ひ蓋などをとゝのへかけるの意也、柴車は鹿車なりと注す、小き車也、田間の農器或は餉の具などを載る車也、又後漢書七十下趙壹傳云、壹獨柴車草屏、注柴車弊惡之車也、終日農作して日も暮に依て解おきたる車又結束して歸れば路も漸暗して日光已に夕に及ぶと也、【歸人—】、歸路の狀を言也、田間より邑の方へ歸り向て

を云んとて先づ大に天地より言ひ起す也、天若酒愛せられずは天に酒星はあるまじ、天に酒星有からは天も酒を愛せらるゝこと明也、又地に酒を嫌はゞ酒泉はあるまじ、既に酒泉を涌出すれば地も酒を好むと見たり、【注】方輿勝覽云、肅州古雍州域、漢武爲酒泉郡、後魏以酒泉爲軍、後以屬甘州、隋分甘州福祿縣置肅州、

天地既愛酒、愛酒不愧天、已聞清比聖、復道濁如賢、（酒之清爲聖人、濁爲賢人、）

天に酒星あり地に酒泉ある時は天地既に酒を愛せり、況人をや、人酒を愛し好むこと惡からず更に天にも不愧と也、鍾伯敬が評曰、不愧天三字用理語作嘲戲妙、【已聞―】、魏志、徐邈字景山、仕魏爲尚書郎、時禁酒、而邈私飲沈醉、趙達問以曹事、邈曰、中聖人、達白之、大祖怒、鮮于輔進曰、醉客謂酒清者爲聖人、濁者爲賢人、邈偶醉言耳、我嘗て已に聞ることとあり酒の清めるを聖人に比すと、復た道ふを聞けり濁たる酒は聖人の次にて賢人の如なりと、

聖賢既已飲、何必求神仙、三盃通大道、一斗合自然、但得醉中趣、勿爲醒者傳、

已に賢の如しと云ひ又聖に比すと云ほどの嘉名を得たる酒也、今其酒を飲て醉ときは其靈妙大に人に益あり、又何ぞ別に神仙の境を希ふべきやと也、此句上の句を受く、然るに正宗云、聖賢已飲酒、此說甚だ不通、聖賢にも比するほどの物を我已に飲めりと云意也、此酒人の放言なり、聖賢の人酒飲むと云ふには非ず、【三盃―】、酒飲ては神仙をも希ひ求めざる所以を云也、酒を飲むこと三盃に至ては大道の玄妙に通じ造り、一斗に及べば眞性の自然に契ひ合ふ、其妙人の不知處にて我獨心に悟れり、又言にのべがたし、但醉中の眞趣を自得して獨樂むべし、醒て不飲者の爲に其妙を傳へ語ることとなかるべし、なかなか醒者の所知には非ずと也、【酒中趣】、晉孟嘉爲征西將軍桓溫參軍、嘉好酣飲、愈多不亂、溫問、酒有何好而卿嗜之、嘉曰、公未得酒中趣耳、【醒者】は已に醉後醒

此六句一時の景を云、明月の輝亮清き影澄て冷か也、列宿の衆星明にて霽空に滿て參差と不齊、【參差】、星象の連絡遠近の多少不同を云也、【列宿】、瑯琊代醉卷一云、馬永卿曰、二十八宿韻略宿音綉非也、何以言之、二十八宿謂之二十八舍、又謂之二十八次、次者舍也、皆有止宿之意、今乃音綉此何理也、但欲異於俗不知害於義也、學者當以其字呼之、【秋蘭―】、文選注善曰、朱華芙蓉也、毛萇詩傳曰、冒猶覆也、秋蘭は長坂に鋪被りて多く花さきて香く朱華の芙蓉は綠水の池上を冒て盛に開てうるはしきと也、【潛魚―】、此二句は比喩也、潛魚好鳥は自比し、清波高樹は公子に比す、自ら公子の側に在て燕遊の娛にあづかる事を喩て云へる也、注【鋪叙】は見る所をありのまゝに文章にのぶる也、自得は景と情と相融和して心に適ふを云、

神飇接丹轂、輕輦隨風移、飄颻放志意、千秋長若斯、（此斯也）

【神飇】、暴風下よりして吹上る風を飇と云、風の疾きこと如神と云意にて神飇と云、【丹轂】は朱色に飾たる車を云也、神飇吹來て車に接する也、楊雄解嘲、客徒欲朱丹吾轂、【輦】、字彙力展切、人步挽車也、馬にかけず人にて挽を輦と云、輕輦など云輕字の意にて鮮に美なるを云也、隨風移は輕字より隨風と云也、【飄颻】は氣象のび揚る貌也、放は志意を放ち寛して娛の意也、【千秋】、文選注善曰、戰國策曰犀首爲張儀千秋之祝、○韻府云、鞦韆本作千秋字、漢宮祝壽辭、後人誤爾、千秋は祝語也、千秋までも久く常に如此樂をなして變ざらんと祝する也、

○獨酌

（謂人之飮酒、苟但得醉中意趣、勿爲醒者道也、）

本集二十三月下獨酌四首此詩第二首也、注本文に詳也、こゝに解に不及、

李太白

天若不愛酒、酒星不在天、地若不愛酒、地應無酒泉、（河西肅州爲酒泉郡、）

本注齊賢曰、晉天文志軒轅右角南三星曰酒旗、酒官之旗也、主享宴飮食、【酒泉】、漢武太初元年、開酒泉郡、師古曰、城下有金泉、泉味如酒、酒を嗜み玩べきこと

となからんや、故に盃を把て自酌で一醉し又自吟咏すると也【時易失】は前漢書列傳十五蒯通傳、夫功者難成而易敗、時者難値而易失、時乎時不再來、云云歡樂の中竊に感ずることあり、但歳は失やすし、春夏秋冬四時の序迭に相侵し、春は夏來て侵し奪ひ、夏は又秋に侵さる、光陰如此速に逝て失やすきことを悲むと也、【君子行】、文選二十七樂府上、有君子行曰、君子防未然、不處嫌疑間、瓜田不納履、李下不正冠、嫂叔不親授、長幼不比肩、○歳月逝やすし君子は勤て道を守嫌疑の地を避べきこと也、因て我君子行の詞を歌て古を視ること猶今の如くに思ふと也、注王逸少蘭亭記、後之視今、亦猶今之視昔、悲矣、古文眞寶後集見たり、石齋諺解云、後の世の人今日の蘭亭記を見こと今我が古文を見て感慨を興すが如くなるべしと也、○韓退之も蘭亭記の語を用られしと云證に此語を引也、

○公讌

文選二十載之、題注濟曰、公讌者臣下在公家侍讌也、此讌在鄴宮與兄丕讌飲、○【讌】は宴と同、公家酒宴に臣下の筵に侍るを公讌と云也、曹子建の兄丕魏の都鄴宮にて酒宴をなされし時の詩也、丕は後に即位文帝と云し人也、

曹子建

公子愛敬客、終宴不知疲、清夜遊西園、飛蓋相追隨、

【公子】は文帝を指て云、此詩作れる時は武帝在位なるに因て文帝未即位故に公子と稱する也、賓客を愛し敬て酒宴を終るまでも曾て疲れ倦ことを覺えられずと也、【清夜―】、清夜に當て西園の中に遊宴せらるればれき／＼の賓客美麗に飾りたてゝ光彩飛が如くなる蓋さしかざして公子に相追隨して遊べると也、

明月澄清影、列宿正參差、〔參〕初今反、〔差〕叉宜反、謂不齊也、秋蘭被長坂、朱華冒綠池、朱華荷花也、潛魚躍清波、好鳥鳴高枝、已上六句

鋪叙一時星月之輝花草之盛禽魚之樂、而有自得之適也、

也、婦人室に在て遠方の夫を思て不レ措の意を云へり、【不下堂】、後漢書列傳十六宋弘傳云、貧賤之交不レ可レ忘、糟糠之妻不レ下レ堂、【行子】、文選鮑明遠東門行、風吹ニ秋木ニ行子心腸斷、我が夫の遠く邊に赴たる者を指て行子と云、

○幽懷

韓文二載レ之、篇首の二字を取て即題に置たる也、杜詩此類多し、時を感し景を玩て因て幽懷を寫し出すゆゑに幽懷を題とする也、

韓退之

幽懷不レ可レ寫、行ニ此春江潯ー、音尋、適與ニ佳節ー會、士女競ニ光陰ー、見ニ士女之嬉遊ー、

【幽懷―】、寫傾也、除也、盡也、幽鬱の懷抱傾け寫て除べきなきに因て少これを慰せん爲に此春江の潯に出て行吟する也、【適會―】、適ゝ佳時節に行會て遊士兒女の輩も美景を愛して春時の光陰を競て遊覽するを見と也、

凝粧耀ニ洲渚ー、繁吹蕩ニ人心ー、吹去聲、間關林中鳥、知レ時爲ニ和音ー、見ニ音樂之繁禽鳥之鳴ー、

四句當時所レ見景を云、【凝粧】は脂粉を厚く施し頭飾なども美を盡を云、遊覽の兒女粧の艶麗なること洲渚を照し耀すと也、【繁吹】、吹は去聲、ふきものと訓ず、笙笛の聲を云、遊人の音樂を奏る聲處々に繁多にて人の心を動し蕩す也、【間關】、詩經小雅車舝篇、間關車之舝兮、注間關設レ舝聲也、○後漢書列傳六十荀彧傳、論曰間關以從ニ曹氏ー、注間關猶ニ展轉ー也、鳥の囀り滑かに展轉しよく聲のあやをなすを間關と云也、鳥も自ら芳春の時節を知て柔和の好音をなしてさへづる也、

豈無ニ一樽酒ー、自酌還自吟、但悲時易レ失、四序迭相侵、但悲ニ四序迭相更代而光陰易レ失、我歌ニ君子行ー、古樂府有ニ君子行ー、視レ古猶レ視レ今、蘭亭記、後之視レ今猶ニ今之視レ昔、

此春和の時節に會て豈一樽の酒を持して飲樂するこ

韓文四載之、題注云、或折爲三章、章四句樊曰、文選古樂府飲馬長城窟行有青々河畔草長歌行有青々園中葵、其大意與此相類、孫曰、當是婦人思夫之意、古詩の體に效て首の一句を以て題とする也、婦人夫を思て蒲を以興を起し作れる詩也、【注】【征夫】、邊塞の戍に軍だちして征たる夫也、【幽宮】、宮字恐は居の字なるべきか、【閨房】は婦人の居所也、【風人之體】、詩經國風詩人詩を作て性情の正を以てするの體を得たると也、

韓退之

青々水中蒲、下有一雙魚、君今上隴去、我在與誰居、

水邊を見れば青々とみごとなる蒲あり、其下に一雙の魚あり、これを見に因て興を起して謂らく、魚すら相雙ぶの樂みあり況や人をや、然るに我が夫君は今遠く邊塞の戍に赴て隴に上り去たり、我獨空房に在てたれと與にか同居て相歡んやと云意也、【隴】、正宗云、今陝西路寵州等處有隴山、在汧陽縣西六十里、戍者必經此、戍者歌曰、隴連流水、鳴聲幽咽、遙望秦川、肝腸斷絶、○韓文注曰、上隴謂戍邊、

青々水中蒲、長在水中居、寄語浮萍草、相隨我不如、

青々たる水中の蒲を見れば長く水中に在て根ざし居て外に移ることゝなし、因て思ふ我常に幽閨に居て夫に外に從ひ不得又水中の蒲と等し、只水の浮萍は風に任せて轉移し無常居、因て浮萍に語を寄て言ふ、汝去留自由にして風に從ふ、我家に在て夫に從て行くことを不得、我汝に不如なり、【萍】字彙、音平、浮生水上、隨風漂流、

青々水中蒲、葉短不出水、婦人不下堂、行子在萬里、

青々たる水中の蒲を見れば葉短して水中に在て外へ顯れ不出、因て思ふ婦人も亦常に閨房を守て堂を下て外に不出、然るに我夫は遠く萬里の外に在て露霜に侵れて塞を戍り安し處ることもなく苦むべきと

し、山已に空く大木の材なければ野鄙なる草花の紅なるのみ也、如此云ふは朝廷に大將宰相ともなるべき人才なくして國已に空虛となりて唯小人のみあると云意を託して云たると看べしと也、

捐レ世不レ待レ老、惠レ妾無二其終一、一死尙可レ忍、百歲何當レ窮、忍レ死尙可、即レ死實難也、

【捐世】は史記范雎傳捐二館舍一と云意の如し、捐世は即死也、死することと老を不待して早く終たると也、南豐卒年六十五也、不レ待レ老して死せるに非ず、但死を悼み人を慕ふ心から如此云へるにや、【惠妾―】、我を愛惠せらるゝことと中道にして絕え偕老の終を見ことと無と也、【一死―】、死は實に哀し、然ども一たび死て後憂患の情なし、如此は尙忍て耐ぬべし、主を先たてゝ身未レ亡、此世に存へ生涯百歲の間追想の悲を懷く其愁何ぞ窮あらんや、死して思ひなきは尙まさるべしと云意也、注【即レ死實難】、即字或は誤ならんか、本文の意と相違す、本文は存レ世實難の意也、

天地豈不レ寬、妾身自不レ容、死者如有レ知、殺レ身以相從、此六句思慕深、恨レ不三殺レ身以相二從於地下一也、向來歌舞地、夜雨鳴二寒蛩一、爾雅蟋蟀曰レ蛩、詩意謂歌舞最爲レ樂處、今聞二蛩聲一則慘悽矣、此人事之變也、結句有レ味、

天地の間豈に寬廣ならざらんや、只妾が一身憑を失て依るところなくて身を容るべきやうなきと也、跼天蹐地の意也、【死者―】、死し去の人若知識あらば我が身を殺て幽冥に往ても相從て事ふべきにと也、注一死尙の句より以下六句は死去の人を思ひ慕ふ情深の餘りに身を殺て同く死て地下に相從ふとのなりがたきを恨たると也、【向來】、向は嚮字と同じ、まへかたと云義也、歌舞をなして樂し處も主人なくして管絃の聲絕え夜雨の中に寒蛩の鳴聲のみ有と也、此れ舊日從レ師道を講じ文を論たる處、只今無レ人して夜雨蟲聲の悲を添るのみあるを云へり、注【悽慘】、字彙、悽音妻、悲痛也、慘音參、愁也痛也、結句には人事盛衰の變を云て傷レ古變レ時の味あると也、

〇靑靑水中蒲、此詩託レ物比興、謂征夫出戍、其妻幽宮閨房如三蒲在二水中一、第一章謂二夫君之出一、第二章謂レ不レ得二相隨一、末章勉二君子以レ正、得二風人之體一、

他人の下に從て學を求るに忍んやと云意也、【有聲―】、我先主を哀の聲は當に天にも徹すべし、哭泣する涙は泉下にも徹し透るべし、【死者―】、主を追慕するの情如此なりと云へども恐は死亡する者はもの知こと無して此忱を知まじきか、只妾が身は先主遺愛の身なればいつまでも長自憐て節を守て身を終んと也、此れ言は但守道終身まで常に自憫惜して人の己を知んことを不求と也、注【長】字是決辭、長と云は志を立て竟に變ずまじきと云決斷の辭也、長恨歌に天長地久有時盡、此恨緜々無絶期、と云緜々の字と此結句の長字同意也、【疊山謂―】、此后山が詩は杜子美とも肩を比るほどの詩也、絶妙の句法結末の妾身長自憐と云一句に在れども世人此處を識不得也、【少陵】、杜子美也、【比肩】、二字出晉書殷仲湛傳、○文心雕龍十才略篇、傅毅崔駰光采比肩、

又

葉落風不起、山空花自紅、山中有松栢杞梓楩

楠豫章之林、則可以爲棟梁之用、山已空矣、惟有野花自紅、朝廷無將相之才、而國已空虛矣、

謝疊山の曰、如李白詩雨落不上天、覆水難重收、此意謂、人才凋落如秋風掃敗葉、葉已墜地、雖有風不能吹之上樹矣、此言人之亡、此說に依ときは木葉一たび地に落ては風吹と云へども又舊の枝に吹上することを不得此れ人死て再び生ざると同を云、此時は風ふきをこさずと讀べし、輔按に風をこらずと讀べし、山に喬木あれば必風聲の震ひ動あり風聲を以て文章の聲譽と作て看べし、山谷が東坡の名聲盛なることを云に、青松出澗壑、十里聞風聲、と云へり、后山山谷は同朝の人語を以て證とするに不足と云へども其意は自ら相由べし、葉落と云時は高樹凋零して根に歸すること可知、此二字既に人の死を云べし、文章喬木あれば必風聲萬壑に振て遠く聞ゆ、今喬木既に凋零して風聲を著るに處なし、故に風聲起ることなく山空して寂々たり、唯滿蹊花の自ら紅なるのみ有と云意、此れ謂は南豐死して名世の人才凋落し文章の聲譽復繼く人なし、只區々の庸輩のみ世に多きと云意也、注【杞】、音起、柳屬、【梓】、音子、木之王也、【楩】、杞也、似梓、【楠】、音男、石楠、○史記司馬相如傳、楩柟豫章注郭璞曰、【豫章】、大木也、生七年乃可知也、山に大木あれば取用て屋を造るに棟梁の材料とすべ

人多き中に我が一身の恩寵は三千の宮女に當て我と均くならぶ者はなかりし也、注長恨歌十四卷に見たり、

古來妾薄命、事主不盡年、（傷南豐之早亡也、）

古より佳人命の薄を傷むこと多し我も亦命薄して主君に事ること天年を不盡して中道にて捐られたると也、弟子の師につかふるは妾の主に事るが如し、此れ南豐の我を捐て早く逝去ことを傷む也、注【南豐】、宋史列傳七十四、曾鞏字子固、建昌南豐人、生而警敏、讀書數百言、脫口輒誦、年十二試作六論、援筆而成辭甚偉、甫冠歐陽修見而奇之、嘉祐二年進士第調太平州司法參軍、後判三班院、拜中書舍人、時自三省至百執事、選授一新、除書日至十數、訓辭典約鞏之能也、數月丁母艱去、又數年卒、年六十五、○世稱南豐先生、

起舞爲主壽、相送南陽阡、（漢原涉塚署曰南陽阡、）忍著主衣裳、爲人作春妍、有聲當徹天、有淚當徹泉、死者恐無知、妾身長自憐、（長字是決辭、疊山謂、此山詩可與少陵比肩、其絶妙句法在結末、人多不識此、）

起て舞て主の爲に壽をなし祝せんとすれば主はや死亡て南陽の阡に送て葬畢れり、【南陽阡】は葬所を指て云、此に鳥部山化野などゝ云類也、前漢書卷九十二游俠傳、原涉字巨先、祖父武帝時以豪桀自陽翟徙茂陵、涉父哀帝時爲南陽太守、天下般富、大郡二千石死官、賦歛送葬皆千萬以上、妻子通共受之、以定產業、時又少行三年喪者、及涉父死、讓還南陽賻送、行喪冢廬三年、繇是顯名京師、云云涉自以爲、前讓南陽賻送身得其名、而令先人墳墓儉約非孝也、廼大治起冢舍周閣重門、初武帝時京兆尹曹氏葬茂陵、民謂其道爲京兆仟、涉慕之、廼買地開道立表署曰南陽仟、人不肯從、謂之原氏仟、原涉我が父の墓に道を通じ開て道に表を立て南陽阡と云額を掛たる也、【署】とは額を掛るを云、【忍著—】、我を悅ぶの主既に死去ときは爲に容づくりする人なし豈に舊主人の賜たる衣裳を著て又他人の爲に春妍の美粧をなして媚び事へるに忍んやと也、南豐に受る所の學を將て又

凡そ物の道理は一槩に詰り責がたきこと也、萬事變易皆是時也、時至り來れば其値遇する所に即て推し徙る、貴賤初より不定、鼠は本一物也、其經に何以穿我墉と云は其品何ぞ卑微なること甚しきや、然れども時あつて兎毫に雜て筆となされ此に托て文房に陳ることを得て人に賞玩せられて佳美の名譽を得たると也、注詩相鼠篇に此句不見、召南行露篇、誰謂鼠無牙、何以穿我墉、

○妾薄命二首　謝疊山謂有國風法度、

后山詩集第一卷首載之、自注云、爲曾南豐作、○正宗云、陳后山師於曾南豐、曾歿不忍遂倍之、故作此詩以見志、【妾薄命】、前漢書九十七外戚傳第六十七、孝成帝許皇后傳曰、奈何妾薄命、端遇竟寧前云云妾薄命の字此詩に見えたり、是より後妾薄命の三字を以て題として詩の一體とす、魏の曹子建妾薄命六言の詩あり唐の詩人に至ては妾薄命の詩多し其詩皆婦人君に得られずして命の薄を悲むの意を云也、注【謝疊山】、大明一統志云、謝枋得弋陽人、號爲疊山、爲人豪爽以忠義自奮、寶祐中試經科、除教授、德祐初以江西招諭使知信州、遣將與元兵戰不利、乃變姓名入建寧山中、元初大臣屢薦、輙辭、有怒者逼以北行、至元都問謝大后攢所及瀛國公所在、再拜慟哭不食而死、

陳無已

言行錄後集十四云、陳師道無已一字履常、以侍從合薦爲徐州教授、官至秘書正字、無已苦節厲志、自其少時蚤以文謁南豐曾舍人、曾一見奇之、許其必以文著、時人未之知也、在潁賦六一堂詩、有向來一瓣香敬爲曾南豐之句、師道は號を后山と云、文は曾南豐を師とし詩は黃山谷を宗とせり、東坡とも知音也、宋朝にて名譽の詩人也、

主家十二樓、一身當三千、　長恨歌後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身、

正宗云、言出曾門者雖多、若見知則后山一人而已、【主家】は君が家と云意也、【十二樓】は后宮の多を云也、史記武帝紀云、方士有言、黃帝時爲五城十二樓以俟神人於執期、命曰迎年、主家の后宮十二樓の美

大理、建元四年復爲廷尉、○後漢書二十五百官志、廷尉卿一人中二千石、本注曰、掌平獄奏當所應、凡郡國讞疑皆處當以報、注【秦李斯―】、吏説文吏治人者也、漢書注師古曰、吏理也、理其縣內、郡吏郡守の下につきたる小役人也、【吏舍】は郡吏の所居の役所也、【譬如鼠矣】、人賢にして富貴に處は大倉の鼠の如し、不肖にして貧賤に處は厠中の鼠の如し、賢不肖に依りて富貴貧賤の喜憂あれば人々賢者となるべきことと也と歎じられし也、【漢廷尉張湯】、前漢書列傳二十九、張湯杜陵人也、父爲長安丞、出湯爲兒守舍、還鼠盜肉、父怒笞湯、湯掘熏得鼠及餘肉、劾鼠掠治、傳爰書訊鞫論報、幷取鼠與肉具獄磔堂下、父見之視文辭如老獄吏、大驚遂使書獄、父死後湯爲長安吏、歷大中大夫爲廷尉、長安丞杜氏通典云、丞漢諸縣皆有、兼主刑獄囚徒、【爲守舍】、留守をしたる也、笞湯留守して在ながら肉を鼠に盜れたるに因て父怒て湯を笞つ也、【劾】音害、推窮罪人也、人の罪過を推窮てせんさくするを云、掠治罪の輕重を定て刑法に當てさばくを云、【具獄】、罪の條目を一々あげて輕重を批判し其品に依て刑法に行ふと云公事のさばきを書記して罪人に云つくるを云、其文辭具獄の文に罪を判斷したる辭也、【老獄吏】、老は年老たるばかりを云に非ず、公事になれたる功者の獄吏の判斷したる文の如くなると云意也、

磔肉餧饑猫、〔磔〕音桀、〔餧〕音威、**分髯雜霜兎、**髯頰鬚也、**挿架刀槊健、**槊音朔、**落紙龍蛇驚、**

【磔】、字彙裂也、裂牲謂之磔、又張也剔也、漢志、諸死刑皆磔於市、さくと訓じ又はりつけと訓ず、張湯が傳の磔と云ははりつけ也、此句にては裂牲の注を用てさくと讀べし、肉は裂て饑たる猫に與へ餧て髯を分ち取て霜色の如き白兎の毛に雜て筆と製し爲す也、【挿架―】、此一聯筆の體用を云、【槊】ほこと訓ず、字彙、矛屬、筆架に挿めは其形刀槊の如く尖にて健也これを用て字を寫すを落紙と云、筆力勁健にて字勢龍蛇の驚き鶩るが如なると也、下の句は筆の用を云也、

物理未易詰、音泣、**時來即所遇、穿墉何卑微、**詩相鼠、毋穿我墉、**託此得佳譽、**

○鼠鬚筆 曹公類說云、筆工取鼠鬚製筆、終不如兎毫之耐

鼠の鬚を以て製したる筆を咏する也、何延之蘭亭記に、王義之が蘭亭記を書するに蠶繭紙鼠鬚筆を用と云へば鼠鬚筆の製は義之の造れるか、注【曹公】、名字未考、耐は久く用ても禿せざるを云、

蘇叔黨

萬姓統譜、蘇過字叔黨、軾子軾謫英廉永州獨過隨侍、凡生理晝夜寒暑所須一身百爲不知其難、嘗爲文曰志隱、軾覽之曰、吾可以安於島夷矣、歷官郾城令通判中山府皆有政績、

大倉失陳紅、狡穴得餘腐、 漢書太倉之粟陳々相因紅腐而不可食、

既興丞相歎、 秦丞相李斯少時爲郡吏、見吏舍廁中鼠食不潔、近人犬數驚恐、觀倉中鼠食積粟不見人犬之憂、歎曰、人之賢不肖譬如鼠矣、在所自處耳、

又發廷尉怒、 漢廷尉張湯其父爲長安丞出外、湯爲守舍而鼠盜肉、其父還怒乃笞湯、湯掘遂得盜鼠及餘肉、劾鼠掠治、并取鼠與肉、具獄磔堂下、其父視其文辭如老獄吏大驚異之、

【大倉―】、此四句先づ故事を用て鼠を咏ずる也、第三句起句に應じ、第四句は二の句に應ず、是扇對の格也、【陳紅】、食貨志の字を截取て粟の異名に用る也、狡は說文小狗也、言は嘗て大倉の中にて粟米を食て耗失し又小狗の穴を掘て中に於て餘の腐肉を得たることもありし也、此其事を言て體を言ひ不出、是咏物の法也、注【陳々】、多列る貌也、【相因】はいやがうへにかさなるを云、紅腐は米の色紅に變じ腐て食れざるを云也、前漢書二十四食貨志上云、武帝之初七十年間國家亡事、非遇水旱則民人給家足、都鄙廩庾盡滿而府庫餘財、京師之錢累百巨萬、貫朽而不可校、大倉之粟陳々相因露積於外、腐散不可食、【既興丞―】、大倉の粟を食に因て既に丞相賢不肖の歎を引興し狡穴に餘肉をかくしたるに因て又廷尉の怒を發して刑を受たると也、李斯鼠を嘆じ張湯鼠を劾するは皆弱年の時也、此に丞相廷尉と二人ともに晩年の官を云は後世より追て云ふ、故に官號を稱する也、【丞相】、第一卷王荊公勸學の注見たり、【廷尉】、文獻通考五十六云、大理者舜攝帝位、皐繇作士、正五刑、周秋官之任、秦爲廷尉、漢因之、掌刑辟、凡獄必質之、朝廷與衆共之之義也、兵獄同制故曰廷尉、景帝中元六年更名

兩反、

白日掩柴扉、扉門也、以柴爲門、虛室絕塵想、莊子虛室生白、吉祥止止、

野外の居なれば世間の人事も罕也深き巷の中なるに因人の往來も稀にして車馬の至ること寡く喧しからぬと也、【輪】注車の輪也、【鞅】注馬索、字彙音鴦、上聲、馬駕具在腹曰鞅、馬のはるび也、輪鞅は即ち車馬を云也、【白日一】、本集柴荊に作、白日は晴晝を云、人事も罕に車馬の至ることもなきに因て晝と云へども柴の扉を掩ひ閉ておく也、【扉】注門也、字彙、戶扇以木曰扉也、【虛室】は心を指て云、虛靈の神所舍なるゆゑ心を虛室と云也、心に世間塵欲の妄想絕て有ことなきと也、境靜にて心愈々靜なるの意を云へり、注莊子人間世篇、瞻彼闋者虛室生白、吉祥止止、夫且不止、是之謂坐馳、希逸注曰、此以虛室喩心也、謂視彼密室之中纔有空缺處必有光入來、是光自空中出也、以彼之闋喩我之虛、則見虛中自然生明、生白即生明也、不曰生明而曰生白、此莊子之奇文也、即虛明之地便是萬物之所由萃、吉祥福也、止於其所止、下止字是虛處也、

時復墟曲中、披草共來往、相見無雜言、但道桑麻長、桑麻日已長、我土日已廣、常恐雪霰至、零落同草莽、雪霰之摧折則桑麻之長安保、其不零落於草莽乎、

【墟】、風俗通十云、傳曰郭氏之墟、墟者虛也、郭氏吉之諸侯敗爲丘墟也、今故廬居處高下者亦名爲墟、【曲】字彙鄉里曰鄉曲、墟曲中は鄉村の中と云義也、草徑を披き分けて村廬に往來する也、【相見一】、農家淳朴にて相見すと云へども寒溫起居を問候する類の雜言をなさず但桑麻の生長を云ふ農談のみ也、【桑麻日一】、桑麻日々長茂し我が田土も草を刈荒を闢て日々廣くなれり草木は長茂し田地廣まるは農家の樂み也、【常恐一】、本集雪作霜、【草奔】、韻會草深貌、○左傳哀公元年、暴骨如莽、杜預注云、草生廣野莽々然、故曰草莽、常に恐る冬時雪霰の寒令至て桑麻も枯凋て零落し草莽の曠野と同くなりて此榮茂の景空ならんことをと也、

の蔕有て枝につく如く着實なるに非ず飄零して常なきを譬は市中の陌上に塵埃の起るが如し、分散すること風に從て吹く方を逐て轉展し定り止むことなければ此れ已に常住底の身には非也、【陌】字彙曰、市中街、注【蔕】、字彙、遞各切、花下柎也、【寄迹】とは我身を寄寓しておくと云意也、郵亭傳舍字彙云、【郵】音由、境上行書舍、【亭】、道路所舍、行旅宿會之所館、【傳】、音轉、去聲、驛遞也、車駕謂之傳、馬乘謂之驛、釋名傳傳也、人所止息而去後人復來、轉相傳無常主也、【舍】、市居曰舍、三十五里爲一舍、

落地爲兄弟、何必骨肉親、（語云、四海之内皆兄弟也、大抵交遊皆兄弟、又何必論其至親也、）得歡當作樂、斗酒聚比鄰、（比音皮、連居、）盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人、（人生行樂、恐歲月已去不長少年也、）

【落地】は生れ出ればと云意也、人は天地を父母として生るれば四海の人本皆兄弟也、何ぞ必骨肉を分ちたる親のみを兄弟と云べきやと也、【骨肉親】、禮記文王世子篇云、骨肉之親、注〔語〕顏淵篇子夏曰、君子敬而無失、與人恭而有禮、四海之内皆兄弟也、君子何患乎無兄弟也、【大抵】、史記莊子傳、索隱曰大抵猶言大略也、【得歡當―】、親疎をえらまず交情の歡びをさへ得たらば相與に樂をなすべきこと也、故に一斗の酒を置ては屋ならびの近鄰を召び聚て飮燕をなして樂む也、【盛年―】、人生常なく時又うつり易し、人の齒盛なるも老ては重て盛を得がたし、一日の間漸く暮に及では再び晨に引返すことなり難し、樂をなすこと時に及では徒らに迭り過さず當に勉勵すべきこと也、何となれば歲月は移り易して人の後るを待て共に往くに非ず、止管に流轉して早く人を老ひしむるぞと也、

○歸田園居

本集二載之、歸田園居詩六首、此其第二也、

陶淵明

野外罕人事、深巷寡輪鞅、（輪車輪、鞅馬索、〔鞅〕倚

日のころ漢の方を思ては歸たき心絶へるばかり甚也【絶】は甚だ切なる意也、斷絶して忘るには非ず、【月窟】、文選楊子雲長楊賦、西壓月窟、東震日域、注良曰、月窟月出穴也、在西、日域日出處、在東、○楊升菴丹鉛總錄云、楊子雲長楊賦、西壓月䶂、古窟字東震日域、服虔注、以爲月所生、恐非、李太白詩、天馬來出月氏窟、月窟即指月氏之國、日域指日逐單于也、蓋借日月字以形容威服四夷之遠耳、太白妙得其解矣、月氏一作氏、又作月支、注【幽】は囚也、【大窖】、漢書注師古曰、舊米粟之窖而空者也、【窖】は五穀を藏るあなぐら也、【旃毛】、前漢書王吉傳、細旃之上、註與氈同、雪にて氈の毛を濕して齧み毛と共に咽みたると也、

東還沙塞遠、北愴河梁別、愴音創、泣把李陵衣、相看淚成血 李陵別蘇武詩、有攜手上河梁、及不覺淚沾裳之句、

【沙塞】は沙漠の邊塞也、東の方漢に還れば沙漠の邊塞を歷て道路悠遠也【河梁】は李陵に別れたる所也、李陵が詩文選二十九に見へたり、蘇武別を愴て李陵が衣を把て互に相視て淚を流し哀極て血淚と成りたると也、李陵與蘇武詩三首、其三曰、攜手上河梁、游子暮何之、徘徊蹊路側、悢々不能辭、行人難久留、各言長相思、安知非日月、弦望自有時、努力崇明德、皓首以爲期、蘇武が與李陵詩文選に不見、李蘇が本傳並に不載、蒙求上載、武別陵詩曰、雙鳧俱北飛、一鳧獨南翔、子當留斯館、我當歸故鄉、一別如秦胡、會見何渠央、愴恨切中懷、不覺淚霑裳、願子長努力、言笑莫相忘、

○雜詩

陶淵明

本集四雜詩十二首之第一也、淵明年五十の作也、

人世無根蔕、根者本也、蔕者花之蕚也、飄如陌上塵、分散逐風轉、塵隨風而起、此已非常身、謂人生寄迹於天地間、如郵亭傳舍靡有常也、

根は土中にある木の本也、蔕は花の枝につく所ちくぎはの座を指て云也、人の生涯は木の土に根ざし花

傳一書札、（匈奴詭言武死、後漢使復至、常惠教使者爲單于言、天子射上林中得雁足有繫帛書、言武在某澤中、使者如惠言以讓單于、單于驚謝曰、武等實在、）

全篇本傳の事跡を撫てありのまゝに言ひ陳たる詩也、【匈奴】、大明一統志云、夏曰獯鬻、殷曰鬼方、周曰玁狁、秦漢曰匈奴、唐曰突厥、宋曰契丹、今曰韃靼、〔注〕【單于】、史記卷百十匈奴傳曰、匈奴單于曰頭曼、注單于廣大貌、詳に第一卷王昭君の詩注に見へたり、【節】後漢書光武紀云、十月持節北度河、注節所以爲信也、以竹爲之、柄長八尺、以旄牛尾爲其旄三重、〇蘇武天漢元年匈奴に使し始元六年に漢に歸る、其間十九年也、此に十年と云は成數を擧て云也、〔注〕漢使の信に持たる節を執て不放、杖につきて羊を牧て臥にも起にも操持たるに因て節の旄が落盡て節の竹ばかりに成たると也、【白雁】、此句は本傳と相違也、武が實に雁書を贈たるとなして見べし、白雁が漢の上林の方へと飛去に空く一書札を傳へ寄たると也、〔注〕昭帝の時匈奴と和親して武等を請ひ求られしを匈奴詭て武は既に死と云て不返、其後漢の使又匈奴に至るとき初め蘇武が吏と爲て與に使となりたる常惠と云者潛に漢使に逢て敎て言ふは頃天子上林の御苑にて雁を射させられしが其雁足に帛に書たる書翰が繫て有しを御覽あれば武が在所某處と云ことを言し送たると云へと敎ゆ、使者其言如く言匈奴が詭ことを詰たれば單于驚て蘇武を漢に還したる也、【常惠】、前漢書列傳四十、常惠大原人也、少時家貧、自奮應募、隨栘中監蘇武使匈奴、幷見拘留十餘年、昭帝時廼還、漢嘉其勤勞、拜爲光祿大夫、【上林】、三輔黃圖四云、漢上林苑卽秦之舊苑也、漢書云、武帝建元三年開上林苑、周袤三百里、離宮七十所、皆容千乘萬騎、苑中養百獸、天子秋冬射獵取之、

牧羊邊地苦、落日歸心絕、渴飮月窟水、飢餐天上雪、（匈奴幽武置大窖中、絕不飮食、天雨雪、武臥齧雪與旃毛幷咽之、）

此二三聯武が事迹顚倒す、本傳に依らば渴飮の一聯は牧羊の前に有べきことと也、白雁の一聯は東還の前に有べし、【牧羊】は武を北海に徙して牡羊を牧せて此牡が子を産みたらば漢に還すべきぞと云し也、落

て自妙なるべし、何にがなことよせて酒を飲んと思へるは李白の意也、睡起偶、鶯の鳴を聽く因て漫爾感慨を興してそれを酒資として又酒に對して自ら傾て飲也是乃李白飄逸の處也、還自傾は巳に醉臥し起て又飲む故還自と云也、【浩歌】、楚辭九歌、臨風怳兮浩歌、聲をはりて高く歌ふ也、巳に醒て又醉て浩歌して明月の出るを待醉歌の曲終て歌ひ罷たれば嚮の人世夢幻の感慨春風鶯語の歎息凡そ我が情に關者總て忘却して胸中一物もなし陶然として唯樂むのみ也、

○蘇武

前漢書列傳二十四云、武字少卿、少以父任兄弟並爲郎、稍遷至栘中廐監、天漢元年武帝遣武以中郎將使持節送匈奴使留在漢者、武與副中郎將張勝及假吏常惠等、募士斥候百餘人俱、既至匈奴、置幣遺單于、會緱王與長水虞常等謀反匈奴中、云云單于怒召諸貴人議欲殺漢使者、左伊秩訾曰、宜皆降之、單于使衞律召武受辭、武謂惠等、屈節辱命雖生何面目以歸漢、引佩刀自刺、單于壯其節、愈益欲降之、廼幽武置大窖中絕不飲食、天雨雪、武臥齧雪與旃毛幷咽之、數日不死、匈奴以爲神乃徙武北海上無人處使牧羝、羝乳乃得歸、武既至海上廩食不至、掘野鼠去屮實而食之、杖漢節牧羊、臥起操持節旄盡落、後李陵至北海上語武曰、上崩、武聞之南鄉號哭歐血、旦夕臨數月、昭帝即位數年匈奴與漢和親、漢求武等、匈奴詭言、武死、後漢使復至匈奴、常惠請其守者與俱得夜見漢使具自陳道、敎使者謂單于言、天子射上林中得雁、足有係帛書言、武等在某澤中、使者大喜、如惠語以讓單于、單于視左右而驚謝漢使曰、武等實在、於是李陵置酒賀武曰、云云陵泣下數行、因與武決、凡隨武還者九人、武以始元六年春至京師、拜爲典屬國、秩中二千石賜錢二百萬公田二頃宅一區、武留匈奴凡十九歲、始以彊壯出及還須髮盡白、武年八十餘神爵二年病卒、○此詩本集二十二載之、

李太白

蘇武在匈奴、（武使匈奴、單于欲降之）十年持漢節、（杖漢節牧羊、臥起操持而節旄落盡、）白雁上林飛、空

本集二十三載之、春日酒に醉ての後我が所志を詩に言のぶる也、

李太白

處世若大夢、百年在世渾如一夢、胡爲勞其生、莊勞我以生、所以終日醉、頽然臥前楹、醉而臥所以樂天眞、此四句有靜意處、

人の生涯世に處する間を觀ずれば一場の大夢をみる間の如く甚短き也、莊子曰、且有大覺而後知此大夢、注【百年】年數を云に非ず人の一生涯と云意也、人壽大抵百歳を常とする故に人の一生の間を百年と云也言は人一生の間世に在は渾て一夢の間ほど短きと云意、【胡爲—】詩邶風式微篇、微君之躬胡爲乎泥中、一夢間の如く短き世に處ながら胡んぞ我が生涯を勞して自苦むことをせんやと也、注莊子大宗師篇曰、夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死、【所以—】、上の二句を承く人間の命は夢幻の如なればば猥りに利を營て勞すまじきこと也、このゆゑに我も世間の事にかまはず終日酒に醉てくずれる如く醉たをれて前楹のもとに臥と也、【頽然】世說新語、嵇叔夜巖々若孤松之獨秀、其醉也忽若玉山之將頽、【楹】、柱也、注【樂天眞】自然の眞趣を樂也、

覺來眄庭前、一鳥花間鳴、借問如何時、春風語流鶯、春風流鶯正當其時、此四句有動意、

陶淵明歸去來辭、眄庭柯以怡顏、沈約詩、流鶯復滿林、【覺來—】、醉臥して一睡し覺たるに因て起て庭前を見ればをりふし一鳥が花の間に鳴いたると也、【借問—】、本集如何時を作此何時、何時とは時候を問に非ず、杜子美の數問夜如何の句と同意にて日の早晩何の時刻ぞと云意也、睡起なれば日の早晩も不覺ゆゑに花間に鳴く鳥に何の時ぞと問かけたれば春風のどやかに吹裏に花間をこづたふ流鶯が時答へがほに囀り語ると也、

感之欲歎息、對酒還自傾、浩歌待明月、曲盡已忘情、動靜俱忘、

【感之】は鶯語聲滑にて日も漸晩景に及ぶ因て春の暮ゆくを感じて欲歎息か、按に所感何事とさゝずし

花下一壺酒、獨酌無相親、擧盃邀明月、對影成三人、

本集花下作花間、凌亂作零亂、【花下―】、花の下に於て一壺の酒を設たれども只獨酌て相親むて俱に飮む友人も無と也、【擧盃―】、酒を一盃うけて天上の明月を邀へて淸輝をうけたれば盃中にも我が影うつり地上にも我が影うつる盃を擧たる我が身を併せて忽三人となりたると也、寂寞無興奈何ともし難き中より此佳境佳趣を想ひ出して實に三人の數となしたるは誠に奇妙也、

月既不解飮、影徒隨我身、暫伴月將影、行樂須及春、古詩爲樂當及時、

【不解】とは不知と云意也、天上に月は明なれども既に酒を飮ことを知者に非ず影も亦酒を飮て我が敵手となる者にてもなし徒らに我身に從ふばかり也、是月と影とを嘲るに似て實は喜ことの甚也、【暫伴―】、月も飮を不解影も酒を飮ざれども暫く明月と我影とに伴て行樂すること此春夜の時に及で空く良辰に背くまじきと也、【將】は與也、【及時】は佳時に不背して遊樂するを云、注古詩十九首の詩也、已に前に出、

我歌月徘徊、我舞影凌亂、醒時同交歡、謂我與月對影歌舞、醉後各分散、醉眠則我與月影分散矣、永結無情遊、相期邈雲漢、

我盃を擧て歌へば手中の盃微く動に因て盃に移たる月ゆら〳〵と漾ふ故に月徘徊と云、我起て舞へば影も亦凌亂とみだれて靜ならざる也、【徘徊】、韻會徘徊不進貌、○前漢書息夫躬傳、鷹隼橫厲鸞徘徊兮、注徘徊謂不得其所也、【醒時―】は未醉時也、獨酌て尙未醉間は月と影と同く交々歡をなして歌舞すれども大に醉て杯も盡き我も臥して眠ときは盃中の月は天上に還り身に從し影も不見各分散する也、【交歡】、前漢陸賈傳云、君何不交歡大尉、【永結―】明月人影を友として酒を飮む明月無情して飮を解せざれども我與之永く無情の遊を結て邈とはるかなる雲漢に向て相約期して飮酒の伴侶と契る也、

○春日醉起言志、

只凡俗の士輩は何とも醫治しがたく變じ易ふべきやう無きと也、附る藥がなきと云諺と同し、

傍人笑此言、似高還似癡、若對世間此君仍大嚼、世那有楊州鶴、

曹子建與吳季重書曰、過屠門而大嚼豈不快意、

昔有客相從各言所思、或願爲楊州刺史、或願多貲財、或願騎鶴上昇、其一人曰、腰纏十萬貫騎鶴上楊州、蓋欲兼三人之所欲也、

【傍人―】、此言は上の六句を指て云、東坡の詩僧の居所を言ふ作なる故に曰肉は不食とも竹はうへでは不叶ことなりと思て軒前に竹を栽られたると云へり、傍人の笑ひやうは此言高尙なるに似て還て愚癡なり、謂れざる出家の僧となりて肉竹の論をせんよりは世間に居て肉をも食ひ又竹をも栽て樂まば二つともに倂て好かるべきにと僧を嘲り笑也、此下の二句嘲を解の辭也、【若對―】、此君は竹の異名也、謂く傍人の嘲り宜也、されども世の中には二つ好ことは必なき者也、二つ好ことなきからは勝れたる者を擇で取たるがよき也、若竹に對して又肉を大嚼するやうに好きことばかりあらば世間に何ぞ楊州の鶴の如くなる願あらんや、願は滿ち難き世なるに因て肉を食ふことを捨て竹を栽て樂むはと嘲を解也、注文選四十二、曹子建與吳季重書云、足下鷹揚其體鳳觀虎視、謂蕭曹不足儔、衞霍不足侔也、左顧右眄謂若無人豈非君子壯志哉、過屠門而大嚼、雖不得肉貴且快意、子建が書の意は屠者の門過て肉を見て大に嚼すれば其肉を得て口に不食どもこゝちよきと云へり、東坡は大嚼の二字を取用たるまで也、大嚼を肉を食ふ心に用たり書の意とは異也、字を用て意を不用者也、【昔有―】、此事見事文類聚後集四十二鶴條下、語與此注同、故不復錄、楊州は國名、九江郡丹陽郡廬江郡會稽郡等處、皆楊州之地也、【刺史】は大守也、漢には大守と云、唐には刺史と云、詳に事文類聚外集卷之十に見えたり、

○月下獨酌　終篇形容獨酌曲盡其妙、

本集二十三、月下獨酌四首此第一首也、注【終篇】、起より結までの全篇也、獨酌のありさまを形容して妙を盡す也、

李太白

期、文選李善仙作山、五臣以作與【王子喬】列仙傳一、王子喬周靈王太子晉也、好吹笙作鳳鳴、遊伊洛間、道士浮丘公接上嵩山、三十餘年後來於山上、告桓良曰、告我家、七月七日待我緱氏山頭、果乘白鶴駐山頭、望之不得到、擧手謝時人而去、【愚―】、愚なる者は財寶を愛惜して費し用ることをせず、止管に蓄へ積めども生年限有て一旦命終れば平生の財は皆他人の有となりて己が身の用をなさず、只死後に世人の爲に嘲り笑るゝことを取のみ也、【嗤】は說文笑也、【仙人―】、子喬は仙なれば長生不死也、尋常の人は其仙人とは命期を等うして長生はしがたきぞと云意也、又起聯の不滿百の句に應ず、注後漢書列傳七十二云、王喬者河東人也、顯宗世爲葉令、喬有神術、每月朔望常自縣詣臺朝、帝怪其來數而不見車騎、令太史伺望之、言其臨至輒有双鳧從東南飛來、於是候鳧至擧網張之、但得一雙舃焉、或云、此即古仙人王子喬也、【葉縣】、郡國志南陽郡有葉縣、

○綠筠軒 於潛僧有軒名綠筠、坡老爲賦此詩、

東坡詩集十三載之、題作於潛僧綠筠軒、注【於潛】、杭州府有於潛縣、

蘇子瞻

可使食無肉、不可居無竹、（王猷嘗寄居空宅中、便令種竹曰、何可一日無此君邪、）無肉令人瘦、無竹令人俗、人瘦尚可肥、俗士不可醫、

食と居とは皆人に於て所重の者也、然れども食には縱ひ肉を備ることなくとも居所に竹を種ることは無て叶はぬこと也、本集作不可使居無竹、注晉書列傳五十三、王徽之字子猷、性卓犖不羈、爲大司馬桓溫參軍、蓬首散帶不綜府事、云云、嘗寄居空宅中、便令種竹、或問其故、徽之但嘯詠指竹曰、何可一日無此君邪、【空宅】は室屋樹木もなきあれやしき也、【此君】は竹を指云、此語より後此君を竹の異名とする也、東坡も子猷が語を用られたり、【無肉―】、膳中に肉なければ只人の肌膚を瘦さすると云まで也、若居所に竹を栽ることなければ人の心を凡俗にならしむる也、【人瘦―】、人の瘦たるは尙又肥るやうにもなしやすし、

織素の好手を擧て女の事とする所の機杼を營めども牽牛と相親むことを不レ得、其隔たる河漢深きにもあらず淸て且淺し、其相去ことも復幾許ぞや、最相近しわたらば容易わたるべく見ゆれども不レ得レ渡、僅に盈々とうるはしき一帶の河水を隔てかなたこなたに索居し默々として相倶に語ることを不レ得、故に織と云へども文章を成し不得して涕泣すると也、此れは人臣德行材能あれども信用せられねば時に功を成すことなく常に憂を抱く、君臣の間隔て下情不レ通、忠を致んとするに無レ道に比する也、

○古詩　喩下人自レ少至レ老不レ知ニ休息一也上、

文選二十九古詩十九首之一也、【注】此篇は世人の少年より老後に至まで利慾を營て役々として日を過し休息を不レ知に比喩する也、

生年不レ滿レ百、常懷ニ千歲憂一、

人の生年は七十さへ古來稀なりと云へばまして百歲に滿るまで壽き者なし、然れども皆利を貪り、費を吝てあきたることなく或は子々孫々の後までを思ひ度るに因て心に千歲までも世にながらへる計を營て長く戚々たる憂を懷く也、此二句を陶淵明五字にて云盡したる句に世短意常長と云へり、此句參へ見べし、

晝短苦ニ夜長一、何不レ秉レ燭遊、爲レ樂當レ及レ時、何能待ニ來茲一、 來茲來年也、

人皆云行樂せんとすれども晝短して晩やすきに因て心のまゝならず夜は却て長して無用なるに苦むと云ふ何ぞ燭を秉て筵を照し夜遊をせざるやと也、古は燭臺なし燭を人にもたせて座隅に立せたる故秉燭と云也、禮記檀弓童子坐レ隅而執レ燭と云も秉燭と同、【爲樂―】文選注善曰、呂氏春秋曰、今茲美禾來茲美麥、高誘曰、茲年也、向曰、來茲謂ニ後期一也、【及時】とは樂むべき時に及では其時を空く不レ失して遊樂するを及時と云、只樂を爲して佳時良夜を不レ失其期に及では宜く樂べし、何ぞ能後來の年月を期して此事彼事皆營み畢るの後と云ことを待んやと也、

愚者愛ニ惜費一、俱爲ニ塵世嗤一、 音蚩、 **仙人王子喬、** 王子喬後漢人、爲ニ葉縣令一、後爲ニ神仙一、 **難レ可ニ以等一**

愛せらるゝの恩情は尚未畢にはや時已に凉くなりて紈扇用らるゝことなきと也、【玉階】、文選西京賦、玉階彤庭注、玉階以玉飾階、○三輔黃圖二、建章宮南有玉堂、玉堂內殿十二門、階陛玉爲之、

○古詩　諭臣之不得事君如牛女之不得相會

文選二十九古詩十九首之一也、善曰、並言古詩、蓋不知作者、或云枚乘、疑不能明也、向曰、不知時代、又失姓氏、故但云古詩、㊟此は人臣の君に近つき事ることを不得こと牽牛織女二星の相會することを不得に喩也、

無名氏

迢々牽牛星、牽牛也　皎々河漢女、織女也
纖々擢素手、札札弄機杼、

文選注濟曰、此以夫喩君、婦喩臣、迢々遠貌、皎々明貌、善曰、韓詩曰、纖々女手可以縫裳、薛君曰、纖纖女手貌、銑曰、擢擧也、札々機杼聲、【迢々―】、迢遠く遙なるを云、牽牛の星河のあなたにはるかに明なるを云、先此一句を擧て君に喩ふ、二の句より下は皆織女の事を云、【皎々―】、河漢は天河なり、皎々と明なる織女河を隔て常に牽牛に親むことなし、此れ人臣下に在て君に親近することを不得、上下の情不交に喩る也、【纖々―】、纖々は女の手のほそくしてふつゝかになきを云、ほそ〳〵して色白き手を擧て札々とはたおとをならして機の杼を弄して絹を織也、此れは君子の禮義を正し德業を修して怠らざるに喩る也、

終日不成章、涕泣零如雨、河漢淸且淺、相去復幾許、盈々一水間、天河之隔、默々不得語、下情不能上達也

文選、默々作脈々、注莫白切、五臣作脈々、善曰、爾雅曰脈相視也、郭璞曰、脈々謂相視貌也、良曰、盈々端麗貌、脈々自矜持貌、【終日】は朝より暮に至まで一日の間を云、【不成章】、小雅大東篇云、雖則七襄、不成報章、織ものゝ地紋花鳥の類を織つくるを章を成すと云、織女機を織といへども自心に思ひあるに因て終日織れども文章を成すことなし、只涕泣のはらはらと雨の如くに零るばかり也、其故いかにとなれば、

棄捐篋笥中、恩情中道絕、

文選注善曰、炎熱氣也、銑曰、懼寵之移、向曰、篋笥盛扇之箱、團扇盛夏時に用らるゝこと上の句に所云の如し、然れども常に恐るゝは一旦秋節の至り涼き風の起て暑氣の炎熱を掃ひ奪んことを、若然らば團扇も用らるゝに不及して篋笥の中に棄捐られて君恩の愛情中道に衰へ絕て終を保ち得がたからんと也、

○雜詩　亦寄興於紈扇、以寫哀憤、大意與前篇相類、

文選三十一江文通雜體詩三十首此其一也、題作班婕妤、題注云、詠扇、良曰、此擬新裂齊紈素、○此詩も亦興を紈扇に寄て寵移り愛衰へたる哀の憤を寫す也、大意は前の詩と同し、

紈扇如圓月、出自機中素、畫作秦王女、乘鸞向烟霧、　蕭史善吹笙、秦穆公女弄玉好之、以妻焉、爲作鳳臺、夫婦止其上、一日乘鸞鳳而去、

文選注濟曰、紈綺類也、圓月陰象、取興婦人、機織作之具、以喩父母、紈を裂て作たる扇圓なる月の皎潔なるが如し、此れ乃機中より織り出したる素を用て裁し成したると云意、此れ我が形を父母にうけて自然に皎潔の資質あることを比して云へり、【畫作―】、紈扇の面に彩飾して秦王の女め弄玉の鸞に乘て上天の烟霧縹渺たる中へ飛び向ふ貌を畫き作したり、此は我本皎潔の質あつて又加るに粧飾をなして閑雅の容儀あるに比興する也、○【蕭史】、列仙傳云、蕭史秦繆公時善吹笙能致白鶴孔雀、公女字弄玉好之、以妻焉、遂敎弄玉作鳳鳴、居數十年鳳凰來止其屋、爲作鳳臺、夫婦止其上不下、一旦皆隨鳳凰飛去、

采色世所重、雖新不代故、　代替也、故舊也、

竊愁涼風至、吹我玉階樹、君子恩未畢、零落在中路、

【采色―】、紈扇の潔に又畫飾を加てまことに美也、采色は世の重じ尙ぶ所なればたとひ別に新なる物至たりとも新の故を以て舊の采色美なるには替ざるもの也、【竊恐―】、竊に愁るは秋節の至て涼風起り我が玉階に栽し樹を吹暑氣を掃て冷かなることを君子扇を

して暫も措れざるが如し、一旦君の愛衰ときは譬ば秋至て風も涼くなり扇用らるゝ所なくして篋笥の中に棄られて恩愛斷絕するが如しと云の意也、【篋笥】、小學圖說云、篋士冠、禮緇布冠、缺項以至緇組紘同篋、鄭氏曰、隨方云篋、則隨者狹而長也、笥釋曲禮云、圓云簞、方云笥、書云衣裳在笥、則笥亦盛衣之器也、篋笥ともに圖あり、按し見るべし、

班婕妤

前漢書九十七外戚傳、班婕妤成帝初即位選入後宮、始爲小使、俄而大幸爲婕妤、成帝遊於後庭、嘗欲與婕妤同輦載、婕妤辭曰、觀古圖畫賢聖之君皆有名臣在側、三代末主廼有嬖女、今欲同輦得無近似之乎、上善其言而止、其後趙飛燕姊弟寵盛、班婕妤及許皇后皆失寵、稀復進見、趙氏姊弟驕妬、婕妤恐久見危、求共養太后長信宮、上許焉、婕妤退處東宮、作賦自傷悼、至成帝崩、婕妤充奉園陵、薨因葬園中、○【婕妤】、前漢書外戚傳云、漢因秦制、正嫡曰皇后、其餘內職有夫人美人良人八子七子長使少使之號、武帝加婕妤娙娥容華充衣、元帝加昭儀、又有五宮順常無涓共和娛靈賓林良使夜者之小職、

新裂齊紈素、（齊地產絹、）皎潔如霜雪、
裁爲合歡扇、（二面相夾、謂之合歡扇、）團圓似明月、
出入君懷袖、動搖微風發、

文選注翰曰、紈素細絹出於齊國、○字彙、紈素也、白練曰素、齊國より織出す、素練を新に裂けば其皎潔なること霜雪の如くに白く潔と也、【裁】は裁製を云、【合歡扇】は注に云ふ、絹を兩面よりはりて質の骨を內へはりこむるを相夾と云、二面絹に糊を粘して打合せて離れざるやうに作るに因て人の歡情の相合て離隔せざるに喩て合歡扇と云也、こゝもとの奈良うちはの樣子也、其扇の形團圓とまるきは明月の團なるに相似たる也、皎潔にして圓に因て明月に比する也、【出入—】盛暑の時に當ては君の懷の裡袖の間に出入して暫も放ち措れず動搖して扇げば涼き微風を發して君の心を悅ばしむ、此れは婕妤君の寵を得て恩幸を蒙るの時を云也、

常恐秋節至、涼飈奪炎熱、（飈音標、風也、）

遠樹曖芊々、曖不明、芊芊茂美貌、生烟紛漠々、魚戲新荷動、鳥散餘花落、不對芳春酒、還望青山郭、

所見景を云也、【遠樹—】、二句遠き景を云、【芊々】文選作阡々、李善作仟々、善曰、廣雅曰芊々盛也、仟與芊同、向曰、紛亂也、漠々布散也、【曖】、注不明、分明になきを云、遠林の樹を遙に望めば枝葉もさだかには不見して只樹色の芊々と茂り美しく見えてをぼろなる貌を云、漠々は廣く散り迷ふ貌を云、山氣の蒸し升て生ずる烟は亂れ散てもや〳〵とたちまよふを云也、【魚戲—】新荷は春の末荷葉の新に水上へ出たるを云、游魚戲てひら〳〵と觸に因て新荷動く也、樹間の鳥飛散ずるに因て枝上に散殘たる餘花も羽風にふれてちら〳〵と落也、此二句は眼前幽閑の景を云也、【不對—】、輔按に此結句第一句に照應す、其東田に遊者無悰を苦に因て也、今此に來て山野の秀麗を望む其遠き者遠樹生烟其近き者は遊魚飛鳥天然幽閑の景致皆以て神を怡ましめ目を悅しむるに足れり、嚮の戚々たる憂歎是に於て融然として氷の如に釋るに因て其平生假て以て興を遣り憂を掃たる者復用ることなし、故に芳春の酒に不對して還て青山の郭を望む也、如此說ときは首尾相應じて詩意分明也、文選善注稍可なれども未盡、翰注は牽强して胡說す、此尺も所短ある者か、二注並に左方に附す、識者辨之、○善曰、言野外昭曠取樂非一、若不對茲春酒、還則望彼青山、○翰曰、古詩云、夕宿青山郭、旦上青山上、青山不可上、步步恒惆悵、此言不對芳春酒以消憂、還如望青山郭之惆悵、

○怨歌行

漢宮班婕妤寵眷既衰、託興於紈扇、謂其得寵之時如扇出入於君之懷抱衣袖間、一旦愛衰則如秋至風涼、廢棄於篋笥中、恩愛絕矣、

文選二十七題注善曰、歌錄曰怨歌行古辭、然言古者有此曲而班婕妤擬之、注【漢宮】、前漢孝成帝位に即玉ひて班婕妤を後宮へ選び入られたり、其後趙飛燕寵盛にて婕妤は寵を失へり、【寵眷】は恩愛顧念也、【託興—】、心に感ずる興を以て紈扇に寄て云のぶる也、【其得—】、詩の意謂く、君の寵を得て愛幸せらるゝときは譬ば扇の暑中には君が懷抱衣袖の間に出入

るときは草際につや〳〵と光見ゆる也、風に光のあるやうなるに因て風光草際に浮と云、【桃李—】、前漢列傳二十四李廣賛曰、桃李不言、下自成蹊、此語に本きて作也、桃李に盛に美き花あるに因て人ことに樹下に來往して愛賞する故に、蹊徑をひらき成すあり、又桑楡は新綠の葉茂り長して道の周をおほひ蔭すもあると也、【道周】、詩唐風篇杕之杜生于道周、毛萇注曰、周曲也、

東都已俶載、（俶載始事也、）言歸望綠疇、

文選注善曰、毛詩小雅大田曰、以我覃耜俶載南畝、王肅注、俶始也、載事、言用我之利耜始事於南畝、毛詩、言旋言歸、東都の郊外春時に及て始て農作の事起りて耕稼を營む也、因て歸思を引興して曰郊外已に如此我も亦舊里に歸て田疇を耕さんと也、【綠疇】、良曰、疇也、田に苗を植れば田上綠に見ゆる故に綠疇と云也、

○遊東園 （形容東園之佳致、）

文選二十二題作遊東田、題注曰、眺有莊在鍾山、東遊還作、濟曰、眺所居之東、我が山莊の園に遊て作也、注【佳致】、致は趣也、佳景の趣を詩に形どりのべたる也、

謝玄暉

戚々苦無悰、（悰祖宗反樂也、）攜手共行樂、

尋雲陟累榭、隨山望菌閣、（菌香草也、）

文選注良曰、戚々憂歎貌、【悰】注樂也、【攜手】、李陵送蘇武詩、攜手上河梁、戚々と憂ひいたむことありて樂むこと無を苦に因て心を寛し慰ん爲に伴ふ人と手を把携へて共に東田に遊て行々樂と云意也、【尋雲陟—】行樂の狀を云、善曰、楚辭曰、層臺累榭臨高山、王逸曰、層累皆重也、楚辭曰菌閣蕙樓、銑曰、陟升、累重也、臺上有木曰樹、菌香草也、言菌閣美也、○正宗云、榭臺上有屋也、累榭重臺也、【累榭】は土を累て段々に築きあげたる臺の上に樹を栽へ屋を搆て其下に棲息するやうに作たるを累榭と云也、雲の度り過る邊をさして尋ねのぼり高き榭上に升る也、【菌閣】は菌草を以て香く造たるやうの結搆なる閣也、山路の回曲にまかせて隨ひめぐり菌閣の處を望て赴き登る也、

弁杜茂寇恂傳俊岑彭堅鐔馮異王覇朱祐任光祭遵李忠景丹萬脩蓋延邳彤銚期劉植耿純臧宮馬武劉隆、○後漢書列傳六、鄧禹字仲華、南陽新野人也、永平元年年五十七薨、謚曰元侯、

○和徐都曹、（鋪叙宛洛春日遊觀之勝槩、）

文選三十載之、題注云、善曰、集云和徐都曹勉昧旦出新渚、銑曰、都曹即徐勉也、○正宗注、徐都曹中都曹也、八座之一、○萬姓統譜、徐勉字修仁、東海郯人、幼孤貧、勵清節、徐孝嗣見之曰、此人中騏驥、必能致千里、注【鋪叙】は景をありのまゝに云ひのぶるを云、【勝槩】は景致の勝れたる處を云、槩字彙云、感觸經心也、景の勝れたる處は觀者感槩して歎美するに由て勝槩の地と云也、

宛洛佳遨遊、（宛洛地名、）春色滿皇州、（皇州謂帝都、）結軫青郊野、（軫車後木也、）迥瞰蒼江流、（瞰視也）

【宛洛】、文選注銑曰、宛南陽也、洛洛陽、皇州帝都也、時都在江東、而言宛洛者、擧名都以言之也、【宛】、天梯古文注云、光武生南陽縣白水郷中、中興功臣多帝郷親舊、故其地繁盛、【洛】は西晋の都也、玄暉齊の時の人也、建業之都にての作に宛洛を云は假用て作れる也、【遨】は説文遊也、洛陽は洛陽、只今出遨遊するによき時節なり春氣は至らぬ處もなく帝都に偏滿して景色の美多き也、【結軫……】善曰、楚辭曰結余軫於西山、周禮曰、東方謂之青、【軫】は注車後木也、車をかざりとゝのへて馬に駕するを結軫と云、青は木の色にて東方に屬す、故に東郊を青郊と云、是善注の義也、又春は草生じ郊野皆青に依て春郊と云意にて青郊と云べきか、洛陽春色のよき時節なるに因て車を裝て東郊に出て迥に蒼々たる江水を見と也、

日華川上動、風光草際浮、桃李成蹊徑、桑楡蔭道周、

文選注善曰、漢書曰日華曜宣明、楚辭曰、光風轉蕙汎崇蘭、王逸注曰、光風謂日出而風草木有光色也、日の輝の流水を照らしてきら〳〵と烱動するを日華川上に動と云也、【風光】は風に本より光なけれども嫩草の日にてらされたる上を風吹てそよ〳〵と動す

りて長くめぐりたるを【逶迤】として帶と云也、【緑水】は水色の緑にて深を云也、迢遞は遠く望めば朱を以彩とり飾たる樓閣のはるかに高く空に聳るを云也、樓は重屋也、釋名牖戶之間有射孔樓々然也、

飛甍夾馳道、(甍)音萌、屋棟、垂楊蔭御溝、

文選注善曰、吳都賦曰、飛甍舛互、前漢書曰、太子不敢絶馳道、應劭曰、天子道也、崔豹古今注曰、長安御溝謂之楊溝、植楊於其上、向曰、飛甍屋檐也、馳道天子出行之道、御溝長安有之、金陵擬而作也、【甍】謨肓切、說文、屋棟也、徐曰、所以承瓦、いらかと訓ず、棟宇莊嚴の體勢飛かけらんとするが如きを飛甍と云也、是れきくの貴官の第宅也、道の左右に相向て門を搆たる故に夾と云也、【馳道】は天子出行の御路也、垂楊御溝の流に蔭ひ映すと云は長安の御溝を假り用て帝居の佳麗を云也、實は金陵に御溝なし、

凝笳翼高蓋、疊鼓送華輈、張留反、獻納雲臺表、後漢明帝永平三年圖二十八將於南宮雲臺、以鄧禹爲首、功名良可收、

文選注銑曰、凝笳其聲凝咽也、疊鼓其聲重疊也、笳簫也、翼扶也、華輈謂刻畫車之轅也、向曰、羣臣有功圖畫其形於雲臺之上、言獻納忠直於君父則功名可收錄也、【凝】は笳聲の亮て天にひいるを云、音樂の盛なるを云也、【笳】は字彙、胡笳胡人卷蘆葉吹之、樂書胡笳似觱篥而無孔、後世鹵簿用之也、【高蓋】は高くさし翳したるきぬがさ也、貴人の出るときは笳を吹て樂を奏し先つて行列を引ゆるに翼高蓋と云也、【疊鼓】は鼓を擊聲重疊して盛に喧を云、輈は車のながえ也、轅に華樣の彫刻をなし彩飾するを【華輈】と云、喧く鼓を鳴して華輈の出行を送也、此二句は搢紳貴官の繁華なるていを云也、【獻納】、上の二句を承て云、如此大臣は皆忠直の賢者也、形を寫し畫て雲臺の表に上せて功名を收め錄すべき人と云意也、始は帝居の美を云、終には朝廷の大臣其人を得て賢者の多を云也、注【明帝】、後漢紀、孝明帝諱莊、光武第四子也、建武十九年立爲皇太子、中元二年即皇帝位、在位十八年崩於東宮前殿、壽四十八、【二十八將】、綱鑑漢明帝紀、庚申永平三年帝思中興功臣、乃圖畫二十八將於南宮雲臺、以鄧禹爲首、次馬成吳漢王梁賈復陳俊耿

迂也、文選注翰曰、言月滿則缺、花盛則落、好惡暫時此安能久、此注に從はゞ圓月の不久して缺るを指て云べし、

○鼓吹曲

此篇形容金陵帝都之盛、

文選二十八載之、題注善曰、集曰奉隋王敎作古入朝曲、蔡邕曰、鼓吹歌軍樂也、謂之短簫鐃歌、黃帝岐伯所作也、注【形容】は模樣をかたどりうつす也、

謝玄輝

南齊書卷四十七列傳二十八、謝朓字玄輝、陳郡陽夏人也、朓少好學有美名、文章淸麗、解褐豫王大尉行參軍、永元初江祐謀立始安王遙光、引以爲黨、不從、收下獄死、三十六、○明鍾伯敬評云、謝玄暉靈妙之心、英秀之骨、幽恬之氣、俊慧之舌、一時無對、似撮康樂淵明之勝、

江南佳麗地、金陵帝王州、

金陵建康也、帝王世紀、晋都洛陽、至永嘉南居建康、至宋齊梁陳並都金陵、寰宇記、諸葛孔明謂帝曰、鍾山龍盤、石城虎踞、眞帝王居也、

文選注善曰、江南曰揚州、曹植贈王粲詩曰、壯哉帝王居、佳麗殊百城、言は楊子江の南は文物佳麗の勝地也中に就て金陵は世々帝王所居の州なりと云意、注【建康】、說詳に第二卷金陵新亭の題注に見たり、建康は今南京也、【帝王世紀】九卷皇甫謐撰す、【永嘉】、西晋懷帝の年號也、南渡は永嘉五年也、【宋】劉氏八主五十九年、【齊】蕭氏七主二十八年、【梁】蕭氏四主五十五年、【陳】、五主三十二年、【寰宇記】、樂史寰宇記二百卷あり、【諸葛孔明】、蜀志第五云、諸葛亮字孔明、瑯琊人、詳に尾卷梁父吟の下に見えたり、【帝】は蜀の先主昭烈帝也、【鍾山】大明一統志應天府有鍾山、【龍盤】は地勢龍のわだかまりたる形象あるを云、【石城】、一統志、高州府有石城縣、高州府は廣東なり、孔明が云へる石城は應天府の石頭城也、【虎踞】は虎の踞したる如くの地勢ある也、如此要害堅固の地なれば眞に帝王の居を定むべき所と云意也、

逶迤帶綠水、

逶迤斜去貌、〔逶〕於危反、〔迤〕音移、

迢遞起朱樓、

迢遞遠貌、〔遞〕音第、

文選注善曰、王逸楚辭注曰、逶迤長貌也、劉逵注、迢遞遠望懸絕、翰曰、迢遞高貌、遠く見れば塘の斜にうね

陶淵明

日暮天無雲、春風扇微和、（言一時之景也、）

佳人美清夜、達曙酣且歌、（佳人自夜達旦酣歌燕飲、）

【日暮―】注一時の景を叙て言日の暮れかゝりて晴たる空に一片の雲なきに春風の起て微和の煖氣をそよ／＼と吹送るを扇微和と云也、暖日の靜に暮かゝる景也、【佳人―】、文選注向曰、佳人謂賢人也、美猶愛也、樂酒曰酣、言天清風和、賢人愛此良夜至明酣歌也、善曰、尙書酣歌于室、佳人を注に賢人と云、美人となして看ても無妨、末の皎々灼々の句婦人の美好を云へば佳人は美婦人也、此清靜の夜を好夜なりと愛して夜すがら曙に至るまで酒宴をなして樂て且つ歌ふ也、【酣】は酩酊と云ほど甚醉までに不至、酒氣の身に洽きほどに醉て樂を酣と云也、注【燕飲】、燕は宴と同じ、酒宴をなす也、

歌竟長歎息、持此感人多、

文選注銑曰、樂極悲來、故歌竟歎息、言是事多感於人心、美人歌ひ竟て心に感ずることとあつて長く歎息をなす、人内に慨歎するときは息を吐くこと大にして長し故に歎息と云、【持此】は只今歌ふ所の歌詞を指て云、歌て樂む中に其歌に因て人の心を感動することと多也、

皎々雲間月、灼々葉中華、（少年如花開月明一時之盛、）

豈無一時好、不久當如何、（年老如花凋月蝕則不能久、）

【皎々】は潔白也、詩陳風月出篇、月出皎兮、注皎月光也、【灼々】、詩周南桃夭篇、桃之夭夭、灼々其華、注灼灼華之盛也、月花を以て少年に比する也、歌に因て感興を引起して以爲く、人の少き時は皎々とあきらかに圓かなる月の如く灼々と盛に開たる花の如し豈一時美好の色なからんや、只其色不久こと圓月の缺やすく美花の凋みやすきが如くにて須臾の間に年去老來て顏色の變り衰るを如何んかすべきや、是を思て歎息する也、注に月光の不久を指て蝕とす、此說

一觴雖獨進、盃盡壺自傾、

文選注良曰、獨酌獨進杯也、又自傾壺而滿之、此注に從て說ば一觴を把て獨酌て伴ひ親むものなし盃中の酒を飲盡せば又自ら壺を提て手から傾て盃に盛り滿つると也、○輔按するに、句中雖字を以て觀ときは自傾は手から自ら傾にはあるまじきか、只獨酌て伴ひ飲む者もなしと云へども盃の數をかさねて飲盡せば酒も亦盡て壺も自ら傾倒すると云意ならんか、如此說は上の句雖字に應ずべし、

日入群動息、（通曆、日出而作、日入而息、）歸鳥趨林鳴、

文選注銑曰、衆物之群動者日入皆息、故歸鳥趨飛於林而喧鳴也、此自合其眞理故言之、此二句酒を飲むとき所見景を云、日中には衆物動作すれども日入て暮に及へば群動する者皆休息して世間も寂寂としづまる也、巢に捿んと歸る鳥林の邊に趨き飛て鳴き噪く也、注【通曆】、十卷馬總撰、此二句は堯の時の擊壤歌の詞也、事文類聚前集四十四引通曆云、帝堯之時有老人、擊壤於路曰、吾日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝何力於我哉、

嘯傲東軒下、聊復得此生、（百斛明珠云、以無事自適爲得此生、則見役於物者非失此生耶、）

文選注向曰、嘯傲超逸貌、軒檐也、言自超逸於東檐之下聊復得此達生之樂也、【嘯傲】は嘯咏傲樂して事物の表に逍遙するの意也、獨酌て日暮の景に對して東檐の下に嘯傲するときは眞意閒曠にして心常に樂むのみにて外物の累ひなし、故に人生の眞趣を了じ得たると云へる也、注【百斛明珠】は東坡の作也、淵明の意、無事安閑なるを以て心にとくと適ふて人生の趣を得たりと云へるときは凡そ世間の人利欲外物の爲に役るゝ人は此生を失ふ者と云意也、

○擬古

本集四載之、九首之一也、○文選三十載之題作擬古詩、題注良曰、此言榮樂不常、兩漢の間の人作たる詩作者の姓名知れざるを皆古詩と云、古詩の意になぞらへて作を擬古と云也、

眉十三云、荊公嘗言、其詩有奇絕不可及之語、如結廬在人境而無車馬喧問君何能爾心遠地自偏、由詩人以來無此句也、然則淵明趣向不群、詞彩精拔晉宋之間一人而已〇復齋漫錄云、東坡以淵明有採菊東籬下悠然見南山而無識者以見爲望不啻碔砆之與美玉予觀樂天效淵明詩有云、時傾一尊酒坐望東南山、然則流俗之失久矣、惟韋蘇州答長安丞裴棁詩有云、採菊露未晞、擧頭見秋山、乃知眞得淵明詩意、而東坡之說爲可信、

○雜詩

本集三載之、題作飲酒、〇文選三十載之、題與此集同、

陶淵明

秋菊有佳色、裛露掇其英、（離騷、夕飡秋菊之落英、）汎此忘憂物、（忘憂物乃酒也、）遠我遺世情、（歸去來辭、請息交以絕游、世與我而相遺、）

【秋菊—】、文選注善曰、文字集畧曰、裛坌衣香也、然露坌花亦謂之裛也、毛萇詩傳曰、掇拾也、良曰、掇采、英花也、菊有佳色、故乘裛露而采之、泛之於酒自飲天性、故遠達世上之情不若我也、忘憂物謂酒也、秋の菊に花開て佳き色ありてみごとなる也、【裛】香の衣に襲を裛と云こゝにては花の露にうるほひたるを云、杜子美の詩に雨裛芙蕖冉々香と云を以て觀れば雨露の花を濕すを裛と云こと可知、菊に佳色あるゆゑに露のをきあまりて濕ひたる花を露ながら其英をつみ採也、注【離騷】は楚の屈原讒せられて憂心煩亂し愬るところなくて乃離騷を作れり、朝飮木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英、落は始也、英は華也、始て開たる花也、【汎此—】、酒中に泛る也、前漢書東方朔傳云、銷憂者莫若酒、酒を忘憂物と云は此に本くか、【遺世情】は注に云ふ、今より請ふ一向に人にも交らずして官游の念を絕ちすてゝ世事を遺れ、世も亦我を遺れて世と我と互に相棄て安閑にせんと思ふが遺世の情也、今菊花の酒を飲て世と我と相遺んと思ふ情を遺り遠て世我の念ともに併せて忘る、注【請】、人に請に非ず、自ら心にかくせんと思ふときは請ふ云云せんと云也、【交】は朋友を云、【游】は官游を云、

結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏、採菊東籬下、悠然見南山、東坡曰、採菊之次偶然見山、初不用意而景與意會、

【結廬—】、文選注李善曰、結構也、良曰、廬室也、我が室廬を結は山林隱僻の處に結に非ず只人境の裡にあり、人境に在と云へども而も世間車馬紛雜の喧き累ひはさらになきと也、【問君—】、銑曰、問君何能如此自以發問、將明下文、遠謂心自幽遠、雖處喧境如偏僻也、【君】は結廬の君即ち我也、人境に在ながら車馬の喧きことなきは何に由て能如此にはあるやと問也、【爾】とはしかあると云義、如此やの意也、自ら答て曰我が心幽遠にして世にひかれざれば人境の中に在れども居處自ら僻遠偏鄙の地の如く常に清閑にて喧きことなきと也、【心遠】は世に徇ひ利を徼めざれば心係累なくて沖澹曠達なるを心遠と云也、【偏】は旁也鄙也、かたわきの人ばなれたる地を偏僻と云也、鍾惺曰、心遠二字千古名士高人の根也、【採菊—】此二句古來の詩人推し尊ぶ名句也、其高妙の趣筆舌の可及に非ず、文選に見字を望字に作は誤也、東坡の注淵明が旨を得たりとす、淵明東籬の下に歩して菊を愛し俯して採之意菊に在り偶ふと頭を擧たればおもはず南山翠微の景を見る、便ち景と意と融し悠然と遠く見て手裡の菊を忘て山に對す、其閑遠自得の趣自ら心に想ひ見べし、【注】東坡曰、菊を採の次でにおもはずふと山を見たる也、初より意を屬て望みたるにてはあらず、自然に景と意と會合したる者なりと云へり、○鍾伯敬曰、見字無心得妙、

山氣日夕佳、飛鳥相與還、此間有眞意、欲辨已忘言、

文選注翰曰、日暮山氣蒙翠、所謂佳也、飛鳥晝游而夕相與歸于山林、此得天性自任者也、而我欲言此眞意、吾其自入眞意也、故遺忘其言而無言也、南山の氣色夕日に及で翠を含て靄然たる景まことに佳也、鳥は終日飛に倦て暮に及で相與におのれ〱が棲宿の林に還る、皆是天性自然の光景、此間に於て眞意妙趣心に自得してえもいはれぬ處あり、辨說せんとするに已に云べきことを忘れて言なきと也、○詩人玉

○文選注翰曰、爲事當及少年之時、

常恐秋節至、焜黄華葉衰、至秋而華葉焜黄、喩人之老景也、焜胡本切、百川東到海、何時復西歸、百川水東流至海、無復返流、喩人既老而不復少年、少壯不努力、老大徒傷悲、

榮るものは早く衰へ易し、故に常に恐るゝは秋風肅殺の時節至て此葵も焜黄の色と變じて陽春の時つやつやとひかりありし葉も衰て凋み落るに至らんことを恐ると也、【焜黄】、文選注善曰、焜黄色衰貌也、濟曰、焜黄華色壞也、【華葉】の華は榮也、上の句に云生光輝華葉は即光輝ある葉を指て云、葉と花とを云に非ず、注此句は人の年老て晩景に向ふに喩ると也、濟曰、恐至暮年志氣銷歇、【百川ー】、百の川を見に水東に向て日夜に流れ遂に海に到る、一たび海に入て何の時か復逆流して西に歸ることあらんや、只川のみに非ず、人も亦如此少壯なりと云へども日月逝て不止遂に老衰に及べし、事を勤ること必ず少年の時に於て勵み爲すべし、若少壯の時惰漫にして努力ざれば歳月徂て我を不待遂に老大に到て功名成ことなし、人老ては志氣衰へ盡く此時たとひ悔とも再び少壯に返るべからず、徒に傷み悲むのみにて追ひ及ことなけんと云意なり、【百川】善曰、尙書大傳曰百川赴東海、【少壯】前漢武帝秋風辭、少壯幾時兮奈老何、壯は盛也、大也、曲禮三十曰壯、鄭云氣力浸强之名、【努力】、文選李陵與蘇武詩努力崇明德、皓首以爲期、【傷悲】、詩召南草蟲篇、未見君子我心傷悲○選詩補註、此言人之待時猶葵之待日、當天下有道賢者在職、莫不各遂所志、而功名顯著、及世運衰朝不信道、則賢者皆擯棄而銷落、

○雜詩　陶淵明作此以詠其幽居之趣、心遠地偏眞樂自得於心、不待形之言也、　陶淵明

淵明全集三載之、題作飲酒、○文選三十題與此集同、注淵明此詩を作て我が幽居靜閑の趣を詠じて自娛む、心遠く地偏にして俗累なき眞樂は自ら淵明が心に得て言に如此なりと云ひ形すに辭なきと也、○鍾惺曰、飲酒詩如此寄託如此含吐、酒豈易飲、飲酒豈易作詩、

古詩曰、長歌正激烈、魏武帝燕歌行曰、短歌微吟不能長、傅玄豔歌行曰、咄來長歌續短歌、然行聲有長短、非言壽命也、【行】は文選樂府四首之第一飮馬長城窟行注音義曰、行曲也、【題注】【托物比興】、托は寄也、物に寄せ比類して興感の情を叙る也、葵を言ふは物に托する也、これを以人に喩て少年の老やすきを感ずるは比興也、【謂━】露にうるほふ葵の春に遇ては發生榮茂すれども秋の時節に至て皆凋み衰て葉落つ、是を以て人の年少く力壯んなるとき、若功名を勉力されば老後に悟り悔れども徒に傷み悲むのみにて追及ことなきに喩ると也、【遲暮】は暮をまつと云意也、人の年老て死期に向ひ臨は日の暮をまつ如くなる故に遲暮と云、又遲暮は晩暮なりと云注あり、離騷經第一惟草木之零落兮、恐美人之遲暮、朱子注、遲晩也、

沈休文

梁書卷十三云、沈約字休文、呉興武康人也、約孤貧、篤志好學、晝夜不倦、母恐其以勞生疾、常遣減油滅火、而晝之所讀夜輒誦之、遂博通群籍能屬文、齊初爲征虜記室、奉侍文惠太子、最親遇、太子入居東宮、約爲步兵校尉、管書記、及蕭衍代齊約爲尙書僕射、天鑒二年卒、年七十三、○此長歌行文選二十七樂府四首の終篇也、題注李善曰、不知作者姓名也、今此集に沈約か作とす、或は據あるか、

喩人少壯

青々園中葵、朝露待日晞

晞乾也、〔晞〕音希、

陽春布德澤、萬物生光輝

萬類得陽春而發生、

園の中を見れば青々とうるはしき葵あり、曉葉上に置たる露は朝日の升るを待て日の光にうつろひて漸く晞也、【晞】注に乾也、詩經小雅湛々露斯匪陽不晞、註晞乾也【陽春━】、葵の如此なるは陽春萬物を發生慈育するの德澤を天地の間に布き施すに因て萬物その和煦の中に生じ榮えて嫩やかに光輝ある也、德は物を生ずるの德を云、澤は德の物に及でうるほし養を云、【光輝】は草木嫩き時に葉色つや〳〵とひかりあるを云、注【萬類】、萬物は森羅萬象とて品類多に因て萬類と云也、此四句は人の少く壯なるに喩ると也、

詩解かたし、故に今大桀をしるす也、晉の懷帝永嘉五年に僞漢の劉聰が大將軍呼延晏と云者兵一萬七千に將として洛陽に攻入たり、晉の兵前後十二度まで敗軍す、晏勝に乘て王城へ亂入たり、懷帝華林園の門より出て長安へ奔らんとし玉ふを、僞漢の兵追つめて懷帝を執へて平陽に遷し、太子の詮と云を殺たり、五胡の亂と云是也、天下大に亂る只楊子江の東はさのみ擾亂せざる故に士民皆江を渡て亂を避たり、此時瑯琊王の睿と云人に王導が說て云、此度の戰に死殘りたる軍士を招き收めは人數猶あるべし、賢俊なる者を聚て俱共に天下を平ける圖をし玉へと云、睿從之刁協卞壼陳頵庾亮が輩一百六人を從へて江を渡て建業に徙れり、今の南京なり、それより周顗桓彝が輩おひ〳〵に江を渡て相從へり、其後晉の大臣武帝の孫を立て晉の天子として長安にて即位、是を愍帝と云、愍帝も亦立て四年の十一月に僞漢の劉曜に長安を陷られて帝僞漢に降れり、遂に害せらる、於是西晉悉く亡びたり、其後瑯琊王建業に於て晉王の位に即て元を改む、是を東晉の元帝と云也、洛陽より江を渡て建業へ遷て都する故に過江と云也、【飮宴】、酒宴をする也、【中坐】、坐中也心中を中心と云類也、四時の風景は殊なることなけれども目を擧て所見の江河は皆舊都に異なると歎じたる也、【愀然】、字彙、愀七小切、色變也、禮哀公問愀然作色、【戮力】、書經湯誥云、聿求元聖與之戮力、○前漢高祖紀云、沛公旦日從百餘騎見羽鴻門謝曰、臣與將軍戮力攻秦、【王室】詩周南汝墳篇、魴魚赬尾、王室如燬、○左傳僖公十三年云、淮夷病杞故且謀王室也、【剋復】は寇賊に剋ち勝て舊京を取復すを云、論語顏淵篇云、克己復禮、云云、剋復の字或は此に本くならんか、【神州】は帝居を云、事物紀原云、神州王者所居、卜吉土五千里內之地名也、通典、於周制方丘篇始錄之、則是神州之祭自周人始也、○王嬰古今通論、崑崙方五千里謂之神州、中有和羡鄉方三千里、五岳之城帝王之宅聖人所生也、【謝之】、謬たりと辭謝する也、

○長行歌

此篇托物比興、謂露中之葵遇春而發生、至秋而凋落、喻人之少壯若不勉力功名、徒傷悲於遲暮之時則亦無及矣、

文選二十七樂府上載之、作長歌行、題註李善曰、崔豹古今註、長歌言壽命長短定分不妄求也、云々、

豪傑の士多く新亭に會集して酒宴をする也、【擧目―】、三の句は即周顗か語也、亭中に集る士は皆洛陽を去て江を渡て徙りし者也、今金陵風景好れとも目を擧て眺望すれは昔し見慣し景に非す江河皆洛陽と異なり衆中偏に歎を興し傷み愁るは周顗か故都を思ふの情也、【四坐―】、周顗か嘆し傷むに因て感慨を起して四坐に在りあふ人々四人の思ひをなし皆歎き悲みて天下國家の傾き破て晋祚の絶んとするを何とぞ謀て尅ち復さんと憂るの志はなくてあさましく身の上をのみ歎きたると也、【周顗】、晋書巻六十九、周顗字伯仁、少有重名、神采秀徹、庾亮謂曰、人咸以君方樂廣、顗曰、何乃刻畫無鹽、唐突西施、王導嘗枕顗膝而指其腹曰、卿此中何所有也、答曰、此中空洞無物、然足容卿輩數百人、云云【四坐】、四方に次居たる人々座中悉くと云意也、【楚囚】、楚字は付字にて故き熟字を用たるまで只囚と云義也、左傳成公九年云、晋侯觀于軍府、見鍾儀、問之曰、南冠而縶者誰也、有司對曰、鄭人所献楚囚也、【社稷】、天下國家と云義也、白虎通云、王者所以有社稷何、爲天下求福報功、人非土不立、非穀不食、土地廣博不可徧敬也、五穀衆多不可一一而祭也、故封土立社示有土尊、稷五穀之長、故封稷而祭之也、稷者得陰陽中和之氣而用尤多、故爲長也、

王公何慷慨、（按王導傳、過江人士毎至暇日、相邀出新亭飲宴、周顗中坐而歎曰、風景不殊、擧目有江河之異、皆相視流涕、惟王導愀然變色、曰當共戮力王室、尅復神州、何至作楚囚相對而泣耶、衆收涙謝之、王公王導也、）**千載仰雄名、**

【王公】、注王公王導也、晋書巻六十五列傳三十五、王導字茂弘、光祿大夫覽之孫、少有風鑒、識量清遠、陳留高士張公見而奇之、謂其從兄敦曰、此兒容貌志氣將相之器也、元帝爲瑯琊王、與導素相親善、導知天下已亂、遂傾心推奉、潜有興復之志、帝亦雅相器重、帝常謂曰、卿吾之蕭何也、【慷慨】、字彙慷與忼同、忼慨壯士不得志也、内自高亢憤激也、○史記刺客傳荊軻傳、高漸離撃筑、荊軻和而歌、爲羽聲忼慨、士皆瞋目髮盡上指冠、於是荊軻就車而去、結句言は王公はいかにそや衆人の中に於て獨剛氣を奮ひをこして忼慨せられたり故に千載の後今に至まて其豪雄の名を仰き崇ぶと也、注【按王導傳】、【過江】の事始末不詳此

與十許人翫月、或問月中竟何所有、乾祐曰、隨我手看之、月規半圓瓊樓玉宇滿焉、【夷齊―】、史記伯夷傳、登彼西山兮採其薇矣・注西山即首陽山、結句は詩人謂く少年の豪俠如此盛なり若一旦時世變易して患難に處らは此少年も大節に當て平生の豪俠を不屈して古の伯夷叔齊などか所爲の行迹を能爲得んや否、當時勢に乘て驕奢をなすとも平生の志なければ其時に臨ては恐くは大節を守ること得ざらんかと諷斥するの意也、一說に結句は少年世に誇るの辭となして看、言ろは古より伯夷叔齊は聖人なりと稱するが是何人そや、獨西山に入て餓死を守て道なりとて喜たるわけもなき男也、是何の益かあるや、只人は傲遊をして樂むより外はなきものをと云意也、此說亦通、然れとも前說詩人の旨を得たりとす、嘗て二說を以て師に質す、師も亦云、常に前說の意を以講ずと、

○金陵新亭 金陵今建康府

方輿勝覽卷十四云、建康府禹貢楊州之域呉地斗分星紀之次、春秋屬呉、戰國屬越、後屬楚、初置金陵邑、秦改曰秣陵、屬鄣郡、漢改鄣郡爲丹陽郡、呉大常自京口徙此、因改爲建業、晉武帝改爲秣陵、又分秣陵北爲建業、改業爲鄴、後避愍帝諱爲建康、東晉元年渡江復都焉、金陵楚威以其地有王氣埋金鎭之、故曰金、或云以其地接華陽金壇之陵、○金陵は大明の南京應天府也、【新亭】、大明一統志六、應天府、【新亭】、在府南一十五里、府近江渚、東晉初過江、僕射周顗與群公遊宴於此、

作者

題下作者の名をしるさず、何人の作と云こと未考、

金陵風景好、豪士集新亭、舉目江河異、偏傷周顗情、四坐楚囚悲、不憂社稷傾、

此詩全篇王導か傳に依て傳中の語を用て作れり、王導を題として作れる詩の如し、然とも王導か事蹟は新亭にての故事なるに因て故事を以て名所の詩を作る也、此類往々にあり、【金陵―】、金陵は名勝の所多して風景の佳麗天下第一の地也、王導周顗か輩東晉

士、始可稱萬夫之雄、用之則爲虎措國家於盤石、不用則爲祥鱗爲威鳳、天下後世有悲傷感歎悔不與之同時者耳、藏書三十一

○少年子

譏當時少年豪侠子弟挾彈馳馬醉臥於瓊樓、曾有夷齊守節之志否、

李太白集六載之、題註士贇曰、樂府遺聲游俠二十一曲有少年子、註此注恐は題註に非ざるへし、譏當以下十八字移して本文入瓊樓臥の下に置へし、曾有以下九字西山餓の下に入へし、【當時】は當今の時也往時を云にあらず、【豪侠】、豪強也健也、侠史記集解序云、序游侠退處子而進姦雄、索隱曰、游侠謂輕死重氣、如荊軻豫讓之輩也、又曰同是非曰侠、○前漢書七十六趙廣漢傳、新豐杜建素豪侠賓客爲姦利、云云、氣槩を張て男だてをするを豪侠と云也、【子弟】は少年を云、少き者は皆人の子或は弟なるに因て也、

李太白

青春少年子、挾彈章臺左、鞍馬四邊開、突如流星過、金丸落飛鳥、夜入瓊樓臥、夷齊是何人、獨守西山餓、

【青春】、春は東方の木神を主とす、木の色は青し故に青春と云、春は四時の始にて萬物生して稚く嫩し故に人の少年なるをも春に比して青春の少年と云也、【彈】はだんご弓と云者也、弓を作り機を設て內へ丸を入て鳥をねらひて機を發すれは弓にて丸をはじき飛して中るやうに作る也、こゝもとに兒童の玩ぶはじきてつぱうの樣なる屬ひの器也、字彙彈激圓也、說文行丸也、【章臺】、史記楚世家、靈王七年就章華臺、杜預注南近華容縣、有臺在城內、【左】はほとりと云意也、彈を脇に挾て章臺の邊へ鳥を射に出る也、【鞍馬—】、三四句少年豪侠の形象を模寫する也、鞍馬にうち跨て四邊にのり開て馳する貌、突衝して流星の飛過るか如く迅速なると也、【金丸—】、晝は終日遊獵し金丸を以て飛鳥を射て落して娛とし、夜は歸て瓊樓の上に升て臥す也、【金丸】、西京雜記四云、韓嫣好彈、常以金爲丸、一日所失者十餘、長安爲之語曰、苦飢寒逐金丸、京師兒童每聞嫣出彈、輙隨之望丸之所落輙拾焉、【瓊樓】の字拾遺記に見たり、翟乾祐

詩を作て淵明と東坡とを並へ論して崇尊する也、【注】【惠州儋州】、大明一統志卷八十、有惠州府、同八十二、瓊州府有儋州、東坡の惠州に謫らるゝは哲宗の紹聖元年也、惠州に居ること三年にして又瓊州に遷れり、

黃山谷

宋史列傳二百二文苑傳六云、黃庭堅字魯直、洪州分寧人、幼警悟讀書數過輙成誦、舅李常過其家、取架上書問之、無不通、常驚以爲一日千里、云云、與張耒秦觀晁補之俱游蘇軾門、天下稱爲四學士、而庭堅於文章尤長於詩、蜀江西君子以庭堅配軾、故稱蘇黃云云、初游灊皖山谷寺石牛洞、樂其林泉之勝、因號山谷道人云、○西淸詩話云、山谷詩妙脫蹊逕、言謀鬼神、無一點塵俗氣、所恨務高似參曹洞下禪、尙墮在玄妙窟裡、○劉后村云、豫樟會粹百家、句律之長究極歷代體製之變、蒐獵奇書、穿穴異聞、作爲古律自成一家、雖隻字片句不輕出、遂爲本朝詩家宗祖、

子瞻謫海南、時宰欲殺之、飽喫惠州飯、細和淵明詩、

本集海南作嶺南、蘇子瞻の海南に謫せられしは何故そや、時の宰相王珪蔡確か輩東坡の才を忌て數々天子に譖して東坡を殺んとせしに因て坐せられて海南に謫遷せられたると也、【飽喫——】、三年の間惠州に居られし故に飽まで惠州の飯を喫すと云也、其間に細に淵明か詩を咏嘆して一百九首まで追和の詩を作られし也、淵明か傳前に見たり、

彭澤千載人、（陶潛作彭澤令、）**東坡百世師、**（子瞻可爲百世之師、）**出處雖不同、氣味乃相似、**（子瞻之氣味與淵明相似、）

彭澤の令なりし陶淵明は信に千載中の一賢人也、東坡は又百世までの師範となるへき人也、東坡は出て朝廷に仕へたり、淵明は一たび彭澤の令を辭し隱居せしより再び仕ることなし、二人の出處は不同して行迹各別なれとも其氣味風趣は乃二人能相似たり、其心相契ふて能似たるに因て淵明か詩を多く和せられたる也、○李卓吾曰、古今風流宋有子瞻、唐有太白、晉有東山、本無幾也、必如三子始可稱人龍、始可稱國

觀れは文宗夏月大殿の內に居して一己樂を貪ることとを知て百姓暑日耘耨して炎熱を侵すの苦を不思信に人君の言に非す、公權宜く詩に託して諫むへきこと也、然に却て曰、薰風南より來り殿閣涼生す帝の樂み宜なりと云て帝居の美を盛なりとして曾て諷諫の詞なし、東坡の誚れる所以也、注【文宗】、唐の第十四主也、唐紀、文宗皇帝名涵、穆宗第二子、初封江王、爲宦者所立、在位十三年崩、壽三十二、葬章陵、【箴】、韻會箴綴衣箴也、一曰誡也、詩因以箴之、註諫誨之辭也、箴はいましむと訓す、

一爲居所移、苦樂永相忘、願言均此施、清陰分四方、

此四句乃子瞻足成其篇、獨挙々於清陰分四方之事、有望於上人之恩施者深矣、

此四句東坡の句也、孟子盡心上云、居移氣養移體、大哉居乎、云云、人は我か所處の地位に依て心移る者也、大厦廣堂に居すれは心も亦其居に處するの心となる也、又矮屋破窓に居すれは心も亦隨て窶陋の心となる也、今文宗も殿閣の廣居に處て爲居氣を移されて他の苦樂を永く忘れて百姓の上を思ふに遑あらす、【願言―】、詩人の意願くは殿閣に生する所の風涼を天子一己の上に不止して此施を均く擴て大厦の清陰を四方に分て天下の人を庇ひ惠て萬民の炎熱を清め涼くせんことを希ふと也、如是ならは上下皆生を樂み業を安せんものをと重く上の人を責て恩施を希望する也、此詩意は杜子美の詩に安得大厦千萬間、大庇天下寒士俱歡顏、風雨不動安如山、と云へる詩の意に本て作れるなるへし、注【挙々】、後漢書明帝紀云、百姓怨結而吏人求復、令人愧笑、重逆此縣之挙々、註云、挙々猶勤々、その事のみと勤て懇切なるを云也、子瞻の此篇を足し成せる意は、涼閣清陰の四方に分ち庇んことを挙々と勤言て上の一人仁恩を四海に施んことを望めり、其諷諫の意誠に深長なると也、

○子瞻謫海南

蘇東坡謫惠州儋州

山谷詩集十七載之、題作跋子瞻和陶詩、注云、東坡和淵明詩凡一百有九篇、追和古人自東坡始也、蘇子瞻か淵明の詩を和して作たる詩の尾に跋するに此

歩むものに非す、空を飛ふ者は本と認て見へき迹あることとなし、然に足迹を見たりとはいぶかし、或は妄説にてはあるましきやと戯なからに道士の虚誕を諷刺する意を云へり、注【柳子厚】、新唐書列傳九十三、柳宗元字子厚、河東人、詳に第三卷田家の詩に見へたり、

○足柳公權聯句

本集廿五載之、幷引曰、宋玉對楚王此獨大王之雄風也、庶人安得而共之、譏楚王知己而不知人也、柳公權小子、與文宗聯句有美而無箴、故爲足成其篇【柳公權】、唐書列傳八十八、柳公權字誠懸、公綽弟也、年十二工辭賦、元和初擢進士第、李聽鎭夏州、表爲掌書記、因入奏、穆宗曰、朕嘗於佛廟見卿筆蹟、思之久矣、即拜右拾遺侍書學士、改右司郎中弘文館學士、文宗復召侍書、遷中書舍人、充翰林書詔學士、與周墀同對論事不阿、墀爲惴恐、公權益不奪、帝徐曰、卿有諍臣風、可屈居諫議大夫、乃自舍人下遷仍爲學士知制誥、武宗立爲集賢院學士、知院事、累封河東郡公、咸通初乃以太子太保致仕、卒年八十八、公權文宗の詩に屬對して諷諫の意なきに依て東坡又續き足して戒以て一篇を結ひ成せり、按に公權は名望早く顯れて數朝に歴仕し位貴く徳高き人也、穆宗の時は筆を以て諫の事あり、文宗の朝には諫議大夫と爲て諍臣の風采ありと稱す、史の記す事迹諂諛の臣に非す、只此詩に於て諷諫の辭なし、故に東坡の柳公權は小子なりと云へる誚を不免、尺も所短ありと云者か、公權は一時の事を紀し、東坡は後世の箴を垂る者也、

人皆苦炎熱、我愛夏日長、

此二句唐文宗の句也、言は諸人は皆夏月炎熱の酷を若むと云、我は曾て不苦、却て夏の日の遲々と長して遊樂の時多を愛すると也、

薰風自南來、殿閣生微涼、 此四句乃公權與文宗聯句、言日長風涼之盛有美而无箴

此二句公權の句也、【薰風】は夏の風を云、上の句を承て曰、薰風南より吹來て殿閣の中に入御座の邊に微涼生す只長日陰清して些も炎熱の煩なし天子の夏日を愛し玉ふも宜なりと旨に應する也、上二句に由て

不起卒、葬于汝州郟城縣、高宗即位贈資政殿學士、○詩林廣記後集三云、蘇子瞻詩如武庫乍開干戈森然、不覺令人神懾、子細點檢不爲利鈍、○劉後村云、坡詩略如昌黎、有汗漫者、有典嚴者、有麗縟者、有簡淡者、翕張開闔千變萬態、蓋自以其力量爲之、

一盃羅浮春、羅浮春先生所造酒名也、以惠州見羅浮山而得名、遠餉採薇客、伯夷叔齊採薇於首陽山、

【羅浮春】、注東坡自ら造られたる酒の名也、東坡惠州にて羅浮山を見て心に甚た悦へり、其時に此酒を造り出されしに依て名を山に託し命せられしと也、春と云は酒に醉へは醺融して春日溫暖の氣に似り、故に古來詩人多く酒を指て春と云へり、【採薇客】、山中に隱居する道人は薇を採り菓を拾ふて食とする、故に採薇客と云也、注伯夷叔齊を引て注するは此詩にかなひがたし、文選嵇叔夜幽憤詩、採薇山阿散髮巖岫永嘯長吟頤性養壽、此詩の字を以て證とせは的當せんか、此二句一盃の酒を持て遠く山中の道士に送るの意也、伯夷か傳は第一卷貪泉の詩に見へたり、

遙知獨酌罷、醉臥松下石、幽人不可見、清嘯聞月夕、晉劉琨爲胡騎所圍乘月登樓清嘯、

【遙知】は遙に想ひやりて料知此酒を獨自ら酌て醉後に松下の石を枕として高臥しらるゝにてあらんと也、幽人は仙人を指す、神仙の幽人はたやすく形を見ることなるまし、其清嘯の聲なとは或は月の亮たる夕には時として聞ることも有へきと也、注は清嘯二字の出處を引まで也、晉書列傳三十二、劉琨字越石、中山魏昌人、漢中山靜王勝之後也、在晉陽嘗爲胡騎所圍數重、城中窘迫無計、琨乃乘月登樓清嘯、賊聞之皆淒然長歎、中夜奏胡笳、賊又流涕歔欷有懷土之切、向曉復吹之、賊並棄圍而走、

聊戲庵中人、空飛本無迹、柳子厚詩、飛鳥無遺迹

【聊】は語の辭少と云意あり、聊か庵中の人に戲に申ことあり、嘗て庵前にて仙人の足跡の大なるを見られたると聞たり、仙人は神幽幻妙也、たとひ聲は聞とも形は不可見、風に御し氣に乘て飛行す、地に就て

【和】と云に數種あり、前漢より盛唐のころまでは詩意を和し答て韻を不和、偶〻人の詩の韻に依て和するもあれとも必す人の詩の韻脚を襲に非す、白樂天元稹か時に至て盛に韻を次て和することを尙へり、白樂天元稹劉禹錫等家花車斜の四字を韻に押て三人各二十首の詩を賦す、それより宋に及て東坡山谷なと次韻の詩甚多して不依韻意ばかりを和するの詩は却て稀也、此東坡の詩も韻を次たる和也、○都玄敬詩話云、古人詩有唱和者、蓋彼唱而我和之、初不拘體製、兼襲其韻也、後乃有用人韻以答之、觀老杜嚴武詩可見、然亦不一一次其韻也、至元白皮陸諸公始尙次韻、【韋蘇州】は韋應物也、應物蘇州に刺史たり、故に韋蘇州と稱する也、注東坡詩集卷四載此詩、其自序云、羅浮山有野人、相傳葛稚川之隷也、鄧道士守安山中有道者也、嘗於庵前見其足迹二尺許、紹聖二年正月十日予偶讀韋蘇州寄全椒山中道士詩云、今朝郡齋云云、乃以酒一壺依蘇州韻作詩寄之、【羅浮山】、大明一統志八十、惠州府羅浮山在博羅縣西北三十里、卽道書十大洞天之一、【葛稚川】、晉書列傳四十二、葛洪字稚川、丹陽句容人也、少好學、家貧窮自伐薪以貿紙筆、夜輒寫書誦習、以儒學知名、尤好神仙導養之法、從祖玄吳時學道得仙、號曰葛仙公、以其煉丹祕術授弟子鄭隱、洪就隱學悉得其法焉、【隷】、字彙隷賤稱、師古曰、屬著人也、增韻僕隷也、

東坡

宋史列傳九十七、蘇軾字子瞻、嘉祐二年歐陽修考試禮部進士、梅堯臣得軾論刑賞以示修、修驚喜欲以冠多士、疑門生曾鞏所爲乃寘第二、修謂堯臣曰、老夫當辟此人放出一頭地、安石用事、上欲用軾修中書條例、安石曰、軾與臣所學皆異、別試以事可也、乃寘軾官告院、四年安石欲變更科擧、使兩制三館議之、上得蘇軾議乃止、卽日召見問政、軾曰云云、安石愈恨、軾乃乞外通判杭州、自杭徙密、軾旣補外見事有不便者、頗託事以諷、言事者摘其語以爲謗、遂以黃州團練副使安置、軾幅巾芒屩、與田夫野老時々相從、築室東坡、自號東坡居士、神宗手札移軾汝州、軾未至汝上書自言、有田在常願得移居、奏入報可、哲宗卽位召爲禮部郎中、元祐二年遷中書舍人、尋除翰林學士、二年復除侍讀、建中靖國元年六月病遂

任洛陽丞、貞元初出爲蘇州刺史、○鍾伯敬曰、韋蘇州等詩胷中腕中皆先有一段眞至深永之趣、落筆自然清妙、非專以淺澹擬陶者、世人誤認陶詩作淺澹、所以不知韋詩、

今朝郡齋冷、忽念山中客、澗底束荊薪、歸來煮白石、（荊者木也、薪者柴也、白石煮之如芋可食也、思道士束澗薪來煮白石之樂也、）

【郡齋】は郡守所居の齋也、【冷】はさびしき意也、齋中冷淡にてさびしきに依て忽山中の客即道士のことを念ふと也、三四の句は道士のありさまを想ひやる也、常に澗底に下りて荊の薪を採り束て自ら搬て家に歸來り仙者の飧物なれは白石を煮て食せらるゝにてあらんと也、注〔荊者木也〕、字彙荊木名、爾雅翼凡木心圓、荊心方、【白石】、正宗云、陶隱居眞語云、斷穀入山、當煮白石子、以此爲糧、抱朴子內篇云、引石散以方寸匕投一斗白石子中以水合煮之、亦立熟如芋子、可食以當穀也、

遙持一盃酒、遠慰風雨夕、（韋詩、何時風雨夜、復此對床眠、）

唐詩歸廿六載此詩、遙持一盃酒作欲持一盃酒遠慰風雨夕、遙に此方より一盃の酒を携へ持て遠く山中に尋行て道士と共に話て風雨の夜のさびしさを慰せばやと思ふ也、注此詩は即ち韋應物か元常全眞二生に與し詩也、韋應物か詩を解するに又韋か詩を引て證とす何事ぞや、

落葉滿空山、何處尋行迹、（詩謂坐郡齋而思憶道士山中之樂、何時持酒慰此牢落、但見落葉遍山、而道士不見爾、）

已に酒を持て訪ん思へとも又想ふに今木葉飄零の時なれは定て落葉遍く空山に滿て徑路を埋沒すへし、然らは道士の居所は何の處に在や行迹を尋ね求むへきやうなからんことを思ふと也、注全篇の詩意を注する也、【慰此牢落】、此は我か齋中のさびしさを指す、【牢落】は文選の上林賦の李善か注に、猶遼落也、さびしく心不樂貌を云也、蕭索の意也、

○和韋蘇州詩寄鄧道士

（坡自序云、羅浮山有野人、相傳葛稚川之隸也、鄧道士守安嘗於庵前見其足迹、長二尺許、以酒一壺依蘇州韻作寄之、）

才名の高きこと三十年の間世に振ひ聞へし人と云意、【坐客】は罪に坐せられたる客と云義也、逐客と云類也、さしも才名高かりし鄭虔なれとも今は官をとされて坐客となり飢寒甚して氈を一つ敷くべきふせいもなき體なると也、注【呉隱之】、傳は第一卷貪泉詩の下に見へたり、【度支尚書】、文献通考五十二云、魏文帝置度支尚書寺、專掌郡國支計、呉有戸部、而晉有度支、皆主算也、

近有蘇司業、時々與酒錢、

虔始爲廣文館學士、性嗜酒、不治事數爲官長所誚、怡然不以爲意、祿山反陷于賊、後竄歸、坐免官、故至貧窶、惟蘇源明重其才、乃時々給餉之、

結聯言は近ろ蘇司業源明か時々に酒を沽ふ錢を與て乏絶を贍し救るゝと聞く幸のことなりと云意を云へり注【不治事】、官事を治るに惰て心を不盡を云、【怡然】は字彙怡音夷、悅樂也、【不以爲意】、官長に誚らるゝを何とも不思少も意に介まざるを云也、【祿山】唐書列傳百五十云、安祿山營州柳城胡也、忮忍多智善億測人情、天寶二年入朝、奏對稱旨、進驃騎大將軍、又明年代裴冕爲范陽節度河北採訪使、仍領平盧軍、十四載冬十一月反范陽、詭言奉密詔誅楊國忠、騰榜郡縣兵凡十五萬號二十萬云云【陷于賊―】、安祿山反して亂を作したるとき鄭虔も安祿山に執へられたり、祿山水部員外郎の官を授たれとも鄭虔疾に託して不受、後に祿山か軍敗れし時鄭虔張通王維などゝ共に肅宗の方へ竄歸たれとも祿山方の亂賊なみに執へられたり、其後鄭虔は祿山に不與して無罪こと知れたるに因て殺れはせざれども賊中に陷て居たると云罪に坐せられて官を免せられたり、故に流浪して貧窮に及へり、惟蘇源明は鄭虔か才を愛重して時々に錢米を貽りて給し救はれしと也、【給】は贍也、【餉】は饋也、

○寄全椒山中道士

唐詩正音一下載之、題注全椒縣今屬鳳翔府、【道士】、前の李白か憶賀監の詩に見たり、

韋應物

才子傳四云、應物京兆人也、尚俠、初以三衞郎事玄宗、及崩始悔折節讀書、爲性高潔鮮食寡欲、所居必焚香、掃地而坐、冥心象外、天寶時扈從遊幸、永泰中

全集第二載之、【簡】事物紀原ニ曰、詩出車曰、畏此簡書、簡書者治竹煞靑作簡以書爾、今人直用紙名曰簡、以通慶弔問候之禮、取簡書之義尺牘類也、書を寄て消息を通するを簡すと云、詩を以て書に代て問候する故に同く曰簡也、【鄭虔】、才子傳二、虔鄭州人、高士也、蘇許公爲宰相、申以忘年之契、薦爲著作郎、玄宗愛其才、開元二十五年爲更置廣文館、虔爲博士、廣文博士自虔始、【蘇源明】、唐書列傳百二十七曰、蘇源明京兆武功人、初名預字弱夫、少孤、寓居徐兗、工文辭有名、天寶間及進士第、爲同子司業、【司業】、事文類聚新集三十一云、隋煬帝大業三年於國子監初置司業一人、唐置二人、從四品副貳祭酒、通判監事、凡祭酒司業皆儒事之官、非其人不居、又云司國子之敎、

杜子美

廣文到官舍、繫馬堂堦下、醉即騎馬歸、（山簡傳日暮倒載歸、酩酊無所知、時々能騎馬、倒著白接䍦、）頗遭官長罵、

【廣文】は鄭虔か官を指て呼也、官舍は即廣文舘を指す、虔官舍に出ては馬を階の下に繫きをきて若酒に醉はやがて其馬に騎て我か家に歸也、放達にて官事に心を不盡に依て官長の人にたび〱罵り詰られしと也、司業は祭酒に副ふ官なるほとに官長と云は祭酒なとを指て云へし、【注】晉書列傳十三、山簡字季倫、司徒濤之子、溫雅有父風、永嘉中爲征南將軍、鎭襄陽、四方寇亂天下分崩、朝野危懼、簡優游卒歲、唯酒是耽、諸習氏荊土豪族、有佳園池、簡每出多之池上、置酒輙醉、名之曰高陽池、時有童兒歌曰、山公出何許、往至高陽池、日夕倒載歸、酩酊無所知、時々能騎馬、倒著白接䍦、擧鞭向葛强、何如并州兒、【倒載】はうしろむきに馬に騎也、【酩酊】字彙云、酩酊醉甚貌、【無所知】、正體なく何事をも覺へぬを云、【白接䍦】、韻會支韻䍦字注云、接䍦白帽也、集韻或作䍦毦、通作攡、爾雅注睫攡江東取白鷺頭翅背上長翰毛、以爲睫攡、名之曰白鷺縗、晉山簡傳作接離、醉まぎれに帽子を倒になして着たる也、

才名三十年、坐客寒無氈、（吳隱之爲度支尙書、以竹蓬爲屛風、坐無氈席三十年、引此言虔之貧約、）

の注に非す、故に事實なくして杜撰すること多し、宋の嚴羽儀が滄浪詩話に已に其非を辨す、明の楊用修辨之最詳也、名けて僞蘇註と云、具に文集五十七杜詩東閣官梅の條下見たり、此より末に至て杜詩の下に於て此注僞蘇也と云者、皆傚之、〇宋蔡寬夫西淸詩話云、王荊公云天闕當作天閲、對雲臥爲親切、韋述東都記、龍門號雙闕、以與大內對峙若天闕焉、此龍門詩也、用闕字無疑、〇宋西郊野叟庚溪詩話云、杜子美遊龍門奉先寺詩、天闕象緯逼、雲臥衣裳冷、此寺在洛陽之龍門、按韋述東都記、龍門號雙闕、以與大內對峙若天闕、然此詩天闕指龍門也、後人謂、其屬對不切、改爲天闚、王介甫改爲天閲、蔡興宗又謂、世傳古本作天閲、引莊子用管闚天爲證、以余觀之、皆臆說也、且天闕象緯逼、雲臥衣裳冷、乃此寺中卽事耳、以彼天闕之高、則勢逼象緯、以我雲臥之幽、則冷侵衣裳、語自混成、何必屑々較瑣碎失大體哉、〇明楊升庵曰、杜工部龍門奉先寺詩、天闕緯象逼或作天閲、殊爲牽强、章表臣詩話、據舊本作天闚、引史記以管闚天之語、其見卓矣、余又按、文選潘岳秋興賦、闚天文之祕奧註、引陸賈新語楚王作乾谿之臺闚天文、杜子美精熟文選者也、其用天闚字正本此、況天文卽象緯也、不但用其字亦用其義矣、子美復生必以余爲知言、天闚闚天也、雲臥臥雲也、此倒字法也、言闚天則星河垂地、臥雲則空翠濕衣、見山中之殊於人境也、文集五十七〇明文翔鳳雲夢藥溪談云、天官鉞北北河、南南河、兩河天闕間爲關梁、蓋北河南河皆星名各三星、而正義又曰、闕丘二星在河南、天子雙闕、諸侯之兩觀亦象魏縣書之府、予謂黃河應天漢、而洛京之南爲伊闕、伊闕古所謂闕塞、蓋雙闕也、老杜龍門奉先寺詩、天闕象緯逼、雲臥衣裳冷、蓋謂伊闕應天闕云爾、而解者忽漫不詳、臥雲者伊陽之北山、卽鳴皐之派長殆百里、如雲臥然、龍門南直臥雲、或云然、老杜精核按天官地紀而命辭恐非漫拈語、〇淸朱鶴齡杜詩輯註云、按用修之說蓋主與宗、然丹陽記載、王茂弘指牛頭山兩峰爲天闕、見文選註、禹疏伊水北流、兩山相對、望之若闕、又見水經註、皆確據也、況此本古體詩、何必拘々偶對耶、

〇戲簡鄭廣文虔兼呈蘇司業源明

散する也、上の句風聲を云て山の寒きを云ひ、下の句月色を云て境の清を云、是聲色對と云也、注【梁昭明太子】、梁書卷八列傳第二、昭明太子統字德施、高祖長子也、所著文集二十卷、又撰古今典誥文言、爲正序十卷五言詩之善者、爲文章英華二十卷文撰三十卷、【月落—】、月は己に落て西入たれとも林影は猶殘りて不滅と也、杜子美此句の意に本て作れるかと云意に引たる也、

天闕象緯逼、（庾肩吾詩、侵雲似天闕、）雲臥衣裳冷、（孟浩然詩、雲臥晝不起、）

此二句古來論說紛々たり、詩尾に所載の數說參考すへし、集注の說謂らく、龍門は兩山對し峙て門闕の如し故に天闕と云、天の二十八宿を經とし五星を緯とす、五星二十八宿皆天象也、故に象の字を加て象緯と云、逼とは山高に因て天に逼り近きと云義也、龍門兩山對し峙て甚高く天象の星宿逼り近きと也、注【庾肩吾】、萬姓統譜、庾肩吾字愼之、八歲能賦詩、後隱居天臺、號天臺逸民、○梁書列傳四十三庾於陵傳、附庾肩吾字作子愼、侵雲とは山高して上み雲霄を侵し凌て天闕の如なると云意、杜子美此句中の字を採用ひられしとなり、【雲臥—】、山高きときは雲霧必す深し夜此寺に宿すれは雲の中に臥に似たり山雲の氣に衣裳皆濕てひやゝかなると也、此一聯天闕は地形を云、雲臥は人事也、屬對しかたきに似たり、故に諸說の同異多き也、注【孟浩然】、新唐書列傳百二十五文藝傳下、孟浩然字浩然、襄州襄陽人、隱鹿門山、浩然子美並に玄宗の朝の人也、浩然か詩杜詩の出處には引用がたし、只雲臥の字を用たる類を載たるまで也、

欲覺聞晨鐘、（庾信詩、山寺響晨鐘、）令人發深省、（陶淵明聞遠公議論謂人曰、令人頗發深省、）

【覺】は音敎、睡夢の寤を云、睡さめんとする時に山寺晨鐘の聲を聞也、注【庾信】、萬姓統譜、庾信字子山、肩吾子、俊邁絕倫、博覽群書、尤善左傳、仕梁爲抄撰學士、【令人—】、境致の清雅なる處に宿して平旦睡夢始て覺るころは心中自ら清虛なるへし、此の時晨鐘の從容として深山に響を聞は最深く省悟を發すへきことと也、注此註は杜詩千家分類註の中載たる蘇東坡か杜詩註の說也、然れとも妄人の僞作にて東坡の親著

十九、殯於岳陽、○朱晦菴曰、杜詩初年甚精細、晩年曠逸不可當、如自秦州入蜀諸詩分明如畫、乃其少作也、夔州以前詩佳、夔州以後自出規模、不可學、○遯齋閑覽、或問王荊公云、公編四家詩、以杜甫爲第一李白爲第四、豈白之才格詞致不逮甫也、公曰白之歌詩豪放飄逸人固莫及、然其格止於此而已、不知變也至于甫則悲懽窮泰發斂抑揚疾徐縱橫無施不可、故其詩有平淡簡易者、有綿麗精確者、有嚴重威武若三軍之帥者、有奮迅馳驟若泛駕之馬者、有淡泊閑靜若山谷隱者者、有風流醞藉若貴介公子者、蓋其詩緒密而思深、觀者苟不能臻其閫奧、未易識其妙處、夫豈淺近者所能窺哉、此甫之所以光掩前人而後來無繼也、○蘇子瞻曰、古今詩人衆矣、而杜子美爲首、豈非以其流落飢寒終身不用、而一飯未嘗忘君也歟、○唐詩訓解首卷王弇州評杜子美詩曰、五言古選體及七言歌行、以意爲主、以獨造爲宗、以奇拔沈雄爲貴、其歌行之妙、咏之使人慷慨激烈歔欷欲絕、

已從招提遊、更宿招提境、（僧史後魏始光元年、創立伽藍爲招提之境、）

【招提】、琅琊代醉三十二云、招提、梵語云柘鬪提奢、唐言四方僧物、訛柘爲招、去鬪奢留提故稱招提、即今十方住持寺也、招提は佛寺を云也、即奉先寺を指す、佛寺に遊ばやと思ふ念がふと起りしに因て其意に從て奉先寺へ行きたり已に寺に到りたれは又宿せんと思ふ意ありて更に其境に宿したる也、注【後魏】は拓跋氏十一主一百四十九年始于晉孝武帝太元十一年正月拓跋珪（道武帝）大會於牛川即代王位、終于梁武帝大通六年甲寅、而分爲東西魏、是を北朝と云也、【始光】、魏世祖太武帝年號也、【伽藍】、釋氏要覽云、伽藍梵語題云僧伽藍摩、或云僧伽羅摩、此云衆園、園者生植之所、佛弟子居之、取生植道本聖果之義也、或云毗阿羅、此云遊止處、

陰壑生靈籟、月林散清影、（梁昭明太子詩、月落林餘影、）

集注云、山北曰陰、壑山谷也、靈籟風也、山陰のをぐらく深き谷を陰壑と云、風を天籟と云こと莊子に見えたり、風吹けは萬物皆鳴る故に靈妙のふきものと云也、明月林を照して樹木の影清く鮮に地上に敷き

興歡樂する也、天氣と人情と今日乃相かなふて宜き也、注初に酒の來ること遲くて無興なりしか既に得て晩に東山の下に酌むときは猶春風流鶯の景物宛轉融和の時を不失して終に樂を極めしと也、

○遊龍門奉先寺

龍門在西京河南縣、一名闕塞山、一名伊闕、

本集一載之、【龍門】大明一統志二十九、河南府闕塞山在府城西南三十里、云云、一名伊闕、亦名闕口、俗名龍門山、【奉先寺】大明一統志二十九云、河南府奉先寺在府城南、

杜子美

新唐書文藝傳百二十六杜審言傳後云、杜甫字子美、京兆人、甫少貧、客吳越齊趙間、李邕奇其材、先往見之、舉進士不中第、困長安、天寶十三載玄宗朝獻太清宮饗廟及郊、甫奏賦三篇、帝奇之使待制集賢院、改右衛卒府冑曹參軍、會祿山亂天子走蜀、甫避地三川、肅宗立、自鄜州羸服欲奔行在、爲賊所得、至德二年亡走鳳翔、上謁拜右拾遺、與宰相房琯爲布衣交、琯時敗陳濤斜、以客董廷蘭故罷相、甫上疏言罪細不宜免大臣、帝怒詔三司雜問、宰相張鎬曰、甫若抵罪絕言者路、帝乃解、後從帝還京師、乃出爲華州司功參軍、時關輔饑、輙棄官去客秦州、負薪採橡栗自給、流落劒南、結廬成都西郭、召補京兆功曹參軍不至、會嚴武節度東西川、甫往依焉、武再帥劒南、表爲參謀撿校工部員外郎、武以世舊待甫甚善、親詣其家、甫見之或時不巾、武卒崔旰等亂、甫往來梓夔間、大歷中出瞿唐下江陵、泝沅湘以登衡山、因客耒陽、游嶽祠、大水遽至、涉旬不得食、縣令具舟迎還、饋之牛炙白酒、甫大醉一昔卒、年五十九、贊曰、唐興詩人承陳隋風流浮靡相矜、至宋之問沈佺期等研揣聲音浮切不差、而號律詩、競相襲沿、逮開元間稍裁以雅正、然恃華者質反、好麗者壯違、人得一槩皆自名所長、至甫渾涵汪茫千彙萬狀兼古今而有之、它人不足甫乃厭餘、殘膏賸馥沾丐後人多矣、故元稹謂、詩人以來未有如子美者、甫又善陳時事、律切精深至千言不少衰、世號詩史、昌黎韓愈於文章愼許可、至歌詩獨推曰、李杜文章在、光燄萬丈長、誠可信云、○薛益杜律分類註少陵紀略云、大曆四年己酉自岳陽至潭州、尋入衡州、復回潭州、庚戌在潭牽舟居、又值臧玠之亂、因避入衡州、欲往彬州不果、回潭謀歸襄陽、道卒、年五

望眼迷ふ也、【海戍】、文選恨賦、遷客海上、流戍隴陰、注海上隴陰沓邊鄙也、邊塞の戍卒ある邊を云、【揮鞭—】、鞭を揮て馬を驅て萬里遠きに行向ふ安んか戀々として香閨の妻妾を念ふことを得んや、只願ふ所は功を樹て名を異域に揚んことを思へは也、【香閨】、本集に作春閨、

○待酒不至　太白沽酒以待賓、久而酒不至、故賦此詩以寄興耳、

本集廿三載之、注太白酒を沽て賓客をもてなさんと思ふて人を沽にやりたれは久く待ども酒不來に因て此詩を作て座の興としたると也、待賓は待遇展待の待也、もてなしちそうするを待すと云也、竢待の待とは意別也、題の待酒の待は竢待の待也、

李太白

玉壺繫青絲、沽酒來何遲、山花向我笑、正好銜盃時、　杜生前相遇且銜盃

玉壺を青き絲を以て繫て酒を沽にやりたる也、酒を沽てやがて可還ことなるに待とも不至、何として遲きことやらんいぶかしき也、【何遲】、禮記夫子曰、賜爾來何遲也、【山花—】、酒を待間の景を云、酒は待とも不來少無興さに庭前をなかめ居れはをりふし山花あり心ありげに我が方に向て笑ふていにて開けたりこれに對して一盃傾けは最興あらん此好き時節に早く酒を持來れかしと云意也、酒を待の意言外にあり、【銜盃】盃を脣につけて傾るを云、劉伯倫酒德頌、銜盃漱醪、注杜甫醉時歌の落句也、第八卷に見へたり、生前は身の生てある間未死の前と云意也、不生の前には非す、

晚酌東山下、流鶯復在茲、春風與醉客、今日乃相宜、　得酒之遲晚酌於東山之下、猶及春風流鶯轉和之時也、

此四句は酒己に來て後を云也、【東山】、本集作東牕、言ろはとかく待間に酒を持來たり晚景に及て東牕の下にて相對して酌む幸に流鶯又茲に在て飛鳴して酒興を助ると也、流鶯は枝をこづたふてこゝかしこに遷り鳴を云、【在茲】、書經大禹謨念茲在茲、【春風—】春の風も融和して景氣のどやか也、客主醺醉して意

○紫騮馬

晉王濟乘馬、不肯渡水曰、馬必惜連乾障泥、去之乃渡、杜預曰、濟有馬癖、

本集六載之、題註士贇曰、樂府鼓角橫吹十五曲有紫騮馬、○說文騮赤馬黑毛尾、〔題注〕【王濟】晉書列傳十二、王濟字武子、少有逸才、風姿英爽、氣蓋一時、好弓馬、勇力絕人、濟善解馬性、嘗乘一馬、著連乾鄣泥、前有水、終不肯渡、濟云、此必是惜鄣泥、使人解去、便渡、故杜預謂濟有馬癖、○按連乾の障泥は作麼樣の物と云こと未詳、王濟か本傳又は事文類聚後集馬部引此故事、亦作連乾、但李白集齊賢注、作連錦障泥、又按に西京雜記二云、武帝得貳師天馬、帝以玫瑰石爲鞍、鏤以金銀鍮石、以綠地五色錦爲蔽泥、後稍以熊羆皮爲之、云云、由此考るに以連錦正とすへし、連紋の錦を以て障泥爲るなるへし、且詩に似惜錦障泥と云時は連錦の障泥なること疑なかるへし、連乾は傳寫の誤なるへし、【杜預】晉書列傳四、杜預字元凱、京兆杜陵人也、預博學多通、明於興廢之道、云云、時王濟解相馬、又甚愛之、而和嶠頗聚斂、預常稱、濟有馬癖、嶠有錢癖、武帝聞之謂預曰、卿有何癖、對曰、臣有左傳癖、【癖】韻會云、癖嗜好之病、

紫騮行且嘶、雙翻碧玉蹄、臨流不肯渡、似惜錦障泥、

此四句馬の形情を云、道を行なから嘶を行且嘶と云、【雙翻】は兩足を高くあげて前どりをして行貌を云也、【碧玉蹄】は馬の蹄堅牢にて碧玉の如なるを云、【臨流―】、故事を用て馬の情を云、嘗て流水に行臨てすまひて水を不渡馬の意己れか掛たる錦の障泥を濡んことを惜に似たり、障泥を解去れは便渡れり、心ある馬なりと云意、

白雪關山遠、黃雲海戍迷、揮鞭萬里去、安得念香閨、　乘之戍於關山之遠、寧憶春閨之人乎、

此四句は紫騮馬に騎て遠く征く人を云て馬の用を云也、【關山】、所の名を指すに非す、關路の山と云意也、文選江文通恨賦、紫臺稍遠、關山無極、江總詩、分手關山長、唐高適詩、岐路風將遠、關山月共愁、杜甫詩、戎馬關山北、憑軒涕泗流、と云の屬也、二句は道中の景を云、行々望めは關山に白雪の色見えて極りもなく遠し海戍の邊には黃雲へだゝり蔽てそこともなく

○嘲王歷陽不肯飲酒、

本集二十三載之、王歷陽名字未考、【歷陽】は唐地理志三十一、和州歷陽郡有歷陽縣、

李太白

地白風色寒、雪片大如手、笑殺陶淵明、不飲盃中酒、以陶淵明比方王歷陽

【地白】は冬は寒風烈して土乾に因て地色白けて見ゆる也、又雪の地に鋪たる色を可云か、然とも一句雪の將降景とし、二の句雪の已に來を云とせは、地白は土の乾きたる色と看て可ならんか、【雪片】、本集作雪花、雪のひら〳〵とふる一片の大さ掌の如く大なると也、風色寒して雪片大なり是酒を飲て寒を禦くへきの時也、【笑殺】は笑の甚を云、笑殺愁殺の類多し、笑甚愁甚の意也、俗に甚可笑ことを死ぬるほとをかしきと云と同し、陶淵明は本より酒を好む人也、今却て陶淵明不飲と云は此れ反言して嘲弄する者也、言こゝに一の今陶淵明と云人あり淵明ならは酒可飲こと也甚をかしきことは此陶淵明はかの盃中の酒を飲れぬことよと云意也、

浪撫一張琴、虛栽五株柳、空負頭上巾、三事並見上註、吾於爾何有、【語】何有於我哉、太白謂既不飲酒、則虛負張琴五柳與葛巾耳、

浪虛空皆嘲の辭也、今陶淵明も一張の素琴は撫らるれとも酒を不飲浪りに撫たるばかりにて琴を撫る本意には負也、又五株の柳も栽れとも酒を飲ざれは虛く栽たるばかりにて柳を愛する本意に負く也、最も頭上に葛巾を著らるれとも終に酒を漉すことなければ葛巾空く無用の物となりて巾を戴く意に孤負するなり、三の者一箇も本意に不契我爾に於て何か所取あらんや、如此はよき淵明と云べきかと嘲也、【注】論語子罕篇、不爲酒困、何有於我哉、此注何有の字の出處を引まで也、本文論語の何有の意と不同、【太白謂―】、酒を飲むときは琴を撫て柳を栽巾を戴て實稱へりと云へし、既に不飲酒ときは三の者虛空にして實に負也、

ると也、不知と云に題の戲の意寓する也、注本傳、宅邊有五柳樹、嘗著五柳先生傳以自況云云【株】、字彙、木根入土曰根、土上曰株、

素琴本無絃、陶潜蓄素琴一張、徽絃不具、毎撫而和之曰、但得琴中趣、何勞絃上聲、

漉酒用葛巾、王弘使郡將候之、値陶潜酒熟、乃取頭上葛巾漉酒還復戴之、

【素琴】は彫飾をなさゝる白木の琴を云、【無絃】、注徽絃不具絃をもかけず徽をも具へさる也、徽、字彙音揮、琴節曰徽、徽十有三象十二月、其一象閏、○文選文賦、絃幺而徽急、注翰曰、徽調也、【毎撫—】、毎に白木の絃なき琴を撫て鳴すことをせすして曰琴中の妙趣を心に會得せは不鳴とも樂みとすへし何そ絃上を彈して絲の鳴聲を求るに勞せんやと云り、【漉酒—】、注王弘萬姓統譜、王弘字體元、臨沂人、少好學、以清悟知名、仕宋有安社稷功封建安郡公、進位太保、領中書監、【使郡將候】、王弘甚た淵明を崇敬して常に郡將を遣て淵明を候問させて酒米なと乏絶すれは持せ送りて贍されたり、ある時に郡將みまひに行たれは淵明か家にかもしたる酒熟して飲とて我か頭の葛巾を取て酒をこして又其巾をかむりたる時節に行値たると也、

清風北窗下、自謂羲皇人、陶潜夏月虛閑高臥北窗之下、清風颯至、自謂羲皇上人、

北窗の下に夏日の閑なるとき高臥すれは涼しき清風吹來て身心清爽なること今世の人とも思れず、自謂ふに伏羲よりして以前の上古淳朴の世の人のやうに思はるゝと也、詳【虛閑】、夏月清虛にして無事安閑なるを云、【颯】は風の聲也、○以上の六句は淵明か事狀を敘て鄭溧陽か高尚頴脱なるに比する也、

何時到栗里、一見平生親、太白謂幾時得到鄭(萬曆本作陶)公所居之栗里、一見平生契舊之親、

【栗里】、本註、栗里在潯陽、淵明所居處、鄭溧陽を淵明に比す、故に鄭氏か居處を指て栗里と云也、此二句太白か鄭氏を思ふの意を云也、言ろは何の時か鄭公の在所に尋到て平生の親友に一見することを得んや、相見して欵談せんことを願ふと也、【平生親】、文選蘇子卿詩、願子留斟酌、敘此平生親、

たを思ひ出されよと云意也、【幸】はねがはくはと云義也、字彙云、幸冀望也、又好也、千里相思は本呂安が故事也、晉書列傳十九、嵇康字叔夜、性巧而好鍛、東平呂安服其高致、毎一相思輙千里命駕、康友而善之、

○戲贈鄭溧陽　太白高尚其志、自得酒中之趣、笑傲流俗、自以淵明比方也、

本集十載之、【戲】は全篇比方して淵明とする、是戲言なり、【溧陽】、本集注、唐昇州江寧郡溧陽縣、嘗隸宣州、鄭姓にて溧陽の令などになりたる人なるへし、名字今考へがたし、【注】【高尚】、易蠱卦上九、不事王侯高尚其事、程傳是賢人君子不偶於時、而高潔自守不累於世務者也、道を不屈して自ら身を高ぶり尚ふするを云、尚は尊也、【酒中之趣】、晉書列傳六十八孟嘉傳、嘉好酣飲、愈多不亂、桓溫問酒有何好而卿嗜之、嘉曰、公未得酒中趣耳、酒を飲て心の樂みある興趣を云也、【笑傲】、あざわらふ也、傲は慢也、倨也、【流俗】は世間凡流の俗輩也、【比方】比配也、方類也、人と人とを比たくらぶるを云、太白自の身を陶淵明にたくらべ合する也、○玄輔按に、題註太白以淵明自ら比方すと云は誤也、此詩鄭溧陽を以て淵明に比す、太白自ら比するに非す、此註に太白自ら比すと云者は想ふに誤て第一句陶令の二字を見て白か此詩淵明彭澤に在の時に擬して作ると看に因て也、故に七の句何時到栗里と云を以て淵明舊里に歸んと思の意となして說全篇淵明か事とす、然れとも漉酒清風皆淵明歸隱して栗里に居る時の事也、彭澤在時の事に非す、既に栗里に居て又何時到栗里と云は文理に於て不通也、愚見に此詩首句より第六句までは淵明を以て鄭溧陽に比す、七八の句は太白鄭溧陽を見んことを想ふの意を云、故に云何の時か到て相見することを得んやと也、

李太白

陶令日日醉、陶淵明為彭澤令、不知五柳春、

陶潛門前種柳五株、自號五柳先生、

陶淵明嘗て彭澤の令となりしに因て陶令と稱する也日々酒に醉て門前五株の柳の樹にはいつのまに春か來て綠を垂るやらん不覺してめたと醉て日を送

亡て景物も變し改ることを念へは杳然として一夢の間の如くなると也、【杳】は冥也寂也、【淒然】は悲痛也、昔を憶ひ悲み痛て感慨の情を傷ましむると也、

○送張舍人之江東　送張翰爲江東行役詩寓別懷

本集十六載之、張姓の舍人の官なる人を送る也、名字不可考、【題注】に張翰とす、非也、唐の世に張翰と云人史冊に不見、詩に張翰と云は晉の張翰也、江東に之く舍人の官なる人偶〻張姓なるに因て晉の張翰に比して作れる也、註に舍人は即ち張翰なりと云は是影を認て形に迷ふ者なり、【江東】、正宗云、江東今建寧府太平寧國等處、

李太白

張翰江東去、正値秋風時、

此張翰は即是晉の張翰季鷹也、張翰は秋風の起を見て感を與して命駕歸し人也、今張舍人か江東行も亦秋也、姓と時と偶〻相同きに因て張舍人を指て張翰とし今江東に行去、又正に秋風起の時に相値と云也、晉書張翰字季鷹、呉人、有淸才善屬文、而縱任不拘、時人號爲江東步兵、既入洛、齊王冏辟爲大司馬東曹掾、翰因見秋風起乃思呉中菰菜蓴羹鱸魚膾曰、人生貴得適志、何能羈宦數千里以要名爵乎、遂命駕而還、

天晴一雁遠、海闊孤帆遲、白日行欲暮、滄波杳難期、呉洲如見月、千里幸相思、

【天晴】、本集作天淸、天晴て以下の四句は道中の景を云也、天氣晴て蒼々たる高空に雁の一隻遠く飛ひ去を遙に眺らるゝ時もあらん也、【海濶—】、渺々と濶き海上に孤舟に帆を掛て風に任さは舟の行ことも一しほに遲きやうに思はれんと也、【白日—】、白日も舟の行くに隨てそろ〳〵と暮に及べとも尙行さきの滄海の波は杳々とはるかにて邊際もなく早晩行盡すへきと云期も料りがたからんと也、【白日】、古樂府白日薄西山、【杳】は冥也、深也、【呉洲—】、七八句江東へ到着て以後を云也、言呉洲にて若月を見られたらは李白も亦此月を見にてこそあらんと千里のこ

の酒ずきにて飲中の八仙と呼れし人也、【今爲—】、今は死亡て松下の土に埋れ化して塵となりたるとなり、【金龜】、事物紀原三曰、實錄曰三代以韋爲之、謂之算袋、魏易之爲龜、唐高祖給隨身魚、三品以上其飾金、五品以上其飾銀、故名魚袋、天后改爲龜、後復曰魚、○楊升庵集六十云、佩魚始於唐永徽二年、以魚爲李也、武后天授元年改佩龜、以玄武爲龜也、杜詩、金魚換酒來、蓋開元中復佩魚也、李白憶賀知章詩、金龜換酒處、蓋白弱冠遇賀知章、尚在中宗朝、未改武后之制、金龜は官人腰に佩る具也、知章白と相見せし時酒を市とて錢をやらずして腰なる金龜を解て酒に換させて白と倶に飲て歡を盡したる風流の人也、今其昔を憶は涙流て沾巾と也、

又

狂客歸四明、山陰道士迎、敕賜
鏡湖水、（按賀知章自號四明狂客、因請爲道士還鄉里、詔賜鑑湖剡川一曲、）爲君
臺沼榮、

知章天寶初偶〻病るとき仙帝の居所に遊と夢後道士になりたきと天子に請て官を還して鄉里に歸を【歸四明】と云也、【山陰】、大明一統志四十五紹興府、有山陰縣、【道士】、事文類聚前集三十四云、人行大道號曰道士、士者何、理也事也、身心順理、唯道是從、從道爲事、故稱道士、山陰の道士も出て知章か歸を迎たると也、知章か神仙の骨氣あるに因て諸道士も感遇して相與するの意を云也、【敕賜】は知章か請に因て玄宗皇帝の勅命にて下し賜ふ也、【鏡湖】、大明一統志浙江紹興府、鏡湖在府城西南三十里、注【一曲】、字彙云、鄉里曰鄉曲、俗に云一在所なり、【爲君—】、爲は天子より爲し賜ふ也、君は知章を指す、居宅を千秋觀となし、湖を以て放生の池となすこと皆忝も玄宗の勅詔を以て知章か鄉里の榮名を爲したまはる也、【臺】、韻會觀、四方而高者也、【沼】、字彙圓曰池、曲曰沼、

人亡餘故宅、（知章已亡尚存故宅、）空有荷花生、
念此杳如夢、（思之杳然如夢、）凄然傷我情、

【人亡—】注知章は已に死亡して其故宅はかりは尚不滅して存する也、【空有】、主人亡して看者あることなし故空く荷花はかり有と云也、【念此—】、歲逝き人

章晚節尤誕放、遨嬉里巷、自號四明狂客、【風流】前漢書六十九趙充國贊曰、風聲氣俗自古而然、今之歌謠慷慨風流猶存耳、○後漢七十二上樊英傳論曰、漢世之所謂名士者、其風流可知矣、雖弛張趣舍時有未純、於刻情修容、依倚道藝以就其聲價、非所能通物方弘時務、○文選嵇叔夜琴賦、其體製風流莫不相襲、又沈休文謝靈運傳論云、周室既衰風流彌著、○玄輔按に風流の二字前漢已に有之其自來ること久し但漢書文選等風流の字義は流俗遺風の意に用たり、唐の詩人風流の字を用ること多し、皆風雅洒落の意に用たり、盃觴談笑客風流、一時賓主盡風流と云類是也、李白か集中風流の字を用ること尤多し、風流自簸蕩、謔浪偏相宜、又氣岸遙凌豪士前、風流肯落他人後、又山公醉後能騎馬、別是風流賢主人、此等の詩意漢書に所謂風流の字義と不同、唯杜子美か丹青引に英雄割據雖已矣、文彩風流今尚存、と云者は遺風遺俗の意に用て漢書の字義と相合す、其他の詩人風流を以て遺風の義となして用ること最少也、按に晋書の樂廣傳云、天下言風流者、謂王樂爲稱首焉、云云、此傳に所言風流の字風雅瀟洒の義にして遺風遺俗の意に非す、唐人風流の字を用ること蓋し樂廣か傳に本くか、臆見如此、不知果して然るや否、【季眞】は知章か字也、二句言ろは四明たかぶり狂したる客と號する人あり、即ち風流の賀知章のことゝ云意也、

長安一相見、長安京兆府也　呼我謫仙人、知章在紫極宮一見呼白爲謫仙、謫降也、

白傳云、白天寶初、自蜀至長安、道未振、以所業投賀知章、讀至蜀道難歎曰、子謫仙人也、乃解金龜換酒相樂、遂薦於玄宗、【長安】註前に詳也、【謫】註降也、くだると訓す、字彙、謫責也、罰也、謫仙人は上界の仙境より罰せられて人間に降りたる仙人と云意也、知章白か詩を見て其英才凡人の倫にてなきと云意にて白を謫仙人と呼ふ也、

昔好盃中物、盃中物酒也、今爲松下塵、金龜換酒處、知章見李白、因解金龜換酒盡歡而罷、却憶淚沾巾、

【盃中物】は酒也、陶淵明詩、且進盃中物、知章は名譽

の氣象可想見、○野村先生嘗曰、義之か鵝を籠にし去て主人に不辭と、晉の桓伊爲王徽之笛を吹て三弄し畢て去るとき不交一語と、倶に是清眞瀟洒の風趣乃同日之談也、事文類聚續集二十三云、桓伊善音樂、畜一蔡邕蜀亭笛、嘗自吹之、王徽之泊舟靑溪側、素不相識、伊於岸上過、客稱伊小字曰、此桓野王也、徽之使人謂曰、試爲我奏、伊時貴顯、素聞徽之名、便下車踞胡床而作三調弄、畢便上車去客主不交一語、

○對酒憶賀監二首

本集二十三載之、并序曰、太子賓客賀公於長安紫極宮一見余、呼余爲謫仙人、因解金龜換酒爲樂、悵然有懷而作是詩、【賀】は賀知章也、【監】は秘書監也、新唐書列傳一百二十一隱逸傳云、賀知章字季眞、越州永興人、性曠夷善談說、與族姑子陸象先善、象先嘗謂人曰、季眞清談風流、吾一日不見則鄙吝生矣、證聖初擢進士、累遷太常博士、肅宗爲太子、知章遷賓客、授秘書監、晚節尤誕放、遨嬉里巷、自號四明狂客及秘書外監、天寶初病夢遊帝居、數日寤、乃請爲道士還鄉里、詔許之、以宅爲千秋觀而居、又求周宮湖數頃爲放生池、有詔賜鏡湖剡川一曲、既行帝賜詩、皇太子百官餞送、卒年八十六、○唐詩歸六載、玄宗送賀知章歸四明并序、天寶三年太子賓客賀知章鑒止足之分、抗歸老之疏、解組辭榮志期入道、朕以其年在遲暮、用循挂冠之事、俾遂赤松之遊、正月五日將歸會稽、遂餞東路、乃命六卿庶尹太夫供帳靑門、寵行邁也、豈惟崇德尚齒、亦勵俗勸人、無令二疏獨光漢冊、乃賦詩贈行、遺榮期入道、辭老竟抽簪、豈不惜賢達、其如高尚心、寰中得秘要、方外散幽襟、獨有靑門餞、群僚帳別深、○【秘書監】、事文類聚新集二十九云、唐龍朔二年改秘書省爲蘭臺、改監爲大史、天授初改秘書省爲麟閣、神龍初復舊、掌經籍圖書云云、秘書監は邦國の經籍圖書を典て古今の文字同異あるを考合することを掌る官也、

李太白

四明有狂客、風流賀季眞、（知章字季眞、自號四明狂客、）

【四明】、正宗云、四明今慶元府、【狂客】、知章傳云、知

若游雲、若驚龍、仕至右軍將軍會稽内史、卒年五十九、【右軍】、文獻通考五十九云、前後左右將軍皆周末官、秦因之、位上卿、金印紫綬漢不常置、或有前後、或有左右、皆掌兵及四夷、光武建武七年省、魏以來復置、晉武初又置左軍右軍前軍、云云（此詩木集廿二載之、

李太白

右軍本淸眞、（右軍即羲之）瀟洒出風塵、
山陰遇羽客、愛此好鵝賓、掃素
寫道經、筆精妙入神、書罷籠鵝
去、（山陰有道士、好養鵝、羲之往觀求而市之、道士云爲我寫道德經、擧群相贈、羲之寫畢籠鵝而歸、）何曾
別主人、

王右軍の資質は本より淸らかにして外の飾なく眞なる人也、【淸眞】、羲之本傳云、征西將軍庾亮稱羲之淸眞有鑒裁、【瀟洒—】、孔德璋北山移文、瀟洒出塵之想、文選註良曰、瀟洒脫落也、さはやにしてすゝぎたてたる如くにて世間の風塵を脫出したる人品と云意、【山陰】、正宗注、山陰越州會稽北曰陰、今紹興府邑名、○勝覽秦始皇移在會稽之北、故曰山陰、會稽山の北にあるに因て山陰と云、【羽客】、正宗注、羽客道士也、仙術を學ぶ道士を云也、【愛此好—】、愛字を要字に作は誤也、今從本集、好鵝賓は即王右軍指也、山陰の道士か好鵝の賓客羲之を愛敬して迎へ入る也、【掃素—】、素は絹也、絹をのべてさら〱と掃ふか如く道德經を寫す也、【筆精】、文選江文通別賦、淵雲之墨妙、嚴樂之筆精、筆法の精しき妙を盡して聖神の至極に入也、【書罷—】、道德經を寫し畢とやがて道士が養ひおきし鵝を籠に入させて歸去也、【注】本傳の文と少異也、本傳山陰有一道士、養好鵝、羲之往觀焉、意甚悅、固求市之、道士云爲寫道德經、當擧群相贈耳、羲之欣然寫畢籠鵝而歸、甚以爲樂、云云【市】、字彙買物曰市、又買賣皆曰市、【擧群】、擧皆也、群鵝を不殘皆贈らんと云義也、【何曾—】、此結句首句に應ず、右軍か淸眞瀟洒全此一句にあり、山陰に往は爲鵝にして道士を見んと云意なし、經を寫鵝を得んが爲にして道士の爲にするに非ず、經を寫し畢て鵝を得るときは願已に足れり、何ぞ曾て主人の道士に對して告別の辭を爲んや、ものをも不言鵝を携て出去る、其淸眞

に詳也、夕の露衣を沾て往來の礙となるの故に因て願の違て志の遂け難きこと多くあると也、草露衣を沾すを小人の賢者を譛するに因て賢者の願多くは不達に比する也、○此詩註に因て比の體と作て說く、然とも田家農事の狀を言ふ詩とばかり看て妨なからんか、譚元春か評に由て見べし、凡その詩を比となして看るときは詩意を探索こと穿鑿多し或は詩人の本意を失ことあらんか、

○問來使

本集載之、本集評東磵曰、此盖晚唐人、因太白感秋詩而僞爲之、淵明か彭澤の令にて在し時鄕里より來る使に山中の景象を問て遂に歸て隱居せんと思ふ心を言ふ也、

陶淵明

爾從山中來、早晚發天目、（天目山名、在今杭州、）

爾山中より來ときはいつのころか天目山を發して來るや先つ來たる時節を問て其時の景物を又問也、【天目山】、大明一統志三十八杭州府、天目山在臨安縣西五十里、爲道家第三十四天洞云云、

我屋南山下、今生幾叢菊、薔薇葉已抽、秋蘭氣當馥、歸去來山中、山中酒應熟、（陶淵明心在歸隱、因來使而問南山之菊山中之酒、）

我か鄕里の居は南山の下に屋をかまへたると也、【幾叢】、俗にいくかぶと云義也、字彙叢徂紅切、聚也、草叢生貌【葉已抽】は新條のづわい秀たるを云也、【馥】、字彙馥音福、香氣也、【歸去來】、來字は付け字也、歸去んと云意まで也、山中の使に逢舊里の景物を聞に因官を辭して去んと思ふ心愈〻切なり故曰いざ山中に歸らん山中には酒も熟してあらんほどに景色を盼て自酌て娛んと也、註【歸隱】は彭澤の令を辭して柴桑の舊里に歸て隱居せんと思ふの意也、

○王右軍（寫經換鵝、）

晉書列傳第五十、王羲之字逸少、祖正尙書郞、父曠淮南太守司徒導從子、年十三謁周顗、顗異之、時重牛心炙、坐客未啖、顗先割啗之、於是始知名、及長辯贍、以骨鯁稱、尤善隸書、爲古今之冠、論者稱其筆勢、

又云、【陳重】、字景公、豫章宜春人也、少與同郡雷義爲友、大守張雲擧重孝廉、重以讓義前後十餘通記、雲不聽、重後與義倶拜尚書郎、義代同時人受罪、以此黜退、重見義去亦以病免、後除細陽令、政有異化、後爲司徒所辟拜侍御史、

○歸田園居　言小人多而君子少

本集二載之、六首之一也、註【言小―】、此篇の意は世間小人は多して君子の小を物に托て言へる也、

陶淵明

種豆南山下、草盛豆苗稀、

豆を南山の下に種るに草盛に滋きに因て豆の苗は却て稀になりて生長しがたき也、豆を君子に比し、草を小人に比する也、

侵晨理荒穢、言田園種豆在於去穢草、如朝廷用賢在於去小人 帶月荷鋤歸、【荷】胡可切、

【侵晨】、本集作晨興、平明に霧をはらうて起るを侵晨と云、山下草荒て豆苗長しかたきに依て早朝より出て苗間の荒蕪を鋤ひらき穢草を刈除て終日勞苦して日暮月出るころに鋤をうちかたけて家に歸也、帶月は月の光を身に受けて歸を帶と云也、註詩意言は田園に豆を種ては豆間の草を鋤除か肝要也朝廷に賢者を用には賢を妨くる小人を黜け去をよしとするか如しと也、

道狹草木長、夕露沾我衣、衣沾不足惜、但使願無違、東坡曰、以夕露沾衣之故而違其所願者多矣、

暮に田間の路を歸れは道狹して草木盛に長し露特に早く置に因て夕露深して我か衣を濕すと也、朝廷賢者を進るの道狹く恩露を受るの小人多して賢者を碍へ黜るに比する也、○譚元春評曰、高堂深居人、動欲擬陶、陶此境此語、非老於田畝不知、【衣沾不―】、衣の夕の露に沾は惜に不足但草を刈り豆を肥さんと欲し願をは違ふ事無らしめて豆を收るやうにと思に因て侵晨山下に行き暮るまで耘て露に衣を沾して歸の意也、【東坡】、傳は此卷末和韋蘇州詩の詩下

繒也、○翰曰、綺羅之類、【一端】、孔叢子小爾雅云、五尺謂之墨、倍墨謂之丈、倍丈謂之端、倍端謂之兩、倍兩謂之疋、【相去—】、夫の在所は此を去こと一萬餘里の遠方也、然に今便に托て綺を寄す故人の我を忘れ棄ざるの心尚如此厚と也、別れて已に久に因て夫を指て故人と云也、【爾】はかくあると云意也、夫の心尚をかくあると云は上の綺を寄るを云、又下の句鴛鴦の紋あるを遺るの心を覺て云也、上を承け下を起す句也、

文綵雙鴛鴦、裁爲合歡被、著以長相思、緣以結不解、

【文綵】、綺に織つけたる地紋也、呂延濟注、綺上文綵爲鴛鴦文、【鴛鴦】はをし鳥也、事文類聚後集卷四十六云、鴛鴦水鳥、鳧類、雄雌未嘗相離、人得其一則一者相思死、故謂之匹鳥、【裁爲—】、綺に鴛鴦の文綵あるときはそれを寄る夫の意可想見故に我も此綺を裁製して合歡の被と爲也、是夫妻同歡の意也、延濟注、合歡被以取同歡之意、【著以—】、善曰、鄭玄儀禮註著謂充之以絮也、翰曰、言被中著綿、謂長相思綿々之意、綿々は不絶也、被に綿を納るは夫を長く相思ふて暫も不絶と云意を象る也、【緣以—】、善曰、鄭玄禮記註緣飾邊也、翰曰、緣被四邊綴以絲縷、結而不解之意、被の四邊に緣を爲て表裏を合せて絲を以てとぢて離れざる樣にする也、以此相親むの意、結て解けさるの義に象とる也○說郛十八侯鯖錄云、文選古詩云、云云、註被中著綿謂之長相思綿々之意、緣被四邊綴以絲縷、結而不解之意、余得一古被、四邊有緣、眞此意也、著謂充以絮、

以膠投漆中、（膠漆如雷陳膠漆之義、取其堅固也、）**誰能別離此、**

夫妻萬里に隔り居とも其情相結て不解こと膠を漆中に投し加て器を糅て堅固なるか如し誰か能これを間て妨て別離せしむる者あらんやとなり、[注]【雷陳】、後漢書列傳七十一獨行傳、雷義字仲公、豫章鄱陽人也、初爲郡功曹、後擧茂才、讓於陳重、刺史不聽、義遂佯狂被髮、走不應命、鄉里爲之語曰、膠漆自謂堅、不如雷與陳、三府同時俱辟二人、義遂爲守灌謁者、

に斷去れば身を不レ害也、若猶豫て不レ決腕を斷ち不レ得ば毒氣遍身に流行して即時死する也、

所レ思在ニ功名一、離別何足レ歎、大丈夫之志在ニ於功名一、離別何足ニ歎息一也、

大丈夫の志し思ふ所は功を樹名を顯すに在り一旦離別の情何ぞ歎息し悲むに足んや、故に離別の哀情を決斷して涙を洒がざる也、○詩林廣記九載ニ此詩一、評云、大丈夫以ニ功名意氣一自許、大笑出レ門、何涙之有、此詩慷慨激烈有ニ男子心一、回ニ視郵亭一、手執ニ杯酒一、陽關哽咽、凄凉昵々作ニ兒女語一者、良可レ鄙矣、因記ニ羅隱涙詩一云、自ニ從魯國潜然後一、不レ是奸人即婦人、孔叢子云、子高遊レ趙、平原君客有ニ鄒文季節者一、與ニ子高一相友善、臨レ別文節流レ涕交レ頤、子高抗レ手而已、其徒疑レ之、子高曰、始吾謂ニ二子丈夫一、乃今知ニ其婦人一也、曰二子之泣非耶、曰二子良人也、有ニ不レ忍之心一、其於ニ敢斷一必不レ足矣、曰凡泣者一無レ取乎、子高曰、有レ二焉、大奸之人以レ泣自信、婦人懦夫以レ泣著レ愛、羅詩蓋本ニ諸此一、因併及レ之、

○古詩

以ニ合歡被一譬ニ喩故人相與之情一、如ニ以レ膠投レ漆之固不一レ能ニ釋然一也、

文選十九首の第十八詩也、○文選注李善曰、並云ニ古詩一蓋不レ知ニ作者一、或云枚乘、疑不レ能レ明、○呂向曰、不レ知ニ時代一又失ニ姓氏一、故但云ニ古詩一、惣じて古詩云は作者の名字も不レ知作れる時代もたしかに不レ知をは古人の詩と云意にて例して古詩と云也、注此註題註に非ず、善本を以て考るに【以合―之情】、此十二字本文第四句被字の下にあり、【如以―然也】、此十二字本文第七句中字の下の註也、此題注を本文の下へうつして見へし、【譬喩】物を借てたとふる也、【釋然】はとける義也、○文選此詩第二句綺韻の下に有ニ一聯一、相去萬餘里、故人心尚爾、此二句此本に遺脱す、若此一聯を省ば綺を遺る者何人と云ことを不レ知、只客の自ら遺り與へたるに似たり、此詩の意綺を轉達するは遠方の客也、寄せ遺る者は實に夫也、故に故人と云、然則二句必不レ可レ欠、故に今本文此二句を補入て解釋す、

客從ニ遠方一來、遺ニ我一端綺一、綺繒綉綵錦、一端一段也、**相去萬餘里、故人心尚爾、**

客遠方の國より歸來て我が所へ遠方の人より寄たる一端の綺を達し遺りたる也、【綺】、善曰、說文曰綺文

也、譬猶人形一丈正形也、名男子爲丈夫、尊公嫗爲丈人、不滿丈者失其正也、雖失其正也猶乃爲形也、○霏雪錄云、世稱丈夫者、蓋周制以八寸爲尺、十尺爲丈、長八尺故曰丈夫、大丈夫も生質涙の無と云には非す眞人に離別する時には曾涙を洒くことは無と也、【間】は時と云意也、座間には非す、注【態】は樣子と云意也、兒女の人に離別する樣子の如にはせさる也、

仗劍對樽酒、（仗劍對酒、精神自奮、）**恥爲游子顏、**（羞作遠遊之子有戚々之顏貌、）

【仗劒】は劒を拄て身少く前に俯す貌を云、是精神自奮發して意氣豪壯なる體也、【恥爲―】遠くへ游行する男子の別に臨てなごりをしげにしほ〳〵となる顏色をなさんは中々耻かしきことに思ふ也、【游子】、たびだつ者を云、李陵別蘇武詩、携手上河梁、游子暮何之、注【戚々】は憂也、論語述而篇云、小人長戚戚、○前漢書楊雄傳云、雄少嗜欲、不汲々于富貴、不戚々于貧賤、

蝮蛇一螫手、壯士疾解腕、（剛毅決裂之性、如毒蛇傷手、急須斷其手腕、恐毒入身也、【螫】音釋、【腕】烏貫反、）

【蝮虵】、字彙云、蝮虵至毒也、○博物志云、蝮虵秋月毒盛、嚙草木以泄氣、草木即死、○前漢書三十三田儋傳曰、齊王曰、蝮蠚手則斬手、蠚足則斬足、何者爲害於身也、註應劭曰、蝮一名虺、螫人手足則割去其肉、不然則死、此二句丈夫別れに臨で激烈の貌を象也、仗劒對酒離別をは情に不介戚々たるの顏色なきは決斷に果せる者也、たとへば蝮虵螫手は即腕を解て割去て不惜の剛毅と同じ、【壯士】、史記荊軻歌、風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不復還、○愚按するに此二句古の常語ならんか、通鑑綱目晉愍帝建興三年十月、漢劉曜寇北地、進拔馮翊、麴允軍于靈武、以兵弱不敢進、帝數徵兵於相國保、保左右皆曰、蝮虵螫手壯士斷腕、今胡寇方盛、且宜斷隴道以觀其變、從事中郎裴詵曰、今蛇螫頭頭可斷乎、註【剛毅】、論語子路篇、剛毅木訥近仁、朱子曰、剛是體質堅强不軟不屈、毅却有奮發作興氣象、黃勉齋曰、剛强勁、毅堅忍、【決裂】、字彙決斷也、判也、裂擘破也、【急須―】、急々

云、麾下壯士騎從者八百餘人、直夜潰圍南出馳走、平明漢軍乃覺之、注【紫宸】、書言故事九云、朝廷前殿曰紫宸、職官分紀施敬本上疏曰、紫宸殿前漢之前殿、周之路寢、陛下所以負黼扆居黃屋饗萬國朝諸侯、人臣致敬之所、天に紫微垣あり天子の宮象之、故に紫宮紫宸紫閣なとゝ云也、【彤闈】、彤丹飾也、闈は三輔黃圖六云、闈闥宮中小門也、丹を以て彩飾したる門也、【爲貴也自若】、貴官をなにとも不思自然に我物の如く思ふて敬畏鞠躬の貌なく禁門を出入して容貌揚々たるを云也、【自若】、賈誼過秦論、雍州之地崤函之固自若也、文選の註に、自若自然也、漢書の註に、自若は如故也、又李廣傳云、胡急擊之、矢下如雨、漢兵死者過半、漢矢且盡、會日暮吏士皆無人色、而廣意氣自如益治軍、云云自若自如同意也、【擾々―】、擾は煩也、亂也、多してみだりがはしきを擾々と云也、【歌是非】、注較論誰是誰非也、誰是なり某は非なりと行迹の善惡を較論していらぬこと也、今の時の風俗都て皆非にして評判に不及必しも是非を歌ふに勞苦せざれと也、

○離別

唐文粹十五事文類聚別集二十五並載之、丈夫離別に臨て意氣雄壯なるを云也、

陸魯望

新唐書列傳一百二十一隱逸傳云、陸龜蒙字魯望、元方七世孫也、父賓虞以文歷侍御史、龜蒙少高放、通六經大義、尤明春秋云云、才子傳八、龜蒙字魯望、姑蘇人、幼而聰悟、有高致明春秋善屬文、擧進士一不中、去居松江甫里、多所撰論、有田數百畝屋三十楹、田苦下、雨潦則與江通、故常患飢、身自畚鍤茠刺無休時、無事時放扁舟挂蓬席齎束書茶竈筆床釣具鼓櫂鳴榔、大湖三萬六千頃、水天一色直入空明、自稱江湖散人、又號天隨子甫里先生、

丈夫非無淚、不灑離別間、 大丈夫豈如兒女

離別時態、有淚灑其間也、

【丈夫】、孟子滕文公下云、富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫、○王充論衡卷一氣壽篇云、百歲之命是其正也、不能滿百者雖非正猶爲命

曰、蓋謂貧民預指絲穀借債耳、到絲穀出時倶是他人之物、是所謂醫得眼前瘡剜却心頭肉也、何先生此言、深知小民之苦者、亦深得作詩之意者、

○時興　感時寄興、言貴顯之人昔日未貴顯之時

唐文粋十八載之、當世の士風の輕薄なるを歎して興を起す也、注貴顯は登第祿を受て位貴く名顯るを云、

楊賁

唐書才子傳並無傳、文章正宗注云、唐德宗朝人、

貴人昔未貴、咸願顧寒微、莫不願欲顧恤寒貧微賤之人、

及自登樞要、何曾問布衣、身貴己登樞要之位、又豈復問布衣微賤之人、此言知有己不知有人也、

平明登紫闥、日晏下彤闈、早登紫宸殿闥、晩出彤闈之門、其爲貴也自若、

擾擾路傍子、無勞歌是非、路傍之遊子又何必較論誰是誰非也、

【貴人―】大凡高位の貴人昔し未得志して民間に在ときは咸願我一且志を得て位に在らは必す寒微の士有才時を不得者を顧み愍みて薦め擧へしと思ふ也、貧者は衣薄して肌の寒き故に貧を寒と云、微は祿位なく賤き者を云、注【顧】は思念也、恤は字彙云、恤雪律反、愍也、賑也、通論振貧老曰恤、心戍然而慘惻之也、【登樞要】、樞戸樞也、爾雅樞謂之椳、郭璞曰、門戸扉樞也、要は約也、樞はくるゝと訓す、唐戸の上と下とのほぞを樞と云、戸の開闔を主る處也、要はゆはへくゝる意にて事を定め堅るの義也、樞要ともに機密の處也、故に天子の機務を與知て朝廷の政を掌とる官となるを登樞要と云也、【何曾―】、我身已に貴くなれは官祿の榮に誇て昔微賤なりし時心に願ひし事又思ひもよらす何そ布衣の微き人を問ひ尋るの意あらん、布衣史記李斯傳云、今秦王欲呑天下稱帝而治、此布衣馳騖之時、而游説者之秋也、○文選東都賦、夫大漢之開元也、奮布衣以登皇位、注濟曰、布衣庶人之服也、【此言知有―】、我微賤より起て貴くならは又人をも薦て擧へきこと也、然るに己れ貴なりて則人を忘るは是己れ身あることを知て有人ことを不知也、【平明―】、此二句は貴官の人堂々として自得したる貌を云也、平明は夜の明かたを云也、史記項羽本紀

非す但小民貧窮なるに因て夏月に生する絲を春よりあてゝ先つ賣て其價を取、故に二月に新絲を賣と云也、注【方蠶】は二月には蠶始て生して桑の葉を剉みて養ふ時也、【五月―】、五月には苗をやう〳〵種了て始て田の草を芸る時也、此時に既に秋收る新穀をあてゝ預しめ人に賣て先つ其價を取て當時の急なるを救ふ也、故に五月に新穀を賣と云、【糶】は他吊反、賣米穀曰糶、うりよねと訓す、注【芸】、與耘同、孟子芸人之田、と云是也、除苗間穢也、くさきると訓す、【醫得―】、絲穀未有の時既に人にあて賣て其價を取て官に納れ租の債をつくなふて吏に租を催し責られ鞭笞せらるゝ苦みを免れ得を云、【剜却心―】、己に眼前に督責せらるゝ苦は免たれとも我か所營の絲所芸の穀は皆是他人の物也、力を盡して作りても絲穀成て收る時に至て我か有とする物なし、父母妻子何を以てか歲月を度んや心に此愁の病生す、是心頭の肉を刻削する也、是れ小民、貧窮の悲み也、【剜】、音豌、刻削也、注【所有】、己れか物とするを有すると云、他人の爲に已か物としられて我は取べきものなしと也、

我願君王心、（我願望君王之仁心、）**化作光明燭、**（變化作光明之燈燭、）**不照綺羅筵、偏照逃亡屋、**（不照於綵綺絲羅之筵席、要周徧照見逃亡之屋也、）

【我願―】、詩人の意以爲く、民の饑寒逃亡するは上の人暗して下を不察故也、唯願は君王の心暗を化して光明の燭と作て唯歌舞遊宴する綺羅の筵上をのみ照すことなく光を天下に徧く及して民の租稅に苦て四方に逃れ亡る屋上を照し貧民の苦みを明に察して贍し救ひ租稅を薄くし玉はゝ人々皆所を得て農業を安し春夏より絲穀を賣の憂なかるへし、【君王】、左傳昭公十二年工尹路請曰、君王命剝圭以爲鏚秘、敢請命、【綺】、說文綺繒也、かんはたと訓す、【逃】、字彙逃音陶、逸去也、避也、亡也、【筵】、說文竹席也、周禮春官司几筵、註筵亦席也、鋪陳曰筵、藉之曰席、謂設席之法、筵鋪于下、席加于上、所以爲位也、○瑯琊代醉編二十二云、聶夷中詩二月賣新絲、五月糶新穀、或疑二月蠶尚未生、載勝降桑、乃三月節也、月令、蠶事在季春之月、豳風條桑亦指三月、二月安得有新絲、何燕泉

端搆亭以祀其先、因名、

朱晦菴

野人載酒來、農談日西夕、（載酒來訪、農家日已向夕、）此意良已勤、感歎情何極、歸去莫頻來、林深山路黑、（山深恐人相逼、以此謝客、）

【野人―】、田野の人酒を載せ來て朱子を訪ふて田間稼穡の農事を說き桑麻の生長を說て日も漸く西に傾て夕の景に及也、【載酒】は楊雄か傳の字也、楊雄家素貧嗜酒、人希至其門、時好事者載酒肴從游學、【註】【農家】、恐は農談ならんか、朱子の晦菴をは農家とは云がたからんか、【此意―】、此意は酒を載て訪來の意を指て云、酒を携て朱子を草堂に訪來は良に勤め懇なる心也、其厚意を感歎するの情何ぞ極あらん謝し盡し難き也、【歸去―】、只今歸去の以後は頻々に訪來ることを休られよ、何となれば林深して樹陰掩ひ翳し山路黑暗にて盜賊を戒るの心有て經過も艱難なる故也、野人訪來の意は雖厚所說田間農事の談に不過して學問の爲に來るに非ず、徒に光陰を移して自他共に無益に因て山路の黑きにことよせて客を退け謝する也、【注】人相逼は盜賊などの逼り侵して脅さんことを恐る也、逼を作過は誤也、

○傷田家

唐文粹十六載之、田家の小民貧乏の苦みを憫み傷むの詩也、

聶夷中

才子傳九、夷中字坦之、河南人也、咸通十二年禮部侍郎高湜下進士、與許棠公乘億同袍、時兵革多務不暇銓注、夷中滯長安久、皀裘已弊、黃粮如珠、始得調華陰縣尉、之官惟琴書而已、性儉、蓋奮身草澤備嘗辛楚、率多傷俗閔時之擧、哀稼穡之艱難、古樂府尤得體、皆警省之辭、國風之義也、

二月賣新絲、（二月方蚕、未有絲之時先賣絲、）五月糶新穀、（五月方芸、未有穀之時先糶穀、）醫得眼前瘡、剜却心頭肉、（他日絲成穀熟、已爲他人所有矣、剜烏丸反、）

二月は桑樹纔に葉を生し蠶始て生す此時新絲あるに

【滌蕩―】、滌音狄、洗也、蕩音宕、與蘯同、滌器也、文選成公綏嘯賦云、心滌蕩而無累、又班固東都賦、紹百王之荒屯、因造化蕩滌、注向曰、盪滌猶除也、【千古】は千載の古と云意、言ろは好友に邂逅に遇ふに因て胸中に積たる古來今の鬱愁を悉く洗ひ除きたる如く消散する也、【留連―】、留連は座に留り連て盤桓するを云、一夕に百壺の酒をも飲み盡すほどの大酒もりの會に留連する也、鮑照詩、留連徘徊不忍散、○愚按するに此二句は倒裝の句法也、二の句を一の句とし、一の句を却て二の句として、二の句にて一の句をことはるを倒裝句法と云、句を顚倒して置か故也、若し正く言は一夜筵上に留連して百壺の大飲を爲すに因て胸中千萬古の愁懷を悉く滌蕩し去ると云ふべし、然るを句を顚倒して多年積鬱の愁懷一夕に蕩滌す、其故は百壺の飲に留連するに因て即滌蕩し得たると應する也、杜子美詩、幽意忽不愜、歸期無奈何、と云句法と同格ならんか、【良宵―】、本集、且談作清談、本集に從ふべし、言ろは風色好き宵なれば宜しく相俱に清談して良夜の景に負くまじきこと也、故に皓々と明なる月の下にて樂み遊て不寝なり、清談は俗事を不說清雅なる談をなすを云、皓月は明亮たる月を云也、謝莊月賦、愬皓月而長嘆、【醉來―】、酒に醉ては空山にそのまゝうち臥て別に衾枕を不設、天の上に覆ふを即ち衾とし地の頭を支るを即ち枕として一身を以て天地に塞るの思ひあり、是劉伯倫か心本て作れる也、注【劉伶】、晉書列傳十九、劉伶字伯倫、沛國人也、身長六尺、容貌甚陋、放情肆志、常以細齊萬物爲心、淡默少言、不妄交游、與阮籍嵇康相遇、欣然神解、攜手入林、初不以家產有無介意、常乘鹿車、攜一壺酒、使人荷鍤而隨之、謂曰、死便埋我、其遺形體如此、【幕天席地】四字、劉伯倫酒德頌云、幕天席地、縱意所如、天の上に在を視て幕とし地下に在に藉て席として室廬帷席の細事に拘らず心の思ふまゝにする也、【襟懷】は胸中の度量を云、【曠達】、寛曠豁達にして事物に拘り羈れさるを云、

○雲谷雜詠

雲谷在考亭之西三十里、乃朱子讀書之處

朱子大全六雲谷雜詩十二、首題各異也、此謝客之詩也、【雲谷】、大明一統志七十六建寧府、有雲谷、【考亭】一統志建寧府考亭書院、在建陽縣西三桂里、唐御史黃

ども此夜すから衣を擣の聲は吹盡し不得也、月の鮮なるを見砧の響を聞秋風すごく吹そひても悲しき氣色は轉た相思の念を牽起せは此景此聲は總て是れ吾か玉關の征夫を憶の情となる也、【玉關】、本集註齊賢曰、廣志曰沙州燉煌郡壽昌縣西有陽關、西北有玉門關、士贇曰、玉門關今沙州、去長安三千六百里、【班超】、後漢書列傳三十七、班超字仲升、扶風平陵人、爲人有大志、不修細節、超與母隨至洛陽、家貧、常爲官傭書以供養、久勞苦、嘗輟業投筆歎曰、大丈夫無它志略、猶當效傅介子張騫立功異域、以取封侯、安能久事筆研間乎、永平十六年奉車都尉竇固出擊匈奴、以超爲假司馬、後以戰功封定遠侯邑千戶、超以久在絕域年老思土、上疏曰、臣聞云云臣不敢望到酒泉郡、但願生入玉門關、【何日―】、夫妻遙に別離して常に相思の憂あるも胡虜の狄中國の邊塞を亂すに因て也、何の日か此狄を逐ひ平けて邊國靜になれかし然らは吾か夫も遠く出て胡虜を征伐する苦みを罷むへきにと願ひ望むの意也、【胡】、韻會、胡北狄也、【虜】は北狄曰虜、以其習尙虜掠、征正也、伐下所以正其罪也、【良人】、詩經唐風、此夕何夕、見此良人、○唐詩訓解云、此爲戍婦之詞、以譏當時戰伐之苦也、言於月夜擣衣以寄邊塞、而此風吹不盡者皆我思念玉關之情也、安得平胡而使征夫稍息乎、不恨朝廷之黷武、但言胡虜之未平、深得風人之旨、

○友人會宿

良朋邂逅、飲酒消愁、月夜高談不能寤寐、

本集二十三載之、友人と會集して同く宿し酒を飲て遊ふ也、註【良朋】は好友也、【邂逅】はたまさかに遇ふを云、詩經唐風綢繆篇、今夕何夕、見此邂逅、朱註邂逅相遇之意、○韻會不期而會曰邂逅也、【寤寐】、寤は眠のさむる也、寐はいぬる也、此にては寐字重し、不能寐と云意也、寤寐は熟字なるに因て上の字を帶ひて言ふばかり也、死を謂ふに生死と曰か如し、詩經周南關雎篇、窈窕淑女、寤寐求之、

李太白

滌蕩千古愁、留連百壺飲、良宵宜且談、皓月未能寢、醉來臥空山、天地卽衾枕、

即劉伶幕天席地之意、非襟懷曠達者不能也、

夜呉聲、四時歌亦曰、子夜呉歌、晉有女子名子夜、作是歌、甚哀、晉武帝大元中、瑯琊王軻家有鬼歌之、子夜之音同於白紵、皆清音調也、故梁武本白紵而爲子夜呉聲四時歌、明、此子夜亦有晉聲者、其實不離清商、
○文章正宗云、子夜呉歌乃樂府曲名、皆言相思之情、
○唐詩訓解一唐詩歸十五並載之、

李太白

唐詩訓解云、臞仙詩譜以太白此篇爲張季鷹作、不知何據、○唐詩歸鍾伯敬曰、畢竟是唐絶句妙境、一毫不像晉宋、然求像則非太白矣、

長安一片月、（長安京兆也、）萬戸擣衣聲、（戍婦擣衣於月下、）秋風吹不盡、總是玉關情、（班超傳但願生入玉門關、）何日平胡虜、（期望胡虜早平、）良人罷遠征、（良人謂夫、得罷征役、）

【長安】、史記高祖本紀、七年二月高祖自平城過趙、雒陽至長安、長樂宮成、丞相已下徙治長安、索隱曰、漢儀註高祖六年更名咸陽曰長安、三輔舊事渭城本咸陽地、高帝爲新城、七年屬長安也、○三輔黄圖曰、五年高帝在洛陽、婁敬説曰、夫秦地被山帶河、云云、自此漢始都之、景帝分置左右内史、此爲右内史、武帝太初元年改内史爲京兆尹、與左馮翊右扶風謂之三輔、其輔倶在長安古城中、○唐書地理志京兆府、有長安縣、長安と名くるの義は文選西都賦、漢之西都在於雍州、寔曰長安、注濟曰、漢稱長安、言可長安于子孫也、詩意言ろは長安中一片の月くまなく亮たるころ稍〻凄涼の時節に向ふに因て軍にたちたる征夫の婦は家に在て衣を製し邊塞の夫のもとへ寄ん爲に此にも彼にも長安中萬戸の裡にて月の夜すから砧にて衣を擣つ聲の聞ふる也、【萬戸】は處々多くの家と云意也、漢武本紀云、栢梁烖勇之乃曰、越俗有火烖復起屋必以大用勝服之、於是作建章宮、度爲千門萬戸、【擣衣】は帛を杵を以て擣て光澤を生せしむる也、按三才圖繪、古は二人相對して杵を以て立ちなから擣たり故に擣衣と云也、後世に至て横に砧上に置て對坐して小杵を以て打つ也、注【戍婦】は邊國へ軍に赴たる者の婦也、説文、戍守邊也、从人从戈、以人荷戈以戍、【秋風―】唐詩歸、吹不盡作吹不斷、言ろは秋の風は冷しく吹け

、間往坐水旁裴回賦詩、而曹務多廢、令白府以假尉代之分其半奉、鄭餘慶爲東都留守、署水陸轉運判官、餘慶鎭興元奏爲參謀、卒年六十四、張籍論曰貞曜先生郊爲詩有理致、最爲愈所稱、然思苦奇澁、○韓退之薦士詩云、有窮者孟郊受材實雄驁、冥觀洞古今、象外逐幽好、橫空盤硬語、妥帖力排奡、敷柔肆紆餘、奮猛卷海潦、

慈母手中線、（慈者仁愛也故謂慈母）遊子身上衣、（遊子將有行役母爲縫衣）臨行密密縫、意恐遲遲歸、難將寸艸心、（遊子自謂難將寸心之孝）報得三春輝、（春輝陽春和氣也、所以發育草木者、故比慈母）

【慈母】は注に仁愛也、二親ともに子を愛すれとも父は嚴を以て義とす、母は專ら仁愛にして恩あるに因て慈愛ある母と云意にて慈母と云也、手中線は針にさして持たるいとすぢ也、【遊子】は旅に赴く者を云、李陵別蘇武詩、遊子暮何之、身上衣は旅起つ人の身にきるべき衣也、注【行役】は官家より役にさゝれて邊國に行を云、母爲は母が子の爲に衣を縫也、【密々―】は子の旅だちて行んとするに臨て密々に衣を縫也、針めを細にせきつめて縫ふを密々と云也【意恐―】、母の意に恐くは長途の旅なれは我か子一たび行たらは定て早くは還るまし遲々とをそく家に歸るにてあらんそ其間旅中に綻もせざるやうにと思ふに因て心を盡して針こまかに縫也、【難將―】、唐詩歸難將を誰言に作る、旅だつ子の意に謂らく、吾か一寸の草ほとなる微小の孝心を以て母の陽春慈育の輝の如き恩光は中々報し得がたき也、寸草心は方寸の心と云義也、下の句に春輝と云ん爲に草字を用て子自ら比し春輝溫煖の氣草木を養育するを以て母の子を愛する心に比して三春輝と云也、三春は正二三の三箇月を春とする故に三春と云也、注【寸心】、程大昌演繁露云、徐庶母爲人所執曰、方寸亂矣、古今謂方寸爲心似始乎此、然而列子已嘗曰、吾見子之心矣方寸之地虛矣、【暉】與輝同字也、【發育】は發生養育する也、

○子夜呉歌

本集六子夜呉歌四首是其第三也、題注齊賢曰、唐禮樂志、子夜晉曲也、士贇曰、古今樂錄淸商曲子夜亦曰子

令威、去家千載今來歸、城郭如故人民非、何不學仙冢纍々、白居易が詩又此意也、

○金谷園

大明一統志二十九、河南府金谷園在府城西一十三里、地有金水、自太白原南流經此谷、晉石崇因川阜造園館、自作詩序、晉の石崇金谷園を營亭館の宏麗を極め水陸の珍味を集て盛に宴を張て王詡繙岳か輩二十四人會集して山水風景を玩び飲樂歌舞せし所の遺迹を詠する也、

無名氏

當時歌舞地、（當日於此園中歌舞）不說艸離離、（豈知今日離々生艸）今日歌舞盡、（樂極悲生）滿園秋露垂、（秋露垂々爲之涕泣）

此園は當時石崇か時盛に館を構へ酒宴を設けて歌舞を奏たる地也、昔繁華なりし時には誰あつてか此所の後に艸生しげりて荒はてんと云ことを知んや、更に云ひ出すものも無かりしと云意也、【離々】はしげりたれたる皃也、詩經王風黍離篇、彼黍離々、註離々垂皃、【今日―】、今日此に來て見れは昔の歌つ舞たりし繁華はいつしか盡はてゝ今は人さへ不住なりて園に滿るものは秋の露穠くして生ひしげりたる艸葉の末に垂れたるばかり也、此詩は英雄の人已に逝て景物も亦昔の如きにあらす、歌舞も跡なく唯荒草露深きを見て古を思ひ歎くの意をのぶる也、注【樂極悲生】、漢武帝秋風辭云、歡樂極兮哀情多、眞寶後集注、列女傳陶答子妻曰、樂極必哀生、【垂々】、なびき垂れたる草の葉末に露のをき結て墮んとする皃を云也、【爲之】は景物の荒れたるを悼露涙を濺く如くに見ゆるを云也、

○遊子吟

唐詩歸三十一載之、鍾伯敬評曰、仁孝之言自然風雅、旅に赴く人母の恩を思ふて吟詠する詩也、

孟郊

新唐書列傳一百一、孟郊字東野、湖州武康人、少隱嵩山、性介少諧合、韓愈一見爲忘形交、年五十得進士第、調溧陽尉、縣有投金瀨平陵城、林薄蒙翳下有積水、郊

は題注なるべし、誤て此に入ならんか、【試使】、此水を飲て貪になると云は其人の心本より貪なるに因て也、若試に古の伯夷叔齊と云人に此水を飲しめたりとも必す終に兄弟國を讓たる清き心をは變易すまじき也、吾に於ても本より貪心なければ水を飲とも終に操をは易まじきぞと云意を見す也、【夷齊】、史記六十一云、伯夷叔齊孤竹君之二子也、父欲立叔齊、及父卒叔齊讓伯夷、伯夷曰、父命也、遂逃去、叔齊亦不肯立而逃之、國人立其中子、於是伯夷叔齊聞西伯昌善養老、盍往歸焉、及至西伯卒、武王載木主號爲文王、東伐紂、伯夷叔齊叩馬而諫曰、父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎、以臣弑君、可謂仁乎、左右欲兵之、太公曰、此義人也、扶而去之、武王已平殷亂、天下宗周、而伯夷叔齊耻之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之、

○商山路有感

白居易

白氏長慶集十八載之、【商山】、大明一統志三十二、西安府商洛山在商縣東南九十里、亦名楚山、即秦時四皓隱處、

萬里路長在、（迢々萬里路長在也、）六年今始歸、（三年一番得歸、）所經多舊館、（向日所經之亭館、）太半主人非、（太半皆非舊時人矣、）

萬里の遠路なれは行ても行ても行き不盡して路長在也、〔註〕迢々は遠也、【六年】、本集今作身、向に此路を歷て外に行しが六年の歲月を亙て今漸始て歸也、〔注〕三年の三恐は六の字ならんか、一番は一次也、一たびと云意也、【所經―】、今經る所の路すがら舊日舍りし旅宿多也、字彙云、館客舍也、周禮五十里有市、市有館、館有積以待朝聘之客、〔注〕【亭】、字彙云、道路所舍、又云亭留也、行旅宿會之所館也、【太半―】、太半俗に大方と云と同し、往來僅に六年の間なれとも昔日舍し旅館の主人は大半舊時の人には非すして主皆易れり、暫の間に多の人死去て舊日見し人稀なるに因て人間の無常を感する心ある也、【太半】、前漢書高祖本紀云、漢王欲西歸、張良陳平諫曰、今漢有天下太半、注韋昭凡數三分有二爲太半、有一分爲小半、○遼東城門有華表柱、有白鶴集其上言詩曰、有鳥有鳥丁

し、胞は母の子宮也、同し母の子宮にやどりて生れ出るに因て兄弟を同胞と云【相煎—】、本同しく生したるものを今は却て萁の豆を煎つむること何とてかやうに甚た急なるそやと萁を咎むる也、此詩は比の體なり、萁を文帝に比し、豆を自ら比す、言ろは文帝も吾も同く母の胞より出たる兄弟なれは相憐むへき事なるに却て今七歩の間に詩を作へし不成法行んと責らる何とてかやうに甚た急にせめはたりて同胞の愛情なきそやと文帝を恨る意を云へり、此詩は世説に所載と不同、又漫叟詩話云、曹子建七歩詩世傳、煮豆燃豆萁、豆在釜中泣、一本云、萁向釜下燃、豆在釜中泣、其工拙淺深必有以辨之者、

○貪泉

方輿勝覽三十四、廣東路十四州中廣州貪泉在番愚縣西二十里石門北岸、○大明一統志七十九、廣州府有貪泉、

呉隱之

晉書卷九十良吏列傳云、呉隱之字處默、濮陽鄄城人、博涉文史以儒雅標名、弱冠而介立有清操、及韓康伯爲吏部尙書、隱之遂階清級、廣州珍異所出、前後刺史多黷貨、朝廷欲革其弊、以隱之爲刺史、州有水曰貪泉、飲者懷無厭之欲、隱之至泉所酌而飲之、因賦詩曰、云云、及在州清操愈厲、後致仕、授光祿大夫金章紫綬、

古人云此水、（呉隱之爲廣州太守、州有貪泉、謂飲之皆貪、隱之飲此清操愈厲、因賦是詩、）**一歃懷千金、**（歃山洽反）**試使夷齊飲、**（夷齊不食周粟、餓于首陽之山、）**終當不易心、**（不能易其清節也、）

古へより人の云ひつたへるは此水を一たび歃れは則貪心生して千金を懷に抱き蓄るほど欲ふかくなると云也、又天梯古文注、懷思也、千金を得んことを思ひ願ふ也、【千金】、史記三十平準書云、一黄金一斤、索隱曰、如淳曰時以錢爲貨、黄金一斤直萬錢非也、又臣瓚下注云、秦以一鎰爲一金、漢以一斤爲一金、是其義也、【註】【謂飲—】、其所の人の謂ふは此泉水を飲は皆人ごとに貪慾になると云、因て隱之其所に到て故意に水を飲て吾に於ては飲むとも貪なるまじと云ことを示して愈〻清潔の操を勵して此詩作りし也、此注

をと云意也、其本意は若我を擧け用られは姦邪臣の政を妨る者を斥け去て朝廷を清平にせんものをと云意也、【似君】、似は字彙云、奉也、○杜甫對雪詩、爐存火似紅、邵夢弼注、似字訓作呈字、○三體詩絶句、劉言史過春秋峽詩、臘月開花似北人、註似者呈似之似、猶言向、【不平】、心中安からす氣の毒なるを云、晉王導傳、敦益懷不平、○楚辭九辨云、坎壈兮貧士、失職而志不平、

○七歩詩

魏文帝令弟曹植七歩作詩、如不成行大法、

足を徙て止むと七足の間に作りたるに因て七歩詩と云也、世説曰、魏文帝嘗令東阿王曹植七歩作詩、不成者當行大法、應聲爲詩曰、煮豆持作羹、漉豉以爲汁、萁在釜下燃、豆在釜中泣、本自同根生、相煎何太急、注【文帝】三國志魏志二、文皇帝諱丕、字子桓、武帝太子也、【大法】は死刑を云、

曹子建

魏志十九、陳思王植字子建、年十歳餘誦讀詩論及辭賦數十萬言、善屬文、太祖嘗視其文謂植曰、汝倩人邪、植跪曰、言出爲論、下筆成章、顧當面試、奈何倩人、云云○鍾嶸詩評云、子建詩其源出於國風、骨氣高奇辭采華茂、情兼雅怨、體備文質、粲然溢古、卓爾不群、嗟乎陳思王之於文章也、譬如人倫之有周孔、鱗羽之有龍鳳、音樂之有琴笙、女工之有黼黻、○古詩歸七鍾伯敬評云、子建柔情麗質不減文帝、而肝腸氣骨時有磊塊處、似爲過之、

煮豆燃豆萁、 豆之與萁本同根而生、

豆在釜中泣、 豆在釜有聲如涕泣之狀、

本是同根生、 喩豆萁同根生如兄弟同胞所出、

相煎何太急、 相煎逼何太甚、

天梯古文鄒邦寧註云、燃燒也、萁豆莖也、【萁】は豆を採たるあとの幹、葉ともに薪とすべき者を萁と云也、豆を羹るに其豆の萁を薪に燃して煮也、註【豆之與—】、豆と萁と初め生する時は同し根よりして生し出る也、【豆在—】、豆は萁に燃れて釜の中にてしふ〳〵と煮ゆる聲人の泣聲の如くきこゆる也、注【有聲】は豆の煮ゆる聲也、【本是—】、豆も萁も其本を云へは是同し根より生し出る者也、注【同胞】は同胎と云と同

王昭君宮中を出て遠く行に臨て玉鞍をうち拂て馬に上る只別を悲み情を含て涙を垂て兩頰紅ひの緋を濕す也、啼紅頰は涙の兩頰に流れ墮る也、三四句さなきだに別離は悲しまして昭君は漢王の宮女となり今日までは深宮に在し身一たひ出て千萬里の長路に赴き行ゝて又胡國鄙き狄の妾となるその悲みいかばかりならんや、李白昭君前篇詩中、漢月還從東海出、明妃西嫁無來日、と云句あり、又此三四の意也、【玉鞍】、西京雜記卷二云、漢武時、身毒國獻連環羈、皆以白玉爲之、馬腦石爲勒、白光瑠璃爲鞍、鞍在暗室中常照十餘丈、如晝日、

○劍客

借物比喩、幾年問學成材、一旦得君、當爲朝廷斥去姦邪、

唐詩歸三十載之、劒客は劒を擊つ法を學て短を以長きに勝つ術を得たる士也、前漢書列傳五十四李陵傳云、臣所將屯邊者、皆荊楚勇士、奇材劔客也、○楊子法言二吾子篇云、劔客論曰、劔可以愛身、曰狴犴使人多禮、註劔客擊劔之客、註【借物比】、劔を以て學者に比し、磨をは學業を修行するに喩也、【幾年問―】は人幾の年月を積て問學を勸め既に己を治め人を治るの材料を成就す、若し一旦我を擧け用らるゝ君に遇ふことを得は朝廷の爲に姦邪の小人を斥去て國家を淸くすべきものをと云意を劔客に托て言のぶる也、

賈島

即ち前の僧無本也、還俗の後の姓名なり、字を浪仙と云、

十年磨一劍、霜刃未曾試、今日把似君、誰有不平事、

一つの劔を十年の間鍔を磨き斂てかたの如く功を積て霜のぞつとすさましきが如く刄を頴に磨きたてたれども未だ一割の斷を試し不見也、霜刄は刄の色白くして霜の如く凜々とすさましきを云、是は學者多年學問を勸め勵まして才能を成就したれとも未た君に試み用られぬに因て才能を用施すことなきを云、三四の句、今日にてもあれ此劔を把て君にさゝげて刄の利ほとを試は敵を斬獸をきるとも手にまかせて截斷して快活なるへし、何か切れかぬる處ありて氣の毒なる事あらんや、箒の塵を掃ふ如にあらんもの

然、索隱曰、案單于姓攣鞮氏、其國稱之曰撐黎孤塗單于、而匈奴謂天爲撐黎、謂子爲孤塗、單于者廣大之貌也、言其象天、故曰撐黎孤塗單于、又玄晏春秋云、士安讀漢書不詳此言、有胡奴在側、言之曰、此胡所謂天子、與古書所說符會、

李白

新唐書列傳一百二十七、李白字太白、白之生、母夢長庚星、因以命之、既長隱岷山、州擧有道不應、蘇頲爲益州長史、見白異之曰、是子天才英特、少益以學可比相如、然喜縱橫擊劍爲任俠、輕財重施、更客任城、與孔巢父等五人居徂徠山、日沈飮、號竹溪六逸、天寶初南入會稽、與吳筠善、筠見召、故白亦至長安、往見賀知章、知章見其文歎曰、子謫仙人也、言於玄宗、召見金鑾殿、論當世事奏頌一篇、帝賜食、親爲調羹、有詔供奉翰林、白猶與飮徒醉於市、帝坐沈香子亭、意有所感欲得白爲樂章、召入、而白已醉、左右以水頮面稍解、授筆成文、婉麗精切、帝愛其才數宴見、白嘗侍帝醉、使高力士脫鞾、力士素貴恥之、擿其詩以激楊貴妃、帝欲官白、妃輒沮止、白自知不爲親近所容、益驁放不自修、與知章李適之汝陽王璡崔宗之蘇晉張旭焦遂爲酒中八仙人、懇求還山、帝賜金放還、白浮游四方、嘗乘月與崔宗之自采石至金陵、着宮錦袍坐舟中、旁若無人、安祿山反、轉側宿松匡廬間、永王璘辟爲府僚佐、璘起兵逃還彭澤、璘敗當誅、初白遊幷州、見郭子儀奇之、儀犯法、白爲救免、至是子儀請解官以贖、有詔長流夜郎、會赦還尋陽、坐事下獄、時宋若思將吳兵三千赴河南、道尋陽釋白囚、辟爲參謀、未幾辭職、李陽冰爲當塗令、白依之、代宗立、以左拾遺召、而白已卒、年六十餘、○山谷曰、太白豪放人中鳳凰麒麟、譬如生富貴人、雖醉着暝暗喑囈中作無義語、終不作寒乞聲、○朱晦庵曰、李太白非無法度、乃從容於法度之中、蓋聖於詩者也、詩人玉屑○唐詩歸十五、鍾伯敬評李白曰、古人雖氣極逸才極雄、未有不具深心幽致、而可入詩者、讀太白詩當於雄快中、察其靜遠精出處、有斤兩、有脈理、今人把太白只作一麁人看矣、恐太白不麁於今之詩人也、

昭君拂玉鞍、上馬啼紅頰、今日漢宮人、明朝胡地妾、

罰不遁して遂に刑せられたる傳の始末を讀むに因て此詩を作天道の欺き難きことを論する也、○正宗注云、欺暗謂人所不知而已獨知之者、欺明謂人所皆知之者、【天下目】、六韜云、以天下目視則無不見、○太史公曰、李斯以閭閻歷諸侯、入事秦、因以瑕釁以輔始皇、卒成帝業、斯爲三公、可謂尊用矣、斯知六藝之歸、不務明政以補主上之缺、持爵祿之重、阿順苟合、嚴威酷刑、聽高邪説、廢嫡立庶、諸侯已畔、斯乃欲諫爭、不亦末乎、人皆以斯極忠而被五刑死、察其本、乃與俗議之異、不然斯之功且與周召列矣、

○王昭君

王嬙下嫁單于、臨行上馬涙漏紅粧、今日漢之妃、明日胡之妾、

本集四、王昭君二首、此首其後篇也、注士贇曰、此篇蓋借漢事、以詠當時公主出嫁異國者、【王昭君】、事見前漢書九十四匈奴傳及西京雜記卷二、○王勉夫野客叢書四云、明妃事前漢匈奴傳所載甚略、但曰、竟寧元年單于入朝願婿漢氏、元帝以後宮良家子王嬙字昭君賜單于、單于懽喜、如此而已、西京雜記甚詳、曰、元帝後宮既多不得常見、乃使畫工圖形、按圖召幸之、諸宮人皆賂畫工、多者十萬、少者亦不減五萬、獨王嬙不肯、遂不得見、後匈奴入朝求美人爲閼氏、於是上按圖以昭君行、及去召見貌爲後宮第一、善應對擧止閑雅、帝悔之名籍已定、帝重信於外國、故不復更人、乃窮案其事、畫工毛延壽等皆棄市、後漢匈奴傳載此與記少異、曰、初元帝時、以良家子選入掖庭、時呼韓邪來朝、帝勅以宮女五人賜之、昭君入宮數歲不得見御、積悲怨乃請掖庭令求行、呼韓邪臨辭大會、帝召五女示之、昭君豐容靚飾光明漢宮、顧景裴回竦動左右、帝見大驚意欲留之、而難於失信、如雜記則是昭君因不賂畫工之故、致元帝誤己而行、如後漢所説、則是昭君因久不得見御、故發憤自請而行、二説既不同、而後漢且不聞毛延壽之説、樂府解題所説近西京雜記、琴操所説近後漢匈奴傳、然其間又自有不同、琴操謂單于遣使朝賀、帝宴之、盡召後宮問誰能行者、昭君盛飾請行、如琴操所言則單于使者來朝、非單于來朝也、昭君在帝前自請行、非因掖庭令求行也、其相戾如此、此事前漢既略、當以後漢爲正也、【注】【王嬙】、王は昭君か姓也、嬙は名也、昭君は字也、【單于】、史記一百一十匈奴傳云、匈奴單于曰頭曼、註漢書音義曰、單于者廣大之貌、言其象天單于

者無他焉、不能督責而顧以其身勞於天下之民若堯舜然、故謂之桎梏也、夫不能修申韓之明術行督責之道專以天下自適也、而徒務苦形勞神以身狥百姓、則是黔首之役、非畜天下者也、何足貴哉、云云、凡賢主者必將能拂世摩俗而廢其所惡立其所欲、故生則有尊重之勢、死則有賢明之謚也、是以明君獨斷、故權不在臣也、然後能滅仁義之塗、掩馳說之口、困烈士之行、塞聰揜明內獨視聽、故外不可傾以仁義烈士之行、而內不可奪以諫說忿爭之辨、故能犖然獨行恣睢之心而莫之敢逆、若此然後可謂能明申韓之術而修商君之法云云、書奏、二世悅、於是行督責益嚴云云、李斯上書言趙高之短曰、云云、於是二世曰、其以李斯屬郎中令、趙高案治李斯、二世二年七月、具斯五刑論腰斬咸陽市、註【壅蔽】は阿り諛て人主の聰を壅き明を蔽て非道を以て君を欺き悅ばしむるを云、傳中の上書の辭を以て見べし、君を欺て身の禍を免れんとせしが又趙高に讒せられて遂に刑に逢て身を亾せりたとひ君は欺くとも豈天下の公道を欺き得んやと云意、

李鄴

正宗註云、未詳其事、○此詩唐文粹十八載之作者作曹鄴、曹鄴は宣宗の時の人也、才子傳云、曹鄴字鄴之、桂林人、大中四年張溫琪榜中第、任至洋州刺史、有集一卷今傳、

欺暗常不然、欺明當自戮、難將一人手、掩得天下目、

【欺暗】は吾か心に惡と知なから非義の事を思ひ謀を云、常に不然とは吾か心にのみ知て未た人の所不知にて事にも著れざる故に大害あるに不及自ら戮せらるゝほどの事はなき也、【欺明】は人も知り事にも著れたるを枉て欺き誣るを云、事迹に顯れ人も知ときはその欺き明にして罪又大也、故に必當に自ら戮せらるへし、何にとなれは吾れ一人の手を以て天下の人の眼目を掩ひくらまして己か欺きを見出し不得やうにはなりがたきに因て也、天下の目を以て己が過を視は何か隱るゝ所あらんや、たとへ君一人の視聽を掩ひくらましたりとも天下の人これを惡まは遂には禍身にあつまりて刑戮に逢ふへき也、李斯道を枉け謀を巧にして人主を欺き悅ばしめたれども天

世〻宦南方、客潤州、紳六歳而孤、哀等成人、母盧躬受之學、爲人短小精悍於詩、早成名、時號短李云云、與李德裕元稹同時、號三俊、

鋤禾日當午、汗滴禾下土、誰知盤中飧、粒々皆辛苦、

一二の句、耕す者禾の間の草を除くとて日中のころ鋤を執てすきかへすに炎熱の時なれは遍身より汗流れ禾下の土に滴り落て田土に浹くしてしみ透るばかり也、農作の勞如此辛苦也、三四句、世間の人皆粟を食へとも其本を不知、それ誰か此盤中に所食の飧は一粒ごとに悉く辛苦を究て作り出すことを知んや、徒らに居て粟を食ひ費す者は農家の辛苦を想やりて自ら心に戒め恐るべき事也、【禾】、音和、嘉穀也、【飧】字彙餐音孫、與飧同、水澆飯也、又音燦、平聲熟食也、○懿宗の時の人聶夷中此詩をのべて作れる田家詩に云、父耕原上田、子劚山中荒、六月禾未秀、官家已修倉、鋤田當日午、汗滴禾下土、誰念盤中餐、粒々皆辛苦、

○讀李斯傳

謂李斯雖巧以欺其君、自取禍刑、能欺天下乎、

史記列傳二十七云、李斯楚上蔡人也、年少時爲郡小吏、見吏舍厠中鼠食不潔、近人犬數驚恐之、斯入倉觀倉鼠食積粟居大廡下不見人犬之憂、於是李斯乃歎曰、人之賢不肖譬如鼠矣、在所自處耳、乃從荀卿學帝王之術、學已成、至秦會莊襄王卒、李斯乃求爲秦相文信侯呂不韋舍人、不韋賢之任以爲郎、李斯因以得說、說秦王曰、云云、秦王乃拜斯爲長史、又秦王拜斯爲客卿、卒用其計謀官至廷尉、二十餘年竟幷天下、尊主爲皇帝、以斯爲丞相、始皇崩、太子立爲二世皇帝、李斯子由爲三川守、羣盜吳廣等西略地過去弗能禁、章邯以破逐廣等兵、使者覆案三川相屬誚讓斯、居三公位如何令盜如此、李斯恐懼重爵祿不知所出、乃阿二世意欲求容、以書對曰、夫賢主者必且能全道而行督責之術者也、督責之則臣不敢不竭能以狥其主矣、此臣主之分定上下之義明、則天下賢不肖莫敢不盡力竭任以狥其君矣、是故主獨制於天下而無所制、能窮樂之極矣賢明之主也、可不察焉、故申子曰、有天下而不恣睢命之曰以天下爲桎梏、

○蠶婦

出城歸家有感下涙、見不蠶者皆衣羅綺、不知養蠶之辛苦、

蠶婦は蠶を養て繭をつくらせ始めて絲とすることを營む婦女也、事物紀原九云、搜神記曰、上古時有人遠征、家唯一女與馬、女思父戲馬曰、汝能迎得吾父吾將嫁汝、馬乃絶韁去得父還、後馬見女輙怒、父怪之、女具以答、父大怒殺馬曝其皮、女至皮所忽蹷然卷女而行、後於大樹枝得女及皮、盡化爲蠶、既丸、因名其樹曰桑、桑喪也、此蠶桑之始也、皇圖要記曰、伏羲化蠶爲絲、又黃帝四妃西陵氏始養蠶爲絲、

無名氏

作者の名氏誰とも知れさる也、

昨日到城郭、歸來涙滿巾、
遍身綺羅者、不是養蠶人、

昨日城郭に到て城中繁華の風を巡り見て我か家に歸來て獨心になげき感すること有て涙を流して巾に滿濕ふほと泣也、其ゆへいかにとなれは城中富貴の家一身に遍く綺羅の衣服を著る人を見るに蚕を養て自ら絲を治めて衣服とする人には非す、皆是富貴にて優游の人也、我平生辛苦して蚕を養へとも家貧けれは衣薄して寒氣を免れかたし、不蚕人は却此辛苦を不知して美服を身に遍ふす、是に因て天命の厚薄あることを思て感慨する也、【城郭】、事物紀原八云、管子曰、內謂之城、外謂之郭、孟子曰、三里之城七里之郭、吳越春秋曰、鯀築城以衞君、造郭以守民、記以爲城郭之始、綺羅字彙云、【綺】、說文繒也、師古曰、今細綾韻會羅帛之美者、

○憫農

農家當暑耘耨、流汗浹於田泥、人知食其粟、遑知耕稼之苦哉、

唐文粹十六下憫農二首其一也、農夫の辛苦を憫の詩也、注【耘耨】、字彙耘音云、除苗間穢、耨乃豆切、耨草器、孟子深耕易耨、苗の間にある草を除き去也、炎暑の時農作する者汗のしづく土に落て泥を濕す也、人ごとに粟は食へとも耕す者の苦勞は思ひやらぬ也、耕稼の稼を善本に作耕家、農家と云意也、【稼】、周禮地官司稼註、種穀曰稼、如嫁女以有所生、種曰稼、斂曰穡、

李紳

新唐書列傳一百六云、李紳字公垂、中書令敬玄曾孫、

春水滿四澤、夏雲多奇峯、秋月揚明輝、冬嶺秀孤松、

春は陽氣地下より生故に地脉融通して冬時乾き涸たる處も水生するに因て四方の池澤に水漫々と湛へ滿て水色の緑も深し、是春の一景也、夏は陽氣盛にて火氣山谷より蒸し升るゆへ彩雲多く出種々形樣をなして虛空に滿ること奇特に秀たる巒峯を見か如し、日永く空晴たる時彩雲の悠々と度るを見る、又夏時の一景也、秋は金氣盛にて天氣も澄徹に因て月の輝も他時よりは異に晴明也故に揚明輝と云、冬は千草萬木皆霜枯て色かはり葉落て山の景氣もさびしき時松は獨り色不變枝幹いよ〳〵堅剛にして寒を凌て秀て出つ故に秀孤松と云也、世間繁華の景を不愛して此自然の景を娛て四時の奇景とす、淵明が心も亦可想見、

○訪道者不遇　童子言、師入山採藥、白雲深處無蹤尋覓、

唐詩遺響、題作訪半尊師、作者作孫革、唐詩訓解六載之、題作訪隱者不遇、山中の道者を尋ね訪へとも他出して遇ふことを不得に因て童子の言を設け爲て此詩を作て留め置く也、

僧無本

唐書列傳一百一韓愈傳附、賈島字浪仙、范陽人、初爲浮屠名無本、遊東都、時洛陽令禁僧急、島爲詩自傷、愈憐之、因敎其去浮屠、擧進士、當其苦吟雖逢公卿貴人不覺也、一日見京兆尹、跨驢不避、謼詰之、久乃得釋、○詩林廣記七云、島嘗爲衲子、故枯寂氣味形之於詩句中、

松下問童子、言師採藥去、只在此山中、雲深不知處、

首句は賈島か問ふ也、下の三句は童子か答也、道者訪へとも家に不在故に松下に居たる童子に道者は何方へ行れしぞと問也、童子答て云、吾か師は藥草を採とて山へ入去れたり遠く外へは出られず只此山中に處るゝ也、然れとも山中雲深に因て徑路も埋れ翳れて不見何方に居らるゝやらん在處を不知、尋ね覓て呼來るへきやうもなきと云也、

○四時

春水、夏雲、秋月、冬松、足以盡四時之奇、

本集三載之、春夏秋冬四時の間にすぐれて奇なる景物を詠して四句を以て一年の奇景をすべ盡す也、本集題註云、此顧凱之神情詩類文在全篇、然顧詩首尾不類、獨此警策、○許彥周詩話云、四時詩此顧長康詩誤編入彭澤集中、○劉斯立曰、當是凱之用此足成全篇、篇中惟此警絕、居然可知、或雖顧作、淵明摘出四句、可謂善擇矣、

陶淵明

晉書九十四、宋書九十三、南史七十五並有傳、○晉書隱逸傳第六十四、陶潛字元亮、大司馬侃之曾孫也、祖茂武昌太守、潛少懷高尙、博學善屬文、穎脫不羈、任眞自得、爲鄕隣之所貴、嘗著五柳先生傳以自況云云、其自序如此、時人謂之實錄、以親老家貧、起爲州祭酒、不堪吏職、少日自解歸、州召主簿不就、躬耕自資、遂抱羸疾、後爲鎭軍建威參軍事、謂親朋曰、聊欲絃歌以爲三徑之資可乎、執事者聞之以爲彭澤令、在縣公田悉令種秫曰、令吾常醉於酒足矣、妻子固請種秔、乃使二頃五十畝種秫、五十畝種秔、素簡不私事上官、郡遣督郵至縣、吏白應束帶見之、潛歎曰、吾不能爲五斗米折腰拳々事鄕里小人邪、義熙二年解印去縣、乃賦歸去來、其辭云云、頃之徵著作郎不就、旣絕州郡覲謁、其鄕信張野及周旋人羊松齡寵通之等、或有酒要之共至、酒坐雖不識主人亦忻然無忤、酣醉便反、未嘗有所造詣、所之唯至田舍及廬山游觀而已、其親朋好事、或載酒肴而往、潛亦無所辭焉、每一醉大適融然、又不營生業、家務悉委之兒僕、未嘗有喜慍之色、惟遇酒則飮、時或無酒亦雅詠不輟、嘗言、夏月虛閑高臥北窻之下、淸風颯至、自謂羲皇上人、性不解音而畜素琴一張、絃徽不具、每朋酒之會則撫而和之、曰、但知琴中趣、何勞絃上聲、以宋元嘉中卒、時六十三、所作之文集並行於世、○夢蕉詩話云、靖節先生以義熙元年秋爲彭澤令、冬遂解綬去、後十六年晉禪宋、又七年卒、晉史謂、名潛字元亮、南史謂、名潛字淵明、胥失之、今按先生義熙中作孟嘉傳及祭程氏妹文、俱稱淵明、元嘉中對檀道濟乃稱亡潛、是與譜所載在晉名淵明在宋改名潛其字元亮則未嘗易者相合矣、

氷川詩式云、五言始于李陵蘇武、或云枚乘、五言絕句作自古漢魏樂府、古辭則有白頭吟出塞曲等篇、下及六代、述作漸繁、唐人以來工之者甚衆、○唐詩訓解首卷、李滄溟曰、五言詩起於蘇李、然夏歌楚謠間用五字成句、雖詩體未全實五言之濫觴、

○淸夜吟

言道之全體中和之妙用自得之樂、少有人能知此味也、

擊壤集四載之、註月の天に上り風の池を掃ふに因て道の全體の明々たるを見理の流行する中和の妙用を知自心に會得するの樂にて、人の知り得ることの少なることを吟し叙られし也、○性理大全七十載此詩、註熊氏剛大曰、此篇借物形容聖人本體清明人慾淨盡、蓋月到天心則雲翳盡掃、風來水面則波濤不興、此正人欲淨盡、天理流行時也、

邵康節

宋史列傳百八十六道學傳一、邵雍字堯夫、其先范陽人、父古徙衡漳、又徙共城、雍年三十游河南、葬其親伊水上、遂爲河南人、云云名其居曰安樂窩、因自號安樂先生、熙寧十年孟秋卒、年六十七、所著書曰皇極經世觀物內外篇漁樵問對、詩曰伊川擊壤集、又言行錄後集十四、有邵康節先生傳、又擊壤集附錄、有程明道作墓誌銘、

月到天心處、風來水面時、一般淸意味、料得少人知、

天心は天の正中也、一二の句言ろは一輪の明月冉々に天の正中に昇り一陣の淸風そよ〳〵と吹來水面を掃ふ此時上下一樣の碧りにして水月相映實に淸潔なる光景也、是は人心淸潔にして一點の蔽れなく道體の天理流行するに喩る也、【一般—】、一般は一樣也、天心の明月水面の淸風その淸冷まことに人の肌骨を潔くす、但其境に至り其景に遇はざれば淸意を知がたし、故に少人知ことを料知也、其本意は謂らく、人の胸中洒落にして一點の塵慾なく從容として道にかなふ時始て水月の淸意我か心と一致なるへし、然らされは風月は自風月我は我にして相あづからず、康節の胸中風月の淸意と相かなふて其妙味言ばに云がたし、只自ら知れり、故に人の知ること少らんと言へり、

長し此時節稍〻燈火に親み依て夜學すへき也、簡編は即ち書籍也、古は紙なくて竹簡を削て韋を以て編て事を記する故に簡編と云也、或は卷或は舒へ勤て讀誦すへき也、注簡册編帙ともに書籍と云義也、字彙【簡】牒也、古無紙、有事書之簡、【編】、次簡也、【册】、以竹爲之、而聯以縄、【帙】、書卷編次也、

豈不旦夕念、平旦日夕致其念慮、**爲爾惜居諸、**爲爾愛惜日居月諸無廢學問、

前に反復して所云件々の説豈晝夜に省み念て勵勤さらんや、只日月急流して不止恐は汝懈て徒に光陰を度て學を廢んことを故に爲爾日月逝き去を惜也、注【平旦】は明也早也、早朝を平旦と云、孟子告子篇、平旦之氣、云云、【居諸】、詩經邶風日月篇云、日居月諸、照臨下土、日月下の助語の辭二字を裁取て日月と云意に用也、

恩義有相奪、閨門之情、以恩掩義、師友之敎、以義掩恩、私恩失義無久遠之理有相奪之期、**作詩勸躊躇、**故作此詩勸之、

父子の間は骨肉の親なるに因て恩愛深し故に狎昵に流れやすくして嚴敎の義立がたし、是恩を以義掩奪也、又嚴敎を專にして子を嚴く責め誡れは父子の間不平の心生し互に相乖て親み少し、是は義を以て恩を奪也、故に古人は子を易て敎て我か子を覿面には不誡、今韓退之も恩義相奪の故有に因て覿面には責がたし、故に詩を作て符が學問のためらひて進み難を勸め誡也、注に恩奪義を父に係け義奪恩を師友にかけて説、此説恐は謬也、父子の間自ら恩義相奪の理あり、師友を將來て混雜して説べからす、【躊躇】は宋玉九辨云、蹇淹留而躊躇、文選謝希逸宣貴妃誄云、躊躇冬愛、怊悵秋暉、註行止貌、○字彙云、躊躇猶豫也又住足也、註【閨門之情】、骨肉の親は皆閨門の内に聚り居る故に閨門と云へは父子兄弟悉くこもる也、此には父子の情と云意也、孝經十二章、閨門之内具禮矣乎、嚴父嚴兄、妻子臣妾猶百姓徒役也、案するに此注本文の意に穩當せさることを覺ふ、故に不及詳解、

五言古風短篇

停蓄之水、地の凹なる處にたまりたる水也、潦は【注】驟ニ至之水、雨の後驟かに溝中或は路上に水集りて流を潦と云、にはたづみ訓す、○孟子曰、苟惟無レ本、七八月之間雨集、溝澮皆盈、其涸也可ニ立而待一也、註【除蕩】韻會云、蕩々法度廢壞貌、又云、放蕩無ニ檢束一也、案に正宗註、作ニ除涸一、義理自分明也、

人不レ通ニ古今一、馬牛而襟裾、如ニ馬牛獸蓄之無レ所レ知、而彼ニ服世人之襟裾一也、

人として博く古今の事にも通し不レ得萬事の是非得失も辨へ知ことなきは畜生と同し、如レ此人は內馬牛にして外に人の衣服を着て人倫に居する也、襟裾は即衣裳と云義也、韓文註、襟裾衣也、樊曰、孟子飽レ食煖レ衣逸居而無レ敎、則近ニ禽獸一、前漢韓生曰、人謂ニ楚人一沐猴而冠、公此聯義則ニ孟子一、句法則ニ韓生一也、【注】【被服】の被、作レ彼者誤也、身に被り服する也、

行レ身陷ニ不義一、行ニ於身一者尙且陷ニ失於不レ合ニ義理一、況望レ多ニ名譽一、況可レ得ニ芳名美譽一者也、

不學にして理に不レ通人は自己の身を行ふことさへ尙道理に背て不義に陷る、惡名を不レ免、況や名譽の多きを望んや、【注】【芳名】、芳は香也、好き名と云意也、

時秋積雨霽、秋雨初霽、新涼入ニ郊墟一、新涼入ニ於郊野丘墟一、

木之就ニ規矩一より況望ニ多名譽一と云句に至まて備に學不學の得失を說て、凡そ人としては必不レ可レ不レ學の意を言て符が心を感激せしめ、此に至て一時の景を敘て符か時に及て勸め學んことを責め索る也、時節秋に至て數日の久雨晴て新涼の秋氣郊墟に入て炎熱の苦みなし、當ニ勸學一時也、符城南の別墅に在り、故に符か居處を指て郊墟に入と云也、【郊】は爾雅、邑外曰レ郊、【墟】、風俗通十云、尙書舜生ニ姚墟一傳曰、郭氏之墟、墟者虛也、郭氏古之諸侯、善レ善不レ能レ用、惡レ惡不レ能レ去、故善人怨焉惡人存焉、是以敗爲ニ丘墟一也、故今廬居處高下者亦名爲レ墟、

燈火稍可レ親、短檠燈火稍可ニ親近一、簡編可ニ卷舒一、簡册編帙可レ卷可レ舒、

【稍可】は上の句新涼にかけて可レ看、秋氣涼して夜正ニ

不見三公後、豈不見太師太傅太保三公之後子孫、**寒饑出無驢、**寒凍饑餓出無驢馬可乘、

汝不見や古より以來公となり相となる人皆田家の士犂鋤を執て耕耘せし中より身を起して大位に登し人多きことを、是皆腹に詩書あるに因て也、【犂】はからすき也、字彙耕具也、【鋤】はすき也、字彙鋤所以去穢助苗也、【三公―】、又不見古來三公の高位に在し人の子孫位を喪ひ祿を失て身寒へ腹饑て外に出る時驢馬の可乘さへ無に至る人多きことを、是不學の故也、此四句辭を反言て詩書を學と不學に因て起り易く廢れやすきの効あることを詳に明す也、【三公】、群書拾唾云、三公論道之官、古三公無職、漢以丞相以下爲三公失古意矣、周三公太師太傅太保、漢以丞相太尉御史大夫爲三公、後又改丞相爲大司徒、太尉爲大司馬、御史大夫爲大司空、唐以大尉司徒司空爲三公、【驢】、說文似馬長耳也、○事文類聚後集三十八云、驢服重致遠、上下山谷、野人之所用、遲鈍之畜、

文章豈不貴、經訓乃菑畬、經學之敎訓乃所以數菑畬田者也、〔菑〕音錙、畬音余、

學ときは農夫も高位にすゝみ不學ときは三公の後も饑寒を不免是豈に文章の貴きに非すや、學ときは祿其中に在り、聖經の訓辭は祿の本と、乃菑畬の田也、【菑畬】、韻會一歲曰菑、始反草也、二歲曰畬、漸和柔也、三歲曰新田、謂已成田而尙新也、始て蕪草を鬪きたるを菑と云、二年めにすきこなして漸和柔なるを畬と云、三年に田と成て五穀を種るを新田と云、注經學聖人の書を經と云、經學は即ち前の詩書の學問也、是を敎訓するは菑畬の田を敷道と云者也、學ふときは祿其中に在れは也、

潢潦無根源、〔潢〕停蓄之水、潦驟至之水、潢音皇、潦音老、**朝滿夕已除、**早朝滿溢夕已除蕩、

無學の人も一旦幸を得れは勢に誇れとも文章の本なけれはやかて棄らるへし、譬へは一陣の雨過て溝中の潢潦漲り來れとも根ざし出る所の源なく一旦集り來る水なるに因て朝に溝に滿るかと見れは夕已に除去て即涸と同し、經學の本なき人は如此也、潢は注

一爲馬前卒、（其不學者爲馬前至賤之走卒、）鞭背生蟲蛆、（有過則受鞭背之刑、肉腐則生蟲蛆之惡、蛆七余反、）

前には物に比して說此には直に人の上に就て說、一の不學者は馬前に奔走する賤き兵卒となりて過あれは背に鞭つ刑を受て肌肉を毀て瘡中うぢと云蟲を生するありさまとなる也、【鞭背】、事物紀原卷十云、書曰鞭作官刑、即笞之始也、舊據獄官令用杖、受杖者皆背臀腿分受、殿庭決者皆受背、【蟲蛆】、韓文注云、蛆蟲在肉中腐肉の中に生するうぢと云蟲也、

一爲公與相、潭々府中居、（潭々大府之中居處、）

一の學者は三公或は宰相の位となる也、【潭々】、正宗注潭々深遠貌、公相居之府也、をく深くとをくくと廣潤に構たる府中の居所に住する也、【府】、事物紀原七云、漢制三公開府故稱三府、蘇氏演義曰、府聚也、聚所在圖籍簿書之處、○諸葛孔明出師表、宮中府中俱爲一體、文選李善注、宮中禁中也、府中大將軍幕府也、古文眞寶後集注、府中大臣宰相所居、

問之何因爾、學與不學歟、

一人は走卒一人は公相何に因てかくは異なるぞと問へは他事なし唯學たると不學との故に因て如此也、

金璧雖重寶、（黃金碧玉雖貴重之寶、）費用難貯儲、（然耗費用度、難以收貯儲藏、）學問藏之身、身在則有餘、（此身在則學問自有餘用、）

璧は諸侯所執圭也、言は黃金碧玉は世間に貴ひ重する珍寶なれとも一たひ費用ては再ひ貯へかたし學問は吾か身に藏めをくに因て身さへ在は何ほと用ても耗り盡ることなし常に餘あつて豐也、注【用度】、用は貨也、國用家用の用也、度は則也、貨は家に分際の則あるに因て用度と云、

君子與小人、不繫父母且、（不關係於父母生我之時、在人學與不學耳、且子魚反、）

君子となり小人となるは父母の我を生める時に定非す、唯子の學と不學とに因て高下の分隔る也、【且】、詩經巧言篇、悠々昊天曰父母且、註且語助也、

不見公與相、起身自犂鋤、（起身自田家、）

云、渠者水所居也、秦時韓人鄭國穿渠、[註]【瑩】潔也、

三十骨骼成、乃一龍一豬、於是其一學者如神龍之有變化、一不學者則如豬畜之無變化也、

年三十に至ては骨體强堅になる故其品定まる也、【骨骼】はほねぐみと云義也、韓文註、說文禽獸骨曰骼、此云骨骼爲一龍一豬而言也、杜工部瘦馬行、骨骼硉兀如堵墻、【乃一—】、學者は龍の變化自由なる如く不學者は豬のむく〱として知ることなきか如し、

【龍】は說文云、龍鱗蟲之長、能幽能明、能細能短能長、春分而登天、秋分而潛淵、○廣雅云、有鱗曰蛟龍、有翼曰應龍、有角曰虬龍、無角曰螭龍、未升天曰蟠龍、【豬】、字彙云豕也、註神龍神變靈妙の龍也、龍の名に非す、變化龍蟄する時は微細の形となり時に應して出るときは雲を起し雨を行る幽明自由なるを變化と云也、猪畜家の內にて養ひ畜ふ獸を畜云、六畜の畜也、

飛黃騰踏去、龍馬飛黃騰踏顯達而去、**不能顧蟾蜍、**蟾蜍者硯滴也、

【飛黃】、淮南子云、黃帝治天下、於是飛黃服卓、高誘註曰、飛黃如狐、背上有角、乘之壽三千載、○字彙云、馬黃微赤者曰黃、詩魯頌、有驪有黃、飛黃は神馬の名也、案に周禮夏官庾人云、馬八尺以上爲龍、云云龍は馬の一名也、故に上の句一龍一豬の龍を龍馬にとりなして此句は飛黃と換へ用て騰踏し去と云ふ、文の變化妙也、是輔が嘗て師に所聞之說也、【騰】馳也躍也、【踏】は踐也、【不能—】、神馬ははねをどつて馳去て蟾蜍の行く如く遲鈍なる駑馬には目もかけさる也、[註]に蟾蜍を硯滴となして看、輔案に此註迂也、古文正宗註に從て駑馬と作て看へし、且伯樂が癡子圖を以て馬を求て蟾蜍を見て良馬の相ありと云し故事あり蟾蜍を馬に比すること曾て關涉せずと不可謂也、硯滴となして看ること曾謂れなし、正宗註云、學者如千里之驥、飛踏而去不能顧其駑馬之遲鈍猶蟾蜍也、[註]【蟾蜍硯滴】、西京雜記六云、廣川王去疾好聚無賴少年、遊獵畢弋無度、國內冢藏一皆發掘、晉靈公冢甚瑰壯、四角皆以石、云云玉蟾蜍一枚大如拳、腹空容五合水、光潤如新、王取以爲書滴、硯滴は硯水を盛る器也、

也、是より下に兩家の喩を設て愈〻學の力あることを證する也、【閭】字彙云、閭居也、又里門也、

兩家各生子、提孩巧相如、少長聚嬉戲、稍〻長大則相聚嬉遊戲翫、【少】書沼反、【長】知丈反、不殊同隊魚、不殊於水中同隊之魚、

兩家ともに各自に一の子を生みたる也、其子抱かゝへて愛すればにこ〳〵と笑ふことを知るころを孩提と云、其二三歳のころは笑つ啼つする態二兒共に巧に能似也、如は似也、巧相如は甚た能似と云義也、孟子盡心上篇云、孩提之童、朱註【孩提】二三歳之間知孩笑可提抱者也、【少長】やう〳〵長しては兩家の子聚て偕に嬉み戲て遊ふこと水中に同く並ひ游く魚の如くにて不相離也、此時までは兩家の子相似て未差別なし、【少長】韓文註、李公彥云、少多少之少、祝曰、前漢及太子少長知妃色、又東夷傳、兒能騎羊引弓射鳥鼠、少長則射狐兎、註言漸大也、【隊】は陣法に人數の手分をして備へを立るを隊と云、魚の並ひ游く貌陣を備へたるに似に因て同隊と云、史記孫武傳、出宮中美女得百八十人、孫子分為二隊、

年至十二三、頭角稍相疎、學者嶄然露頭角、稍〻與不學者相疎外矣、

兒の年十二三に及て一の兒は書を讀み一の兒は不學學者は威儀端く整るに因て髮を結たる頭角の貌けたかくして不學の兒とは稍疎に外りて不相似、【頭角】頭髻也、禮記内則篇云、男角女羈、註嚴氏云、夾囟曰角、兩髻也、【註】【嶄】、漢書司馬相如傳云、深林鉅木嶄嵓參差、注嶄嵓尖鋭貌、唐柳子厚傳云、宗元少精敏、雖年少已自成人、嶄然見頭角、

二十漸乖張、淸溝映汙渠、如淸瑩之溝映汙濁之渠、

年二十に至ては不學の人とは漸くそむきたがふ也、乖背也、張は施弓弦也、弓の形は外へ反てあるを弦を掛て張れは背て内へ彎也、故に乖きたがふを乖張と云、【淸溝】、學者と不學者と相似ざること淸く澄たる溝の流れ汚濁の渠にうつろふ如く也、溝は說文水瀆、廣四尺深四尺、釋名田間水曰溝、渠風俗通十

之遂、【輪人】、爲輪斬三材、必以其時、三材既具、巧者和之、轂也者以爲利轉也、輻也者以爲直指、牙也者以爲固抱也、輪敝三材不失職、謂之完、【輿人】、爲車輪崇車廣衡長參如一、謂之參稱、

人之能爲人、由腹有詩書、自其胷次之間有詩書充塞之美、

人の能く人の道を行て眞の人となることは詩經書經の書を能讀得て腹中に收めをき義理を明め知る故也、是材木の能規矩に中りて法度に稱ふ時完き器となるに同し、故に上の句と並べ言てこゝには人事の上に説至る也、注【胷次之間】、胷のあたりと云義、即心の中と云意也、善人には自ら心の中に詩書の道理充實て蓄へたる美才かある也、

詩書勤乃有、不勤腹空虚、誦詩讀書勤乃有得、若不專勤、則心腹空々如也、

人生れなからにして詩書を記憶する者なし只勤め學へは乃ち我か心に覺得ることあり、若勤めざれは一事も識得せすして腹中空虚也、註空々如はむなしくして一物もなき貌也、

欲知學之力、賢愚同一初、賢智愚昧同此有生之初、初者本然之性也、

學問の力廣大にて人に益あることを知んと欲は人の始て生れたる時を見て知へし、人の始て生るを見に皆全く形を備て運動啼泣皆一樣也賢愚の差別更に定なし、是同一初也、注【有生之初】、人形を成て生れ出る初也、【初者本―】、陰陽交感して此形を結ひ成すとき即天命の理を中に備て本體の主とするを本然の性と云、本文の初と云は即ち性を指て云と也、輔按するに此註謬也、韓退之は性に三品ありと論して同一とは不見人也、本文の初は赤子の始て生れ出て運動啼泣する時を指て初と云、此時は賢智の人も其子の賢愚を見定むることを不得、是同一初也、

由其不能學、所入遂異閭、所以遂異其門閭、

生出の初は皆同しけれども長して後學問することなきに由て才學ある人とは隔別になりて同し位に不居して所入の門かはる也、是學問の力廣大なるを可見

佛祠、王公士人奔走膜唄、愈惡之上表切諫、帝大怒乃貶潮州刺史、至潮表謝、帝得表頗感悔欲復用之、皇甫鎛忌愈、只移袁州、已乃召拜國子祭酒、轉兵部侍郎、鎭州亂、殺田弘正而立王延湊、詔愈宣撫、既行衆危之、穆宗亦悔、詔愈度事從宜、無必入、愈至云云愈歸奏、帝大悅、轉吏部侍郎、長慶四年愈卒、年五十七、○唐詩苑姓氏云、韓愈字退之、鄧州南陽人、貞元八年擢進士、累官刑部侍郎、時憲宗迎佛骨、愈上表極諫詆之、貶潮州刺史、除鱷魚患、尋改袁州、召拜國子祭酒、歷轉吏部侍郎、長慶四年卒、年五十七、贈禮部尚書、諡曰文、宋元豐間封爲昌黎伯、從祀孔子廟庭、有集四十卷、

木之就規矩、（凡木之成就於規圓方矩也、）在梓匠輪輿、（惟在於梓人匠人輪人輿人攻木之工爾、事見周禮、）

【就規矩】は法度にかなふ也、規矩は匠人の法度也、今大工の云ふつほかねの法也、材木のすみかねにあたりてそれ〳〵の形を爲て法度にかなふを就規矩と云、孟子告子上云、大匠誨人必以規矩、註規矩匠之法也、註【規圓方矩】、規は圓き物を作る法也、今ぶんまはし也、矩は方なる物を作る法也、今曲尺也、孟子離婁上云、不以規矩不能成方員、朱注規所以爲圓之器也、矩所以爲方之器也、【在梓匠—】、木の曲直を正して能規矩の法度にかなふて全き器に成就するは梓匠輪輿の木工人の攻め作に在也、梓人は器を作る細工人也、匠人は宮室を作る大工也、輪人輿人は車を作り車の輪を斲る工人也、孟子盡心下云、梓匠輪輿能與人規矩、不能使人巧、註【事見周禮】、周禮冬官考工記第六云、凡攻木之工七、輪輿弓廬匠車梓云云、【梓人】又云、梓人爲筍簴、註、樂器所縣、横曰筍、植曰簴、又云、梓人爲飲器、勺一升、爵一升、觚三升、獻以爵、而酬以觚、一獻而三酬則一豆矣、凡試梓飲器、鄕衡而實不盡梓師罪之、又云、梓人爲侯、廣與崇方、參分其廣而鵠居一焉云云、【匠人】、建國水地以縣、置槷以縣、眡以景、爲規識日出之景與日入之景、又云、匠人營國方九里、旁三門、國中九經九緯、經涂九軌左祖右社面朝後市市朝一夫、夏后氏世室堂修二七廣四修一五室三四步四三尺階四旁兩夾窻、白盛、門堂三之二、室三之一云云、又云、匠人爲溝洫、耜廣五寸、二耜爲耦、一耦之伐廣尺深尺、謂之甽、田首倍之、廣二尺深二尺、謂

今年不學而有來年、日月逝矣歲不我延、嗚呼老矣是誰之愆、

老而不學悔將何及

【勿謂—】、學問する人は必ず勉勵して寸陰のうつるをも可惜、今日不學又明日あり今年不學とも又來年の月日ありと云てひたと日を空く過すこと勿れと云意也、【日月—】、論語陽貨篇日月逝矣歲不我與、言日月は急々に流て逝て一息の間斷なし我か心の如くにのび〳〵と遲はなき也とやかくする間にやがて老年となりて一生空く過たり嗚呼徒らに年老たるは是誰か愆そや、皆少年にして勤め勵さゞる過也と云意、此篇は淵明か詩に盛年不重來、一日難再晨及時當勉勵、歲月不待人、と云詩の意と同し、

○符讀書城南

韓昌黎先生有子、名符、讀書於郡城之南、作此篇勉之、蓋欲學者知學則爲君子、不學則爲小人耳、

韓文六載之、題下註云、符公之子、城南公別墅所在、孟東野詩有喜符郎詩有天縱、有遊城南韓氏庄之作、張籍詩、有子符奉其言、有養疾城南庄之語、按公墓誌及登科記、公子曰昶、登進士第在長慶四年、此云符則疑爲昶之小字也、元和十一年秋作、【題注】【蓋欲學—】此一篇の意は人々學ふときは才德を成就して君子となり不學は愚蒙にして小人となるそと云ふことを知しめん爲に作れると也、

韓退之

唐書列傳一百一云、韓愈字退之、南陵人、愈生三歲而孤、隨伯兄會貶官嶺表、會卒嫂鄭鞠之、擢進士第、調四門博士、遷監察御史、上疏論宮市、德宗怒貶陽山令、改江陵法曹參軍、元和初拜河南令、遷職方員外郎、坐事復爲博士、既才高數黜、官又不遷、乃作進學解以自諭、執政覽之奇其才、改比部郎中史館修撰、轉考功知制誥、進中書舍人、初憲宗將平蔡、命御史中丞裴度使諸軍案視、及還具言賊可滅狀、愈亦奏言、淮西可滅、然惟在陛下斷與不斷耳、執政不喜、改太子右庶士、及度以宰相節度彰義軍、宣慰淮西、奏愈行軍司馬、愈請乘遽告入汴、說韓弘使叶力、元濟平遷刑部侍郎、憲宗遣使者往鳳翔迎佛骨入禁中、三日乃送

は子孫愚昧にして道理を辨へ不レ知也、

倉廩虛兮歲月乏、子孫愚兮禮義疏、　倉廩空虛無二儲蓄一、則度二歲月一必匱乏、子孫不學愚魯、則於二禮義一必乖疏、

【倉廩―】、第一の句に應す、田地不レ耕倉廩空虛なれは朝暮爨炊すへき物なくして歲月を度るにうへ乏き也、【子孫―】、書を授て子孫に敎へされは子孫たる者道理知らずして禮義に疎略也、人禮なきときは身を立ることとなし、愚にして禮義を乖けは必す法を犯し罪に觸て家を亡すに至る也、註【儲蓄】、儲は貯也、たくはゆる也、蓄は聚也、【魯】、愚也鈍也、

若惟不レ耕與レ不レ敎　若三惟是有レ田不レ耕與二有レ子不一レ敎、

是乃父兄之過歟、　乃爲二父兄之過一、

【若惟―】、前の四句を結して云、田は有れども棄て不レ耕と書はあれども子孫に敎へざるとの二つは皆後日の患ひあり、是は父兄たる者勸めさるの過にはあらすやと云意、【歟】は疑の辭にて不レ決辭也、歟字を用たるにて決して過也と云よりは却て心長く誡深し、是は父兄の過か但はさにてなきかとゆるやかに云ときは聞人心に感して過不過は直に自ら知て省み戒るゆへ也、

○朱文公勸學文　謂下人之爲レ學當二勉勵一進修上、不レ可二因循苟且一、

【朱文公】、宋史新編列傳百四云、朱熹字元晦、居二紫陽山下一、從二學於屛山籍溪一、以二一心一窮二造化之原一、盡二性情之妙一、達二聖賢之蘊一、以二一身一體二天地之運一、備二事物之理一、任二綱常之責一、初居二崇安一扁二讀書堂一曰二紫陽書堂一、後築二室建陽一號二雲谷老人一、其草堂曰二晦庵一、自號二晦翁一、晚居二考亭精舍一號二蒼州病叟一、最後號二遯翁一、宋紹熙中除二煥章待制一、理宗朝贈二大師一封二徽國公一、註【勉】、强也勤也、【勵】、勉力也、つとめはげます也、【進修】は日々に競ひ進て修行し退轉せざる也【因循】は字彙云、無レ所二作爲一也、何のなすわざもなくとやかくとして月日を度り過を因循と云、【苟且】、韻會に草卒也、物ごとそさうにしてたまかになきを云、學問ははげみ勉むべしなりしだいにをこたること勿れと云意也、

勿レ謂二今日不レ學而有二來日一、勿レ謂

大抵錢を用る故也、家に蓄へたる金を取出して書を買求て讀習ふへし、學成て後は官にも進み祿も得に因て又金を買て蓄るは易也、註【貨】はうる也、字彙貨音火以物售與人曰貨、【收致】、收は斂也、をさむる也、致はをさむるの義也、楊升庵曰、致有取與納之意、【榮達】は聲名の榮へ盛なること、四方に達して志を遂る也、

好書卒難逢、 天下好書籍驟然難遇見、卒倉没反、 **好書眞難致、** 應好書籍眞箇未易收致、

【好書―】、天下に書多けれども好き書と云ものは多くは有りがたき者也、故に好書には率爾には逢かたき也、【眞難致】、好書は世間に稀なる故求んと欲しても力の不及ことあつて自由ならす眞に我か物に致しがたき也、注【驟】はにはかと訓す、字彙疾速也、【眞箇】、箇字は辭のたすけにててには字也、這箇那箇と云類也、箇字に意義なし、

奉勸讀書人、 荊公勸勉世人修讀、 **好書在心記、** 若見好書當留心記取、不可忘、

【讀書人】は世間の學者へ泛くかけて云、【好書―】、結句荊公の本意重く看へし、好書は逢ふことさへ稀也、况求め得ことは難成こと也、若好書を見ことを得は必す熟く讀て心に記憶して忘れぬやうにせよと云意也、註【記取】は書中の事を餘さず覺へ取て忘れさるを云、うつして取と云義にあらす、

○白樂天勸學文 姓白、名居易、唐人、

【白樂天】新唐書列傳四十四云、白居易字樂天、其先蓋大原人、貞元十六年中書舍人高郢下進士云云、會昌初致仕、卒年七十六、自號醉吟先生、爲之傳、暮節惑浮屠道尤甚、至經月不食葷、稱香山居士、

有田不耕倉廩虛、 人有田不耕種則無穀可收、故倉廩空虛、 **有書不教子孫愚、** 人有子孫不敎之讀書則爲愚夫、

【有田―】、此一句は喩を以て下の句の爲に起す也、人田地有ても耕て種へされは五穀を收ることなきに因て倉廩には積むへき物なく中空虛也、【倉廩】、禮記月令疏蔡氏云、穀藏曰倉、米藏曰廩、【有書―】、家に許多の書を貯たりともそれを以て子孫に授け敎へされ

句左方に見たり、言は燈火を几前に引よせて光をうけて心靜に書中の意旨義理を搜り尋よ也、

貧者因書富、貧乏者知勤書、由此可致千金之富、富者因書貴、富足者知勤學、榮貴由此而興、

家貧なる者も書を讀て學成就すればそれに由て財を生じ家を贍して富を得ことあり、古人此類最多し、【富者因―】、本より財に富める人も無學なれば人これを卑み輕す書を讀て才德高く君子となれば人崇尊ふに因て富める上に又貴き人となる也、註【貧乏】、禮記月令云、發倉廩賜貧窮振乏絕、疏正義云、無財曰貧、暫無曰乏、【千金之富】、史記貨殖傳、陶朱公十九年之中三致千金再分散與貧交昆弟、又云、千金之家比一都之君也、榮貴は官職に進て姓名盛にときめくを云、

愚者得書賢、本性愚昧、教以書則自成賢人、賢者因書利、賢人加以勤學則因讀書富貴利益、

むまれつき愚昧なる者も書を學て義理を知て身を修め行へば遂には賢者となる也、【賢者―】、又本より才ある賢者は博く書を看て古今の事に通ずれば心の器量廣くなる故に我が德を全し人を濟ひ物を育する爲に利益多也、注に利字を富貴利益となして說、案するに富貴利益已に上の句貧者は富者はと云二句にて言了れり、此節の利字は泛く說へし、指て富貴を取の利ありとは不可說、注【本性】、氣質の性を指て云、むまれつき也、

只見讀書榮、荊公云、讀書者只見身榮貴、不見讀書墜、荊公云、讀書人未嘗見其敗壞、

【只見―】、荊公平生見來るに只學識ある人の榮へるをば見れども終に書を讀み學問したる故にとて身を敗りたる人を不見と也、註【荊公云】、荊公の自註には非ず、眞寶注者荊公の意をむかへて註する也、荊公の云へる意はと云義也、

賣金買書讀、常貨賣家藏之金以收致書籍、讀書買金易、讀書榮達後買金又何難、

【賣金】は金を錢に換る類也、唐の人平生の資用には

中より出來る利用也、

書顯官人才、能修讀文才愈顯達、〇(詩)棫樸文王能官人也、書添

君子智、能讀書愈增其智慧、

【書顯—】、官にある人は書を讀て古今の事迹をも考へ知ときは職事をとりさばくに就て事の是非を能辨別する才を益す也、【書添—】、君子は泛く學者を指て云、在位の君子も其中にこめて見へし、君子の書讀玉を琢が如し書を讀て道理日々炳になるときは愈智惠を添也、註【顯達】、文才の譽れ政事にあらはれ世間に達する也、【棫樸】、文王能官人也の六字は毛詩註疏大雅棫樸篇小序の辭也、荊公此序に原て官人字を用られたると也、

有即起書樓、有力即便架樓藏書、唐田弘正起樓聚書、無即致

書櫃、無力者作書櫃藏之、勿令蠹毀、

【有即—】、貨財を用る力の有者は樓閣を起て書を藏むへし、【無即—】、又其力なくは櫃をこしらへて書を入置秘藏すへし、書を漫に取あつかひて損し毀ることと勿れと云意也、註【架樓】は樓を建るの義也、架は起屋也、【唐田弘正】、唐書列傳七十三云、田弘正字安道、幼通兵法、善騎射、承嗣愛之以爲必興吾宗、名之曰興季安、時爲衙內兵馬使、云云、弘正性忠孝好功名、起樓聚書萬餘卷、通春秋左氏、【櫃】は與匱同、書を藏るひつ也、史記司馬遷自叙、紬史記石室金匱之書と云是也、【蠹】、字彙云、蠹蛀蟲又白魚、紙を飡ふ蟲しみと云もの也、蟲の色白し故に白魚と云也、【毀】は破也缺也、むしばみそこなはしめざれと云意、

窻前看古書、螢窓雪案間、宜勤看古昔聖賢之書、燈下尋

書義、當燈火稍可相親之際、宜搜尋書中意義、

【窓前—】、窓の前に向て古の聖賢の書を看よ夜も倘不怠燈檠の下にて書の義理を尋ね索て學問を勤よの意也、註【螢窓雪案】、故事の文字を以て註する也、只是窓案の間にてと云義也、螢窓は晉書、車胤字武子、南平人、恭勤不倦、博學多通、家貧不常得油、夏月則練囊盛數十螢火以照書、以夜繼日焉、〇雪案は孫氏世錄云、孫康家貧無油、常映雪讀書、少小清介交遊不雜、【燈火稍—】、燈火稍可親は即ち韓退之

必勸、勸則必成、學則庶人之子爲公卿、不學則公卿之子爲庶人、（人知勸學則賤者可使之貴、苟不知學則貴者反爲賤矣、）

【是故】、上を承て云、養子必す敎誨すへし、敎るとならは等閑にすべからず、嚴く督責すへし、敎嚴なれは其子必す勤め學ふ也、勉勵むときは學問遂には成就すへし、【學則━】學才あれは無位無官の庶人の子も擧用られて公卿となるへし、若又不學不才ならはたとへ三公六卿の子と云とも位を喪ひ祿を失ふべき也、【公卿】、三公太師太傅太保是也、六卿は冢宰司徒宗伯司馬司寇司空是也、注【可使之貴】、之は賤者を指す、賤者をも學問の功を以て貴からしむる也、

○王荊公勸學文（名安石、字介甫、宋朝人、好學、官至丞相、）

宋史列傳八十六、王安石字介甫、撫州臨川人、少好讀書、一過目終身不忘、其屬文動筆如飛、初若不經意、既成見者皆服其精妙、友生曾鞏携以示歐陽修、修爲之延譽、擢進士上第云云、神宗召爲翰林學士、熙寧二年拜參知政事、於是設制置三司條例司命與知樞密院事陳叔之同領之、安石令其黨呂惠卿任其事、而農田水利靑苗均輸保甲免役市易保馬方田諸役相繼並興、號爲新法、遣提擧官四十餘輩頒行天下、八年加尙書左僕射兼門下侍郎、其後封舒國公、元豐二年復拜左僕射觀文殿大學士、擢特進、改封荊、哲宗立加司空、元祐元年卒、年六十八、贈太傅、紹聖中謚文、註【丞相】、史記呂不韋傳、莊襄王元年以呂不韋爲丞相、索隱曰、下文尊爲相國、案百官表云皆秦官、金印紫綬掌承天子助理萬機、秦置左右、高帝置一、後又更名相國、○事物紀原卷四云、史記秦本紀悼武王二年初置丞相、蓋三代三公之任、應劭曰、丞者承也、相助也、

讀書不破費、（讀書人不用破所費）　讀書萬倍利、（自有萬倍無窮利用、）

【讀書━】、人世の間技藝の流甚多し、然れともそれに由て事を破り物を費すこと多し、只書を讀むには破費あらすして却て萬倍の利ある也、註【不用破所費】、破れをなすこともなく費る所も無の意、註此一句文字或は差謬あらんか、文理不分曉、自有萬━、無窮は國を治天下を治め敎を後世にまて施すも皆書を讀む

自悔、勸勉汝等、各宜及早修學、毋等老來悔之無及、〔旃〕、諸延反、

【勉旃】は戒めすゝむる辭也、勉は强也勤也、しひつとむる也、旃は與之同し、【汝等】は學者を指す、言ろは年弱く力强時早く修行すへし、年老ては精力衰るゆへ縱ひ志を勵すとも不可成其時悔るとも追ひ及ぶことなきそと云意也、

○柳屯田勸學文

養子必敎、敎則必勤、學則庶人爲公卿、否則胄子爲庶人、

【柳屯田】萬姓統譜云、柳永字耆卿、山西樂安人、仁宗朝累擧不中、工長短句、云云、官至屯田郎中、故曰柳屯田、【屯田郎中】文獻通考卷五十二云、屯田郎中漢成帝置尙書郎兩人、其一人掌戶口墾田、蓋尙書屯田郎之始也、掌屯田官田諸司公廨官人職分賜田及官園宅等、【庶人】、庶は衆也、無位無官の者を庶人と云也、公卿三公六卿を云、【否則】とは學則の反也、若不學ときはと云義也、【胄子】、書經舜典、帝曰、夔命汝典樂、敎胄子、蔡沈註、胄長也、自天子至卿大夫之適子、適子は俗に云ふ總領子也、天子より卿大夫までの總領子をすべて胄子と云也、

父母養其子而不敎、是不愛其子也、雖敎而不嚴、是亦不愛其子也、

父母子を養育するには敎の道あり、若不敎は其子成人の後を心に懸ざる也、是子を愛するに非す、或は敎れとも嚴く誡めざれば學必す成就せず、是も不敎同し、實に子を愛する道に非す、

父母敎而不學、是子不愛其身也、雖學而不勤、是亦不愛其身也、

父母は嚴く子を敎訓すれとも子たる者學ふことを嫌ふは吾か身を不愛也、たとへ時々は學問すれとも力を盡て勤めはげまさゞるは博學多聞を究んと思志不立ゆへ也、是亦身を不愛也、

是故養子必敎、敎則必嚴、嚴則

に對後より生に因て後生と云也、○論語子罕篇、後生可畏、焉知來者不如今也、【求誨】は人の我を敎誨せんことを求めよの意、【投】は字彙云、託也、明師に依り託て學て道を明むべし自ら我か本性を昧ますことなかれと云意也、

一朝雲路果然登、姓名亞等呼先輩、

【一朝】は一旦と云に同し、論語子路篇、一朝之忿忘其身以及其親非惑與、【雲路】は天子の居所を天の北辰に喩る故に凡そ人仕へに進んて朝廷へ上るを雲路に登ると云也、古文正宗註、中甲科曰登雲、【果然】は決定の義也、言ろは師を求て學問して才德成就の時は一旦決定して選ひ擢られて及第する也、【姓名亞】、我か姓名は先賢聲名の盛なるに亞ぎ等ふして人に先輩と呼ばるへき也、【先輩】は年長たる人を稱して云へとも此にては及第をしたる人を先輩と云說可也、宋吳枋宜齋野乘云、唐世擧人呼已第者爲先輩、按魏文帝黃初五年立大學、初詣學者爲門人、滿歲試通二經補弟子、滿二歲試通二經者補文學掌故、不通經者聽須後試、故後試稱先試而得第者爲先輩由此也、王聖塗澠水燕談云、蘇德詳漢相禹珪之子、建隆四年進士第一人、登第初還鄕里、太守置宴以慶之、樂作、伶人致語曰、昔年隨侍嘗爲宰相郎君、今日登第又是狀元先輩、又司馬溫公勸學歌云、一朝雲路果然登、姓名亞等呼先輩、詳味溫公之言則登雲路者方呼先輩、如今黃甲並呼狀元一般、先輩猶言前名也、

室中若未結親姻、自有佳人求匹配、

室中未た婚姻の緣を結はずとも一旦官祿を得は自然良家より壻に取ることを求むへき也、【姻】は妻と云說を取べし、白虎通四云、婦人因夫而成、故曰姻、○禮記昏義註疏云壻曰昏妻曰姻、壻以昏時來、女則因之而去、【佳人】は美人也、楚辭九歌湘夫人云、聞佳人兮召予、將騰駕兮偕逝、朱子註佳人謂夫人也、【匹配】、匹は偶也配也、配對也合也、白虎通四云、匹配者何謂相與偶也二人相ならぶを匹と云、男女偶合する故に匹配と云也、

勉旃汝等各早修、莫待老來徒

【父敎—】、無外は俗に殘る所なきと云辭の如し、內には父の敎あり外には師の敎嚴にして敎訓に不足も無きに學問の功無成學を受る子弟の强め篤からぬ故也、是子の罪也、

煖衣飽食居人倫　孟子滕文公上、人之有道也、飽食煖衣、逸居而無敎則近於禽獸、聖人有憂之、使契爲司徒、敎以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、**視我笑談如土塊、**

【煖衣—】、身には衣を煖に着口には食を飽までに殆て一善を修し得たることもなく徒に人倫に交り居を云、人倫は註に詳也、【視我—】、學才なく蒙昧なる故に賢者のものかたりを聞ても何事やらん曾て其所以を不知土塊なとを見る如くに思ふ也、古文正宗註云、聽賢者談笑如土塊然不知所以註【人之有道—】、人は天命の性を得て自然に禽獸に異なる道あり、然に口には食にあき身には衣を煖に着て放逸を好み徒にのみ居て敎の道なければ禽獸に近き也、【聖人有憂之】、聖人は堯を指て云、憂之は禽獸に近きことを憂ひ玉ふ也、【契】は朱子の註に舜の臣の名也、

【司徒】、書經蔡氏註云、司徒掌敎之官也、【人倫】は人道の倫理也、即下の五を云、【父子有親】、父は子を慈み子は父に孝を致すを云、【君臣有義】、君は臣を使ふに禮を以し臣は君に事て忠を盡す上下義を以て合を云、【夫婦有別】、夫は和して義あり婦は順にして正く分別有て褻れざるを云なり、【長幼有序】、長者は幼をいつくしみ幼は長者を尊む次序あるを云、【朋友有信】、朋友の間は欺き僞らず信を以交るを云、

攀高不及、下品流稍遇賢才無與對、

上の句に云ふ賢者のものかたりをも聞不得ほとの人は高位に攀ち登んと願ても終に不及、下品の流輩にて一生を過す也、【稍遇—】、下品の人は口腹利用の事より外は言ふへきことを不知、故に稍賢才なる人に遇へは對談することならず、容すぼり色慚て退き去也、

勉後生、力求誨、投明師莫自昧、

【後生】はわかき者と云義也、幼年の者は年長たる人

也、輔按此糞字屎糞の糞と作て說へし、月令曲禮等の註を引て說は恐は此章の意に非す、體を以て可說、用を以て不可說也、【五穀】、周禮疾醫註、五穀麻黍稷麥豆、○謝肇淛五雜組十一云、五穀稻黍稷麥菽也、鄭司農註周禮謂麻麥黍稷豆而不及稻、豈鄭未至南方耶、

世間無限物、無比無學人、

禽獸艸木より糞土の穢はしき物に至るまて皆各々靈あり能あり、故に無學にして人の人たる道理を不知者には比し較ぶべき物なき也、人は萬物の靈なるに不才無能の人は却て萬物にだもをとるぞと戒め勵す也、

○司馬溫公勸學歌

父主擇師、師主教導、二者兼盡、勉而學之子之責也、

宋史列傳九十五有傳、東都事略列傳七十上之下、司馬光字君實、陝州夏縣人也、父池有傳、光爲兒童時凜然如成人、七歲聞講左氏春秋太愛之、退爲家人講云云、詔肩輿至內東門、子康挾入對小殿、薨于位、年六十八、贈太師溫國公、謚曰文正、御篆其碑曰清心粹德、○事林廣記後集、程明道嘗曰、君實之言如人參甘草云云【註】【擇師】は學識德行ある人を擇び求て己れか子の師に請するを云、【教導】、書を授け業を課せて子弟を教へ導くを云なり、【子之責】、字彙云、責責任也、又負財也、我か身にひきうけたるをいふ也、俗にやくめと云が如し、

養子不教父之過也、訓導不嚴師之惰、

惰、徒臥反、懶也、

【養子―】、子を養育するに慈愛にのみ溺れて教の道なきは是子を養ふ法に背く父の過也、【訓導―】、訓導は教誨して彼か不通處をみちびき開也、【嚴】は教命の急也、又威重也、きびしくをごそかなるを云、【惰】は註に懶也、をこたる也、子弟を訓導すれとも等閑にして嚴く勵ますことなければ子弟の學問成就せす、是師道の勤をこたる也、

父教師嚴兩無外、學問無成子之罪、

【朕觀無―】、朕とは我と云義也、我學識なき人を觀るに萬物の中に何か似たると無學の人にくらべたぐへる物なき也、【比】、字彙校也量也、【倫】、廣韻等也、比也、類也、註【朕】、史記始皇本紀云、天子自稱曰朕、○蔡邕獨斷上云、朕我也、古者尊卑共之、貴賤不嫌則可同號之義也、至秦天子獨以爲稱、漢因而不改也、【若比於―】、草木は萬物の中にて微賤のものなるほとに是を才學なき人に比せんとすれば草中には靈妙なる芝と云物あり、木には椿と云、長年を經る異しき木あり、是尙艸木にだも不如也、【靈芝】、說文云、芝神艸也、○漢舊儀曰、芝有九莖、金色綠葉朱實夜有光、【椿】莊子曰、上古有大椿者、以八千歲爲春、以八千歲爲秋、註【耐】、古文正宗註耐作材、耐は能久を歷て不變不朽を云、【瑞】、字彙云、祥瑞天以人君有德、將錫之以歷年、錫之以五福、先出此以與之爲信也、○王充論衡十六云、瑞以應善災以應惡、云云

若比於禽獸、禽有鸞鳳、獸有麟、

禽中猶有鸞鳳之瑞、獸中猶有麒麟之靈、

無學の人は若禽獸に似たりと比せは禽中には鸞鳥鳳鳥などゝ云神鳥あつて偶〻出れば泰平の瑞となる物あり、獸中には麒麟と云もの聖人の世にならでは見られざる靈獸あり、無學の人は禽獸にも不及の意なり、【鸞】、說文曰、赤神靈之精也、赤色五采雞形鳴中五音、○事文類聚後集四十二云、鸞者乃神靈之精也、鷄形五彩名曰鸞鳥見則天下之安寧也、山海經【鳳】、說文云、鳳神鳥也、鴻前麐後、蛇頸魚尾、鸛顙鴛思、龍文龜背、燕頷鷄啄、五色備擧、見則天下大安寧也、○事文類聚後集四十二云、羽蟲三百六十而鳳凰爲之長、大戴禮【麟】、事文類聚後集三十五曰、毛蟲三百六十而麟爲之長、大戴禮麟麕身馬足、牛尾黃色、圓蹄一角、角上有肉、音中律呂、王者至仁則出、

若比於糞土、糞滋五穀、土養民、

滋潤也、五穀稻黍稷菽麥也、

世間の物糞土より汚穢なるはなし、或は無學の人是に等しからん、力と比すれば、糞土各能あり、糞は五穀を滋し蕃くする能あり、土は百穀を生し出して萬民を養ふの功あり、無學の人は事を成し不得、糞土にも較らべがたきの意也、【糞】は海篇大全云、糞穢

出門莫恨無人隨、書中車馬多如簇、娶妻莫恨無良媒、詩南山、娶妻如之何、匪媒不得、書中有女顏如玉、詩其人如玉、

【出門―】、門を出て他に行くとき我か後へにつき隨ふ從者なくとも恨とせずして只强て書を讀へし、書を讀て才德高くなれは馬も車もむらかる如く相從へる身となるべし、是書中に車馬ある也、【娶妻―】、妻室をむかへんとするによき媒なくて娶ることとならずとも書を讀て學問成就の後は世間美艶の女をもちたる人望て壻とすへし、是書中自然に女ある也、【良媒】、詩經衞風氓篇云、予無良媒、【有女如玉】、詩野有死麕篇云、有女如玉、註【詩南山】、齊風南山第四章云、析薪如之何、匪斧不克、娶妻如之何、匪媒不得、妻を娶るには媒をたのみて禮を以て親を結にあらされは迎ること得かたきと云意也、【其人如玉】、詩小雅白駒篇云、皎皎白駒在彼空谷、生芻一束其人如玉、

男兒欲遂平生志、六經勤向窓前讀、六經謂易詩書禮記周禮春秋也、

此二句前の八句を結す、【平生】は論語憲問篇云、久要不忘平生之言、亦可以爲成人矣、朱註平生平日也、つね〳〵と云義也、【志】は上の四件の事を願ふ志を遂んと欲ば只六經の書を窓前に向て强め讀でをこたらず學問すべしと云意也、註【六經】、群書拾唾云、漢儒以詩書禮樂易春秋爲六經、後世樂書亡、故止稱五經、亦有以周禮合稱六經者、

○仁宗皇帝勸學　謂人而不學、雖草木禽獸糞壤之不如也、

【仁宗】は宋の第四主也、宋紀云、仁宗皇帝諱禎、初名受益、眞宗第六子、在位四十三年、壽五十四歲、崩于福寧殿、謚曰神文聖武仁孝皇帝、註【謂人―】人は萬物の中にすぐれて貴き者なれとも不學不才なれは萬物にもをとりて用にたゝぬ物となると云意を謂ふ也、

朕觀無學人、天子自稱曰朕、無物堪比倫、若比於艸木、艸有靈芝、木有椿、艸中尙有芝之瑞、木中尙有椿之耐、

あるに倣へるなるべし、【勸】は勉也敎也奬也、【學】は書經說命云、學于古訓乃有獲云云、學之爲言效也、いまだ知覺せざる所をならひさとる也、勸學は世の人に學問をせよとすゝめはげます也、

○眞宗皇帝勸學文

言人能勸學、則榮貴後自有富田好宅僕從妻妾之奉也、

【眞宗】、宋の第三主也、宋紀云、眞宗皇帝諱元侃、更名恒、太宗第三子也、初封襄王、尋立爲皇太子、太宗崩遂登大寶、在位二十五年、壽五十五崩于延慶殿、謚曰文明武定章聖元孝皇帝、廟號眞宗、葬永定陵、【皇帝】古は天子を號して皇と云、帝と云、王云、皇帝と稱するは秦の始皇帝より始る、史記始皇本紀云、天子自稱曰朕、號曰皇帝、蔡邕獨斷云、上古天子、庖犧氏神農氏稱皇、堯舜稱帝、夏殷周稱王、秦承周末爲漢驅除、自以德兼三王功包五帝、故幷以爲號、漢高祖受命功德宜之、因而不改也、註【榮貴】は才名顯れ達して富貴になるを云、【自有】は謀り求めされとも、自然に有ことを得也、【僕從】は人に使れる卑き者也、【奉】は奉養也、我か身の爲にたすけやしなひとなるの義也、

富家不用買良田、書中自有千鍾粟、安居不用架高堂、書中自有黃金屋、

漢武故事、〔浦臺〕高三十丈、飾以黃金鏤屋上、

【富家不―】、我か家を富むやうにするには、良田を買求ることをさしをき、勤て學問すへし、學問を勤る書の中に自然に後來千鍾の粟を得る利ある也、【千鍾】、史記百二十九貨殖傳云、果菜千鍾、正義曰鍾六斛四斗、【安居―】、我居處を安するには高堂をたてんことを願はずして强て學問すべし、學ぶ中に自然に黃金の屋をも建へき基ある也、【架】、韻會架居訝切、博雅杙也、所以舉物也、字彙架起屋也、屋をかまへたつるを云【黃金屋】、漢武故事云、帝年五歲長公主抱問云、兒欲得婦否、曰欲得、指女阿嬌曰、阿嬌好否、帝曰若得阿嬌當作金屋貯之、註【漢武故事】は漢の班固著、一卷あり、【浦臺】、浦當作漸字、漸はひたすと訓す、池中臺を築て池水臺の基をひたすに因て漸臺と云、三輔黃圖五云、漸臺在未央宮大液池中、高十丈、漸浸也、言爲池水所漸、

明むる學者の通稱也、○說文儒柔也、術士之稱、○禮記儒行註、儒之言優也和也、言能安人能服人也、疏云儒者濡也、以先王之道能濡其身【箋解】とは註をする義也、後漢書六十九下儒林傳、鄭玄作毛詩箋、註箋薦也、薦成毛義也、張華博物志曰、鄭註毛詩曰箋不解此意、或云、毛公嘗爲北海相、玄是郡人、故以爲敬云、陸德明毛詩音義曰、鄭氏箋本作牋、同薦年切、字林曰、箋表也識也、案鄭六藝論云、註詩宗毛爲主、毛義若隱略則更表明、如有不同即下己意使可識別也、孔穎達毛詩正義曰、鄭於其經皆謂之註、此言箋者、呂忱字林云、箋表也識也、鄭以毛學審備遵暢厥旨、所以表明毛意記識其事、特稱爲箋、餘經無所遵奉故謂之註、箋はあらはすと訓す、本文の意旨をあらはし明すと云義也、解はとくと訓す、韻會解判也、从刀判牛角、徐按庖丁解牛會意、牛を屠切る時、筋骨のつがひを能見て、刀を以て骨肉の透間を斷割を解と云、書を註するも、章を分ち句析て文義をときひらくこと、牛を屠ると同き故に解と云也、【古文】は古人の文章也、史記一百三十自叙傳云、遷生龍門耕牧河山之陽、年十歲則誦古文云云、司馬遷は漢より以前の文を指て古文云へり、此書に所載唐宋の諸家の文章をも亦皆古文と云へし、【眞寶】とは文章の珍奇、世間眞實の寶なりと云意にて、此書に名くる者か、眞寶の二字經典の中にて未見出處、佛典には往々に見と云り、韓文十六韓退之答崔立之書の題註に、樊汝霖曰、韓公所學者堯舜三代孔孟之道、其文則六經古文也、公以古文爲寶、【前集】古詩の類を十卷に編みて前集とし、古文の類を十卷に編て後集とす、前集後集各十卷あり、【卷】は上古は紙なくて竹を削て簡として文字を寫せり、さて韋を以て簡を編て卷てをく也、長き文を一つゞけに編めは、卷舒の便あしきに因て、幾卷にも分て、卷の一卷の二と次第を識す也、今紙に寫てとぢたる書籍をも卷と云は、古の名を存する也、聽雨紀談云、今之書籍每冊必數卷或多至十餘卷、此僅存卷之名耳、古人藏書作卷軸、鄴侯家多書軸、架三萬軸是也、此制在唐猶然、其後以卷舒之難、因爲摺、久而摺斷、乃分爲簿帙以便檢閱、蓋愈遠而愈失其眞、

勸學文

此書の首に勸學文を載ることは荀子の卷首に勸學篇

古文眞寶前集諺解大成

榊原篁洲著

古文眞寶

此書撰者の姓名不分明、當時諸說不同、近年一本を見るに永陽麟峯黃堅編集、張天啓釋文とあり、此本は皇明弘治年中雲中靑藜齋跋を書し卷首神宗皇帝御製の序を載たり、編次も亦世間に行るゝ本とは少異あり、諸賦は後集の卷首に載せ、出師陳情二表は後集の卷尾に載せたり、註釋も亦往々異同あり、靑藜齋跋曰、永陽黃堅所集古文眞寶二十卷、載七國而下諸名家之作凡二十有七體三百十有二篇、蓋精選也云云、藜齋此書に跋すること如此ときは、撰者の姓名考究據ところ有べし、これを以て觀れば此書黃堅か編集なること疑なかるへし、但黃堅何の時何の許の人なることを考不得也、

魁本大字諸儒箋解古文眞寶

前集卷之一

【魁本】は前漢書游俠傳云、閭里俠原涉爲魁、師古曰魁者斗之所用盛而杓之本也、故言根本者皆云魁、○禮記檀弓上曰、居從父昆弟之仇如之何、曰不爲魁、註魁猶首也、魁はさきがけと訓す、世間古文眞寶の板本多く出るとも、吾が板本第一なりと云意なり、又一說に學者文章を學んと欲せば此眞寶を第一に先づ讀むべき書なりと云意に置たりと云、前說を可とすべし、【大字】は文字を大字に寫して見やすきやうに板行する也、魁本大字の四字は書肆の人我か板本を炫賣る爲に自譽て置たる字也、【諸儒】とは註者を指也、此書の註解一人の手に出るに非す、古詩は文選の註を引用、其外唐宋諸家の詩多本集の註を採來て解釋す、故に泛く諸儒と云也、儒は聖人の敎に從て道理を

七言古風長篇……二七二

長短句……三〇九

古文眞寶前集諺解大成目錄

詩而已哉、余亦學古而未能者、由榊子之能志古、乃將幸有奮起于此焉、
榊子字希翊、篁洲其號、泉南之人也、

天和三年夏五月朔旦

震澤　柳　剛　書

與、不然則終落窠臼、傷其天成、若夫貂頭而狗尾、鳳鳴而鴟嚇、左鑿之右枘之、甲于前乙于後、有一不整、則雖極精巧、木偶旁影、神氣索然、何取之有矣、夫古詩無法而有法、法寓無法之中、故其爲法也、微而不可窺、自去琱琢、蓋有德之言也、今詩有法而無法、以有法爲法、故其爲法也、刻而不可避、常苦跼蹐、蓋否德之言也、至于近體、謹嚴縝密與古畫境矣、而才有汚隆、情有淑慝、則不能不俯而就繩、勉而求企、此又法之不可廢、古今一轍相爲引伸、其安得不交致洗磨鏃羽之道也哉、此集之所載、歌行雜體類古詩之變也、嗚呼古之詩雖不可及、培之乎仁義之根、游之乎雅頌之源、存心養德、澹然忘外誘之私、則萬境之所感、皆出于性情之正、得于禮義之中、諧音響合節族、該于物理而有補治化關世敎者、莫非皆出天命流行自然之機矣、斯則謂之古詩可也、又將謂之古人可也、其烏憂人之坐于今而詩之成于今哉、收錄之疎雖未免有餘憾、而桂林之一枝、崑岡之片璧、眞可爲寶而誦者、何敢望其他、古道之廢久矣、榊子之志古、豈惟

益世且爲僣爲妄不怒則笑不訾則排然則子之言可取乃自我而棄況乎余嚮會韓客筆話唱酬皆以代一時象胥退而見之未嘗不津津泚顙由是深韞于篋笥儻有親知乞求者不獲已暫出似之不料爲誰謄寫謬附諸梓也如今不忍子之言卒然應之人其謂之何哉冀子恕之榊子憮然而去惠然而來又復屬余故舊頻頻迫不息余於是據然嘆曰篤矣子之志于古也余豈避此名哉物之生于兩間雖域局西東時隔古今其所稟受者一也是以其成乎詩也原于德性發于才情口矢手應汨汨然來而不止崢嶸浩渺無不厚也無不碩也朱紘黃鐘之音山龍藻火之文牢醴熬膋之味如卿雲從風卷舒變幻萬狀投之所向無不任意及其至也動天地感鬼神協和人物使作者之心照燿于千載之上垂及于千載之下若目覩其事耳聽其言古之詩正如此也已矣雖然知古之詩而不知古之學則氣習之偏不能化嗜欲之蔽不能除以心爲師放縱鹵莽流亂軌躅騁騁卒塡阬岸此乃駕蒲梢無銜勒之制欲棄津筏而登平陸者也

之休明、而標揭後學之儀表、此何取乎、又惟理明辭達而已矣、而世顧他之焉者、猶之瞽師䀹人之失資、不問塗於康莊劇驂、而信步暗行、雖欲免入鼪鼬之蹊、墜黿鼉之窟、而可獲乎、詩之興也、既如彼、詩之廢也亦如此、學者其不援其頹風、而迴其倒瀾哉、古文之編、數十百家、　本邦之俗惟取眞寶爲業、耆耋誦之、兒童習之、雖然古文豈止于是哉、聖經尙矣、左國以下秦漢諸子、其書並在、又盍偏擇曲品以錄之、蓋欲刪其繁而括其要、偶失于隘陋耳、行于世之久、於後集諸家箋註、鱗沓鵲起、而前集尙未有詳允辨之者也、榊子篁洲素好文章、讀書之暇、會舊說之異同、苴諸家之罅漏、留意折衷、參伍之、未安必芟其蕪穢、引證之未覈、必審其攷據、積盈套帙、其書若干卷、名曰諺解大成、精密而不涉於支離、嚴簡而不流於宂泛、其可傳者庶乎無疑、以余嘗有一日之雅、去年之冬來請題其首、余謂雕篆小技、詎足以藉重、徒災棗梨耳、不敢以允、今茲之春復來伸前言、余曰豈敢拒子之需哉、人各貴自知焉耳矣、苟不揆其才用之、不惟于書無

與物會也、貫若一矣、是故雖里巷小子之言、皆發乎性情、而止乎禮義、著以爲經、宗工碩生皓首矻矻、少闚其藩翰、此古詩之所以爲不可及也、後世之言詩者、其平居無師友之益、狎淫好逸、物膠其中、而知誘其外、蕩蕩擾擾不能反躬、天理殆滅矣、則何有一言之可見哉、雖間有雋俊之士、往往炫其才藻、競繹富麗邃僻之歸、衍繕縟綵瑰詭之辭、趨時投好、不顧其大體之所繫、較妍蚩工拙於章句間、嗚呼古道之不舉、一由此矣、雅頌之奏、風謠之陳、經聖刪後權衡既定、大以詠歌功德、微以陶養性情、可謂盛矣、屈宋始裁騷賦、而六義衰、蘇李互作塤篪、而五言起、然猶以質勝、忠厚介潔不失風人之旨、漢魏以降曹劉之豪逸、陶阮之冲澹、謝鮑播其蕤、徐庾信其鑠、各隨所長以成一家言、而取趣已異、則去古益遠矣、暨于唐之盛人文鬱勃、雲騰霞煥、李杜矯矯崛興其間、指麾一世、鞭弭百代、古風丕振、既而爲中爲晩爲宋、體製數變、氣象漸薾、然而歐蘇黃陳之輩所謂傑然者、雖瑕類時存、至其合作、上翺翔漢唐、下瞪晛元明、實足以鼓吹昭代、

古文眞寶前集諺解敍

詩也者感於物而動於情發於言而託於文音響節族皆以出于天成夫喜怒哀樂情也未嘗有意觸事應物不知其然而然章句篇什文也未嘗有意精到神來不知其然而然謂之機造謂之自然二者皆在我而不以古今變矣然則古之人猶今之人今之詩猶古之詩與而人終不古而詩亦坐今者何哉天之生物一其理而物之稟天一其性惟其感也不同而其發也從之於是噍以殺嘽以緩發以散麤以厲直以廉和以柔凡江山雲煙風雨晦明飛潛動植治忽之於政事勞逸之於沃瘠皆莫隨所値不形於聲而其好惡或無節則聖人設之敎使陽而不散陰而不集不怒不懾交於中作於外導善心而懲邪思況復治隆于上俗淳于下温厚和平養之有素耳目之所觸油然不能自已咨嗟詠歎之餘流以爲詩未始斤斤懷鉛吮墨苦思以安排必先得我心之所同然耳非有能强焉者心之

【講述者の小傳】榊原篁洲の傳は第三卷の解題に收めたり。

等の徒極めて其の俗書陋本たるを指摘して排斥に力め、其の後文章軌範の校刊せられて編者謝枋得が宋末の忠臣君子なるを以て、人格景慕の餘、都鄙を問はず海內に風行せしと同時に、本書の流傳は復往年の盛なるが如くなること能はざるに至れり。然れども軌範は一二の文を除く外は、取る所の者唐宋文家に局限し未だ本書の楚騷秦漢魏晉六朝唐宋に亘りて詩文を兼收する便に如かざるを以て、今日に至るも二書倂行せり。而して歷代詩文の變遷を知りて、一部支那文學史の觀あるは二書の內に於て眞寶の長ずる所となす。本書の注解前に述べしが如く五山禪僧等の著あれども今玆には其の比較的優良と稱する書を取り前集にありては榊原篁洲が著せる古文眞寶前集諺解大成（刊本十冊）を收め後集にありては羅山の諺解を鵜飼石齋が大成せる古文後集諺解大成（刊本十冊）を收むることとなせり。

類と同一なる者と觀ば大差なかるべし。本書の著者は前述の如く信據すべき人にあらざれども、其の中に收むる詩文は大抵人口に膾炙せる名作なれば、此又彼の唐詩選と同く精金美玉は所持者の何人たるを問はず、天下の至寶たるを失はざるが如し。故に獨り彼國に行はれしのみならず、遠く海を踰えて我邦に波及し、足利時代五山叢林の間に流行して、青松萬里一元湖月の諸禪僧皆各箋釋の本あり。亦以て其の如何に當代に驩迎せられしかを見るべし。蓋本書の內容は、前後兩集を以て成り、前集は卷初に勸學文と題せる韻文を載せ、次に五古七古の長短篇歌行吟曲諸體の詩を收め、後集は辭賦說序記箴銘文頌傳碑辯表原論書諸體の文を收め、皆各類別して覽觀閱讀に便ならしめたるを以て、其の中往々玉石混同の譏はあれども、學生塾師の間に重寶視せられたる者の如し。德川時代漢學全盛の世に至るに及では、物徂徠

先哲遺著 漢籍國字解全書第十一卷

解題 附 著者小傳

古文眞寶前集

榊原篁洲講述

【古文眞寶の解題】本書の著者は詳ならず。卷首に至正丙午孟夏盱江後學鄭本士文叙とある文を載せたるに據りて推すに、至正は元の順帝の年號なれば、少くも明代以前の編輯なるべし。又明の孝宗弘治年間に成れりと稱する青藜齋の古文眞寶跋に據れば宋の黃堅が編述なるが如くなれども、黃堅の傳既に詳ならず。又明の神宗皇帝の親撰に成れる者なりとの說あれども、其の書は別本にして、今我が邦に行はるゝ古文眞寶にあらざるが如し。要するに明代の書估が、有名なる著述に假託して作れる唐詩選の

第拾壹卷

古文眞寶
前集

榊原篁洲講

先哲遺著

漢籍國字解全書

早稻田大學出版部藏版



漢籍國字解全書